

高田遺跡Ⅱ・東野遠山遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ)

2021.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高田遺跡Ⅱ・東野遠山遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅻ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ)

2021.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

高田遺跡の発掘調査は、国土交通省が進める高規格幹線道路南国安芸道路建設に伴う緊急調査として平成27年度から平成30年度にかけて実施してまいりました。平成29年度には平成27・28年度に実施した調査の調査報告書(I区からIV区)を刊行いたしました。今回、高田遺跡につきましては平成28～30年度に実施した(V区からXI区)調査成果を高田遺跡Ⅱとして、さらに、東野遠山遺跡の調査成果を合冊して刊行いたしました。

2遺跡が所在する香南市では、これまで物部川流域や香宗川流域をはじめ数多くの発掘調査が行われてきました。その調査成果によって地域の歴史が徐々に明らかになってきています。現在の野市台地は江戸時代の灌漑事業によって豊かな耕作地が広がっていますが、台地の南部においては、本格的な発掘調査が行われておらず、江戸時代以前の様相は把握できていませんでした。

今回の調査では、特に高田遺跡において弥生時代後期後半に営まれていた集落の存在と古代の官道と考えられる道路状遺構や掘立柱建物群などの遺構と赤色塗彩された土師器類が確認されました。この調査成果は香南市の歴史のみならず、弥生時代の高知平野の集落の移り変わりや古代における物部川下流域の地理的な重要性など、本県の歴史にとっても多くの知見をもたらしてくれるものとなりました。

最後になりましたが、発掘調査の実施につきましては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、香南市教育委員会をはじめ、地元の皆様に多大なご理解とご協力を得ることができました。また、発掘作業・整理作業に従事していただきました作業員の皆様、報告書作成にあたりご指導並びにご教示いただきました関係各位に心から厚く御礼を申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 松田直則

例言

1. 本書は高規格幹線道路南国安芸道路の建設に伴い、平成28～30年度に実施した高田遺跡と平成29年度に実施した東野遠山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 高田遺跡は高知県香南市野市町の物部川左岸に広がる野市台地の縁辺部に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。弥生時代後期後半の集落跡や古代では掘立柱建物跡群が確認されており、官衙関連遺跡の可能性が考えられる遺跡である。東野遠山遺跡は高田遺跡の東方約2.5kmに位置する。中世から近世を中心とする集落遺跡である。
調査第V-1区及び第VI区、第VII-1区の発掘調査は、調査対象区域の買収状況に応じて平成28年度に調査し、平成29年度に調査第V-2区とVII-2区、平成30年度は調査第VIII区からXI区の調査を実施した。高田遺跡の調査面積は平成28年度は3,832㎡、平成29年度の調査面積は1,927㎡、平成30年度の調査面積は4,910㎡、東野遠山遺跡の調査面積は4,258㎡であった。
4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成28年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 松田直則
総務：同次長兼総務課長 東勝彦, 同総務係長 吉森和子
調査総括：同調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第三班長 坂本裕一, 同専門調査員 江間盛男, 同主任調査員 筒井三菜,
調査補助員 横山藍, 松井喬行
事務補助員：奥宮千恵子

平成29年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 松田直則
総務：同次長兼総務課長 和田安弘, 同総務係長 吉森和子, 同主幹 三谷有紀
調査総括：同調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第三班長 坂本裕一, 同専門調査員 小島義雄, 同主任調査員 筒井三菜,
調査補助員 坂本憲彦, 田上修造
事務補助員：谷幸絵

平成30年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 松田直則
総務：同次長兼総務課長 和田安弘, 同総務係長 吉森和子
調査総括：同調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第三班長 池澤俊幸, 同専門調査員 西村一法, 同専門調査員 筒井三菜,
調査補助員 松井喬行, 田上修造, 野崎益範
事務補助員：奥宮千恵子

例言

令和元年度(平成31年度)(整理作業)

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 松田直則
総務：同次長兼総務課長 和田安弘, 同総務係長 吉森和子, 同主査 門田香織
調査総括：同調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第三班長 池澤俊幸, 同専門調査員 筒井三菜
調査補助員 松井喬行
事務補助員：奥宮千恵子

令和2年度(報告書公刊)

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 松田直則
総務：同次長兼総務課長 橋田歩, 同主査 門田香織
調査総括：同調査課長兼調査第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第三班長 池澤俊幸

5. 本書の執筆は第Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ章1を筒井, 第Ⅲ章Ⅵ区SX6・Ⅳ・Ⅶ章2～4を池澤, 第Ⅵ章が株式会社パレオ・ラボ, 編集は池澤・筒井が行った。現場写真については平成28年度は坂本・筒井, 平成29年度は筒井, 平成30年度は池澤が撮影し, 遺物写真は池澤・筒井が撮影した。
6. 遺構についてはST(竪穴建物跡), SB(掘立柱建物跡), SA(柵列), SK(土坑), SD(溝跡), P(柱穴), SX(性格不明遺構)で表記した。また, 掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており, 方位Nは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として弥生土器はS=1/4, その他は縮尺1/3で掲載し, 一部の遺物については縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表記している。また, 遺物番号は通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。本文中の赤彩と挿図中の赤は赤色塗彩, 挿図中の緑は緑釉陶器のことである。
8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては, 下記の方々のご指導及び貴重なご教示, ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
島根大学教授大橋泰夫氏, 公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏, パリノ・サーヴェイ株式会社, 株式会社パレオ・ラボ
9. 調査にあたっては, 国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また, 地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き, 厚く感謝の意を表したい。
10. 発掘調査及び整理作業については, 下記の方々が労を厭わず従事した。記して感謝の意を表したい。(敬称略, 五十音順)
発掘調査
池徹・岩崎啓・大野久雄・小笠原正貴・刈谷富士子・小池美知子・小松小百合・島村孝男・島村雄二・西内崇人・濱田啓・廣末登・松木富子・森木義彦・山本実・吉川すみ子
整理作業
岩貞聖子・黒岩佳子・川添明美・澤田佐世・高橋加奈・田島歩・仲野えの・横山めぐみ・吉本由佳・若江紗映
11. 出土遺物の内高田遺跡は, 「16-2KT」, 「17-3KT」, 「18-2KT」, 東野遠山遺跡は「17-2KHT」と注記し, 高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序章	1
1. はじめに	1
2. 調査の契機と経過	1
3. 調査の概要	2
(1) 遺跡の概要	2
(2) 調査の方法	2
第Ⅱ章 高田遺跡Ⅴ区の調査	5
1. Ⅴ-1区の調査の概要と基本層序	5
2. Ⅴ-1区の検出遺構と出土遺物	7
(1) 竪穴建物跡	7
(2) 掘立柱建物跡	11
(3) 柵列	12
(4) 土坑	12
(5) 溝跡	20
(6) 柱穴	21
(7) 性格不明遺構	25
(8) 遺構外出土遺物	29
3. Ⅴ-2区の調査の概要と基本層序	32
4. Ⅴ-2区の検出遺構と出土遺物	33
(1) 竪穴建物跡	34
(2) 掘立柱建物跡	42
(3) 土坑	44
(4) 溝跡	51
(5) 柱穴	59
(6) 性格不明遺構	68
(7) 遺構外出土遺物	76
第Ⅲ章 高田遺跡Ⅵ区の調査	81
1. 調査の概要と基本層序	81
2. 検出遺構と出土遺物	83
(1) 掘立柱建物跡	83
(2) 土坑	92
(3) 溝跡	99
(4) 柱穴	107
(5) 性格不明遺構	119
(6) 遺構外出土遺物	145
第Ⅳ章 高田遺跡Ⅶ～Ⅺ区の調査	151

本文目次

1. VII～XI区の概要.....	151
2. VII区の調査と基本層序.....	151
(1) 調査の概要.....	151
(2) VII－1区の調査.....	158
(3) VII－2区の調査.....	159
3. VIII区の調査.....	168
(1) 調査の概要.....	168
(2) 検出遺構と出土遺物.....	168
4. IX区の調査.....	171
(1) 調査の概要.....	171
(2) IX－1区各小調査区の検出遺構と出土遺物.....	171
(3) IX－2区の調査.....	183
(4) IX－2区の検出遺構と出土遺物.....	183
5. X区の調査.....	187
(1) 調査の概要と基本層序.....	187
(2) 検出遺構と出土遺物.....	187
6. XI区の調査.....	188
(1) 調査の概要と基本層序.....	188
(2) 検出遺構と出土遺物.....	188
7. 道路側溝跡等の調査.....	195
(1) 遺構と関連土層について.....	195
(2) 出土遺物.....	195
第V章 東野遠山遺跡の調査.....	201
1. 調査の契機と経過.....	201
2. 調査の概要.....	201
(1) 調査の方法.....	201
(2) 調査の概要.....	202
3. I区の調査と基本層序.....	203
4. I区の検出遺構と出土遺物.....	204
(1) 土坑.....	204
(2) 溝跡.....	207
(3) 柱穴.....	208
(4) 遺構外出土遺物.....	209
5. II区の調査と基本層序.....	209
6. II区の検出遺構と出土遺物.....	212
(1) 掘立柱建物跡.....	212
(2) 土坑.....	214
(3) 溝跡.....	230

(4) 柱穴.....	238
(5) 性格不明遺構.....	240
(6) 遺構外出土遺物.....	244
7. まとめ.....	246
(1) 弥生時代.....	246
(2) 古代末から中世前期.....	246
(3) 近世以降.....	247
(4) SD8出土の土師質土器杯について.....	247
第VI章 高田遺跡の自然科学分析.....	249
1. 放射性炭素年代測定.....	249
(1) はじめに.....	249
(2) 試料と方法.....	249
(3) 結果.....	249
(4) まとめ.....	250
2. 高田遺跡出土炭化材の樹種同定.....	251
(1) はじめに.....	251
(2) 試料と方法.....	251
(3) 結果.....	251
(4) まとめ.....	251
3. 土壌薄片作製・観察.....	252
(1) はじめに.....	252
(2) 試料.....	252
(3) 分析方法.....	254
(4) 結果.....	254
(5) まとめ.....	260
4. テフラ分析.....	262
(1) はじめに.....	262
(2) 試料.....	262
(3) 方法.....	263
(4) 結果.....	263
(5) まとめ.....	267
5. 高田遺跡出土土師器付着の赤色顔料の蛍光X線分析.....	272
(1) はじめに.....	272
(2) 試料と方法.....	272
(3) 結果.....	272
(4) まとめ.....	272
(5) おわりに.....	273
第VII章 高田遺跡 総括.....	275

本文目次

1. 弥生時代.....	275
2. VI区SX6出土の古代土器について.....	283
(1) 分類と属性.....	283
(2) 本土器群の諸相.....	287
(3) 他資料との比較と位置付け.....	289
3. 高田遺跡における古代の概要.....	289
(1) VI区SX6以前.....	290
(2) 8世紀前半から中頃.....	290
(3) 8世紀から9世紀前半頃.....	290
(4) 平安時代中期.....	290
(5) 平安時代末期.....	291
(6) まとめ.....	291
4. 高田遺跡の道路遺構と古代の香長平野.....	291
(1) 高田遺跡の道路関連遺構.....	291
(2) 香長平野の古代道路.....	292
(3) おわりに－周辺遺跡との関係から－.....	294

挿図目次

図1－1 高田遺跡・東野遠山遺跡位置図.....	1
図1－2 周辺の遺跡分布図(S=1/40,000).....	3
図1－3 高田遺跡調査区位置図.....	4
図1－4 高田遺跡V～XI区グリッド設定図(S=1/1,500).....	4
図2－1 V－1区調査区北壁セクション図.....	5
図2－2 V－1区調査区東壁セクション図.....	6
図2－3 V－1区ST1.....	8
図2－4 V－1区ST1出土遺物実測図1.....	9
図2－5 V－1区ST1出土遺物実測図2.....	10
図2－6 V－1区SB1.....	11
図2－7 V－1区SB1出土遺物実測図.....	11
図2－8 V－1区SB2.....	12
図2－9 V－1区SA1.....	12
図2－10 V－1区SK1・2.....	13
図2－11 V－1区SK1・2出土遺物実測図.....	14
図2－12 V－1区SK6～8.....	15
図2－13 V－1区SK6～8出土遺物実測図.....	16
図2－14 V－1区SK10.....	16
図2－15 V－1区SK10出土遺物実測図.....	16

図2-16	V-1区SK11.....	17
図2-17	V-1区SK11出土遺物実測図.....	17
図2-18	V-1区SK12～14.....	18
図2-19	V-1区SK12～14出土遺物実測図.....	18
図2-20	V-1区SK16～23.....	19
図2-21	V-1区SK21出土遺物実測図.....	20
図2-22	V-1区SD1・2.....	21
図2-23	V-1区SD2出土遺物実測図.....	21
図2-24	V-1区P1・15・17・18・24・66・95・96・100・119.....	22
図2-25	V-1区P1・15・17・24・66・96出土遺物実測図.....	23
図2-26	V-1区SX1.....	25
図2-27	V-1区SX1出土遺物実測図.....	25
図2-28	V-1区SX4・13・17・19.....	26
図2-29	V-1区SX4・13・17～19出土遺物実測図.....	27
図2-30	V-1区SX18・25.....	28
図2-31	V-1区SX25出土遺物実測図.....	29
図2-32	V-1区包含層出土遺物実測図.....	30
図2-33	V-1区表採遺物実測図1.....	30
図2-34	V-1区表採遺物実測図2.....	31
図2-35	V-2区調査区北壁セクション図.....	32
図2-36	V-2区調査区南壁セクション図.....	33
図2-37	V-2区ST2.....	35
図2-38	V-2区ST2出土遺物実測図.....	35
図2-39	V-2区ST3.....	36
図2-40	V-2区ST3出土遺物実測図.....	37
図2-41	V-2区ST4.....	38
図2-42	V-2区ST4出土遺物実測図1.....	39
図2-43	V-2区ST4出土遺物実測図2.....	40
図2-44	V-2区SB1.....	42
図2-45	V-2区SB2.....	42
図2-46	V-2区SB3.....	43
図2-47	V-2区SB3出土遺物実測図.....	43
図2-48	V-2区SB4.....	44
図2-49	V-2区SK1.....	44
図2-50	V-2区SK1出土遺物実測図.....	44
図2-51	V-2区SK2～5.....	45
図2-52	V-2区SK2～4出土遺物実測図.....	46
図2-53	V-2区SK6・8～12.....	47

挿図目次

図2-54	V-2区SK14・16～20	49
図2-55	V-2区SK21～24	50
図2-56	V-2区SK21出土遺物実測図	50
図2-57	V-2区SK24出土遺物実測図	51
図2-58	V-2区SD1・3	51
図2-59	V-2区SD1・3出土遺物実測図	52
図2-60	V-2区SD4	53
図2-61	V-2区SD4出土遺物実測図	53
図2-62	V-2区SD9・10	54
図2-63	V-2区SD9出土遺物実測図	54
図2-64	V-2区SD11～13	54
図2-65	V-2区SD11・12出土遺物実測図	55
図2-66	V-2区SD13出土遺物実測図	55
図2-67	V-2区SD17	56
図2-68	V-2区SD17出土遺物実測図	56
図2-69	V-2区SD18・19	57
図2-70	V-2区SD18・19出土遺物実測図	57
図2-71	V-2区SD20	58
図2-72	V-2区SD20出土遺物実測図	58
図2-73	V-2区P7・29・58・63・70・73・80・91	59
図2-74	V-2区P7・58・63・70・73・80・91出土遺物実測図	61
図2-75	V-2区P92・108・118・120・124・127	62
図2-76	V-2区P92・108・118・120・124・127出土遺物実測図	63
図2-77	V-2区P138・146・149・158・183～185・212・236～238	65
図2-78	V-2区P138・146・149・158・183～185・212・236～238出土遺物実測図	66
図2-79	V-2区SX5・7・14～17	69
図2-80	V-2区SX5・7出土遺物実測図	70
図2-81	V-2区SX14・15出土遺物実測図	71
図2-82	V-2区SX14～17出土遺物実測図	72
図2-83	V-2区SX14・15出土遺物実測図	73
図2-84	V-2区SX14～17出土遺物実測図	74
図2-85	V-2区SX15出土遺物実測図	75
図2-86	V-2区包含層出土遺物実測図1	77
図2-87	V-2区包含層出土遺物実測図2	78
図2-88	V-2区包含層出土遺物実測図3	79
図3-1	VI区調査区北壁セクション図	81
図3-2	VI区調査区南壁セクション図	82
図3-3	VI区SB1	83

図3-4	VI区SB2	84
図3-5	VI区SB2出土遺物実測図	84
図3-6	VI区SB3・4	85
図3-7	VI区SB4出土遺物実測図	85
図3-8	VI区SB5・6	86
図3-9	VI区SB7	87
図3-10	VI区SB5・7出土遺物実測図	88
図3-11	VI区SB8	89
図3-12	VI区SB8出土遺物実測図	90
図3-13	VI区SB9	91
図3-14	VI区SB9出土遺物実測図	91
図3-15	VI区SB10	92
図3-16	VI区SB10出土遺物実測図	92
図3-17	VI区SK1・2	93
図3-18	VI区SK1・2出土遺物実測図	93
図3-19	VI区SK4	94
図3-20	VI区SK4出土遺物実測図	94
図3-21	VI区SK6～10	95
図3-22	VI区SK7出土遺物実測図	96
図3-23	VI区SK11～13・15	97
図3-24	VI区SK11～13・15出土遺物実測図	98
図3-25	VI区SK19～22	99
図3-26	VI区SD1・2	100
図3-27	VI区SD1・2出土遺物実測図	100
図3-28	VI区SD6～8	100
図3-29	VI区SD6出土遺物実測図	101
図3-30	VI区SD10～13	101
図3-31	VI区SD10・11・13出土遺物実測図	102
図3-32	VI区SD14・15・17・19	103
図3-33	VI区SD18出土遺物実測図	103
図3-34	VI区SD20～34・36・39～41	106
図3-35	VI区SD36出土遺物実測図	107
図3-36	VI区P1～123	110
図3-37	VI区P1～123出土遺物実測図	111
図3-38	VI区P137・143・156・161～164・178・181・188・189・192・197	113
図3-39	VI区P137・143・156・161～164・178・181・188・189・192・197出土遺物実測図	115
図3-40	VI区P198・204・213・242・246	116
図3-41	VI区P198・204・213・242・246出土遺物実測図	117

挿図目次

図3 - 42	VI区P249.....	118
図3 - 43	VI区P249出土遺物実測図.....	118
図3 - 44	VI区SX1・2.....	120
図3 - 45	VI区SX1出土遺物実測図.....	121
図3 - 46	VI区SX5.....	122
図3 - 47	VI区SX5出土遺物実測図.....	123
図3 - 48	VI区SX6.....	124
図3 - 49	VI区SX6出土遺物実測図1.....	126
図3 - 50	VI区SX6出土遺物実測図2.....	127
図3 - 51	VI区SX6出土遺物実測図3.....	128
図3 - 52	VI区SX6出土遺物実測図4.....	129
図3 - 53	VI区SX6出土遺物実測図5.....	130
図3 - 54	VI区SX6出土遺物実測図6.....	131
図3 - 55	VI区SX6出土遺物実測図7.....	132
図3 - 56	VI区SX6出土遺物実測図8.....	133
図3 - 57	VI区SX6出土遺物実測図9.....	134
図3 - 58	VI区SX6出土遺物実測図10.....	135
図3 - 59	VI区SX6出土遺物実測図11.....	136
図3 - 60	VI区SX9・10.....	138
図3 - 61	VI区SX9出土遺物実測図1.....	139
図3 - 62	VI区SX9出土遺物実測図2.....	140
図3 - 63	VI区SX10出土遺物実測図.....	141
図3 - 64	VI区SX13・17・18・22.....	142
図3 - 65	VI区SX13・17・18・22出土遺物実測図.....	143
図3 - 66	VI区SX23・26～28.....	144
図3 - 67	VI区SX23・26・27出土遺物実測図.....	145
図3 - 68	VI区SX28出土遺物実測図.....	146
図3 - 69	VI区包含層出土遺物実測図1.....	148
図3 - 70	VI区包含層出土遺物実測図2.....	149
図3 - 71	VI区包含層出土遺物実測図3.....	150
図3 - 72	VI区表採遺物実測図.....	150
図4 - 1	調査区セクション図1.....	152
図4 - 2	調査区セクション図2.....	153
図4 - 3	調査区セクション図3.....	154
図4 - 4	調査区セクション図4.....	155
図4 - 5	調査区セクション図5.....	156
図4 - 6	基本層序概念図.....	157
図4 - 7	VII - 1区SK6.....	158

図4-8	Ⅶ-1区SD3・4・7.....	158
図4-9	Ⅶ-1区P7・13.....	159
図4-10	Ⅶ-1区P7・13出土遺物実測図.....	159
図4-11	Ⅶ-2区SB11.....	160
図4-12	Ⅶ-2区SA2.....	160
図4-13	Ⅶ-2区SK1～4.....	161
図4-14	Ⅶ-2区SK1～4・10出土遺物実測図.....	162
図4-15	Ⅶ-2区SK9・10・13・19・21～23・SX2.....	163
図4-16	Ⅶ-2区SK13・19・22出土遺物実測図.....	164
図4-17	Ⅶ-2区SD1.....	164
図4-18	Ⅶ-2区SD1出土遺物実測図.....	164
図4-19	Ⅶ-2区P16・38.....	164
図4-20	Ⅶ-2区P16・38出土遺物実測図.....	165
図4-21	Ⅶ区包含層等出土遺物実測図1.....	166
図4-22	Ⅶ区包含層等出土遺物実測図2.....	167
図4-23	Ⅶ区カクラン出土遺物実測図.....	168
図4-24	Ⅷ区SA3.....	169
図4-25	Ⅷ区SD3～5.....	169
図4-26	Ⅷ区SX1～3.....	170
図4-27	Ⅸ-1a区SK22～24.....	172
図4-28	Ⅸ-1a区SK23出土遺物実測図.....	173
図4-29	Ⅸ-1a区SK25～28.....	174
図4-30	Ⅸ-1a区SK30～32.....	175
図4-31	Ⅸ-1a区SD10エレベーション図及び出土遺物実測図.....	175
図4-32	Ⅸ-1a区SK28・30出土遺物実測図.....	176
図4-33	Ⅸ-1a区SK50.....	177
図4-34	Ⅸ-1a区SD1・11.....	177
図4-35	Ⅸ-1a区ピットエレベーション図.....	178
図4-36	Ⅸ-1a区SX12.....	179
図4-37	Ⅸ-1b区SK2・6・8～10.....	180
図4-38	Ⅸ-1b区SK16・18.....	181
図4-39	Ⅸ-1b区SK5・11・12出土遺物実測図.....	181
図4-40	Ⅸ-1e区SD7.....	182
図4-41	Ⅸ-2区SK19・53.....	184
図4-42	Ⅸ-2区SD6・7.....	185
図4-43	Ⅸ-2区SX4・5・9.....	186
図4-44	X区SK20・21.....	187
図4-45	X区SD8・9.....	187

挿図目次

図4-46	X区SD8出土遺物実測図	187
図4-47	XI区SK36～38・46	189
図4-48	XI区SK36・39～41・52	190
図4-49	XI区SK36・37・46・47・52出土遺物実測図	191
図4-50	XI区SK45・47・49	192
図4-51	XI区SD12	193
図4-52	IX～XI区包含層出土遺物実測図	194
図4-53	道路側溝跡セクション図1	196
図4-54	道路側溝跡セクション図2	197
図4-55	道路側溝跡横断図(S=1/1,100)	198
図4-56	道路側溝跡出土遺物実測図	199
図5-1	東野遠山遺跡調査区グリッド配置図(S=1/1,500)	201
図5-2	東野遠山遺跡調査区位置図(S=1/1,500)	202
図5-3	I区調査区北壁・西壁セクション図	203
図5-4	I区SK1～4	204
図5-5	I区SK5～8	205
図5-6	I区SK9～12	206
図5-7	I区SD1	207
図5-8	I区SD1出土遺物実測図	207
図5-9	I区SD2・3	207
図5-10	I区SD3出土遺物実測図	207
図5-11	I区SD4～7	208
図5-12	I区SD7出土遺物実測図	208
図5-13	I区遺構外出土遺物実測図	209
図5-14	II区調査区南壁セクション図	210
図5-15	II区調査区北壁セクション図	211
図5-16	II区SB1	212
図5-17	II区SB1出土遺物実測図	213
図5-18	II区SB2	213
図5-19	II区SB2出土遺物実測図	214
図5-20	II区SK1・2	215
図5-21	II区SK1・2出土遺物実測図	216
図5-22	II区SK5・6・8	217
図5-23	II区SK9	217
図5-24	II区SK9出土遺物実測図	217
図5-25	II区SK10・13～17	218
図5-26	II区SK16出土遺物実測図	219
図5-27	II区SK18・20・22・23・27	220

図5-28	Ⅱ区SK18出土遺物実測図	220
図5-29	Ⅱ区SK28・29	221
図5-30	Ⅱ区SK28出土遺物実測図	222
図5-31	Ⅱ区SK31～33	223
図5-32	Ⅱ区SK34・SX6	224
図5-33	Ⅱ区SK34出土遺物実測図	225
図5-34	Ⅱ区SK40～43・45・46	226
図5-35	Ⅱ区SK47～51	227
図5-36	Ⅱ区SK52～55	228
図5-37	Ⅱ区SK53・54出土遺物実測図	228
図5-38	Ⅱ区SK56・57	229
図5-39	Ⅱ区SD1	230
図5-40	Ⅱ区SD1出土遺物実測図	230
図5-41	Ⅱ区SD2	230
図5-42	Ⅱ区SD2出土遺物実測図	231
図5-43	Ⅱ区SD3	231
図5-44	Ⅱ区SD3出土遺物実測図	232
図5-45	Ⅱ区SD6	233
図5-46	Ⅱ区SD6出土遺物実測図	233
図5-47	Ⅱ区SD8	234
図5-48	Ⅱ区SD8出土遺物実測図	234
図5-49	Ⅱ区SD9・10	235
図5-50	Ⅱ区SD9出土遺物実測図	235
図5-51	Ⅱ区SD17	236
図5-52	Ⅱ区SD17出土遺物実測図	237
図5-53	Ⅱ区SD20	237
図5-54	Ⅱ区SD20出土遺物実測図	237
図5-55	Ⅱ区P24・29・47・59・64・65	239
図5-56	Ⅱ区P24・29・47・59・64・65出土遺物実測図	239
図5-57	Ⅱ区SX4・6・8	241
図5-58	Ⅱ区SX4出土遺物実測図	242
図5-59	Ⅱ区SX6出土遺物実測図	242
図5-60	Ⅱ区包含層出土遺物実測図	243
図5-61	Ⅱ区検出面出土遺物実測図	244
図5-62	Ⅱ区表採遺物実測図	245
図6-1	暦年較正結果	249
図6-2	高田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	252
図6-3	土壌薄片試料採取状況	253

挿図目次

図6-4	1地点と2地点の試料と土壌薄片画像.....	255
図6-5	3地点と4地点の試料と土壌薄片画像.....	256
図6-6	顕微鏡画像1.....	257
図6-7	顕微鏡画像2.....	258
図6-8	顕微鏡画像3.....	259
図6-9	3地点, 5地点のテフラ分析試料採取状況.....	264
図6-10	鉱物組成の分布図(カンラン石・ジルコンは不明粒子に含めて表示).....	265
図6-11	火山ガラスの屈折率測定結果.....	266
図6-12	分析No.11(攪拌直後の懸濁物)の粒度分布図.....	268
図6-13	野市台地とその周辺の地形分類図.....	269
図6-14	テフラ粒子の偏光顕微鏡写真.....	271
図6-15	赤色顔料のX線分析結果.....	273
図6-16	分析対象遺物および赤色顔料の生物顕微鏡写真.....	274
図7-1	高田遺跡竪穴建物跡位置図.....	275
図7-2	高田遺跡Ⅰ区とⅡ区竪穴建物跡と出土遺物.....	277
図7-3	高田遺跡Ⅱ区竪穴建物跡と出土遺物.....	278
図7-4	高田遺跡Ⅱ区とⅤ区竪穴建物跡と出土遺物.....	279
図7-5	高田遺跡Ⅴ区竪穴建物跡と出土遺物.....	280
図7-6	高田遺跡土器棺墓.....	282
図7-7	Ⅵ区SX6土師器食膳具.....	283
図7-8	Ⅵ区SX6土師器杯皿法量分布.....	283
図7-9	Ⅵ区SX6須恵器食膳具.....	285
図7-10	Ⅵ区SX6須恵器杯皿法量分布.....	285
図7-11	Ⅵ区SX6土師器煮炊具.....	286
図7-12	他遺跡出土遺物実測図.....	288
図7-13	香長平野の道路遺構及び条里余剰帯による推定路線.....	293

表目次

表4-1	道路関連土層分析の試料採取位置と結果一覧.....	200
表4-2	道路側溝跡出土遺物点数.....	200
表6-1	測定試料及び処理.....	249
表6-2	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果.....	249
表6-3	炭化材の樹種同定結果.....	251
表6-4	分析試料とその特徴.....	263
表6-5	テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果.....	266
表6-6	φ篩残渣中の鉱物組成(軽鉱物).....	266
表6-7	φ篩残渣中の鉱物組成(重鉱物).....	268

表6-8 分析No.11の粒度指標.....	268
表6-9 分級度, 歪み度, 尖度の評価.....	268
表6-10 分析対象.....	272
表7-1 VI区SX6出土土器器種別計測表.....	287

遺物観察表目次

高田遺跡遺物観察表1～33.....	299～331
東野遠山遺跡遺物観察表1～7.....	332～338

遺構計測表目次

高田遺跡遺構計測表1～12.....	339～350
東野遠山遺構計測表1・2.....	351・352

付図目次

付図1 高田遺跡調査第V-2区上面遺構平面図(S=1/200)
付図2 高田遺跡調査第V～VII区遺構平面図(S=1/200)
付図3 高田遺跡調査第VII～XI区遺構平面図(S=1/200)
付図4 高田遺跡時代別遺構図(S=1/1,000)
付図5 東野遠山遺跡遺構平面図(S=1/200)

図版目次

図版1 調査前風景(南西より) 調査区遺構検出状態(西より)	図版7 SB1完掘状態(南より) SB2完掘状態(南より)
図版2 調査区北側遺構検出状態(西より) 調査区南側遺構検出状態(北西より)	図版8 SK11石出土状態(北より), SK17・18完掘状態(西より), SD1セクション(西より), SD2セクション(東より), P1弥生土器高杯(57)出土状態, P15土師器皿(58)出土状態, P18須恵器出土状態, P24須恵器甕(61)出土状態
図版3 遺構完掘状態(上空より) 遺構完掘状態(東より)	図版9 P66土製品支脚(66)出土状態, P66土製品支脚(66)出土状態, SX1セクション(北より), SX1土師質土器杯(69)出土状態, SK1セクション(西より), SX18石列検出状態(西より), 調査区遺構検出作業風景(南西より), 調査区遺構掘削風景(南より)
図版4 ST1検出状態(北西より) ST1完掘状態(西より)	
図版5 ST1セクション(北東より) ST1セクション及び調査区セクション(北西より)	
図版6 ST1弥生土器出土状態, ST1弥生土器出土状態, ST1弥生土器出土状態, ST1床面石製品・弥生土器出土状態, ST1床面遺構検出状態(西より), ST1床面遺構検出	

図版目次

- 図版10 弥生土器(高杯・壺・甕・鉢), 土師質土器(杯), 土製品(支脚)
- 図版11 調査前風景(南東より)
調査前風景(北東より)
- 図版12 遺構検出状態(東より)
遺構検出状態(北西より)
- 図版13 遺構完掘状態(上空より)
遺構完掘状態(西より)
- 図版14 調査区南壁セクション(北より)
調査区北壁セクション(南より)
- 図版15 ST2検出状態(北西より)
ST2完掘状態(北東より)
- 図版16 ST3検出状態(北より)
ST3完掘状態(東より)
- 図版17 ST4検出状態(南より)
ST4バンクセクション(東より)
- 図版18 ST4床面遺構検出状態(東より)
ST4完掘状態(東より)
- 図版19 SB1完掘状態(北より)
SB2完掘状態(北より)
- 図版20 ST4 検出面集石・遺物出土状態, ST4 遺物出土状態, ST4 石製品台石(144)出土状態, ST4 弥生土器出土状態, ST4 弥生土器壺(114)出土状態, ST4 上層弥生土器壺(115)出土状態, ST4 弥生土器出土状態, ST4バンクセクション(南東より)
- 図版21 SK1 手づくね皿(146~148)出土状態, SK1セクション(南より), P237 鉄製品鉄斧(220)出土状態, P236 弥生土器鉢(218)出土状態, SK24 須恵器甕(156)出土状態, SD4セクション(西より), SD4 集石出土状態(北西より), SD7・8・14 完掘状態(東より)
- 図版22 SD13 土師器高杯(173)出土状態, SD17 セクション(北より), SD18 陶器碗(178)出土状態, P29 根石出土状態, P58 須恵器壺(190)出土状態, P108 土師質土器碗(199)出土状態, P118 土製品(200)出土状態, P118 土製品(200)出土状態
- 図版23 P124 石製品石包丁(203)出土状態, P183 須恵器杯(212)出土状態, P149 黒色土器碗(210)出土状態, P212 弥生土器鉢(217)出土状態, SX5 集石出土状態(北より), SX5 石製品石臼(223)出土状態, 包含層遺物出土状態, 包含層土師質土器碗(293)出土状態
- 図版24 弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(高杯)
- 図版25 弥生土器(鉢), 黒色土器(碗), 手づくね皿, 土製品, 石製品(石包丁)
- 図版26 土師質土器(碗), 石製品(石包丁), 金属製品(鉄鎌・鉄斧)
- 図版27 調査前風景(北西より)
遺構検出状態(東より)
- 図版28 遺構完掘状態(上空より)
遺構完掘状態(東より)
- 図版29 調査区南壁セクション(北東より)
調査区南壁セクション(北西より)
- 図版30 SB1 完掘状態(北より)
SB2 完掘状態(東より)
- 図版31 SB5 完掘状態(北より)
SB6 完掘状態(東より)
- 図版32 SB7 完掘状態(東より)
SB8 完掘状態(東より)
- 図版33 SK4 上面集石及び遺物出土状態
SK4 鉄製品刀子(342)出土状態
- 図版34 SX6 遺物出土状態
SX6 遺物出土状態
- 図版35 SX6 バンクセクション(北西より), SX6 バンクセクション(南西より), SX6 バンクセクション(南より), SX6 遺物出土状態, SX6 鉄製品刀子(608)出土状態, SX6 鉄製品刀子(608)出土状態, SX6 鉄製品紡錘車(609)出土状態, SX6 銅製品鈍尾(607)出土状態
- 図版36 SK2 セクション(南より), SK4 遺物(339~341)出土状態, SK15 遺物出土状態, SK11 セクション(南より), SK12 セクション(東より), SK15 セクション(東より), SD1 セクション(東より), SD6 セクション(東より)

- 図版37 SD3セクション(北より), SD13セクション(東より), P2土師質土器杯(376・377)出土状態, 須恵器出土状態, P143土師質土器杯(393)出土状態, 須恵器出土状態, SX13完掘状態(西より), 包含層須恵器出土状態
- 図版38 土師質土器(杯), 須恵器(皿・瓶), 鉄製品(刀子・紡錘車)
- 図版39 土師器(皿・皿または蓋・皿または高杯)
- 図版40 土師器(皿・杯・杯または皿)
- 図版41 土師器(杯・蓋・高杯または蓋・高杯)
- 図版42 須恵器(杯・皿または高杯)
- 図版43 須恵器(杯・蓋)
- 図版44 須恵器(蓋), 土師器(鍋・甕)
- 図版45 土師器(甕・器形不明)
- 図版46 土師器(甕・竈), 須恵器(甕), 銅製品(鉞尾), 鉄器, 鉄滓
- 図版47 調査前風景(西より)
VII-1区全景(東より)
- 図版48 VII-1区北壁西部セクション(南西より)
VII-1区北壁東部セクション(南西より)
- 図版49 VII-1区西壁北部セクション(東より)
VII-1区西壁南部セクション(東より)
- 図版50 VII-1区遺構完掘状態(上空より)
VII-1区P13須恵器皿(692)出土状態
- 図版51 VII-2区遺構検出状態(北より)
VII-2区遺構完掘状態(上空より)
- 図版52 VII-2区遺構完掘状態(北西より)
VII-2区南壁セクション(北東より)
- 図版53 VII-2区SB11完掘状態(西より), VII-2区P30セクション(東より), VII-2区P33セクション(西より), VII-2区P33柱痕半截状態(北より), VII-2区P34セクション(西より)
- 図版54 VII-1区SD3セクション(東より), VII-1区SD4セクション(東より), VII-1区SD5セクション(南より), VII-1区SD6セクション(西より), VII-1区SD7セクション(東より), VII-1区SD8セクション(南より), VII-1区SK1セクション(南より), VII-1区SK2セクション(東より)
- 図版55 VII-1区SK3セクション(東より), VII-1区SK4セクション(南より), VII-1区SK5セクション(西より), VII-1区SK6セクション(北より), VII-1区SK7セクション(北より), VII-1区P1セクション(東より), VII-2区SD1セクション(南より), VII-2区SD1周辺完掘状態(北より)
- 図版56 VII-2区SK1須恵器蓋(693)出土状態, VII-2区SK1セクション(南より), VII-2区SK2セクション(南より), VII-2区SK3セクション(南より), VII-2区SK4セクション(南より), VII-2区SK5セクション(南より), VII-2区SK6セクション(南より), VII-2区SK7セクション(南より)
- 図版57 VII-2区SK8セクション(南より), VII-2区SK9セクション(南より), VII-2区SK10セクション(南より), VII-2区SK11セクション(南より), VII-2区SK12セクション(南より), VII-2区SK13セクション(南より), VII-2区SK15セクション(東より), VII-2区SK16セクション(東より)
- 図版58 VII-2区SK17セクション(西より), VII-2区SK18セクション(東より), VII-2区SK19セクション(東より), VII-2区SK19石出土状態, VII-2区SK20セクション(東より), VII-2区SK21セクション(南より), VII-2区SK23セクション(北より), VII-2区SK23柱穴完掘状態(東より)
- 図版59 VII-2区SX1セクション(西より), VII-2区SX2セクション(南より), VII-2区SX1・2完掘状態(北より), VII-2区P16土師器杯(706)出土状態, VII-2区P27セクション(南より), VII-2区P29セクション(南より), VII-2区P38須恵器蓋(707)出土状態, 遺構掘削作業風景(VII-1区SD1. 北東より)
- 図版60 土師器(杯), 須恵器(皿・杯・蓋)
- 図版61 土師器(杯・高杯・皿または杯), 須恵器(蓋)
- 図版62 土師器(皿), 須恵器(蓋・高杯・円面硯), 緑釉

図版目次

- 陶器(皿・皿または椀), 土師質土器(焙烙)
- 図版 63 調査前風景(北西より)
遺構検出状態(西より)
- 図版 64 遺構検出状態(南より)
遺構完掘状態(南より)
- 図版 65 調査区南壁セクション(北東より)
調査区南東隅壁セクション(北西より)
- 図版 66 SD4・SA3完掘状態(南より)
調査区南東端下層確認トレンチ(北より)
- 図版 67 IX-1a区1回目遺構検出状態(南より)
IX-1a区1回目遺構完掘及び下面遺構検出状態(東より)
- 図版 68 IX-1a区遺構完掘状態(上空より)
SK23遺物出土状態
- 図版 69 SK24周辺完掘状態(西より)
SK30～32埋土除去状態(南東より)
- 図版 70 SK30・31埋土除去状態(東より), SK30・31
半截状態(東より), SK30セクション(東より),
SK31セクション(東より), SK32埋土除去
状態(南より)
- 図版 71 IX-1区(奥)・IX-2区(手前)調査前風景
(南より), SD10釜道具トチン(735)出土状
態, SD11セクション(北より), SK23染付碗
(732)出土状態, SK23染付碗(734)出土状態,
SK25完掘状態(南より), P14・15セクション
(北より), P16セクション(西より)
- 図版 72 IX-1b区遺構検出状態(西より)
IX-1b区遺構完掘状態(南より)
- 図版 73 IX-1b区遺構完掘状態(上空より)
IX-1b区調査区西壁セクション(南東より)
- 図版 74 SK2遺物出土状態, SK11遺物出土状態,
SK11遺物出土状態近接, SK11遺物出
土状態近接, SK12遺物出土状態, SK14
遺物出土状態, SK16セクション(南より),
SK16完掘状態(北より)
- 図版 75 IX-1c区遺構完掘状態(南より)
IX-1d区東壁及び下層確認トレンチ(西よ
り)
- 図版 76 土師質土器(焜炉), 陶器(瓶・秉燭), 磁器(碗),
窯道具, 瓦, 土製品(泥面子)
- 図版 77 遺構完掘状態(上空より)
遺構完掘状態(西より)
- 図版 78 調査前風景(西より), SX4遺物出土状態,
SX6セクション(南より), SX9完掘状態(南
より), II層遺物出土状態, II層須恵器壺
(757)出土状態, 包含須恵器出土状態, 遺
構検出作業風景(西より)
- 図版 79 IX-1e区遺構検出状態(西より)
IX-1e区南壁セクション(北より)
- 図版 80 IX-1e区南東隅壁及びSD7セクション(北
より)
IX-1e区SD7セクション(北より)
- 図版 81 IX-1e区・IX-2区東 遺構検出状態(東より,
物部川, 田村遺跡方向)
IX区東・X区遺構完掘状態(西より)
- 図版 82 IX区東・X区遺構完掘状態(上空より)
IX-1e区・IX-2区東 遺構完掘状態(上空
より)
- 図版 83 IX-2区東 道路跡完掘状態(西より)
IX-2区東 道路跡完掘状態(東より)
- 図版 84 IX-2区東 南壁中央部セクション(北より)
IX-2区東 南壁東部セクション(北西より)
- 図版 85 IX-2区東 南壁西部セクション(北東より)
IX-2区東 東壁及びSD7セクション(南西
より)
- 図版 86 IX-2区東 SD1須恵器出土状態
IX-2区東 東縁SD2・7検出状態(南より)
- 図版 87 IX-2区東 SD7周辺完掘状態(南より)
IX-2区東 SD7関連遺構検出状態(東より)
- 図版 88 IX-2区東 SD7関連遺構完掘状態(東より)
IX-2区東 SD7関連遺構完掘状態(南より)
- 図版 89 IX-2区東 SD1検出状態(東より), IX-2区
東 SD2検出状態(西より), IX-2区東 SD7
完掘状態(南より), IX-2区東 SD7底面掘
削痕検出状態(北より)
- 図版 90 IX-2区東 南壁下層確認トレンチ(北より)

- 現地説明会風景
- 図版 91 X-2区道路側溝跡完掘状態(東より)
X-2区遺構完掘状態(南より)
- 図版 92 X-2区南壁セクション(北西より), X区調査前風景(東より), SD8完掘状態(西より), SD8遺物(744他)出土状態, SD8遺物(744他)出土状態近接
- 図版 93 X・XI区調査前風景(西より)
遺構検出状態(北より)
- 図版 94 遺構埋土除去状態(北より)
SK36・37埋土除去及び断ち割り状態(南西より)
- 図版 95 ハンダ土坑群ハンダ除去状態(西より)
調査区全景(東より, 遺構検出作業)
- 図版 96 SK36底面遺物出土状態, SK36ハンダ除去状態(南より), SK37底面遺物出土状態, SK38・46埋土除去及び断ち割り状態(南より), SK39・52セクション(東より), SK39・41・52埋土除去及び断ち割り状態(西より), SK39～41・52埋土除去及び断ち割り状態(北東より), SK39・41・52ハンダ除去状態(西より)
- 図版 97 SK40・41ハンダ除去状態(南より), ハンダ土坑群掘削作業風景(西より), ハンダ土坑群埋土除去状態(南より), ハンダ土坑群埋土除去状態(東より), ハンダ土坑群ハンダ除去状態(南より), ハンダ土坑群ハンダ除去状態(東より), ハンダ土坑群完掘状態(南より), ハンダ土坑群完掘状態(東より)
- 図版 98 [IX-2・X・XI区出土遺物]須恵器, 土師質土器(椀・釜), かわらけ, 陶器(水瓶・鉢), 鉄製品(鎌・和鋏)
- 図版 99 VII-1区遺構完掘状態(西より)
VIII区東壁及びSD1・3セクション(西より)
- 図版 100 IX区東・X区遺構完掘状態(東より)
IX-2区東道路跡検出状態(東より)
- 図版 101 IX-2区東SD2バンクセクション及び精査作業風景(東より), IX-2区東道路跡完掘状態及び清掃作業(東より), IX-2区東SD2バンク1・2セクション(東より), IX-2区東SD2バンク1～3セクション(西より), IX-2区東SD2バンク3南部セクション(東より)
- 図版 102 VII-1区SD1中央バンクセクション(東より), VII-1区SD2中央バンクセクション(東より), VIII区SD1東側バンクセクション(東より), VIII区SD1西側バンクセクション(東より), VIII区SD2東側バンクセクション(東より), IX-2区東SD1バンクセクション(西より), IX-2区東SD2(上層赤ホヤ)検出状態(西より), IX-2区東SD2・7きり合い部検出状態(西より)
- 図版 103 IX-2区東SD2検出及びセクション(東より), IX-2区東SD2(上層赤ホヤ)セクション(東より), IX-2区東SD2・7きり合い部完掘状態(西より), IX-2区東調査区東壁及びSD2セクション(西より), X-2区調査区西壁及びSD1セクション(東より), X-2区調査区東壁及びSD1セクション(西より), X-2区調査区西壁及びSD2セクション(東より), X-2区調査区東壁及びSD2セクション(西より)
- 図版 104 土師器(高杯・甕), 須恵器(高杯・壺・甕), 焼塩土器
土師器(高杯・甕), 須恵器(高杯・壺・甕), 焼塩土器
- 図版 105 I区調査前風景(南より)
I区調査前風景(北西より)
- 図版 106 I区東側調査区遺構検出状態(南より)
I区西側調査区遺構検出状態(南より)
- 図版 107 I区東側調査区遺構完掘状態(南西より)
I区東側調査区遺構完掘状態(南東より)
- 図版 108 I区西側調査区遺構完掘状態(南より)
I区西側調査区遺構完掘状態(北西より)
- 図版 109 I区調査区セクション(南より)
I区調査区セクション(北西より)
- 図版 110 I区SK1セクション(南より), I区SK1完掘状態(南より), I区SK2セクション(南より), I区SK2完掘状態(南より), I区SK5セクショ

- ン(南より), I区SK5 完掘状態(南より), I区SK7セクション(南より), I区SK7完掘状態(南より)
- 図版111 I区SD1 セクション(東より), I区SD1 セクション(南より), I区SD2 セクション(東より), I区SD3 セクション(南より), I区SD5 セクション(北より), I区SD6 セクション(南より), I区SD3・5・6完掘状態(北より), I区SD3・6完掘状態(東より)
- 図版112 II区調査前風景(南西より)
II区調査前風景(東より)
- 図版113 II-S区遺構検出状態(東より)
II-S区遺構検出状態(西より)
- 図版114 II-N-3区遺構検出状態(西より)
II-N-3区遺構検出状態(南西より)
- 図版115 II-N-3区遺構検出状態(南東より)
II-N-3区遺構検出状態(南より)
- 図版116 II-N-2区遺構検出状態(西より)
II-N-1区遺構検出状態(西より)
- 図版117 II-S区遺構完掘状態(東より)
II-S区遺構完掘状態(北西より)
- 図版118 II-N-3区遺構完掘状態(東より)
II-N-3区西側遺構完掘状態(東より)
- 図版119 II-N-1区遺構完掘状態(西より)
II-N-2区遺構完掘状態(東より)
- 図版120 II-S区調査区南壁セクション(北より)
II-N-3区調査区西壁セクション(東より)
- 図版121 II-N-2区調査区北壁セクション(南より)
II-N-1区調査区北壁セクション(南より)
- 図版122 II-S区SB1 完掘状態(西より)
II-S区SB2 完掘状態(西より)
- 図版123 II-S区SK1 セクション(南より), II-S区SK2 上面石出土状態(南より), II-S区SK1・2完掘状態(南より), II-S区SK1底面遺物出土状態(南より), II-S区SK4セクション(南より), II-S区SK5 セクション(南より), II-S区SK10 セクション(南より), II-S区SK9土師質土器杯(42)出土状態
- 図版124 II-N-2区SK28 セクション(南より), II-N-2区SK28 銭貨(51)出土状態, II-N-2区SK29 セクション(北より), II-N-3区SK34 完掘状態(東より), II-N-3区SK34陶磁器出土状態, II-N-3区SK53セクション(南より), II-N-3区SK48・49・53・54完掘状態(南より), II-N-3区SK57 完掘状態(東より)
- 図版125 II-S区SD1 石出土状態(南より), II-S区SD1 完掘状態(南より), II-S区SD2 遺物出土状態, II-S区SD2 完掘状態(東より), II-S区SD3 石出土状態(東より), II-S区SD3 セクション(東より), II-S区SD3 須恵器出土状態, II-S区SD3 石製品石斧(89)出土状態
- 図版126 II-N-3区SD8土師質土器杯または皿(99)出土状態, II-N-3区SD8土師質土器杯出土状態, II-N-3区SD8土師質土器杯(95・96)出土状態, II-N-3区SD8完掘状態(東より), II-N-3区SD9・10セクション(南より), II-N-3区SD9 遺物出土状態, II-N-3区SD17陶器播鉢(107)出土状態, II-N-3区SD17完掘状態(西より)
- 図版127 II-N-3区SD14 セクション(南より), II-N-3区SD14 完掘状態(南より), II-S区SB2P1 土師質土器杯または鉢(30)出土状態, II-S区SB2P7 土師質土器鉢(32)出土状態, II-S区P24 土師質土器杯(111)出土状態, II-S区包含層遺物出土状態, II-S区包含層土師質土器杯(140)出土状態
- 図版128 弥生土器(甕), 瓦質土器(火入れ), 陶器(播鉢), 石製品(石斧)
- 図版129 土師質土器(皿・杯・杯または皿・鉢), 磁器(碗), 銭貨
- 図版130 土師質土器(皿・杯), 白磁(碗), 陶器(播鉢・碗)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が平成 26～28 年度に実施した試掘調査の結果を受け、平成 28～30 年度に実施した南国安芸道路埋蔵文化財発掘調査のうち高田遺跡における V～XI 区及び東野遠山遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省(四国地方整備局)が計画し実施している一般国道 55 号南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について発掘調査を行ったうえで出土遺物などの整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

高田遺跡は、香南市野市町下井地区に所在する遺跡(周知の埋蔵文化財包蔵地)であり、試掘調査の結果、遺跡範囲が西側に拡大された。古期扇状地を浸食した物部川の左岸の河岸段丘である野市台地に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代の集落跡や古代の掘立柱建物跡群、などが確認されている。東野遠山遺跡は、香南市野市町東野遠山地区に所在し、高田遺跡から東方約 2.0km に位置する。平成 28 年度に実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡であり、中世から近世の遺構や遺物が出土している。

2. 調査の契機と経過

南国安芸道路は、高知市と安芸市間 36 km を結ぶ一般国道 55 号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長 36 km と長く、高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からであり、まず埋蔵文化財の取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果、当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)があるもののこれまで発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘確認調査を平成 19 年度までは財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター)、平成 20 年度か

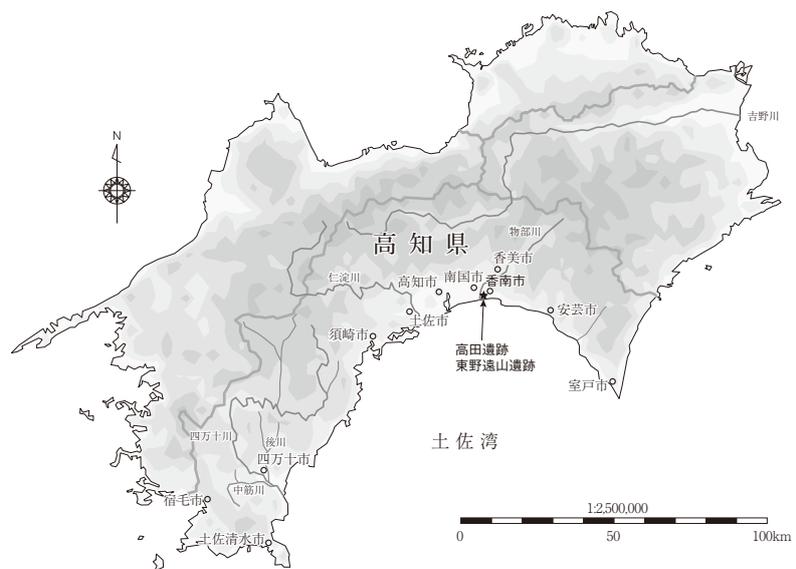


図1-1 高田遺跡・東野遠山遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

らは高知県教育委員会が順次実施した。

平成16年度以降に南国安芸道路の路線内で本発掘調査が実施された遺跡は、口槇ヶ谷遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)や花宴遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)、徳王子前島遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)、坪井遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ)、徳王子大崎遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ)、徳王子広本遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ)、東野土居遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ～Ⅹ)であり、順次発掘調査報告書が公刊された。

平成26年度には上岡地区及び下井地区が工事対象となり試掘調査が実施された結果、上岡地区で遺構と遺物が確認され、高田遺跡の範囲が拡大された。また、下井・宇賀地区においても遺構と遺物が確認され、宇賀遺跡が新設された。そこで、国土交通省四国地方整備局から業務委託を受けた高知県教育委員会と公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターとの間で業務委託契約が締結され、平成27年度に高田遺跡のⅠ～Ⅲ区と宇賀遺跡、平成28年度に高田遺跡のⅣ・Ⅴ-1・Ⅵ・Ⅶ-1区、の発掘調査がされた。さらに平成28年度には東野遠山地区においても遺構と遺物が確認され、東野遠山遺跡が新設された。平成29年度に高田遺跡のⅤ-2・Ⅶ-2区、東野遠山遺跡、平成30年度は高田遺跡のⅧ～Ⅹ区の発掘調査を実施した。高田遺跡のⅠ～Ⅳ区と宇賀遺跡については平成29年度に『高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡』として発掘調査報告書が公刊されている。

3. 調査の概要

(1) 遺跡の概要

① 高田遺跡

高田遺跡は平成元年に実施された分布調査で確認されていた遺跡で、平成26年度の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が拡大され、弥生時代から近世にかけての遺構と遺物が確認される複合遺跡となった。本遺跡は物部川左岸の河岸段丘である野市台地上に立地しており、弥生時代では調査対象区の中中部と西部において弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡が10軒以上検出されており、当該期に集落が存在していたことが明らかとなった。古代では調査区全域で掘立柱建物跡群が確認されており、当該期の役人層が使ったとみられる道具類や搬入品などが出土していることから当時の官衙に関連する施設があったと考えられる。近世以降になると溝などの耕作関係の遺構が確認されている。

② 東野遠山遺跡

東野遠山遺跡は、平成28年度に実施された試掘調査で発見され新設された遺跡である。高田遺跡の東方約2.0kmに位置する。中世から近世以降が中心と考えられる溝・土坑などの遺構や遺物が確認されている。調査の詳細については後述する。

(2) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて高田遺跡及び東野遠山遺跡の調査区の設定を行い、グリッドの設定は西野々遺跡からの一連のものを使用して行った。世界測地系第4座標系(Ⅳ系)の基準点を使用し、X=62,500m、Y=11,000m(北緯33° 33′ 49″、東経133° 37′ 07″、真北方向角-0° 03′ 56″)を原点とし、A0を組んでいる。X軸にアルファベット、Y軸にアラビア数字を配し、100m四方の大グリッ



遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1. 高田遺跡	弥生～近世	20. 深淵城跡	中世	39. 前浜砲台跡	近世
2. 東野遠山遺跡	弥生～近世	21. 大谷城跡	中世	40. 野口遺跡	弥生～中世
3. 宇賀遺跡	弥生～近世	22. 大谷遺跡	古墳・平安	41. 下井遺跡	平安・中世
4. 古流曾遺跡	古墳～平安	23. 大谷古墳	古墳	42. 野口遺跡	弥生～中世
5. ヲサガ淵遺跡	奈良～中世	24. 大崎山古墳	古墳	43. 東野遺跡	平安
6. 東屋敷遺跡	中世	25. 西ノ谷遺跡	平安	44. 香宗城跡	中世
7. 表中内遺跡	弥生～平安	26. 兎田柳ヶ本遺跡	古墳	45. 香宗遺跡	中世
8. 平杭遺跡	弥生・古墳	27. 中山田土居城跡	中世	46. 東野土居遺跡	弥生～近世
9. 上横田遺跡	古墳～平安	28. 西野遺跡群	弥生・古墳・平安	47. 平井遺跡	古墳～平安
10. 大北遺跡	古墳～中世	29. 下ノ坪遺跡	平安	48. ハザマ遺跡	弥生～中世
11. 寺ノ前遺跡	弥生～中世	30. 北地遺跡	弥生	49. 大東遺跡	古墳～平安
12. 北角田遺跡	弥生～平安	31. 上岡北遺跡	弥生・近世	50. 須留田城跡(消滅)	中世
13. 立田土居城跡	中世	32. 上岡遺跡	弥生・中世	51. 御所の前遺跡	弥生～中世
14. 徳弘土居城跡	中世	33. 山下城跡	平安・中世	52. 小屋敷遺跡	中世
15. 高添遺跡	弥生～平安	34. 田村城跡	中世	53. 吉原城跡	中世
16. 修理田遺跡	弥生～平安	35. 田村遺跡群	縄文～近世	54. 八反遺跡	中世
17. 深淵遺跡	縄文～近世	36. 千屋城跡	中世	55. 浜口遺跡	弥生・古墳
18. 深湖北遺跡	弥生～中世	37. 司例田遺跡	古墳～近世	56. 南中曾遺跡	弥生・古墳
19. 西上野遺跡	弥生	38. 中屋敷遺跡	弥生	57. 住吉砂丘遺跡	弥生

図1-2 周辺の遺跡分布図(S=1/40,000)

ド、20m四方の中グリッド、4m四方の小グリッドを設定し、大中小グリッドの間は「-」で区切って表記した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。遺構平面図、遺物出土状況図などの作図及び遺物取り上げなどの測量はこのグリッド、座標を使用して行った。

調査に際しての堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上まではバックフォーを使用し、遺物包含層以下は人力で行った。なお、遺物包含層であっても遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮

3. 調査の概要 (2) 調査の方法

してバックフォーで掘削を行った。遺構検出後は、必要に応じて写真撮影と実測図面の作成を行いながら遺構の掘削を行った。調査終了後は下層確認のためにトレンチ掘削を行った。

また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古環境の復原にも重点を置いた。

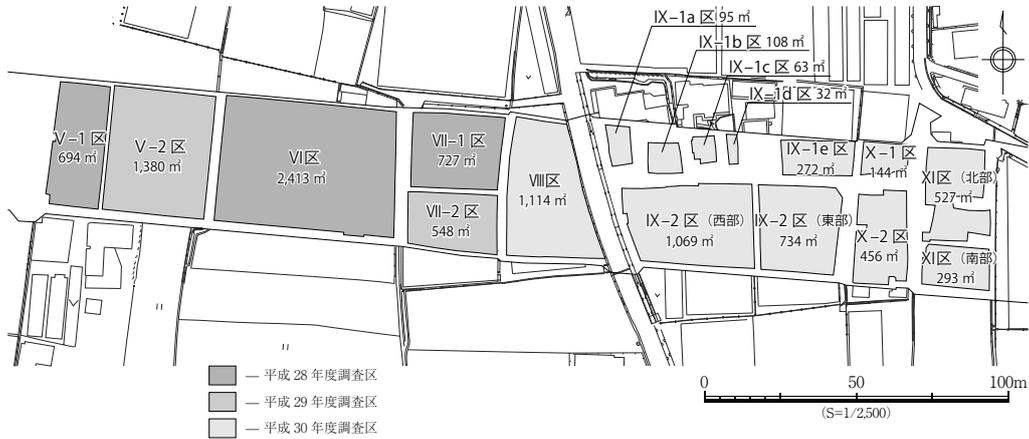


図1-3 高田遺跡調査区位置図



図1-4 高田遺跡V～XI区グリッド設定図(S=1/1,500)

第Ⅱ章 高田遺跡Ⅴ区の調査

1. Ⅴ-1区の調査の概要と基本層序

本報告は平成28～30年度に調査を実施したⅤ～Ⅺ区の発掘調査報告書である。Ⅴ～Ⅺ区は調査対象地の中央から東端にかけて位置する。調査区はⅤ区がⅤ-1区とⅤ-2区、Ⅵ区、Ⅶ区がⅦ-1区とⅦ-2区、Ⅷ区、Ⅸ区はⅨ-1区とⅨ-2区、として調査を実施した。

当調査区は調査対象地の中央部に位置する。調査対象地西側の当調査区がⅤ-1区、東側調査区をⅤ-2区と名称づけ調査を実施した。

Ⅴ-1区

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

調査区北壁

第Ⅰ層 表土層(耕作土)

第Ⅱ層 暗褐色(10YR3/4)土層(にぶい黄褐色(10YR4/3)土が混じり、礫を多く含む)

第Ⅲ層 黒褐色(10YR2/3)砂質シルト層(にぶい黄褐色(10YR5/3)土が粒状に混じる)

第Ⅳ層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層(土器細片を含み褐灰色土が粒状に混じる)

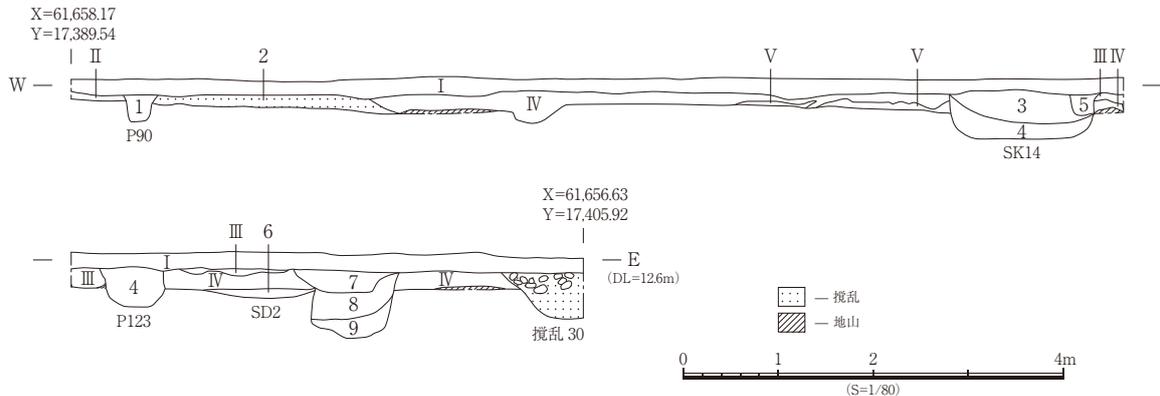
第Ⅴ層 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層(Ⅳ層が一部混じる)

調査区東壁

第Ⅰ層 表土層(耕作土)

第Ⅱ層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層(褐色(10YR4/6)土が粒状に混じり、暗褐色(10YR3/4)土及び耕作土が混じる)

第Ⅲ層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層(にぶい黄褐色(10YR5/3)土が粒状に混じる)



層位

- 第Ⅰ層 表土層(耕作土)
- 第Ⅱ層 暗褐色(10YR3/4)土層
(にぶい黄褐色(10YR4/3)土が混じり、礫を多く含む)
- 第Ⅲ層 黒褐色(10YR2/3)砂質シルト層
(にぶい黄褐色(10YR5/3)土が粒状に混じる)
- 第Ⅳ層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層
(土器細片を含み、褐灰色土が一部混じる)
- 第Ⅴ層 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層
(Ⅳ層が一部混じる)

遺構埋土

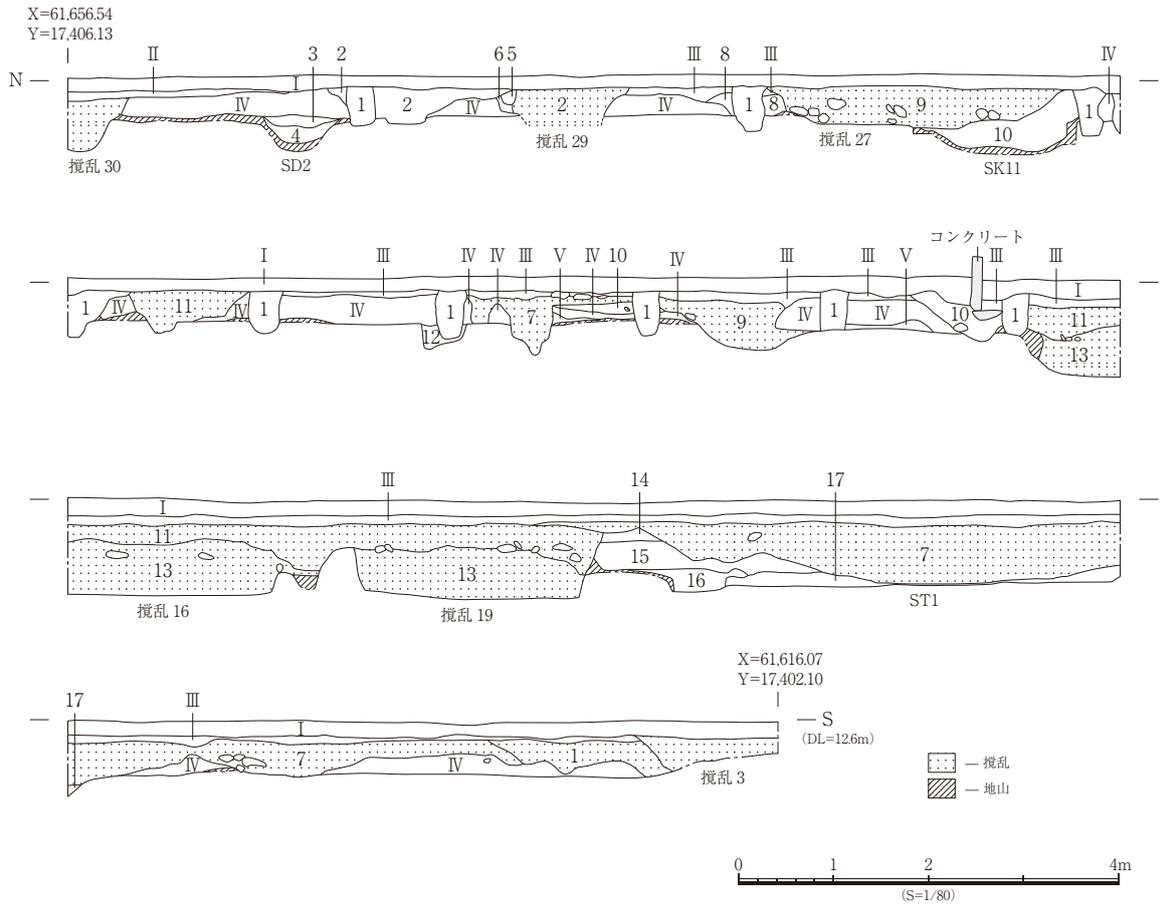
- 1. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(黄褐色土が粒状に混じる:P90)
- 2. 褐灰色(10YR4/1)礫土(攪乱)
- 3. 黒褐色(10YR2/3)砂質シルト(SK14)
- 4. 暗灰色土(SK14・P123)
- 5. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(黒褐色粘質土がブロック状に混じる:ハウスビット)
- 6. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(SD2)
- 7. 暗褐色(7.5YR3/2)砂質シルト(灰黄褐色土が粒状に混じる:ハンダ土坑)
- 8. 灰黄褐色粘質土(ハンダ土坑)
- 9. 暗褐色(7.5YR3/2)砂質シルト(ハンダ状土が混じる:ハンダ土坑)

図2-1 Ⅴ-1区調査区北壁セクション図

1. V-1区の調査の概要と基本層序

第IV層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層

第V層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層(暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルトが多く混じる)



層位

- 第I層 表土層(耕作土)
- 第II層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層(褐色(10YR4/6)土が粒状に混じり、暗褐色(10YR3/4)土及び耕作土が混じる)
- 第III層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト層(にぶい黄褐色(10YR5/3)土が粒状に混じる)
- 第IV層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層
- 第V層 黒色(10YR2/1)砂質シルト層(暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルトが多く混じる)

遺構埋土

- 1. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(黒褐色(10YR3/2)砂質シルトが混じる)
- 2. 黒褐色(10YR2/3)土(灰黄褐色土及び黄褐色土が混じり、5~10cm大の中・大礫を含む)
- 3. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(SD2)
- 4. 黒色(10YR1.7/1)砂質シルト(にぶい黄褐色土ブロックが混じる:SD2)
- 5. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(5cm大の中礫を含む)
- 6. 黒色(7.5YR2/1)砂質シルト(土器細片及び5cm大の中礫を含む)
- 7. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト(褐灰色(10YR5/1)粘質土が混じり、5~10cm大、15cm大の中・大礫を多く含む)
- 8. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(やや織りあり)
- 9. 暗褐色(10YR3/3)礫土(5cm大、10~20cm大の河原石を多く含む)
- 10. 黒色(10YR1.7/1)砂質シルト
- 11. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(土器細片及び5cm大の中礫を若干含む)
- 12. 黒色(10YR1.7/1)砂質シルト(褐色土が粒状に多く混じる)
- 13. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト(5~10cm大、20~25cm大の中・大礫を多く含む)
- 14. 黒色(10YR2/1)砂質シルト(ST1)
- 15. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(ST1)
- 16. 黒色(10YR2/1)砂質シルト(黄褐色粘質シルトブロックが混じる:ST1)
- 17. 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト(黄褐色土及び黒色土ブロックが混じる:ST1貼床)

図2-2 V-1区調査区東壁セクション図

2. V-1区の検出遺構と出土遺物

V-1区では竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、柵列1列、土坑23基、溝跡2条、柱穴473個、性格不明遺構25基が検出されている。調査面積は694.16㎡で、竪穴建物跡は調査区の中央から南部にかけて認められている。調査区東側の道路をはさみ西側の調査区(I~IV区、高田遺跡Iで報告)では竪穴建物跡を確認しており、それよりさらに南東側において、確認することができた。

(1) 竪穴建物跡

ST1 (図2-3)

調査区の南東部において検出した。上面はカクランにきられ、遺構の東側は調査区外に続くと考えられる。確認延長は南北6.27m、東西4.0m以上で、検出面から床面までの深さは27~49cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)を主体とする砂質シルトで、黄褐色および黒色土をブロック状に含む。また、遺構の北側の一部に貼床を呈する。床面では中央ピット、支柱穴、壁溝を検出した。中央ピット(P3)は床面の中央寄りに位置し、規模は長径0.62m、短径0.41mで検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は黒色(10YR7/1)砂質シルトを主体に暗褐色(10YR3/4)砂質シルトと黒褐色(10YR2/3)砂質シルトが堆積する。

中央ピットの南東部には浅い掘り込みをもつSK1が接しており、中央ピットに付属する遺構の可能性が考えられる。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.20m、短径0.78mで検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は黒色及びにぶい黄褐色土が含まれる黒褐色(7.5YR3/3)砂質シルトである。床面からは11個の柱穴を検出しており、その内P1・4・6は支柱穴と考えられる。床面から底面までの深さは、P1が42cm、P2が27cm、P4が37cmを測り、埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトが主体である。

遺物は弥生土器壺、甕、鉢、高杯と搬入と考えられる破片等が出土している。その内弥生土器壺・甕・鉢・高杯が図示できた。

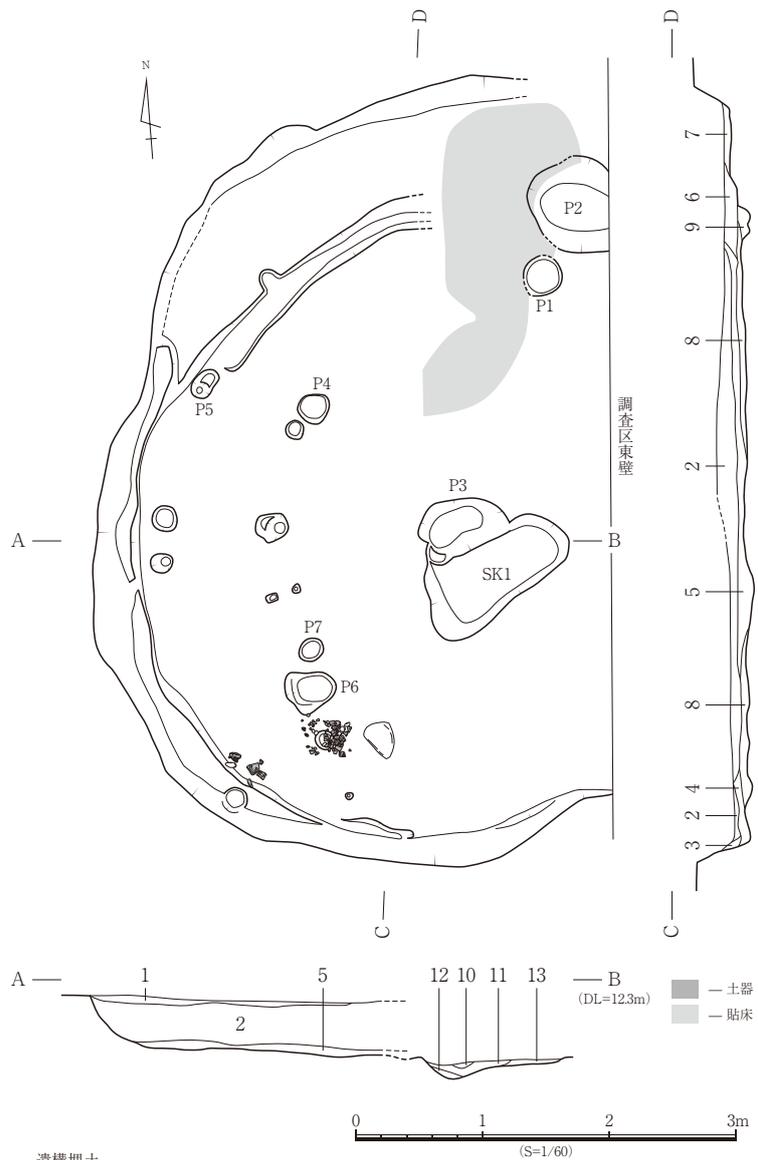
出土遺物 (図2-4・5 1~34)

1は壺の口縁部で、緩やかに外反する。外面はナデ調整で、内面は摩耗している。2は長頸壺の口縁部である。外面は口縁端部にナデ調整、その他はハケ目調整とヘラミガキが施される。内面はナデ調整で、頸部下方に接合痕がみられる。3は壺の口縁部である。外反して大きく開く。口縁端部はナデ調整で、外面はタテ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。内面はヨコ方向のハケ目調整とナデ調整、さらに頸部内面には指頭圧痕がみられる。4は壺の底部である。平底を呈し、底部側面に指頭圧痕、体部外面にはヘラケズリが施される。内面には指頭圧痕とナデ調整がみられる。5も壺の底部である。平底を呈し、外面にはタタキ目が認められる。ナデ調整と一部ヘラケズリがみられる。内面はナデ調整で一部ハケ目調整か。6は壺の体部である。外面にはタタキ目が残り、タテ方向のハケ目調整と下半部にはヨコ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。内面はハケ目調整とナデ調整が施される。7も壺の底部で、平底を呈する。外面はタタキ目が残り、タテ方向のハケ目調整、指頭圧痕及びナデ調整が施される。内面には指頭圧痕とユビナデ及び工具状のナデ調整がみられる。8は壺の底部と考えられる。平底を呈し、底部外面にはハケ目調整が施される。体部外面にはタタキ目が残り、タテ方向のハケ目調整と内面にはナデ調整がみられる。9は甕の口縁部で、外反し、端部は平坦面を呈する。外面は口縁下にヨコ方向のナデ調整と頸部はタテ方向のハケ目調整が施される。内面はハケ目状のナデ調整、頸部にヨコ方向のハケ目調整と指頭圧痕がみられる。10も甕の口縁部で、外反し、

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (1) 竪穴建物跡

端部はやや肥厚する。外面は口縁端部下までタタキ目が残る、指頭圧痕が施される。内面は摩耗している。11・12も甕の口縁部で、11は外面にユビナデ、一部指頭圧痕がみられる。内面にヨコ方向のハケ目調整、頸部はナデ調整が施される。外面に一部ススが付着する。12はくの字状に開き端部は平坦面を呈する。外面は口縁部下にナデ調整、頸部から体部にタテ方向のハケ目調整。内面は摩耗するが一部にナデ調整と指頭圧痕が残る。13は甕の口縁部から体部である。口縁部は外反し、端部は上方に拡張している。口縁部外面にナデ調整、頸部下にタテ方向のハケ目調整が施される。口縁部内面にナデ調整、頸部下は指頭圧痕とユビナデ、一部にハケ目調整を施す。外面の一部にススがみられる。14も甕の口縁部から体部である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面は頸部上までタタキ目が残る。口縁部にかけて指頭圧痕とナデ調整。口縁部内面は指頭圧痕とナデ調整で、体部は指頭圧痕、ユビナデ、下半部にヘラケズリが施される。また外面全体にススの付着がみられる。15は口縁部がくの字状を呈する。

外面は頸部にタテ方向の粗いハケ目調整、口縁端部はナデ調整で内面は口縁部にヨコ方向の粗いハケ目調整と頸部に指頭圧痕がみられる。16は口縁部は外反し、端部は平坦面を呈する。外面と内面はナデ調整で、内面には線描きの文様がみられる。17は甕の底部から頸部である。外面にはタタキ目残り、頸部はナデ調整、体部はタテ方向のハケ目調整である。内面は頸部にナデ調整、体部から底部に指頭圧痕、ユビナデが施される。



遺構埋土

1. 黒色 (10YR2/1) 砂質シルト
2. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト
3. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト (にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルトブロックが混じる)
4. 黒色 (10YR1.7/1) 砂質シルト (黒褐色土及びにぶい黄褐色土ブロックが混じる)
5. 黒色 (10YR2/1) 砂質シルト (黄褐色 (10YR5/6) 粘質シルトブロックが混じり、炭化物を多く含む)
6. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト (明褐色 (7.5YR5/6) 砂質シルトブロックが混じる)
7. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト (暗褐色 (10YR3/4) 土ブロックが混じる)
8. 黒褐色 (10YR2/3) 粘質シルト (黄褐色土及び黒色土ブロックが混じる。締め強い: 貼床)
9. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト (黄褐色土及び黒色土ブロックが混じる)
10. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト (ST1P3)
11. 黒色 (10YR1.7/1) 砂質シルト (黄褐色土ブロックが混じる: ST1P3)
12. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト (黒褐色土ブロックが混じる: ST1P3)
13. 黒褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト (黒色土、暗褐色土及びにぶい黄褐色土ブロックが混じる)

図2-3 V-1区 ST1

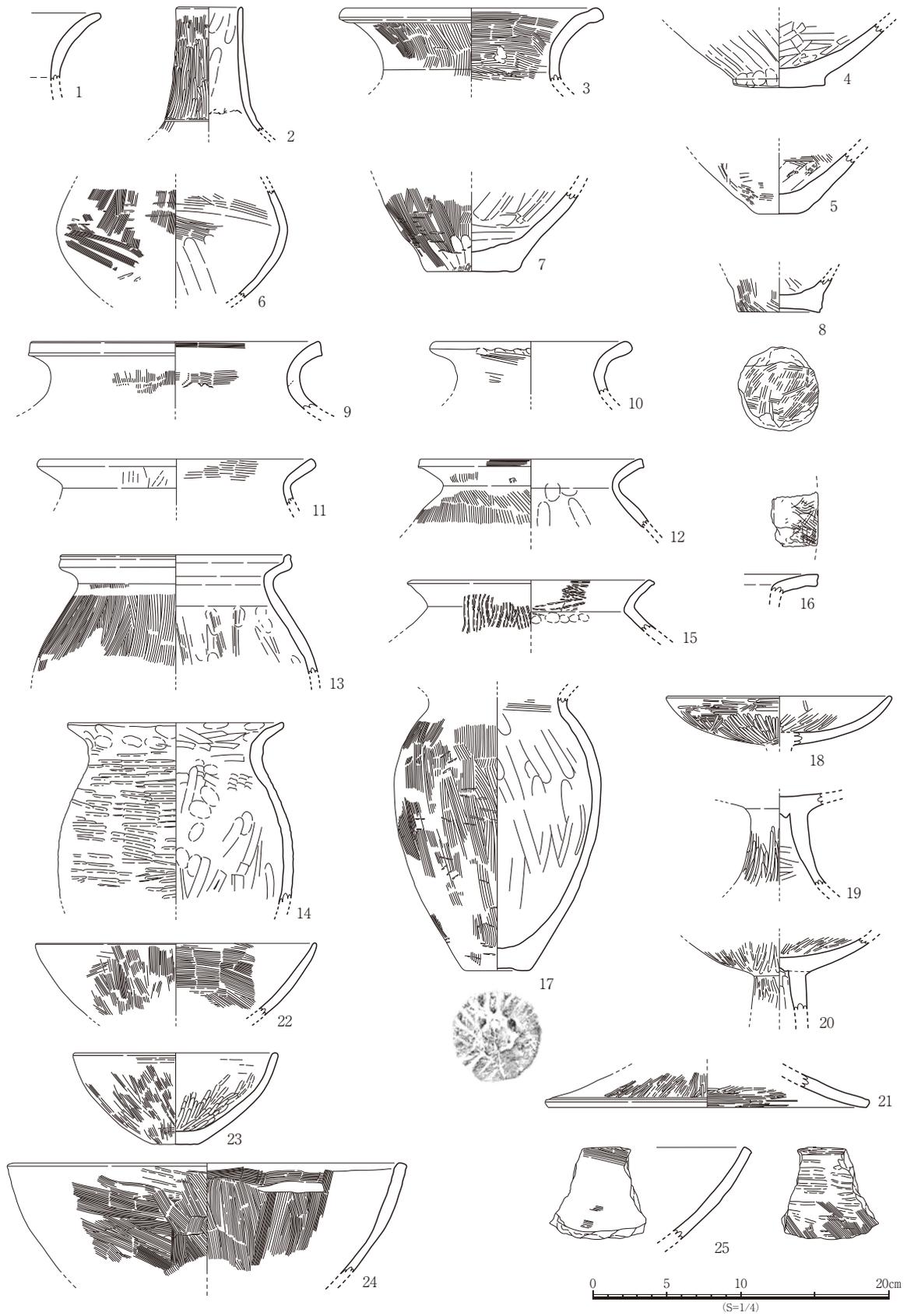


図2-4 V-1区ST1出土遺物実測図1

2. V - 1 区の検出遺構と出土遺物 (1) 竪穴建物跡

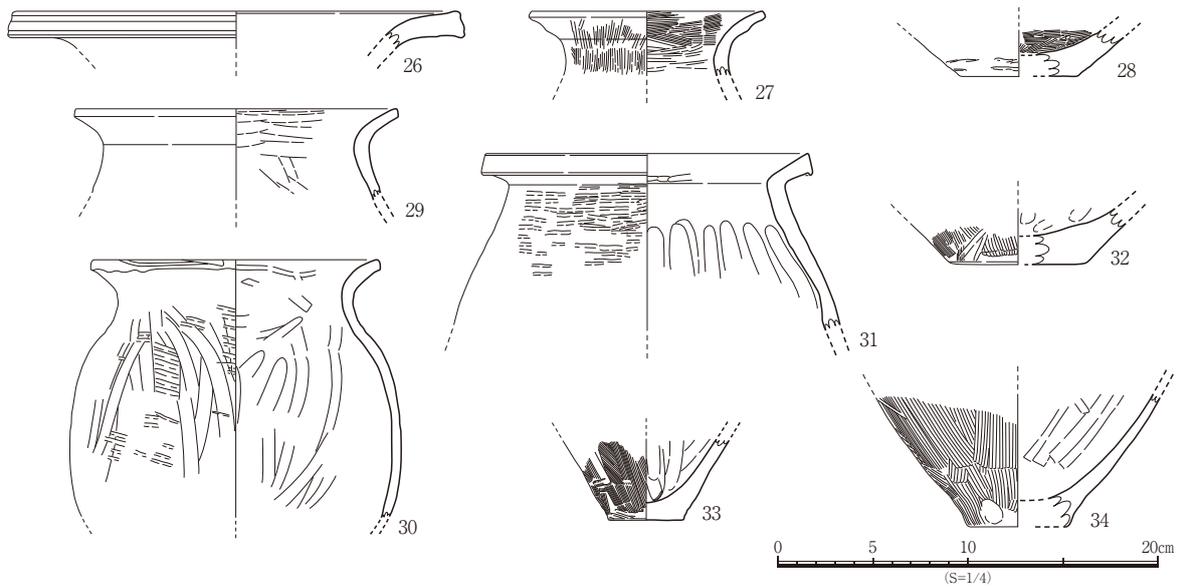


図2-5 V-1区ST1出土遺物実測図2

18～21は高杯である。18は外面はヘラミガキとヨコ方向のナデ調整で、内面は摩耗しているが、ヘラミガキと口縁端部にナデ調整が施される。19は外面は一部器面が剥離し、タテ方向のヘラミガキが施される。内面はヘラケズリとナデ調整がみられる。20は外面はヘラミガキとナデ調整で、内面にもヘラミガキとナデ調整が施される。脚部内面にはヘラケズリがみられる。21は脚部である。外面は端部にナデ調整、タテ方向のヘラミガキ、内面にはヨコ方向のヘラミガキとナデ調整が施される。

22～25は鉢である。22は口縁部で、外面はタテ方向のハケ目調整とナデ調整、内面にヨコ方向と斜位方向のハケ目調整が施される。23は平底を呈する。外面は口縁部下にナデ調整、体部から底部にタテ方向のハケ目調整とナデ調整。内面は口縁部下にナデ調整、体部から底部にヘラミガキが施される。24は大型鉢の口縁部である。外面は口縁部近くまでタタキ目残り、タテとヨコ方向のハケ目調整が施される。内面はナデ調整とヨコとタテ方向のハケ目調整である。25は口縁部である。外面は口縁端部までタタキ目残り、下半部はハケ目調整とナデ調整。内面は斜位方向のハケ目調整とナデ調整が施される。

26は広口壺の口縁部である。端部は肥厚し、平坦面をなす。端部外面は2条の凹線状を呈する。外面内面ともに摩耗している。27は壺と考えられる。外面はタテ方向のハケ目調整とナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。28は壺の底部である。平底を呈し、外面はタタキ目残り、ナデ調整を施す。内面は不定方向のハケ目調整である。29は甕で、口縁部は外反し開く。口縁端部外面はナデ調整、外面は器面が剥離する。内面はナデ調整で、頸部は強いヘラ状工具によるナデ調整で外面にはススがみられる。30は口縁部は外反し、開く。体部中央に最大径をもつ。外面は頸部近くまでタタキ目残り、ナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、体部下半部にユビナデを施す。外面から口縁部内面までススが付着する。31は口縁部はくの字状に外反し、端部は上下に肥厚し平坦面をなす。外面は頸部までタタキ目残り、ナデ調整を施す。内面は口縁部にナデ調整、頸部から体部はユビナデがみられる。32は甕の底部である。平底を呈し、外面には一部タタキ目残り、タテ方向

のハケ目調整が施される。内面は指頭圧痕，ナデ調整である。33は甕の底部で平底を呈する。外面には一部タタキ目が残る。タテ方向のハケ目調整，ヘラケズリが施される。内面はユビナデがみられる。34は甕の底部から体部で，底部は平底を呈する。外面はタテ方向のハケ目調整，指頭圧痕が施される。内面はヘラ状工具によるナデ調整に一部にハケ目調整がみられる。外面にはススが付着している。

(2) 掘立柱建物跡

SB1 (図2-6)

調査区北西部において検出した。規模は桁行3間(6.2m)，梁行2間(3.5m)の南北棟で，軸方向はN-4°-Eである。建物北側柱を構成する中央の柱穴は確認することはできなかった。柱間寸法は桁行が2.00～2.10m，梁行1.70～1.80mを測る。床面積は21.7㎡である。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し，柱穴の規模は，円形が径50cm前後と60cm前後で，検出面から底面までの深さは，P9が約30cmと最も浅く，最も深いP10が約60cmを測る。その他の柱穴は40～50cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトを主体とする。遺物はP3から出土した磁器碗とP10から出土した須恵器甕が図示できた。

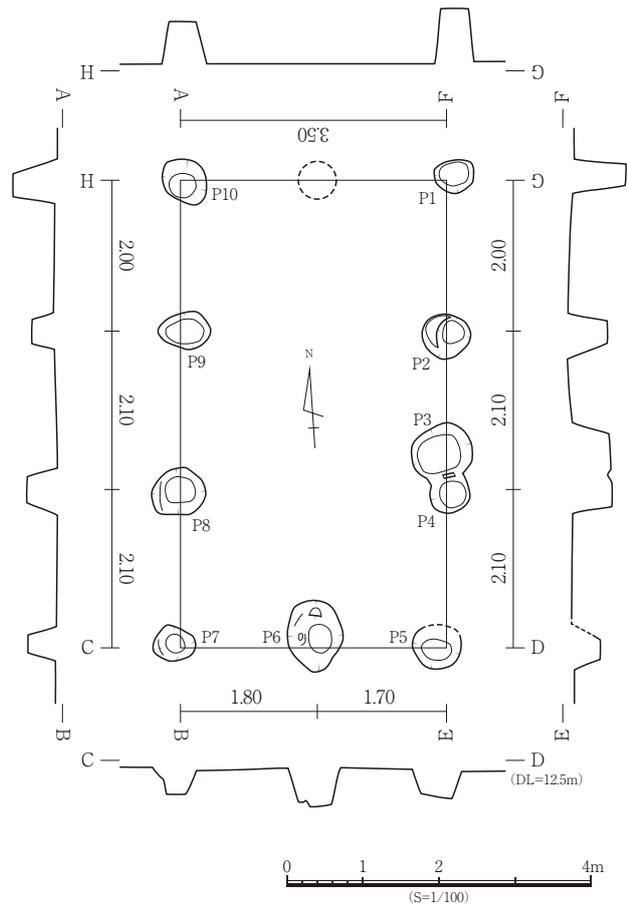


図2-6 V-1区SB1

出土遺物 (図2-7 35・36)

35は染付の丸形碗である。底部は削り出し高台で，高台を除き外面内面ともに施釉する。内面は無文で外面に圏線と植物文がみられる。内面見込みには目跡が残る。36は須恵器の甕の口縁部である。外面は斜位方向とタテ方向のハケ目調整で頸部にナデ調

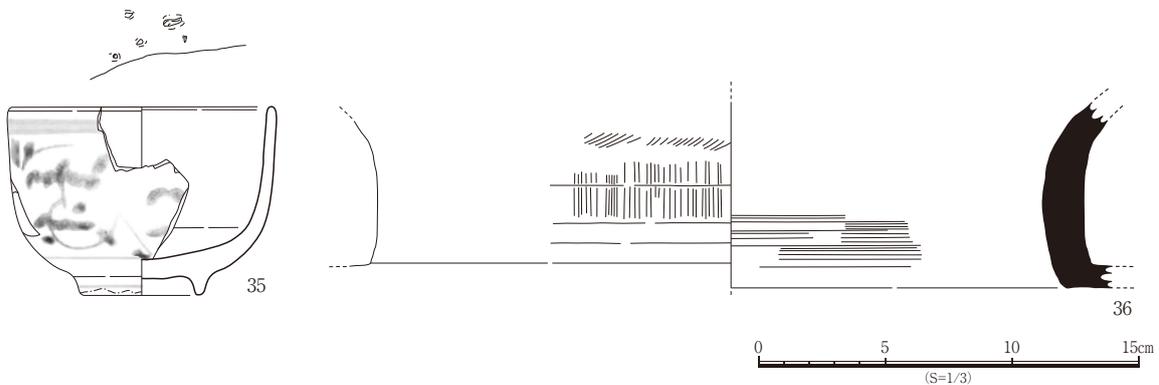


図2-7 V-1区SB1出土遺物実測図

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (2) 掘立柱建物跡

整が施される。内面はナデ調整で、頸部はヨコ方向のハケ目調整がみられる。

SB2 (図2-8)

調査区北西部において検出した。SB1の北部に隣接する。規模は桁行3間(5.5m)、梁行2間(3.8m)の南北棟で、軸方向はN-4°-Eである。柱間寸法は桁行が1.70~2.10m、梁行1.40~2.40mを測る。床面積は20.9㎡である。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、柱穴の規模は円形のもの40cm前後、楕円形のもの長径60cm前後で、短径40cm前後を測る。検出面から底面までの深さは、P2が18cmで最も浅く、P4が約57cmで最も深い。その他の柱穴は21~46cmである。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトが主体である。埋土中からは遺物の出土はみられなかった。

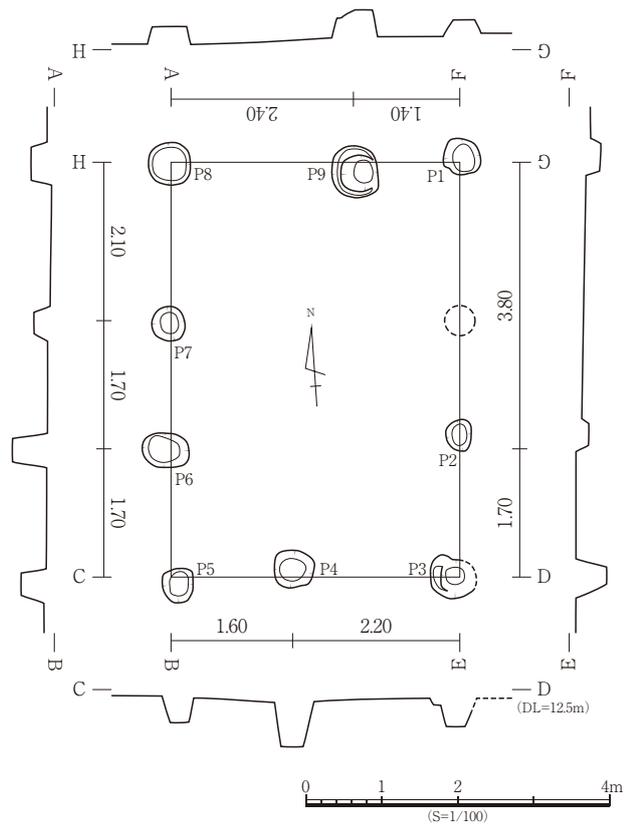


図2-8 V-1区SB2

(3) 柵列

SA1 (図2-9)

調査区北部において検出した。SB1の東側柱に並列する南北塀である。規模は4間(8.6m)で、柱間寸法は2.0~2.3mを測る。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、規模は円形のもの径が66cm、楕円形のもの長径が62~85cm、短径50~73cmで、検出面から底面までの深さはP1が約60cm、P4が約70cm、P2・3・5が80cm前後を測る。柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/2)が主体である。埋土中から遺物の出土はみられなかった。

(4) 土坑

SK1 (図2-10)

調査区の南部において検出した。平面形は長形状を呈し、主軸方向はN-83°-Eを示す。規模

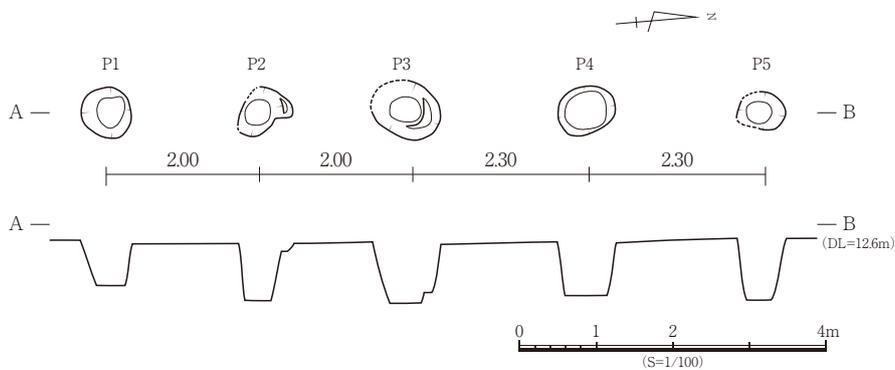


図2-9 V-1区SA1

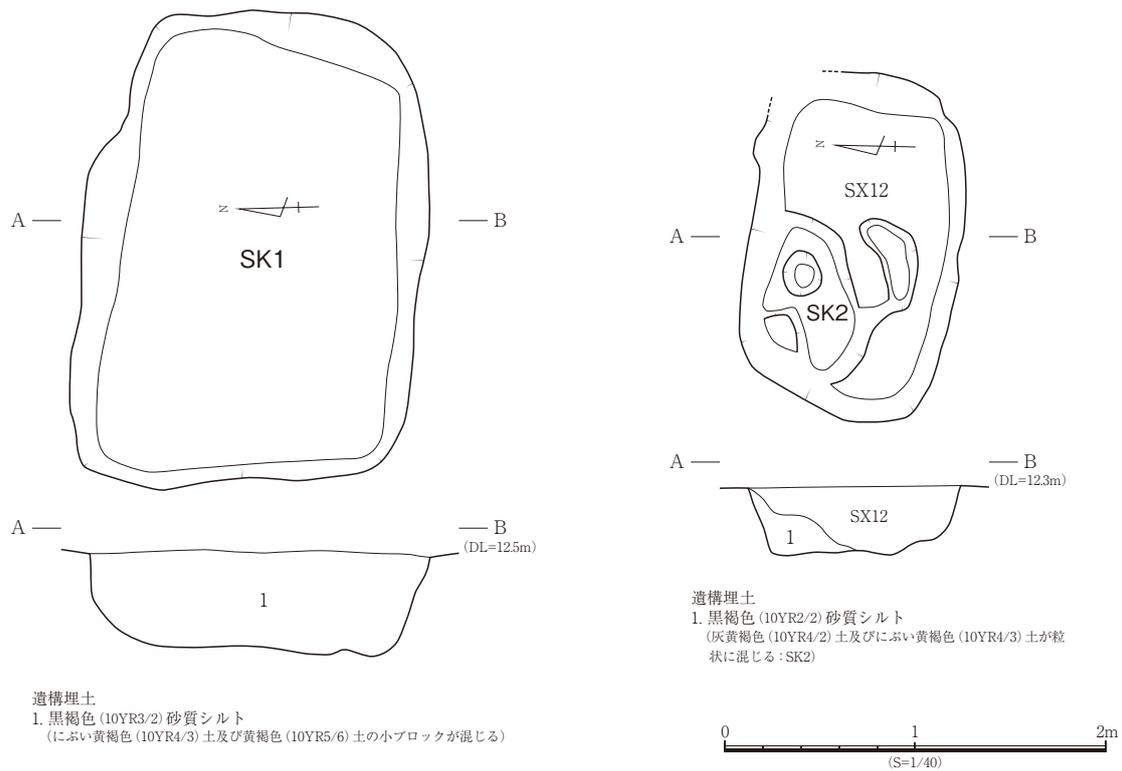


図2-10 V-1区SK1・2

は長径 2.50m, 短径 1.80mで検出面から底面までの深さは約 58 cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土が含まれる黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルトである。遺物は弥生土器甕, 土師質土器皿, 須恵器杯・甕, 陶磁器片及び石製品が出土している。その内須恵器杯と石製品石臼が図示できた。

出土遺物 (図2-11 37・38)

37は須恵器杯の底部である。底部外面に高台を貼付する。外面と内面共にナデ調整を施す。被熱を受けている。38は砂岩製の石臼で挽臼の受皿部と考えられる。縁辺部と外面にハツリ痕がみられる。

SK2 (図2-10)

調査区の中央東部において検出した。上面はSX12にきられており、底面近くでの確認であった。確認された平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-83°-Wを示す。規模は長径0.90m, 短径0.70mで、深さは約44cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土と灰黄褐色土を含む黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルトである。遺物は弥生土器, 須恵器, 土師質土器, 陶磁器, 瓦, 金属製品が出土している。その内銭貨が図示できた。

出土遺物 (図2-11 39)

39は寛永通宝である。内面は無文である。

SK3

調査区の南西部に位置する。上面のカクランを除去した底面で確認した。平面は円形を呈し、主軸方向はN-73°-Wを示す。規模は径が0.72mで、検出面から底面までの深さは、44cmを測る。埋土は黒褐色 (10YR2/1) シルトである。遺物は須恵器, 陶磁器, 金属製品煙管片が出土しているが、図示し得なかった。

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (4) 土坑

SK4

調査区の南西部に位置する。上面のカクランを除去した底面において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が2.30m、検出面から底面までの深さは、約34cmを測る。埋土は礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は須恵器壺、土師質土器片が出土しているが、図示でき得なかった。

SK6 (図2-12)

調査区の中央部において検出した。上面にはSK19が重複しており、SK19の掘方の可能性も考えられる。平面形は不整長方形を呈し、主軸方向はN-79°-Wを示す。規模は長径3.10m、短径2.25mで、検出面から底面までの深さは、約57cmを測る。埋土は黒褐色土と黒色土を含む暗灰色シルトである。

遺物は、埋土中から弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器片が出土している。その内須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図2-13 40)

40は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は平坦面を呈し、内面は自然釉がかかる。外面と内面は回転ナデ調整を施す。

SK7 (図2-12)

調査区の中央部において検出した。遺構の東側はSX2と接する。平面形は円形状を呈し、規模は径が1.70m前後で、検出面から底面までの深さは、約49cmを測る。埋土はハンダ土と礫が含まれる暗褐色土である。遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器片が出土している。その内陶器皿が図示できた。

出土遺物 (図2-13 41)

41は底部は削り出し高台を呈し、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台外面は露胎で、内面と外面には銅緑釉を施す。

SK8 (図2-12)

調査区の中央部において検出した。遺構の北側はSK20と接する。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-70°-Eを示す。規模は長径1.90m、短径1.62mで、検出面から底面までの深さは、約41cmを測る。埋土は礫を含む暗褐色土である。遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、陶器片が出土している。その内、磁器香炉が図示できた。SK20の形状や位置関係等から2基1対で使用された可能性が考えられる。

出土遺物 (図2-13 42)

42は口縁部で香炉あるいは火入れと考えられる。口縁端部は内側に折り込み、内面外面ともに施

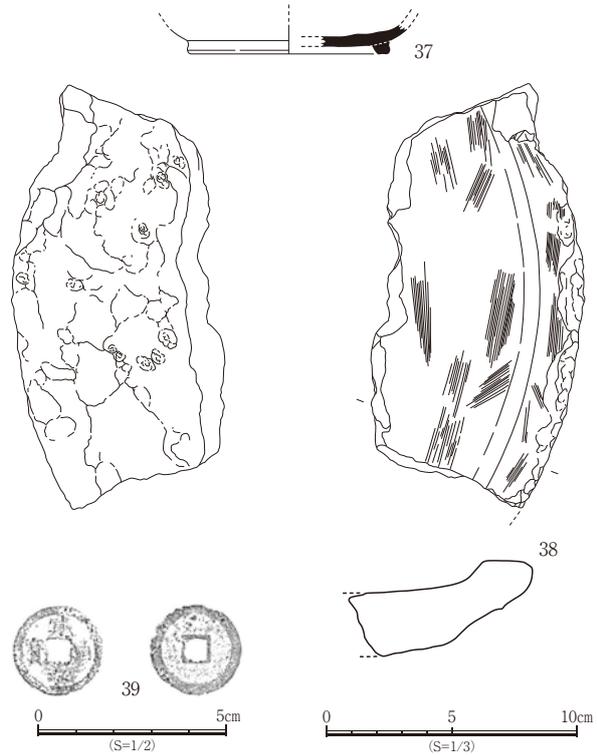


図2-11 V-1区SK1・2出土遺物実測図

釉がみられる。

SK9

調査区の北西部に位置する。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN - 88° - Eを示す。規模は径が2.00～2.10mで、検出面から底面までの深さは、概ね51cmを測る。埋土は灰色土と礫を含む黒褐色(10YR2/2)土である。遺物は弥生土器、須恵器片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK10 (図2 - 14)

調査区の中央部に位置し、上面のSX18の底面にて検出した。平面形は隅丸方形形状を呈し、主軸方向はN - 90°を示す。規模は長径2.30m、短径2.10mで検出面からの深さは約50cmを測る。埋土はハンダ土と礫が含まれる暗灰色シルトである。遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器片及び

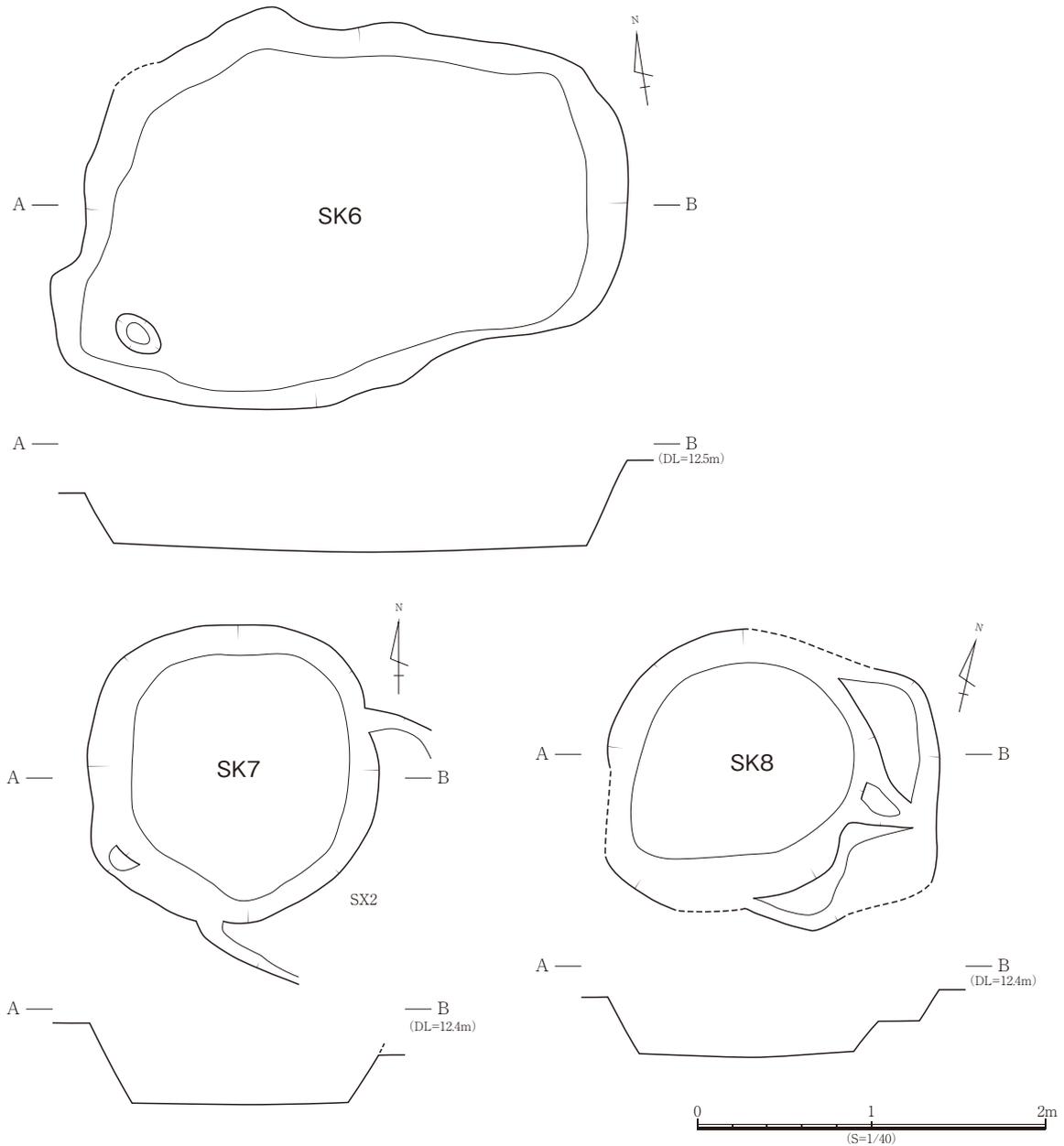


図2 - 12 V - 1区SK6～8

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (4) 土坑

金属製品が出土しており、その内須恵器壺・杯と染付皿が図示できた。

出土遺物 (図2-15 43~45)

43は須恵器壺の底部である。外面に高台を貼付し、高台外面にはナデ調整による段が生じる。内面はナデ調整で、外面の高台上にはヘラケズリがみられる。44は須恵器杯の底部である。外面には高台を貼付する。外面の高台上にはヘラケズリとナデ調整、内面にナデ調整がみられる。45は染付の皿である。内面の口縁下に圈線を施す。

SK11 (図2-16)

調査区の北東部に位置し、遺構の北部はSX24にきられ、東部は調査区外にのびると考えられる。平面形は隅丸長方形を呈すると推定される。主軸方向はN-80°-Eを示す。規模は長径2.00m以上、短径1.57mで、検出面から底面までの深さは約44cmを測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)砂質シルトで、遺構の西側壁際には灰白色の粘土塊がみられた。遺物は弥生土器、土師器、土師質土器片が出土しており、その内弥生土器甕、須恵器杯・蓋が図示できた。

出土遺物 (図2-17 46~48)

46は須恵器杯の底部である。外面は底部がヘラケズリとナデ調整で、内面にナデ調整を施す。47は須恵器蓋である。断面三角形のかえりが付く。外面は天井部の一部にヘラケズリと回転ナデ調整を施す。内面はナデ調整である。48は弥生土器甕の底部である。外面にはナデ調整、内面はヘラ状工具によるナデ調整がみられる。

SK12 (図2-18)

調査区の北部に位置し、上面をSX19にきられ、さらにSB1のP1とSA1のP5をきる。平面形は隅丸方形を呈すると推定される。規模は径が2.20mで、検出面から底面までの深さは約34cmを測る。埋土は灰色土が含まれる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は須恵器、土師質土器、陶磁器片が出土しており、その内陶器鉢が図示できた。

出土遺物 (図2-19 49)

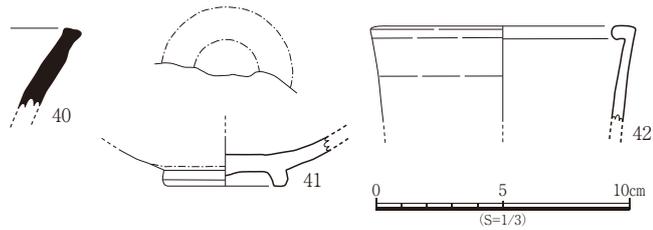


図2-13 V-1区SK6~8出土遺物実測図

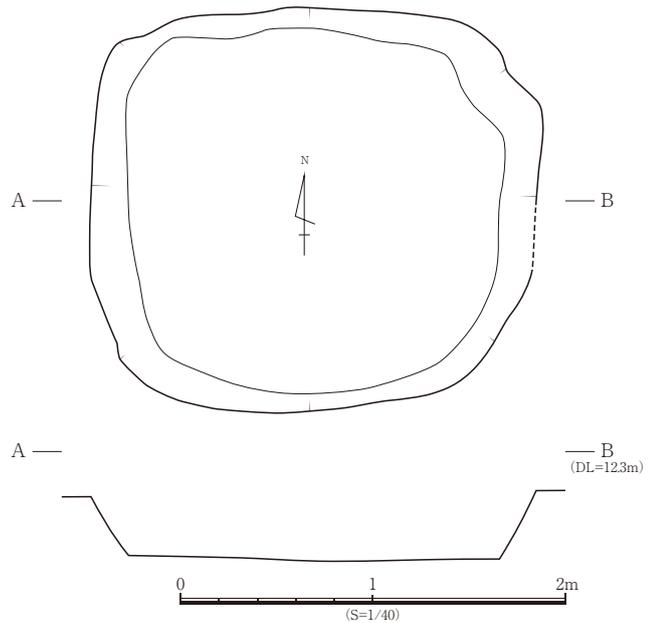


図2-14 V-1区SK10

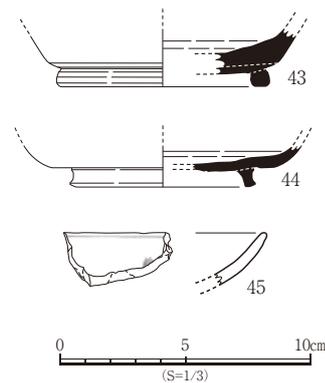


図2-15 V-1区SK10出土遺物実測図

49は陶器の鉢である。底部削り出し高台を呈し、高台側面は一部面取りを施す。外面は高台側面まで化粧土がかかる。内面にも化粧土を施す。底部内面には離れ砂の熔着がみられる。

SK13 (図2-18)

調査区の北西部に位置し、遺構の南側はSK15に接し、きる。平面形は楕円形状を呈すると推定され、主軸方向はN-75°-Eを示す。規模は長径2.09m、短径1.30m以上で、検出面から底面までの深さは約49cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色土である。遺物は弥生土器、土師質土器、陶磁器片及び金属製品(鉄釘)などが出土しており、その内須恵器杯と染付皿が図示できた。

出土遺物 (図2-19 50・51)

50は須恵器杯の底部である。外面には高台を貼付し、高台接合部はナデ調整を施す。外面と内面はナデ調整で、外面には自然釉がかかる。51は染付皿である。口縁端部に蒔釉を施し、外面には植物文、内面に植物文と圏線がみられる。高台畳付けを除いて、全面施釉である。

SK14 (図2-18)

調査区の北部中央壁際より検出した。遺構の北側は調査区外にのびる。平面形は円形から楕円形を呈すると推定される。規模は長径1.26m、短径は0.80m以上で、検出面から底面までの深さは約31cmを測る。埋土は黒褐色土と黒色土が含まれる暗灰色シルトである。遺物は弥生土器、土師質土器、陶磁器片が出土しており、その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-19 52)

52は土師質土器杯の底部である。外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。

SK16 (図2-20)

調査区の中央部に位置し、上面はSK17と18にきられる。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Wを示す。規模は長径3.40m、短径2.10mで、検出面から底面までの深さは約51cmを測る。埋土は礫を含む灰色土を含む黒褐色土である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK17 (図2-20)

調査区の中央部に位置し、SK16をきり、西側にはSK18が隣接する。平面形は円形を呈し、規模は

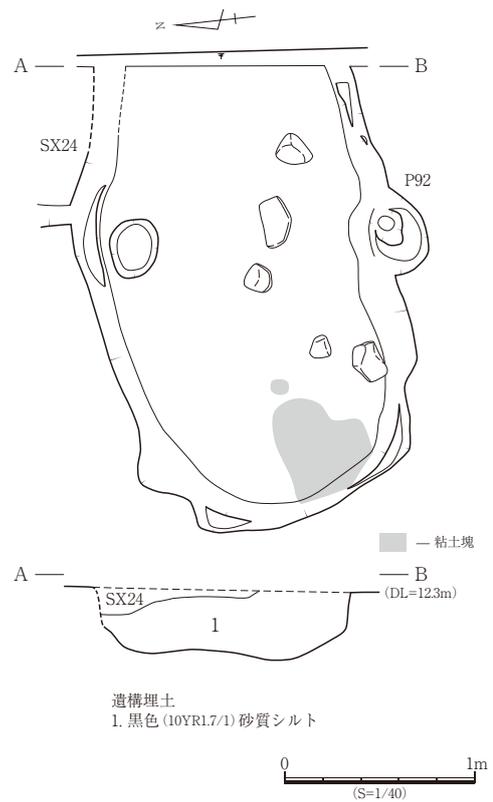


図2-16 V-1区SK11

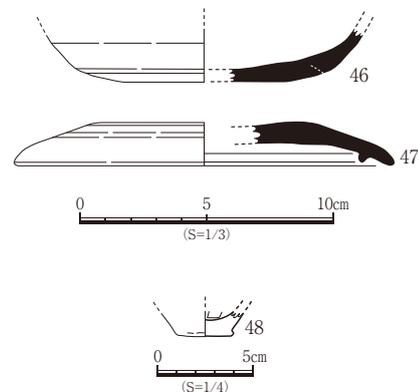


図2-17 V-1区SK11出土遺物実測図

2. V - 1 区の検出遺構と出土遺物 (4) 土坑

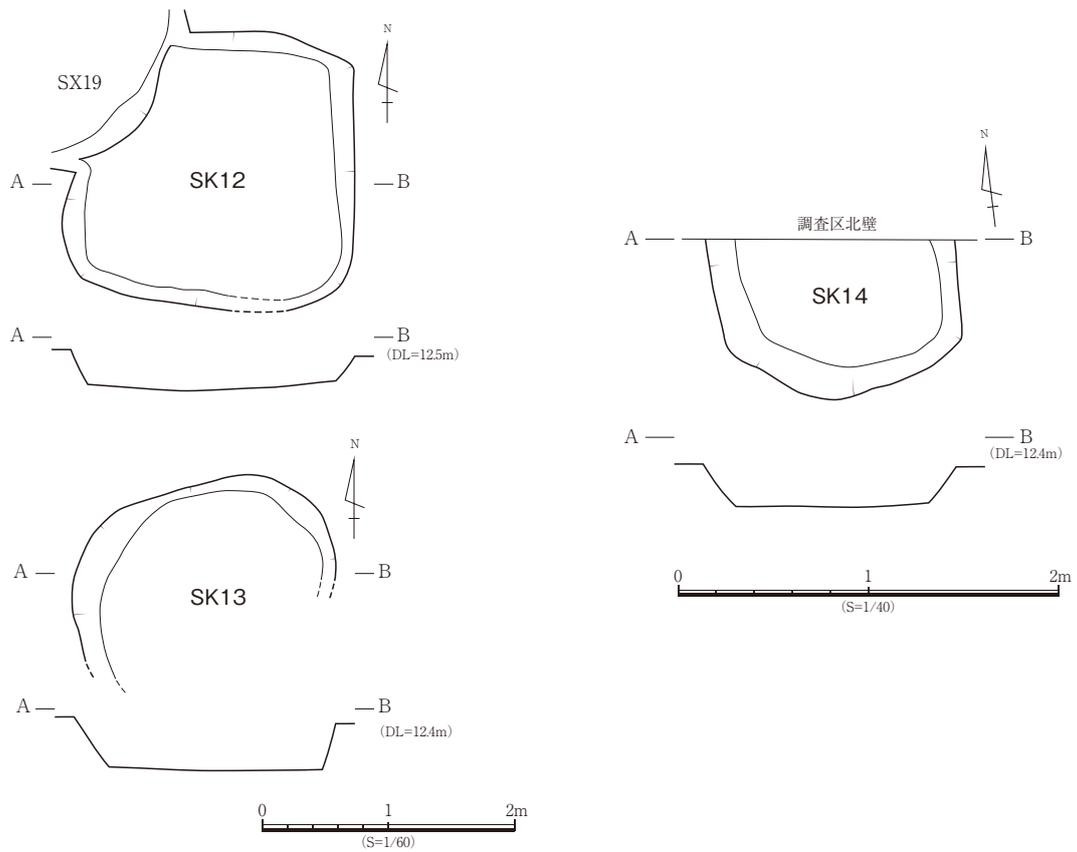


図2-18 SK12~14

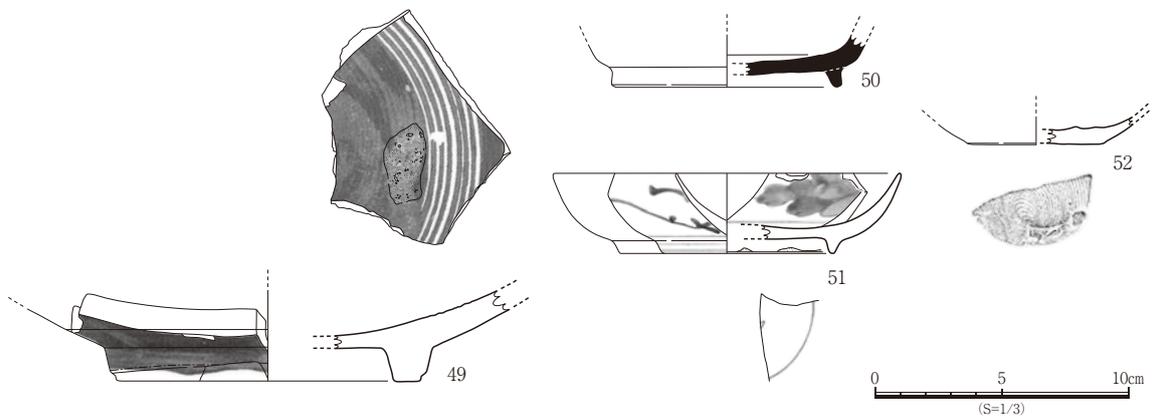


図2-19 V-1区SK12~14出土遺物実測図

径が1.40mで、検出面から底面までの深さは49cmを測る。遺構の周囲は10cm大の河原石が巡る。埋土は礫とハンダ土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は陶磁器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK18 (図2-20)

調査区の中央部に位置し、SK16をきり、東側にはSK17が隣接する。平面形は円形状を呈し、規模は径が1.20m前後で、検出面から底面までの深さは約24cmを測る。遺構の周囲はSK17と同様に10cm大の河原石が巡る。埋土は礫とハンダ土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は陶磁器が出

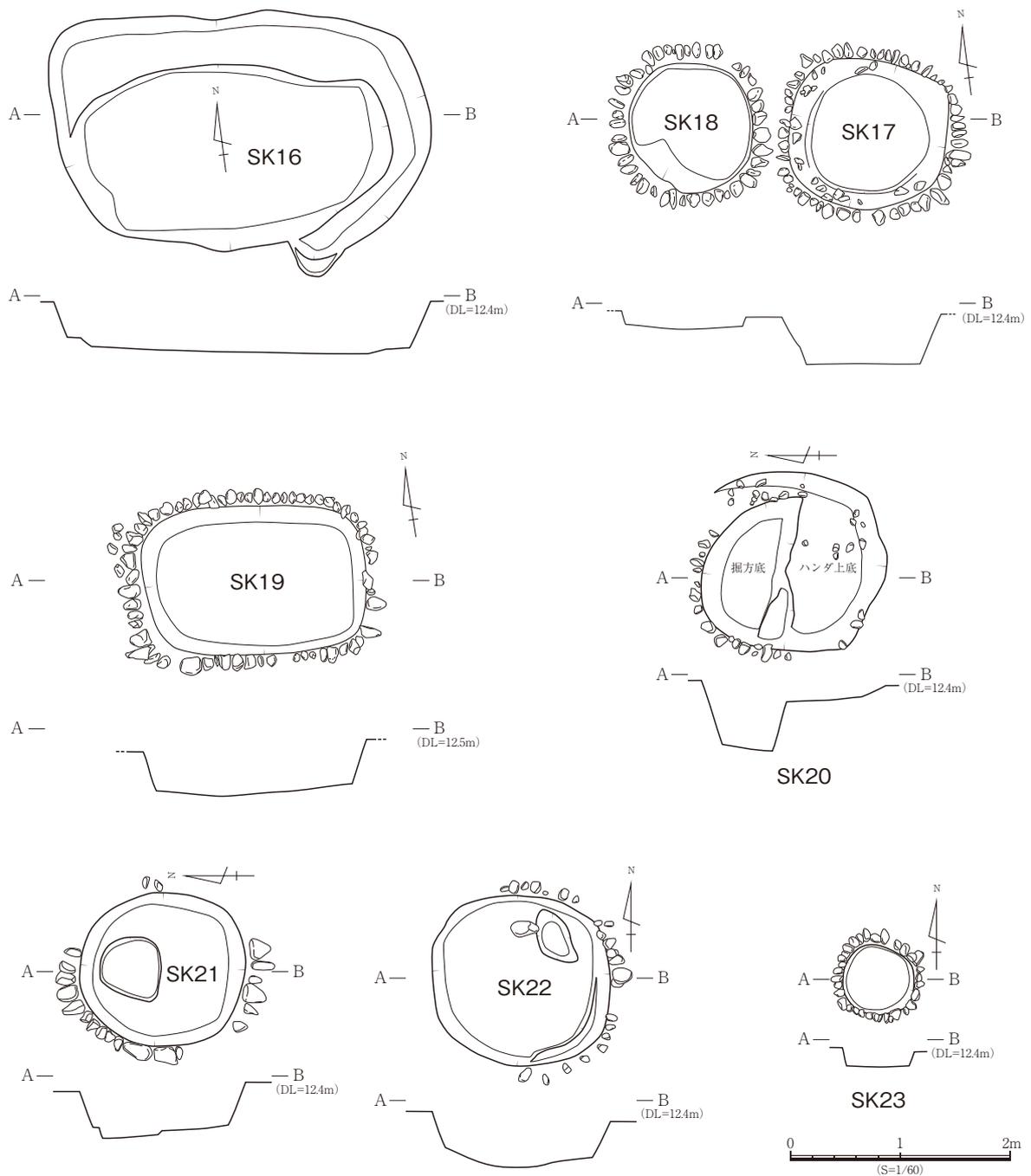


図2-20 V-1区SK16~23

土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK19 (図2-20)

調査区の中央部に位置し、SK6をきる。平面形は隅丸長形状を呈し、主軸方向はN-83°-Wを示す。規模は長径2.03m、短径1.36mで、検出面からの底面までの深さは約49cmを測る。遺構の周囲は10~15cm大の河原石が巡る。埋土は礫とハンダ土を含む暗褐色土である。遺物は、図示でき得るものはなかった。

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (4) 土坑

SK20 (図2-20)

調査区の中央部に位置し、遺構の南側はSK8に接する。平面形は円形状を呈し、規模は径が1.60mで検出面からの深さは66cmを測る。検出面から底面までの深さは、ハンダで固めた底面までは約20cm、ハンダ下の底面までは66cmを測る。遺構北側の周囲には5~10cm大の河原石が巡る。埋土は礫とハンダ土を含む暗褐色土である。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK21 (図2-20)

調査区の北部において検出し、遺構の西側はSK13に接する。また遺構の東隣にはSK22が位置する。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN-3°-Eを示す。規模は径が1.45m前後で、検出面から底面までの深さは約54cmを測る。遺構の西側半分には6~20cm大の河原石(礫)が巡る。埋土は礫とハンダ土を含む暗褐色土である。また、底面の中央部より北側に径0.48m前後の孔が掘られていた。遺物は陶磁器が出土しており、その内陶器鉢と磁器染付碗が図示できた。東側に位置するSK22も同様な形状を呈していることから、2基1対として使用されたものと考えられる。

出土遺物 (図2-21 53・54)

53は鉢の口縁部である。口縁端部は外側に折り曲げ肥厚させ、外面は刷毛目の波状文が施される。内面は刷毛目に横線が認められる。54は丸形碗の口縁部である。外面に植物の染付か。内面は無文である。肥前系磁器と考えられる。

SK22 (図2-20)

調査区の北部において検出し、遺構の西側にはSK21が位置する。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN-88°-Wを示す。規模は径が1.60m前後で、検出面から底面までの深さは約57cmを測る。遺構の東半分はSK21と同様に周囲に5~15cm大の河原石(礫・自然礫)が巡り、底面の中央部より北東部に長径0.57m、短径0.30mを測る孔が掘られていた。埋土は礫及びハンダ土を含む暗褐色土である。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK23 (図2-20)

調査区中央部において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が0.65m前後で、検出面から底面までの深さは約18cmを測る。周囲には10cm大の河原石(自然礫)が廻る。埋土は礫及びハンダ土を含む暗褐色土である。遺物は図示でき得るものはなかった。

(5) 溝跡

SD1 (図2-22)

調査区南部において検出した。東西方向の溝跡で、規模は確認延長が4.20m、幅0.46~0.58mで、検出面から底面までの深さは27cm前後を測る。埋土は5~10cm大の礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

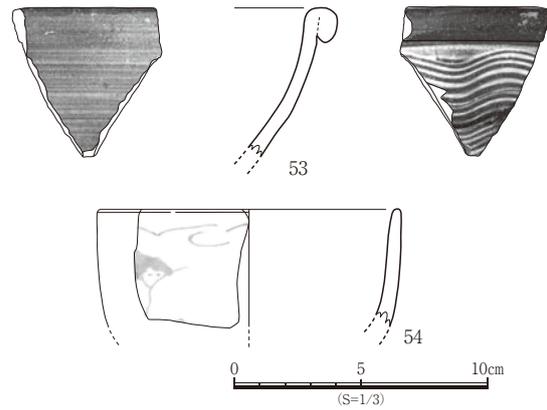


図2-21 V-1区SK21出土遺物実測図

SD2 (図2-22)

調査区の北東部において検出した。調査区隅を北西から南東方向にのび、調査区外に至る。東側に隣接する調査区V-2区のSD4に接続する。規模は確認延長が4.00m以上、幅0.54~0.72mで、検出面から底面までの深さは12.5~28cmを測る。遺構の東側になるほど深くなっている。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトが主体で、下層はにぶい黄褐色土を含む黒色(10YR1.7/1)砂質シルトである。遺物は弥生土器と土師器、須恵器、土師質土器が出土している。その内弥生土器壺と土師質土器椀が図示できた。

出土遺物 (図2-23 55・56)

55は弥生土器壺の底部である。平底で、底部外面にタタキ目が残る。外面は一部タタキ目残り、ナデ調整で内面にもナデ調整を施す。56は土師質土器椀の底部である。底部外面に高台を貼付する。外面と内面はともに摩耗しているため、調整は不明瞭である。

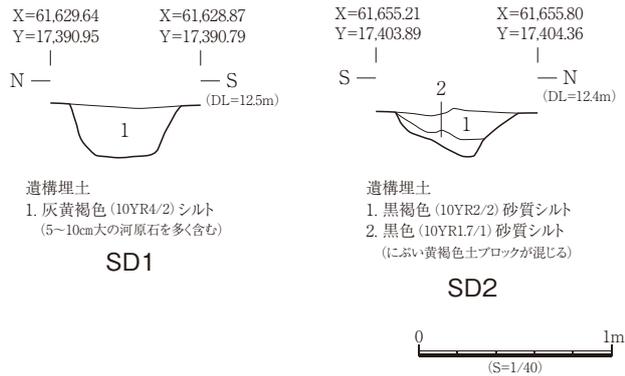


図2-22 V-1区SD1・2

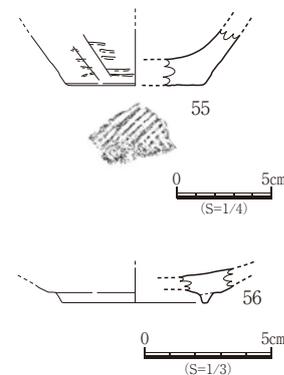


図2-23 V-1区SD2出土遺物実測図

(6) 柱穴

P1 (図2-24)

調査区南部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径0.87m、短径0.64mで掘方の南部はテラス状をなしている。検出面から底面までの深さは、約17cmを測る。埋土は礫を多く含む黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトである。遺物は弥生土器が出土しており、その内高杯が図示できた。

出土遺物 (図2-25 57)

57は弥生土器高杯の脚部である。孔径0.7cmの円孔が2箇所認められ、推定4箇所と考えられる。外面はタテ方向のハケ目調整で、裾部はナデ調整を施す。内面はヨコ方向のハケ目調整とナデ調整がみられる。

P15 (図2-24)

調査区南東隅において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が0.30m前後で検出面からの深さは18cmを測る。埋土は黒褐色土を含む黒色(10YR1.7/1)シルトである。遺物は土師器が出土しており、その内皿が図示できた。

出土遺物 (図2-25 58)

58は土師器の皿である。底部外面に粘土紐痕が残り、内面は口縁端部下に沈線がみられる。内面は摩耗するが一部ナデ調整を施す。外面も摩耗しており、一部ナデ調整がみられる。

P17 (図2-24)

調査区の南部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね0.30mで検出面から底面

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (6) 柱穴

までの深さは13cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は弥生土器甕が出土している。

出土遺物 (図2-25 59)

59は弥生土器甕の口縁部である。口縁部は外反し、外面は口縁端部にナデ調整、頸部にかけてタテ方向のハケ目調整を施す。内面はヨコ方向のハケ目調整と指頭圧痕がみられる。

P18 (図2-24)

調査区南部において検出した。SK1の北西に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径が0.34mで、

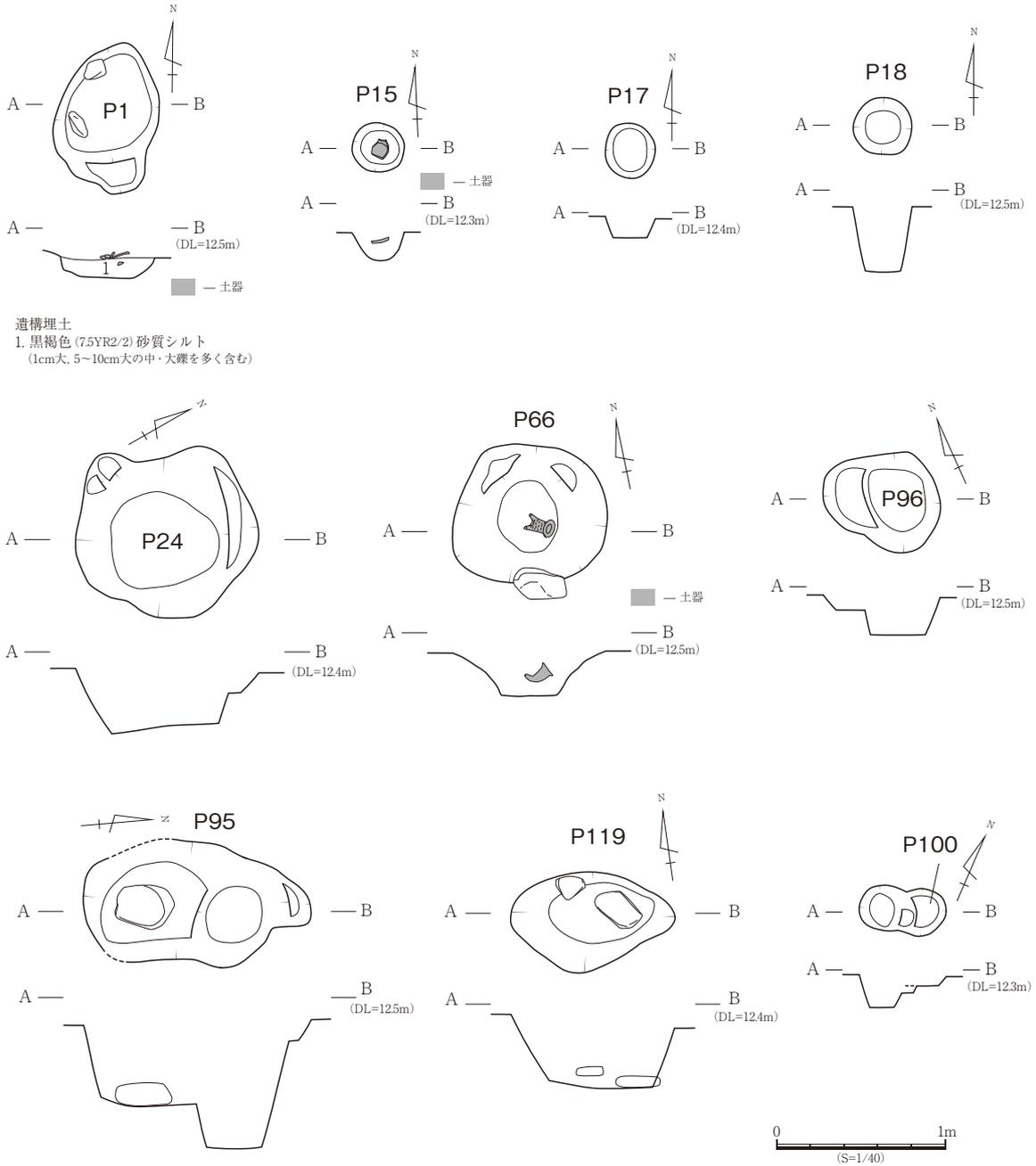


図2-24 V-1区P1・15・17・18・24・66・95・96・100・119

検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器片と須恵器甕の体部片が出土している。

P24 (図2-24)

調査区中央部において検出した。SK23の東側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、軸方向はN-30°-Eを示す。規模は径が概ね1.0mで、検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR3/2)砂質シルトである。遺物は土師器、須恵器、土師質土器が出土しており、その内土師器皿と須恵器甕が図示できた。

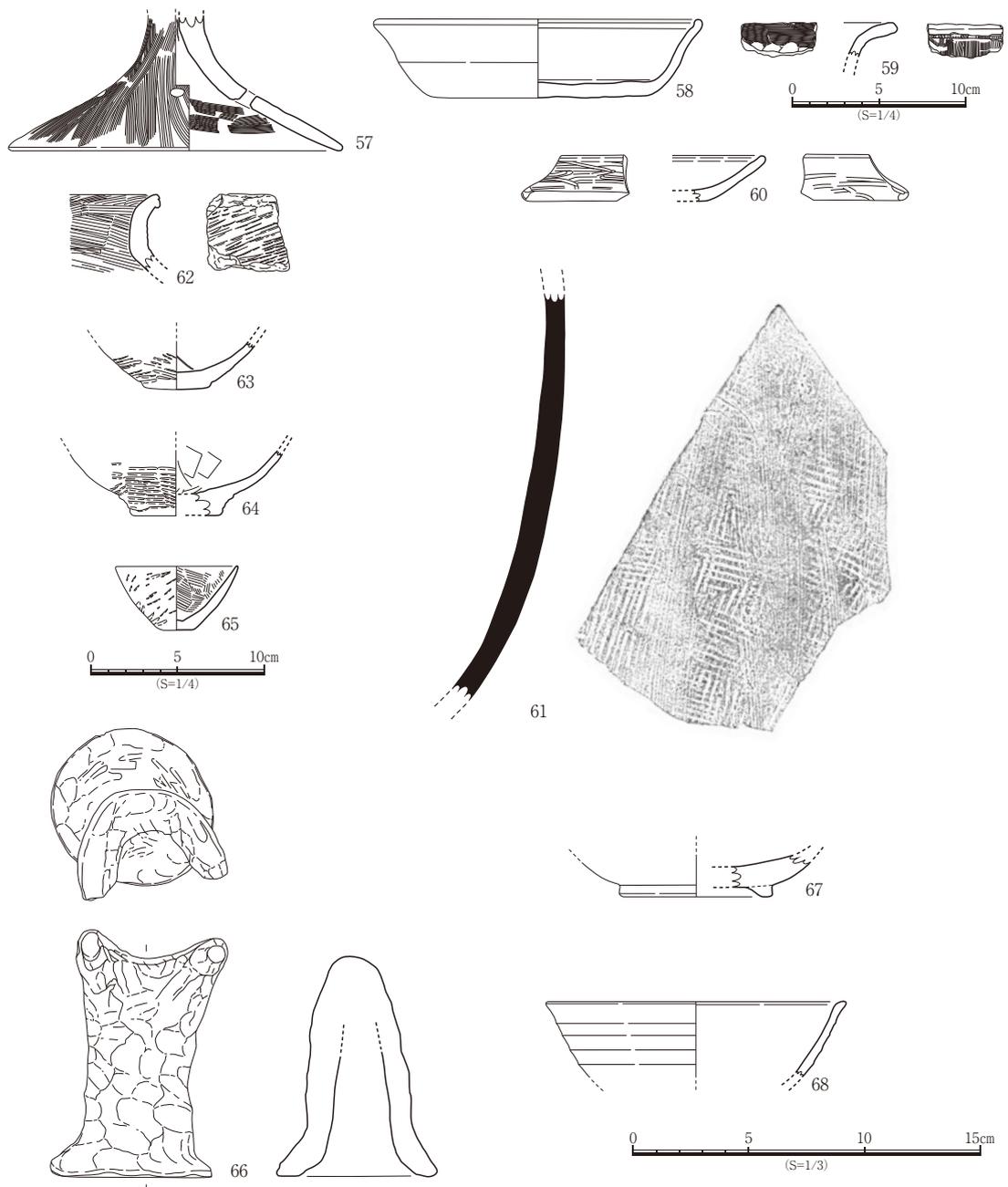


図2-25 V-1区P1・15・17・24・66・96出土遺物実測図

2. V - 1 区の検出遺構と出土遺物 (6) 柱穴

出土遺物 (図 2 - 25 60・61)

60 は土師器皿の口縁部である。内面口縁部下には浅い凹みがみられ、外面はナデ調整とヘラミガキを施す。内面はナデ調整とヘラミガキを施し、口縁端部と外面にはススの付着がみられる。61 は須恵器甕の体部である。外面はヨコ方向とタテ方向のタタキ目が残し、タタキ目の上からハケ状工具によるナデ調整を施す。内面は同心円状のタタキ目が薄く残り、ナデ調整を施す。

P66 (図 2 - 24)

調査区中央部において検出した。SK19 の北東に位置する。平面形は円形状を呈し、軸方向は N - 70° - W を示す。規模は径が 0.85 m 前後で、検出面から底面までの深さは 29 cm を測る。埋土は黒褐色と黒色土を含む暗灰色シルトである。遺物は弥生土器等が出土しており、その内弥生土器甕と鉢、土製品支脚が図示できた。

出土遺物 (図 2 - 2 62 ~ 66)

62 は弥生土器甕の口縁部である。外面は口縁端部下までタタキ目残り、口縁端部には指頭圧痕がみられる。内面はヨコ方向のハケ目調整を施す。63・64 は弥生土器甕の底部である。63 は平底で、外面はタタキ目残り。底部外面にはナデ調整を施す。内面はナデ調整と一部ヘラ状工具によるナデ調整がみられる。64 も底部は平底で、外面にはタタキ目残り、ナデ調整を施す。底部外面はナデ調整である。内面はヘラ状工具によるナデ調整がみられる。65 は小型の鉢である。底部は平底で、外面にタタキ目残り、ナデ調整を施す。底部外面もナデ調整である。内面はヨコ方向のハケ目調整と内面底部に指頭圧痕がみられる。66 は土製品の支脚である。手づくね成形で、中空を呈する。外面は指頭圧痕が顕著である。

P95 (図 2 - 24)

調査区中央部において検出した。SA1 を構成する P2 の南側に接する。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径が 0.74 m 以上、短径 0.70 m で、検出面から底面までの深さは 51 cm を測る。遺構の底面には長辺約 30 cm、短辺 24 cm を測る根石と考えられる長方形の石を検出した。埋土は礫を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

P96 (図 2 - 24)

調査区の北西部において検出した。平面形は楕円形状で、規模は長軸が 0.69 m、短軸は 0.57 m を測る。掘方は段状を呈し、検出面からの底面までの深さは 22 cm である。埋土は黒褐色 (10YR2/2) シルトで、遺物は土師質土器碗が出土している。

出土遺物 (図 2 - 25 67)

67 は土師質土器碗の底部である。底部外面に輪高台を貼付する。外面と内面はともに摩耗するため、調整は不明瞭である。

P100 (図 2 - 24)

調査区の東部中央において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が 0.28 m で、検出面から底面までの深さは約 10 cm を測る。埋土は礫を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。埋土中からは土師質土器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図 2 - 25 68)

68 は杯あるいは碗である。外面は回転ナデによる段が生じる。内面は回転ナデ調整が施される。

P119 (図2-24)

調査区の北部隅において検出した。SK21の北側に位置する。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径が0.97m、短径0.60mで、検出面から底面までの深さは約45cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺構の底面からは長辺28cm、短辺16cmを測る根石と考えられる長方形の礫を検出した。遺物は、図示でき得るものはなかった。

(7) 性格不明遺構

SX1 (図2-26)

調査区の南部西側において検出した。平面形は隅丸方形状を呈し、規模は径が1.10mで、検出面から底面までの深さは約44cmを測る。遺構の周囲には10~15cm大の自然礫が廻り、また側面も同様な自然礫を6段積み上げて固めている。埋土は礫を多く含む灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトである。遺物は埋土の中程から土師質土器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図2-27 69)

69は土師質土器の杯である。底部外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整を施す。内面は一部摩耗しており、外面にはススの付着がみられる。

SX4 (図2-28)

調査区の南東部において検出した。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸1.59mで検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は河原石を多く含む暗灰色土である。遺物は陶磁器が出土しており、その内陶器鉢が図示できた。

出土遺物 (図2-29 70)

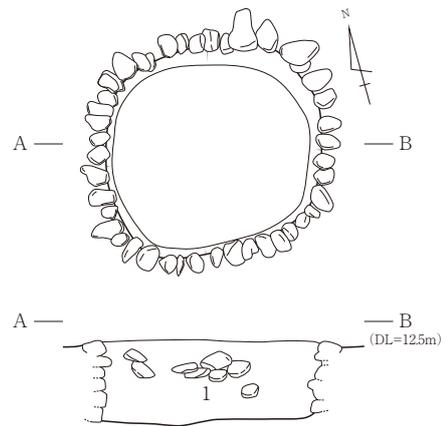
70は口縁部は外側に肥厚し、端部は平坦面を呈する。外面は刷毛目による化粧土がかかり、内面は刷毛目による横線を施す。

SX13 (図2-28)

調査区の中央東部において検出した。平面形は不整形を呈し、南北は3.08m、東西2.30mで、検出面から底面までの深さは58cmを測る。埋土は黒褐色と黒色土及び円礫を多く含む暗褐色土である。遺物は土師質土器、陶磁器、瓦が出土しており、その内焙烙と播鉢、軒平瓦が図示できた。

出土遺物 (図2-29 71~73)

71は焙烙の口縁部である。口縁端部にかけて器壁が厚くなり、外面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。内面はナデ調整で口縁部近くに工具痕が認められる。外面は全面にススが付着している。72は播鉢である。口縁部は上下に拡張肥厚し、外面に2条の沈線がみられる。外面は回転ナデ調整で、内面に12条の播目を1単位として、放射線状に播目が配置されている。口縁部内面はナデ調整である。



遺構埋土
1. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
(15cm大の河原石を含み、地山礫を粒状に含む)

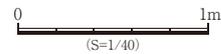


図2-26 V-1区SX1

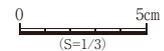
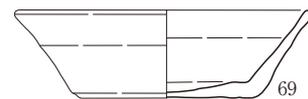


図2-27 V-1区SX1出土遺物実測図

2. V - 1 区の検出遺構と出土遺物 (7) 性格不明遺構

73は軒平瓦の瓦当である。瓦当中央に花文、周囲に唐草文を配する。凹面・凸面ともにナデ調整で、左側に「アカ」の刻印がみられる。

SX17 (図2-28)

調査区の中央東部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は1.69m、短軸1.30mで、検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土は黒褐色と黒色土及び円礫を多く含む暗灰色土である。埋土中からは陶磁器が出土しており、その内磁器香炉が図示できた。

出土遺物 (図2-29 74)

74は筒形を呈し、高台は輪高台と考えられる。高台脇に三足の一部が残る。内面は無文である。

SX18 (図2-30)

調査区中央部北寄りに位置し、SK10をきる。平面形は不整長方形を呈し、長径は5.39m、短径3.49mで、検出面から底面までの深さは35cmを測る。遺構の北西部から北部には10~40cm大の礫が

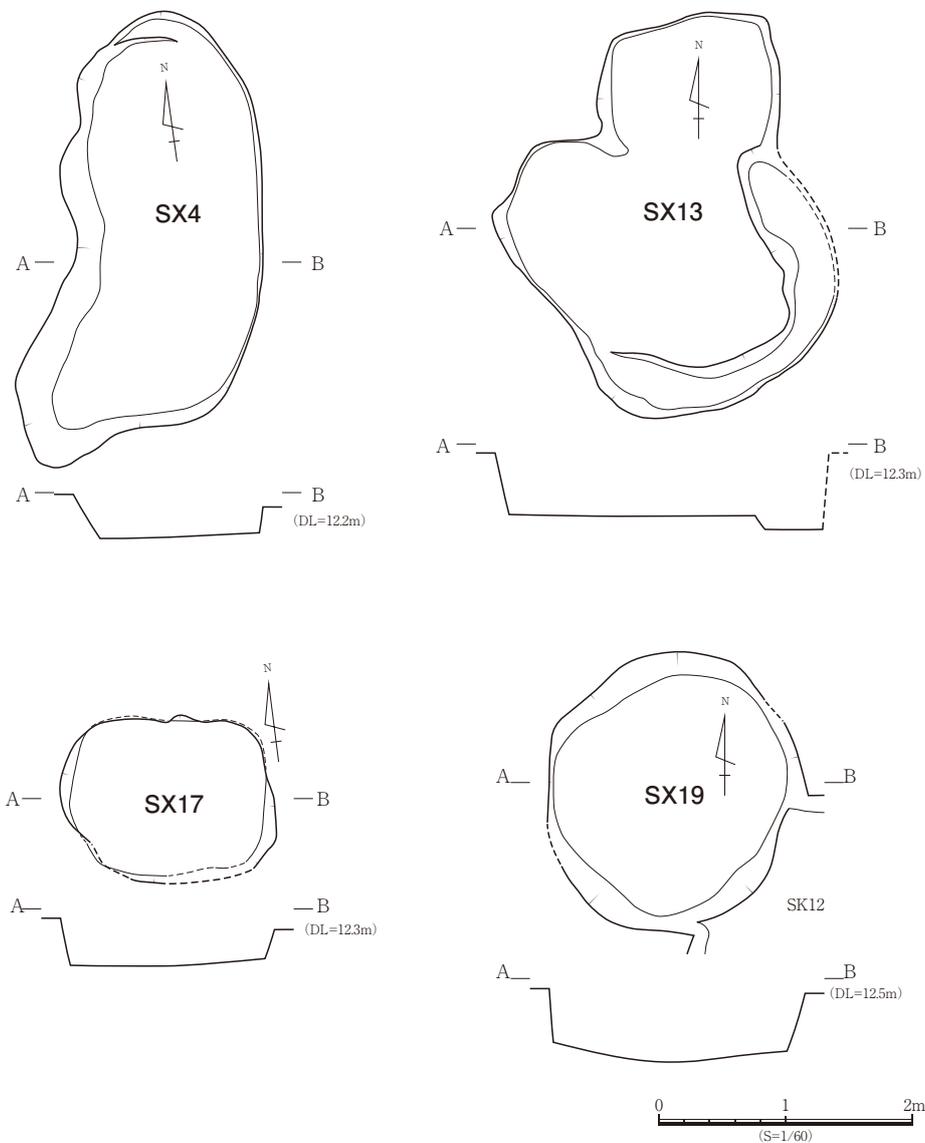


図2-28 V-1区SX4・13・17・19

並ぶ。埋土は黒褐色土と黒色土及び礫を含む暗灰色土である。遺物は瓦質土器が出土しており、そのうち火鉢が図示できた。

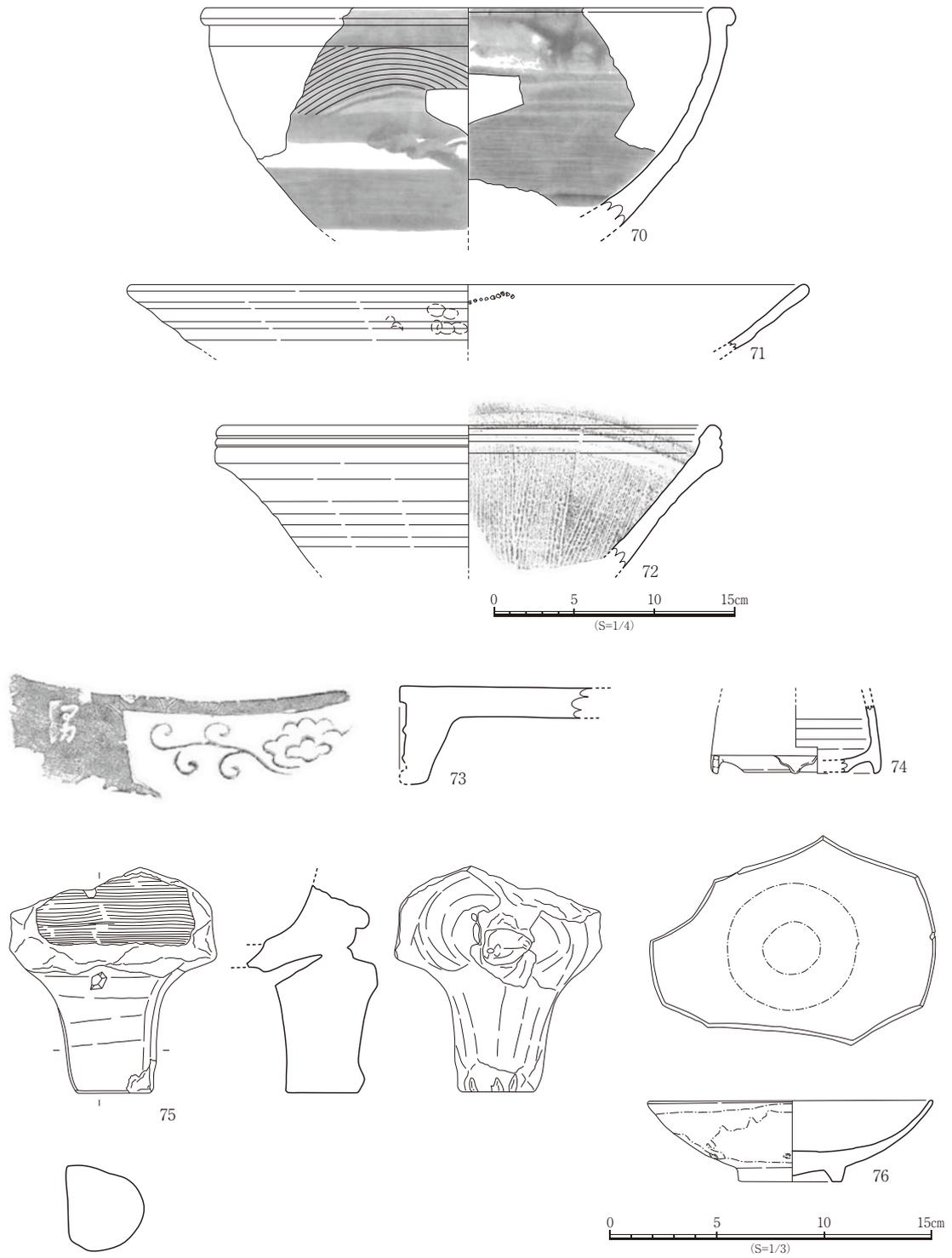


図2-29 V-1区SX4・13・17~19出土遺物実測図

2. V - 1 区の検出遺構と出土遺物 (7) 性格不明遺構

出土遺物 (図 2 - 29 75)

75 は火鉢の脚部と考えられる。獣足の一部か。外面はナデ調整で爪に当たる部位はヘラ状の工具等で刺突を施す。内面はハケ状工具によるナデ調整と指頭圧痕が顕著である。内面から穿孔を施している。

SX19 (図 2 - 28)

調査区北西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、遺構の南東部に接するSK12をきる。規模は長軸 2.22m, 短軸 2.00m で検出面から底面までの深さは 60 cm を測る。埋土は黒褐色土と黒色土及び礫を含む暗灰色土である。遺物は陶磁器が出土しており、その内陶器皿が図示できた。

出土遺物 (図 2 - 29 76)

底部は削り出し高台で、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台は露胎で、内面に銅緑釉を施し、外面の一部に化粧土がかかる。

SX25 (図 2 - 30)

調査区の南東部において検出した。平面形は不整形で、遺構の北側はSX13にきられる。確認長は南北 0.85m 以上, 東西 0.73m 以上と考えられる。検出面から底面までの深さは約 40 cm である。埋土は黒褐色土と黒色土を含む暗灰色である。遺物は陶磁器が出土しており、その内陶器皿と播鉢が図示できた。

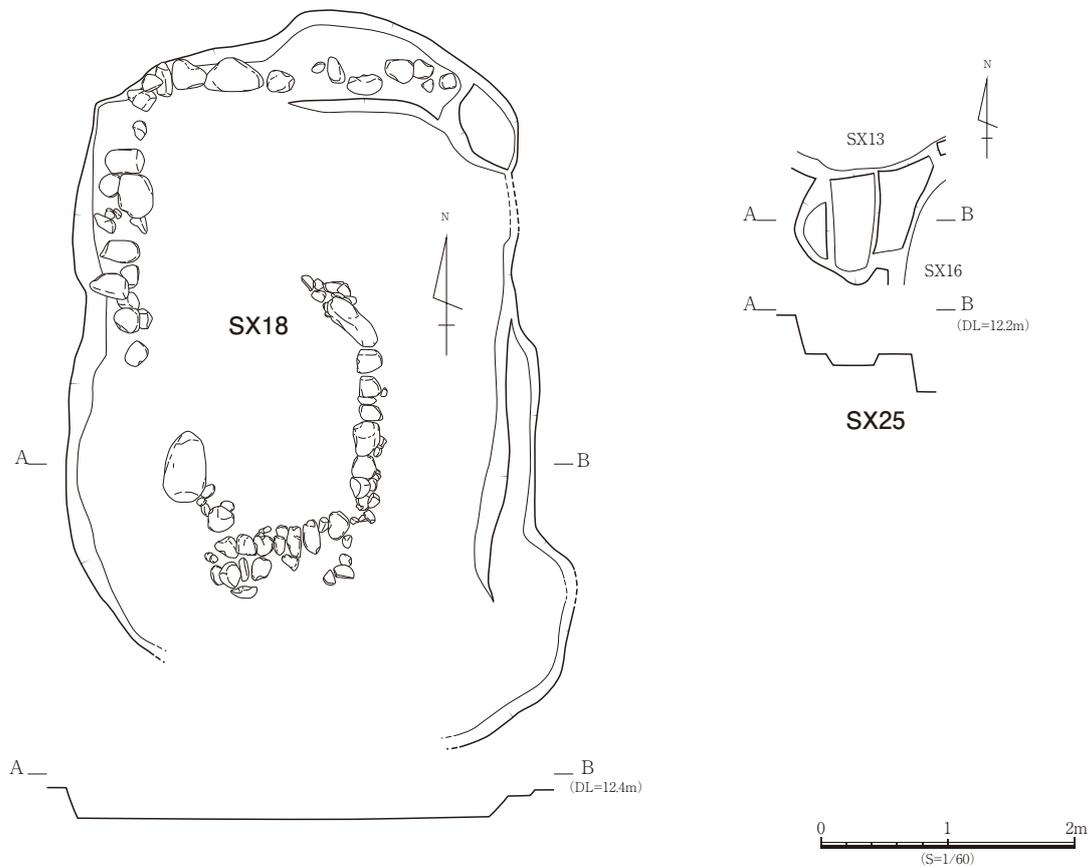
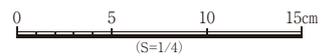
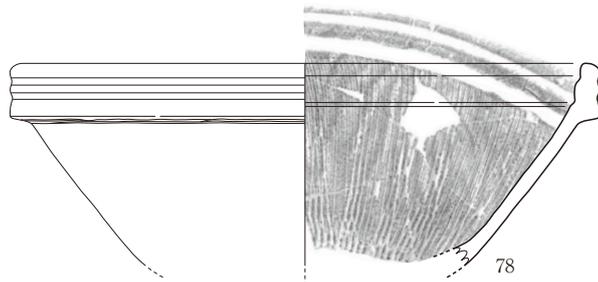
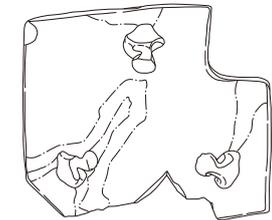
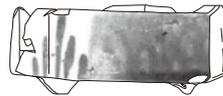
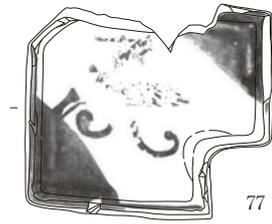


図 2 - 30 V - 1 区 SX18・25

出土遺物 (図2-31 77・78)

77は向付である。型作りで、底部外面の3箇所を高台を貼付する。78は播鉢である。口縁部は外側に拡張、肥厚し2条の沈線が巡り、ナデ調整を施す。内面は口縁端部下半に1条の沈線、体部全面に播目が認められる。播目の上端にはナデ調整を施す。



(8) 遺構外出土遺物

① 包含層出土遺物 (図2-32 79~85)

79は弥生土器の甕である。口縁部は緩やかに外反する。外面は指頭圧痕、体部はナデ調整で、内面にハケ目調整、指頭圧痕、ナデ調整が施される。80は須恵器甕である。口縁部端部はナデ調整により浅い凹面を呈す。外面はナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、頸部下に青海波文のタタキ目がみられる。81は白磁碗の底部である。断面方形の高台をもつ。82は紅皿で、肥前系磁器と考えられる。貝殻状の型押し成形で、内面は施釉し、外面は口縁部下から無釉である。83は青花の口縁部である。端反りを呈し、外面は口縁部端部に圈線文と内面にも圈線文が施される。84は皿である。肥前系磁器と考えられ、底部は削り出し高台。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、線描きの文様がみられる。85は陶器の花入か。外面・内面は施釉し、内面にはロクロ目が残る。外面には4箇所脚を貼り付けか。外面に梅花の文様が施される。

図2-31 V-1区SX25出土遺物実測図

② 表採遺物 (図2-33 86~99)

86は土師質土器の焙烙である。型押し成形と考えられ、上半部はナデ調整、下半部には指頭圧痕がみられる。87は瓦質土器焜炉と考えられる。口縁部は内傾斜し、端部は丸くおさめる。外面はヘラケズリとナデ調整が施され、内面は口縁下にヘラ状工具の圧痕とナデ調整がみられる。内面には粘土紐接合痕が残る。88は青磁皿の底部である。肥前系磁器の中皿と考えられる。底部外面は蛇ノ目凹形高台を呈し、内面に陰刻文、外面は無文である。89は染付丸形碗である。底部は削り出し高台を呈し、

2. V-1区の検出遺構と出土遺物 (8) 遺構外出土遺物

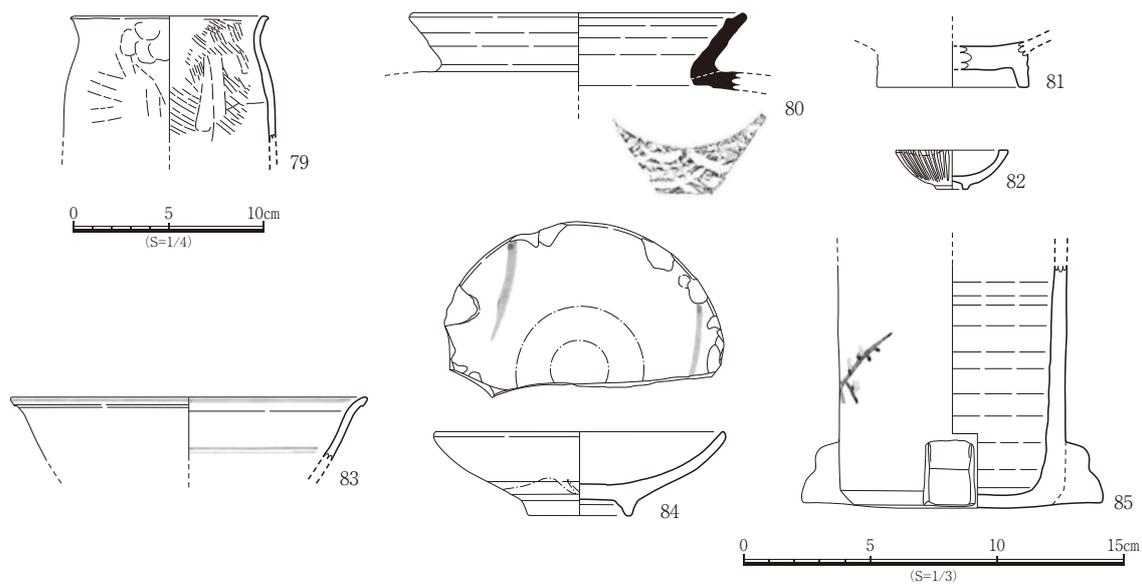


図2-32 V-1区包含層出土遺物実測図

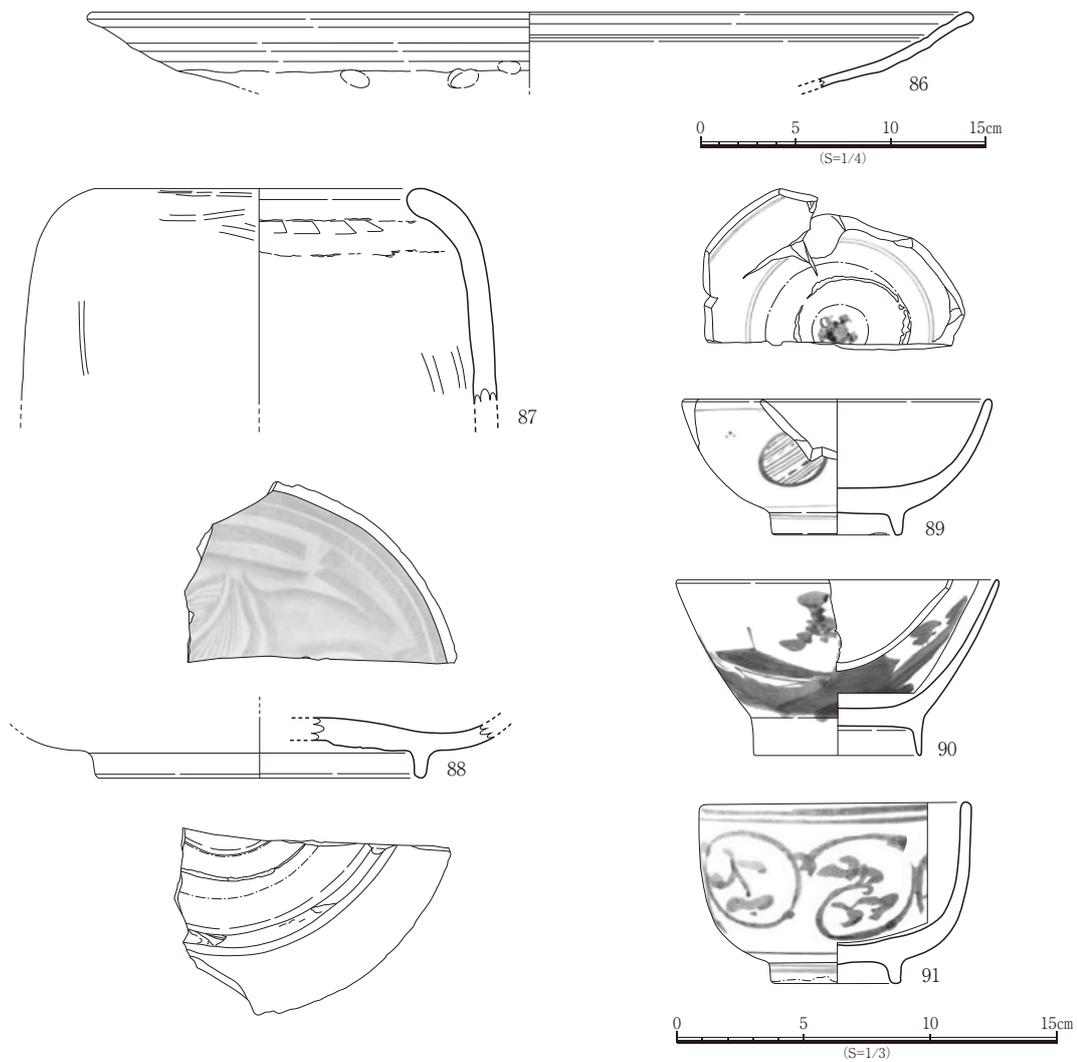


図2-33 V-1区表採遺物実測図1

内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、内面の釉ハギ部分に砂が付着している。見込みにはコンニャク印判が施される。外面には圏線文と丸文がみられる。90は染付広東形碗である。底部は削り出し高台を呈し、高台畳付けは露胎である。外面に船、楼閣、山、内面見込みには2箇所が目跡がみられる。91は肥前系磁器の丸形碗と考えられる。外面は口縁部に二重の圏線と線描きの文様か。内面は無文で、高台

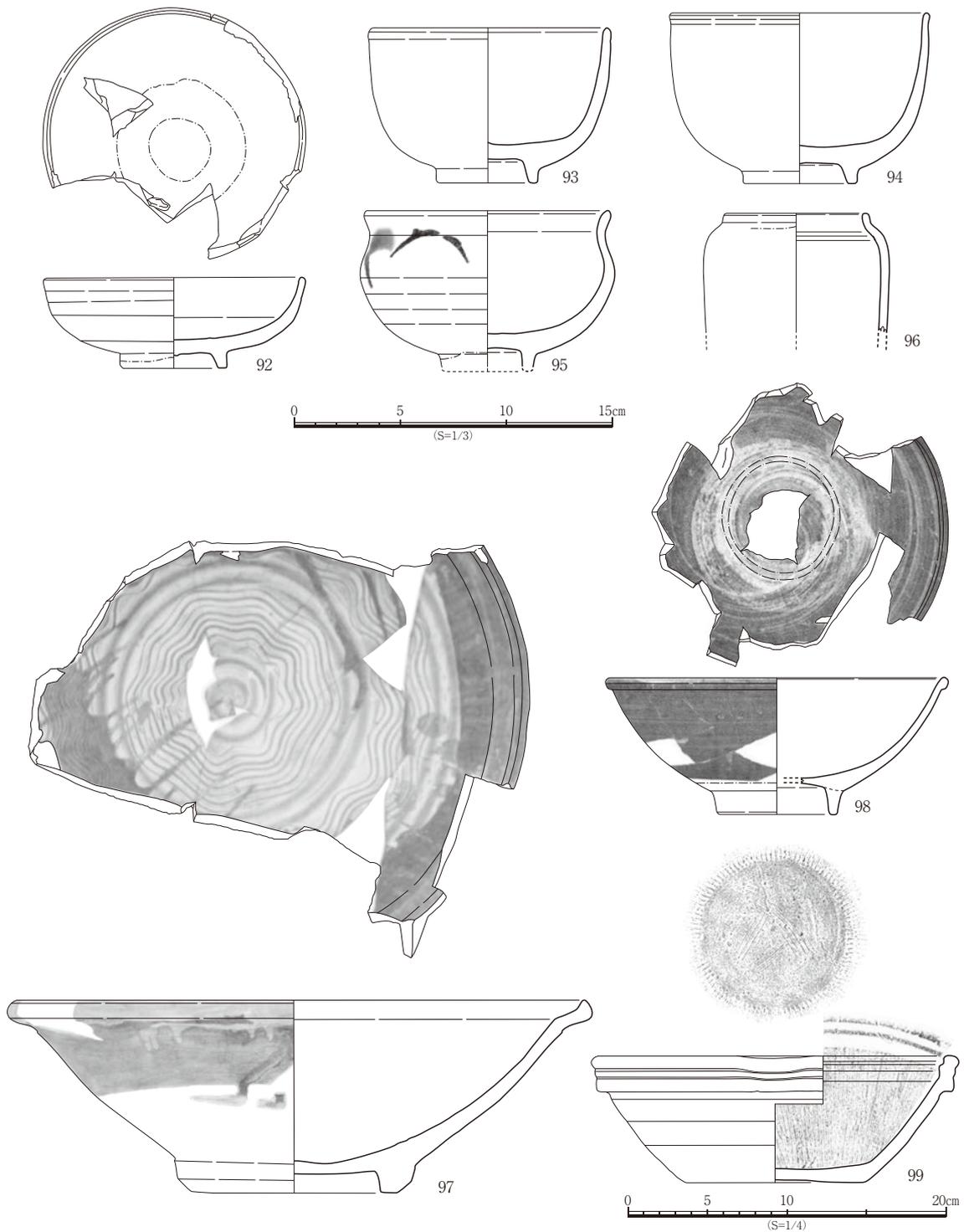


図2-34 V-1区表採遺物実測図2

3. V - 2 区の調査の概要と基本層序

畳付けは露胎である。92は陶器皿である。底部は削り出し高台を呈し、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎを施し、外面高台脇まで褐釉が認められる。93は陶器丸形碗である。底部削り出し高台を呈し、高台畳付けは露胎でそれ以外は施釉がみられる。94も陶器丸形碗である。底部削り出し高台を呈し、畳付けは露胎し、それ以外は全面施釉である。95は陶器の香炉あるいは火入れである。底部は削り出し高台を呈し、外面は口縁部に葉状の文様が施される。内面は無文で、高台畳付け以外は施釉する。96は陶器壺あるいは火入れである。口縁部外面と内面は露胎し、ナデ調整が施される。97は陶器の鉢である。底部削り出し高台で高台側面は面取りを施す。外面は口縁部に褐釉を施し、その他は露胎。内面は白化粧土を施し、刷毛目による波状文が施される。98も陶器鉢である。口縁部は肥厚させる。内面と外面には化粧土がかかり、刷毛目文様が施される。99は播鉢である。口縁部は上下に拡張、肥厚し外面に2条の沈線と内面に1条の沈線がみられる。外面は回転ヘラケズリとナデ調整である。内面は、全面に播目と内面底部中央には播目による印が施される。口縁部内面はナデ調整がみられる。

3. V - 2 区の調査の概要と基本層序

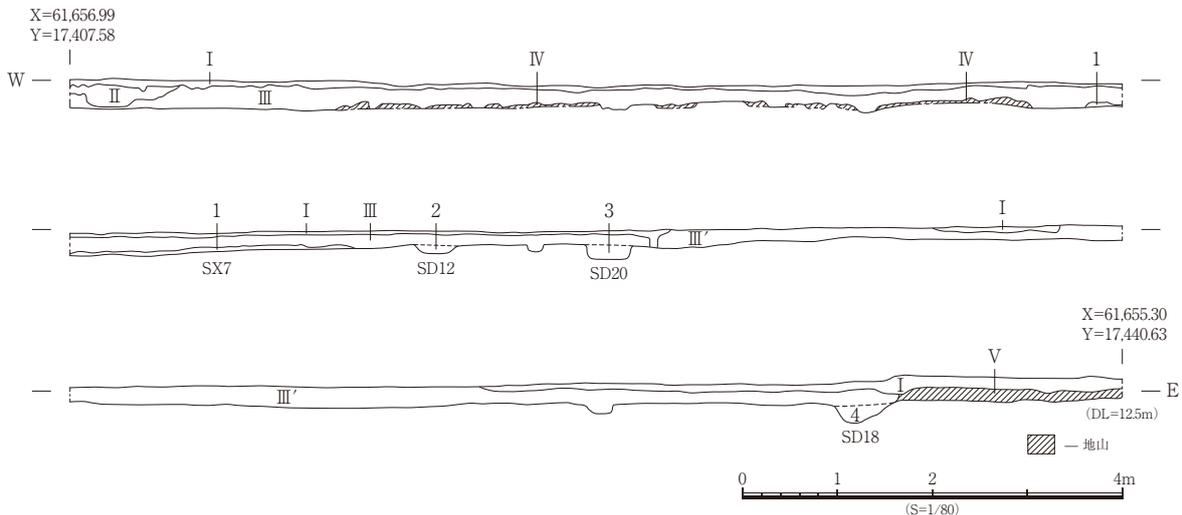
本調査区はV - 1 区の東側に位置する調査区で、平成 29 年度に調査を実施した。調査面積は 1,380 m² である。遺構は竪穴建物跡 3 軒、掘立柱建物跡 4 棟、土坑 22 基、溝跡 22 条、柱穴 803 個、性格不明遺構 13 基が検出されている。

基本層序は以下のとおりである。

調査区北壁

第 I 層 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト層(耕作土)

第 II 層 黒褐色(10YR2/2)細砂混じりシルト層(耕作土(I層)が混じる)



層位

- 第 I 層 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト層 (耕作土)
- 第 II 層 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト層 (耕作土 (I 層) が混じる)
- 第 III 層 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト層
(褐色 (10YR4/4) 土が若干混じり、土器細片を含む)
- 第 III 層 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト層
(暗褐色 (10YR3/3) 土が混じり、3cm 大、5cm 大の中礫を多く含む)
- 第 IV 層 暗褐色 (10YR3/4) シルト層 (地山)
- 第 V 層 暗褐色 (10YR3/4) シルト層 (3~5cm 大、20cm 大の中・大礫を含む; 地山)

遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR2/2) シルト
(0.5~1cm 大、2~5cm 大の中礫を含み、土器片を少量含む: SX7)
2. 黒褐色 (10YR2/3) 細砂混じりシルト
(黄褐色 (10YR5/6) 土がブロック状に混じる: SD12)
3. 黒褐色 (10YR2/3) シルト (1cm 大、3~5cm 大の中礫を含む: SD20)
4. 黒褐色 (10YR3/2) シルト
(1~2cm 大、5cm 大、10~20cm 大の中・大礫を多く含む: SD18)

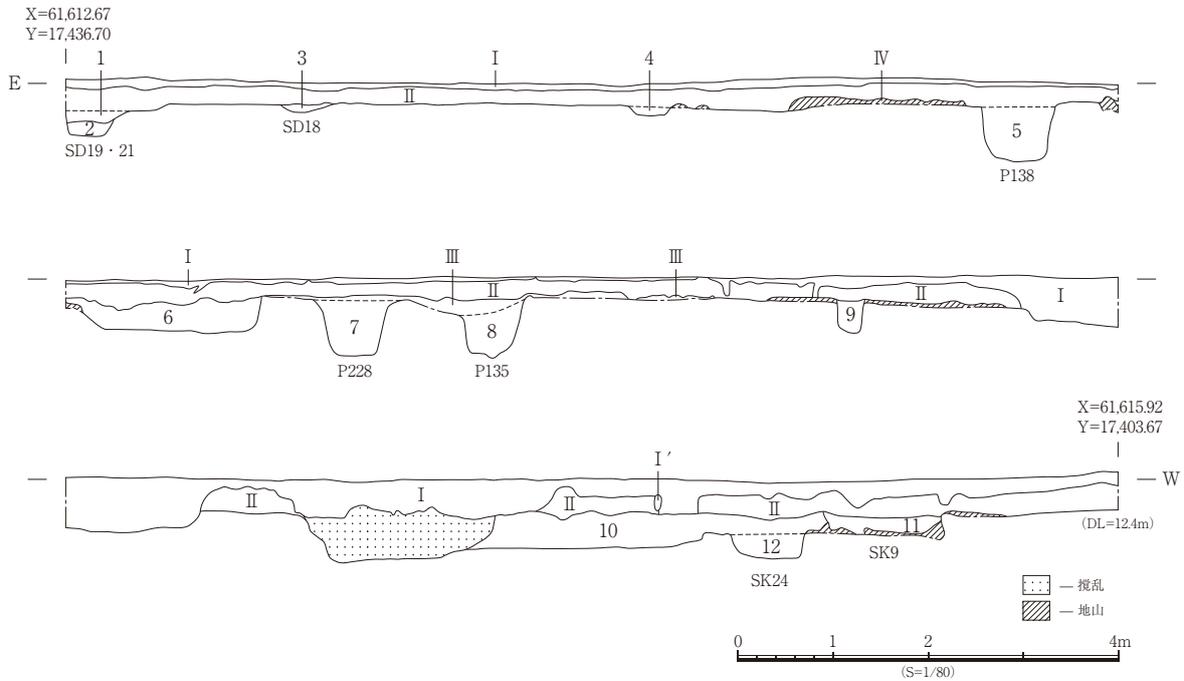
図 2 - 35 V - 2 区調査区北壁セクション図

- 第III層 黒褐色(10YR2/2)細砂混じりシルト層(褐色(10YR4/4)土が若干混じり, 土器細片を含む)
- 第III層 黒褐色(10YR2/2)細砂混じりシルト層(暗褐色(10YR3/3)土が混じり, 3cm大, 5cm大の中礫を多く含む)
- 第IV層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(地山)
- 第V層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(3~5cm大, 20cm大の中・大礫を含む: 地山)

調査区南壁

- 第I層 褐灰色(10YR4/1)粘質土層(0.5~1cm大, 5cm大の中礫を含む: 耕作土)
- 第I'層 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土層
- 第II層 黒色(10YR2/1)シルト層(土器細片及び0.5~1cm大の中礫を含み, 一部耕作土が混じる)
- 第III層 黒色(10YR1.7/1)シルト層(暗褐色(10YR3/3)粘質土ブロックが少量混じり, 土器細片及び0.5cm大, 若干の5cm大の中礫を含む)
- 第IV層 褐色(10YR4/4)シルト層(地山)

4. V-2区の検出遺構と出土遺物



- 層位
- 第I層 褐灰色(10YR4/1)粘質土層(0.5~1cm大, 5cm大の中礫を含む: 耕作土)
 - 第I'層 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土層
 - 第II層 黒色(10YR2/1)シルト層
(土器細片及び0.5~1cm大の中礫を含み, 一部耕作土が混じる)
 - 第III層 黒色(10YR1.7/1)シルト層(暗褐色(10YR3/3)粘質土ブロックが少量混じり, 土器細片及び0.5cm大, 若干の5cm大の中礫を含む)
 - 第IV層 褐色(10YR4/4)シルト層(地山)

- 遺構埋土
- 1. 黒褐色(10YR2/3)シルト(1~3cm大の中礫を含む: SD19)
 - 2. 黒色(10YR2/1)シルト(0.5~1cm大の中礫を含む: SD21)
 - 3. 黒褐色(10YR2/3)シルト(SD18)
 - 4. 暗褐色(10YR3/3)シルト
 - 5. 黒褐色(10YR2/2)シルト
(5cm大, 20cm大の中・大礫を含み, 褐色(10YR4/4)土が一部版築状に混じる(褐色土には1~3cm大の中礫が多く含まれる): P138)
 - 6. 黒褐色(10YR2/2)シルト(褐色(10YR4/4)土が混じり, 1~5cm大の中礫を含む)
 - 7. 黒褐色(10YR2/2)シルト(下層に褐色(10YR4/4)土が混じり, 1~3cm大, 5cm大, 10cm大の中・大礫を含む: P228)
 - 8. 黒色(10YR2/1)シルト(土器細片及び5~10cm, 15cm大の中・大礫を含む: P135)
 - 9. 黒褐色(10YR2/2)シルト
 - 10. 黒色(10YR1.7/1)シルト層(暗褐色(10YR3/3)粘質土ブロックが少量混じり, 土器細片及び0.5cm大, 若干の5cm大の中礫を含む)
 - 11. 黒色(10YR1.7/1)シルト
(褐色(10YR4/4)土が混じり, 土器細片を含む, 締りあり: SK9)
 - 12. 黒色(10YR1.7/1)シルト
(褐色(10YR4/4)土が少量混じり, 土器細片を含む, 締りあり: SK24)

図2-36 V-2区調査区南壁セクション図

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (1) 竪穴建物跡

(1) 竪穴建物跡

ST2 (図 2 - 37)

調査区南西隅において検出した。上面は後世の攪乱によってきられ、遺構の南部は調査区外にのびると推定される。また、遺構の西側はSK9、遺構の南側上面はSK24にきられる。確認規模は南北3.40m以上、東西3.50mで、検出面から床面までの深さは41cmを測る。1~2cm大の礫及び土器細片を含む黒色(10YR2/1)シルトが主体である。床面では3個の柱穴を確認した。柱穴のP1は長径0.22m、短径0.16mで床面から底面までの深さは11cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。P2は長径0.21m、短径0.15mで床面から底面までの深さは10cmを測る。埋土はP1と同じく黒褐色(10YR2/2)シルトである。P3は長径0.27m、短径0.21mで床面からの深さは18cmを測る。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、その内弥生土器2点と土師器2点、須恵器2点を図示することができた。

出土遺物 (図 2 - 38 100 ~ 105)

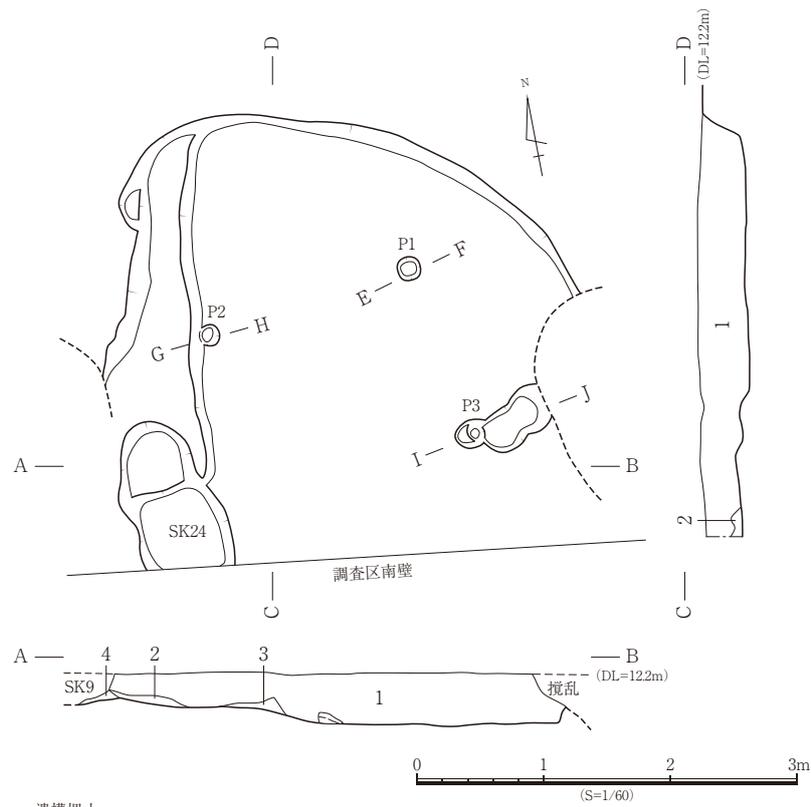
100と101は弥生土器壺の底部である。100は平底を呈し、外面は一部タタキ目が残り、ヘラミガキとナデ調整を施す。内面も同じくナデ調整で、一部ヘラミガキがみられる。101も同じく平底を呈する。外面は摩耗しており、内面にはナデ調整がみられる。102は土師器皿の口縁部である。口縁部内面に浅い凹みを呈する。外面は摩耗するが一部ナデ調整とヘラケズリを施し、内面も摩耗するが、一部にナデ調整がみられる。103は土師器皿の口縁部である。内面は赤彩か。外面は摩耗し、器面の一部は剥離する。内面は口縁端部下半に1条の沈線とナデ調整を施す。104は須恵器杯の底部である。底部に高台を貼付し、外面は高台脇にナデ調整を施す。内面もナデ調整がみられる。105は須恵器甕の口縁部である。やや軟質で外面は摩耗するが、頸部下にタタキ目が残る。内面は頸部下に同心円状のタタキ目が残る。

ST3 (図 2 - 39)

調査区南西部において検出した。西側は調査区外にのびる。平面形は円形状を呈すると推定される。確認規模は南北が4.35m、東西3.60m以上で、検出面から床面までの深さは44cmである。埋土は褐色土と細礫を含む黒色(10YR2/1)砂質シルトが主体である。床面では柱穴1個(P1)と土坑2基(SK1・SK2)を検出した。SK1は遺構南部の壁側に接し、平面形は楕円形で規模は長軸1.96m、短軸1.13mで、検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は暗褐色土と細礫を含む黒色(10YR2/1)シルトである。SK2は遺構の中央部より南側に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が1.27m、短軸0.66mで検出面から底面までの深さは8cmを測る。埋土は褐色土を含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルトである。P1は規模が概ね径0.2mで、検出面から底面までの深さは7cmを測る。埋土は暗褐色土を含む黒色(10YR2/1)シルトである。埋土中からは弥生土器細片及び土師器、須恵器、転用硯、製塩土器が出土しており、その内土師器3点、須恵器3点、転用硯1点、製塩土器1点を図示することができた。

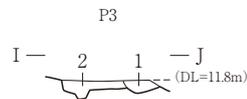
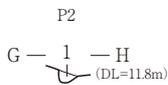
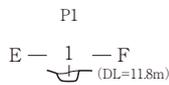
出土遺物 (図 2 - 40 106 ~ 113)

106は土師器皿である。口縁部内面に浅い凹みを呈する。外面は摩耗し、一部にナデ調整とススの付着がみられる。内面は摩耗する。107も土師器皿の口縁部である。口縁部下内面に1条の沈線がみられる。外面と内面にはヨコ方向のヘラミガキが施される。108は土師器杯の底部である。外面と内面はともに摩耗しており、底部外面の一部にナデ調整がみられる。109は須恵器杯の口縁部である。外面と内面には回転ナデ調整が施される。110と111は須恵器蓋である。110は外面はナデ調整を施す。



遺構埋土

1. 黒色 (10YR2/1) 細砂混じりシルト (1~2cm大の中礫を含み, 土器細片を少量含む. やや締りあり)
2. 黒色 (10YR2/1) シルト (褐色 (10YR4/4) 土が少量混じる)
3. 黒色 (10YR2/1) シルト (褐色 (10YR4/4) 粘質土がブロック状に混じる)
4. 暗褐色 (10YR3/3) シルト (黒色 (10YR2/1) シルトが混じる)



遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR2/2) シルト (土器片及び 0.5~1cm大, 2cm大の中礫を含む)

遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR2/2) シルト (褐色 (10YR4/4) 粘質土が混じり, 0.5~2cm大の中礫を含む. 締りあり)

遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR2/3) 粘質シルト (黒色 (10YR2/1) 土が少量混じる)
2. 黒褐色 (10YR2/2) シルト (暗褐色 (10YR3/4) 土が混じる. 締りあり)

図2-37 V-2区ST2

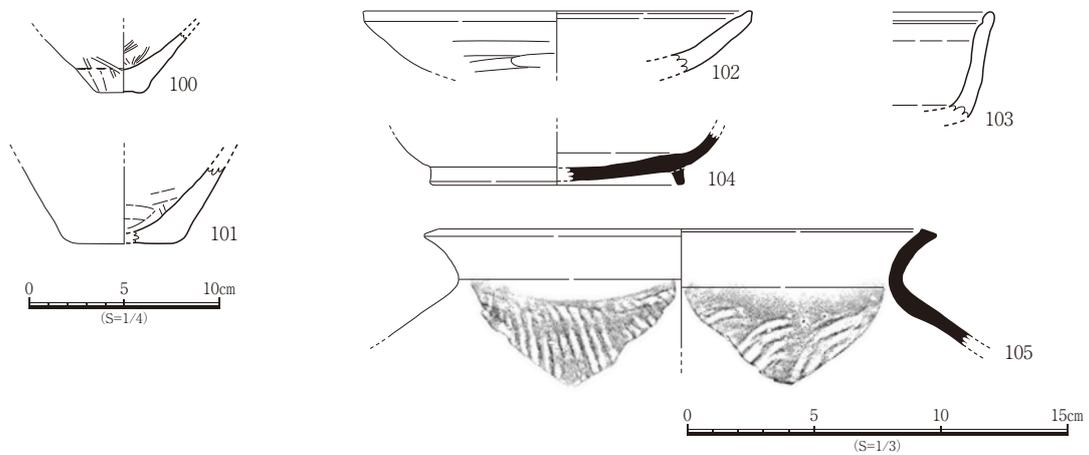


図2-38 V-2区ST2出土遺物実測図

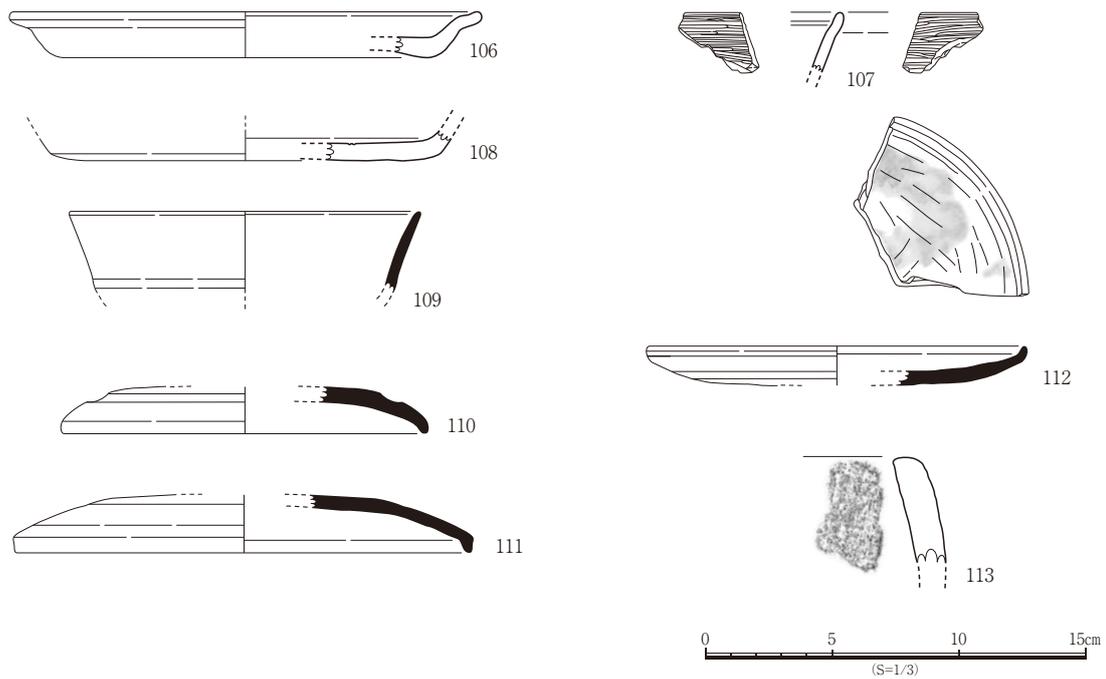


図2-40 V-2区ST3出土遺物実測図

面では柱穴7個と土坑2基を検出した。中央ピットは床面中央よりやや南寄りに位置し、規模は長径1.46m、短径0.48mで、平面形は楕円形を呈し、床面から中央ピットの底面までの深さは12cmを測る。埋土は褐色土と礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。支柱穴はP1からP3で構成されており、北西側の支柱穴は上面のカクランによりさらされているため、確認することはできなかった。規模はともに径が0.30～0.37mで、埋土は褐色土及び炭化物、礫を含む黒褐色(10YR2/2)粘質シルト及びシルトである。床面から柱穴の底面までの深さは、P1が40cm、P2が45cm、P3が43cmを測る。出土遺物は弥生土器と須恵器、石製品が出土しており、その内弥生土器25点、須恵器1点、石包丁2点、台石2点を図示することができた。

出土遺物 (図2-42・43 114～144)

114は小型の壺である。平底を呈し、胴部中央に最大径をもつ。頸部から口縁部にかけて外反する。外面は頸部から胴部上半にタテ方向のヘラミガキ、胴部中央にヨコ方向のヘラミガキ、さらに下半部にヘラケズリとヘラミガキが施される。内面は口縁部にヘラミガキとナデ調整。頸部から胴部中央にかけて粘土紐接合痕が認められ、指頭圧痕と工具によるナデ調整が施される。115は広口壺である。外面は口縁端部に粘土帯を貼付し肥厚させており、刻目、さらにハケ目調整が施される。頸部にはヘラミガキと列点文を配する。内面はナデ調整が施される。116は壺の頸部である。外面は頸部に粘土帯を貼付し、刻目を施す。頸部から胴部上半部にかけてハケ目調整後ヘラミガキを施す。内面は指頭圧痕とナデ調整、ヨコ方向のハケ目調整がみられる。117は広口壺の口縁部である。端部は上下に肥厚し、外面は頸部近くにタタキ目が残る、タテ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。内面は摩耗しており、器面の一部に剥離がみられる。118は外面にユビナデ、タテ方向のハケ目調整が施され、内面はハケ目調整で、指頭圧痕とナデ調整が施される。119は壺の底部で平底を呈する。外面はタタキ目が残る、ハケ目調整とナデ調整、内面はナデ調整と指頭圧痕が施される。120は平底を呈し、外

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (1) 竪穴建物跡

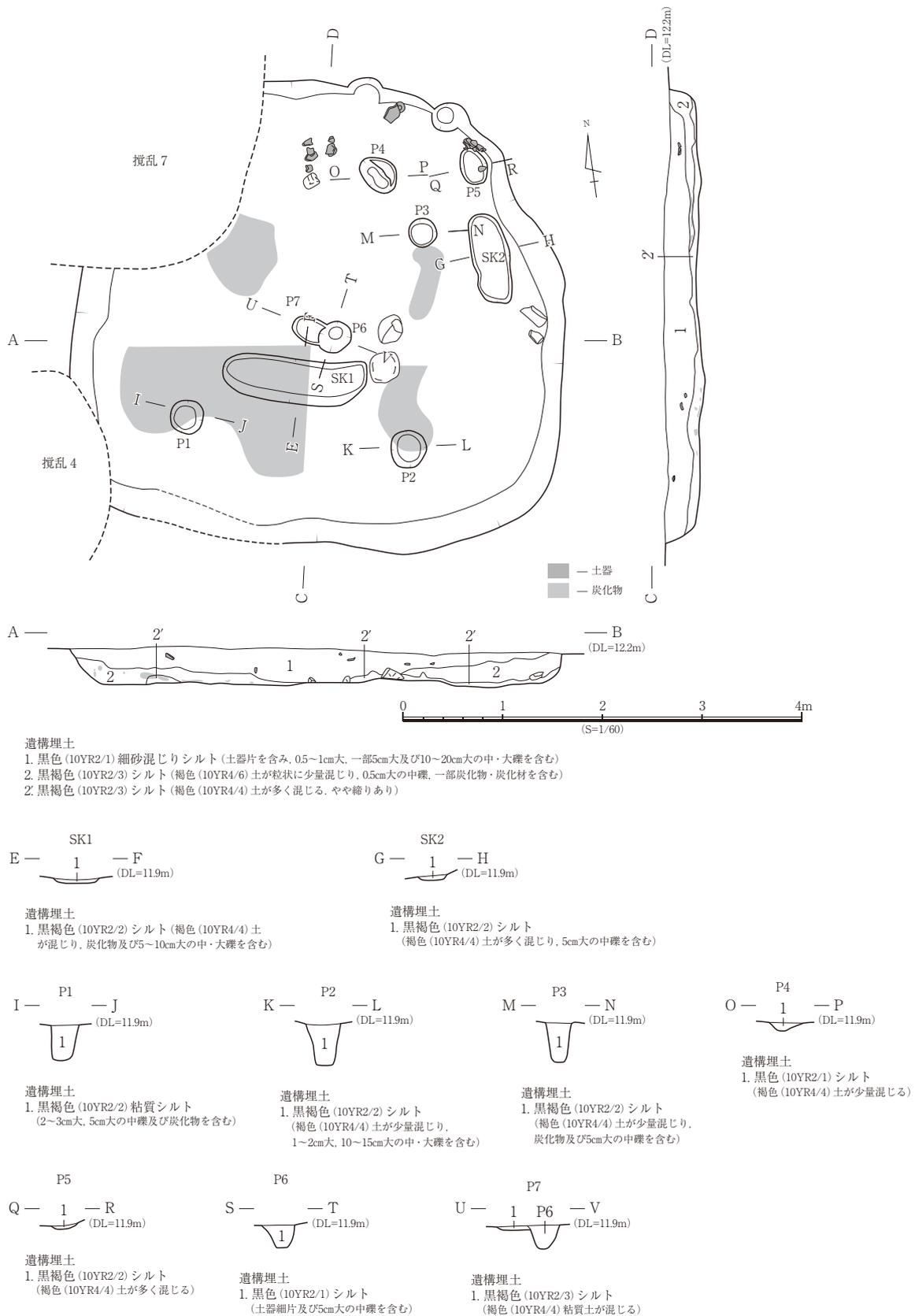


図2-41 V-2区ST4

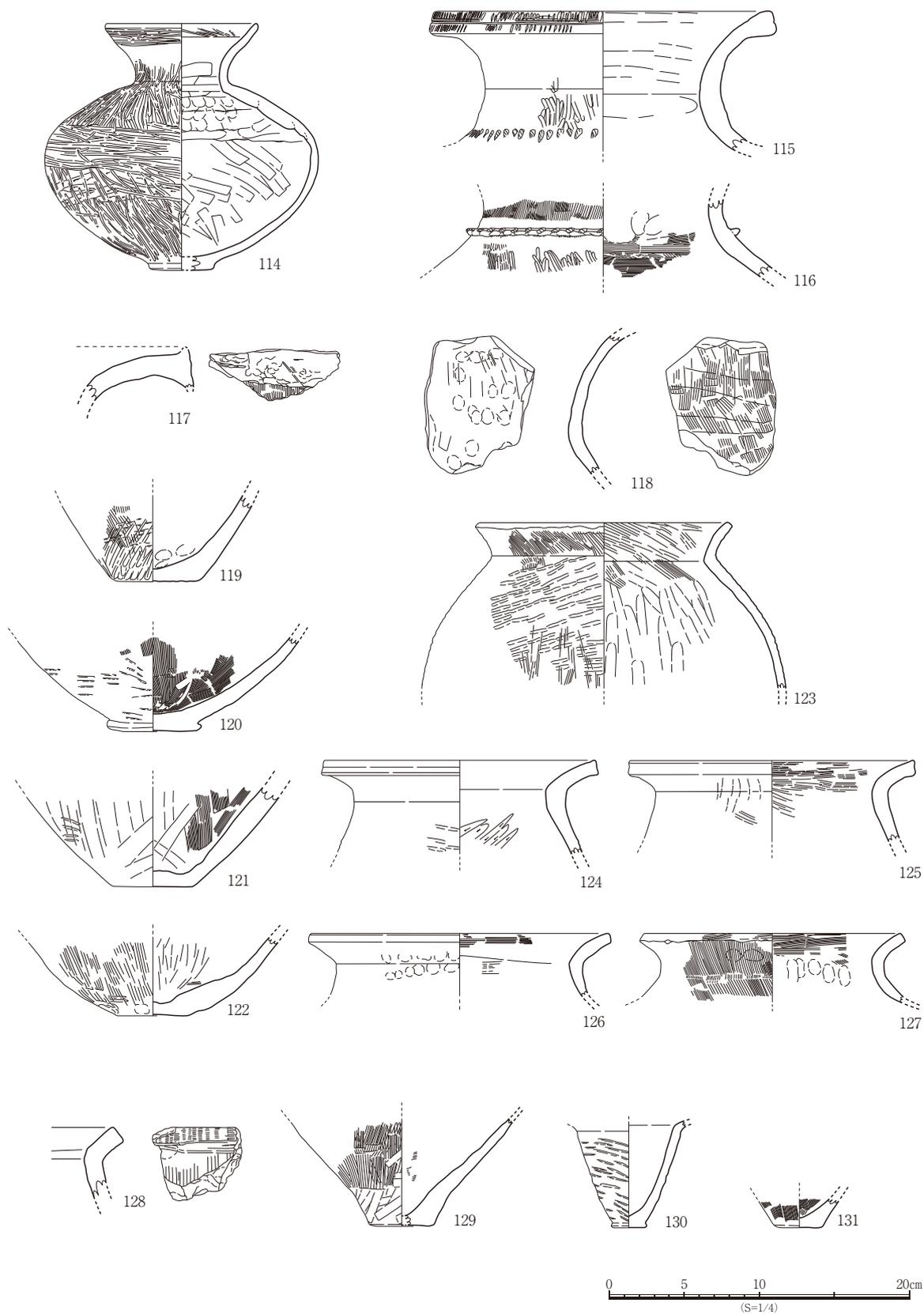


図2-42 V-2区ST4出土遺物実測図1

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (1) 竪穴建物跡

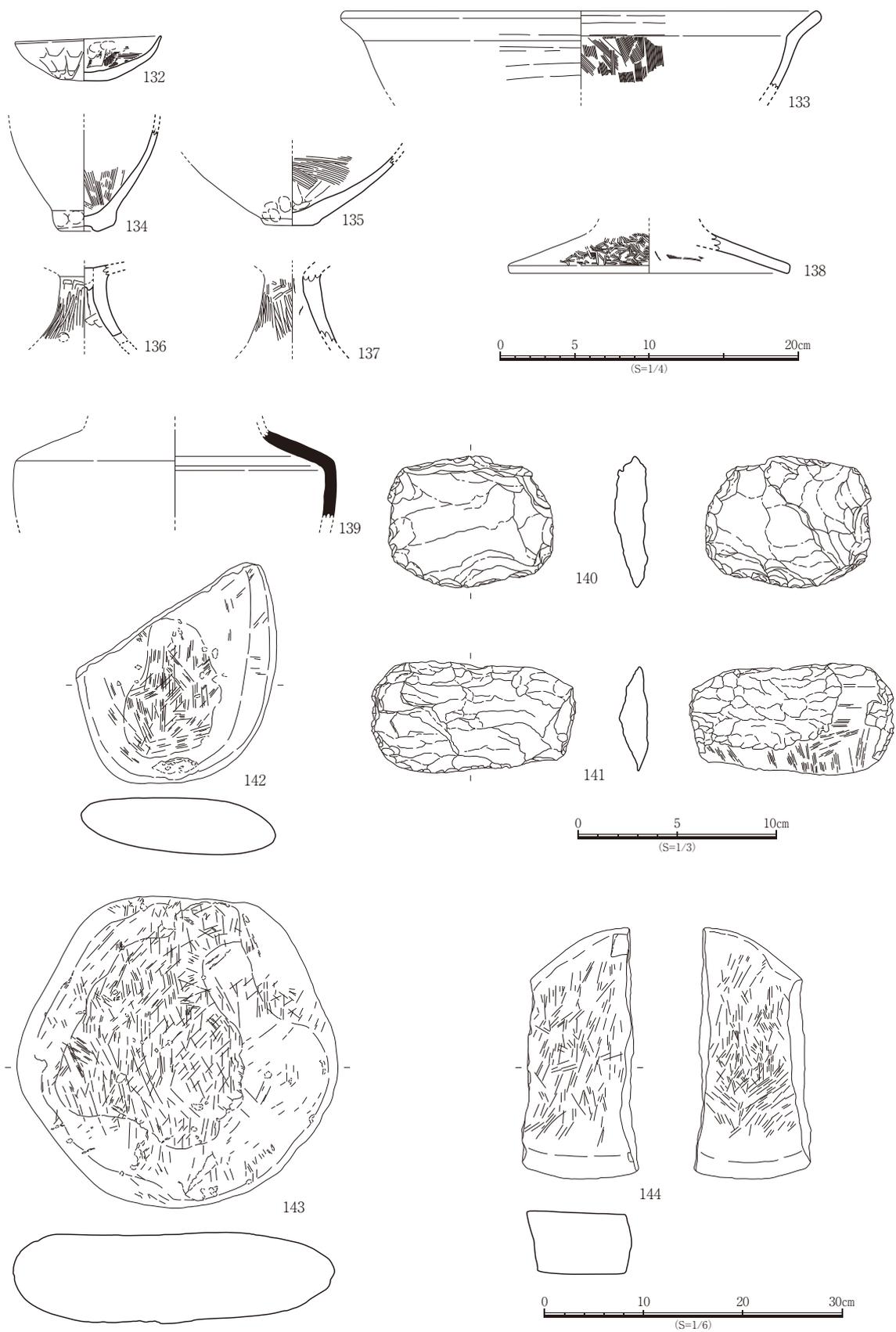


図2-43 V-2区ST4出土遺物実測図2

面にはタタキ目が残る。ハケ目とナデ調整が施され、内面に細かいハケ目調整がみられる。121は平底を呈し、外面に一部タタキ目が認められる。ナデ調整で、なかに一部ヘラ状工具によるナデ調整がみられる。内面はヘラケズリとタテ方向のハケ目調整で、底部内面には指頭圧痕が施される。122は平底を呈し、外面はタタキ目と指頭圧痕が認められる。体部から底部にはタテ方向のハケ目調整が施される。内面はハケ目調整後ナデ調整が施される。

123は胴部に最大径をもつ甕で、口縁部は外反する。外面は頸部までタタキ目が認められ、口縁部にハケ目調整、口縁部から頸部にかけて斜位方向のハケ目調整が施される。内面は頸部下半から体部に指頭圧痕、ユビナデが施される。124は口縁部はくの字状に外反する。口縁部外面にタタキ目が認められ、端部はナデ調整により凹み状を呈する。内面はナデ調整で、頸部下半に一部ヘラケズリがみられる。125も口縁部は外反する。外面はハケ目調整、ナデ調整が施され、内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整、ナデ調整がみられる。126も口縁部は外反しており、口縁部端部は平坦面でナデ調整が施される。外面は指頭圧痕、ナデ調整で、内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。127は口縁端部は平坦面を呈し、外面にハケ目調整、頸部にかけてタテ方向のハケ目調整が施される。内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整、頸部にかけて指頭圧痕とナデ調整がみられる。128は口縁部は短く外反する。端部外面にハケ目を刺突状に施す。外面はハケ目調整、ナデ調整、指頭圧痕が施され、内面は頸部にヘラケズリとナデ調整がみられる。129は甕の底部である。平底を呈し、外面はタテ方向のハケ目、底部にヘラミガキが施される。内面は器壁が剥離し、一部ハケ目調整がみられる。130は小型土器である。底部は平底を呈し、外面はタタキ目を施し、頸部近くにはナデ調整が施される。内面はナデ調整、底部外面もナデ調整が施される。131は外面は底部にタタキ目が認められ、タテ方向のハケ目調整が施される。内面はハケ目調整とヘラ状工具によるナデ調整がみられる。132は手づくね成形を施し、外面はヘラ状工具によるナデ調整と指頭圧痕が顕著である。内面はハケ目調整と指頭圧痕がみられる。133は外面は摩耗するが、頸部にナデ調整が施される。内面は口縁部にナデ調整、頸部下にタテ方向・斜位方向のハケ目調整、ナデ調整を施す。134は甕と考えられる。底部は平底で中央部は凹みあり。外面は底部側面に指頭圧痕、体部にナデ調整。内面はハケ目調整、ナデ調整が施される。135は平底を呈する。外面は底部に指頭圧痕とナデ調整がみられる。内面は底部に指頭圧痕、ハケ目とナデ調整が施される。136～138は高杯の脚部である。136は外面にタテ方向のヘラミガキが施され、内面はナデ調整である。脚部には穿孔がみられる。137は外面にヘラミガキが施され、内面はしぼり痕とナデ調整がみられる。138は外面にヘラミガキとナデ調整、内面はナデ調整に一部ヨコ方向のハケ目調整が施される。

139は須恵器の壺である。外面はナデ調整で、一部自然釉がかかる。内面はナデ調整が施される。上面遺構からの流れこみと考えられる。140・141は石包丁の未製品と考えられる。140は側面は抉りの敲打痕か。裏面は自然面を呈する。141は側縁部の一部を打ち欠く。142～144は台石と考えられる。142は砂岩製で、片面のみ使用か。裏面は自然面が残る。中央部中心に擦痕がみられる。側縁部は自然面が残る。143は砂岩製で、表面は中央部から下半にかけて凹みがみられる。擦痕あり。周縁部は自然面を残す。144は砂岩製で、左右側縁部は割れ面である。表面と裏面の中心部を中心に使用痕跡がみられる。上下面は自然面が残る。

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (2) 掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

SB1 (図2-44)

調査区の中央部南より検出した。規模は桁行3間(4.30m)、梁行2間(3.60m)の南北棟で、軸方向はN-5°-Eである。建物西側柱を構成する柱穴は後世のカクランにきられ、確認することはできなかった。また、建物北側柱を構成する北西隅の柱穴と南側柱を構成する南東隅の柱穴は同じく上面を後世のカクランによりきられる。柱間寸法は桁行が1.40~1.50m、梁行1.80mを測る。床面積は15.48㎡である。柱穴の掘方は、隅丸方形のものから楕円形を呈するものがみられる。隅丸方形はP1・4~6で、柱穴の規模はP1が一辺約0.60m、P4・6は約0.50m、P5は0.40m前後で、検出面から底面までの深さはP1が38cm、P4は約20cm、P5が17cm、P6は45cmを測り、埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトと褐色土と礫を含む黒褐色(10YR4/4)シルトである。P2・7~9は平面形が楕円形を呈し、規模はP2が長径0.78m、短径0.62m、P7が長径0.70m、短径0.55m、P8は長径が0.82m、短径0.49m、P9が長径0.52m、短径0.42mを測り、検出面から底面までの深さはP2が55cm、P7は44cm、P9が23cmである。埋土は褐色土と礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトが主体である。

出土遺物は、図示でき得るものはなかった。

SB2 (図2-45)

調査区の中央南端において検出した。建物南側柱は調査区外に広がると推定される。確認規模は東西2間(4.30m)、南北2間(2.70m)以上で、上面は調査区を南北にのびるSD17にきられる。柱間寸法は東西(北側柱)が2.15m、南北(東西側柱)が1.70~1.80mで、床面積は11.61㎡を測る。柱穴の掘方は円

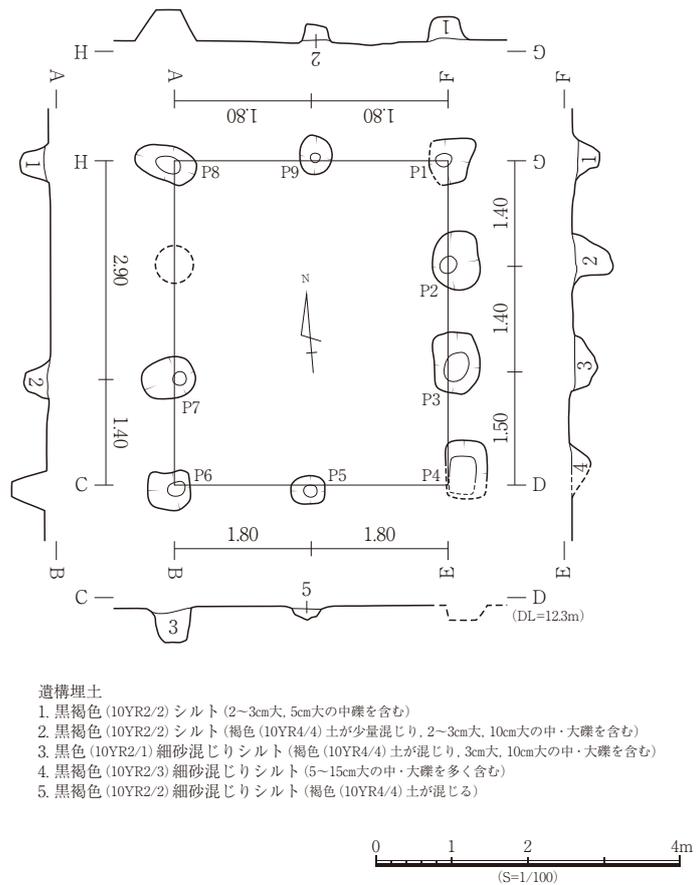


図2-44 V-2区SB1

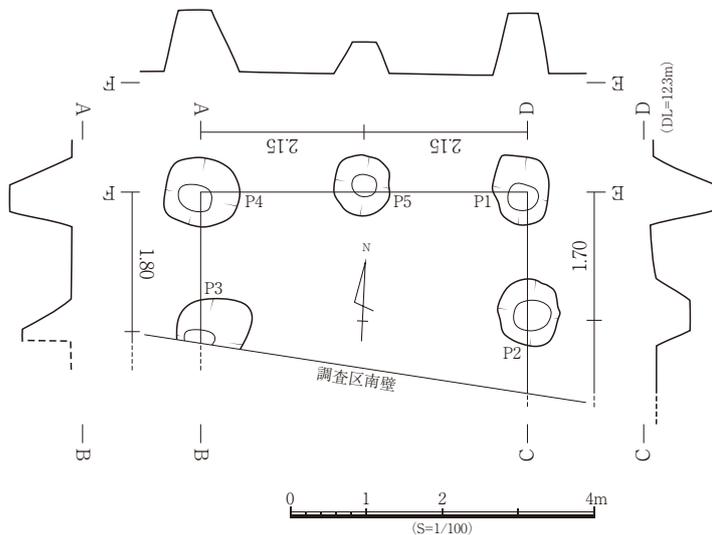


図2-45 V-2区SB2

形から楕円形状を呈する。規模はP1が長径0.90m，短径0.72m，P2は径が0.85m前後，P3の確認長は，東西0.93m，南北0.64m以上，P4は径が0.95m前後，P5が径は0.80m前後を測り，検出面から底面までの深さは，P1が56cm，P2が44cm，P3は62cm，P4が82cm，P5は42cmである。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトと褐色土と礫を含む黒色(10YR2/1)シルトが主体である。出土遺物は，図示でき得るものはなかった。

SB3 (図2-46)

調査区の中央部西端において検出した。規模は桁行4間(5.40m)，梁行3間(4.50m)の東西棟で，軸方向はN-90°を示す。建物東側柱を構成する柱穴の1個は確認することができなかった。柱間寸法は，桁行が1.00~1.85m，梁行1.20~2.10mを測る。床面積は24.3㎡である。柱穴の掘方は円形から楕円形を呈し，径は0.3~0.5m前後で，検出面から底面までの深さはP1・5・7・12が45cm前後，P2・6・8・10が概ね50cm，P3とP4は12~13cm，P9は21cm，P11は33cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトを主体とする。遺物はP5より出土した須恵器1点が図示できた。

出土遺物 (図2-47 145)

145は須恵器甕と考えられる口縁部である。口縁部は肥厚し，端部は平坦面を呈する。外面と内面は回転ナデ調整で，外面にヘラ描きの波状文が施される。

SB4 (図2-48)

調査区の中央部東側において検出した。規模は桁行2間(3.40m)，梁行1間(2.30m)の東西棟建物で，建物北側柱は検出することはできなかった。軸方向はN-79°-Wを示す。柱間寸法は桁行が1.60~1.80m，梁行2.30mで，床面積は7.82㎡を測る。柱穴の掘方は円形から楕円形を呈し，円形はP1が径0.40m前後，P4が径概ね0.45mで，楕円形ではP2が長径が0.52m，短径0.41m，P3は長径0.63m，短径0.39m，P5は長径0.54m，短径0.42mを測る。検出面から底面までの深さは，ともに20cm前後である。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトと褐色土

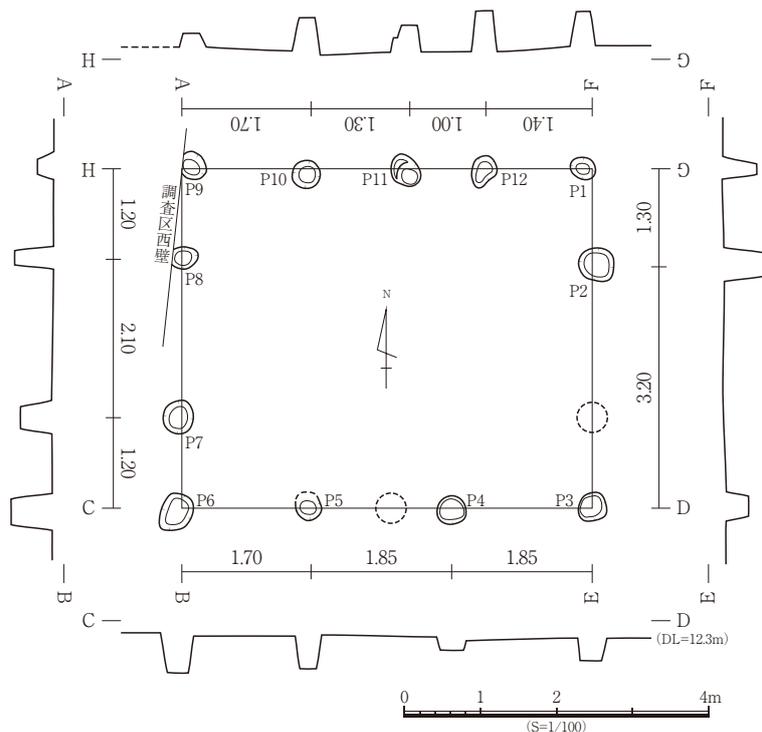


図2-46 V-2区SB3

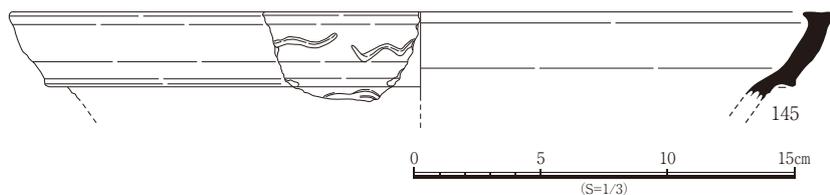


図2-47 V-2区SB3出土遺物実測図

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (3) 土坑

を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

(3) 土坑

SK1 (図2-49)

調査区中央部西端において検出した。遺構の西側は調査区外にのびる。平面形は隅丸方形状を呈すると推定される。規模は南北方向が0.89m、東西方向が0.65m以上で主軸方向はN-11°-Eを示す。検出面から底面までの深さは、約24cmを測る。検出面から約5cm掘り下げると、手づくね皿3点がほぼ完形で出土した。埋土は礫とハンダ土を含む暗褐色土である。埋土中からは弥生土器と土師質土器の細片と手づくね皿が出土しており、その内手づくね皿3点が図示できた。

出土遺物 (図2-50 146~148)

146~148は手づくね皿である。146は平坦な底部からやや外方に開き口縁部に至る。外面内面ともに指頭圧痕とナデ調整がみられ、口縁部は特に丁寧なナデ調整を施す。底部外面には板状の圧痕が認められる。147も平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。外面と内面には指頭圧痕とナデ調整で、口縁部は丁寧なヨコナデを施す。底部外面には板状の圧痕が認められる。148も同じく平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。外面と内面はともに指頭圧痕とナデ調整で、口縁部は丁寧なナデ調整がみられる。底部外面にも同じく板状の圧痕がみられる。

SK2 (図2-51)

調査区中央北部において検出した。上面はP59にきられる。平面形は不整形を呈し、規模は長径1.26m、短径1.06mで、主軸方向はN-11°-Eを示す。検出面から底面までの深さは約7cmを測り、断面形が浅い皿状を呈する。埋土は褐色土と礫を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は弥生土器が出土しており、その内甕が図示できた。

出土遺物 (図2-52 149)

149は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部は平坦面を呈し、外面にナデ調整、内面にもナデ調整が施される。

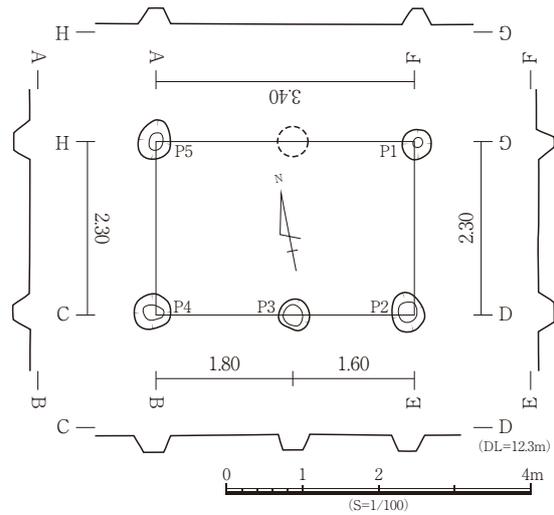


図2-48 V-2区SB4

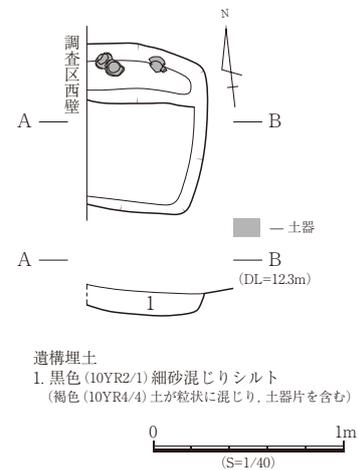


図2-49 V-2区SK1

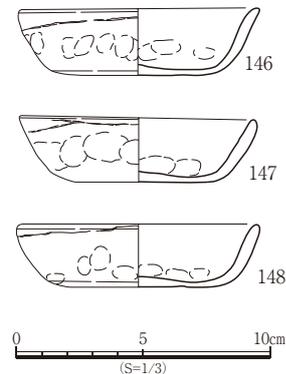


図2-50 V-2区SK1出土遺物実測図

SK3 (図2-51)

調査区中央北端において検出した。平面形は円形状を呈すると推定される。規模は東西1.29m以上、南北1.06m以上で、検出面から底面までの深さは約28cmを測る。埋土は礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師質土器と磁器、瓦片が出土しており、その内土師質土器皿と磁器小杯が図示できた。

出土遺物 (図2-52 150・151)

150は土師質土器皿である。底部は平坦面を呈し、底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部は外方にやや開く。外面と内面はともに回転ナデ調整で、口縁端部にはタールの付着がみられる。151は肥前系磁器の小杯と考えられる。底部は削り出し高台で、高台途中まで施釉が認められる。高台に砂が溶着している。

SK4 (図2-51)

調査区中央北端において検出した。SX7に接する。平面形は不整楕円形状を呈し、主軸方向はN-85°-Wを示す。規模は長径1.30m、短径1.05mで、西側の一部はテラス状を呈する。検出面から

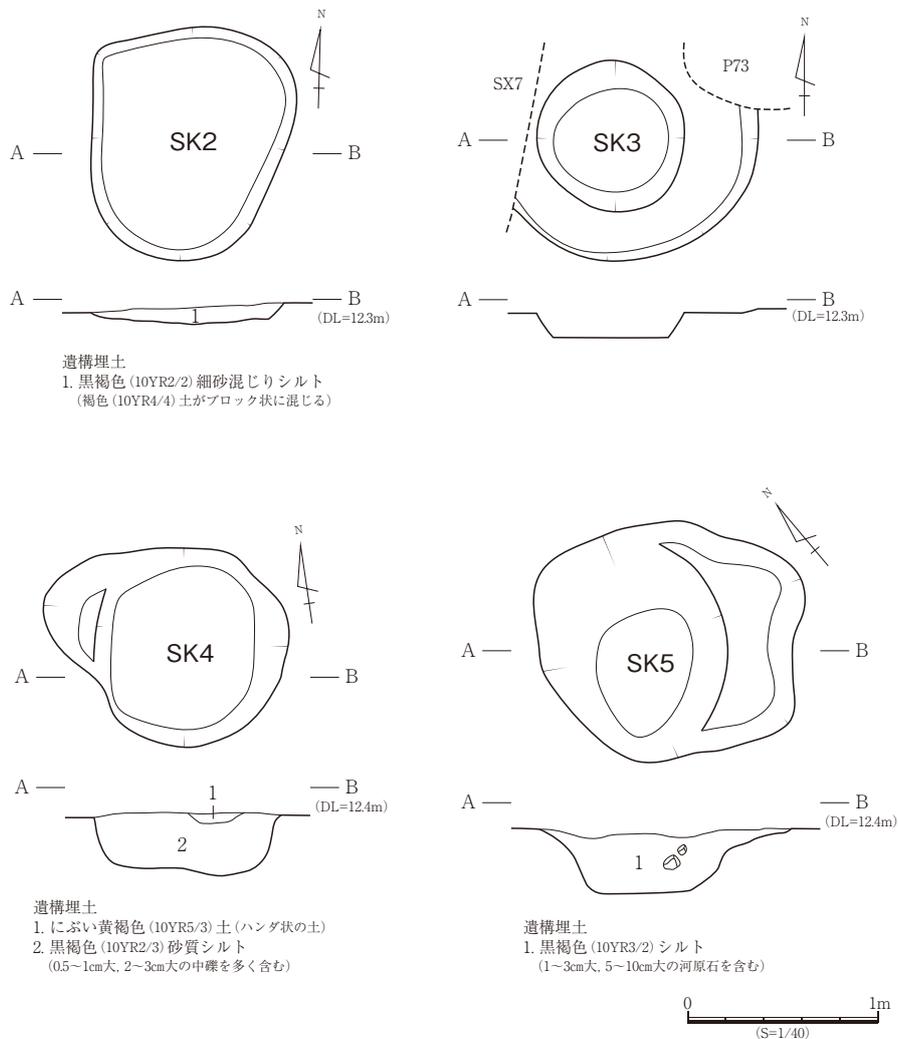


図2-51 V-2区SK2~5

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (3) 土坑

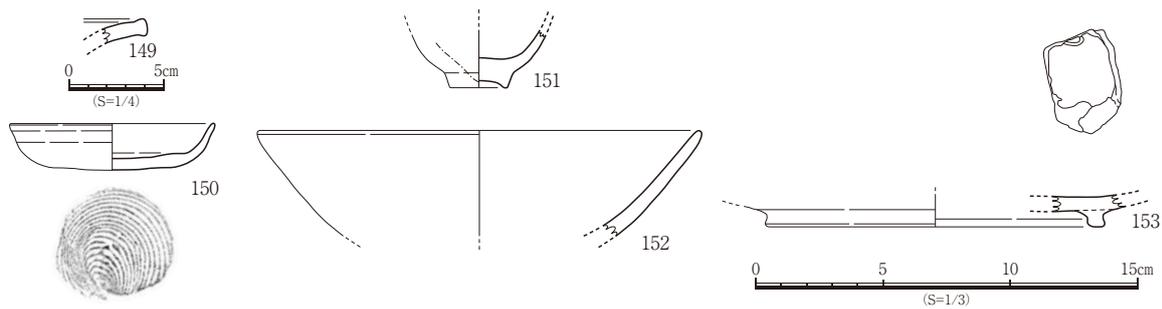


図2-52 V-2区SK2~4出土遺物実測図

底面までの深さは、約 32 cm を測る。埋土は礫を含む黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルトである。遺物は土師器と須恵器、陶磁器、瓦片が出土しており、その内土師器盤と陶器碗が図示できた。

出土遺物 (図2-52 152・153)

152は陶器碗である。透明度の高い釉を施し、貫入がみられる。153は土師器の盤である。外面は底部に高台を貼付し、ナデ調整が施される。内面には赤彩を施し、ヘラミガキとナデ調整がみられる。

SK5 (図2-51)

調査区中央北端において検出した。SK4の北東部に近接する。平面形は不整形を呈し、主軸方向はN-61°-Wを示す。規模は長径1.42m、短径1.24mで、東部は一段高いテラス状を呈する。検出面からの底面までの深さは、約41cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色 (10YR3/2) シルトである。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK6 (図2-53)

調査区中央西側において検出した。SD8の北側に近接する。平面形は不整楕円形状を呈し、主軸方向はN-90°を示す。規模は長径3.00m、短径1.23mで、検出面から底面までの深さは、約28cmを測る。埋土は中礫を含む黒褐色 (10YR3/2) シルトを主体とし、下層は黒色 (10YR2/1) シルトを含む褐色 (10YR3/3) シルトである。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK8 (図2-53)

調査区北西部において検出した。調査区を北西から南東方向にのびるSD4とSD6にきられる。平面形は楕円形状を呈すると考えられ、主軸方向はN-18°-Eを示す。長径は1.68m、短径1.10m、検出面から底面までの深さは約14cmを測る。埋土は褐色土を含む黒色 (10YR2/1) シルトである。遺物は、弥生土器と須恵器片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK9 (図2-53)

調査区の南西端において検出した。遺構の東側はST2に接し、南側は調査区外に広がると考えられる。確認できた規模は、長径1.80m以上、短径1.33m以上で、検出面から底面までの深さは約23cmを測る。埋土は細砂及び土器細片が含まれる黒色 (7.5YR2/1) シルトである。SK9の掘削段階において南西隅調査区壁側に弥生土器鉢が出土したが、掘り進めると柱穴 (P236) として認識するに至った。埋土による新旧関係は確認できなかった。SK9に付随する柱穴の可能性も考えられる。

遺物は、弥生土器、土師器、土師質土器片が出土しているが図示でき得るものはなかった。

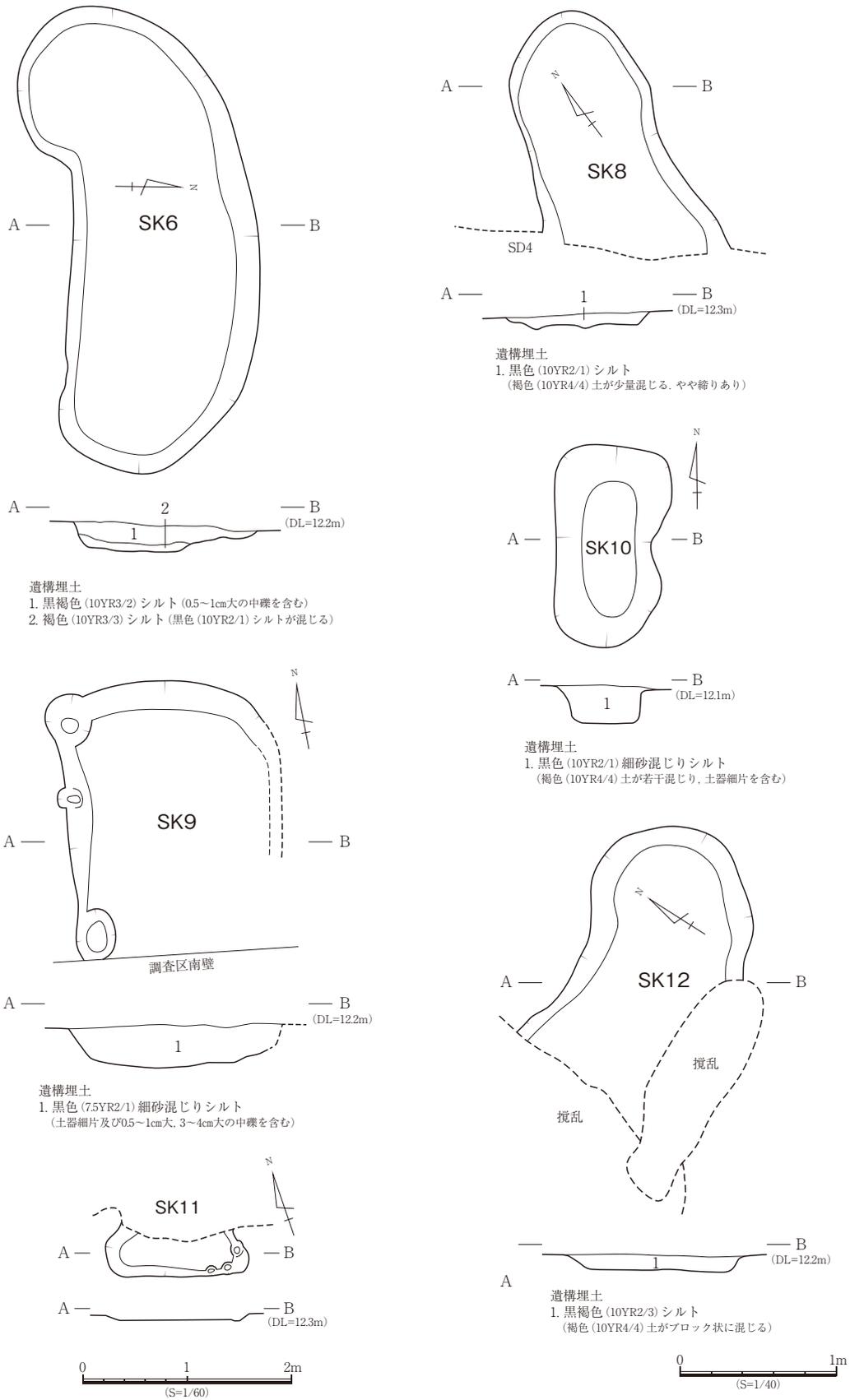


図2-53 V-2区SK6・8~12

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (3) 土坑

SK10 (図2-53)

調査区の南西部において検出した。遺構の北西隅は柱穴にきられる。確認できた規模は長径1.30m, 短径0.75mで, 主軸方向はN-3°-Eを示す。検出面から底面までの深さは, 約27cmを測る。埋土は褐色土と細礫を含む黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は, 弥生土器細片が出土している。

SK11 (図2-53)

調査区の中央南部において検出した。確認規模は長径1.36m, 短径0.42m以上で, 遺構の北側は上面のカクランによって削平される。主軸方向はN-73°-Wを示し, 検出面から底面までの深さは約10cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は, 土師質土器細片が出土している。

SK12 (図2-53)

調査区の中央南部において検出した。上面はカクランにより削平されていたため確認規模は, 長径が1.78m以上, 短径は1.10mで, 主軸方向はN-86°-Eを示す。検出面から底面までの深さは, 約13cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトで, 遺物は図示でき得るものはなかった。

SK14 (図2-54)

調査区の南東部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し, 主軸方向はN-75°-Eを示す。規模は長径0.96m, 短径0.69mで, 検出面から底面までの深さは約16cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は, 弥生土器と土師器片が出土しているが, 図示でき得るものはなかった。

SK16 (図2-54)

調査区の南東隅において検出した。遺構の東側は調査区壁に接しており, 調査区外に続くと考えられる。平面形は不整形を呈すると思われる, 主軸方向はN-27°-Eを示す。確認規模は南北が1.40m, 東西は0.82mで, 検出面から底面までの深さは約31cmを測る。埋土は中礫及び褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトを主体とし, 下層は細砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は, 土師器片が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SK17 (図2-54)

調査区の中央南部において検出した。平面形は不整形を呈し, 主軸方向はN-2°-Eを示す。規模は長径1.35m, 短径1.30mで, 検出面から底面までの深さは10~16cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は, 土師質土器が出土しているが, 図示でき得るものはなかった。

SK18 (図2-54)

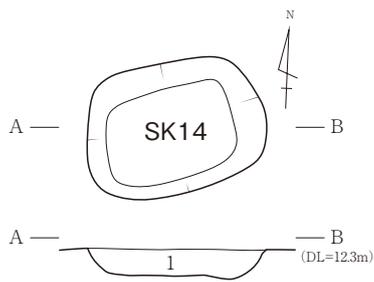
調査区の南西部において検出した。遺構は上面遺構にきられる。確認径は1.50mで, 検出面からの底面までの深さは約6cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/4)土を含む黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は, 図示でき得るものはなかった。

SK19 (図2-54)

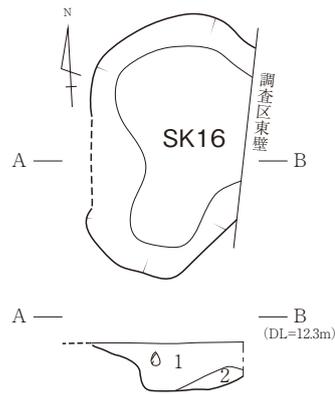
調査区東部において検出した。遺構は, 調査区東端を南北方向に走るSD18の西方向に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し, 規模は長径1.23m, 短径0.94mで, 検出面から底面までの深さは約14cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)土である。遺物は, 須恵器が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SK20 (図2-54)

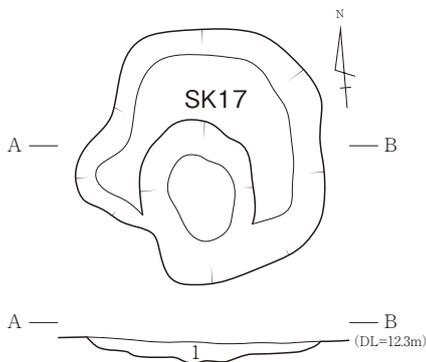
調査区東部において検出した。遺構はSK19の南側に位置する。平面形は不整形を呈し, 主軸方向はN-8°-Eを示す。規模は長径1.78m, 短径0.85mで, 検出面から底面までの深さは約55cmを測る。埋土は小礫を含む暗褐色(10YR3/4)シルトが主体である。遺物は, 須恵器と土師質土器片である。



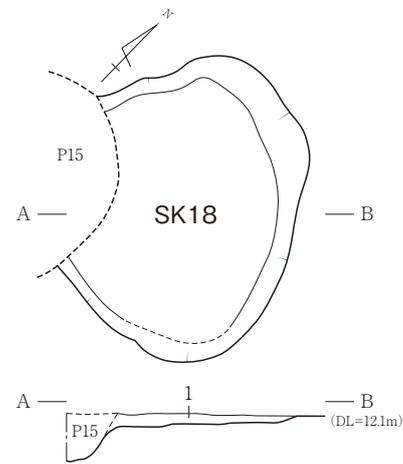
遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/2) シルト
(土器細片及び0.5cm大の中礫を含む)



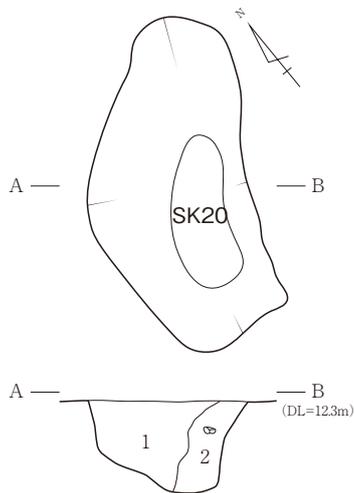
遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト
(褐色 (10YR4/4) 土が少量混じり、5cm大の中礫を若干含む)
2. 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト



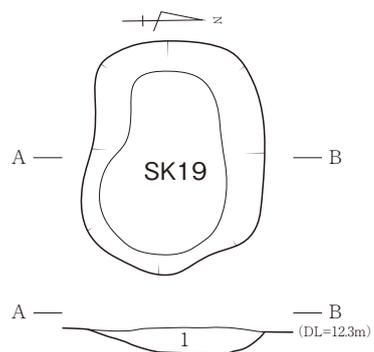
遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト
(褐色 (10YR4/4) 土が混じり、3~5cm大の中礫を含む)



遺構埋土
1. 黒色 (10YR2/1) 細砂混じりシルト
(暗褐色 (10YR3/4) 土が少量混じる)



遺構埋土
1. 暗褐色 (10YR3/4) シルト
(0.5cm大の中礫を含む。締りあり)
2. 暗褐色 (10YR3/3) シルト
(0.5~1cm大、5cm大の中礫を含む。締りあり)



遺構埋土
1. 暗褐色 (10YR3/3) シルト (1~2cm大の中礫を含む)

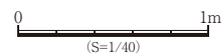


図2-54 V-2区SK14・16~20

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (3) 土坑

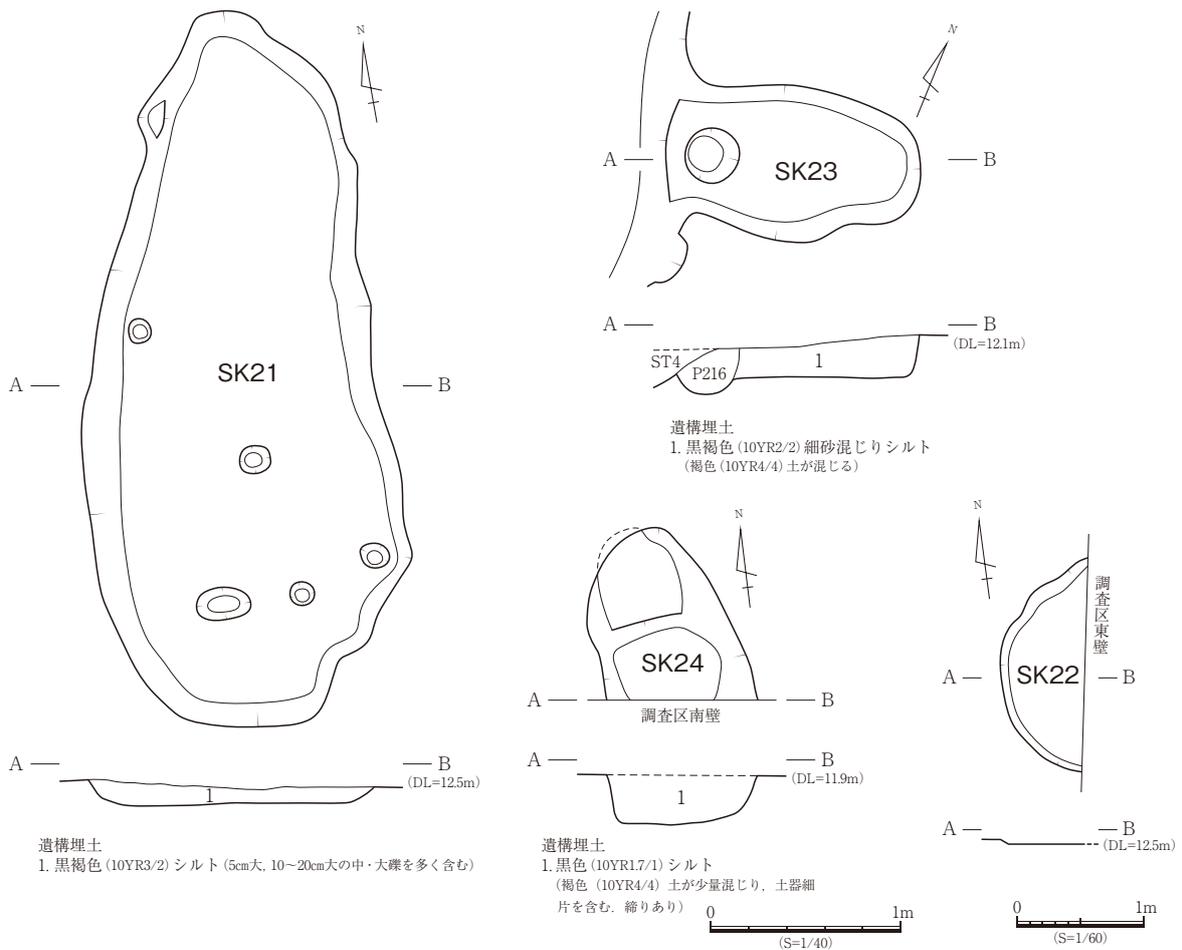


図2-55 V-2区SK21~24

SK21 (図2-55)

調査区東部端において検出した。遺構は調査区東端を南北に走るSD18の東側に位置する。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-8°-Eを示す。規模は長径3.80m, 短径1.67mで, 検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土は礫を多く含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は須恵器と土師器, 土師質土器が出土しており, その内土師質土器碗と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-56 154・155)

154は土師質土器碗の底部である。底部は高台を貼付しており, 高台内外面はナデ調整が施される。内面はナデ調整で, 一部摩耗がみられる。155は須恵器杯の口縁部である。外面と内面は回転ナデ調整が施される。

SK22 (図2-55)

調査区東端において検出した。SK21の東側に位置し, 遺構の東側は調査区外に広がる。規模は南北が1.68m以上, 東西0.54m以上で, 検出面から底面までの深さは約9cmを測る。埋土は暗褐色土(10YR3/3)である。遺物は, 図示でき得るものはなかった。

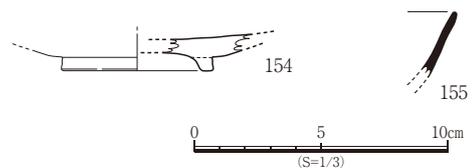


図2-56 V-2区SK21出土遺物実測図

SK23 (図2-55)

調査区西端のST4に接して検出した。規模は東西が1.34m以上、南北0.83mで、検出面から底面までの深さは約23cmを測る。埋土は褐色土を含み細砂混じりの黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は、図示でき得るものはなかった

SK24 (図2-55)

ST2の掘削時に検出した土坑である。南側は調査区にのびると考えられる。平面形は楕円形状を呈すると推定され、長径は南北0.93m以上、東西0.74mで検出面から底面までの深さは25cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。埋土中からは弥生土器片、須恵器甕が出土している。

出土遺物 (図2-57 156)

156は須恵器甕の胴部である。歪みが顕著。外面にタタキ目と溶着痕あり。内面は同心円状のタタキ目が残る。

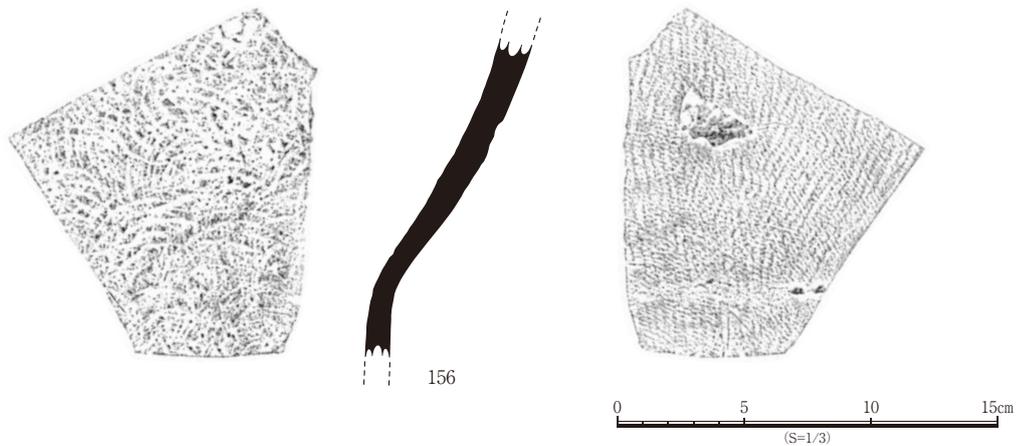


図2-57 V-2区SK24出土遺物実測図

(4) 溝跡

SD1 (図2-58)

調査区の南部において検出した。東西方向の溝跡で、西端部はST3をきり、上面遺構(柱穴)にきられる。規模は、確認延長が17.20m、幅0.28~0.80mで検出面から底面までの深さは24cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は弥生土器、土師器、土師質土器および須恵器が出土しており、その内土師質土器碗、須恵器杯・甕が図示できた。

出土遺物 (図2-59 157~160)

157は土師質土器碗の底部である。底部には輪高台を貼付し、高台はナデ調整が施される。外面はナデ調整で一部摩耗する。内面はナデ調整で、一部摩耗している。158は須恵器杯の口縁部である。外面と内面はともに回転ナデ調整である。159は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は上下に肥厚させ、上端はナデ調整により

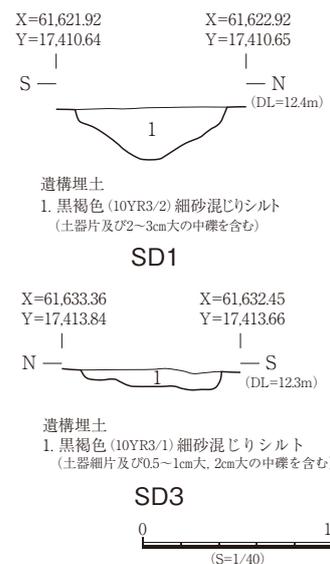


図2-58 V-2区SD1・3

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (4) 溝跡

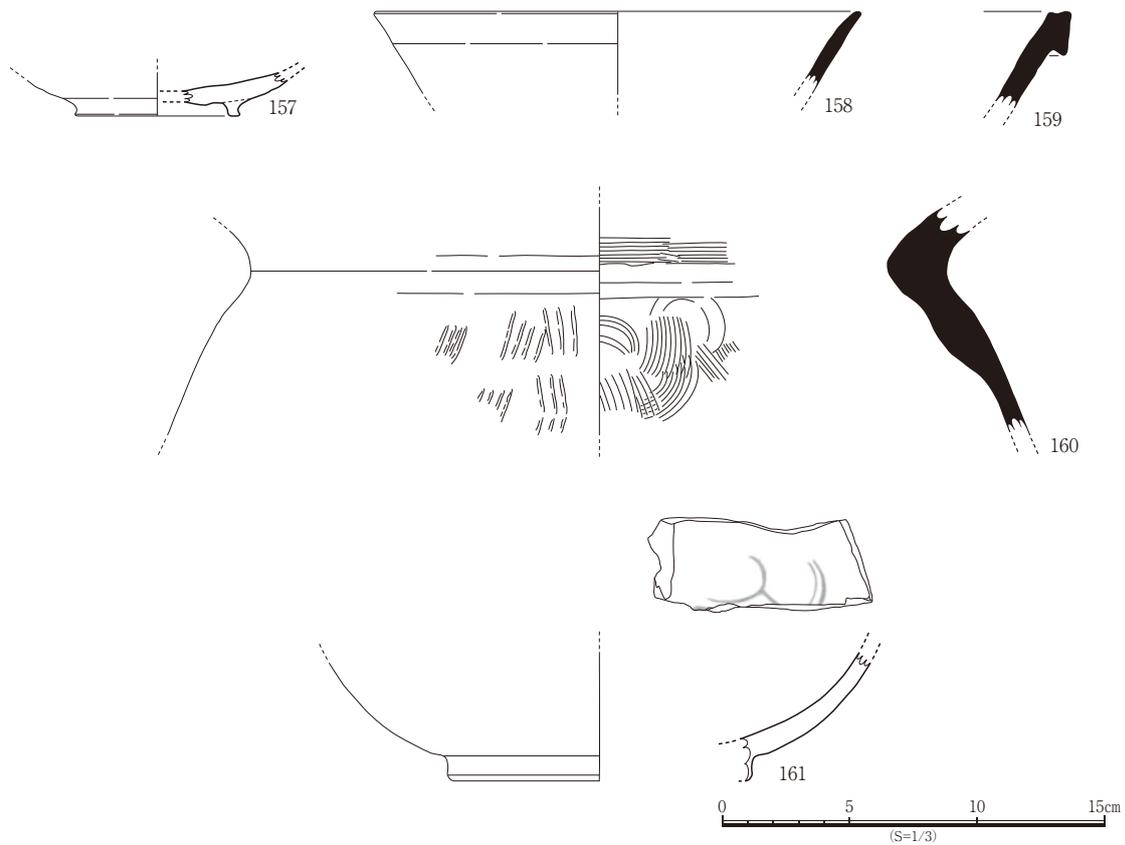


図2-59 V-2区SD1・3出土遺物実測図

凹む。外面と内面はともにナデ調整が施される。160は須恵器甕の体部である。外面はタテ方向のタタキ目と自然釉がかかる。内面はハケ目状のナデ調整と同心円状のタタキ目が認められる。また、粘土紐接合痕がみられる。

SD2

調査区の南部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の西側はST4をきり、東側はカクラン6によってきられる。規模は、確認延長が12.13m、幅0.32～0.60mで検出面から底面までの深さは7～13cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)シルトで、遺物は土師質土器片と瓦片が出土している。

SD3 (図2-58)

調査区の中央部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の西側はST4をきり、東側はカクランによってきられる。規模は、確認延長が7.30m、幅0.27～0.39mで、検出面から底面までの深さは5～15cmを測る。調査区中央部において検出した南北方向の溝跡SD12は、その位置関係等から接続する可能性が考えられる。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。遺物は須恵器、土師質土器、青磁が出土している。

出土遺物 (図2-59 161)

161は青磁碗あるいは盤の底部である。外面は無文で、内面には陰刻文が施される。

SD4 (図2-60)

調査区の北部において検出した。調査区の北西から南東方向にのびる溝跡で、調査区を東西方向

にのびるSD10と北西から南東方向にのびるSD16をきる。規模は、確認延長が15.88m、幅0.40～0.90m、検出面から底面までの深さは9～35cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師器、土師質土器、須恵器が出土しており、その内土師質土器杯、須恵器杯・蓋が図示できた。

出土遺物(図2-61 162～165)

162は土師質土器杯の口縁部である。外面と内面はともに回転ナデ調整で、口縁端部にススの付着がみられる。163は須恵器杯の底部である。底部は高台を貼付し、外面と内面はナデ調整が施される。164と165は須恵器蓋である。164は外面天井部近くに回転ヘラケズリ、端部にかけてナデ調整が施される。内面はナデ調整である。165は外面と内面はともにナデ調整で、外面は一部摩耗がみられる。

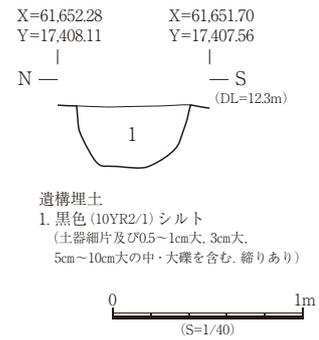


図2-60 V-2区SD4

SD5

調査区の北部において検出した。南北方向の溝跡で、周辺柱穴をきる。規模は、確認延長が1.84m、幅0.30～0.45m、検出面から底面までの深さは約15cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SD6

調査区の北部において検出した。調査区の北西から南東方向にのび、SD4の北側に併走する溝跡である。規模は、確認延長が15.19m、幅0.39～0.74m、検出面から底面までの深さは2～10cmを測る。調査区を東西方向にのびるSD10と調査区中央部を南北方向にのびるSD11・12・16にきられ、SK8をきる。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は、須恵器と土師質土器片が出土している。

SD7

調査区の中央西側において検出した。東西方向の溝跡で、北側にはSD8、南側にはSD14が併走する。規模は、確認延長が8.76m、幅0.45～0.93m、検出面から底面までの深さは5～34cmを測る。埋土は小礫を含む黒色(10YR2/1)シルトが主体で、下層が黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は、弥生土器と土師器片が出土しており、図示でき得るものはなかった。

SD8

調査区の中央西側において検出した。東西方向の溝跡で、南側にはSD7とSD14が併走する。規模

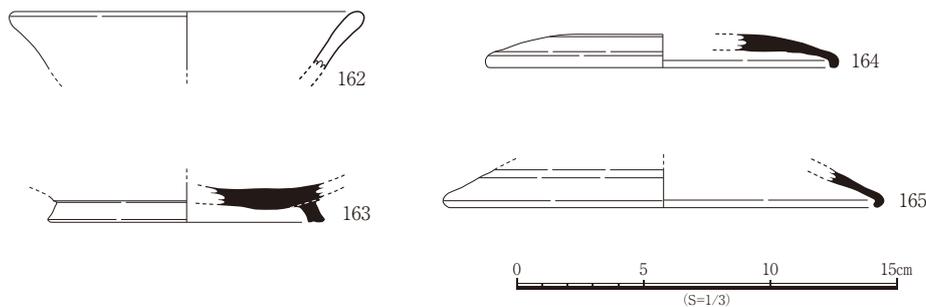


図2-61 V-2区SD4出土遺物実測図

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (4) 溝跡

は、確認延長が13.59m、幅0.77~1.10m、検出面から底面までの深さは13~31cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/4)土を含む黒色(10YR2/1)シルトである。埋土上面には10~20cm大の礫が集中した箇所もみられた。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SD9 (図2-62)

調査区の北部において検出した。逆L字状を呈した溝跡である。確認延長は東西方向に2.25mで、北方向に折れ0.75mのびる。幅は0.22~0.35mで、検出面から底面までの深さは約4cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は弥生土器が出土しており、その内甕が図示できた。

出土遺物 (図2-63 166)

166は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部外にはヨコ方向のハケ目調整で、口縁部から頸部にかけてはナデ調整が施される。内面はヨコ方向のハケ目調整と頸部下方にナデ調整がみられる。

SD10 (図2-62)

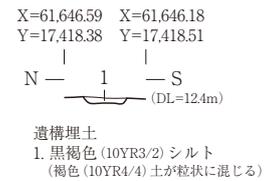
調査区の北部において検出した。東西方向の溝跡で、SD13をきり、調査区を南北方向にのびるSD11・12・20にきられる。規模は、確認延長が21.80m、幅0.45~0.85m、検出面から底面までの深さは7~20cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器と須恵器、瓦質土器が出土しており、その内土師質土器椀と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-63 167・168)

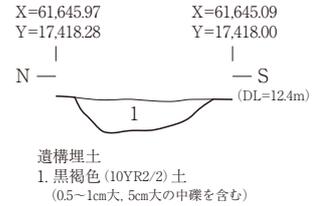
167は土師質土器椀の底部である。底部に高台を貼付し、外面は体部にナデ調整で、内面は摩耗しており、器面が一部剥離している。168は須恵器杯の底部である。底部外面に高台を貼付し、高台の内面と外面にナデ調整が施され、内面は不定方向のナデ調整がみられる。

SD11 (図2-64)

調査区の中央北部において検出した。南北方向の溝跡で、SD6とSD10をきる。規模は、確認延長が9.87m、幅0.35~0.60m、検出面から底面までの深さは3~24cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は須恵器、陶磁器が出土しており、その内染付杯が図示できた。



SD9



SD10

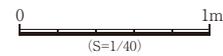


図2-62 V-2区SD9・10

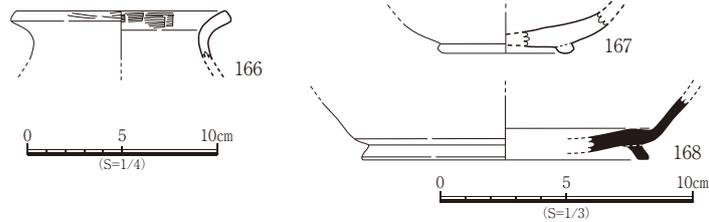
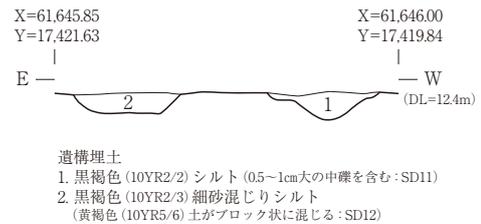
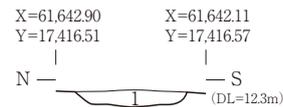


図2-63 V-2区SD9出土遺物実測図



SD11・12



SD13

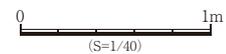


図2-64 V-2区SD11~13

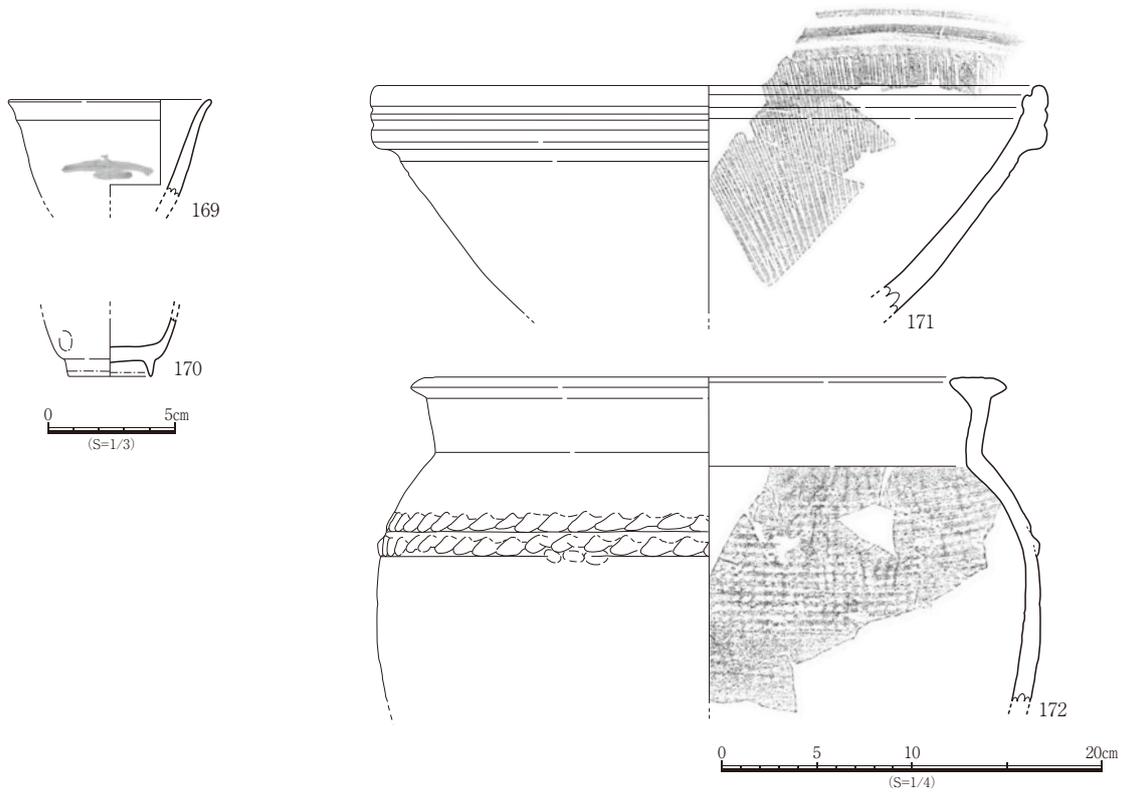


図2-65 V-2区SD11・12出土遺物実測図

出土遺物 (図2-65 169)

169は染付小杯の口縁部である。口縁端部は端反りを呈する。外面と内面はともに施釉し、内面は無文で外面には文様がみられる。

SD12 (図2-64)

調査区の中央部において検出した。南北方向の溝跡で、SD6・10・13・14をきる。遺構の南部はカクランによってきられる。カクランの東側に接するSD3は、その位置関係及び規模からSD12に接続する可能性が考えられる。規模は、確認延長が23.50m、幅0.30～0.75m、検出面から底面までの深さは3～21cmを測り、北から南方向にかけて深くなっている。埋土は小礫及び褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトが主体である。遺物は須恵器、土師質土器、陶磁器が出土しており、その内磁器杯と陶器播鉢・甕が図示できた。

出土遺物 (図2-65 170～172)

170は削り出し高台を呈し、高台畳付けを除いて施釉がみられる。171は播鉢の口縁部から体部である。口縁部は外方に拡張し端部は肥厚する。外面には2条の沈線と工具によるナデ調整がみられる。内面には播目が施され、それら播目の上端部にはナデ調整が施される。172の口縁端部は左右に拡張、

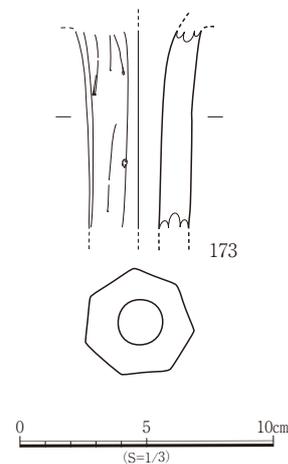


図2-66 V-2区SD13出土遺物実測図

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (4) 溝跡

肥厚する。外面は頸部に2条の粘土帯を貼付し、上から押圧する。内面は口縁部はナデ調整、頸部から体部にかけてワッフル状のタタキを施す。

SD13 (図2-64)

調査区の中央部において検出した。東西方向の溝跡で、SD4・10～12・20とSX5によってきられる。規模は、確認延長が5.63m、幅0.58～1.22m、検出面から底面までの深さは9cmを測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)シルトが主体で、下層には褐色土が含まれる。遺物は土師器が出土しており、その内高杯が図示できた。

出土遺物 (図2-66 173)

173は土師器高杯の脚部である。面取り幅は約2.0cmで、断面形は七角形を呈し、外面はヘラミガキを施す。内面はナデ調整がみられる。

SD14

調査区の中央部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の東側はSD12にきられる。規模は、確認延長9.90m以上、幅0.37～0.55m、検出面から底面までの深さは11～32cmを測る。埋土は暗褐色土を含む黒色(7.5YR1.7/1)シルトである。遺物は、弥生土器と須恵器片である。

SD15

調査区の北部において検出した。北西から南東方向の溝跡で、遺構の中央部はSX9によってきられる。規模は、確認延長が3.94m、幅0.19～0.41m、検出面から底面までの深さは5cmを測る。遺物は、図示でき得たものはなかった。

SD16

調査区の北西隅において検出した。北西から南東方向の溝跡である。規模は確認延長が5.35m、幅0.19～0.41m、検出面から底面までの深さは6cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は、図示でき得たものはなかった。

SD17 (図2-67)

調査区の南部において検出した。南北方向の溝跡で、遺構の南部は調査区外にのびると考えられる。規模は確認延長が14.70m以上、幅0.41～0.91m、検出面からの底面までの深さは7～15cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器、土師質土器、須恵器が出土しており、その内土師質土器杯と須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図2-68 174・175)

174は土師質土器杯あるいは皿の口縁部である。外面と内面には回転ナデ調整が施される。175は須恵器壺の体部である。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。

SD18 (図2-69)

調査区の東部端において検出した。南北方向の溝跡で、調査区を縦断し調査区外に続く。規模は確認延長が40.70m、幅0.44～1.39m、検出面から底面までの深さは19

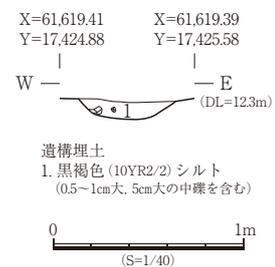


図2-67 V-2区SD17

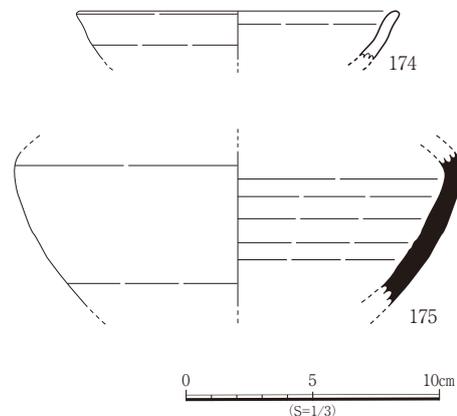


図2-68 V-2区SD17出土遺物実測図

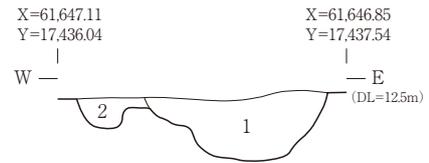
～37cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトが主体で、褐色土が混じる。遺物は土師質土器、須恵器、瓦質土器、陶磁器が出土しており、その内、須恵器皿・杯、瓦質土器羽釜、陶磁器碗・鉢が図示できた。

出土遺物(図2-70 176～181)

176は須恵器皿である。口縁端部は外反し、外面と内面にはナデ調整が施される。177は須恵器杯の底部である。底部外面には高台を貼付し、高台の外面と内面にナデ調整で、底部内面にもナデ調整がみられる。178は陶器の丸形碗である。底部は削り出し高台で、高台畳付けを除いて全面施釉が認められる。179は陶器鉢である。外面は刷毛目による横線、内面は刷毛目による波状文が施される。外面の体部下半は露胎しており、白色の化粧土に緑色釉がかかる。180は肥前系磁器の染付碗と考えられる。底部見込みには植物文を配し、高台外面には三重の圈線文がみられる。181は瓦質土器羽釜の口縁部である。口縁部は内傾し、外面には鏝を貼付するが、鏝端部は途中欠損する。外面と内面は摩耗が著しいが、内面の一部にはヨコ方向のハケ目調整がみられる。

SD19(図2-69)

調査区の南東部において検出した。北西から南東方向の溝跡で、遺構の南部は調査区外に続く。規模は確認延長が23.28m、幅0.68～1.13m、検出面から床面までの深さは7～19cmを測る。南東隅に



- 遺構埋土
 1. 黒褐色(10YR3/2)シルト
 (1～2cm大、5cm大、10～20cm大の中・大礫を多く含む)
 2. 黒褐色(10YR3/2)シルト
 (褐色(10YR4/4)土が少量混じり、1～2cm大の中礫を含む)

SD18



- 遺構埋土
 1. 黒褐色(10YR3/2)シルト
 (褐色(10YR4/4)土が少量混じり、1～3cm大の中礫を含む)

SD19

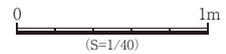


図2-69 V-2区SD18・19

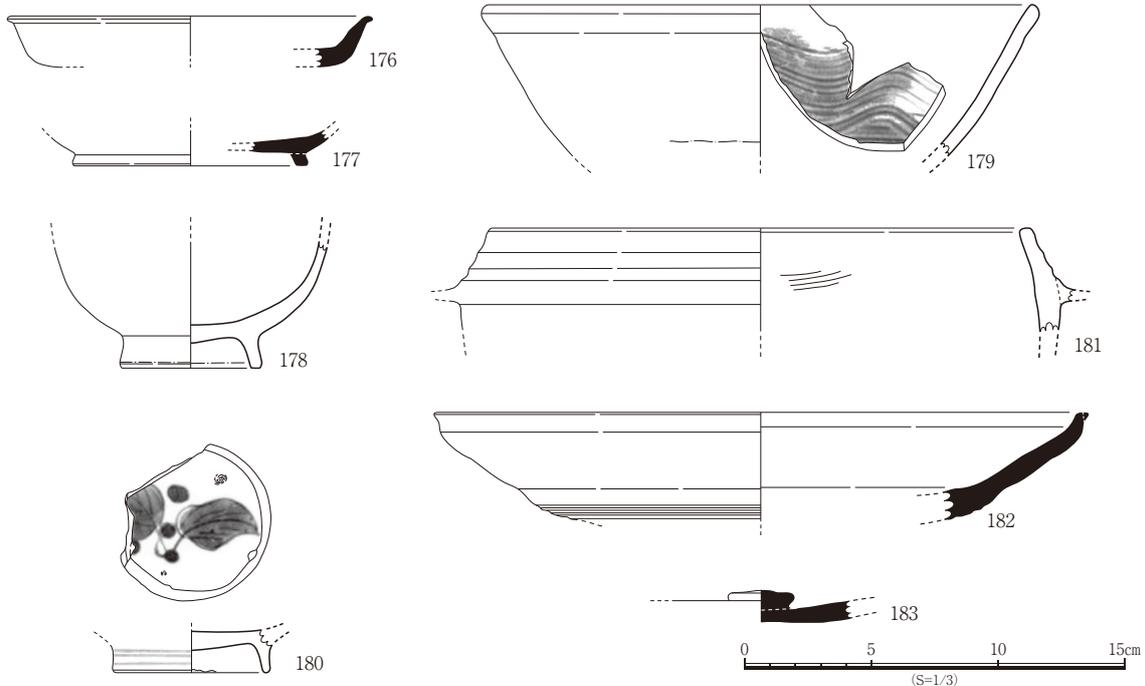


図2-70 V-2区SD18・19出土遺物実測図

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (4) 溝跡

かけて深くなる。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は弥生土器、須恵器、土師質土器が出土しており、その内須恵器盤と蓋が図示できた。

出土遺物 (図2-66 182・183)

182は盤あるいは鉢と考えられる。口縁端部は上方につまみ上げ、外面と内面はともに回転ナデ調整で、外面底部周辺には回転ケズリが施される。183は蓋である。つまみ径は2.6cmで、擬宝珠形を呈する。外面と内面はナデ調整で、外面の一部には摩耗がみられる。

SD20 (図2-71)

調査区の中央部において検出した。調査区北壁から中央部にかけてのL字状を呈する溝跡である。規模は、確認延長が調査区北壁から南方にかけて24.60mのびて折れ、東方向に3.40mのびる。幅は0.39~0.62mで、検出面から底面までの深さは10~26cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器、陶磁器、瓦が出土しており、その内土師質土器皿、染付碗、瓦が図示できた。

出土遺物 (図2-72 184~187)

184は土師質土器皿である。底部は平坦面を呈し、口縁部は外方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部外面と内面には回転ナデ調整が施されるが、一部摩耗する。185も同じく土師質土器皿である。底部は平坦面を呈し、口縁部は外方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部の外面と内面は回転ナデ調整で、底部内面にはナデ調整による凹凸がみられる。

186は染付丸形碗である。底部は削り出し高台で、高台畳付けを除いて施釉が認められる。内面見込みに五弁花文、高台外面と内底面に圈線文が施される。肥前形磁器と考えられる。187は棧瓦であ

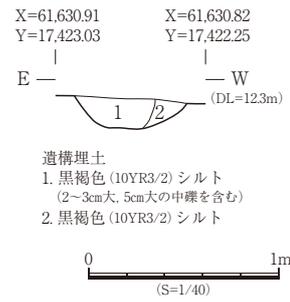


図2-71 V-2区SD20

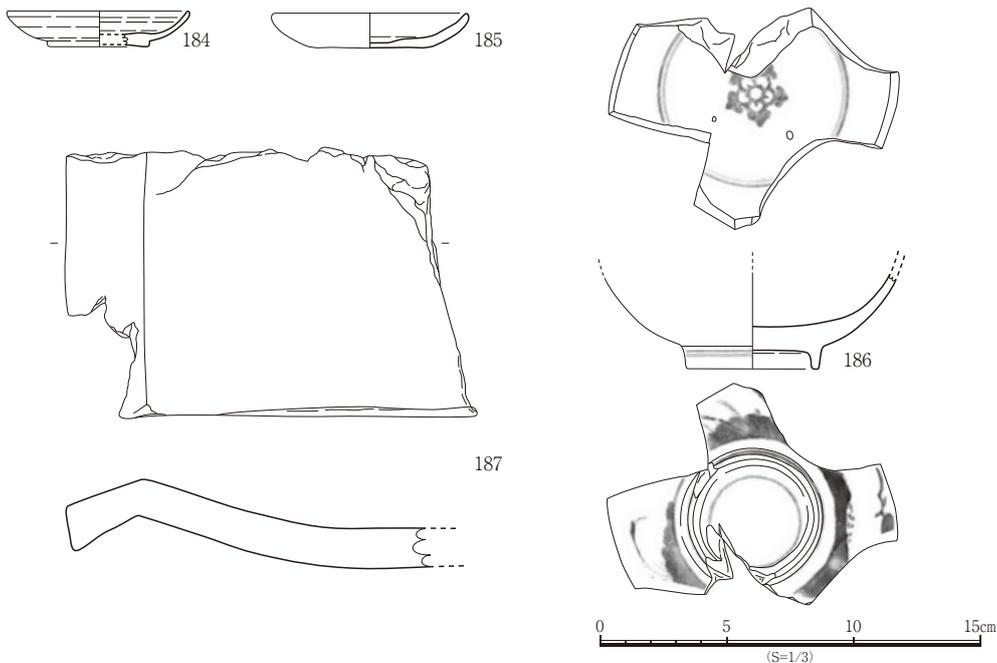


図2-72 V-2区SD20出土遺物実測図

る。凹面と凸面はナデ調整で、一部摩耗するため調整は不明瞭である。

SD21

調査区の南東隅において検出した。調査区中央部から南東部方向にのびるSD19の下層より検出した。規模は確認延長が、4.06m以上で、遺構の東側は調査区外に続くと考えられる。幅は0.41~0.96mで、検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は小礫を含む黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は須恵器と土師質土器であるが、図示でき得たものはなかった。

SD22

調査区の北東部において検出した。調査区北東部を東西方向にのびるSD10に接続すると考えられる溝跡である。規模は、確認延長が2.36m、幅0.29~0.50m、検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は、図示でき得たものはなかった。

(5) 柱穴

P7 (図2-73)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.36mで検出面から底面までの深さは20~29cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトに暗灰色土が含まれる。遺物は弥生土器、土師質土器と須恵器が出土しており、その内土師質土器皿と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-74 188・189)

188は土師質土器皿である。平坦な底部から口縁部は外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が

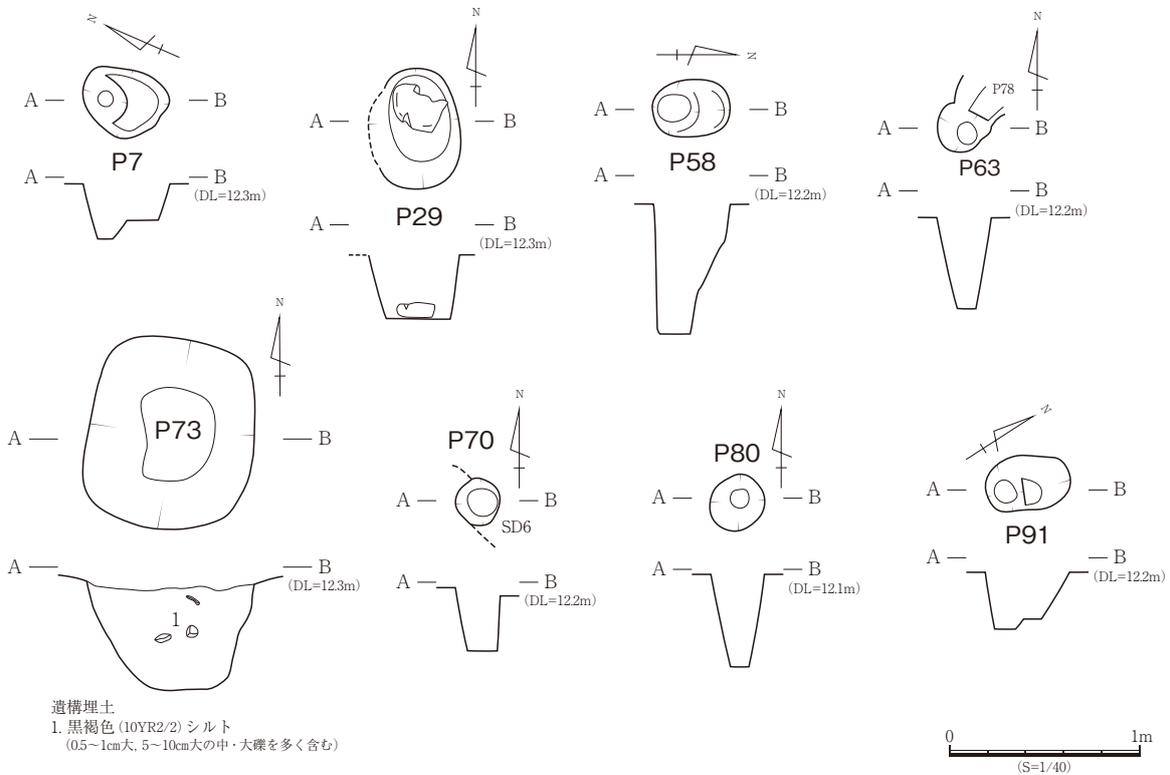


図2-73 V-2区P7・29・58・63・70・73・80・91

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (5) 柱穴

残り、口縁部の外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。底部には切り離し後の圧痕がみられる。189は須恵器杯の底部である。底部外面には高台を貼付し、外面と内面にはナデ調整が施される。

P29 (図2-73)

調査区の中央西端において検出した。平面形は楕円形を呈する。規模は長径が0.64m、短径0.48mで、検出面から底面までの深さは35cmを測る。底面には長径28cm、短径16cmを測る根石がみられた。埋土はにぶい黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は、図示でき得るものはなかった。

P58 (図2-73)

調査区の西部において検出した。P72に接し、P72をきる。平面形は楕円形状を呈し、長径は0.41m、短径0.30mで、検出面からの底面までの深さは69cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器、須恵器が出土しており、その内須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図2-74 190)

190は須恵器壺の体部である。外面には長方形の突起が貼付される。周囲はナデ調整と指頭圧痕が施される。内面は回転ナデ調整である。外面には自然釉がかかる。

P63 (図2-73)

調査区の西部中央において検出した。P78に接し、P78をきる。平面形は円形状を呈し、径が0.25m前後、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器と須恵器が出土しており、その内甕が図示できた。

出土遺物 (図2-74 191)

191は須恵器甕の口縁部から体部である。口縁端部は上方に肥厚する。外面は平行のタタキ目が認められる。内面はナデ調整が施される。

P70 (図2-73)

調査区の北西部、調査区を北西から南東方向にのびるSD6の底面より検出した。平面形は円形を呈し、規模は径0.24mで検出面から底面までの深さは約30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は弥生土器が出土しており、その内壺あるいは甕が図示ができた。

出土遺物 (図2-74 192)

192は弥生土器壺あるいは甕の底部である。平底を呈し、外面にタタキ目が認められる。タテ方向のハケ目調整とナデ調整を施す。内面はヘラ状工具によるナデ調整がみられる。

P73 (図2-73)

調査区の北部隅において検出した。平面形は隅丸方形形状を呈する。規模は長径が1.00m、短径0.87mで、検出面から底面までの深さは66cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は弥生土器と土師器、須恵器が出土しており、その内土師器甕と須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図2-74 193・194)

193は須恵器壺である。外面と内面は回転ナデ調整で内面に一部自然釉がかかる。194は土師器甕の口縁部である。口縁部は外方に大きく開き、端部は平坦面を呈する。外面は口縁部から頸部はナデ調整とタテ方向のハケ目調整。内面にはナデ調整がみられる。

P80 (図2-73)

調査区の南西隅部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね0.30mで、検出面から底面までの深さは49cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器が出土してお

り、その内甕が図示できた。

出土遺物 (図2-74 195)

195は弥生土器甕である。口縁部は外反し、外面は口縁部までタタキ目が認められる。口縁部から体部にかけてハケ目調整が施され、内面は口縁部にナデ調整、頸部から体部には指頭圧痕とナデ調整がみられる。

P91 (図2-73)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.45m、短軸は0.29mで検出面から底面までの深さは24～30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器と須恵器が出土しており、その内須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-74 196)

196は底部切り離しは回転ヘラ切りと考えられ、高台を貼付する。外面と内面は回転ナデ調整が施される。

P92 (図2-75)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.42m、短軸0.24mで検

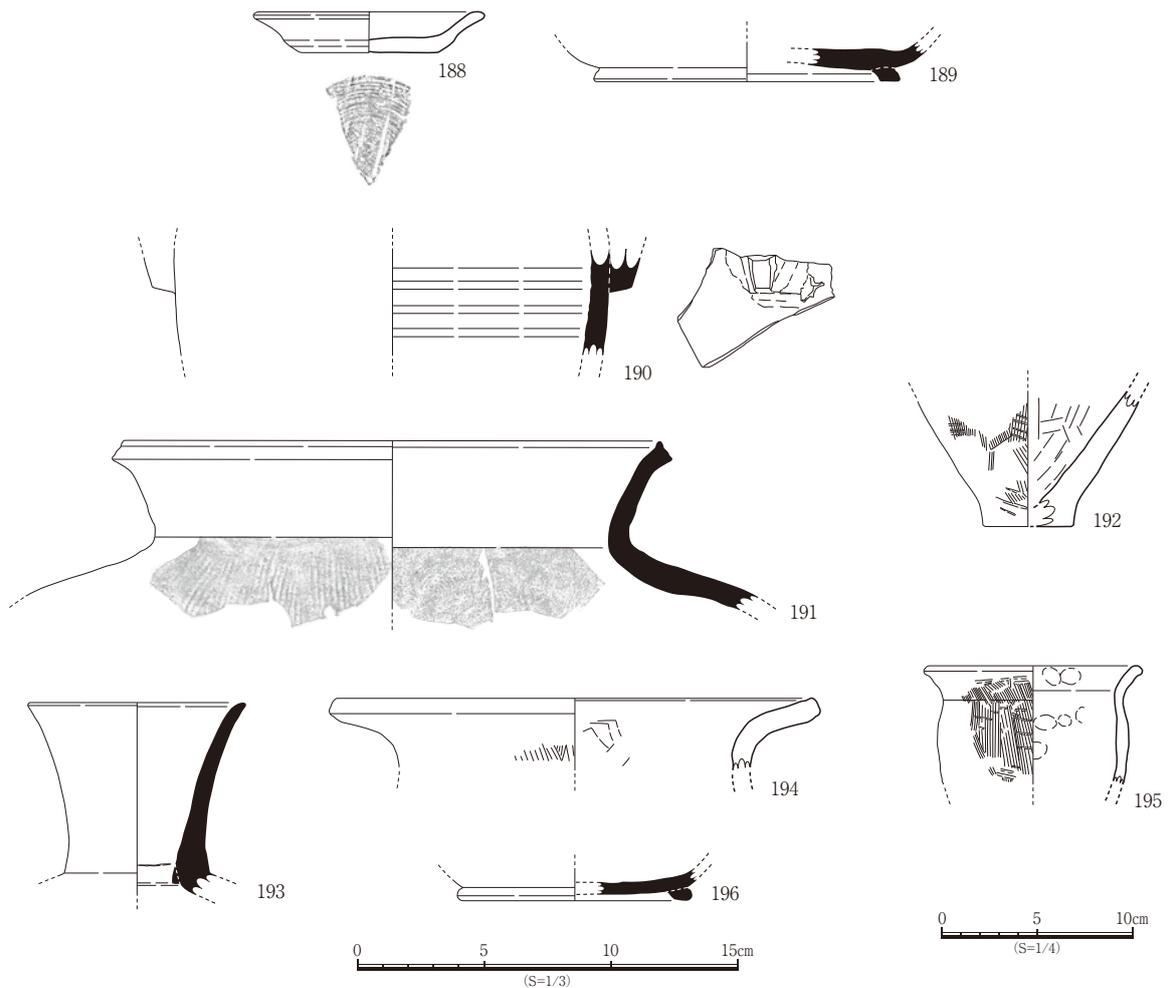


図2-74 V-2区P7・58・63・70・73・80・91出土遺物実測図

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (5) 柱穴

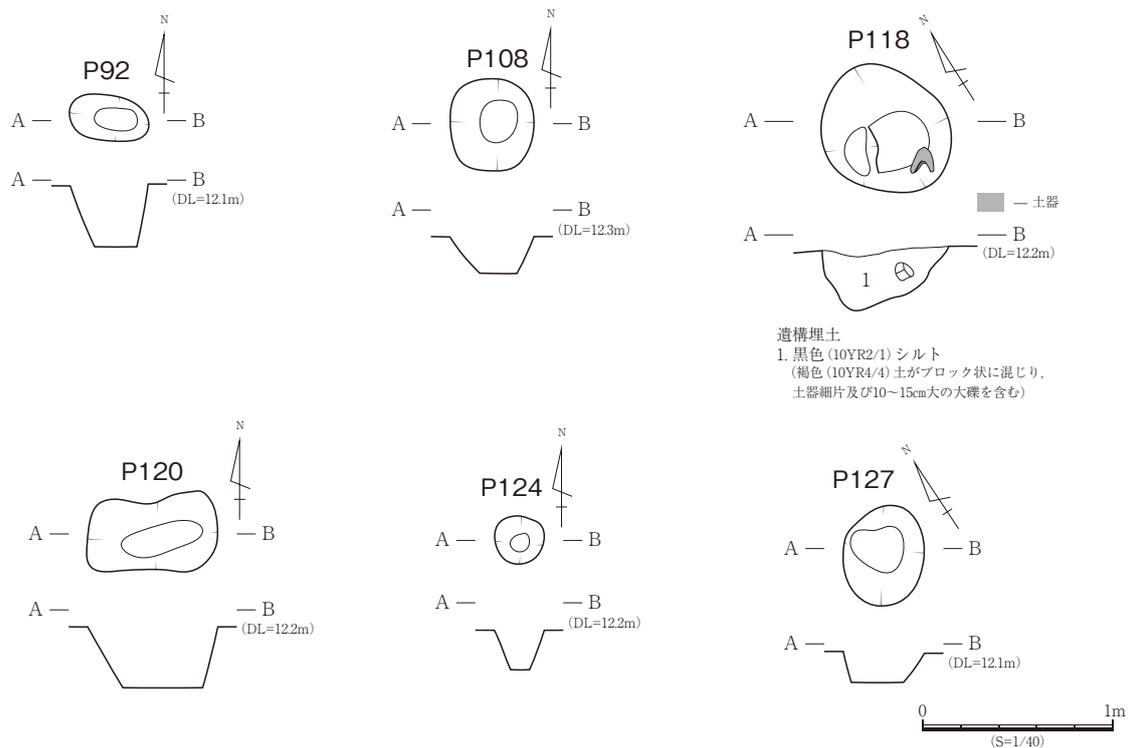


図2-75 V-2区P92・108・118・120・124・127

出面から底面までの深さは33cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師器が出土しており、その内皿が図示できた。

出土遺物 (図2-76 197)

197は底部は平底を呈し、口縁部は外方に開く。口縁部端部は平坦面を呈す。外面と内面にはナデ調整が施される。

P108 (図2-75)

調査区の中央部において検出した。平面形は円形状を呈する。規模は径が0.45m前後で、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師質土器が出土しており、その内皿と椀が図示できた。

出土遺物 (図2-76 198・199)

198は土師質土器の皿である。底部は平底を呈し、底部外面には回転糸切り痕が認められる。口縁部は外方に開く。外面と内面は回転ナデ調整が施され、外面はロクロ目が顕著である。199は椀の底部である。底部外面に高台を貼付し、高台内には回転糸切り痕が認められる。外面と内面は摩耗しているが、一部にナデ調整がみられる。

P118 (図2-75)

調査区の中央南部において検出した。平面形は楕円形状を呈する。規模は長径が0.74m、短径0.65mで検出面から底面までの深さは42cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と10~15cm大の礫を含む黒色(10YR2/1)シルトである。検出面より5cm程掘削すると、土製品が完形品の状態で出土した。その他、弥生土器と須恵器片が出土している。

出土遺物 (図2-76 200)

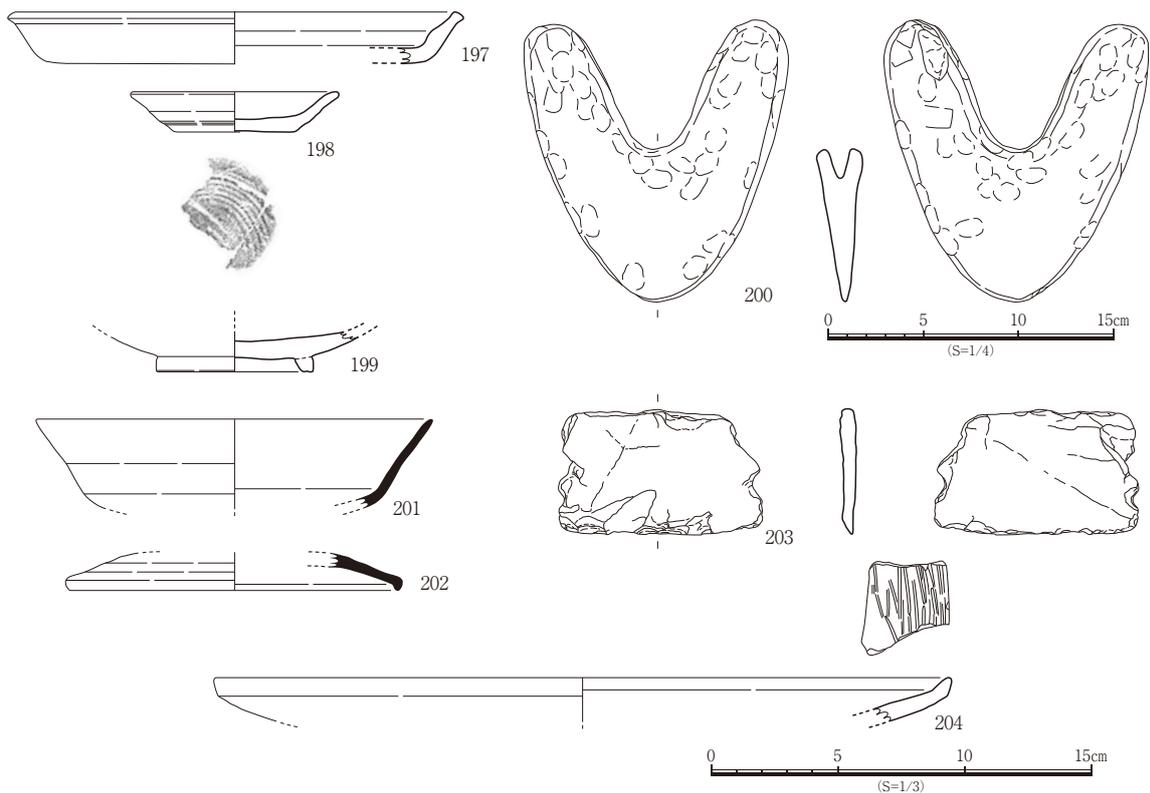


図2-76 V-2区P92・108・118・120・124・127出土遺物実測図

200は鋤形を呈する。全長15.0cm, 全幅14.0cm, 全厚2.4cmを測り, 胎土は須恵器のような還元炎焼成色をなす。上部に厚みを持ち, 先端部にかけて薄いつくりとなる。外面内面ともに指頭圧痕とナデ調整が認められ, U字形の上部断面は凹状を呈し, 周囲はナデ調整が施される。

P120 (図2-75)

調査区の南西部において検出した。平面形は隅丸長形状を呈し, 規模は長軸が0.68m, 短軸は0.41mで検出面からの深さは32cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は須恵器杯と蓋が出土している。

出土遺物 (図2-76 201・202)

201は須恵器杯の口縁部である。外面と内面は摩耗しているが, 一部に回転ナデ調整がみられる。202は須恵器蓋である。外面と内面にはともに回転ナデ調整が施される。

P124 (図2-75)

調査区の中央南部において検出した。P118の西側に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径が0.25m, 検出面から底面までの深さは, 21cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)シルトで, 底面近くからは石製品石包丁が出土している。

出土遺物 (図2-76 203)

203は打製石包丁である。全体に摩耗しているが, 左側縁1箇所, 右側縁2箇所を打ち欠いている。裏面には剥離面が残る。片岩系と考えられる。

P127 (図2-75)

調査区の南西部において検出した。平面形は円形状を呈し, 規模は径が概ね0.45m前後で, 検出面

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (5) 柱穴

から底面までの深さは17cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器が出土しており、その内皿が図示できた。

出土遺物 (図2 - 76 204)

204は皿あるいは盤の口縁部である。赤彩が施されており、外面は摩耗している。内面はヘラミガキとナデ調整がみられる。

P138 (図2 - 77)

調査区の南端において検出した。掘立柱建物跡SB2 - P2の南東側に位置する。遺構の北部のみの検出で、南部は調査区外に続くと考えられる。規模は、確認長が南北0.57m以上、東西0.90mで、検出面から底面までの深さは68cmを測る。埋土は5~10cm大と15~20cm大の礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトが主体で、下層には褐色(10YR4/4)土が含まれる。遺物は土師器、須恵器が出土しており、その内土師器皿・杯・甕、須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2 - 78 205~208)

205は土師器皿の口縁部である。外面と内面は摩耗するが、口縁部端部にはナデ調整がみられる。206は土師器杯の底部である。底部外面には高台を貼付しており、外面は摩耗しているが、一部にナデ調整がみとめられる。内面はナデ調整で、一部ヘラミガキがみられる。207は須恵器杯の口縁部である。外面と内面は回転ナデ調整が施され、外面は一部摩耗している。208は土師器甕の口縁部である。口縁部は外方に開き、端部は平坦面で浅い凹みを呈する。外面と内面はナデ調整が施される。

P146 (図2 - 77)

調査区の南東部において検出した。調査区を北西から南東方向にのびるSD19の中央部西側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね0.45m前後で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器片と黒色土器碗が出土している。

出土遺物 (図2 - 78 209)

209は黒色土器碗の体部片である。外面内面ともに黒色を呈し、外面は摩耗するが、ヨコ方向のヘラミガキ、内面にもヨコ方向の密なヘラミガキが施される。

P149 (図2 - 77)

調査区の南東部において検出した。調査区を北西から南東にかけのびる溝跡SD19の中央西側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は、長径が0.65m、短径0.45mで検出面から底面までの深さは27cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器と黒色土器碗が出土している。

出土遺物 (図2 - 78 210)

210は内面は炭素吸着は薄れているが、内黒を意識したものか。底部外面に高台を貼付し、外面と内面は回転ナデ調整が施されている。

P158 (図2 - 77)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.77m、短軸は0.39mで検出面から底面までの深さは25cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しており、その内須恵器高杯が図示できた。

出土遺物 (図2 - 78 211)

211は脚部である。外面内面ともに摩耗するが、一部にナデ調整がみられる。

P183 (図2 - 77)

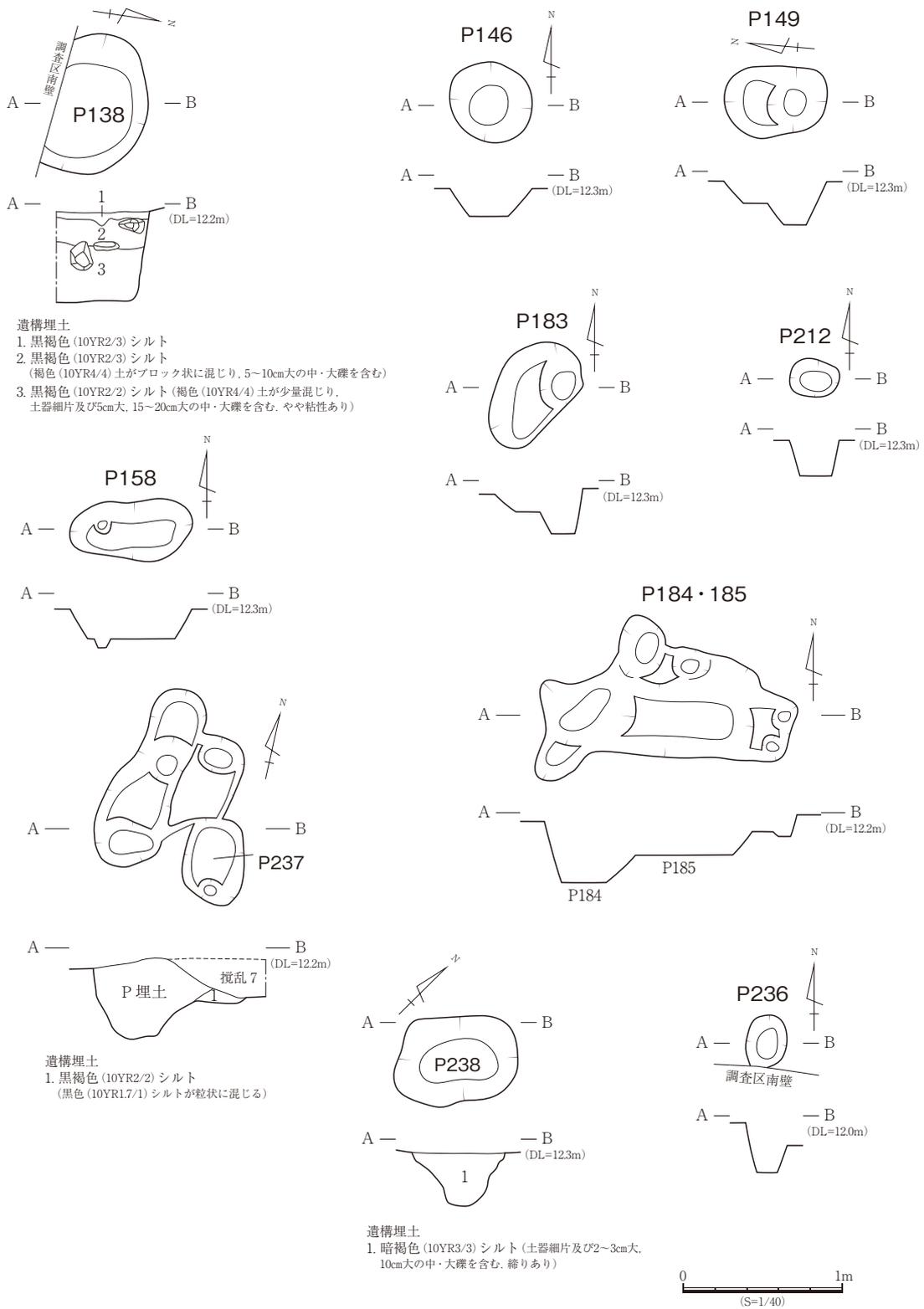


図2-77 V-2区 P138・146・149・158・183~185・212・236~238

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (5) 柱穴

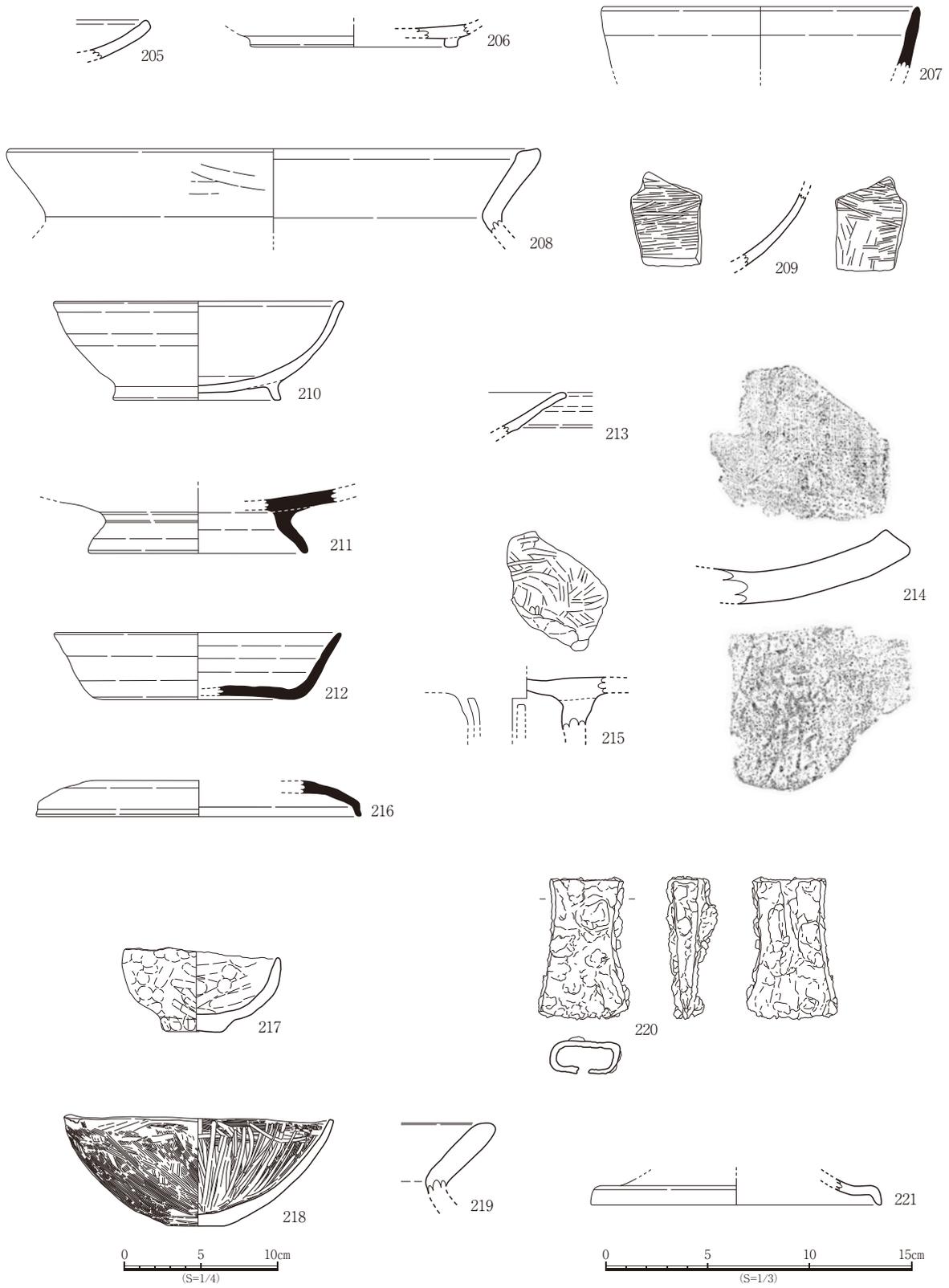


図2-78 V-2区P138・146・149・158・183～185・212・236～238出土遺物実測図

調査区の東部中央において検出した。調査区を北西から南東にかけのびる溝跡SD19北西部の東側に位置する。平面形は楕円形状を呈しており、規模は長径が0.73m、短径0.46mで、検出面から底面までの深さは28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器と須恵器が出土しており、その内土師質土器杯と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-78 212・213)

212は須恵器杯である。底部は平底を呈し、外面と内面はともに摩耗するが、回転ナデ調整が一部認められる。213は土師質土器杯の口縁部である。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。

P184 (図2-77)

調査区の南部において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が概ね0.55m前後で検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器、須恵器、瓦が出土している。

出土遺物 (図2-78 214)

214は瓦片である。全体に摩耗しているが、凹面は布目痕、凸面に格子状のタタキ目が残る。

P185 (図2-77)

調査区の南部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.76m以上で短軸は0.47mで、検出面から底面までの深さは23cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しており、その内土師器高杯と須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図2-78 215・216)

215は土師器高杯の脚部である。外面は脚部にナデ調整、杯部にナデ調整とヘラミガキが施される。216は須恵器蓋である。端部は下方にのびる。外面と内面はともにナデ調整が施される。

P212 (図2-77)

調査区の中央部において検出した。調査区中央部を南北にのびる溝跡SD12とSD20の間に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径が0.31m、短径0.24mで、検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は弥生土器が出土しており、その内鉢が図示できた。

出土遺物 (図2-78 217)

217は外面と内面にともに指頭圧痕とナデ調整が施される。外面はヘラ状工具によるナデ調整がみられる。

P236 (図2-77)

調査区の南西隅において検出した。SK9に接するが新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、規模は長径が0.31m、短径0.24mで、検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)シルトである。遺物は弥生土器鉢が出土している。

出土遺物 (図2-78 218)

218は弥生土器鉢である。平底で、外面は底部から口縁部までタタキ目が残る。タテと斜位方向のハケ目、一部にヘラミガキが施される。内面にはタテとヨコ、斜位方向のハケ目調整後ヘラミガキを施す。外面にススがみられる。

P237 (図2-77)

調査区中央西側において検出した。上面の一部はカクランによってきられており、その掘削段階

4. V-2区の検出遺構と出土遺物 (6) 性格不明遺構

で確認した。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-5°-Wを示す。規模は長径0.54m、短径0.38mで、検出面から底面までの深さは約9~18cmを測る。埋土は黒色シルトを含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器、土師器と金属製品が出土しており、その内土師器甕と鉄斧が図示できた。

出土遺物 (図2-78 219・220)

219は土師器甕の口縁部である。口縁部は外方に開き、端部は丸くおさめる。内面と外面はナデ調整で、外面は一部摩耗している。スス付着がみられる。220は袋状鉄斧である。基部は折り曲げ袋状を呈する。

P238 (図2-77)

調査区の南東部において検出した。平面形は隅丸長方形形状を呈し、主軸方向はN-39°-Eを示す。規模は長径0.78m、短径0.57mで、検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は小礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器が出土しており、その内高杯が図示できた。

出土遺物 (図2-78 221)

221は高杯の脚部である。裾端部は下方にのび、丸くおさめる。外面と内面にナデ調整が施される。

(6) 性格不明遺構

SX5 (図2-79)

調査区の北西部において検出した。SD13に接し、きる。平面形は円形状を呈し、規模は径が2.20mで、検出面から底面までの深さは43cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトで、埋土には人頭大の石が含まれる。遺物は陶磁器と石製品が出土しており、その内、染付小杯と石臼が図示できた。

出土遺物 (図2-80 222・223)

222は筒形小杯で肥前系磁器と考えられる。体部外面に圏線と四方嚮文を配し、内面は無文である。223は石臼の上臼である。側面と上面部にハツリ痕及び供給口が認められる。摩耗しているが、底面には放射状の臼目がみられる。砂岩製である。

SX7 (図2-79)

調査区の北部隅において検出した。上面はSK3にきられる。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-8°-Eを示す。規模は長軸が4.42m、短軸が2.46mで、検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しており、その内土師器皿と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図2-80 224・225)

224は土師器皿である。外面と内面はナデ調整で、ヘラミガキを施す。底部外面に粘土紐痕が残る。225は須恵器杯である。底部外面に高台を貼付し、外面は摩耗する。内面はナデ調整が施される。

SX14 (図2-79)

調査区の南西部において検出した。平面形は隅丸長方形形状を呈し、規模は長軸が1.60m、短軸1.30mで、検出面から底面までの深さは54cmを測る。埋土は円礫を多く含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器、瓦質土器、陶器、磁器が出土しており、その内土師器釜、瓦質土器火鉢、陶器碗・鉢、磁器皿・碗・蓋・瓶・香炉が図示できた。

出土遺物 (図2-81~84 226・233・239・242・246・247・253・254・256~258)

226は土師器釜の口縁部である。断面三角形の鐳を貼付。外面はナデ調整と鐳下半に指頭圧痕。内

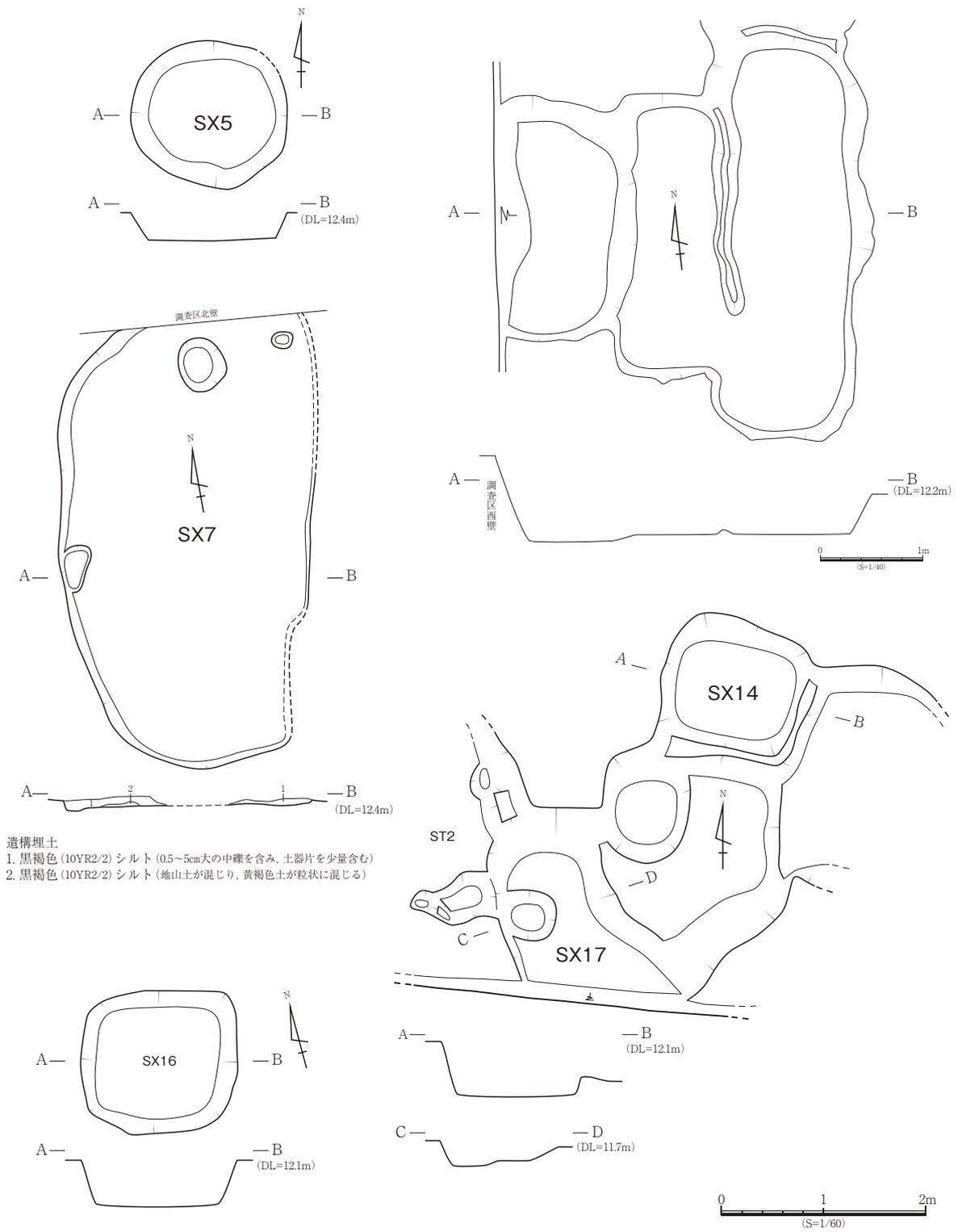


図2-79 V-2区SX5・7・14~17

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (6) 性格不明遺構

面はナデ調整, ヨコ方向のハケ目調整が施される。233 は瓦質土器の火鉢である。外面は口縁部下方に1条の沈線が施され, 下半部にワッフル状のタタキ目が認められる。内面はナデ調整である。239 は筒形碗あるいは火入れと考えられる。陶胎染付で, 外面に植物文を配し, 内面と体部下半から高台にかけて露胎である。242 は口縁端部は外方に拡張, 肥厚, 端部は凹状を呈す。内面は銅緑釉薬に刷毛目による横線で, 外面は底部途中まで施釉。246 は輪花皿である。銅板転写か。外面に植物文, 高台に雷文, 内面見込みに植物文が施される。247 は肥前系磁器皿か。底部削り出し高台。高台畳付け以外は施釉。内面に芙蓉手, 植物文, 外面に圈線文が施される。253 は丸形碗である。外面は体部に植物, 高台に二重圈線を施す。内面は無文で, 高台内面に銘あるいは文様がみられる。254 は磁器の蓋である。天井部外面に染付。内面接触部には砂が溶着している。256 は染付丸形碗である。染付部分は滲む。高台畳付けと内面は露胎で, 釉は透明度をもたない。257 は肥前系磁器の瓶と考えられる。底部削り出し高台で, 高台畳付けと内面は露胎。青磁釉がかかる。258 は筒形香炉あるいは

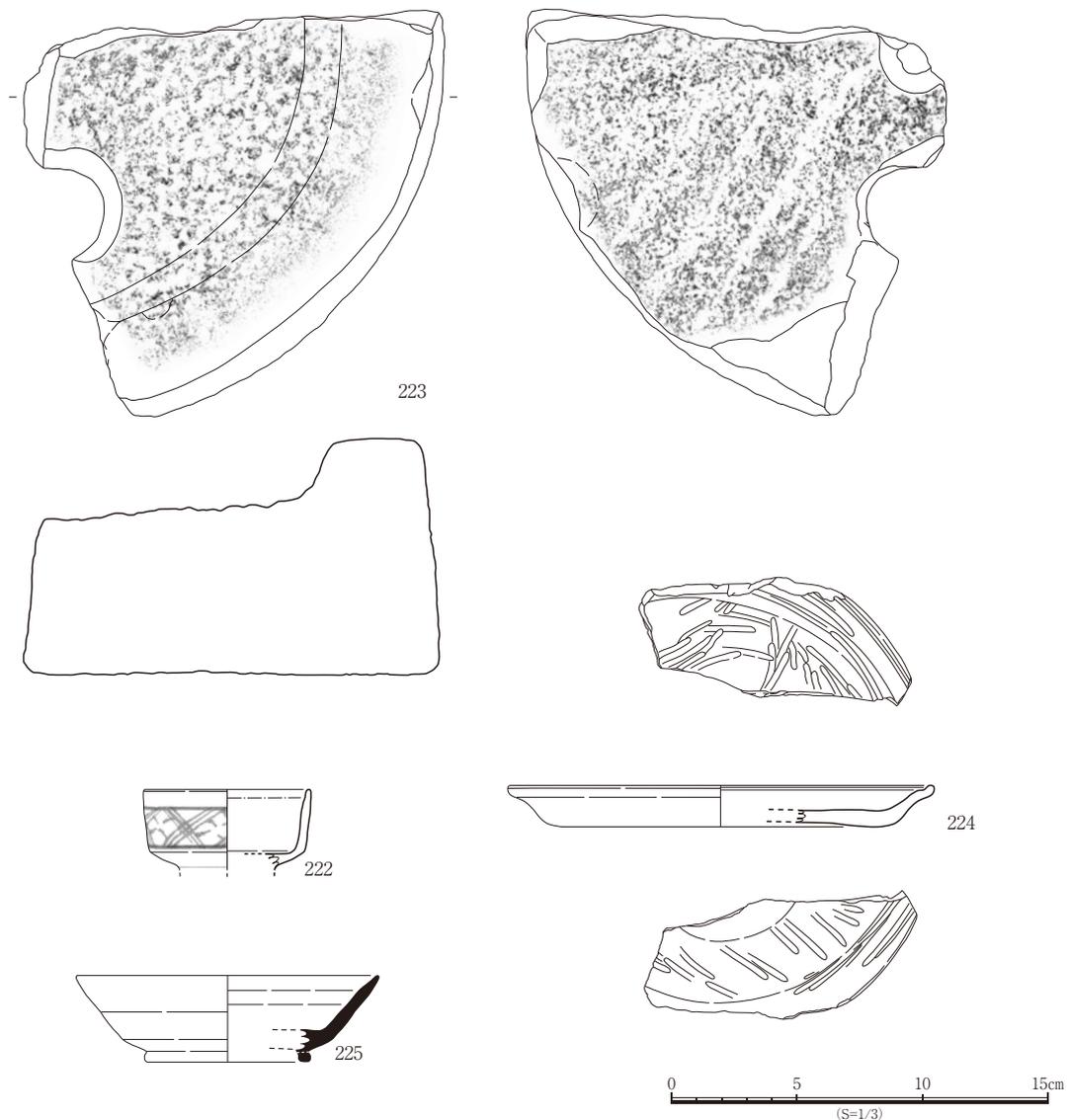


図2-80 V-2区SX5・7出土遺物実測図

火入れと考えられる。底部は蛇ノ目凹高台を呈し、内面口縁下から外面底部高台脇まで青磁釉が施される。

SX15 (図2-79)

調査区の南西部において検出した。平面形は不整形を呈していたが、掘り進めると隅丸長方形状のものが東西方向に3基並んだ状態を確認した。規模は西端から、長軸が2.30m、短軸1.30m、中央は長軸2.70m、短軸約1.0m、東端は長軸3.90m、短軸1.30mを測る。検出面から底面までの深さはそ

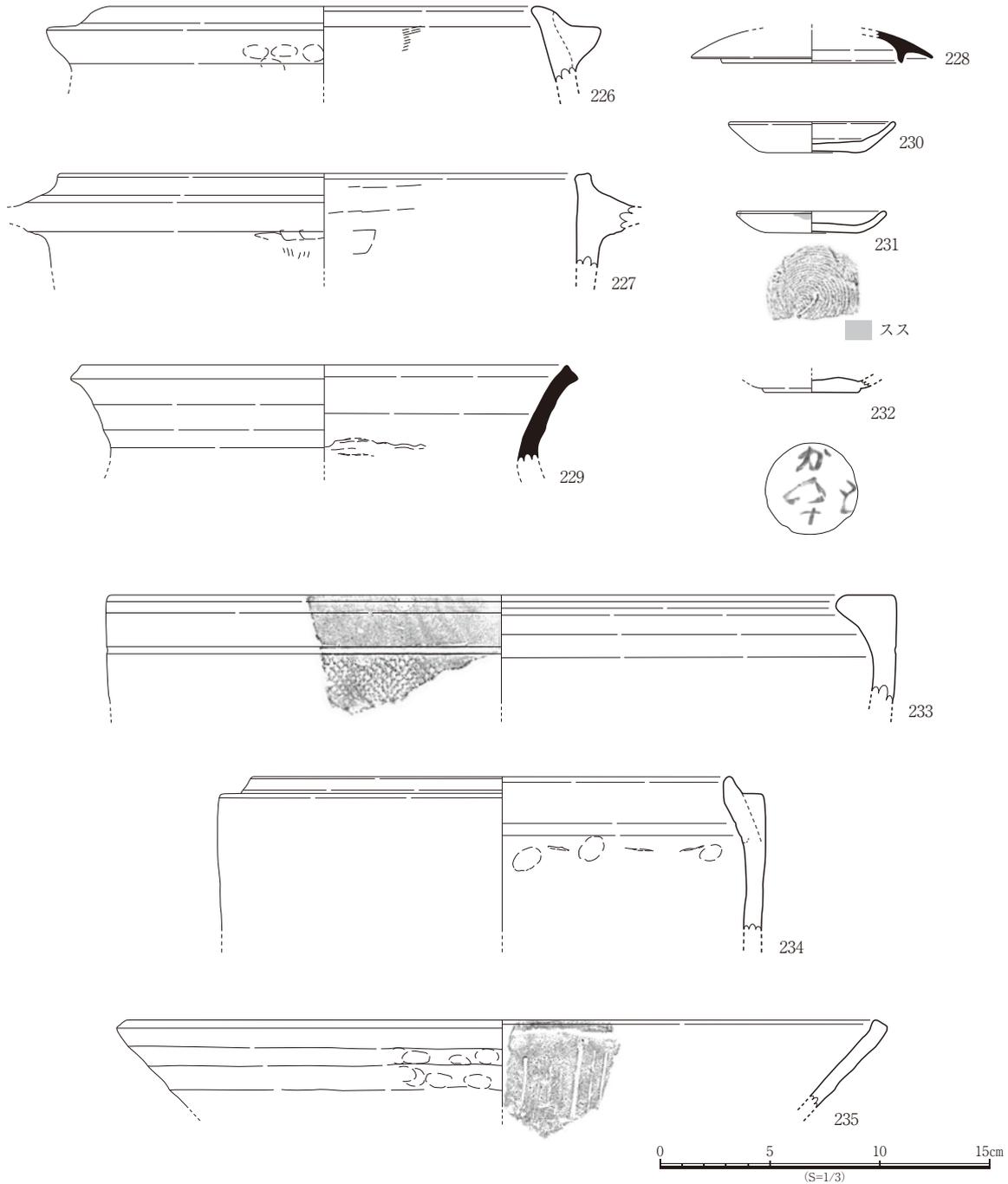


図2-81 V-2区SX14・15出土遺物実測図

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (6) 性格不明遺構

それぞれ東端から約 50 cm, 約 41 cm, 約 40 cm である。埋土は円礫を多く含む暗褐色 (10YR3/3) シルトである。遺物は土師器, 須恵器, 土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 磁器, 瓦, 石製品が出土しており, そのうち土師器羽釜, 須恵器蓋・甕, 土師質土器皿, 瓦質土器壺・搗鉢, 陶器碗, 磁器皿・鉢, 瓦, 硯が図示できた。

出土遺物 (図 2 - 81 ~ 85 227 ~ 232 · 234 · 235 · 237 · 238 · 243 ~ 245 · 248 · 255 · 259 ~ 262)

227 は土師器羽釜の口縁部である。外面は口縁部にナデ調整, 指頭圧痕, 体部はハケ目調整で, 内面はナデ調整で一部摩耗する。228 は須恵器蓋である。内面には断面三角形状のかえり。かえり高 0.45 cm。外面内面ともに回転ナデ調整が施される。229 は須恵器甕である。外面に一部自然釉がかかる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。230 · 231 は土師質土器皿である。230 は底部外面回転糸切り痕が認められる。外面と内面に回転ナデ調整が施され, 外面にススが付着している。231 も底部外面

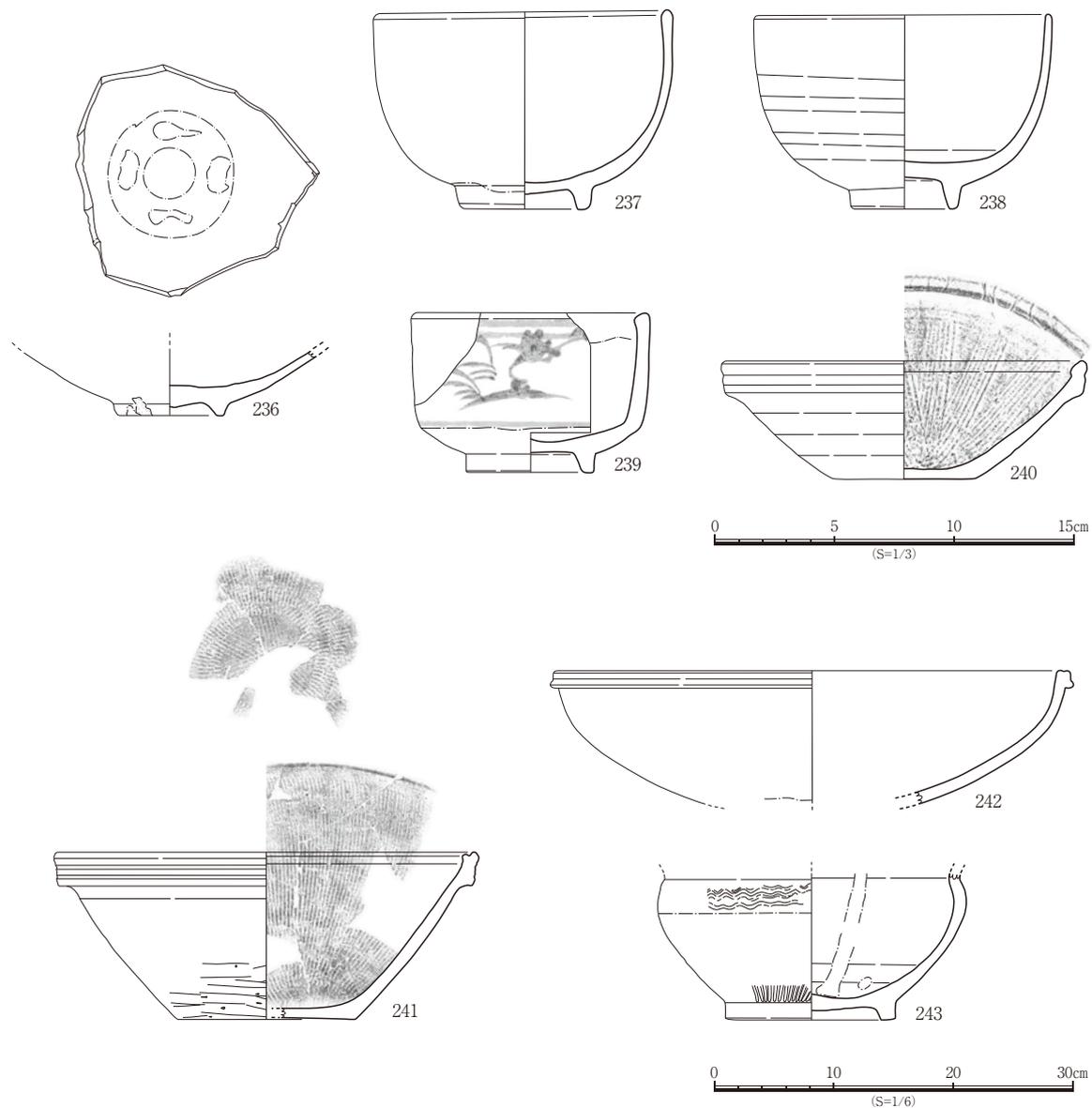


図 2 - 82 V - 2 区 SX14 ~ 17 出土遺物実測図

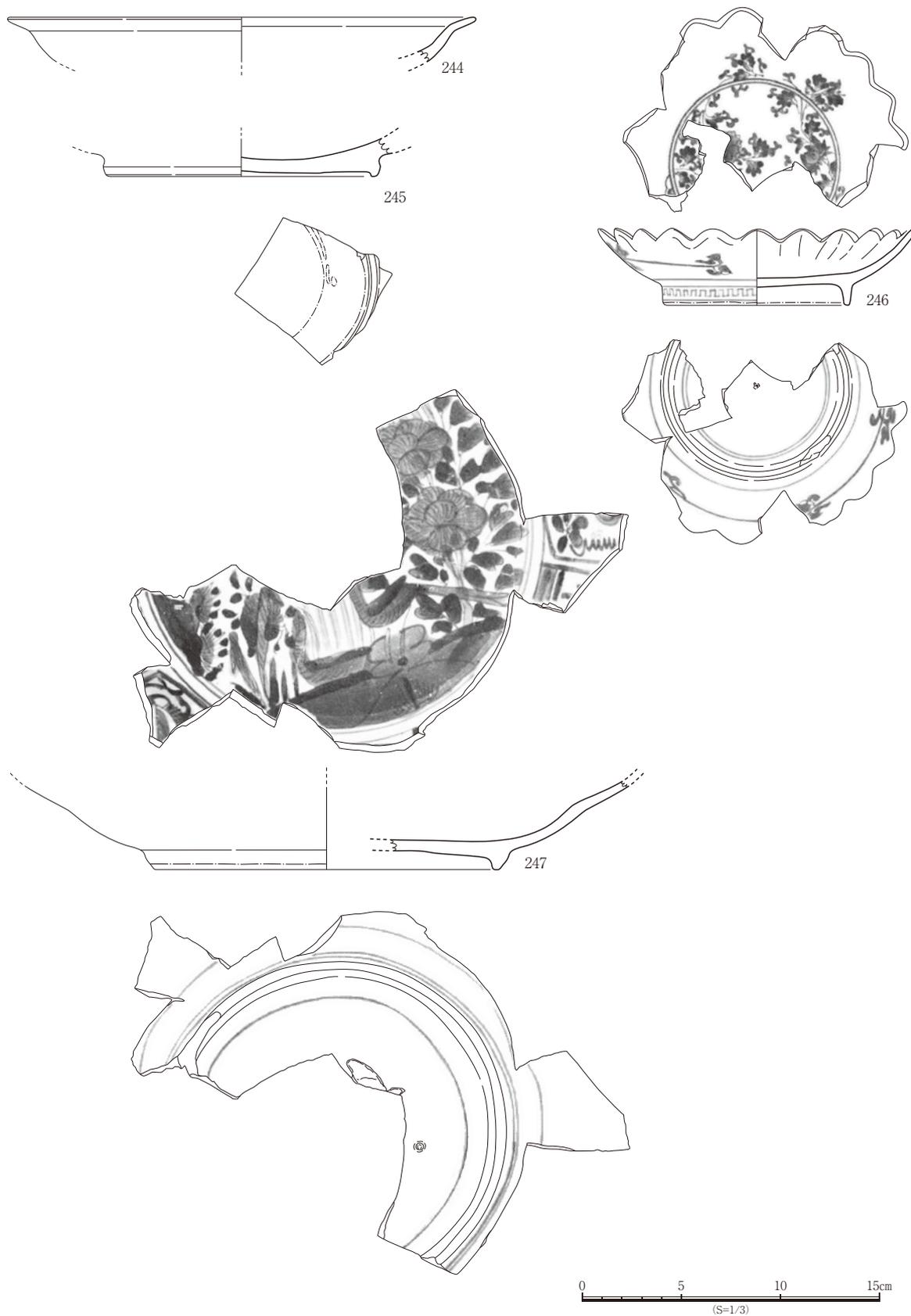


図2-83 V-2区SX14・15出土遺物実測図

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (6) 性格不明遺構

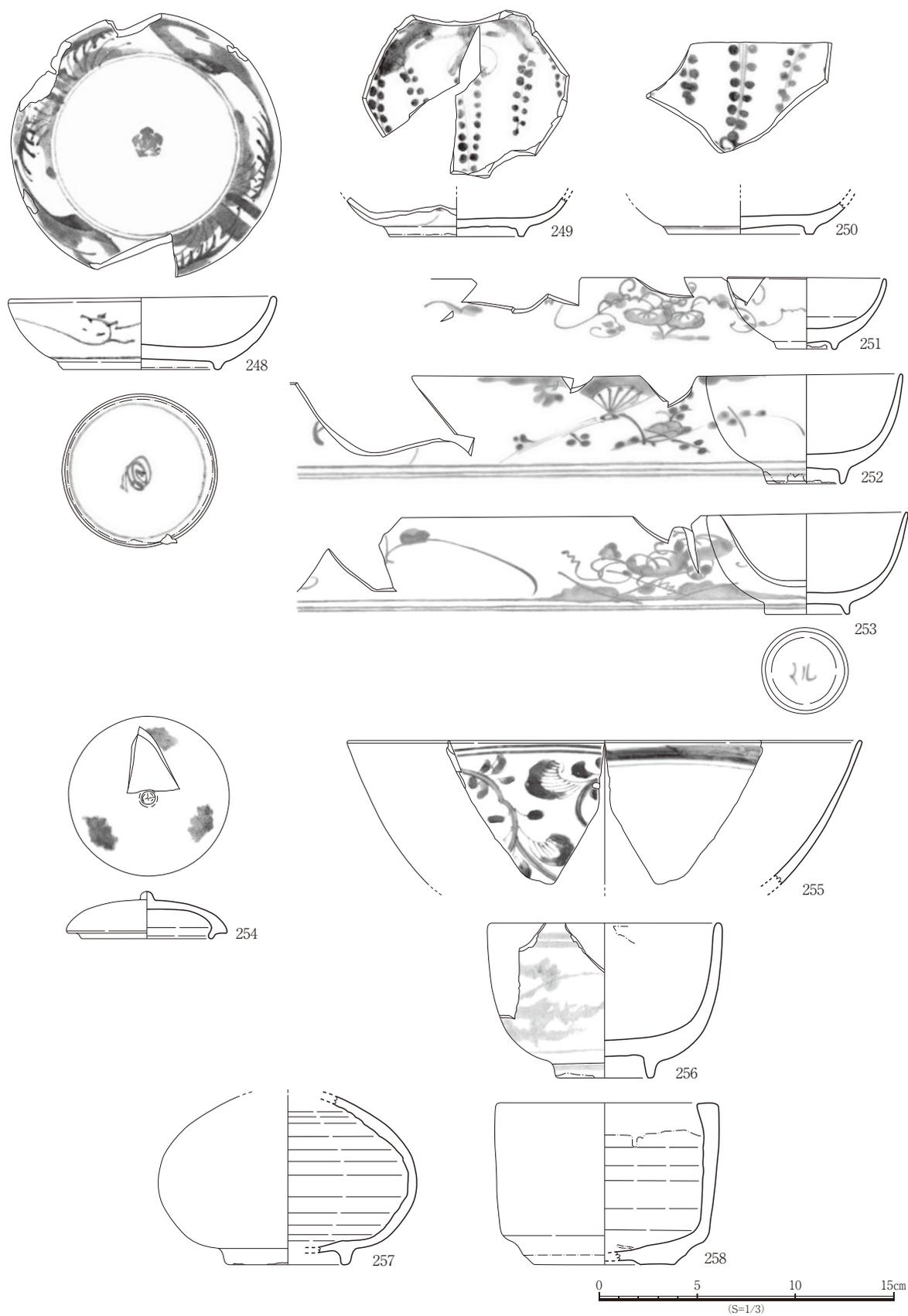


図2-84 V-2区SX14~17出土遺物実測図

回転糸切り痕が認められる。外面と内面に回転ナデ調整, 口縁端部にススが付着している。灯明皿の可能性が考えられる。232は底部外面に回転糸切り痕が認められ, 墨書が確認できる。内面は回転ナデ調整である。234は瓦質土器壺と考えられる。外面と内面にはナデ調整, 内面には指頭圧痕がみられる。235は瓦質土器の鉢で, 外面は摩耗が顕著, 指頭圧痕が残る。内面はナデ調整, 7条の播目がみられる。237・238は陶器丸形碗である。237は削り出し高台を呈し, 高台以外は全面施釉。内面見込みに4箇所が目跡が残る。238は削り出し高台を呈し, 高台畳付け以外は全面施釉。外面にロクロ目が残る。243は鉢である。外面は口縁部下に波状文が施される。高台畳付けの一部まで施釉, 内面は露胎である。244は肥前系磁器の青磁皿か。段皿状を呈する。外面と内面に施釉する。245は青磁盤あるいは大皿か。底部外面は蛇ノ目釉ハギが施され, 外面と内面に施釉される。248は肥前系磁器である。底部は削り出し高台, 高台畳付けは露胎で, 内面見込みには五弁花コンニャク印判に竹と笹がみられる。255は肥前系磁器の丸形鉢である。外面に二重圏線と植物文, 内面は帯状の圏線文が配される。259は軒丸瓦である。瓦当に三巴紋と周囲に珠紋を配す。外面はヘラ状工具によるナデ調整, 指頭圧痕。内面はヘラケズリとナデ調整がみられる。260は銘瓦である。「アカ」が印刻されている。261は瓦片である。凹面は格子状のタタキ目が薄く残る。凸面は摩耗する。262は硯である。陸部の一部が残存。陸部の一部は凹状をなす。側縁部と底部は摩耗する。

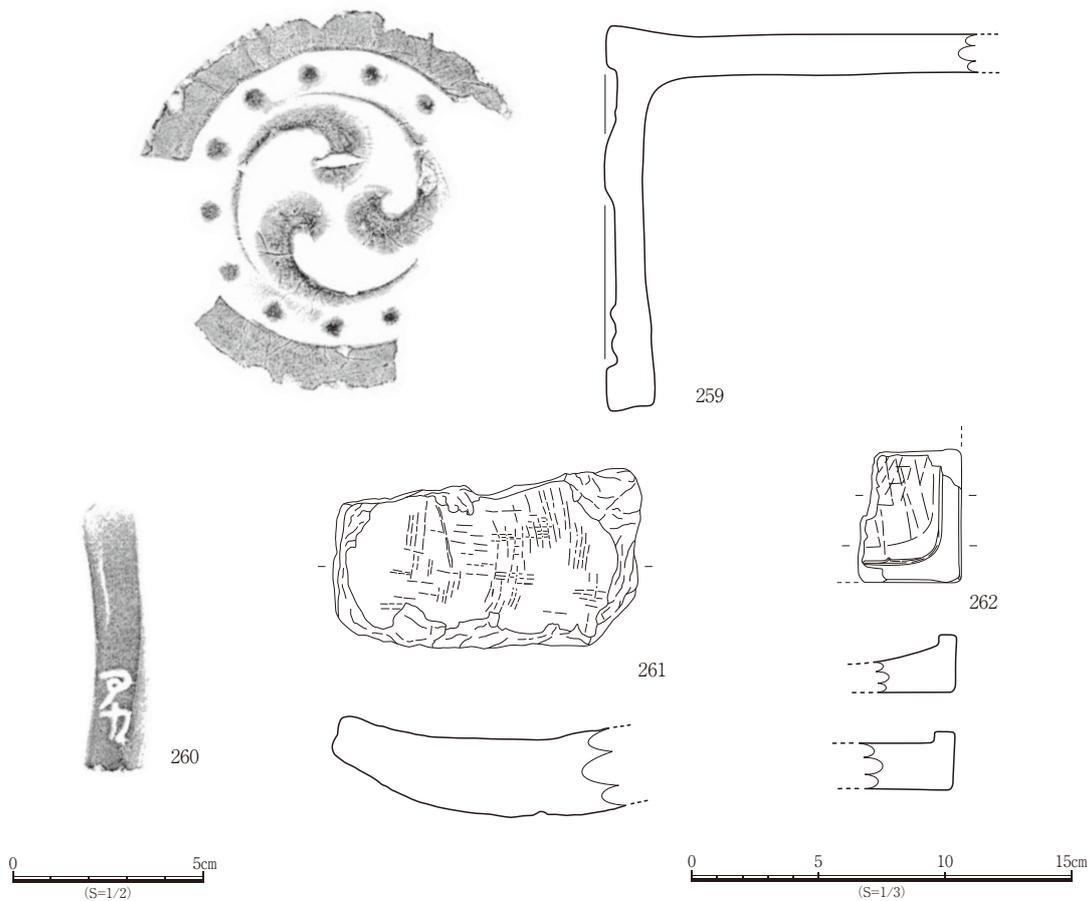


図2-85 V-2区SX15出土遺物実測図

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (7) 遺構外出土遺物

SX16 (図2 - 79)

調査区の南西部において検出した。平面形は隅丸方形状を呈し、規模は一辺が1.50mで、検出面から底面までの深さは概ね50cmを測る。埋土は円礫を多く含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は陶器、磁器が出土しており、その内陶器皿・播鉢、磁器皿・碗が図示できた。

出土遺物 (図2 - 82・84 236・241・250～252)

236は陶器褐釉皿である。底部削り出し高台で、内面は蛇ノ目釉ハギを施す。241は大型で、口縁部は外方に拡張、肥厚し、外面に2条の沈線が施される。端部は凹状を呈する。外面はナデ調整、下半部はケズリとナデ調整で、内面は全面に播目を施し、上端部はナデ。底部内面に放射線状の播目が施される。250は底部外面高台内に鈹痕が認められる。高台畳付けは釉ハギで砂が溶着。外面は高台に圏線、内面は植物文が施される。

251・252は染付碗である。251は小型丸碗で底部削り出し高台を呈する。高台畳付けは露胎。外面に植物文、内面は無文である。252は肥前系磁器の丸形碗で、外面は高台脇に圏線と植物文を配する。内面は無文である。

SX17 (図2 - 79)

調査区の南西部において検出した。平面形は不整形を呈し、南側は調査区外にのびる。確認規模は南北1.90m、東西1.20mで、検出面から底面までの深さは概ね60cmを測る。埋土は円礫を多く含む暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は陶器、磁器が出土しており、その内播鉢、磁器皿が図示できた。

出土遺物 (図2 - 82・84 240・249)

240は播鉢である。小型で、口縁部は上下に拡張肥厚し、外面はナデ調整で、内面に7条単位の放射線状の播目を施す。底部内面で交差する。播目上端はナデ調整が施される。249は青花皿である。底部は削り出し高台で、高台畳付けは釉ハギ。高台内に鈹痕が認められる。内面見込みに藤花文。外面高台脇に圏線が施される。

(7)遺構外出土遺物

包含層出土遺物 (図2 - 86～88 263～306)

263は弥生土器甕である。口縁部はくの字状に大きく外反する。外面は頸部までタタキ目が認められ、口縁部はナデ調整、頸部にはナデ調整と指頭圧痕が施される。内面は口縁部にナデ調整、体部はナデ調整とヘラケズリがみられる。264はミニチュア土器である。鉢の形状を呈し、外面は指頭圧痕が顕著でナデ調整が施される。内面は指頭圧痕が施される。265・266は土師器蓋である。265は扁平なつまみを貼付し、外面はナデ調整が施される。内面は摩耗する。266は宝珠形のつまみを呈し、外面はヘラミガキ、内面にヘラミガキとナデ調整が施される。

267～269は土師器高杯である。267は脚部との接合部はナデ調整。外面は杯部はヘラミガキとナデ調整。内面は杯部にヘラミガキとナデ調整。脚部はナデ調整が施される。268は杯部内面はヘラミガキとナデ調整。脚部外面はヘラ状工具によるナデ調整で内面はナデ調整が施される。269は外面内面とも摩耗のため調整不明瞭である。270～272は柱状高台をもつ土師器である。270は底部外面には回転糸切り痕が認められる。外面はナデ調整で、内面は回転ナデ調整がみられる。内面底部に凹凸が残る。271は底部外面には回転糸切り痕が認められる。外面はナデ調整、ハケ目が残る。内面は摩耗している。柱状部に内面より径5mmの穿孔が施される。272は底部外面には回転糸切り痕が認めら

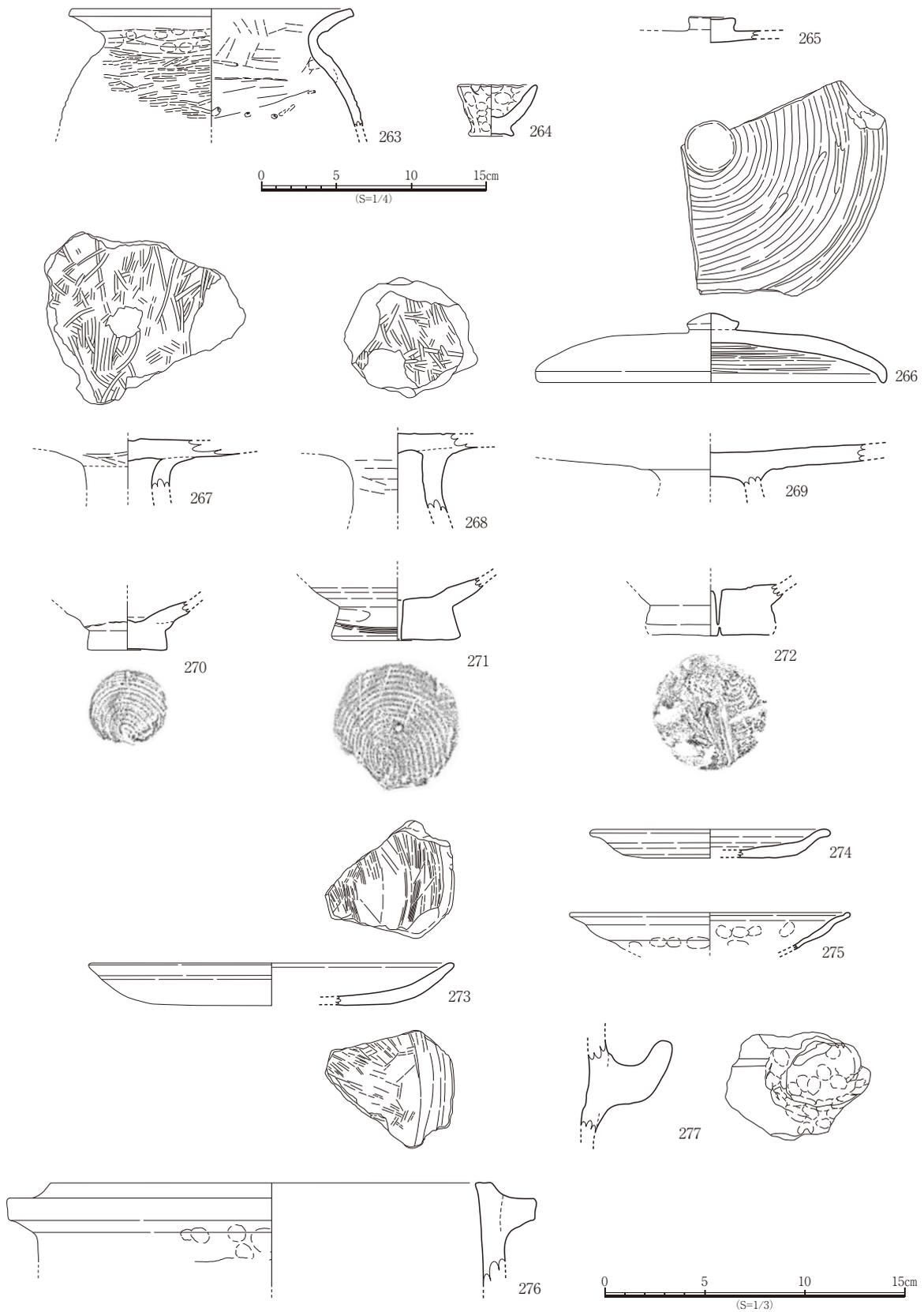


図2-86 V-2区包含層出土遺物実測図1

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (7) 遺構外出土遺物

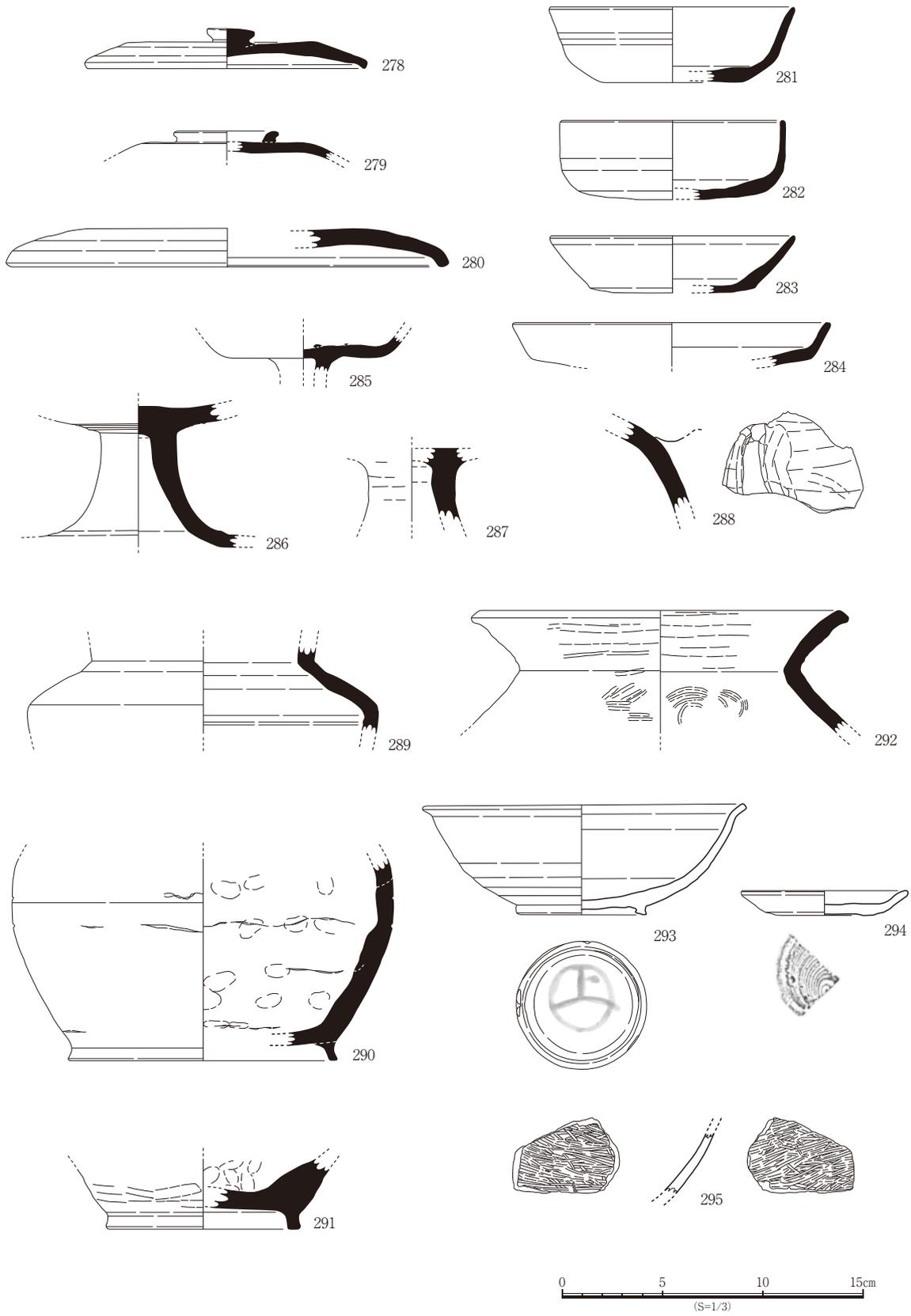


図2-87 V-2区包含層出土遺物実測図2

れる。外面はナデ調整，一部摩耗している。内面も摩耗しており，柱状部に内面より径4mmの穿孔が施される。273は土師器皿である。外面と内面に赤彩が施される。外面と内面にヘラミガキが認められるが，一部摩耗する。274は土師器皿である。底部外面にヘラ切りか。外面と内面は回転ナデ調整で，内面の器面が一部剥離している。275は手づくね皿である。手づくね成形を呈し，外面と内面はナデ調整，体部にかけて指頭圧痕が顕著である。276は土師器羽釜の口縁部である。断面方形の鍔が廻り，接合部はナデ調整，指頭圧痕がみられる。内面はヨコ方向と斜位方向のナデ調整が施される。277は甑の把手部分と考えられる。外面接合部は指頭圧痕，ナデ調整が顕著である。内面は指頭圧痕，ナデ調整が施される。

278～280は須恵器蓋である。278はボタン状のつまみをもち，外面は天井部に回転ヘラケズリ，端

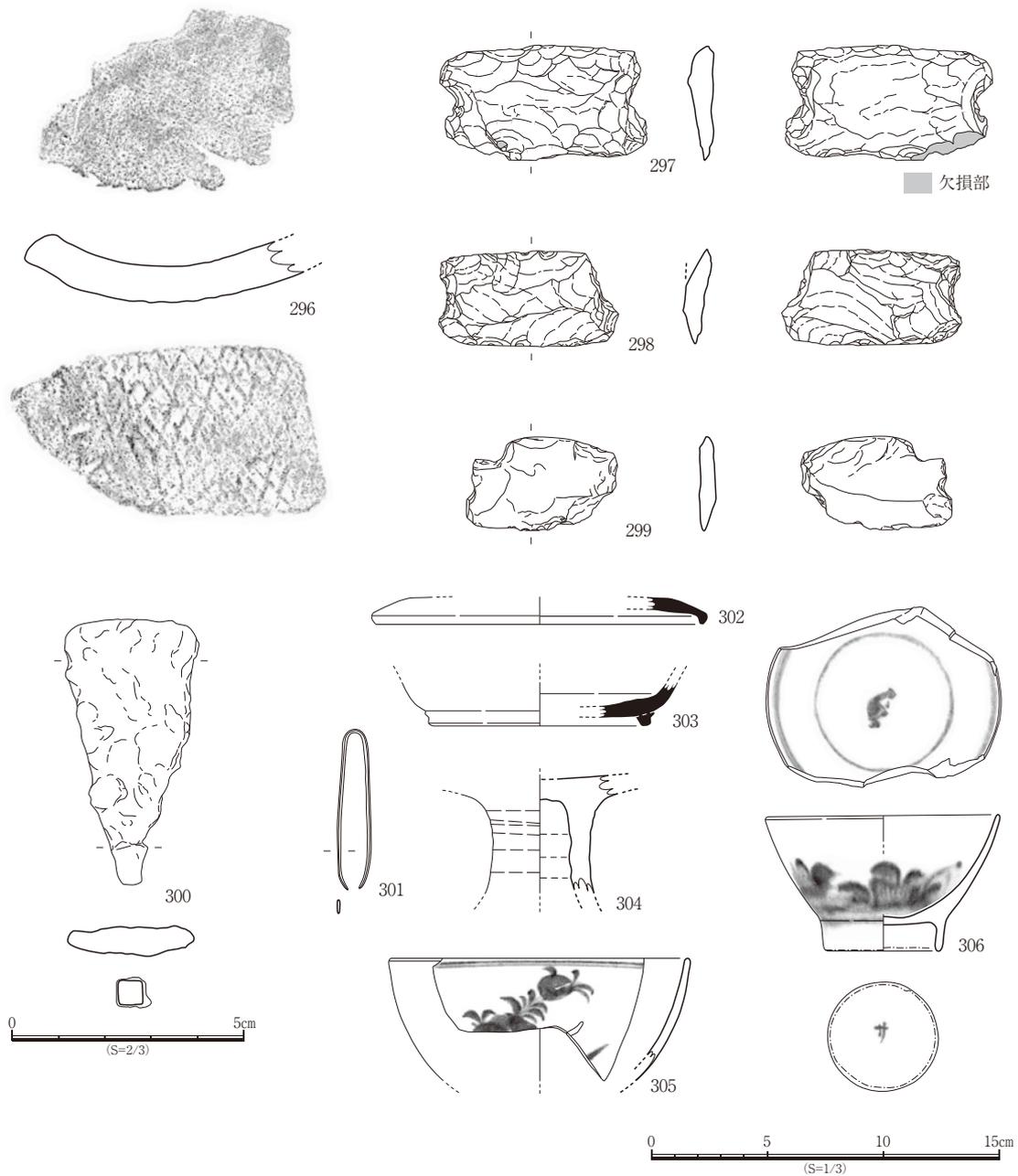


図2-88 V-2区包含層出土遺物実測図3

4. V - 2 区の検出遺構と出土遺物 (7) 遺構外出土遺物

部まではナデ調整, 内面はナデ調整が施される。279 は環状のつまみを呈し, つまみ貼付部分はナデ調整。外面は天井部に回転ヘラケズリ, 内面はナデ調整が施される。280 は外面の天井部にヘラケズリ, 端部にかけて回転ナデ調整で, 内面はナデ調整が施される。外面口縁端部に一部ヘラケズリがみられる。

281 ~ 283 は須恵器杯である。281 は底部外面にはヘラ状工具の圧痕がみられる。外面内面ともに回転ナデ調整が施される。282 は底部外面に回転ヘラ切りの後のナデ調整か。外面内面ともにナデ調整が施される。283 は底部外面に切り離し後のナデ調整がみられる。外面内面は回転ナデ調整が施される。外面は一部摩耗する。284 は須恵器皿である。口縁端部は浅い凹状を呈する。外面と内面はともにナデ調整で, 底部外面にもナデ調整が施される。285 ~ 287 は須恵器高杯である。285 は杯底部には自然釉が全面にかかる。外面はナデ調整である。286 は外面と内面は回転ナデ調整で, 外面には一部自然釉がかかる。287 は外面と内面にナデ調整が施される。288 ~ 291 は須恵器壺である。288 は胴部片で, 外面にタテ方向の粘土帯を貼付している。貼付部分はナデ調整がみられる。内面は回転ナデ調整が施される。289 は外面に一部自然釉がかかる。外面と内面にナデ調整が施される。290 は底部外面に高台を貼付し, 外面はナデ調整が施される。内面は指頭圧痕とナデ調整, 接合痕が認められる。291 は須恵器壺の底部である。底部には断面方形状の高台を有する。外面にナデ調整, 内面には指頭圧痕が認められる。292 は須恵器甕で, 外面は口縁部にナデ調整, 頸部はタタキ目が残る。内面は口縁部にヘラ状工具によるナデ調整か。頸部に同心円状のタタキ目が残る。

293 は土師質土器碗である。外面高台内に○に「上」の墨書が認められる。外面は口縁部から体部に回転ナデ調整, 下半は回転ヘラケズリで内面は回転ナデ調整が施される。294 は土師質土器皿である。底部外面は回転糸切り痕が認められる。外面と内面はナデ調整が施される。295 は黒色土器碗である。外面と内面はともに密なヘラミガキが施される。296 は瓦片である。凹面は布目痕, ナデ調整。凸面は格子状のタタキ目が認められる。還元炎色を呈する。

297 ~ 299 は石包丁である。297 は両側縁部に抉りを施し, 摩滅がみられる。298 は側縁部1箇所抉りをもうける。片側縁部は欠損する。粘板岩系と考えられる。299 は側縁部に抉りを施す。刃部にミガキあり。片岩系と考えられる。300・301 は金属製品である。300 は鉄鏃で, 茎部は残存し, 断面は方形状を呈する。301 は形状がU字状で, 断面形は隅丸長方形状を呈する。302 は須恵器蓋である。外面と内面はナデ調整が施される。303 は須恵器杯である。底部外面は高台を貼付し, 外面と内面にナデ調整が施される。貼付部分に段が生じる。304 は土師器高杯である。杯部外面は器面が剥離, 一部ナデ調整がみられる。脚部は外面にナデ調整, 内面にしぼり痕がみられナデ調整が施される。305 は染付丸形碗である。肥前系磁器と考えられる。外面は口縁下に二重圏線と植物文が施される。内面は無文である。306 は広東形碗である。削り出し高台を呈し, 高台畳付け以外は全面施釉し, 外面は山水文か。高台見込みに「サ」の銘がみられる。内面に圏線, 見込みに文様を配する。能茶山焼と考えられる。

第三章 高田遺跡VI区の調査

1. 調査の概要と基本層序

本調査区はV-2区の東側に位置する調査区で、平成28年度に調査を実施した。調査面積は2,413㎡である。本調査区では、掘立柱建物跡10棟、土坑20基、溝跡47条、柱穴842個、性格不明遺構30基が検出されている。

基本層序は以下のとおりである。

調査区北壁セクション

- 第I層 表土層(耕作土)
- 第II層 黒色(10YR2/1)粘質シルト層
- 第III層 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト層
- 第IV層 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層(にぶい黄褐色土が粒状に混じる)

調査区南壁セクション

- 第I層 表土層(耕作土)
- 第II層 黒色(10YR2/1)粘質シルト層
- 第III層 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト層
- 第IV層 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層(にぶい黄褐色土が粒状に混じる)

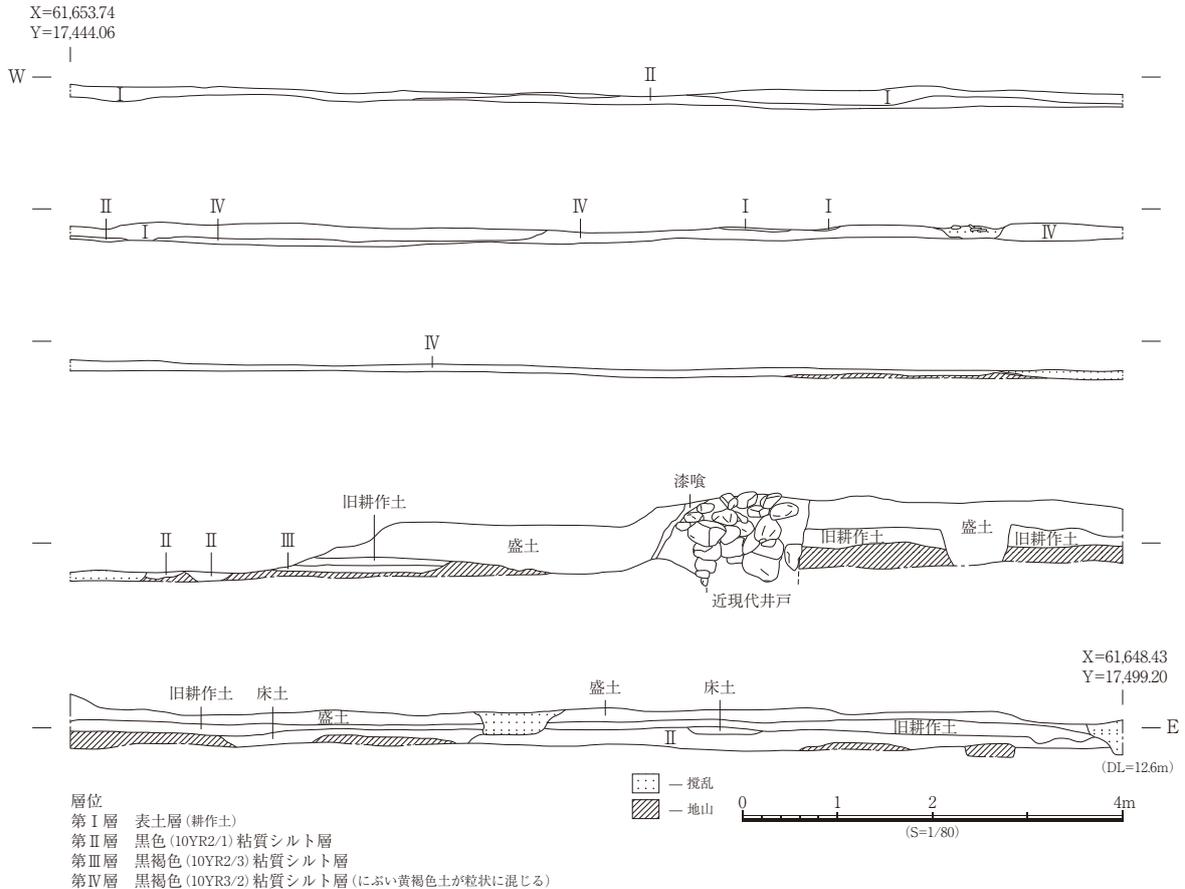


図3-1 VI区調査区北壁セクション図

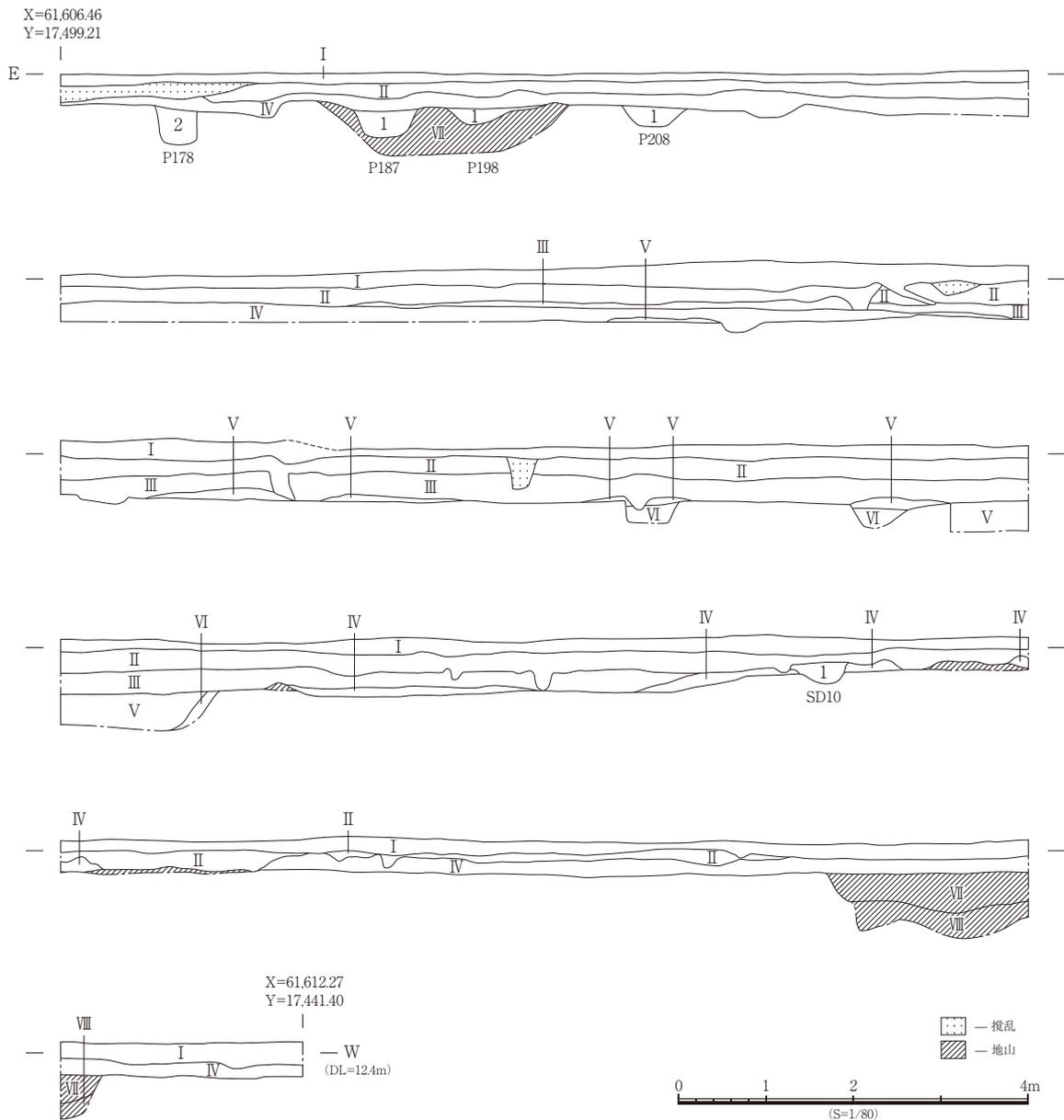
1. 調査の概要と基本層序

第V層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層

第VI層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層

第VII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト層(大小円礫を多く含む:地山)

第VIII層 暗褐色(10YR3/4)砂礫層(地山)



- 層位
- 第I層 表土層(耕作土)
 - 第II層 黒色(10YR2/1)粘質シルト層
 - 第III層 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト層
 - 第IV層 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層(にぶい黄褐色土が粒状に混じる)
 - 第V層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
 - 第VI層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層
 - 第VII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト層(大小円礫を多く含む:地山)
 - 第VIII層 暗褐色(10YR3/4)砂礫層(地山)

- 遺構埋土
- 1. 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト(SD10, P187・198・208)
 - 2. 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト(にぶい黄褐色土が粒状に混じる:P178)

図3-2 VI区調査区南壁セクション図

2. 検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (図3-3)

調査区の中央部西において検出した。規模は桁行3間(5.4m)、梁行2間(3.5m)の南北棟で、軸方向はN-0°である。柱間寸法は桁行が1.50~2.20m、梁行は1.70~1.80mを測る。床面積は18.90㎡である。柱穴の掘方は円形から楕円形、隅丸方形状を呈するものがみられる。円形はP2・5・6・8・10・11で、規模は径が概ね0.35m前後で、検出面から底面までの深さはP2とP5が25cm前後、P6は13cm、P8は21cm、P10が8cm、P11は12cmを測る。楕円形はP1・3・4・7・9で、規模はP1が長径0.26m、短径0.22m、P3が長径0.47m、短径0.37m、P4は長径0.39m、短径0.32m、P7が長径0.39m、短径0.29m、P9は長径0.36m、短径0.25mで、検出面から底面までの深さはP1が11cm、P3とP7が20cm、P4は15cm、P9が7cmを測る。

柱穴の埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトが主体で、一部には黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトがみられる。遺物はP6とP7から土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SB2 (図3-4)

調査区の中央南部において検出した。規模は桁行3間(4.9m)、梁行2間(3.7m)の東西棟で、軸方向はN-90°を示す。柱間寸法は桁行が1.50~1.70m、梁行は1.80~1.90mを測る。床面積は18.13㎡である。柱穴の掘方は隅丸方形から隅丸長方形、楕円形を呈する。隅丸方形はP1、5~7で、規模は一辺が0.54~0.75m、検出面から底面までの深さは、P1とP5が40cm前後、P6が28cm、P7は48cmを測る。隅丸長方形はP2とP8で、規模は長辺が0.73~0.86m、短辺0.48~0.63mで、検出面から底面までの深さはP2が51cm、P8は17cmを測る。楕円形はP3・4・9・10で、規模は長径が0.63~0.76m、短径は0.55m前後で、検出面から底面までの深さはP3が27cm、P4が49cm、P9は45cm、P10が34cmを測る。

柱穴の埋土は黒色(10YR1.7/1)粘質シルトと黒褐色(10YR2/2)粘質シルトを主体に暗褐色及び褐色土が含まれる。遺物はP2から土師器、P8において土師器と須恵器、P9から土師器、P10より須恵器が出土しており、その内須恵器甕が図示できた。

出土遺物 (図3-307)

307はP10より出土した須恵器甕の胴部である。外面は斜位方向と格子状のタタキ目、内面は同心円状のタタキ目が認められる。

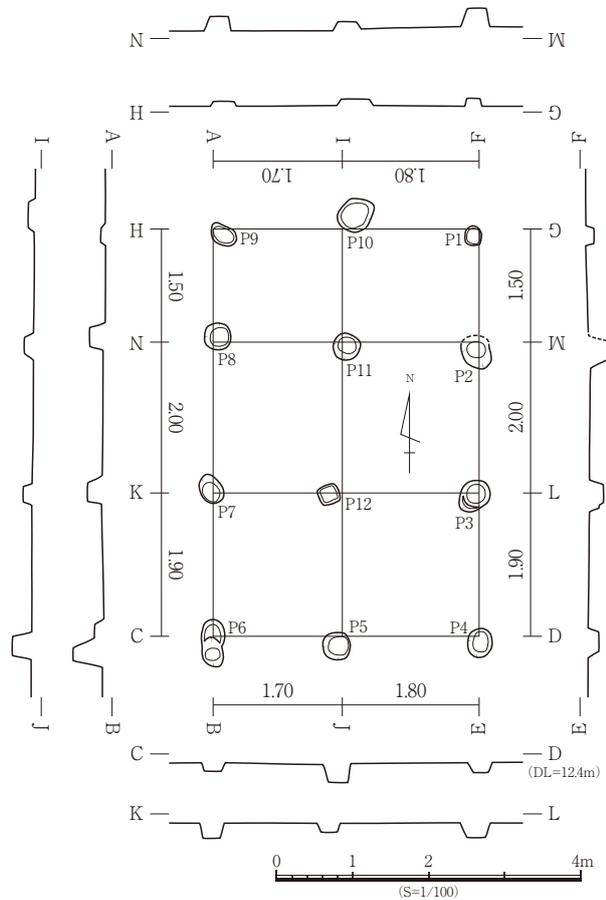


図3-3 VI区SB1

2. 検出遺構と出土遺物 (1) 掘立柱建物跡

SB3 (図3-6)

調査区の北東隅において検出した。建物北側柱は調査区外に広がると推定される。確認規模は東西3間(5.6m), 南北1間(1.9m)以上で, 柱間寸法は東西(北側柱)が1.85~1.90m, 南北(東西側柱)1.90mで, 床面積は10.64㎡以上を測る。柱穴の掘方は隅丸方形から楕円形, 不整形形状を呈する。隅丸方形はP3・4で, 規模は一辺0.60m前後で検出面から底面までの深さは約20cmを測る。円形はP1とP6で, 径はP1が0.55m, P6が0.65m前後である。検出面から底面までの深さはP1とP6は25cm前後を測る。不整形形状はP2とP5で, P2は長辺0.76m, 短辺0.53m, P5は一辺が0.65m前後で, 検出面から底面までの深さは, 20cm前後を測る。

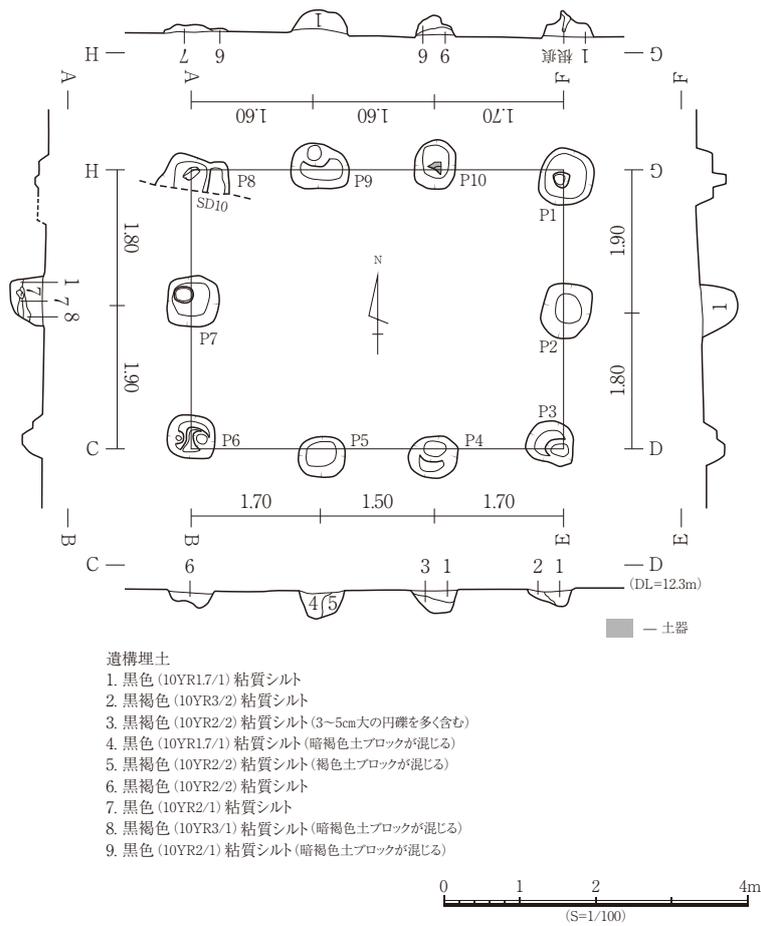


図3-4 VI区SB2

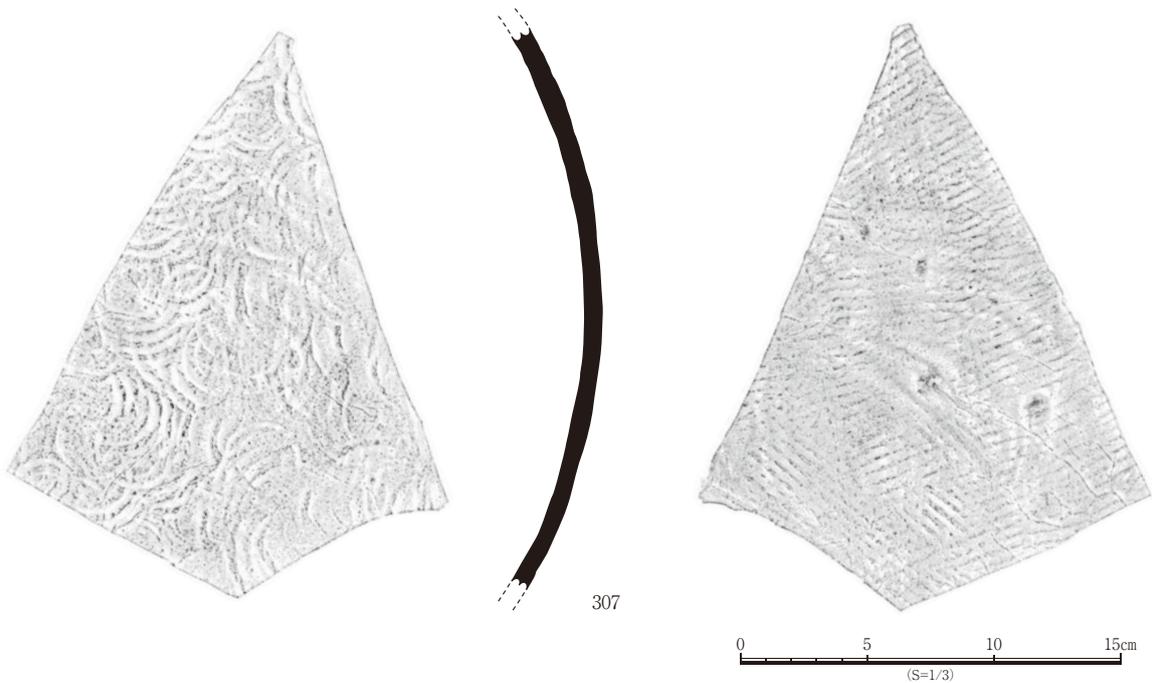


図3-5 VI区SB2出土遺物実測図

柱穴の埋土は礫を含む黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトと礫を含む黒色(10YR2/1)砂質シルトが主体である。埋土中からの遺物の出土はみられなかった。

SB4 (図3-6)

調査区の北東隅において検出した。掘立柱建物跡SB3の南東に位置し、建物の東側柱は調査区外のため、検出することはできなかった。確認規模は南北2間(3.9m)以上、東西1間(2.5m)以上で、柱間寸法は南北(東側柱)が1.80~2.10m、東西(北側柱・南側柱)2.10~2.50mで、床面積は9.75㎡以上を測る。柱穴の掘方は、隅丸方形から円形、不整形を呈する。隅丸方形はP2・4で、規模は一辺が0.60m前後と0.75m前後で、円形はP1・3で、径は0.55mと0.65m前後である。不整形はP5で、長軸が0.70m、短軸0.62mを測り、他の柱穴とのきり合いがみられる。検出面から底面までの深さは、24cmから40cm前後を測る。柱穴の内P3とP4には径20~25cmの柱痕がみられた。

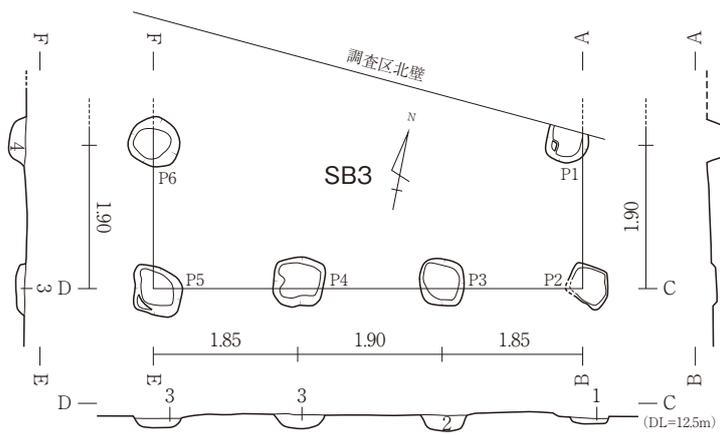
柱穴の埋土は、礫を含む黒褐色(10YR2/1)粘質シルトが主体である。遺物はP1からは土師器、P5では須恵器が出土しており、その内須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図3-7 308)

308は須恵器壺の底部である。P5から出土している。底部外面には輪高台を貼付し、外面と内面はともにナデ調整が施される。

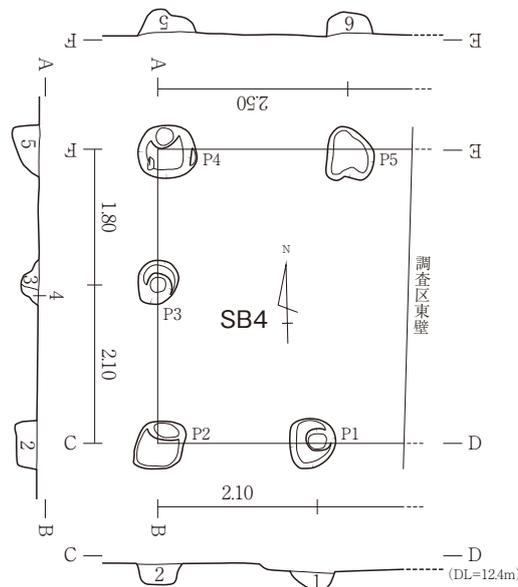
SB5 (図3-8)

調査区の北東部において検出した。掘立柱建物跡SB4の南に位置する。規模は桁行3間(6.0m)、梁行2間(2.1m)の南北棟で軸方



遺構埋土

1. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト(0.5cm大の中礫を含む)
2. 黒色(10YR2/1)砂質シルト(黒褐色(7.5YR2/2)シルトが混じり、褐色土が粒状に混じり、0.5~1cm大の中礫を含む)
3. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト(褐色土ブロックが混じり、5~10cm大の中・大礫を含む)
4. 黒褐色(7.5YR2/1)砂質シルト(3~5cm大、15~25cm大の河原石を含む)



遺構埋土

1. 黒褐色(7.5YR2/1)砂質シルト(5cm大の中礫を含む)
2. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト(0.5~1cm大の中礫を含む)
3. 黒褐色(7.5YR2/1)砂質シルト(10cm大の大礫を含む)
4. 暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト
5. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(褐色土が塊状に混じり、10cm大の大礫を含む)
6. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト(10~20cm大の河原石を含む)

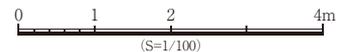


図3-6 VI区SB3・4

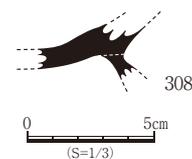


図3-7 VI区SB4出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (1) 掘立柱建物跡

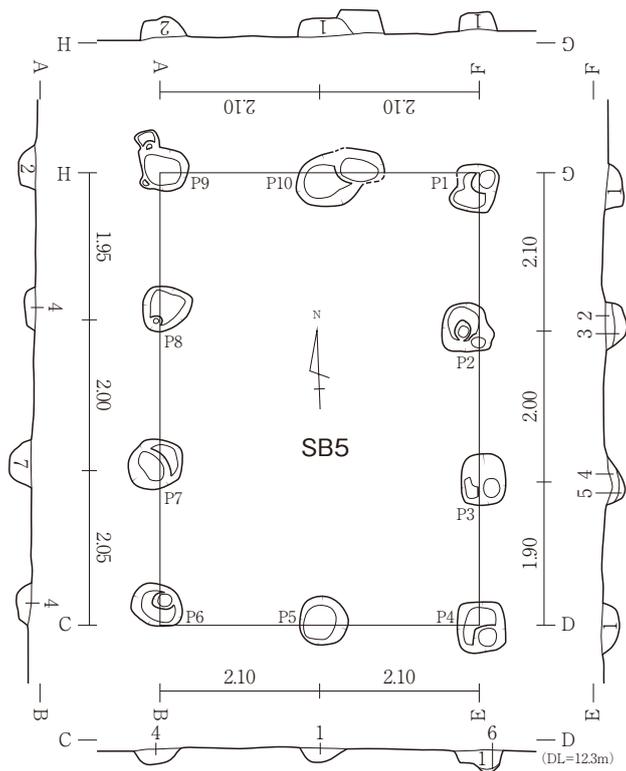
向はN-2°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.90~2.10m, 梁行2.10mで, 床面積は25.20㎡である。柱穴の掘方は, 隅丸方形から円形, 楕円形, 不整形を呈する。隅丸方形はP3・4で, 規模は一辺0.65m前後を測る。円形はP5で, 径が0.65m, 楕円形はP6とP7, P10で長径は0.70m前後, 短径0.60m前後である。不整形はP1・2・8・9で, 長軸は0.70m前後, 短軸0.60m前後を測る。検出面から底面までの深さは, 19~43cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/1)粘質シルトが主体である。柱穴の内P4では径0.25mを測る柱痕がみられた。遺物はP1から土師器, P3~5より須恵器が出土しており, その内須恵器皿を図示することができ得た。

出土遺物 (図3-10 309)

309は須恵器皿である。外面と内面はともに摩耗するが, 外面の一部はナデ調整である。

SB6 (図3-8)

調査区の南東部において検出した。建物の北側柱は調査区南部を区画すると考えられるSD10と性格不明遺構SX12にきられる。規模は桁行3間(5.9m), 梁行2間(4.7m)の東西棟で, 軸方向はN-90°を示す。柱間寸法は桁行が1.85~2.05m, 梁行は2.10~2.60mで, 床面積は27.73㎡を測る。柱穴の掘方は隅丸方形から円形, 楕円形を呈する。隅丸方形はP5で, 一辺



遺構埋土

1. 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト
2. 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト
3. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト(砂粒及び円礫を多く含む)
4. 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト(砂粒及び円礫を多く含む)
5. 灰褐色(10YR4/2)砂質シルト(砂粒及び円礫を多く含む)
6. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂礫(黒褐色(10YR2/2)粘質シルトが混じる)
7. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト

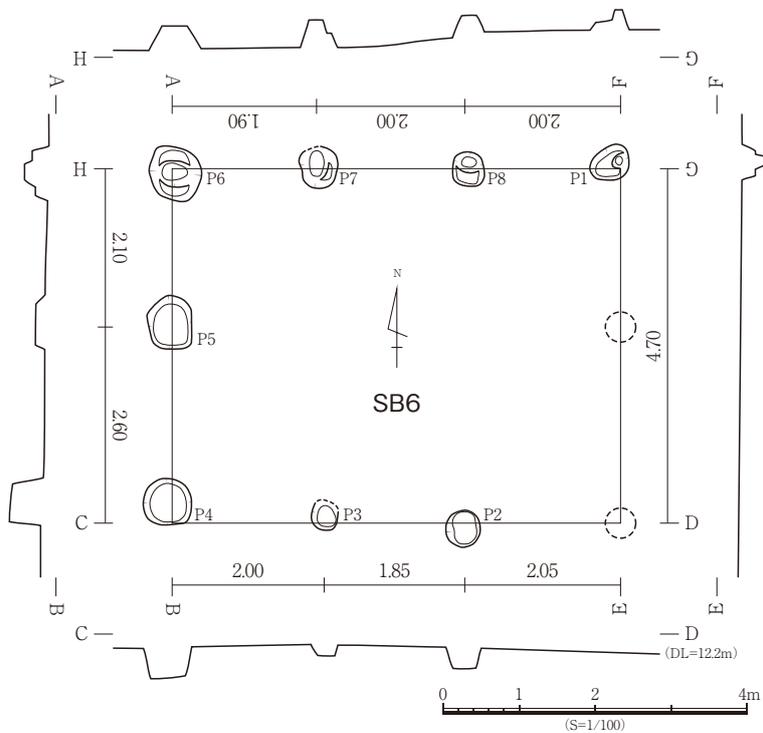


図3-8 VI区SB5・6

は0.65m前後である。円形はP2・4・6・7で、径が0.35～0.62m、楕円形はP1が長軸0.53m、短軸0.46mである。検出面から底面までの深さは、P1・2・6・8が30cm前後、P3とP5が15cm前後、P4とP7は40cm前後を測る。柱穴の埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトと黄褐色土と礫を含む黒褐色(10YR1/2)が主体である。遺物はP1の埋土中から土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SB7 (図3-9)

調査区の南東部において検出した。掘立柱建物跡SB6の南側に位置する。建物の規模は、桁行5間(8.4m)、梁行3間(4.6m)の東西棟で、軸方向はN-83°-Wを示す。柱間寸法は桁行1.50～1.80m、梁行が1.30～1.90mで、床面積は38.64㎡である。南側柱東隅の柱穴の西隣に位置するP4は上面のSX6掘削時における検出であったため、上面は削平されている。柱穴の掘方は、隅丸方形から楕円形、不整形を呈する。隅丸方形はP2・3・6・9・13・14で、一辺が0.70～0.80m前後、楕円形はP1・4・5・7・10・11・12で、長軸が0.45～0.93m、短軸は0.34～0.88m、不整形はP8で長軸が1.18m、短軸1.12mを測る。検出面から底面までの深さは、P9が20cm、P2・12が30cm前後、P5・7・10・13は45cm前後、P1・3・6・14が55cm前後、P8・11は75cm前後を測る。

柱穴の埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトと黒褐色(10YR2/1)粘質シルトが主体である。遺物はP1から土師器10点、須恵器3点、土製品土錘2点、P3より土師器4点、鉄製品2点、P5からは土師器8点、須恵器8点、鉄製品1点、P6より土師器21点、須恵器5点、P7は土師器20点、P8からは土師器33点、須恵器15点、P9が土師器6点、須恵器2点、P10より須恵器2点、P11は土師器2点、

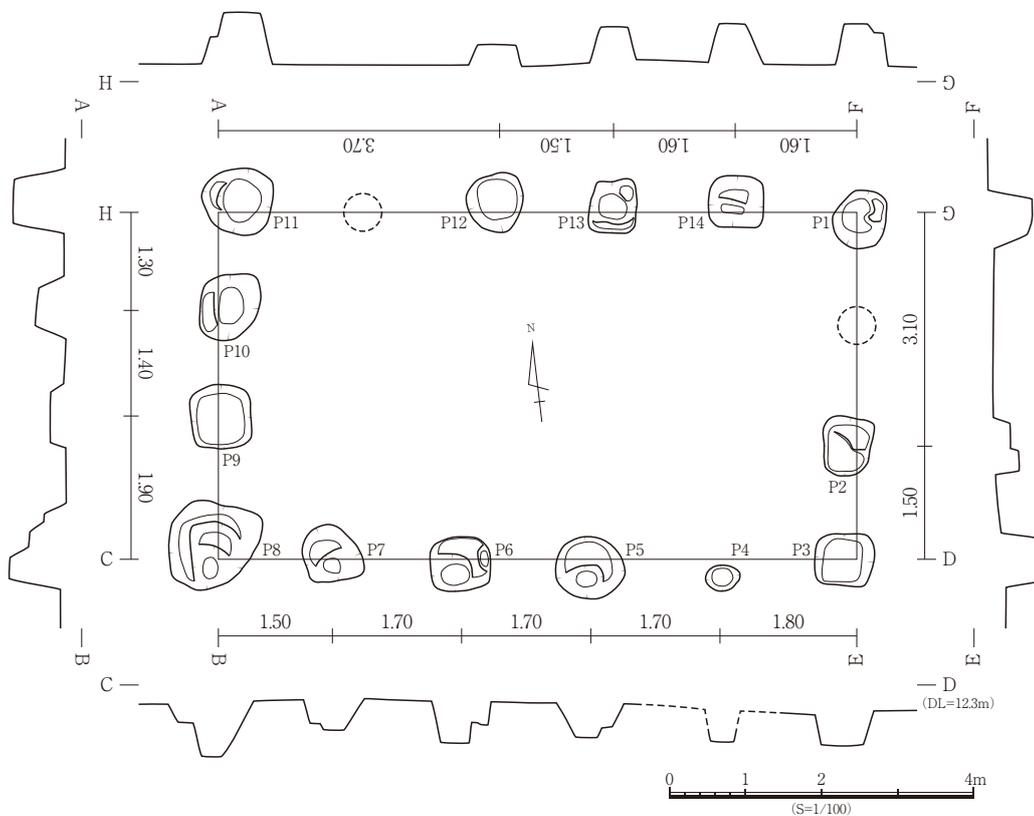


図3-9 VI区SB7

2. 検出遺構と出土遺物 (1) 掘立柱建物跡

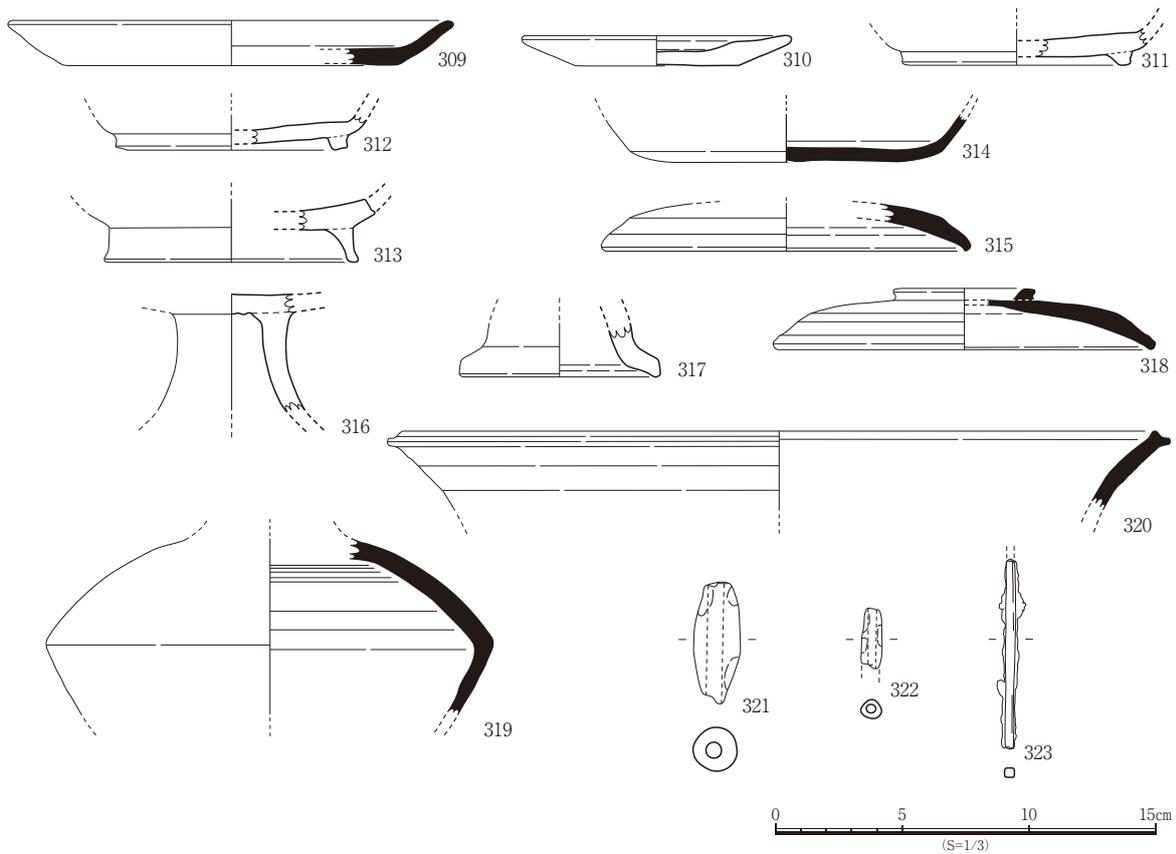


図3-10 VI区SB5・7出土遺物実測図

P12から土師器2点, 須恵器1点, 土製品土錘が2点, P13より土師器25点, 須恵器1点, P14においては土師器17点が出土しており, その内, 土師器, 須恵器, 土錘, 鉄製品が図示できた。

出土遺物 (図3-10 310~323)

310は土師器皿である。底部外面に粘土紐痕が認められる。外面と内面はともに回転ナデ調整で, 内面底部はヨコ・斜位方向のナデ調整が施される。口縁部内面一部にススの付着がみられる。311は土師器皿である。底部外面には高台を貼付し, 内面底部はナデ調整が施される。底部外面は摩耗する。312は土師器杯である。底部外面に高台を貼付し, 外面と内面はともにナデ調整が施される。313は土師器杯である。底部は高台を貼付し, 外面と内面はともに丁寧なナデ調整が施される。314は須恵器杯の底部である。底部外面には粘土紐痕が認められる。外面と内面にはナデ調整が施される。315は須恵器蓋である。外面と内面は回転ナデ調整で, 外面に自然釉がみられる。316・317は土師器高杯である。317は脚部であるが, 外面と内面はともにナデ調整が施され, 外面と内面の一部に赤彩が残る。318は須恵器蓋である。環状のつまみを呈し, 外面天井部は回転ヘラケズリ, 端部になるにしたがい回転ナデ調整が施される。内面は回転ナデ調整がみられる。319は須恵器壺の体部である。内面は肩部上方に回転ヘラケズリ, 体部にナデ調整が施される。外面肩部に自然釉がかかる。320は須恵器甕の口縁部である。端部は左右に肥厚し, 外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。また外面と内面には自然釉がみられる。321と322は土錘である。管状を呈し, 321は中央部に最大径をもつ。323は棒状鉄製品である。断面形は方形状を呈する。紡錘車の一部とも考えられる。

SB8 (図3-11)

調査区の南東部隅において検出した。掘立柱建物跡SB7の東側に位置する。建物の東側柱と南側柱は調査区外にのびると考えられる。建物の規模は、桁行4間(8.9m)以上、梁行3間(5.1m)の東西棟と推定される。柱間寸法は、桁行(北側柱)側が2.10~2.30m、梁行(西側柱)側は1.35~2.00mで、床面積は45㎡以上と推定される。柱穴の掘方は隅丸方形から楕円形を呈する。隅丸方形はP1~4で、一辺が0.83~1.12m、楕円形はP5~8で、長軸0.85~1.00m、短軸0.67~0.90mを測る。検出面から底面までの深さは、P1とP3が概ね40cm、P2が50cm、P4とP5、P8は概ね60cm、P6とP7が75cm前後を測る。

柱穴の埋土は、礫及び褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトが主体である。遺物はP1から土師器6点、P2より土師器13点、P3からは土師器6点と須恵器1点、P4が土師器12点、須恵器1点、P5より土師器12点、須恵器2点、P6からは土師器3点、須恵器1点、P7では土師器18点、須恵器2点、P8より土師器9点と須恵器6点の出土がみられた。その内、土師器皿と須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-12 324~329)

324は土師器皿である。外面底部は摩耗し、口縁部外面と内面はナデ調整、また内面にはヘラミガキが施される。325は土師器皿である。底部は高台を貼付し、外面底部は摩耗している。内面は摩耗するが、一部ヘラミガキが認められる。326と327も土師器皿であり、326は底部は高台が剥離している。口縁部内面に沈線がみられる。外面と内面は回転ナデ調整で、内面にヘラミガキが施される。一部にススの付着がみられる。327は内面に赤彩が施され、一部にススの付着がみられる。外面はナデ

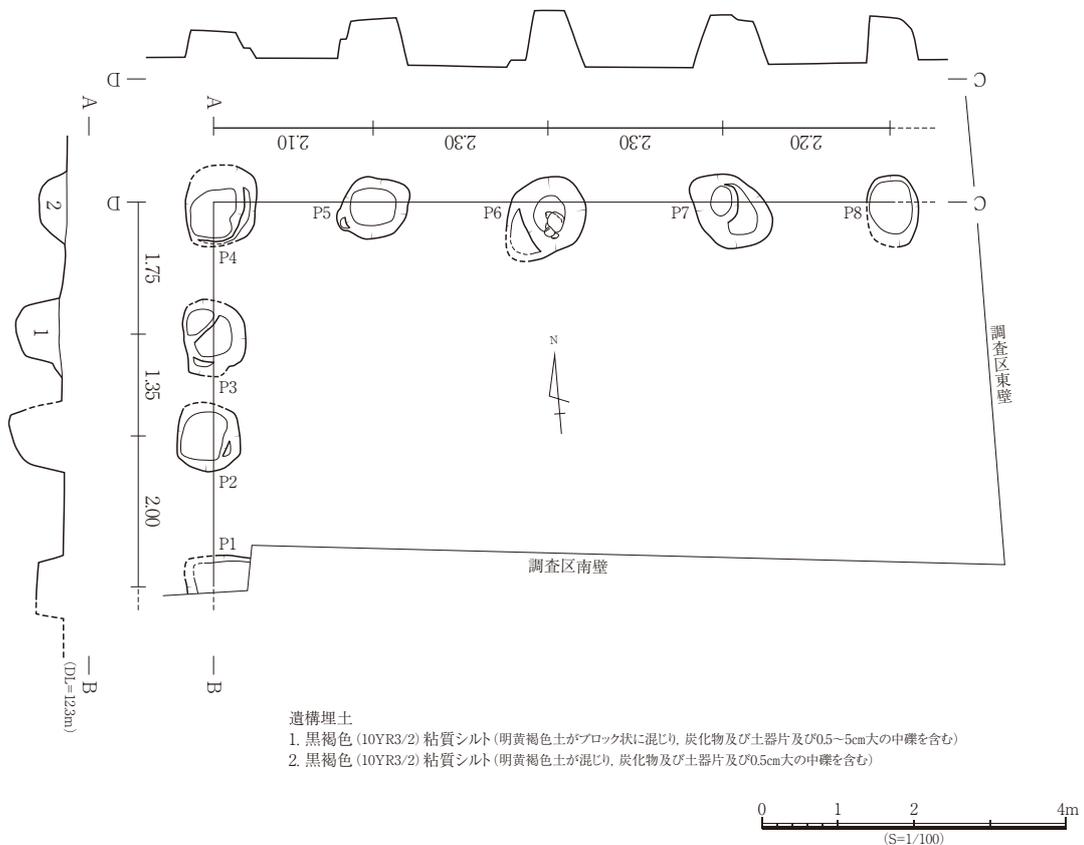


図3-11 VI区SB8

2. 検出遺構と出土遺物 (1) 掘立柱建物跡

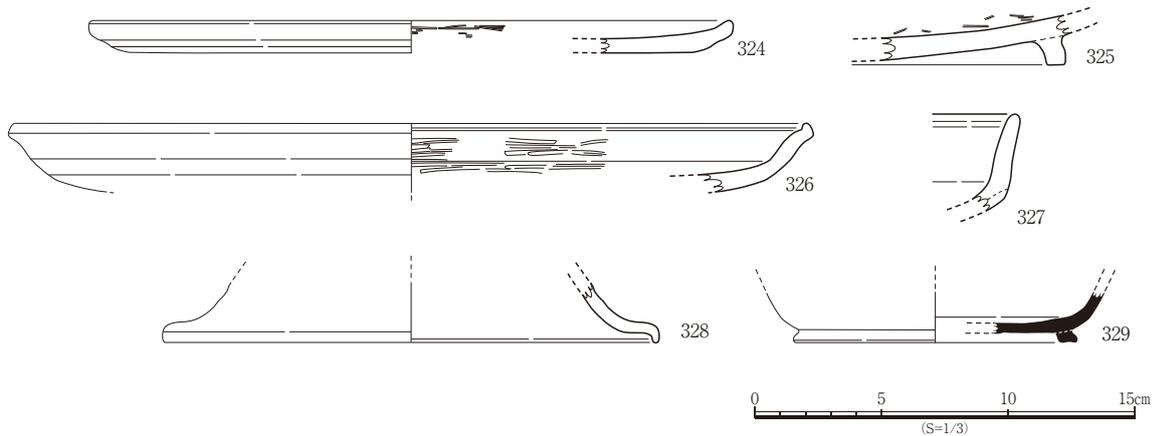


図3-12 VI区SB8出土遺物実測図

調整で、器壁は厚い。328は高杯の脚部である。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。329は須恵器杯の底部である。底部外面に高台を貼付し、体部外面と内面は回転ナデ調整が施される。内面底部にはヨコと斜位方向のナデ調整がみられる。

SB9 (図3-13)

調査区の南東部隅において検出した。掘立柱建物跡SB7の東側に位置し、SB8にきられる。建物の東側柱と南側柱は調査区外にのびると考えられる。建物の規模は、桁行4間(9.2m)以上、梁行3間(5.5m)以上の東西棟で、棟方向はN-85°-Wと推定される。柱間寸法は、桁行(北側柱)側が2.20~2.40m、梁行(西側柱)側は1.75~1.90mで、床面積は50㎡以上と推定される。柱穴の掘方は、隅丸長方形、円形、楕円形、不整形を呈する。隅丸長方形はP3とP4で、P3が長軸0.80m、短軸0.71m、P4は長軸0.95m、短軸0.68mである。円形はP7で、径が0.74mを測る。楕円形はP1とP2、P8で、P1が長軸0.71m、短軸0.54m、P2は長軸0.93m、短軸0.71m、P8は長軸0.96m、短軸0.74mである。不整形はP5とP6で、P5は長軸0.83m、短軸0.72m、P6が径が概ね0.50mを測る。検出面から底面までの深さは、P3とP8が35cm前後、P1・4~6は55cm前後、P2・7が概ね65cmを測る。

柱穴の埋土は黒色(7.5YR2/1)粘質シルトと黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルトが主体である。その内、P4の底部では径28cm大の柱痕を確認することができた。遺物はP1から土師器10点、須恵器2点、P2は土師器3点、須恵器1点、P3からは土師器3点、P5では土師器3点、P6で土師器1点、P7は土師器1点、P8では土師器2点が出土しており、その内土師器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-14 330)

330は土師器蓋である。外面と内面は摩耗しており、調整等は不明瞭である。

SB10 (図3-15)

調査区の南東部隅において検出した。掘立柱建物跡SB7の東側に位置し、SB8とSB9をきる。建物の規模は、桁行3間(5.9m)、梁行2間(3.85m)以上で、建物の南側柱は調査区外に位置すると考えられる。柱間寸法は、桁行(北側柱)が1.85~2.05m、梁行が1.90~1.95mで、床面積は22.7㎡以上と推定される。柱穴の掘方は、楕円形を呈し、規模は長軸0.57~1.06m、短軸0.55~1.03mを測る。検出面から底面までの深さは、P1~3・5・7が30cm前後、P6とP8で概ね20cmを測る。

柱穴の埋土は、礫を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトが主体である。

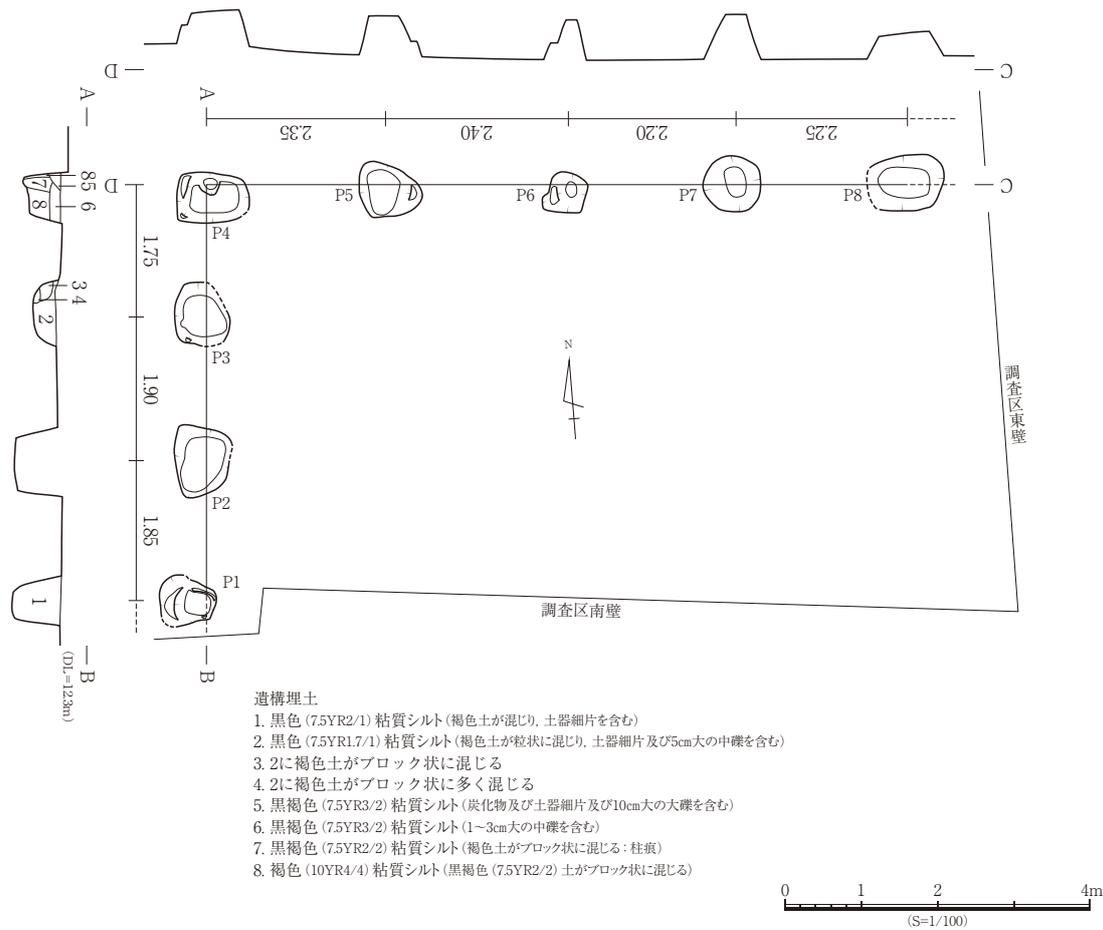


図3-13 VI区SB9

遺物はP6より土師器10点と須恵器4点, P8からは土師器7点が出土しており, その内土師器皿・杯, 須恵器皿・杯・蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-16 331~336)

331は土師器皿である。外面と内面は摩耗しており, 調整等は不明瞭である。332・333は土師器杯である。

332は底部で, 外面には粘土紐痕が認められる。外面と内面にはヘラミガキが施される。333は平坦な底部から, 口縁部は外方に開く。外面と内面は回転ナデ調整で, 下半にはヘラミガキが施される。ヘラミガキは底部外面までみられる。334は須恵器皿である。底部切離しは回転ヘラ切りが認められる。外面は回転ナデ調整で, 内面は回転ナデ調整とヨコ方向のナデ調整がみられる。335は須恵器杯である。底部外面にはヘラ痕が認められる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。また, 外面と内面には一部火礫がみられる。336は須恵器蓋である。外面と内面は回転ナデ調整が施される。焼成時と考えられる歪みがみられる。

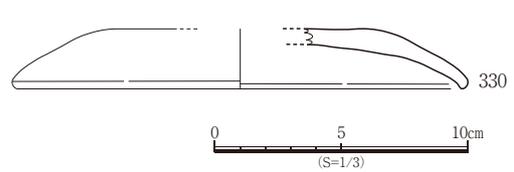


図3-14 VI区SB9出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

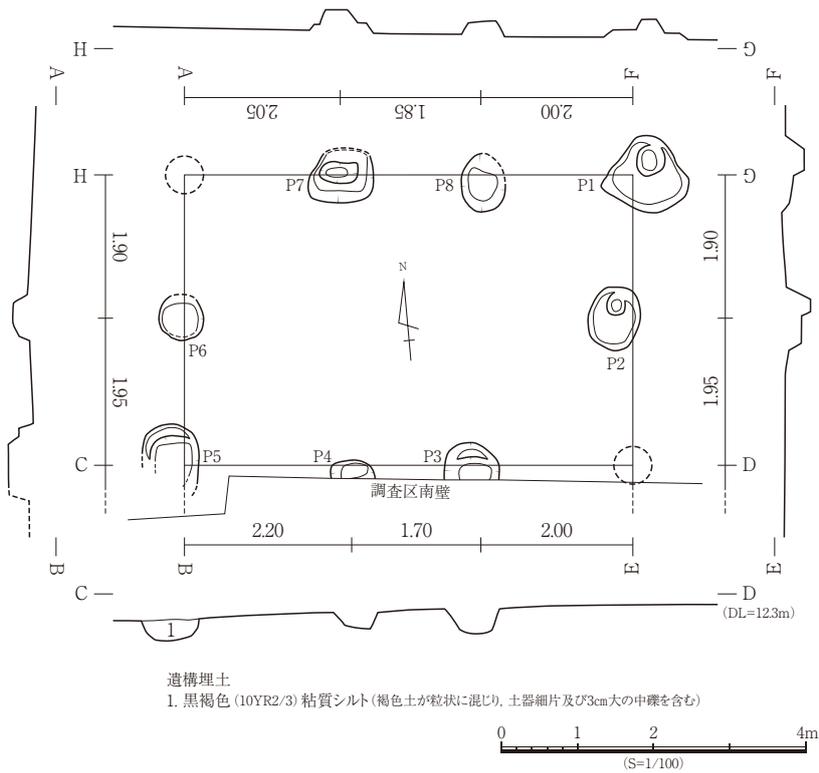


図3-15 VI区SB10

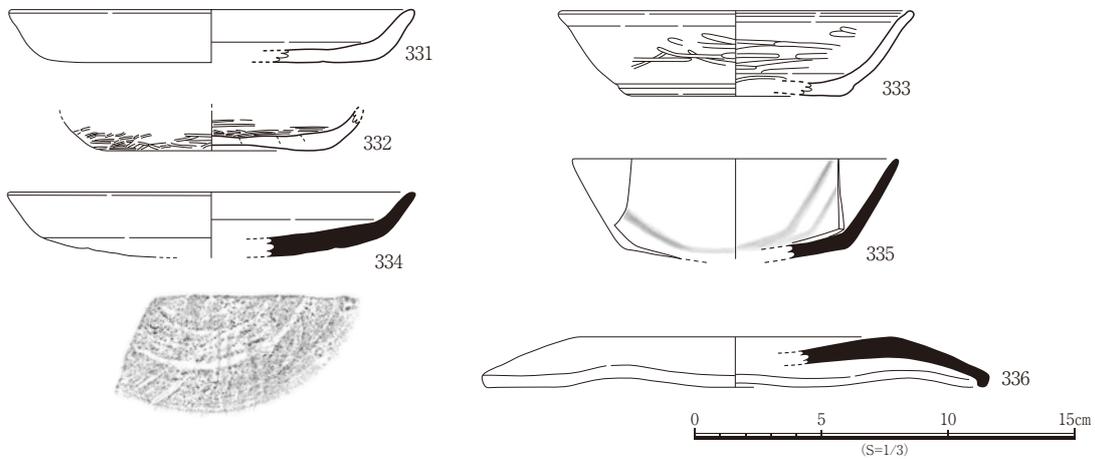


図3-16 VI区SB10出土遺物実測図

(2) 土坑

SK1 (図3-17)

調査区の西部において検出した。掘立柱建物跡SB1の北方7mに位置する。平面形は不整形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを示す。規模は長軸2.27m、短軸1.82mで、検出面からの底面までの深さは約9cmを測る。埋土は礫及びにぶい黄褐色土を含む黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器片、石製品が出土しており、その内、土師器は25点、須恵器が5点が出土しており、土師質土器碗が図示できた。

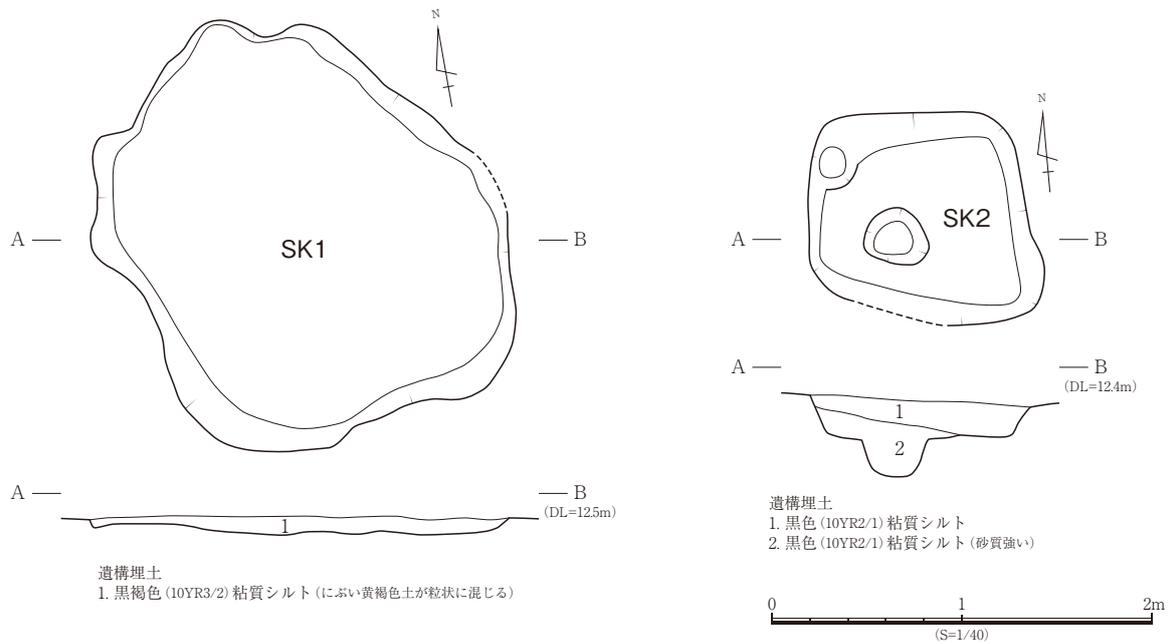


図3-17 VI区SK1・2

出土遺物 (図3-18 337)

337は土師質土器碗の底部である。底部外面に高台を貼付し、高台脇には回転ナデ調整が施される。内面は摩耗しており、調整は不明瞭である。

SK2 (図3-17)

調査区の北西部において検出した。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-85°-Wを示す。規模は長軸1.15m、短軸1.10mで、検出面から底面までの深さは約22cmを測る。さらに、底面からは径30cmを測る柱痕を検出した。柱痕の深さは18cmを測る。柱穴の埋土は黒色(10YR2/1)粘質シルトが主体である。埋土中からは須恵器3点、土師質土器6点などが出土しており、その内土師器甕が図示できた。

出土遺物 (図3-18 338)

338は土師器甕の口縁部である。口縁端部は上下に肥厚させ、外面にはナデ調整が施される。内面にはヨコ方向のハケ目調整がみられる。

SK4

調査区の中央南部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-86°-Wを示す。規模は長軸2.27m、短軸0.98mで、検出面から底面までの深さは約28cmを測る。遺構の埋土は、礫を含む黒色(7.5YR2/1)砂質シルトで、検出時には遺構の中央部に一辺30cm大、15~20cm大を測る石を8個確認した。石は砂岩の自然石で、加工痕等は確認できなかった。さらに、床面では中央部よりやや南側に金属製品刀子と、同じく東側には須恵器壺、土師質土器杯(339・340)が2個体重なった状態で出土した。また、埋土からは、その他須恵器と土師質土器、鉄片と木片が出土している。その内、須恵器壺と土師質土器杯、鉄製品が図示できた。

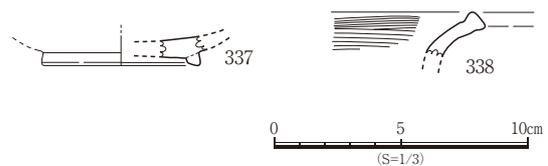


図3-18 VI区SK1・2出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

出土遺物 (図3-20 339～351)

339は土師質土器杯である。外面と内面は回転ナデ調整で、底部外面はヨコ方向のナデ調整が施される。底部内面にはユビナデによる凹凸がみられる。内面は一部摩耗する。340も土師質土器杯である。平坦な底部を呈し、口縁部は外方に開く。外面と内面は摩耗しており、底部内面にはユビナデによる凹凸がみられる。341は須恵器瓶である。底部と胴部下半部に最大径をもち、口縁部は直立気味にのびる。口縁端部は片口状をなす。外面と内面は回転ナデ調整で、底部外面は回転ヘラ切り後のナデ調整がみられる。342は刀子である。全長16.35cm、全幅1.35cm、全厚0.3cmを測り、刃部は残存する。

343～351は棒状鉄製品と考えられる。343は途中欠損するが、断面は長形状を呈する。344も同じく途中欠損しており、断面は長形状を呈し、一部に木質の付着がみられる。345は先端部に行くにしたがい、薄くなり、先端部はやや屈曲している。断面は長形状を呈し、一部に木質の付着がみられる。346も断面は方形を呈し、先端部に行くにしたがい断面厚が薄くなる。347は断面方形を呈し、先端部は屈曲する可能性あり。348は先端部である。断面は隅丸方形を呈する。349は途中欠損するが、断面は長形状を呈し、一部木質の付着がみられる。350は断面方形で先端部になるほど断面厚は薄い。上部先端は屈曲する。351も上部先端と考えられる。断面は長形状を呈し、先端部は屈曲する。

SK6 (図3-21)

調査区の中央部において検出した。平面形は不整楕円形を呈し、主軸方向はN-22°-Eを示す。規模は長軸0.94m、短軸0.83mで、検出面から底面までの深さは約16cmを測る。遺構の埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。遺物は埋土中から土師質土器2点が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK7 (図3-21)

調査区の南東部において検出した。性格不明遺構SX5の底面において検出した。確

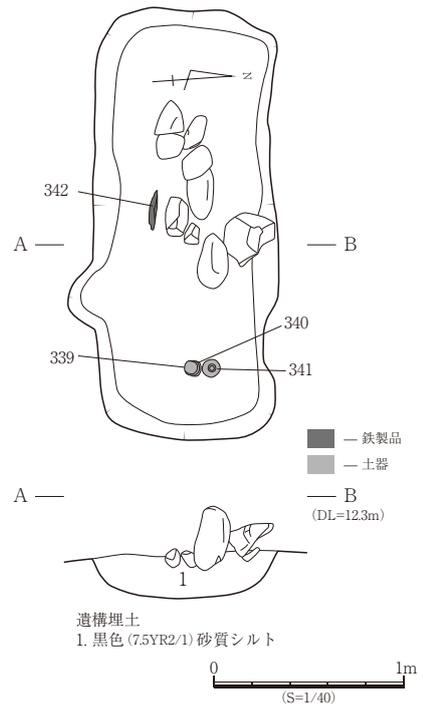


図3-19 VI区SK4

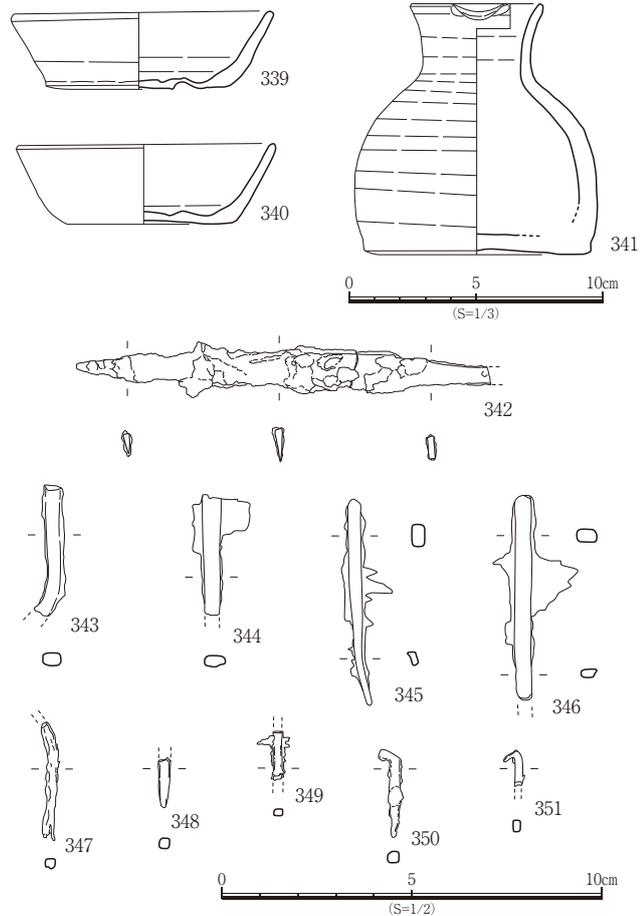


図3-20 VI区SK4出土遺物実測図

認規模は、長軸 1.50m、短軸 0.65mで、検出面から底面までの深さは約 30 cmを測る。遺構の埋土は、褐色土が含まれる黒色(7.5YR2/1)砂質シルトである。遺物は埋土中から土師器 11点、須恵器 4点が出土しており、その内土師器蓋と須恵器壺が図示できた。

出土遺物 (図 3 - 22 352 ~ 354)

352 は須恵器壺の底部である。底部外面には高台を貼付し、外面と内面にはナデ調整が施される。高台貼付部分には丁寧なナデ調整がみられる。353 は須恵器壺の口縁部である。短頸壺で、外面と内

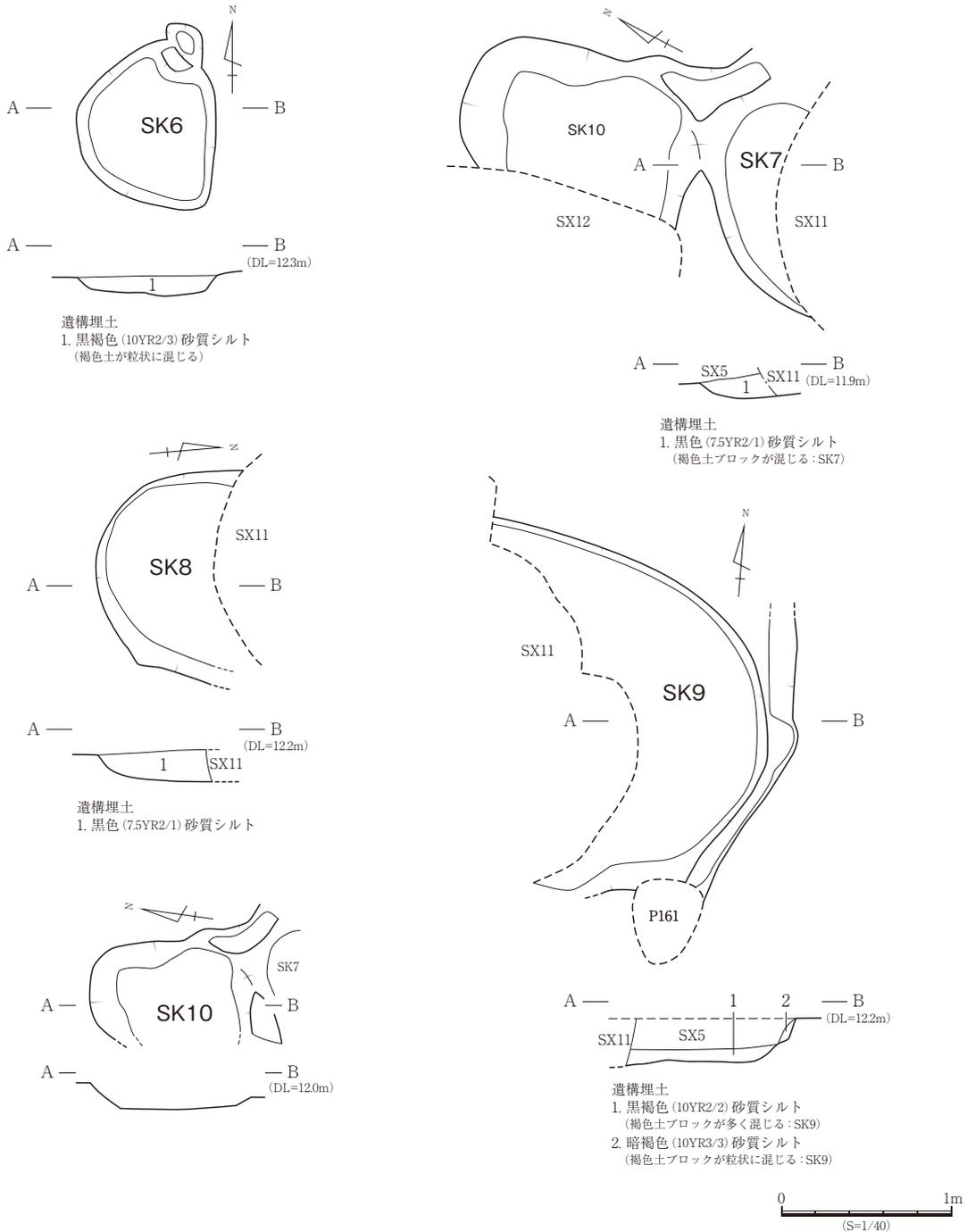


図 3 - 21 Ⅵ区SK6 ~ 10

2. 検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

面には回転ナデ調整が施される。354 は土師器の蓋と考えられる。外面と内面にはナデ調整とヘラミガキが施される。

SK8 (図3-21)

調査区の南東部において検出した。上面は性格不明遺構SX11にきられる。確認規模は、長軸 1.23m, 短軸 0.70m 以上で、検出面から底面までの深さは約 25 cm を測る。遺構の埋土は、黒色(7.5YR2/1)砂質シルトである。遺物は土師器3点と須恵器3点が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SK9 (図3-21)

調査区の南東部において検出した。上面は性格不明遺構SX11にきられる。確認規模は、南北 1.45m 以上、東西 0.95m 以上で、検出面から底面までの深さは約 28 cm を測る。遺構の埋土は、褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトが主体である。遺物は土師器3点が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK10 (図3-21)

調査区の南東部において検出した。上面は性格不明遺構SX5とSX12にきられており、SX5とSX12の底面より検出した。確認規模は南北 1.42m, 東西 0.93m 以上で、検出面から底面までの深さは 24 cm を測る。埋土は黒色(7.5YR2/1)砂質シルトである。遺物は土師器1点と須恵器1点が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK11 (図3-23)

調査区の東部において検出した。平面形は不整楕円形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを示す。規模は長軸 1.45m, 短軸 1.37m で、検出面から底面までの深さは約 26 cm を測る。遺構埋土は3~5cm大の円礫を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は土師器, 土師質土器 12点, 須恵器 7点, 緑釉陶器 1点, 陶器などが出土しており、その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-24 355・356)

355は土師質土器杯の底部である。底部は円盤状高台を呈し、外面には回転糸切り痕が認められる。外面と内面は回転ナデ調整が施され、内面の一部には摩耗がみられる。356は杯あるいは碗の口縁部で、端部は外反する。外面と内面は回転ナデ調整が施され、ナデ調整による凹凸がみられる。外面の一部にはススが付着する。

SK12 (図3-23)

調査区の中央東部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、遺構の北側は柱穴によってきられる。主軸方向はN-88°-Wを示す。規模は、長軸 1.57m, 短軸 1.12m で、検出面から底面までの深さは約 23 cm を測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物は土師器, 土師質土器, 須恵器などが出土しており、その内土師質土器杯・碗, 土師器甕を図示することができた。

出土遺物 (図3-24 357~359)

357は土師質土器杯である。底部は平底を呈し、外面には回転ヘラ切り痕が認められる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。358は土師質土器碗である。外面と内面はともに回転ナデ調整で、外

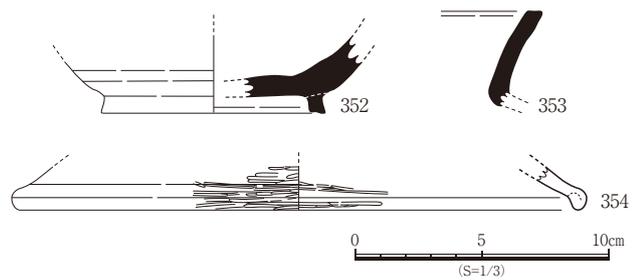


図3-22 VI区SK7出土遺物実測図

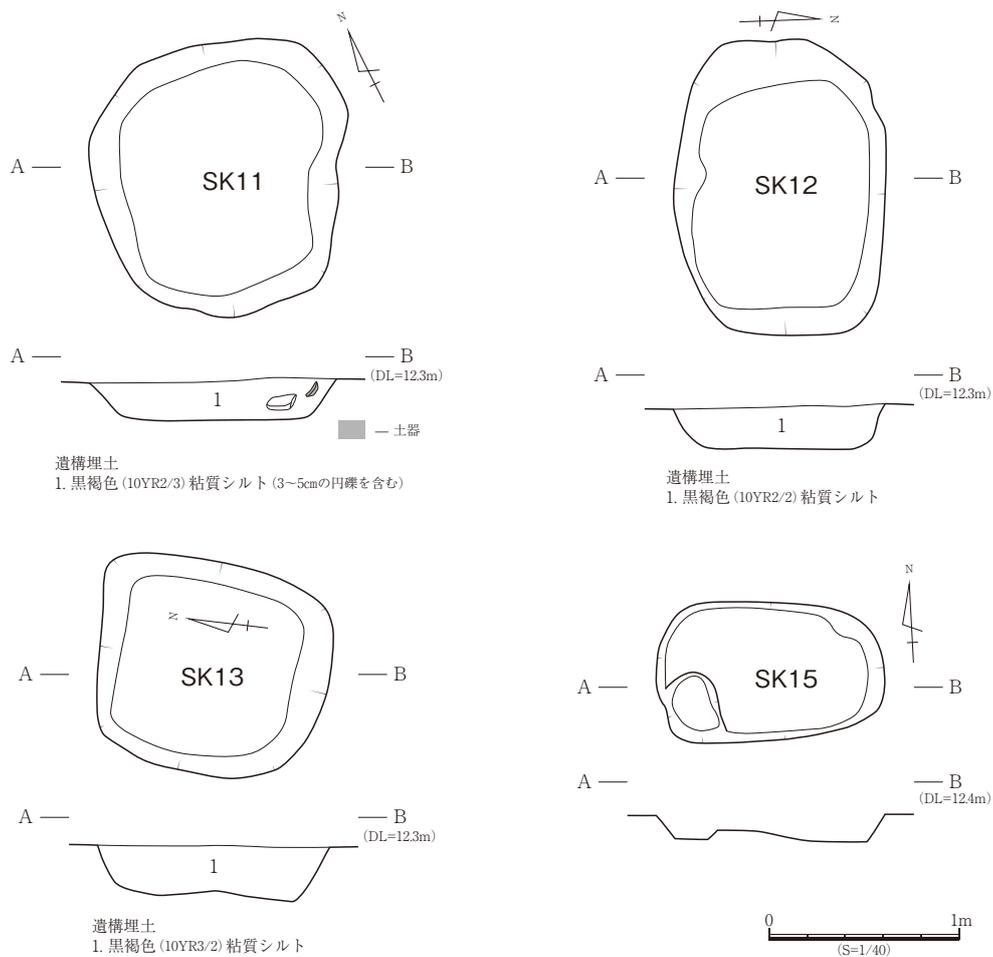


図3-23 VI区SK11~13・15

面の一部にはススの付着がみられる。359は土師器甕の口縁部である。外面はナデ調整で、内面にはヨコ方向のハケ目調整がみられる。外面にはススが付着している。

SK13 (図3-23)

調査区の中央部において検出した。平面形は隅丸形状を呈し、主軸方向はN-8°-Eを示す。遺構の北東隅はSX9に接する。規模は長軸1.22m、短軸1.11mで、検出面から底面までの深さは約34cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。遺物は土師器が出土しており、その内高杯が図示できた。

出土遺物 (図3-24 360)

360は土師器高杯の脚部である。外面は面取りをなし、断面は八角形をなす。外面はヘラケズリを施し、一部摩耗する。内面はナデ調整がみられる。

SK15 (図3-23)

調査区の中央北部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-87°-Wを示す。規模は、長軸1.20m、短軸0.75mで、検出面から底面までの深さは15cmを測る。埋土は円礫とハンダ土を含む暗灰色シルトである。遺物は陶磁器と金属製品(煙管)が出土している。

出土遺物 (図3-24 361)

2. 検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

361は筒形碗で、底部は削り出し高台を呈する。内面口縁部下から外面底部まで施釉がみられ、外面には染付が施される。

SK19 (図3-25)

調査区の東部中央において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径1.25mで、検出面から底面までの深さは約26cmを測る。埋土は礫とハンダ土を含む灰色(5Y5/1)シルトで、東側にはSX30、SK20が接しており、併存していたものと考えられる。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK20 (図3-25)

調査区の東部中央において検出した。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを示す。規模は長軸1.76m、短軸1.68m、検出面からの深さは約69cmを測る。埋土は礫とハンダ土を含む灰色(5Y5/1)シルトである。西側にはSX30とSK19が接しており、併存していたものと考えられる。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK21 (図3-25)

調査区の東部において検出した。平面形は円形を呈する。規模は径が1.20mで、検出面から底面までの深さは約39cmを測る。埋土はハンダ土と礫を含む灰色(5Y5/1)シルトである。南側1.5mにはSK22が位置しており、規模や形状からは2基が併存していたものと考えられる。遺物は、図示でき得るものはなかった。

SK22 (図3-25)

調査区東部において検出した。平面形は円形状を呈する。規模は径が1.07mで、検出面から底面

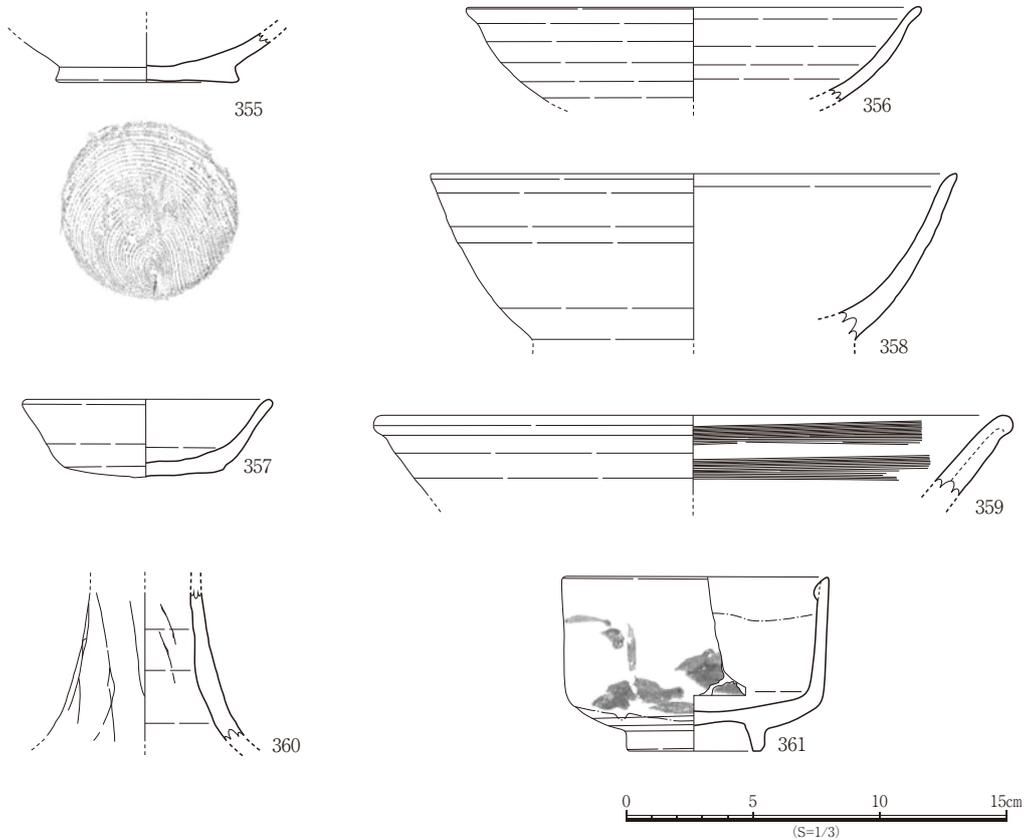


図3-24 VI区SK11~13・15出土遺物実測図

までの深さは約 42 cmを測る。埋土はハンダ土と礫を含む灰色(5Y5/1)シルトである。北側 1.5mにはSK21が位置しており、規模や形状からは2基が併存していたものと考えられる。遺物は、図示でき得るものはなかった。

(3) 溝跡

SD1 (図3-26)

調査区の西部中央において検出した。調査区を東西にのびる溝跡で、同じく調査区中央部を東西方向にのびて北側に折れるSD13に接続すると考えられる。規模は、確認延長が9.0m、幅は0.20～0.65m、検出面から底面までの深さは概ね5～10cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を含む黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。出土遺物は須恵器、土師器等が出土しており、その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-27 362)

362は土師質土器杯の底部である。底部外面には回転糸切り痕が認められる。外面と内面はともに

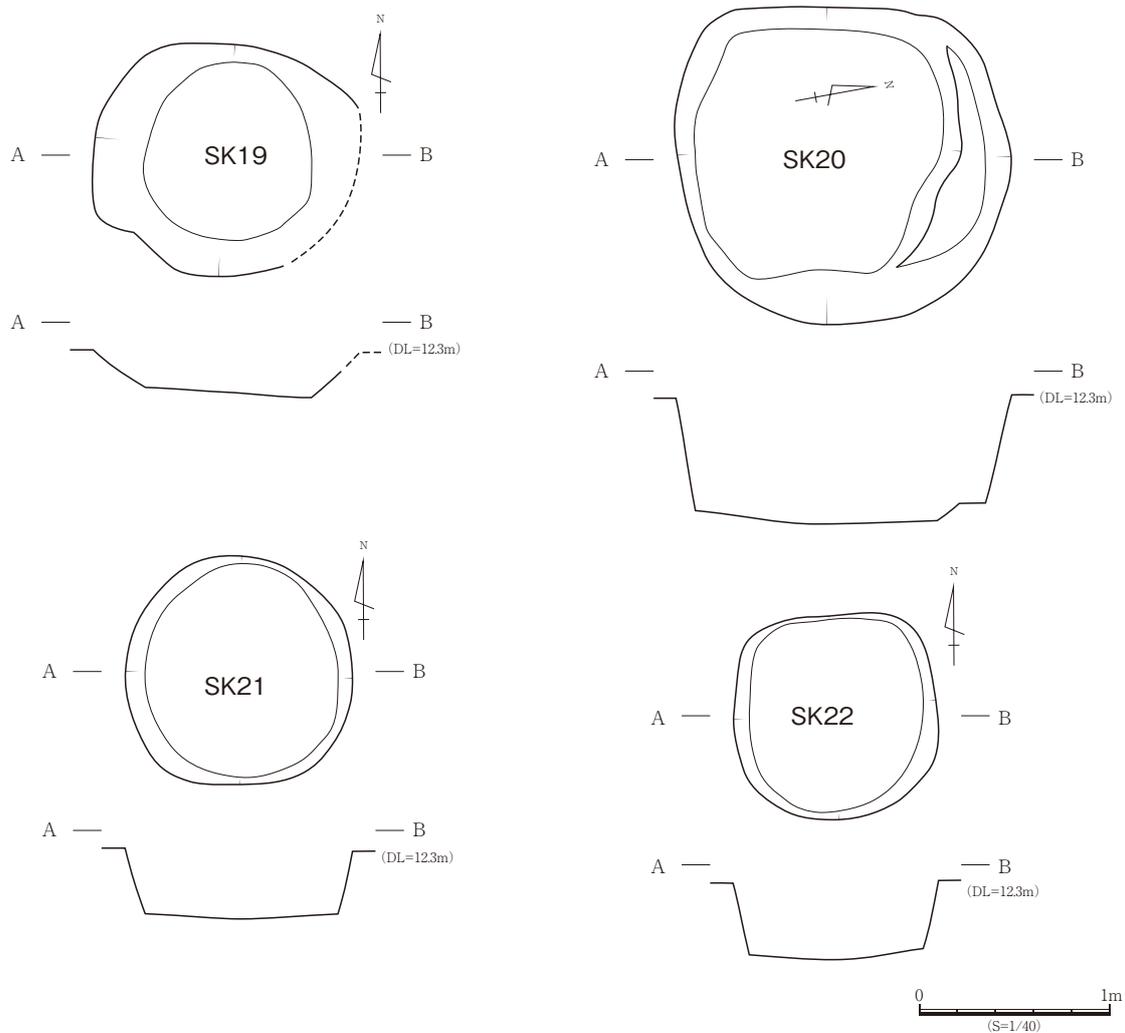


図3-25 VI区SK19～22

2. 検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

回転ナデ調整が施される。

SD2 (図3-26)

調査区の西部において検出した。調査区を東西にのびる溝跡で、調査区を南北方向にのびるSD16に接続すると考えられる。規模は、確認延長が6.50mで、幅は0.30～0.54mで、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物は、土師質土器碗と土師器高杯が図示できた。

出土遺物 (図3-27 363～365)

363は土師質土器碗の底部である。外面には高台を貼付し、外面は回転ナデ調整が施される。内面は摩耗のため調整は不明である。364も土師質土器碗の底部である。底部外面に高台を貼付しており、外面と内面はともに摩耗しており、調整は不明である。365は高杯の脚部と考えられる。外面と内面はナデ調整が施され、内面は一部摩耗がみられる。

SD3

調査区の西部において検出した。南北方向の溝跡である。規模は、確認延長が2.00m、幅は0.52～0.60mで検出面から底面までの深さは8cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD6 (図3-28)

調査区の南西部において検出した。東西方向の溝跡である。規模は、確認延長が3.42m、幅は0.28～0.69mで、検出面から底面までの深さは4～13cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/3)粘質シルトが主体で、下層には褐色(10YR4/4)シルトがみられる。遺物は須恵器と土師器等が出土しており、その内、須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-29 366)

366は須恵器蓋である。天井部には宝珠形のつまみが付く。外面には自然釉がかかる。

SD7 (図3-28)

調査区の南西部において検出した。東西方向の溝跡である。規模は、確認延長が11.80m、幅は0.23～0.57mで、検出面から底面までの深さは概ね5～10cmを測る。遺構の西南部壁はP31によりきられる。埋土は黄褐色土を含む暗褐色(10YR3/4)粘質シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

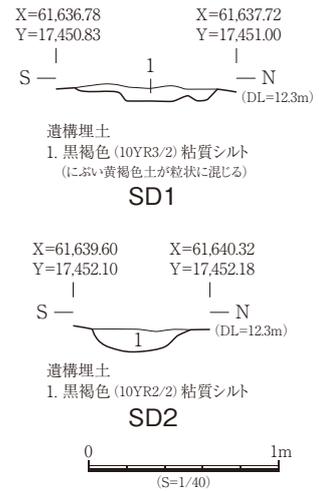


図3-26 VI区SD1・2

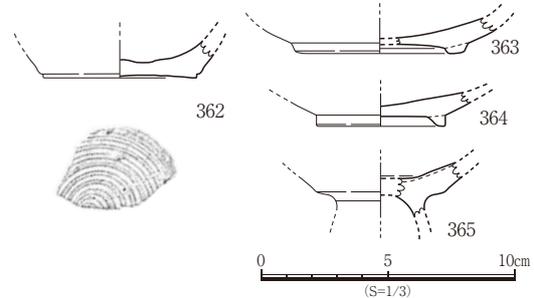


図3-27 VI区SD1・2出土遺物実測図

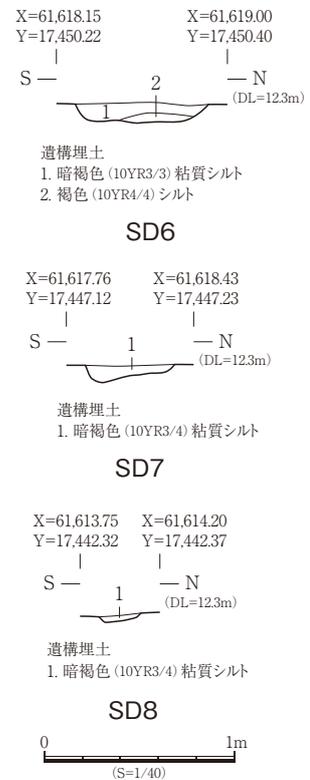


図3-28 VI区SD6～8

SD8 (図3-28)

調査区の南西隅において検出した。東西方向の溝跡である。規模は、確認延長が5.82m、幅は0.22~0.46m、遺構の東端は調査区外にのびると考えられる。検出面から底面までの深さは3~10cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/4)粘質シルトである。遺物の出土はみられなかった。

SD10 (図3-30)

調査区の中央南部において検出した。南北方向から東西方向にのびる区画溝である。掘立柱建物跡SB2、SB6と性格不明遺構SX1をきる。規模は南北方向に12.80mのびて、東側に折れて東西方向に22.0mのびる。幅は0.27~0.67mで、検出面から底面までの深さは6~20cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトが主体である。遺物は、須恵器杯と壺が図示できた。

出土遺物 (図3-31 367~370)

367は須恵器杯の口縁部である。内湾気味に開く。外面と内面は回転ナデ調整が施される。368は須恵器杯の底部である。底部外面には高台を貼付し、底部外面に回転ヘラ切りと思われる痕がみられる。外面と内面には回転ナデ調整が施される。369・370は須恵器壺の口縁部と考えられる。口縁部が外方に開き、端部は上方にのびて、丸くおさめる。外面と内面はともに回転ナデ調整がみられる。

SD11 (図3-30)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびる溝跡である。上面はカクラン等によりきられる。規模は、確認延長が18.00m、幅0.37~0.81mで、検出面から底面まで深さは5~12cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は、土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-31 371)

371は土師質土器杯である。平坦な底部を呈し、口縁部は外方に開く。底部外面には回転ヘラ切り痕がみられる。外面と内面にはヨコ方向のヘラミガキが施される。

SD12 (図3-31)

調査区の西部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、調査区を東西方向にのびるSD18をきる。遺構の南側には、SD14とSD17が同一方向にのびるが、途中上面をカクランにきられているため、同一の溝跡であるかは確認することができなかった。規模は、確認延長が3.30m、幅0.22~0.34mで、検出面からの深さは7~10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物の出土はみられなかった。

SD13 (図3-30)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびて、北方向に折れて北側にのびる溝跡で、遺構

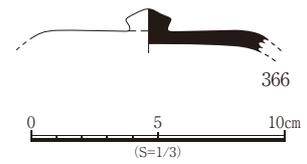
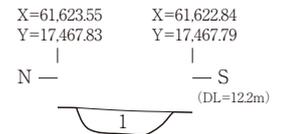
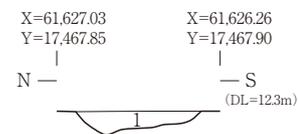


図3-29 VI区SD6出土遺物実測図



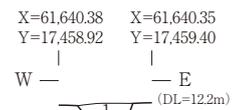
遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト

SD10



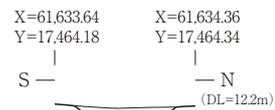
遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト
(褐色土が粒状に混じる)

SD11



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト

SD12



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト

SD13

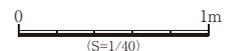


図3-30 VI区SD10~13

2. 検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

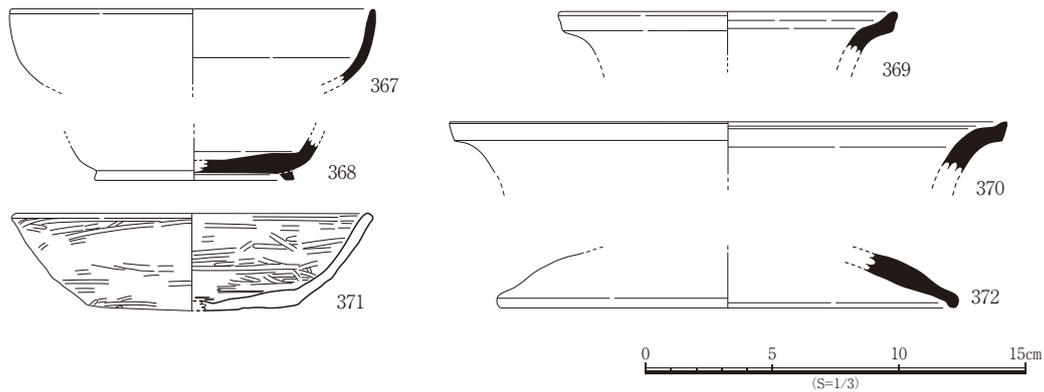


図3-31 VI区SD10・11・13出土遺物実測図

の西側は同じく調査区中央部を東西にのびるSD1に接続すると考えられる。規模は、確認延長が東西方向に21.50mのびて、北側に折れ南北方向に4.10mのびる。幅は0.37～0.58mで、検出面から底面までの深さは8～22cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトが主体である。遺物は、須恵器蓋が図示できた。

出土遺物(図3-31 372)

372は須恵器蓋である。外面と内面にはナデ調整が施される。

SD14(図3-32)

調査区の西部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の北側には同一方向にのびるSD12が位置する。規模は、確認延長が2.95m、幅0.41～0.55mで、検出面から底面までの深さは11cmを測る。埋土は、黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物は埋土中から須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD15(図3-32)

調査区の西部において検出した。環状を呈する溝跡で、遺構の北側にはSD14、南側はSD17が位置しているが、前後関係は不明である。規模は、確認延長が6.00m、幅0.22～0.40m、検出面から底面までの深さは10～19cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物は埋土中から土師器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD16

調査区の西部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の北側を東西方向にのびるSD2に接続すると考えられる。規模は、確認延長が6.90m、幅0.20～0.41m、検出面からの深さは5～11cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)土を含む黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は埋土中から土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD17(図3-32)

調査区の西部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の南端は柱穴(P57)にきられ、遺構の北側はSD15に接するが、前後関係は不明である。規模は、確認延長が3.64m、幅0.18～0.40mで、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物の出土はみられなかった。

SD18

調査区の西部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の東側はSD12にきられる。規模は、確認延長が0.82m、幅0.24～0.49mで、検出面から底面までの深さは7cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)土を含む黒色(10YR1.7/1)シルトである。SD18の1.8m西側には、SD19が位置しており、その規模及び位置関係等から同一の溝跡であった可能性も考えられる。また、東側3.5mにはSD23が延長線上に位置することから、同一の溝跡であったものと推定される。遺物は、土製品土錘が図示できた。

出土遺物 (図3-33 373)

373は管状土錘である。ほぼ完形で、外面にはナデ調整と一部に指頭圧痕がみられる。

SD19 (図3-32)

調査区の西部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の東1.8mにSD18が位置する。規模は、確認延長が2.58m、幅0.38～0.56m、検出面から底面までの深さは13cmを測る。埋土は黒色土を含む黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトである。SD19の東側にSD18、さらにその延長線上の東方3.5mにはSD23が位置することから、同一の溝跡であった可能性が考えられる。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD20 (図3-34)

調査区の北部において検出した。南北方向の溝跡で、遺構の北側は調査区外にのびる。規模は、確認延長が3.45m、幅0.34～0.60mで検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトが主体で、下層には暗褐色(10YR3/3)シルトがみられる。SD20の南3.0mの延長線上にSD23が位置していることから、同一の溝であった可能性が考えられる。遺物は土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD21 (図3-34)

調査区の中央北部において検出した。東西方向の溝跡で、調査区を南北方向にのびるSD23をきる。規模は、確認延長が3.40m、幅0.38～0.54m、検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD22 (図3-34)

調査区の中央北部において検出した。南北方向の溝跡である。規模は、確認延長が7.50m、幅0.17～0.26m、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。底面は凹凸状を呈する。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

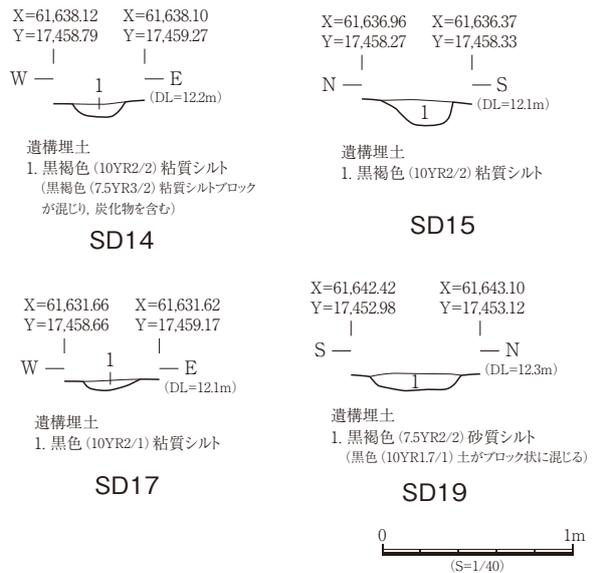


図3-32 VI区SD14・15・17・19

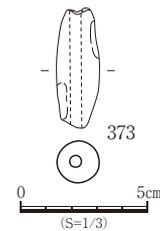


図3-33 VI区SD18出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

SD23 (図3-34)

調査区の北部中央において検出した。東西方向にのびて北方向に折れ、南北方向にのびる溝跡で、延長線上のSD20に接続するものと考えられる。規模は、確認延長が東西方向5.00m、南北方向に4.90m、幅は0.24～0.38mで、検出面から底面までの深さは5～10cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。遺物の出土はみられなかった。

SD24 (図3-34)

調査区の北部中央において検出した。南北方向にのびる溝跡で、SD22に併走している。規模は、確認延長が10.60mで、幅0.14～0.24m、検出面から底面までの深さは4～14cmを測る。溝跡の南端は東西方向の溝跡SD25にきられる。埋土は黒褐色(7.5YR2/3)砂質シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SD25 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびる溝跡で、西側は二叉状に分かれている。調査区を南北方向にのびるSD24とSD26をきる。規模は、確認延長が5.30m、幅0.25～0.54m、検出面から底面までの深さは7～13cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD26 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の北側はSD25にきられ、南側はSD27をきる。遺構の中央部は、SD29に接するが前後関係は不明である。規模は、確認延長が7.30m、幅0.19～0.45m、検出面から底面までの深さは6～11cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD27 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびる溝跡で、遺構の西端は南北方向にのびるSD28にきられ、東側は同じく南北方向にのびるSD26にきられる。規模は、確認延長が5.60m以上、幅0.21～0.42m、検出面から底面までの深さは7～11cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD28 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の北端はSD29にきられ、中央部はSD13とSD27にきられる。規模は、確認延長が約5.0mで、幅0.14～0.27m、検出面から底面までの深さは5～11cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD29 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の西端は南北方向にのびるSD28をきり、東端は同じく南北方向にのびるSD26にきられる。規模は、確認延長が3.89mで、幅0.21～0.37m、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD30 (図3-34)

調査区の中央部北寄りにおいて検出した。東西方向にのびる溝跡で、遺構の西側は調査区を南北方向にのびるSD23にきられる。規模は、確認延長が1.91mで、幅0.34～0.44m、検出面から底面まで

の深さは約10cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師器が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SD31 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。南北方向にのびる溝跡で、遺構の南端は東西方向にのびるSD32にきられる。規模は、確認延長が2.14m、幅0.16～0.24mで検出面から底面までの深さは7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を含む黒褐色(10YR3/3)砂質シルトである。遺物は土師器が出土しているが図示でき得るものはなかった。

SD32 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびる溝跡で、遺構の西端はSD13にきられ、東側はSD42にきられる。規模は確認延長が6.52m、幅は0.26～0.39mで検出面から底面までの深さは6～15cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。遺物は土師器と鉄片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD33 (図3-34)

調査区の中央部において検出した。東西方向にのびる溝跡で、遺構の西部はSD13にきられる。規模は確認延長が5.60m、幅は0.29～0.49mで検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD34 (図3-34)

調査区の南部隅において検出した。南北方向にのびる溝跡である、規模は確認延長が3.63m、幅は0.15～0.40mで検出面から底面までの深さは6～10cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。埋土中からは遺物の出土はみられなかった。

SD36 (図3-34)

調査区の東部において検出した。東西方向にのびる溝跡でSX5をきる。遺構の西方向の延長線上にSD37、さらにSD10が位置しており、一連の溝と考えられる。規模は確認延長が2.68mで幅は0.30～0.45m、検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土は細礫を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。埋土中からは須恵器が出土しており、その内甕が図示できた。

出土遺物 (図3-35 374)

374は須恵器甕の口縁部である。口縁端部は左右にやや肥厚させる。外面はナデ調整が施され、内面には自然釉がかかる。

SD37

調査区の東部において検出した。東西方向にのびる溝跡である。遺構の東側延長線上にSD10、西側延長線上にSD36が位置しており、同一の溝であったと考えられる。規模は確認延長が2.50m、幅は0.55mで検出面から底部までの深さは7cmである。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。埋土中からは遺物の出土はみられなかった。

SD39 (図3-34)

調査区の南東部において検出した。東西方向の溝跡で、SD40にきられる。遺構の規模は確認延長が4.13m、幅は0.33～0.43mで検出面から底面までの深さは7～21cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示できる得るものはなかった。

SD40 (図3-34)

2. 検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

調査区の南東部において検出した。東西方向の溝跡で同じく東西方向の溝跡SD39をきる。遺構の規模は確認長が1.55m、幅が0.24mで検出面から底面までの深さは8～19cmである。埋土は暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は須恵器と土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

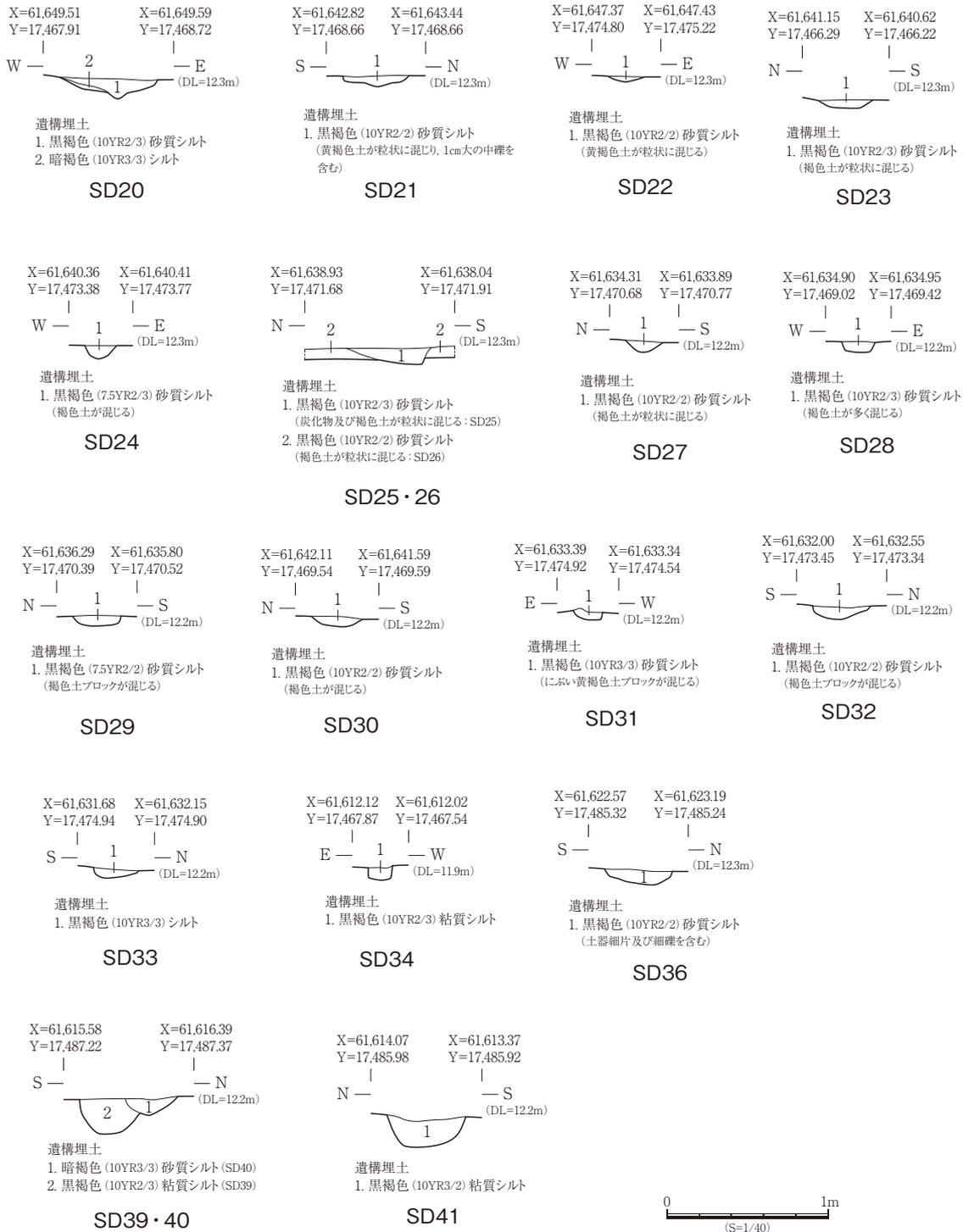


図3-34 VI区SD20～34・36・39～41

SD41 (図3-34)

調査区の南東部において検出した。東西方向の溝跡で遺構の東側はSX6に接する。規模は確認延長が2.09m, 幅は0.23～0.55mで検出面からの深さは15～28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。遺物は須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

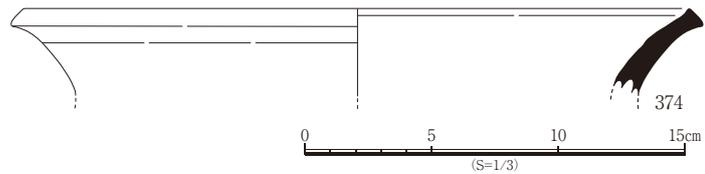


図3-35 VI区SD36出土遺物実測図

SD42

調査区の北部において検出した。南北方向の溝跡で、SD32をきり、SD13にきられる。規模は確認延長が8.72m, 幅は0.34～0.73mで検出面からの深さは6～13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器と須恵器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

(4) 柱穴

P1 (図3-36)

調査区の北西隅において検出した。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.30m, 短軸0.25mで検出面から底面までの深さは概ね30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。埋土中からは須恵器が出土しており、その内蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-37 375)

375は須恵器蓋である。宝珠形のつまみが付き、外面は自然釉がかかる。内面は回転ナデ調整と斜位方向のナデ調整がみられる。

P2 (図3-36)

調査区の北西部において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が概ね0.3mで検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。埋土中からは土師質土器の皿が2個体重なった状態で出土している。

出土遺物 (図3-37 376・377)

376は平坦な底部から口縁部は外方に開き、端部はやや外反する。底部には回転ヘラ切り痕が認められる。また、板状圧痕と考えられる痕がみられる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。377も同じく平坦な底部から口縁部は外方に開き、端部はやや外反する。底部には回転ヘラ切り痕が認められる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。

P5 (図3-36)

調査区の北西隅において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.57m, 短軸0.43mで検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質シルトである。遺物では、土師質土器碗が図示できた。

出土遺物 (図3-37 378)

378は土師質土器碗の底部である。外面には高台を貼付し、外面と内面はともに摩耗しているが、高台内面にはナデ調整がみられる。

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

P36 (図3-36)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.37mで検出面から底面までの深さは48cmを測る。埋土は黒褐色(7.5YR2/1)粘質シルトである。埋土中からは、土師器と土師質土器が出土しており、その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 379)

379は土師質土器杯の口縁部である。外方に開き、端部は外反している。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。

P46 (図3-36)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸0.58m、短軸0.46mで、検出面から底面までの深さは16cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。埋土中からは須恵器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 380)

380は須恵器杯の底部である。底部外面と内面には不定方向のナデ調整が施され、外面に一部ヘラケズリと圧痕がみられる。

P48 (図3-36)

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸が0.61m、短軸0.38mで検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は、石製品砥石が図示できた。

出土遺物 (図3-37 381)

381は砥石と考えられる。両面に使用痕がみられる。風化する。石質は泥岩系か。

P70 (図3-36)

調査区の北部において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が概ね0.3mで、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。埋土中からは土師器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 382)

382は土師器杯の底部である。底部外面に高台を貼付しており、外面と内面の一部には赤彩が認められる。

P72 (図3-36)

調査区の北部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸0.47m、短軸0.39mで検出面から底面までの深さは42cmを測る。埋土は黒褐色(7.5YR2/1)粘質シルトである。遺物は須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 383)

383は須恵器杯の口縁部である。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。

P78 (図3-36)

調査区の北部隅において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.33m、短軸0.25mで検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は、須恵器と土師質土器であり、その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 384)

384の底部外面には粘土紐痕か。外面は回転ナデ調整で、体部に一部ヘラミガキが認められる。内面は回転ナデ調整がみられる。

P81 (図3-36)

調査区の北部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、長軸は0.47m、短軸が0.35m、検出面から底面までの深さは35cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 385)

385は須恵器杯の底部である。底部には高台を貼付し、外面と内面にはナデ調整がみられる。

P101 (図3-36)

調査区の中央北部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が0.2m前後で検出面から底面までの深さは14cmを測る。底面からは12cm大の石が出土しており、根石と考えられる。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器甕が図示できた。

出土遺物 (図3-37 386)

386は土師器甕の口縁部である。端部は平坦面を呈する。外面にはナデ調整が施され、内面にヨコ方向のハケ目調整がみられる。

P102 (図3-36)

調査区の北部中央において検出した。遺構の東側はP110に接し、きられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.53m、短軸が0.36m以上で検出面から底面までの深さは36cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 387)

387の底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。底部は高台を貼付し、外面と内面に回転ナデ調整が施される。内面底部は不定方向のナデ調整がみられる。

P104 (図3-36)

調査区の北部中央において検出した。遺構の南東側はP106に接し、きる。平面形は円形状を呈し、規模は径が概ね0.5mで検出面から底面までの深さは25cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 388)

388は土師器杯の底部である。底部粘土紐痕がみられる。外面は摩耗しており、内面には回転ナデ調整が施される。

P109 (図3-36)

調査区の中央部において検出した。SK6の西側0.8mに位置する。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸が0.56m、短軸は0.37mで検出面から底面までの深さは13cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器皿が図示できた。

出土遺物 (図3-37 389)

389は皿の口縁部である。口縁端部下の内面は沈線がみられる。外面はヘラミガキ、内面にはナデ調整と一部にヘラミガキが施される。

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

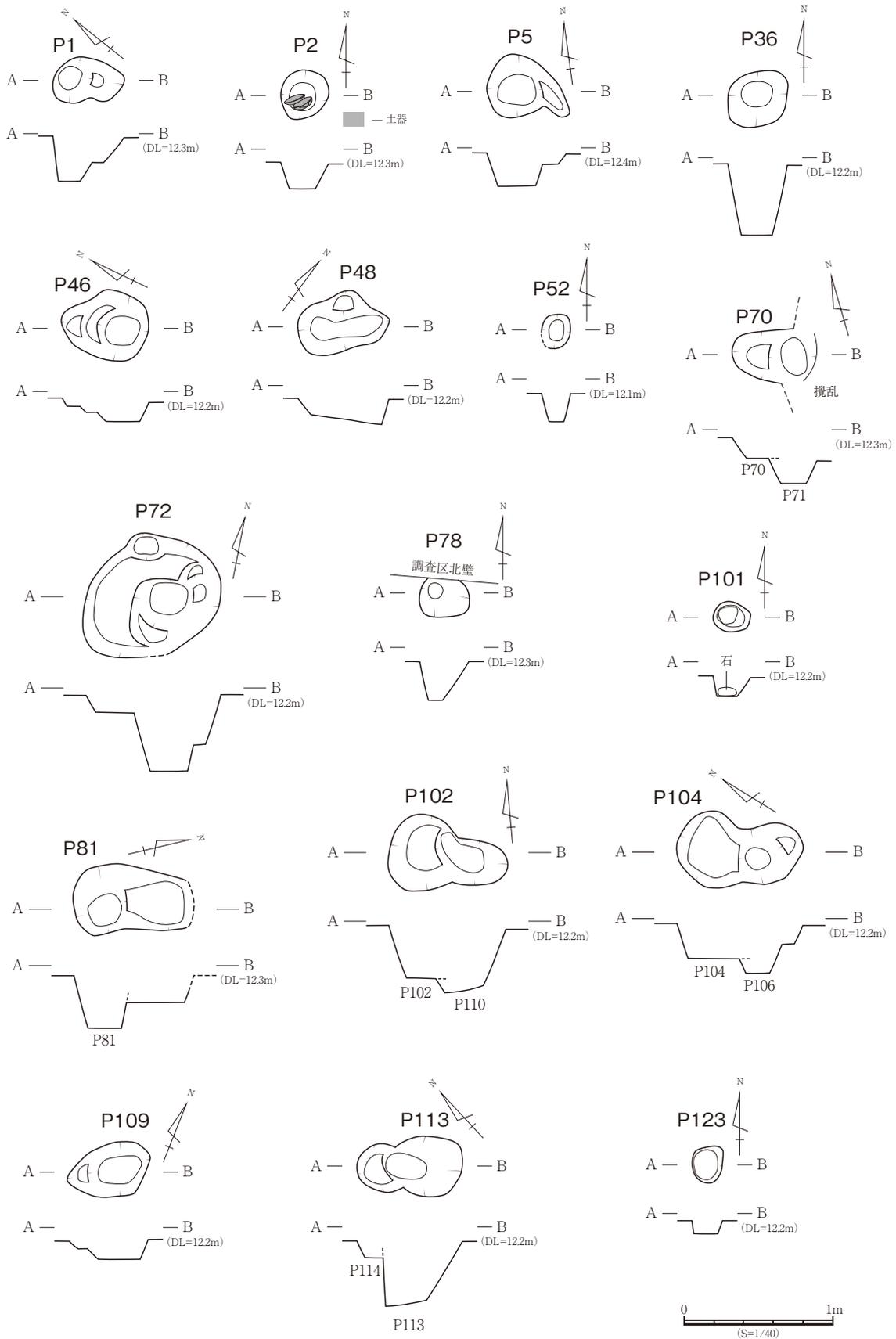


図3-36 VI区P1~123

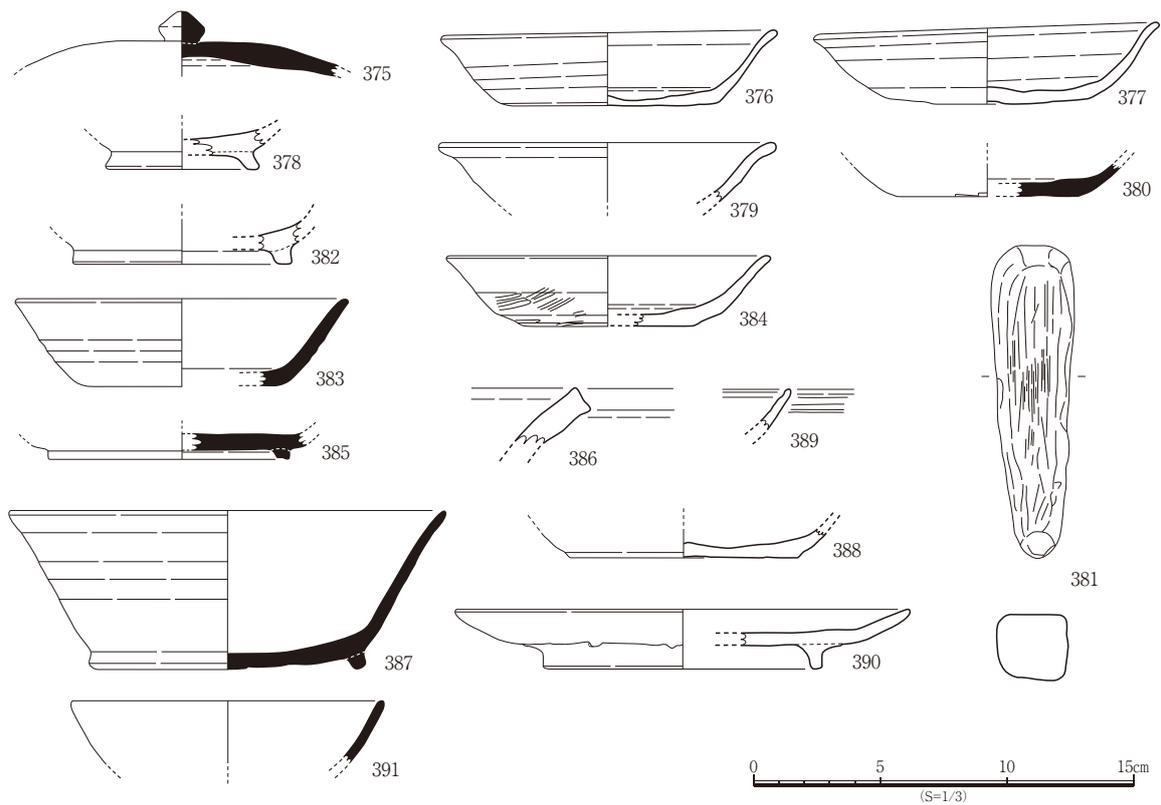


図3-37 Ⅵ区P1~123出土遺物実測図

P113 (図3-36)

調査区の中央部において検出した。遺構の北西側はP114と接し、きる。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸が0.54m、短軸0.40mで検出面から底面までの深さは45cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物では、土師器皿が図示できた。

出土遺物 (図3-37 390)

390は土師器皿で、底部外面には高台を貼付する。高台の内面と外面にはナデ調整が施される。口縁部内面は摩耗し、外面も摩耗するが一部ナデ調整がみられる。口縁端部にススの付着が認められる。

P123 (図3-36)

調査区の中央部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね0.2mで検出面から底面までの深さは9cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物は、土師器と須恵器であり、その内須恵器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-37 391)

391は須恵器杯の口縁部である。外面と内面はともに摩耗しており、内面の一部に回転ナデ調整がみられる。

P137 (図3-38)

調査区中央部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.35m、短軸は0.23mで検出面から底面までの深さは15cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物は、土師器と須恵器であり、その内土師器皿が図示できた。

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

出土遺物 (図3-39 392)

392の外面にはタール状の物質が付着しており、内面は摩耗がみられる。

P143 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。平面形は円形状を呈し、規模は径が概ね1.15mで、検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物では、土師質土器杯・碗、黒色土器碗、土製品土錘が図示できた。

出土遺物 (図3-39 393～397)

393は土師質土器杯である。底部外面には回転ヘラ切り痕が認められ、外面と内面は回転ナデ調整が施される。底部脇には工具状の圧痕がみられる。394も土師質土器杯である。外面は回転ナデ調整が施され、内面は摩耗する。底部の切り離しは摩耗のため不明である。395は土師質土器碗である。底部外面には厚みをもつ高台を貼付する。外面と内面には回転ナデ調整が施される。外面と内面にはタールの付着がみられる。396は黒色土器碗の口縁部である。外面と内面はともにヨコ方向の密なヘラミガキが施される。搬入品の可能性が考えられる。397は土錘である。管状を呈し、途中欠損する。外面はナデ調整が施される。

P156 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸が0.55m、短軸は0.32mで検出面から底面までの深さは11cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-39 398)

398は須恵器蓋で、外面と内面には回転ナデ調整が施される。

P161 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。遺構の北西部はSK9に接する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が概ね0.45mで、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-39 399)

399は土師器杯の口縁部である。外面内面ともにヨコ方向のヘラミガキが施される。

P162 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。調査区を東西にのびるSD41をきる。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね0.45mで検出面から底面までの深さは約45cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-39 400)

400は土師質土器杯の口縁部である。外面と内面には回転ナデ調整が施される。

P163 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。遺構の南側はP164に接し、きる。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸0.75m、短軸0.53mで検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、須恵器壺と黒色土器碗が図示できた。

出土遺物 (図3-39 401・402)

401は黒色土器碗の底部である。内面は黒色で底部外面には高台を貼付している。高台の周囲は回

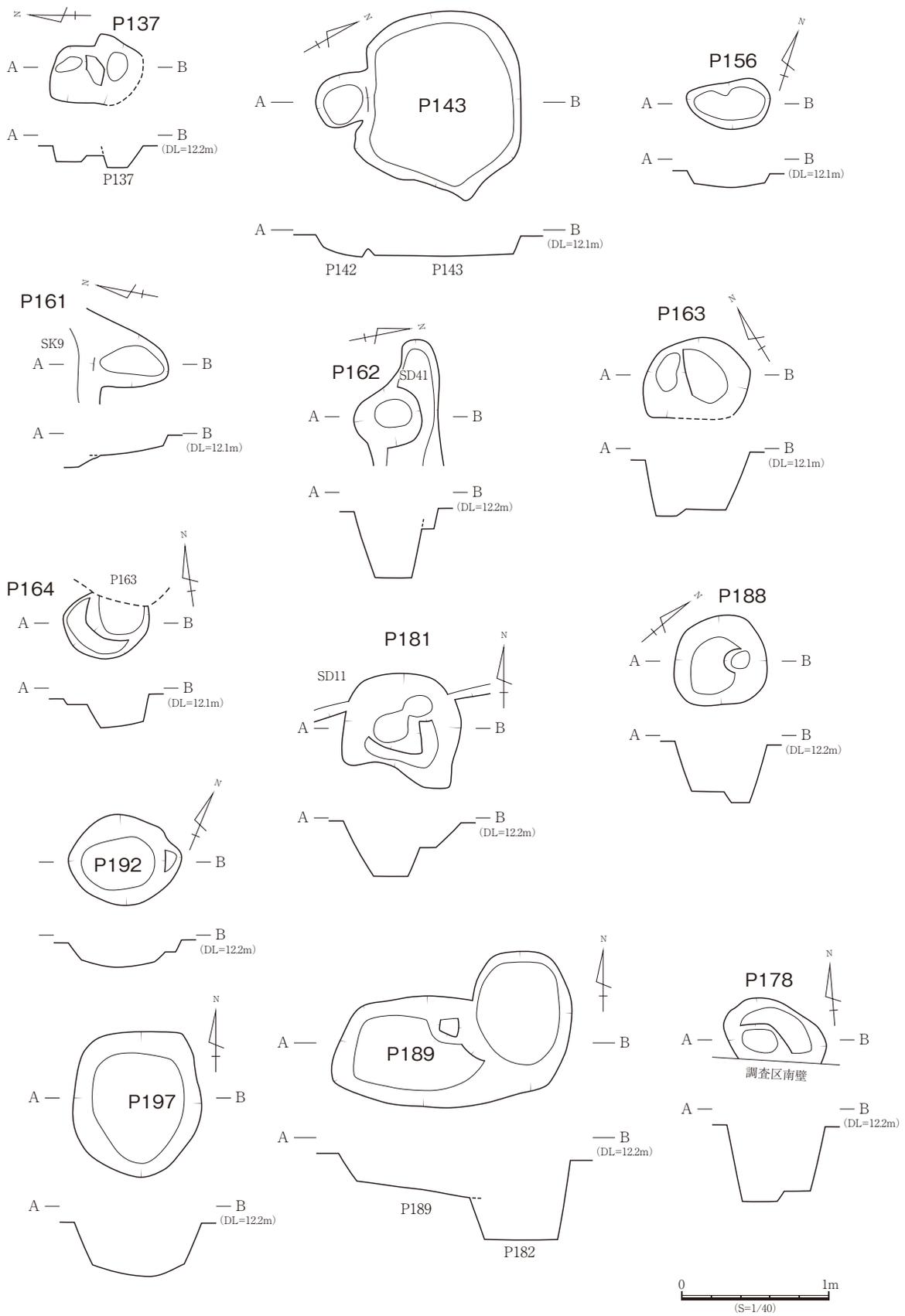


図3-38 Ⅵ区P137・143・156・161～164・178・181・188・189・192・197

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

転ナデ調整, 内面にはヘラミガキが施される。搬入品の可能性が考えられる。402は須恵器壺の口縁部と考えられる。口縁端部は上方に拡張しており, 外面は回転ナデ調整が施され, 内面には自然釉がかかる。

P164 (図3-38)

調査区の南東部において検出した。遺構の北側はP163に接し, きられる。平面形は楕円形状を呈し, 規模は長軸が0.57m, 短軸は0.44mで検出面から底面までの深さは23cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では, 須恵器蓋と土製品土錘が図示できた。

出土遺物 (図3-39 403・404)

403は須恵器蓋と考えられる。内面は回転ナデ調整が施され, 外面には自然釉がかかる。404は土錘である。両端部は欠損しているが, 管状を呈していたと考えられる。

P178 (図3-38)

調査区の南東隅において検出した。遺構の南側は調査区外にのびる。規模は長軸が0.70m, 短軸は0.46mで検出面から底面までの深さは52cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では, 土師器皿・甕, 須恵器蓋と杯が出土している。

出土遺物 (図3-39 405～407)

405は土師器皿の口縁部である。外面は摩耗するが, 内面は口縁部にナデ調整とヘラミガキが施される。406は須恵器杯の口縁部である。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。407は須恵器蓋である。外面と内面はともに回転ナデ調整が施される。一部に摩耗がみられる。

P181 (図3-38)

調査区の中央部において検出した。調査区中央部を東西にのびるSD11に接し, きる。平面形は不整形を呈し, 規模は径が0.75m前後で, 検出面から底面までの深さは38cmを測る。埋土は黄褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は, 土師器と須恵器で, その内土師器盤が図示できた。

出土遺物 (図3-39 408)

408は土師器盤の底部と考えられる。内面と外面は赤彩がみられる。内面は一部摩耗しているが, 外面と内面にはナデ調整が施される。

P188 (図3-38)

調査区の南東隅において検出した。平面形は円形を呈し, 規模は径が概ね0.6mで, 検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では, 土師器杯, 土師質土器杯, 須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-39 409～411)

409は土師質土器杯の口縁部である。外面・内面ともに回転ナデ調整が施される。410は土師器杯の底部である。外面は摩耗しているが, 内面にはヘラミガキが施される。411は須恵器蓋である。扁平な宝珠形のつまみが付き, 天井部外面にはヘラケズリ, その他は回転ナデ調整が施される。内面は一部摩耗するが, ナデ調整がみられる。

P189 (図3-38)

調査区の南東隅において検出した。平面形は楕円形を呈し, 規模は長軸が1.06m, 短軸は0.76mで検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は, 土師器と須恵器であり, その内土師器杯が図示できた。

出土遺物 (図3-39 412・413)

412・413は土師器杯の口縁部である。412は外面は摩耗しており、内面はナデ調整とヘラミガキが施される。413は外面はナデ調整とヨコ方向のヘラミガキが施され、内面はタテ方向のヘラミガキがみられる。

P192 (図3-38)

調査区の南東隅において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が0.77m, 短軸は0.62mで

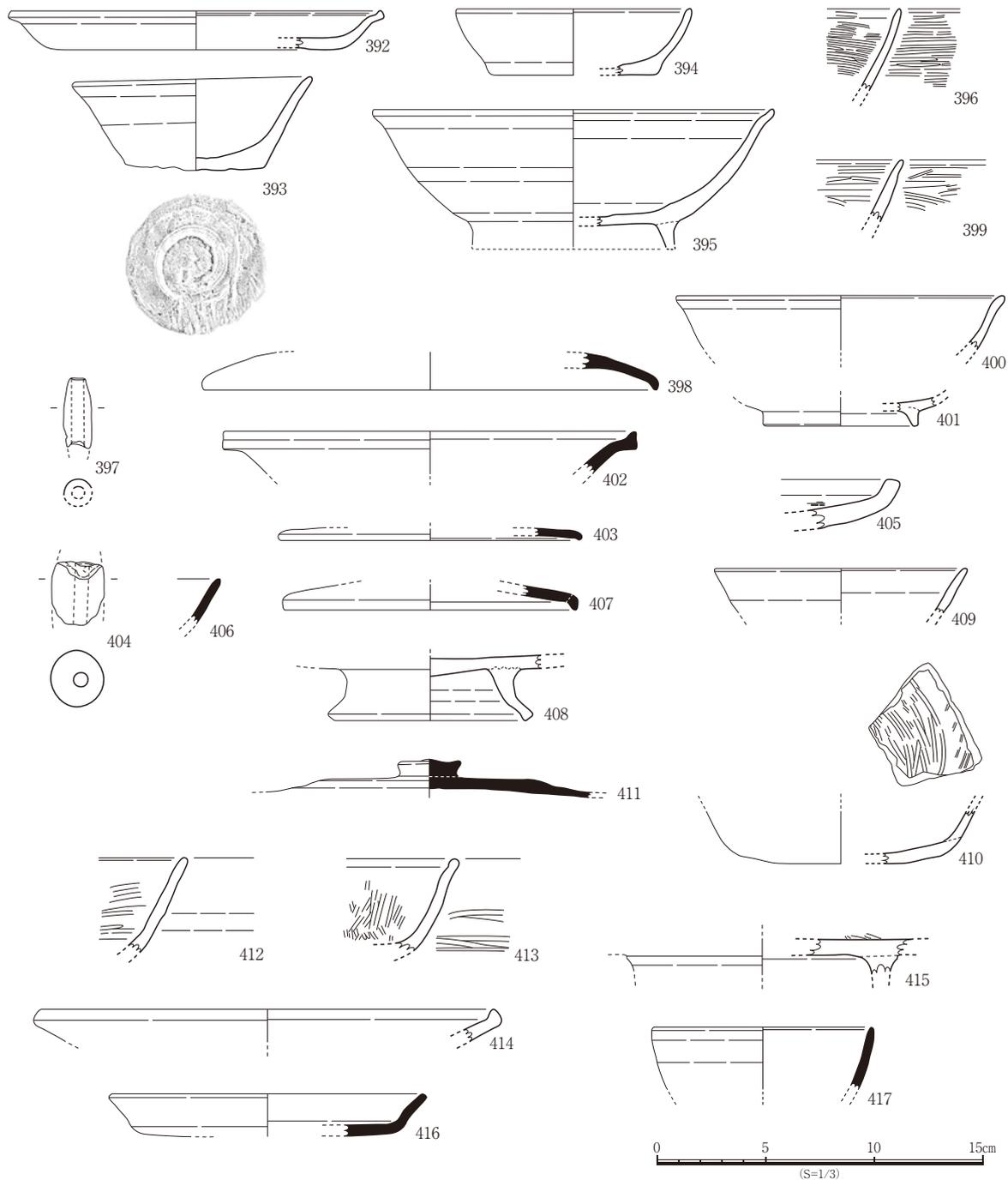


図3-39 VI区P137・143・156・161～164・178・181・188・189・192・197出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

検出面から底面までの深さは 19 cm を測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器皿が図示できた。

出土遺物 (図 3 - 39 414)

414 は土師器皿の口縁部と考えられる。外面は摩耗しており、内面にはナデ調整と一部ヘラミガキと考えられる。

P197 (図 3 - 38)

調査区の南東隅において検出した。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸が 1.00m、短軸は 0.87m で検出面から底面までの深さは 37 cm を測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物では、土師器皿、須恵器皿・杯が図示できた。

出土遺物 (図 3 - 39 415 ~ 417)

415 は土師器皿の底部である。底部外面に高台を貼付し、高台の外面はナデ調整が施される。内面はナデ調整で、底部内面にはヘラミガキが施される。416 は須恵器皿である。外面は回転ナデ調整で、底部外面は一部摩耗するが、ナデ調整が施される。内面は摩耗のため、調整は不明瞭である。417 は須恵器杯の口縁部である。外面と内面には回転ナデ調整が施される。

P198 (図 3 - 38)

調査区の南東隅において検出した。遺構の南側は調査区外にのびる。規模は長軸が 1.23m、短軸は 0.68m (確認長) で検出面から底面までの深さは 22 cm を測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は、土師器と須恵器であり、その内須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図 3 - 41 418)

418 は須恵器蓋である。外面はナデ調整。内面は回転ナデ調整。

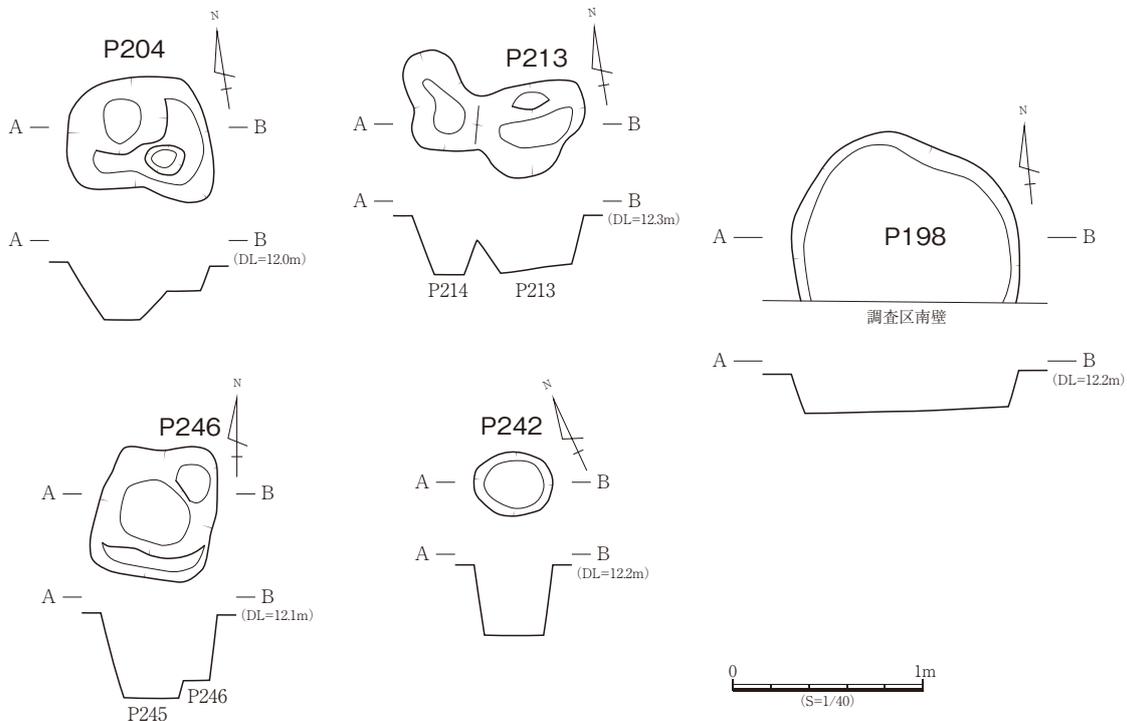


図 3 - 40 VI区 P198・204・213・242・246

P204 (図3-40)

調査区の南東部, SX6の底面において検出した。平面形は不整形を呈し, 規模は東西0.52m, 南北0.39mで検出面から底面までの深さは32cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物では, 須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-41 419)

419は外面の天井部はナデ調整で, その他は一部摩耗している。内面にもナデ調整が施される。

P213 (図3-40)

調査区の北部において検出した。P214と接し, きる。平面形は不整形を呈し, 規模は東西0.58m, 南北0.55mで検出面から底面までの深さは32cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物は, 土師器と須恵器で, その内須恵器甕が図示できた。

出土遺物 (図3-41 420)

420は甕の頸部から口縁部である。口縁部はくの字状で, 端部は平坦面を呈する。外面と内面は, 摩耗のため調整等は不明瞭である。頸部内面には工具によるナデ調整と考えられる痕がみられる。

P242 (図3-40)

調査区の中央北部において検出した。SX23と接し, きられる。平面形は円形状を呈し, 規模は径が0.35m前後で検出面から底面までの深さは37cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物では, 土師器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-41 421)

421は外面と内面にナデ調整及びヘラミガキが施される。

P246 (図3-40)

調査区の南東部において検出した。SB7のP13と接する。平面形は円形状を呈し, 規模は径が概ね0.3mで, 検出面から底面までの深さは35cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/1)粘質シルトである。遺物は, 土師器と須恵器で, その内須恵器蓋が図示できた。

出土遺物 (図3-40 422)

422は内面に高さ4mmのかえりが付く。外面と内面には丁寧なナデ調整が施される。

P249 (図3-42)

調査区の中央部において検出した。平面形は不整円形を呈し, 主軸方向はN-4°-Eを示す。規

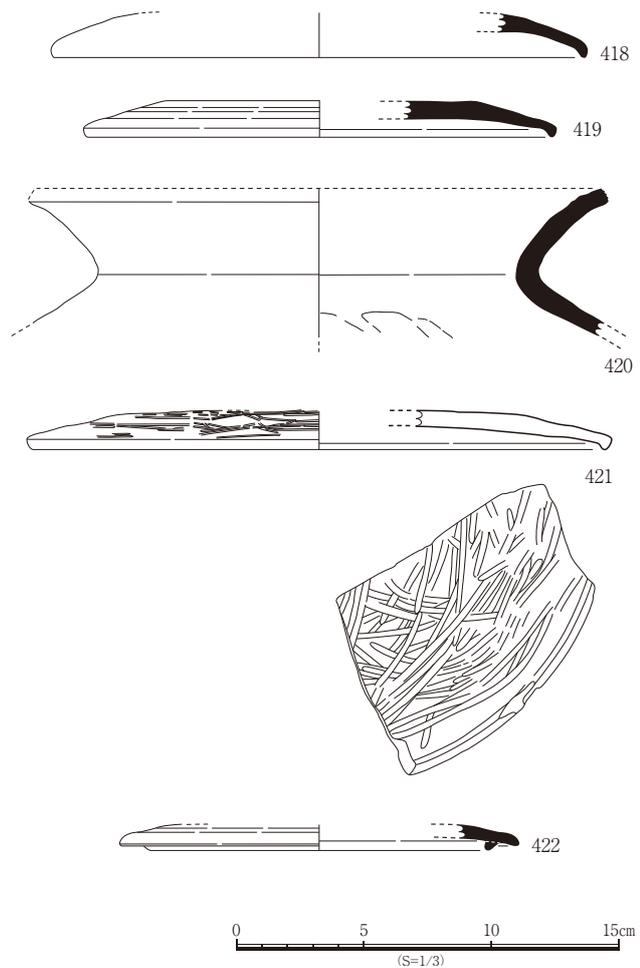


図3-41 Ⅵ区P198・204・213・242・246出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

模は長軸 0.78m, 短軸 0.69m で, 検出面から底面までの深さは 13cm を測る。遺構の埋土は炭化物と土器細片が含まれる黒褐色 (10YR3/2) 粘質シルトである。埋土の上面からは, 須恵器の他土師器皿・杯の破片がまともって出土している。出土遺物の内, 土師器皿・杯・蓋・甕, 鉄製品が図示できた。

出土遺物 (図3-43 423~435)

423~426 は土師器皿である。423 は底部外面に粘土紐痕がみられる。外面はナデ調整とヘラミガキ, 内面にもナデ調整とヘラミガキが施され, 内面にはススの付着が認められる。424 は底部外面に粘土紐痕が認められる。外面はナデ調整とヘラミガキ, 内面にはナデ調整とヨコ方向のヘラミガキが施される。425 も底部外面には粘土紐痕が認められる。外面と内面は摩耗する。426 も同じく外面と内面は摩耗している。

427~429 は土師器杯である。427 は底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。外面は回転ナデ調整とヘラミガキ, 内面は摩耗するが, 一部ナデ調整がみられる。428 は口縁端部に浅い沈線が施される。

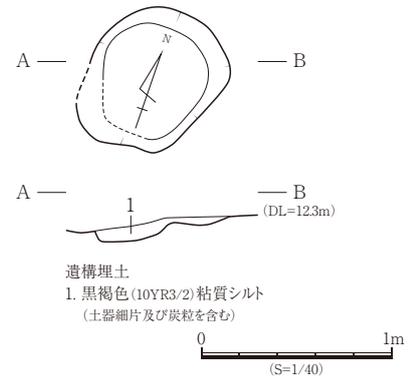


図3-42 VI区P249

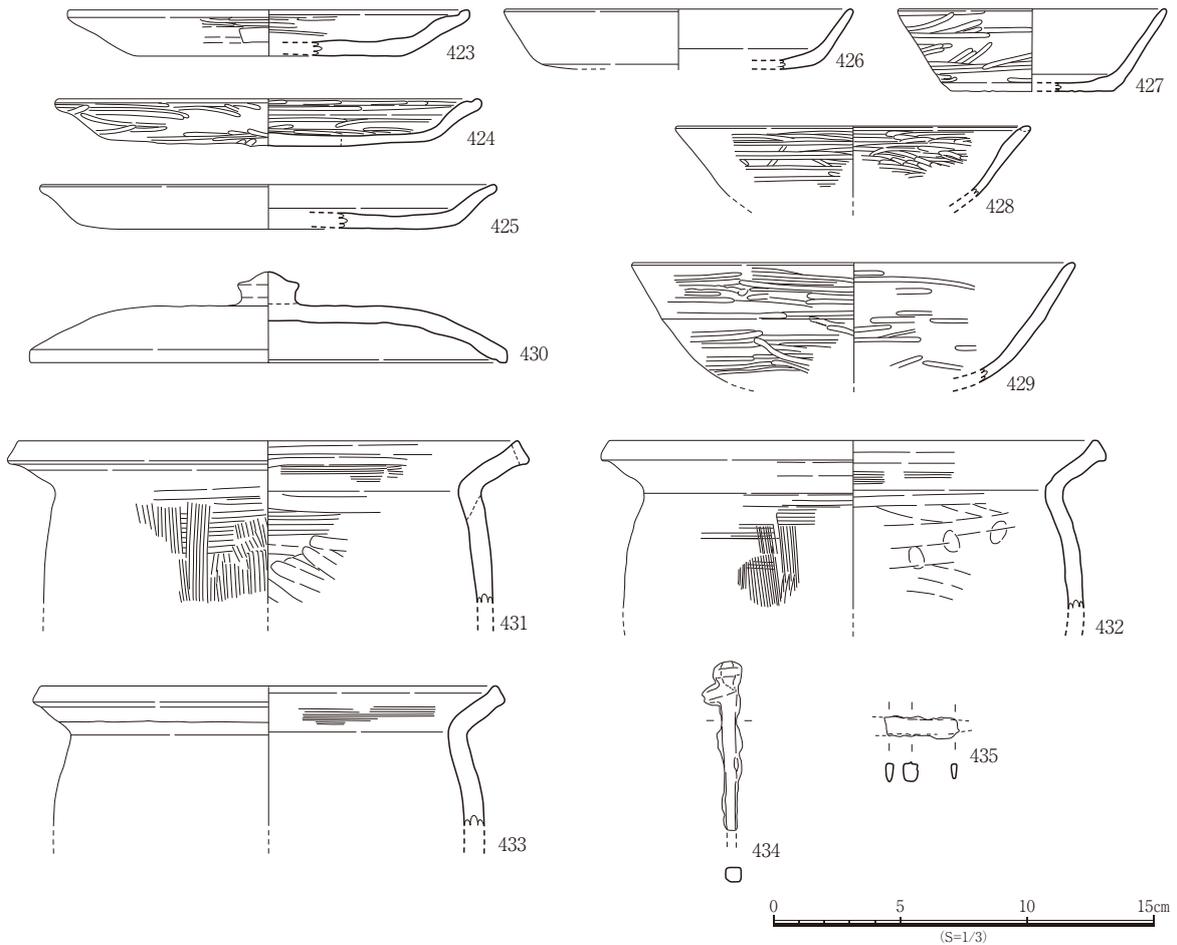


図3-43 VI区P249出土遺物実測図

外面は回転ナデ調整とヘラミガキ、内面にはヘラミガキが施される。429は外面は回転ナデ調整とヨコ方向のヘラミガキが施され、一部にススの付着がみられる。内面は摩耗するが、回転ナデ調整と一部にヘラミガキがみられる。430は土師器蓋である。宝珠形をつまみを貼付しており、外面と内面にはナデ調整、一部にヘラミガキが施される。天井部と内面の一部にススの付着がみられる。431～433は土師器甕である。長胴を呈すると考えられる。431の口縁部外面はナデ調整、頸部から体部はヨコ方向のハケ目とタテ方向のハケ目調整が施される。内面は口縁部にハケ目調整と頸部から体部はヨコ方向のハケ目調整とナデ調整が施される。432は口縁部端部は上下に肥厚している。外面は口縁部にナデ調整、頸部から体部はヨコ方向とタテ方向のハケ目調整が施される。内面は口縁部にハケ目調整と頸部から体部には指頭圧痕とナデ調整がみられる。433は外面が摩耗しており、調整は不明瞭である。内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整が施される。頸部から体部は摩耗している。434は棒状鉄製品である。断面は方形状を呈する。下半部にかけて断面厚が薄くなる。435は刀子の破片と考えられる。破片であるため、全長等は不明である。

(5) 性格不明遺構

SX1 (図3-44)

調査区の南西部において検出した。平面形は不整形を呈し、遺構の北端は東西方向の溝SD10にきられ、遺構の南側はSX2と接するが新旧関係は不明である。規模は長軸が4.75m、短軸は3.10mで、検出面からの深さは42cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質シルトである。遺物では、土師器杯と須恵器蓋・壺・甕が図示できた。

出土遺物 (図3-45 436～439)

436は土師器杯である。底部外面には粘土紐痕が認められる。外面と内面は摩耗しており、一部に回転ナデ調整がみられる。焼成は瓦質に似ている。437は須恵器蓋である。扁平な擬宝珠形をつまみが付き、外面には自然釉がかかる。内面の天井部は不定方向のナデ調整、口縁部は回転ナデ調整が施される。438は須恵器壺の頸部である。外面と内面には自然釉がかかる。外面と内面にはナデ調整がみられる。439は須恵器甕の頸部である。外面は斜位方向のタタキ目、内面にタタキ成形後の工具等によるナデ調整がみられる。口縁部は外面と内面に回転ナデ調整が施される。

SX2 (図3-44)

調査区の南西部において検出した。平面形は円形を呈し、遺構の北側はSX1と接するが、新旧関係は不明である。規模は径が2.00m前後で、検出面から底面までの深さは黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。遺物は、図示し得るものはなかった。

SX5 (図3-46)

調査区の南東部において検出した。平面形は不整形を呈し、SK7～10をきり、遺構の南部はSX11、西部はSX12にきられる。規模は長軸4.92m、短軸3.20mで検出面から底面までの深さは23cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物では、土師器甕・羽釜、須恵器杯・蓋・甕、黒色土器碗が図示できた。

出土遺物 (図3-47 440～449)

440は黒色土器碗の口縁部である。内面は黒色化しており、外面と内面にはヘラミガキとナデ調整が施される。441～444は須恵器杯である。441は底部外面に粘土紐痕がみられる。外面と内面には回

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

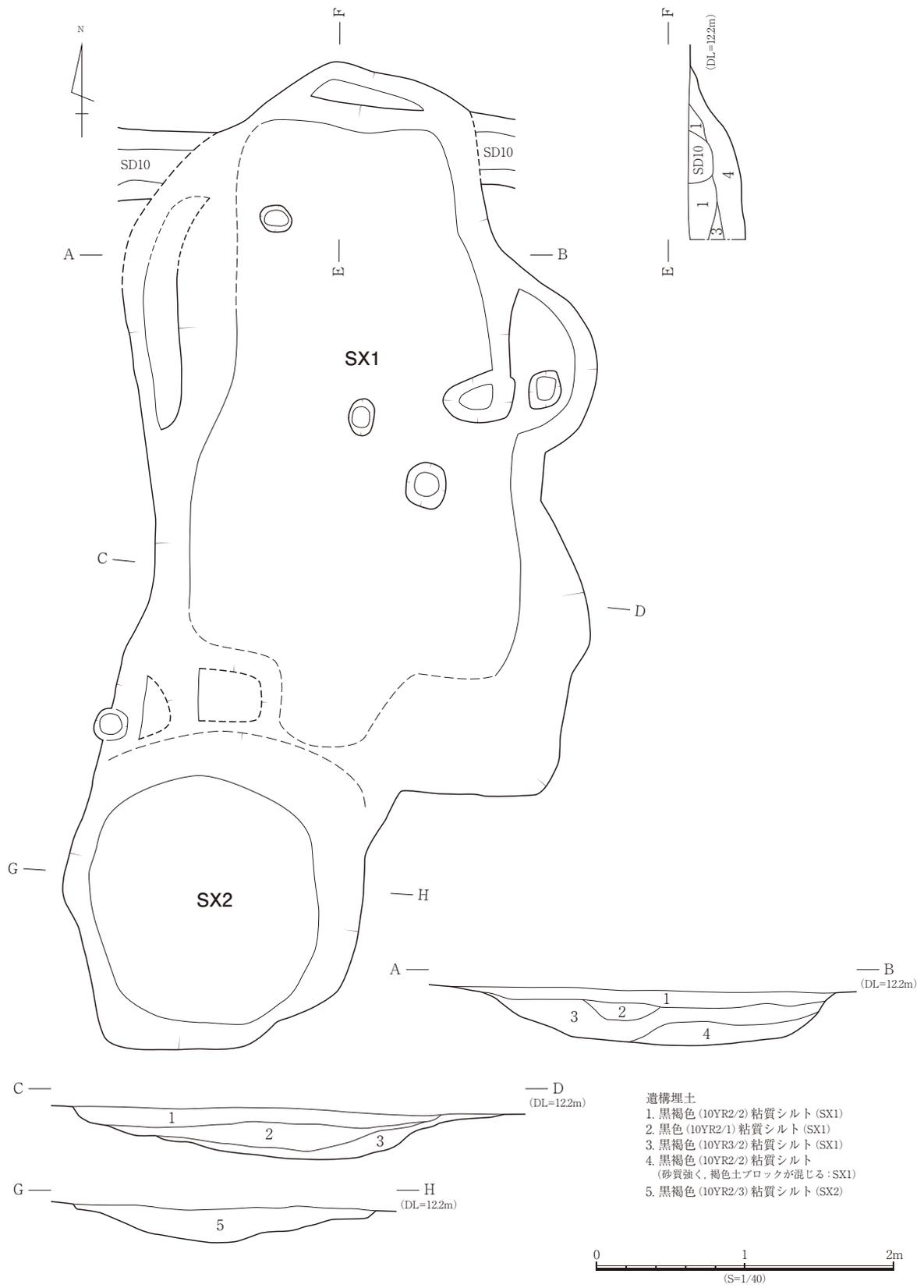


図3-44 VI区SX1・2

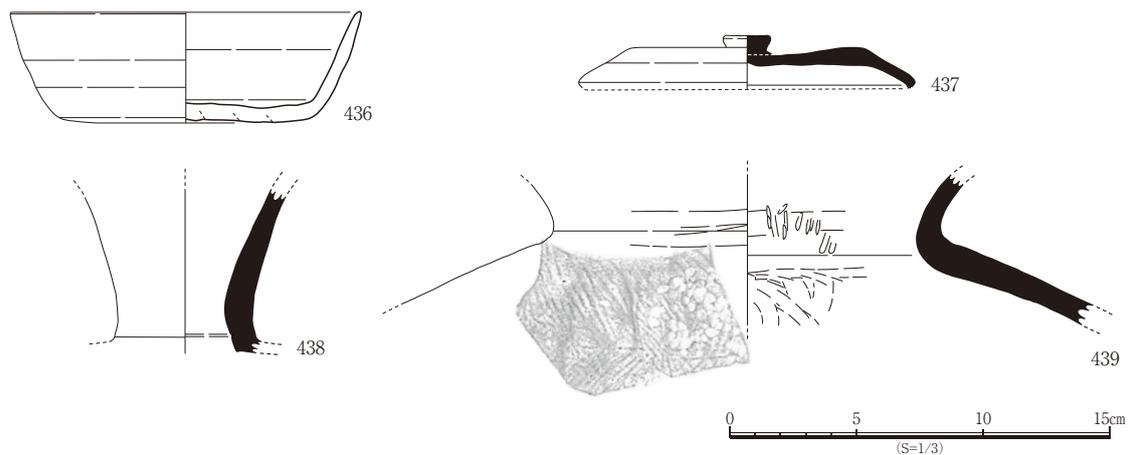


図3-45 VI区SX1出土遺物実測図

転ナデ調整が施される。442も底部外面に粘土紐痕がみられる。外面と内面にナデ調整が施される。一部は摩耗している。443は底部外面に高台を貼付し、貼付部分は丁寧なナデ調整が施される。外面と内面にはナデ調整がみられる。444は底部外面に高台を貼付し、外面と内面は回転ナデ調整が施される。445・446は須恵器蓋である。445は外面と内面は回転ナデ調整、天井部の内面には不定方向のナデ調整が施される。446は天井部の外面には回転ヘラケズリが施され、基部口縁部には内外面ともにナデ調整がみられる。447は土師器甕の口縁部である。外面はヨコ方向のナデ調整で、内面は摩耗している。448は土師器羽釜の鏝部分にあたる。断面が方形状を呈し、外面は摩耗している。449は須恵器の甕である。

SX6 (図3-48)

調査区の南東部において検出した。遺構の南部は調査区外に続くと考えられる。確認できた平面形は不整楕円形であり、規模は確認延長が南北方向で6.00m、東西方向は遺構の北側で1.65m、南側において3.65mを測る。検出面から底面までの深さは遺構の北部で51cm、中央部が58cm、南部においては28cmを測る。遺構の南東部上面には焼土が混じる範囲が確認でき、周辺には30cm大の石が数個集中して出土した。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)粘質シルトで、2層は炭化物・焼土を含む黒褐色(10YR2/2)粘質シルト、3層が炭化物を多く含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルト、4層は褐色(10YR4/4)砂質シルト、5層が黒褐色と褐色土を含む暗褐色(10YR3/4)砂質シルト、6層は褐色土を含む暗褐色(10YR3/3)粘質シルトと7層はにぶい黄褐色土と黒色土を含む黒褐色(10YR2/3)粘質シルトである。

遺物は土師器を中心に須恵器、鉄製品等が出土しており、その内以下の遺物を図示できた。

出土遺物 (図3-49～59 450～611)

土師器

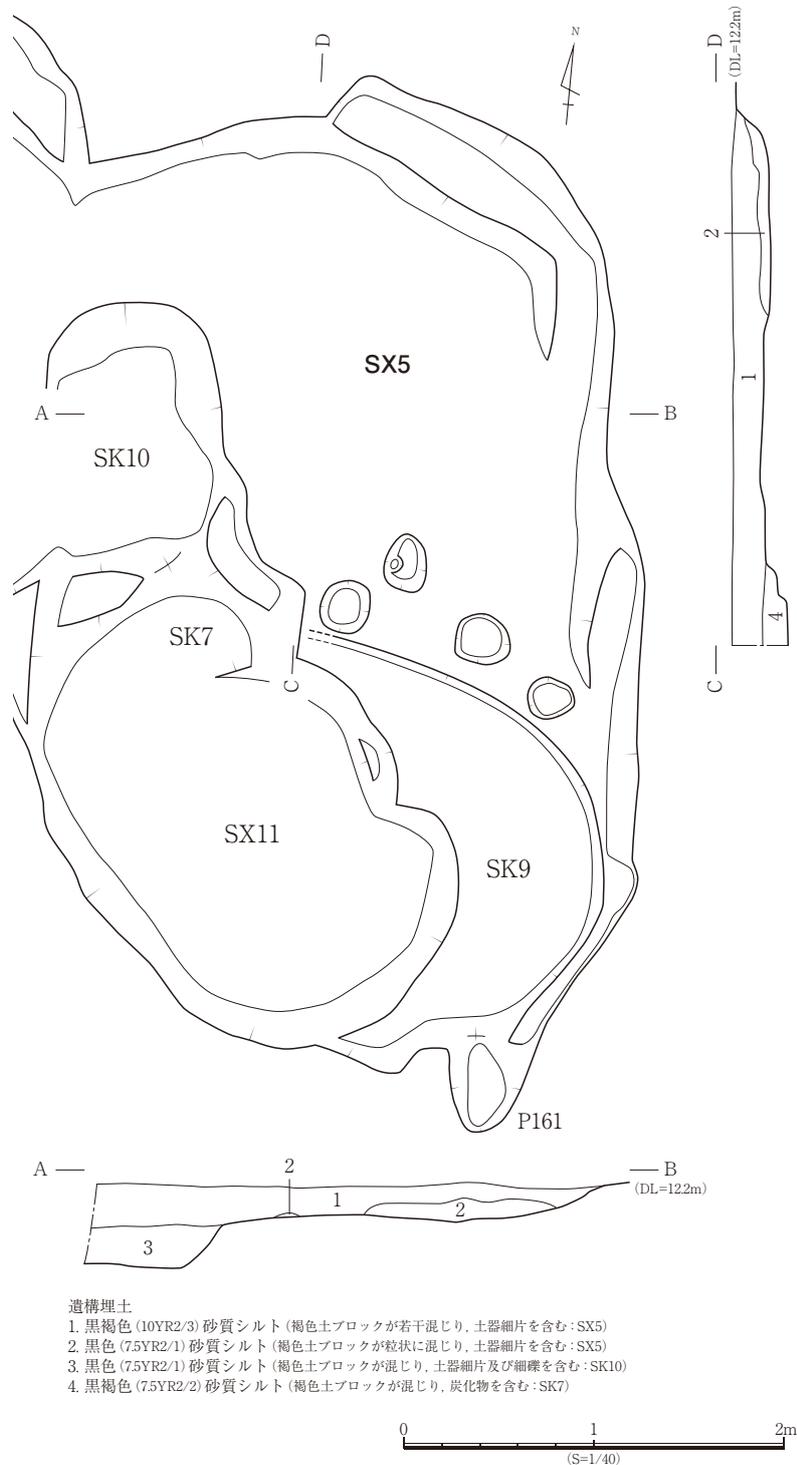
450は赤彩の皿又は杯で、口径16.8cm、内外面にミガキ。口縁内端の凹線は不明瞭である。胎土は在地産の通常の土師器と同様である。451は皿で口径17.2cm。内外面ミガキで器表は平滑。薄手。

452～483は一部を除いて高台をもつ皿Bで、基本的に外面下方にケズリ、内外面に密なミガキを施す。452～459のうち456～458以外は赤彩。452は高台径14.4cm、体部内面に左上がりの放射暗文か。高台接着部に2条のミゾを彫る。高台端を巻き込む。453は口径20.0cm、ミガキは体部ヨコ方向、内底には弧状の部分あり。454は口径20.5cmで口縁は巻き込み。455は口径21.4cm、内底周縁に連弧状、

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

体部内面に左上がり放射暗文。体部外面のケズリは断続的。口縁端巻き込み。456は口径22.0cm, 外面回転ミガキ。口縁端は角を引き出すようにして強調。胎土精良。非赤彩だが色調は赤い。457は口径22.2cm, 内面のミガキは上からみて多角形あるいは分割的に施している可能性がある。外面は回転ケズリ後に密な回転ミガキとみられる。胎土精良で赤い色調。458は調整と胎土が457と同類。460は口径22.4cm, 高台接着部に2条のミゾを彫って接着。461～466は全形不明なものもあるが, 上記の皿群同様の属性を有す。器厚が厚いものがある。467は口径23.8cm, 底部は他と異なる盤形或いは高杯とみられる。内面連弧状暗文と放射暗文。外面ケズリ+ミガキ。赤彩の発色は鮮明ではない。

468～483は赤彩の皿Bである。468～472は底部で, 放射暗文, 高台までミガキが確認できるもの, 高台接着用のミゾを彫るものと彫らないものがある。474は口径24.3cm, 体部内面のミガキは分割的。胎土精良。475は口径24.8cmで全体的に稚拙な作りである。476は口径26.8cmで, 全面摩耗により手法痕跡はほとんど不明。477は口径27.3cm, 内底周縁に連弧状, 体部内面に放射暗文。478は口径27.8cmで体部内面ミガキは斜方向に揃う。479は口径28.7cm, 体部外面下半から底部は断続ケズリ。480は内面のミガキは粗で, 左上がりの放射暗文。体部は短い。口径28.8cmに復元できたが, 残存率は1/22と低い。481は底径28.3cm, 精良な胎土と丁寧なミガキにより全面極めて滑らか。各角部はシャープに



- 遺構埋土
 1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト (褐色土ブロックが若干混じり, 土器細片を含む: SX5)
 2. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト (褐色土ブロックが粒状に混じり, 土器細片を含む: SX5)
 3. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト (褐色土ブロックが混じり, 土器細片及び細礫を含む: SK10)
 4. 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂質シルト (褐色土ブロックが混じり, 炭化物を含む: SK7)

図3-46 VI区SX5

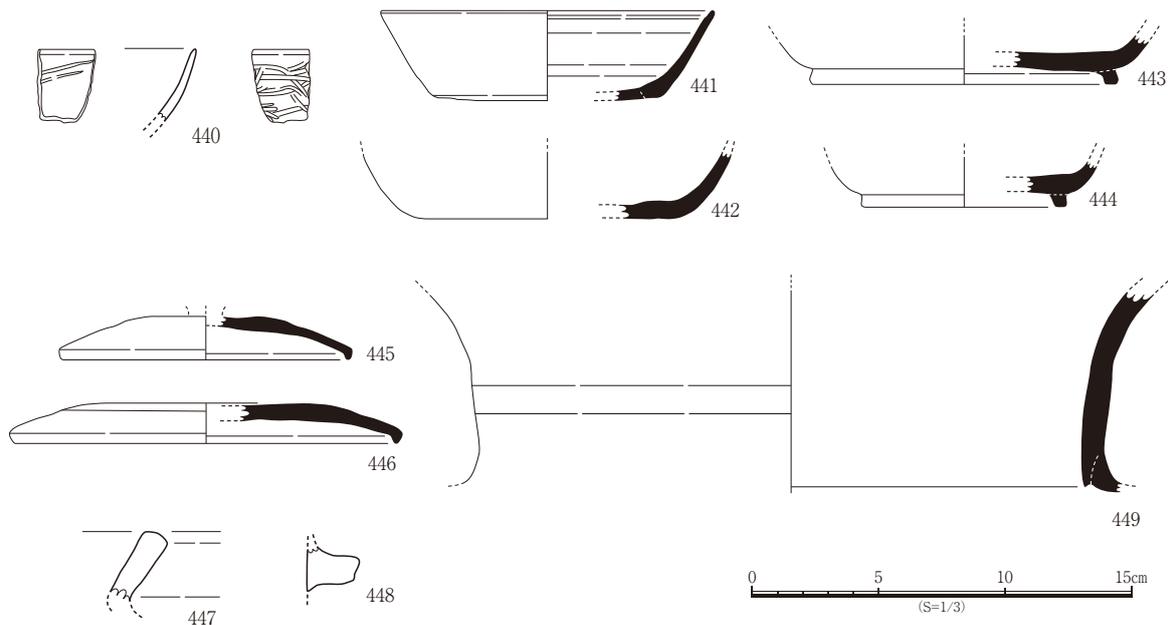


図3-47 VI区SX5出土遺物実測図

つくられている。赤彩は薄いタイプ。残存率1/7。482は口径33.0cm, 外面体部下半から底部は断続的なケズリを施す。口縁端は小さく巻き込み。摩耗あり, 残存率1/7。483は大径だが体部は低く短いとみられる。口径41.6cmに復元できたが, 残存率は1/20。

484～497は杯で, 487, 491, 494以外は赤彩。基本的に外面下部にケズリ, 全面的にミガキを施す。

484は口径12.8cm, 内底のミガキは一定方向。口縁は内端を面取り。準完存。485・486は杯又は皿で口径12.8cm・13.0cm, 口縁内面に沈線, 凹線。外底不定方向ケズリだがヘラ切り又は粘土紐痕が僅かに残る。486は胎土精良, 準完存。487は口径13.5cm, 外底周縁部は回転ケズリ, 体部のミガキは回転ミガキとみられる。底部粘土紐の螺旋状痕が残るが, 底部内外面は一定方向のミガキ後, 同心円状にミガキを施す。口唇部は尖る。

488は口径14.5cm, 口縁内端巻き込み。489は口径15.6cm, 暗文は認められない。外底断続的ケズリ。口縁内端巻き込み。胎土精良。回転台使用の証拠はない。490～492は全形不明。490は口縁内に凹線, 491は体部に丸味があり, 胎土精良, 492は内面に放射暗文, 口縁は巻き込み。

493は口径16.2cm, 口縁浅い巻き込み。494は回転ミガキの可能性あり, 口縁端巻き込み, 非赤彩だが赤い色調。495・496は高台を有し, 495は高台接着部に1条のミゾを彫って接着。496は外底回転ケズリを施す。497は口径19.4cm, 口縁内浅い凹線, 立上がり部は丸く仕上げる。胎土は浅黄橙色で内部は黒灰色。残存率1/8。498は皿か高杯で口径20.0cm, 口縁内に放射暗文が僅かに残る。器厚が厚い。

499・500は蓋のつまみ。501～506は蓋とした。500, 503以外は赤彩, 内外面をミガク。501は口径15.2cmで摩耗のため調整の詳細不明。503の口縁端は外端に面をもって屈曲する。胎土精良。504は内面周縁をケズリ状に調整。505は口径27.8cm, 残存率1/23である。内面に連弧状暗文を二重確認できる。外面天井部は分割のミガキか。口縁端を巻き込む。506は口径30.4cm, 残存率1/20である。天井外面ケズリ, 化粧土の剥離が顕著。口縁端は巻き込む。507～513は高杯等で, 507は口縁内に凹線, 胎土精良。508は蓋の可能性あり, 内外に多方向の密なミガキ。509は全面摩耗するが内面はミガキ仕上げとみられる。2次被熱か。510は脚部剥離しているが, その接合部に5条の溝を彫る。外面に断続

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構



図3-48 VI区SX6

的ケズリ、内面は連弧状暗文か。511の円筒状の脚部は回転ナデ仕上げである。513は脚部に透孔を有するが、残存度の問題で孔数は不明である。

須恵器食膳具

514は皿か高杯で口径13.9cm、内面ミガキで極めて平滑。下面は丁寧な回転ケズリ。515は口径26.0cm、残存率1/9で、下面にケズリが認められる。

516～524は杯で、516は口径11.6cm、外底には中央にヘラ切り痕跡、押圧、ケズリ、ナデ。全体的に丸味を有する形。518は胎土精良、丁寧な仕上げである。519は口径12.9cm、底部が垂れ下がる。総じて厚手で稚拙な印象。外底の刻みは焼成前の可能性が高い。520は口径13.8cm、底部が下方にやや膨らむ。521は口径14.0cm、下半に丸味のある形態で内面は滑らか。522～524はやや垂れ下がる底部や丸味のある形態である。

525～539は有高台の杯で、底部内外面はナデ仕上げを原則とする。外底にケズリを施しているものもある。525は高台端部を面取りし、その内角を三角形に突出させる。全体に薄手、内底は断続ナデ。内底や各所の隅部分に橙色土が僅かに残っている。527は外底回転ケズリ、内底ナデ、高台は角部を強調、高台内側に爪状圧痕。全体に丁寧で胎土精良。528は口径12.3cm、外底回転ケズリ後ナデ。高台は端部を鋭く仕上げ、全体的に丁寧。529は口径13.2cm、腰部に丸味をもち、口縁が僅かに外反する整った形状。高台高6mmで端面は明確に凹ませる。内底断続ナデ、外底に爪状圧痕。530の高台内角は尖る。531は底部内外面にナデ、外底に若干の爪形圧痕、高台端はやや拡張。概して丁寧。532は口径13.5cmで高台の角や端部を強調。533は口縁を巻き込む。534は口径13.7cm、高台端面は若干凹ませ、内角を引き出す。535は口径13.8cm、高台は細いが、外方へ蹴り出す。全体的に比較的丁寧。536は口径15.3cm、内底多方向ナデで、高台端面を凹ませる。口縁の一部を欠くのみ。537は高台断面が半月形で全体に丁寧、高台を除いた下部は緩やかに丸味を有す。胎土精良。539は口径19.2cm、下端は底部に向かって屈曲する部分かとみられる。

540～562は蓋で、外面の半径1/2以上にケズリ、内面ナデ仕上げが原則的である。541は口径12.4cm、天井内面は極めて滑らか、黒色付着物を認め、転用硯か。口縁外端は面取り。543は口径14.4cm、内面多方向ナデで平滑、胎土精良。546は口径14.8cm、内面丁寧なナデ、口縁端の下折部分は太い。548は口径15.2cm、内面丁寧なナデ、口縁端の下折部は断面三角形で明確に突出。549は残存率1/7で口径15.2cm、口縁端の下折は明瞭。551は天井外面のほぼ全面ケズリとみられ、内面は断続的ナデ。口縁部はシャープ。552は口径15.1cm、天井内面にタテ・ヨコ方向ナデ、口縁内面に擦痕の残る回転調整。1/2が残る。553は口径15.8cm、口縁の2箇所を欠くのみ。内外面に丁寧なナデ仕上げで内面中央は極めて平滑だが硯として使用した証左はない。天井周縁部に沿って多角形状のナデ、口縁部は回転ケズリのように砂粒が動く処理。口縁端は下方へ引き出す。555は口径15.2cm、口縁端は鋭い面取り。形状に歪みあり。556は口径16.0cmで丁寧な仕上げ。557は器厚が9mm、内面中央部は極めて平滑で硯転用の可能性。558は口径16.0cmで口縁端の屈曲は明瞭。559は残存率1/6で口径16.7cm、口縁内面に回転調整の擦痕。560～562は残存率1/8である。560は口径17.9cm。口縁外端面は凹ませる。561は口径15.9cm、口縁は薄手で、端部を巻き込むように下屈させ、内面はハケ状痕。562は口径16.3cm、天井外面2/3に回転ケズリ、口縁部が薄くなる。563は高杯の下部である。

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

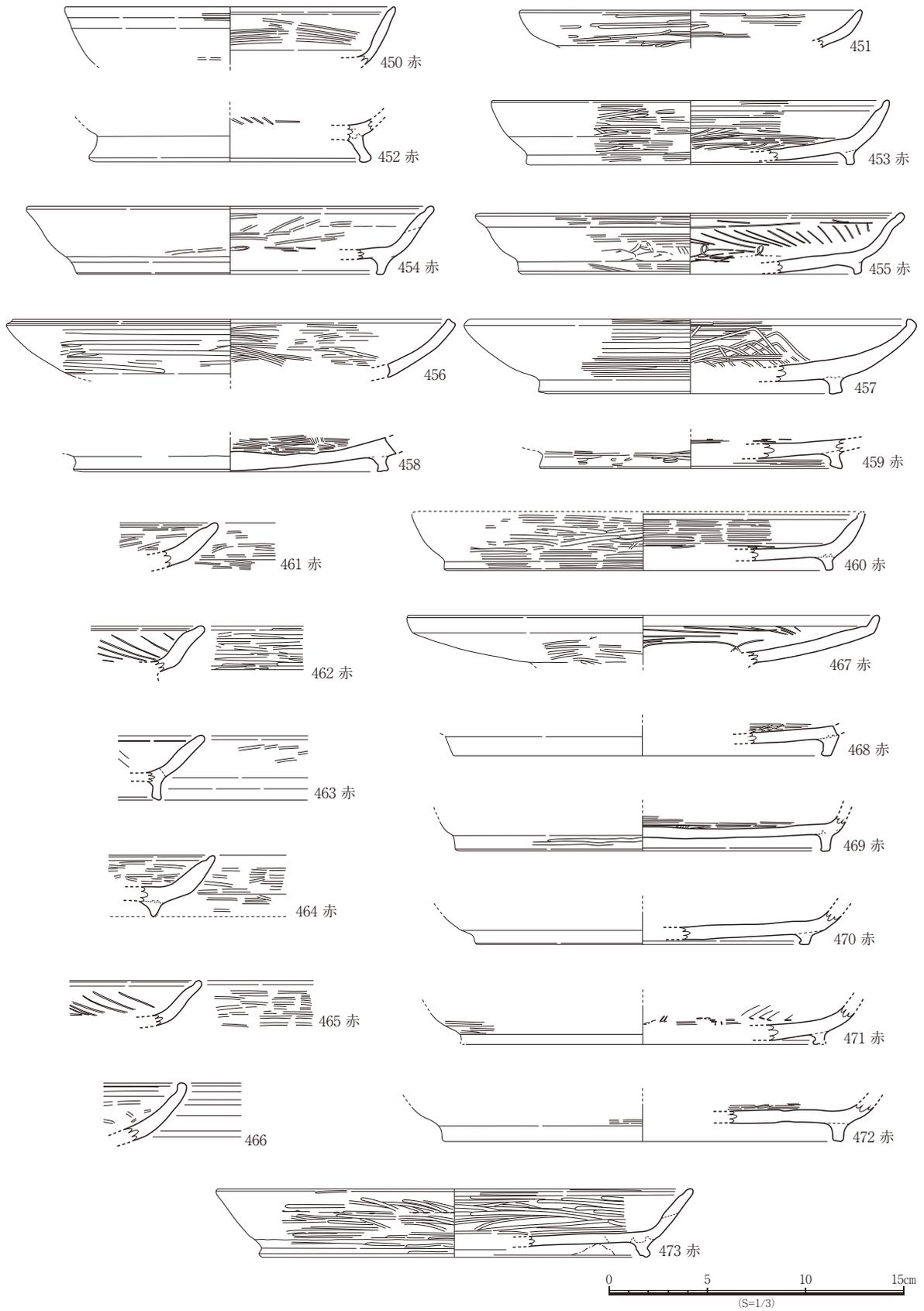


図3-49 VI区SX6出土遺物実測図1

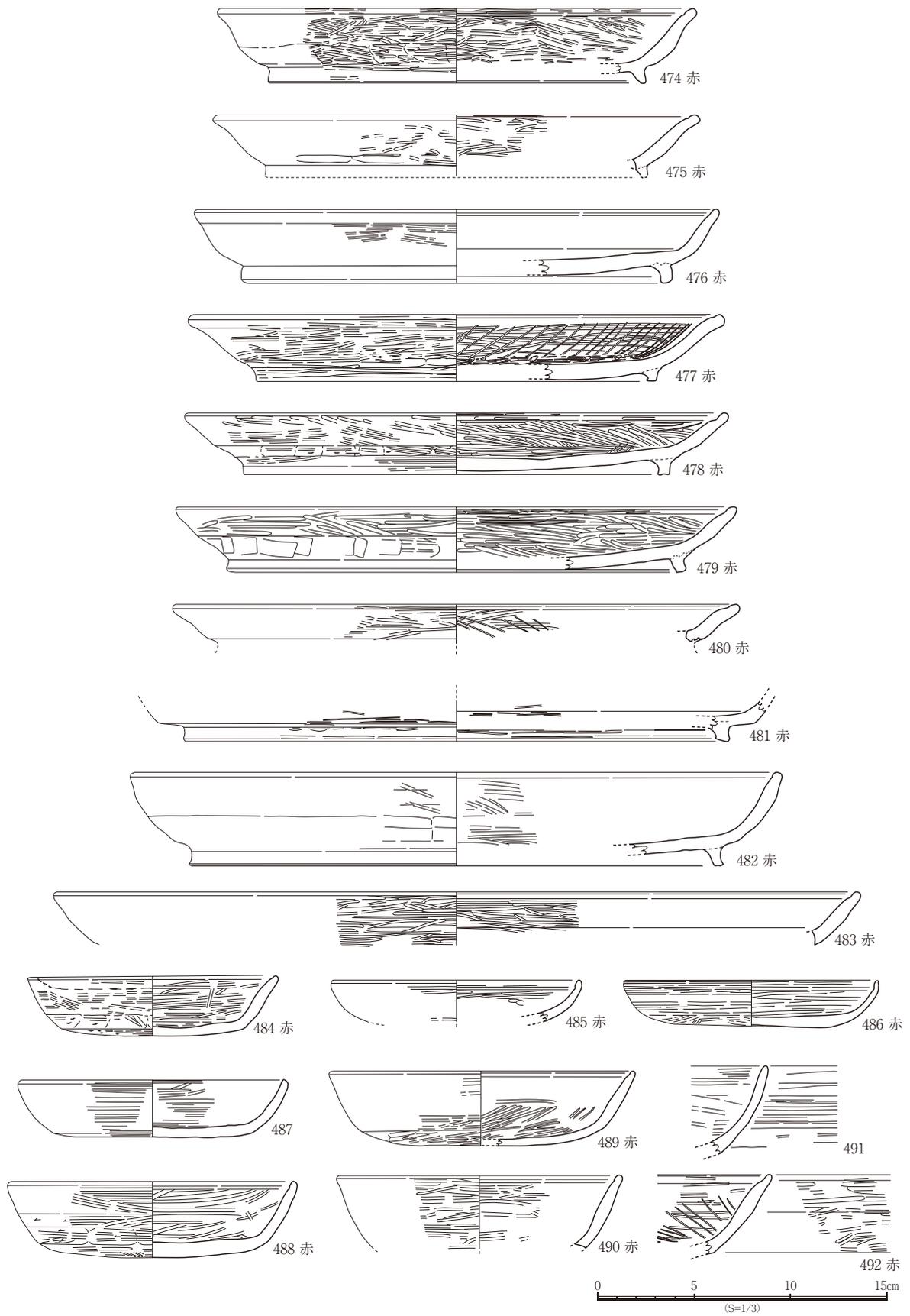


図3-50 VI区SX6出土遺物実測図2

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

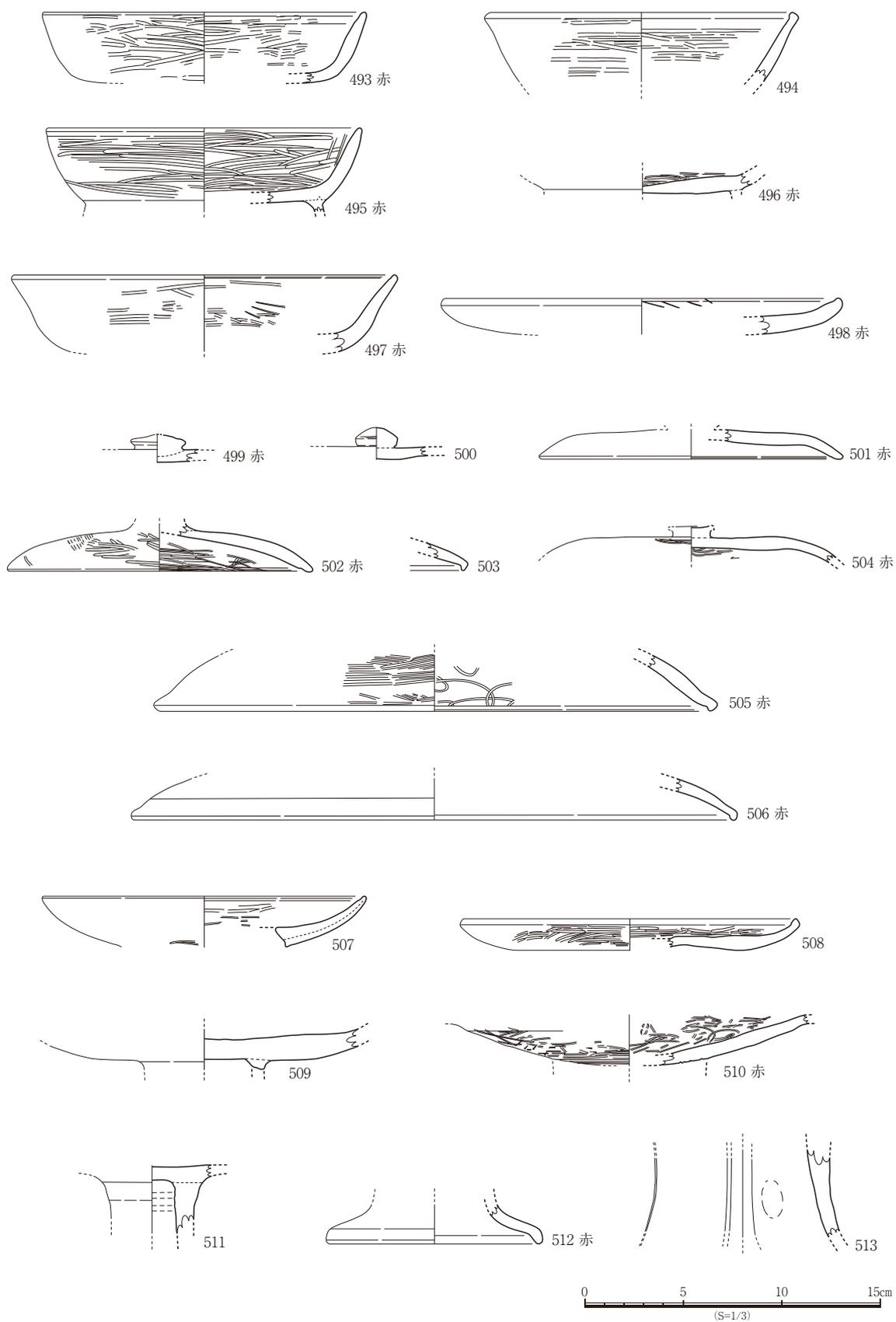


图3-51 VI区SX6出土遺物実測图3

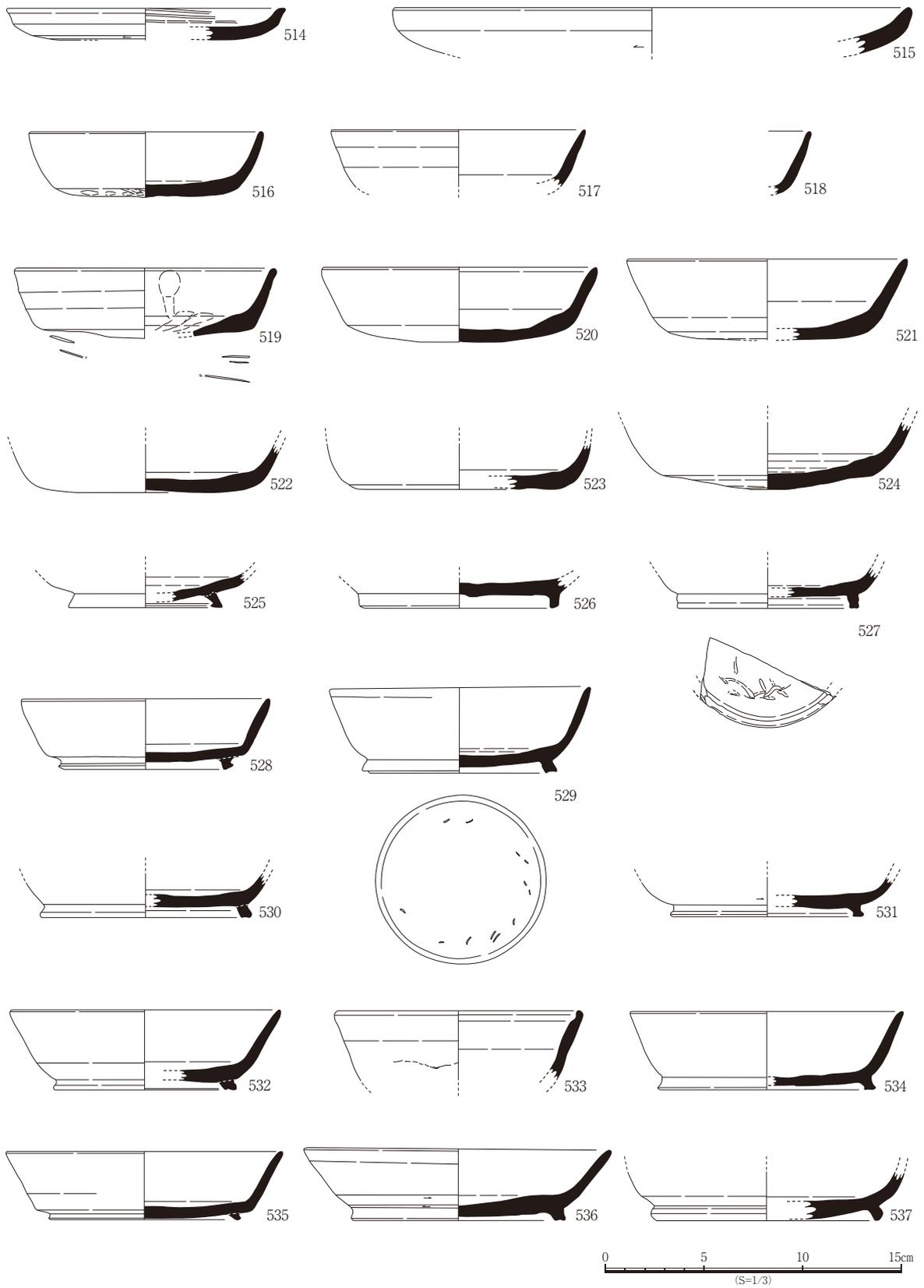


図3-52 VI区SX6出土遺物実測図4

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

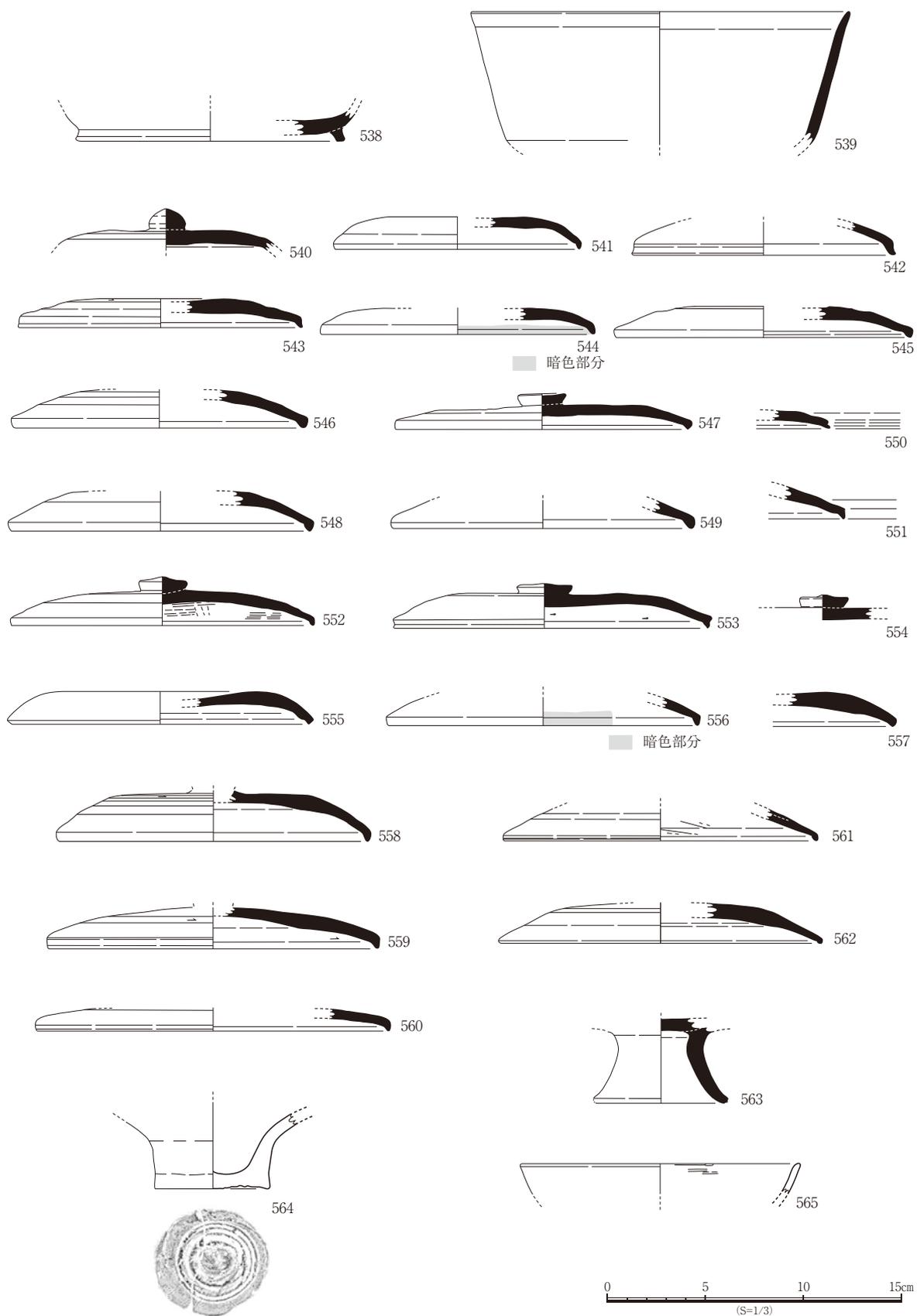


図3-53 VI区SX6出土遺物実測図5

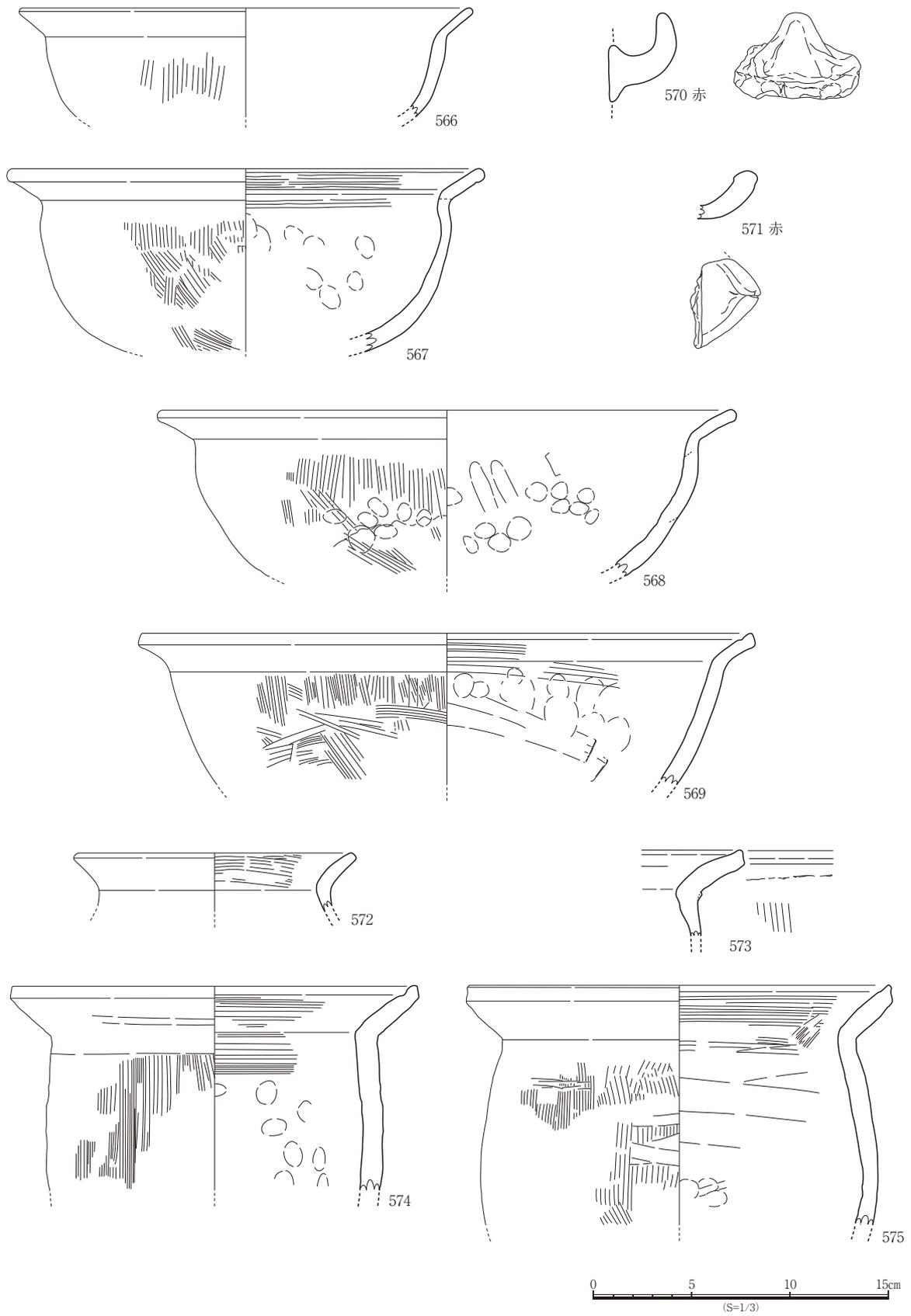


図3-54 VI区SX6出土遺物実測図6

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

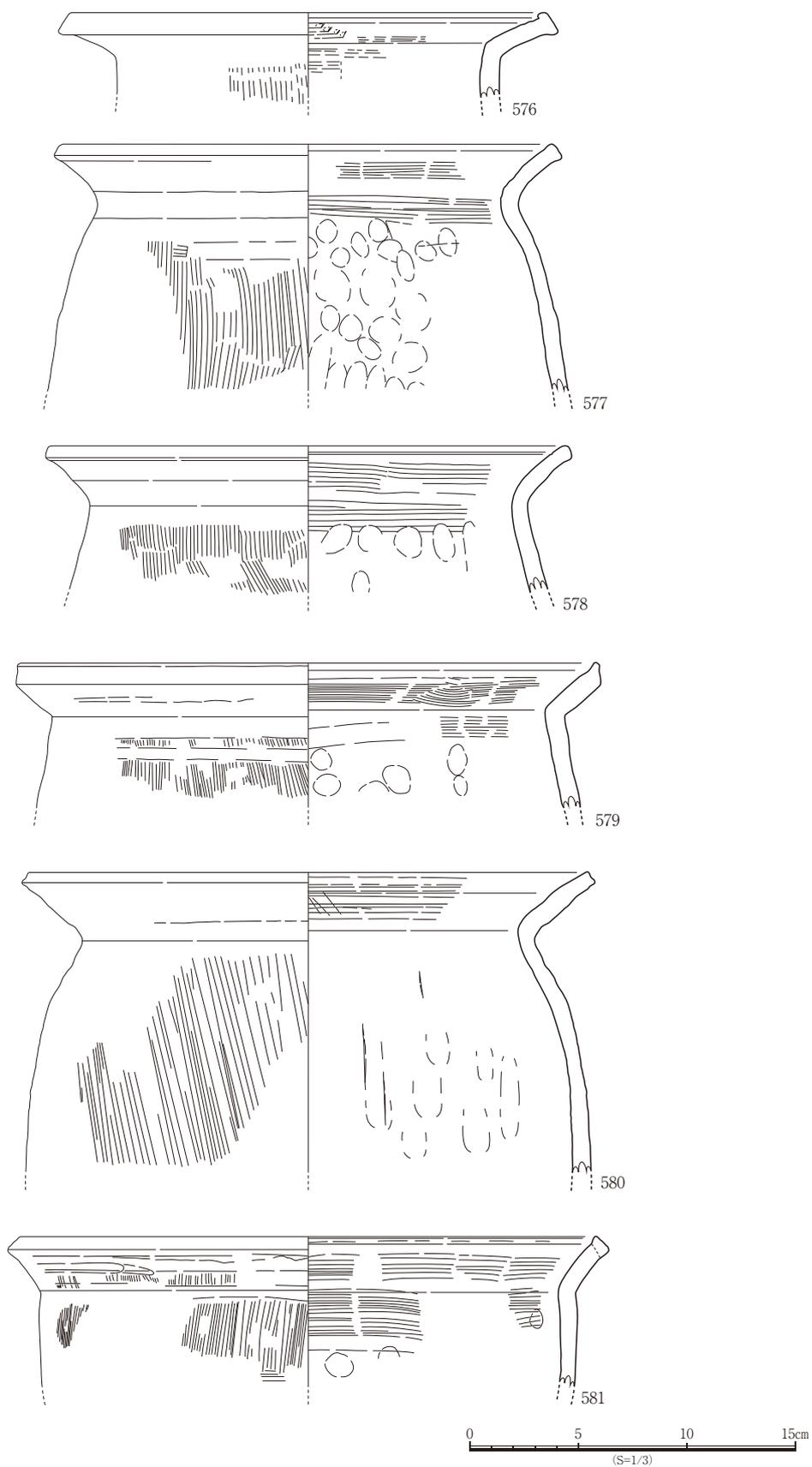


图3-55 VI区SX6出土遺物実測図7

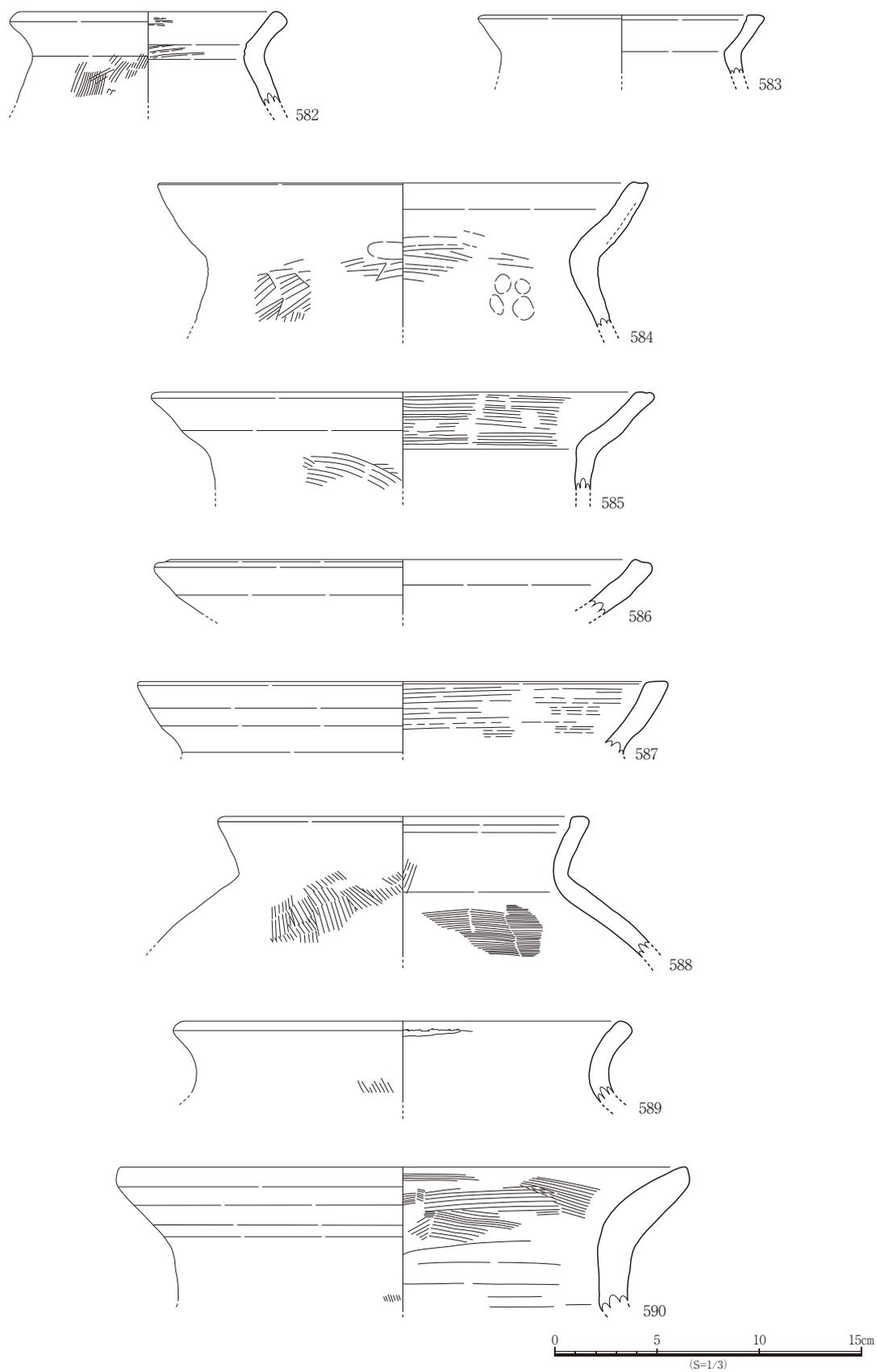


図3-56 VI区SX6出土遺物実測図8

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

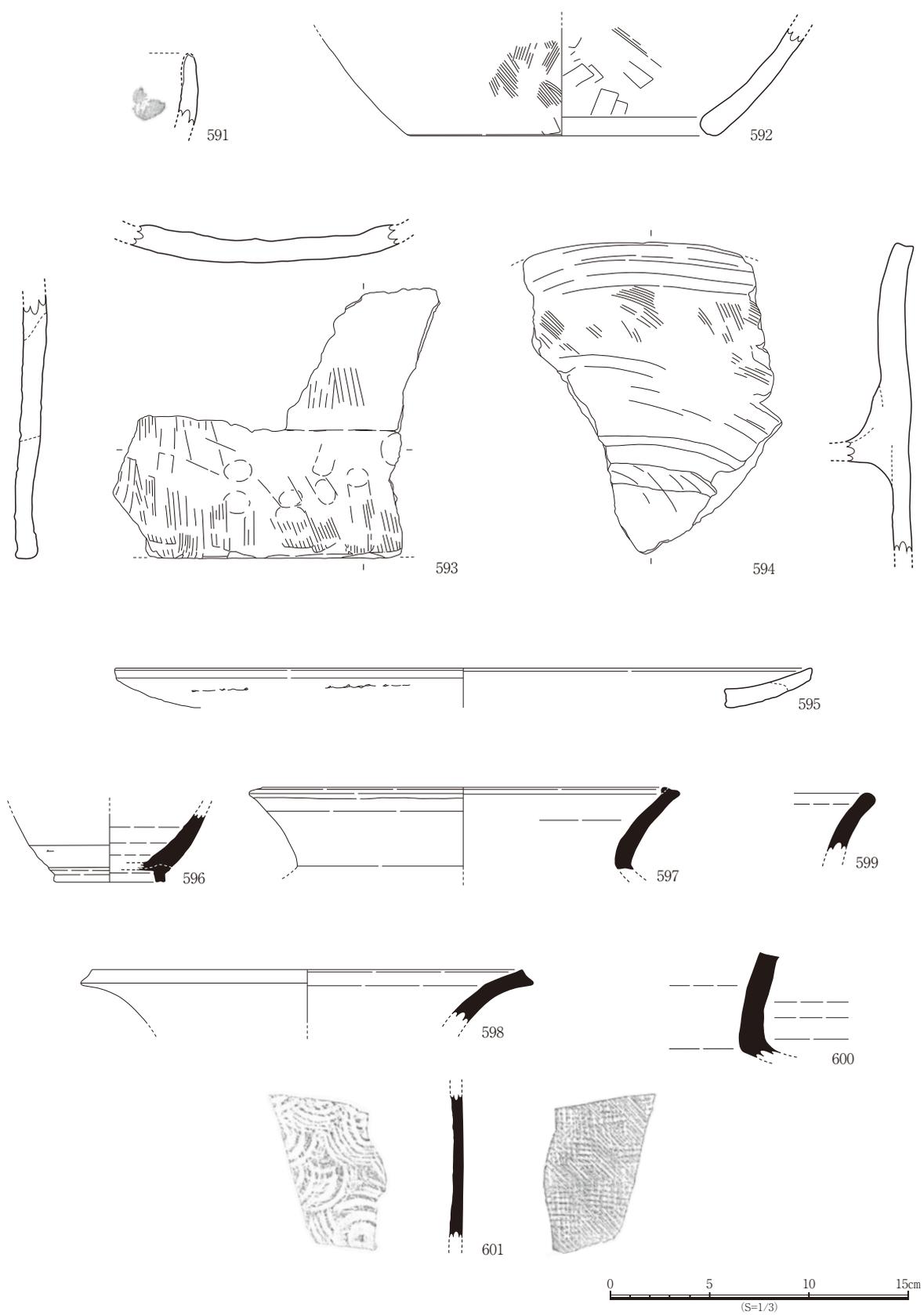


图3-57 VI区SX6出土遺物実測図9

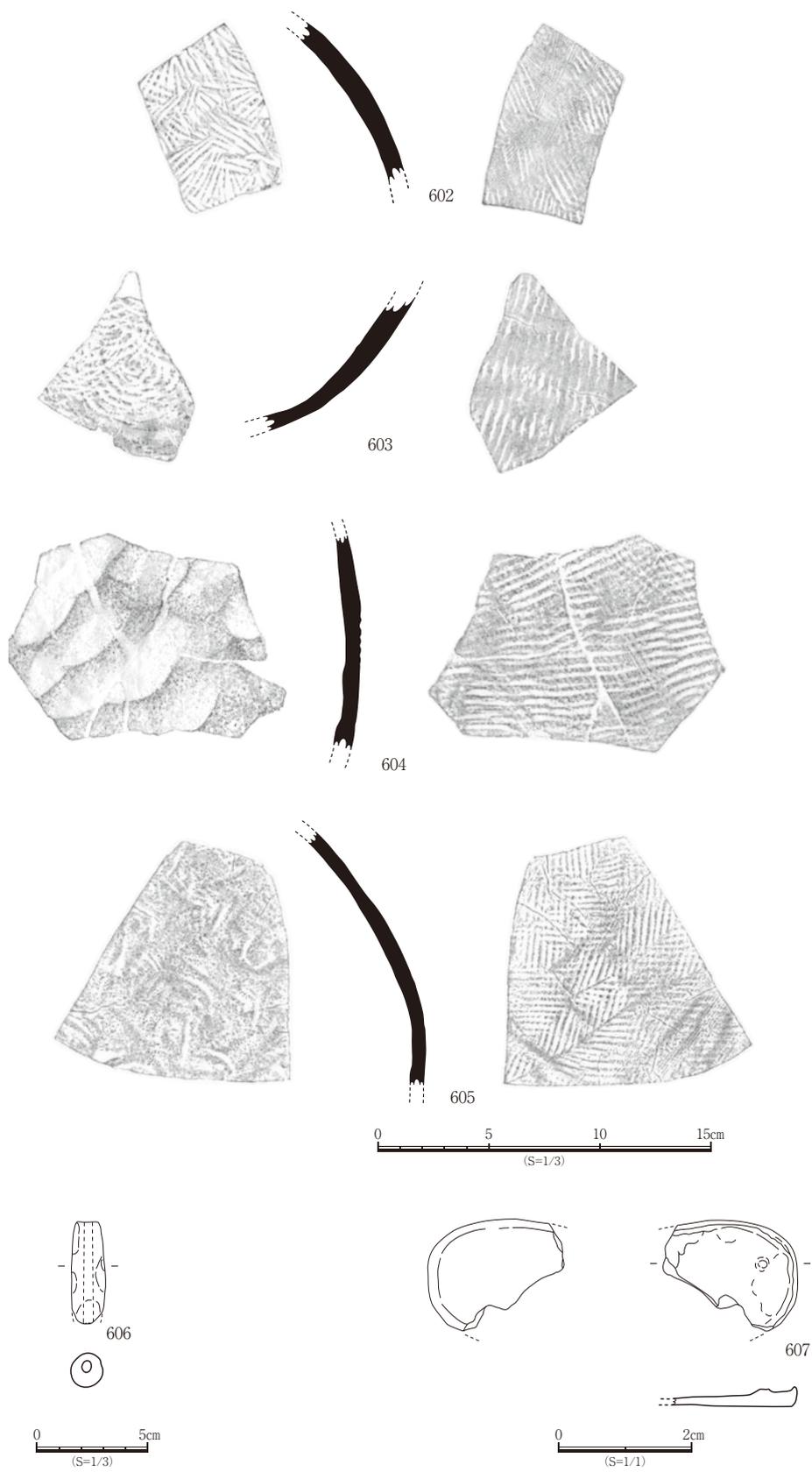


図3-58 VI区SX6出土遺物実測図10

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

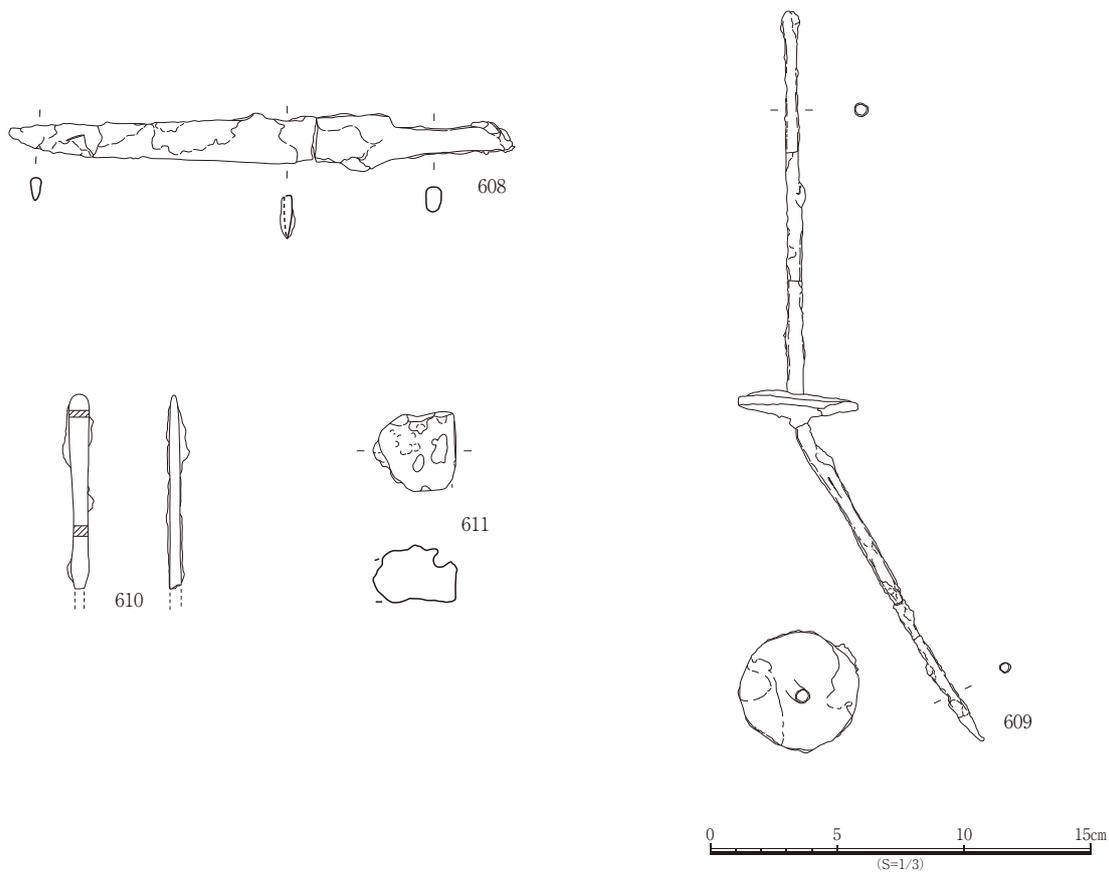


図3-59 VI区SX6出土遺物実測図11

土師質土器，黒色土器

564は土師質土器の底部で厚さ0.8cmの円盤の上に体部を立ち上げたか。外底螺旋状ヘラ切り痕。胎土精良で火山ガラス含む。565は内黒の黒色土器で口径14.1cm，内面のみミガキ，胎土には白い微細粒等のみ含み，焼成・炭素吸着ともに良好。搬入品とみられる。

土師器煮炊具

外面タテ又は斜方向，口縁部ヨコ方向のハケ，内面はケズらず押圧やナデ痕を原則とする。566～571は鍋で，チャートや泥岩の円礫を含む。569は口径30.6cm，外面ハケ後，口縁～頸部は内面ヨコハケ，外面ヨコナデしながら外折させ，成形。体部内面は板ナデ状痕跡の後，ナデ。口縁端は断ち落しで内端を凹ませる。570・571は鍋把手とみられ，赤色化粧土が残る。手捻りで成形，チャートや泥岩の円粒を含む。572～589は甕。572は口径13.8cm，石英や長石の角礫を多含する。573の口縁端は断ち切りで，胎土には粗い角粒を多含し，硬質。574～578・581は胎土にチャートや泥岩等の円粒を含む。574～576・579・581は口縁外端を垂直或いはやや傾いた面として上端をやや引き上げ，577・578の口縁は拡張されない。

580は口径25.6cm，胴径26.0cm，断ち落した口縁端部で石英・長石の角粒等を多含する。582～587は長石等の粗粒を多含し，口縁はやや内反気味，口縁端部は丸味をもちつつ端面が水平や内傾面をなすタイプである。体部外面上方のハケは斜方向のものが多い。

588は胴径が口径を上回り，胎土にはチャート円粒を含む。589も同類の可能性もある。590は他に

例をみない器形で、残存率も大きくない。胎土にはチャート円粒を含む。591は内面布目の製塩土器。592は甑か。チャート等円礫を含む。593は竈で、内外面にハケ、粘土帯を接合して製作したとみられる。594も竈の一部とみられる。595は甕口縁としたが、口径や形状、下面の仕上げが雑な点に違和感もあり、竈鏝部等の可能性もある。口縁内から口縁端外側にかけて赤彩が残る。

須恵器貯蔵具

596は壺。597～605は甕で、597、598は口縁上端を引き上げる。600は頸部のみであるが、器厚等からみて大型。601の外面は格子目タタキ後ハケ、603は平行タタキ、604の内面は河原石を当て具としたか。605は外面綾杉状タタキ、内面は当て具痕をナデ消す。

その他の出土遺物

607は銅製の鉈尾で残長2.0cm、残幅1.8cm、全面錆びるが、裏側の1箇所には鉈足跡かとみられる痕跡。608は鉄製の刀子とみられ全長20.0cm、2箇所折損し、茎後端は欠失か。609は鉄製紡錘車で軸は全長30.3cm、太さ4.5～6.5mm、先端が尖る。円板は径4.7cm、厚さ6mm、重量61.7g。6箇所折れていた。610は鉄器で残存長7.8cm、残存幅8mm、残存厚5mm。やや括れる部分あり。基部は折損か。611は鉄滓で全長3.1cm、重量31.6g。破片だが、1側面が原型をとどめているとみられる。上半に大きな気泡が集中。重量感あり。

SX9 (図3-60)

調査区の北部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、北東部はSX28に接し、きられる。軸方向はN-4°-Eを示す。規模は長軸が3.56m、短軸2.74mで検出面から底面までの深さは概ね45cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色土である。遺物は陶磁器、金属製品、石製品が出土しており、その内染付皿・碗・火入れ、陶器徳利、硯、銭貨が図示できた。

出土遺物 (図3-61・62 612～620)

612は磁器の大皿である。内面には鶴と雲の文様が施される。613は型紙刷りの輪花皿と考えられる。底部は蛇ノ目凹高台で、内面見込みに5箇所の目跡が認められる。614は染付の丸形碗である。高台畳付け以外は施釉し、外面に草花、内面見込みは「壽」が崩れた文字がみられる。615は底部に回転糸切り痕がみとめられる。底部は露胎でその他は褐釉を施す。口縁部の一部にタールの付着がみられる。616は染付火鉢と考えられる。口縁部から高台畳付けまで施釉し、外面に型紙摺による人物・植物・雷文などの染付がされる。内面見込みに「ヤ」の墨書がみられる。高台内面にも墨書あり。617は陶器瓶である。底部は削り出し高台で、高台内面は露胎で、外面は高台脇まで黒褐色釉が施される。618は硯である。海部側外面に線刻による文様がみられる。粘板岩系の岩質である。619と620は寛永通宝である。

SX10 (図3-60)

調査区の中央部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸が3.24m、短軸は1.43mで、検出面から底面までの深さは18cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは染付皿が出土している。

出土遺物 (図3-63 621)

621は染付皿である。八角皿で、外面は口縁部に唐草文と雷文、内面の見込みには草花文と雷文、口縁部に松、竹の文様が施される。底部外面見込みには銘がみられる。御荘焼と考えられる。

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

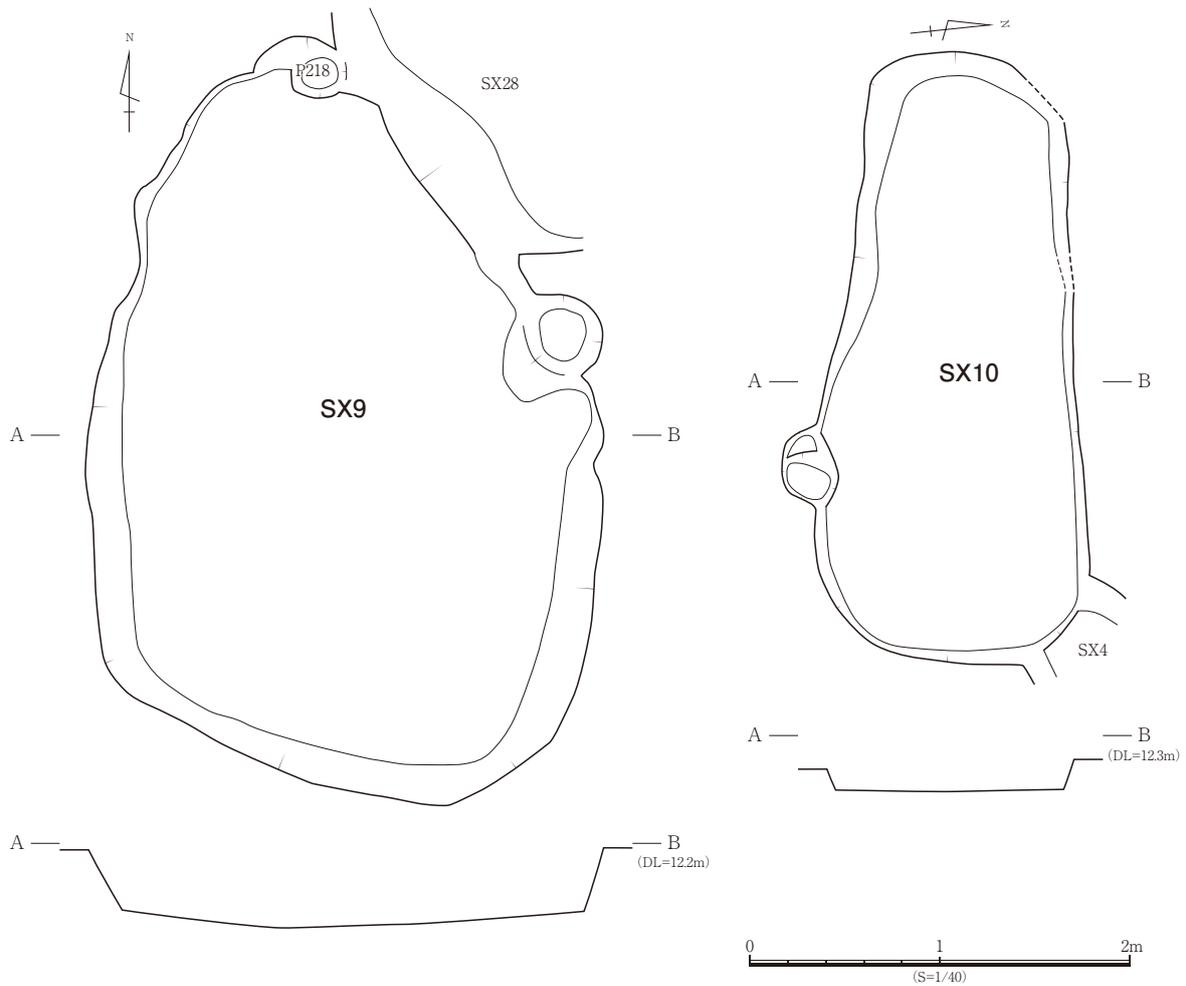


図3-60 VI区SX9・10

SX13 (図3-64)

調査区の南東部隅において検出した。遺構の東部は調査区外に続くと考えられる。平面形は円形状と推定され、規模は確認長が南北で1.43m、東西が1.16mで検出面から底面までの深さは43cmを測る。遺構の周囲には15cm大の河原石が巡り、側面にはハンダ土がみられた。埋土は暗灰色シルトである。遺物は瓦が出土している。

出土遺物 (図3-65 622～624)

622～624は瓦片である。刻印の銘がそれぞれにみられる。623は「山岳」と読める。

SX17 (図3-64)

調査区の東部中央において検出した。平面形は楕円形状を呈し、遺構は調査区を東西にのびるSD11と接し、きる。また遺構の南東側をSX18と接し、きる。規模は長軸3.22m、短軸2.27mで検出面から底面までの深さは54cmを測る。埋土は暗灰色シルトである。埋土中からは陶磁器と瓦が出土しており、その内、染付碗、陶器甕、瓦が図示できた。

出土遺物 (図3-65 625～631)

625は底部削り出し高台を呈し、畳付け以外は露胎を呈する。高台見込みに「茶」の銘がみられる。能茶山焼と考えられる。626は陶器甕である。口縁部は外方に折り曲げる。外面と内面には褐釉が施

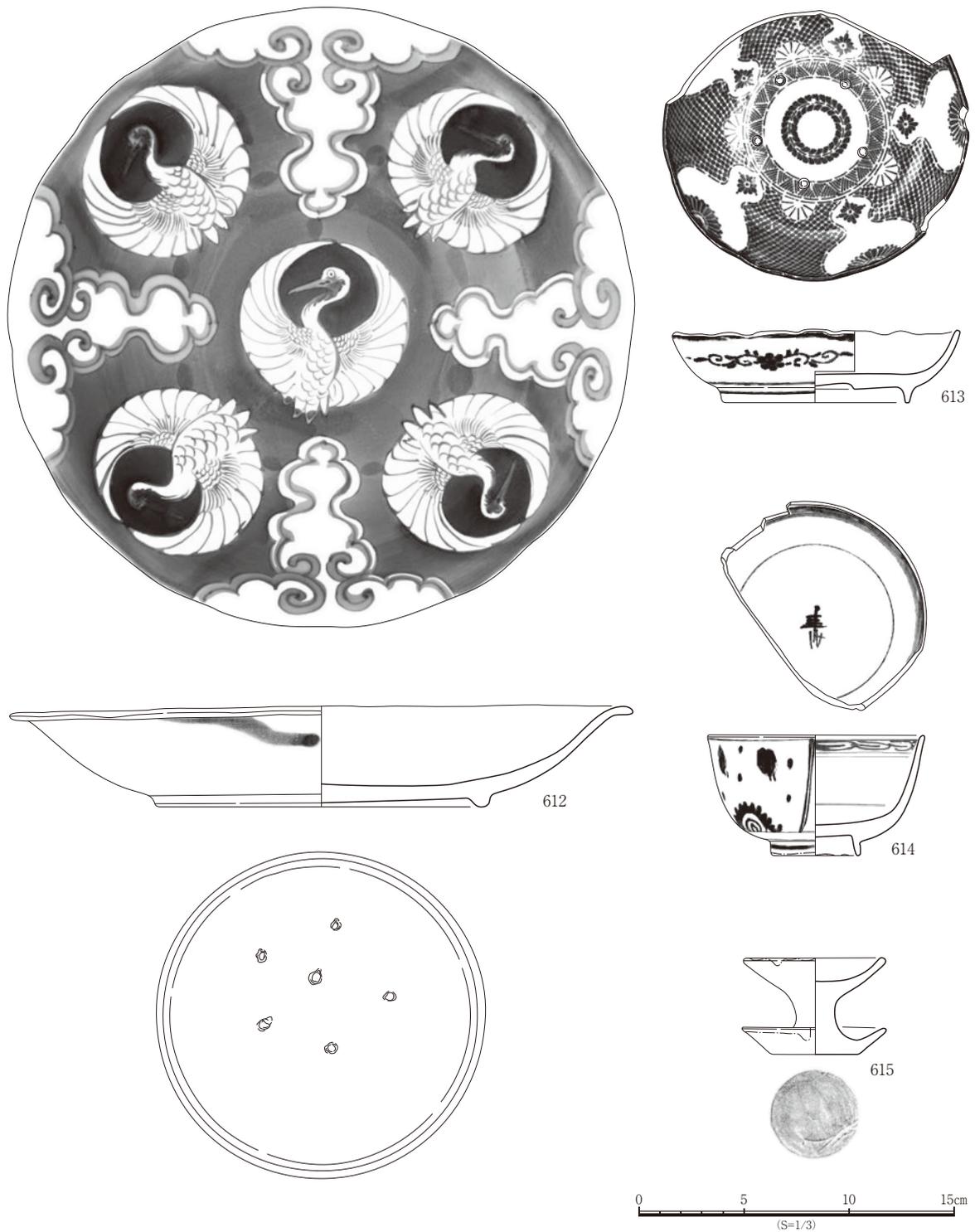


図3-61 VI区SX9出土遺物実測図1

される。外面の口縁下には数条の沈線がみられ、内面は回転ナデ調整が施される。627～631は瓦である。627～629は軒平瓦で627と628の瓦当に唐草文を配す。627と628には「石忠」の刻印が読める。629は「○」の刻印がみられる。630と631は棧瓦片と考えられ、「石忠」の刻印が読める。

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

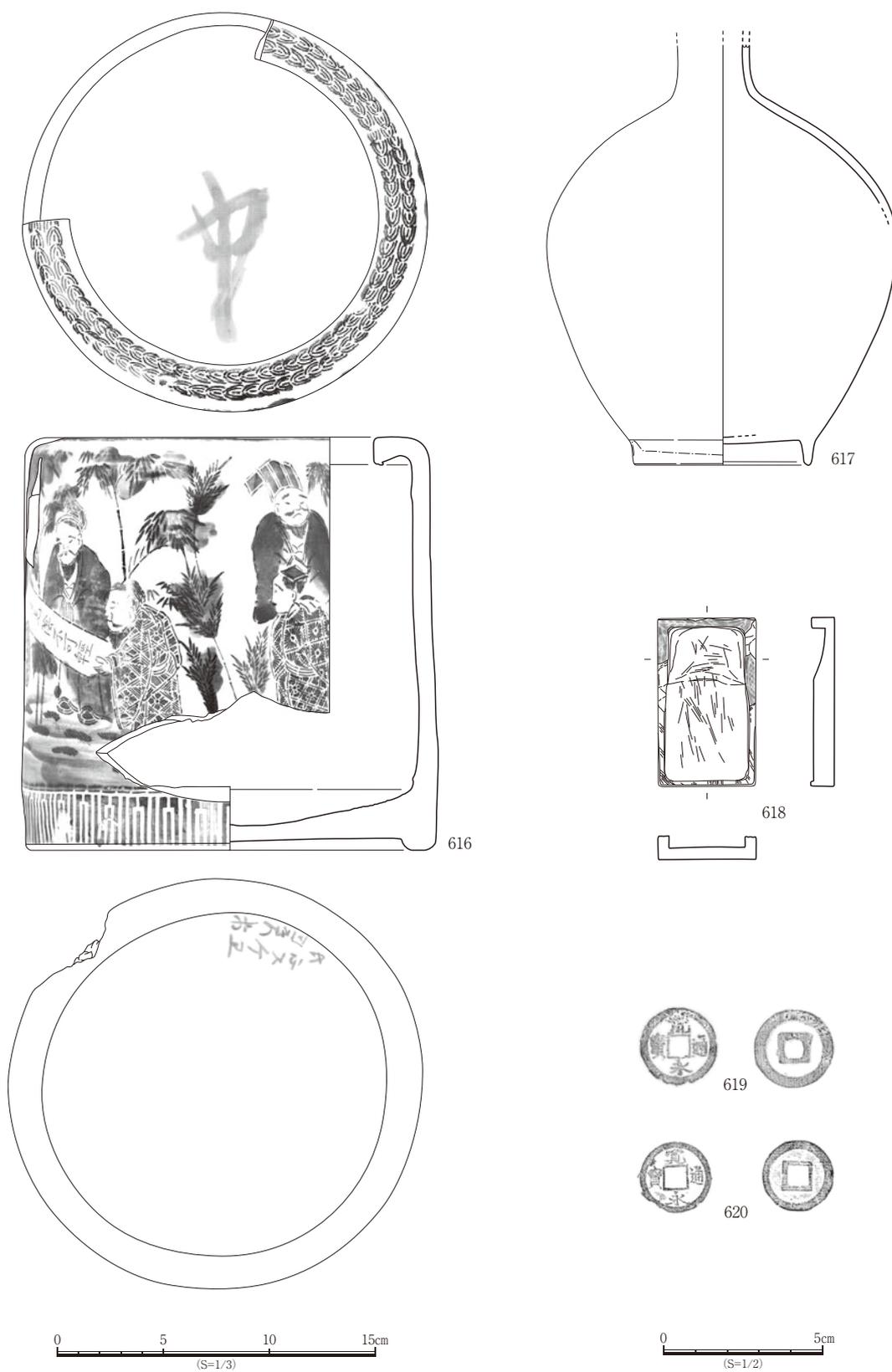


图3-62 VI区SX9出土遺物実測図2

SX18 (図3-64)

調査区の東部中央において検出した。遺構の北西側はSX17に接し、きられる。平面形は楕円形状と推定され、確認長軸は1.47m、短軸が1.04mで、検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは瓦が出土している。

出土遺物 (図3-64 632・633)

632・633は軒平瓦である。瓦当には唐草文を配す。632には「王□」の刻印が認められる。

SX22 (図3-64)

調査区の北東部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね1.0mで、検出面から底面までの深さは28cmである。遺構の北東側にはSX26が位置しており、並存していた可能性も考えられる。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは陶磁器が出土している。

出土遺物 (図3-65 634)

634は広東形碗で、高台内面見込みに「茶」の銘がみられる。高台畳付け以外は施釉され、外面に梅花文、内面見込みには鷺の文様が施される。

SX23 (図3-66)

調査区の北部において検出した。平面形は不整形を呈し、規模は東西3.30m、南北が2.42mで、検出面から底面までの深さは60cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは陶磁器が出土している。

出土遺物 (図3-67 635・636)

635は陶器釜と考えられる。外面に鐔が廻り、鐔部分は施釉される。鐔より下方は露胎で、内面は回転ナデ調整が施される。外面側面には墨書がみられる。636は染付の輪花皿である。底部は蛇ノ目凹高台で中央部に銘が認められる。外面は草花、内面に唐草文、見込みには波文が施される。

SX26 (図3-66)

調査区の北東部において検出した。平面形は円形を呈し、周囲には河原石を廻らしている。規模は径が概ね0.9mで、検出面から底面までの深さは44cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは陶器碗が出土している。

出土遺物 (図3-67 637)

637は陶器の丸形碗である。底部削り出し高台で、内面見込みに4箇所が目跡が残る。高台以外は施釉される。

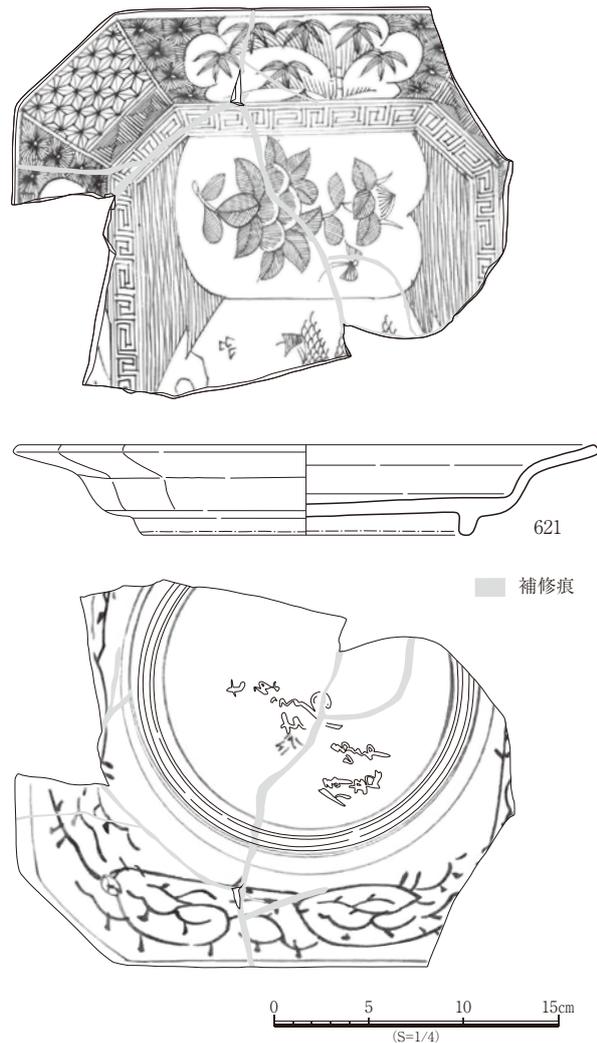


図3-63 VI区SX10出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

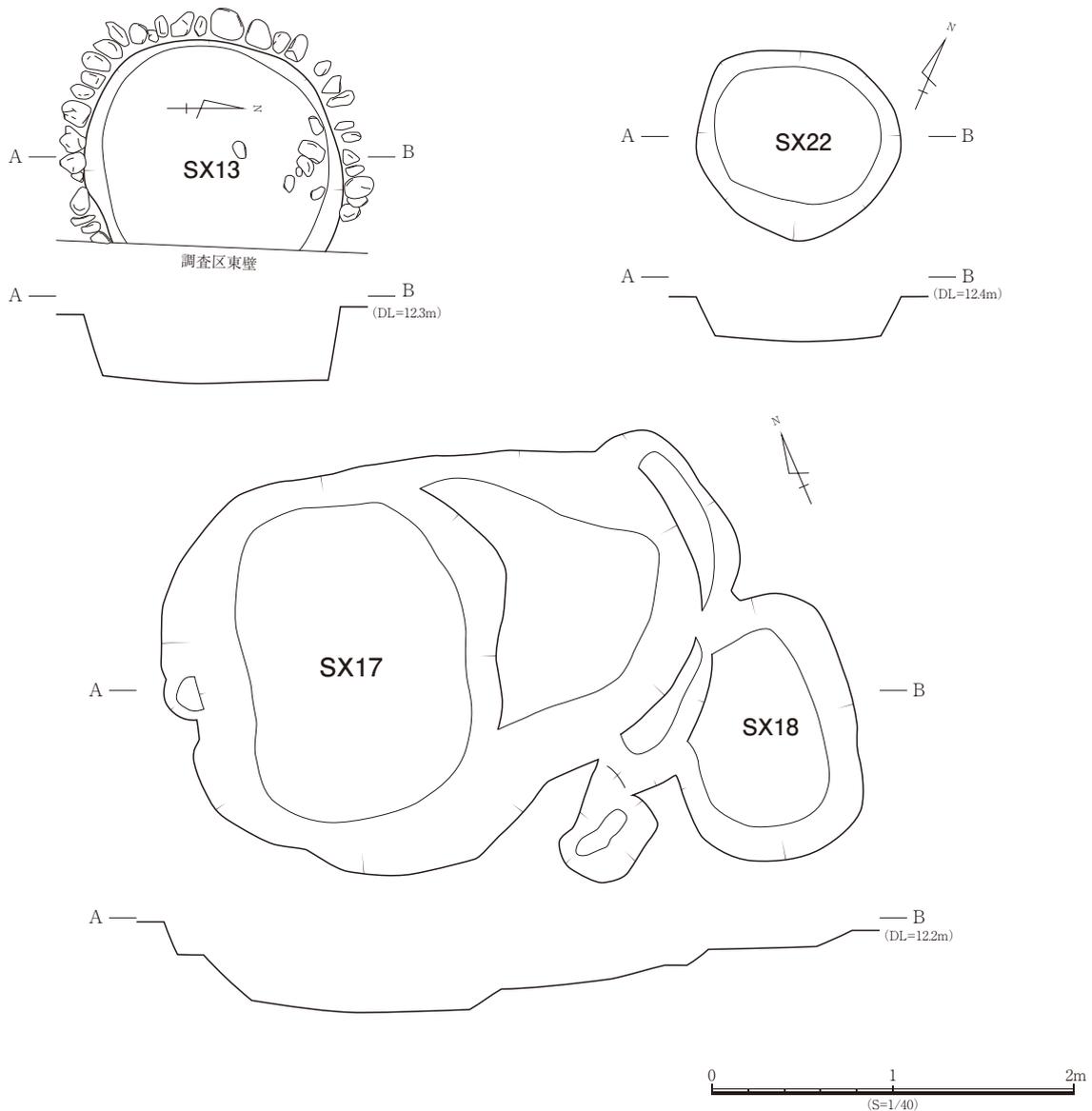


図3-64 VI区SX13・17・18・22

SX27 (図3-66)

調査区の北東部において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.84m、短軸が1.27mで検出面から底面までの深さは22cmを測る。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは染付碗、陶器鉢、煙管が出土している。

出土遺物 (図3-67 638～640)

638は磁器の碗である。広東形碗と考えられる。外面に草花文、内面見込みにも染付がなされる。639は陶器の輪花鉢と考えられる。底部は削り出し高台で、内面と外面下半部に施釉がみられるが、釉薬は白濁化している。640は煙管で、吸口部のみ残存する。

SX28 (図3-66)

調査区の北部において検出した。遺構の南側はSX9に接し、きる。平面形は不整形を呈し、規模は南北は3.25m、東西が2.72mで、検出面から底面までの深さは65cmを測る。底面は北側になるほど深

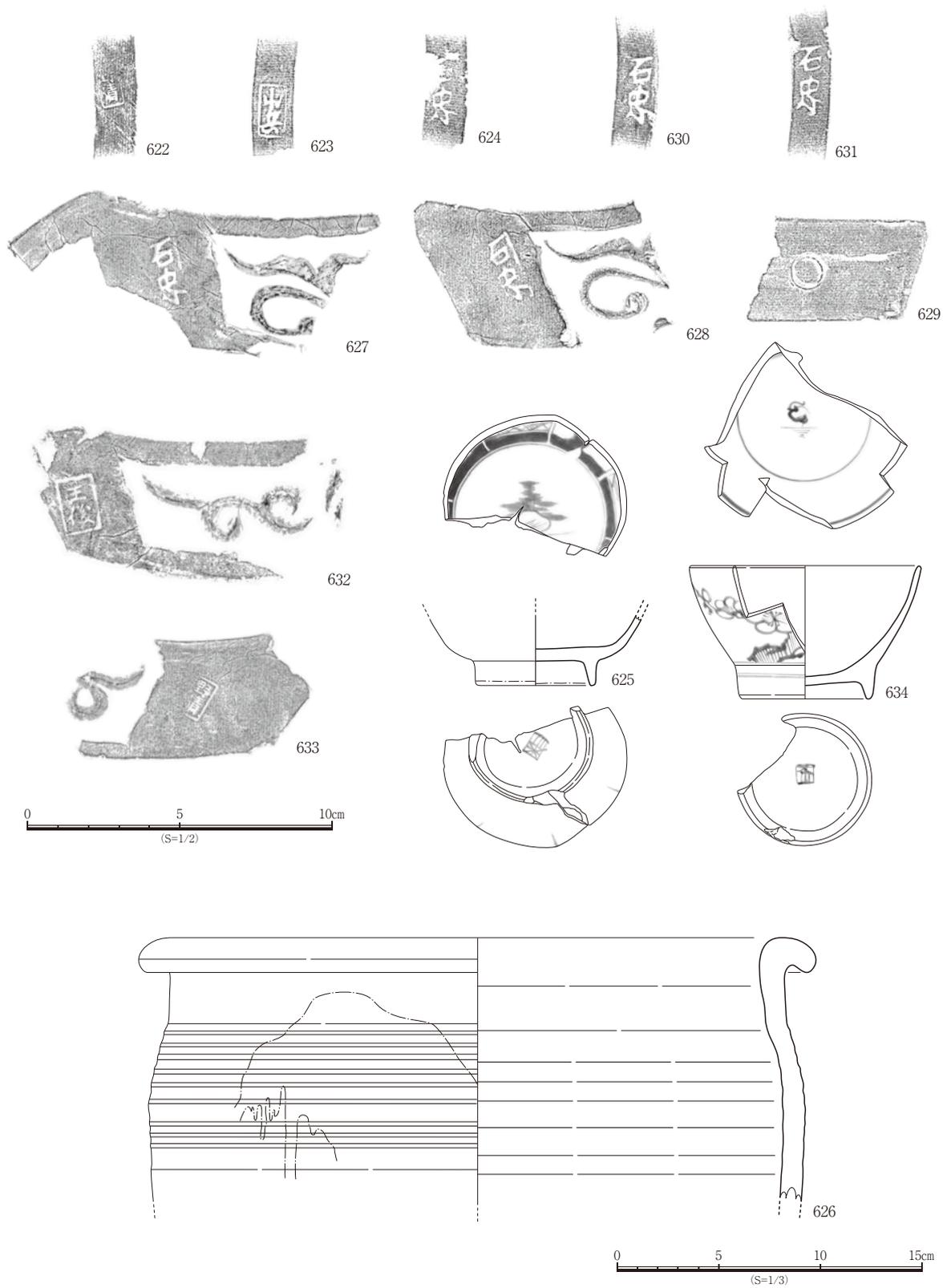


図3-65 VI区SX13・17・18・22出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

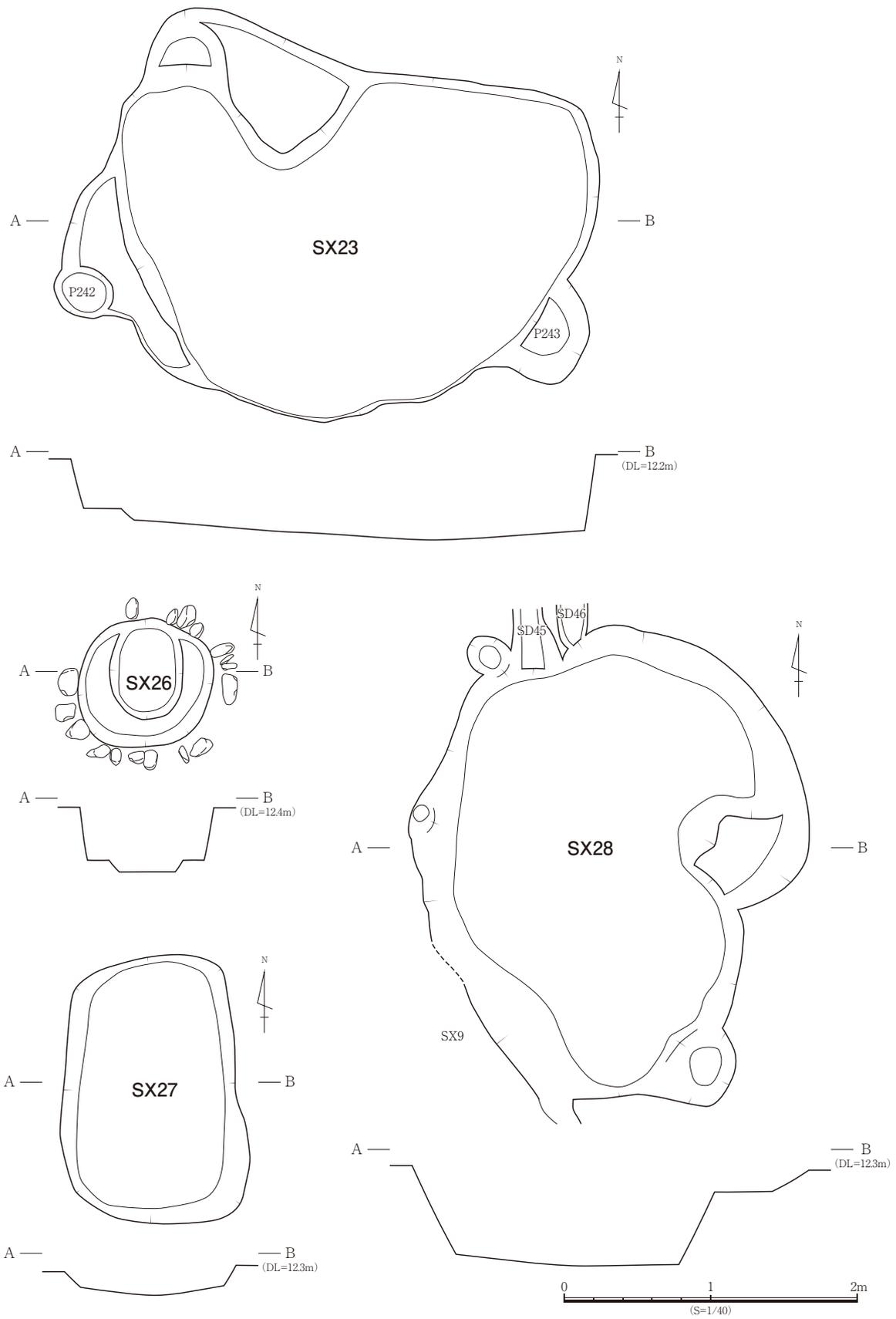


図3-66 VI区SX23・26~28

さを増している。埋土は礫を含む暗灰色シルトである。埋土中からは陶磁器が出土しており、その内鉢と播鉢を図示することができ得た。

出土遺物 (図3-68 641・642)

641は陶器鉢である。口縁部は外側に拡張肥厚し、一辺0.5cmの方形の孔が施される。底部には墨書がみられる。642は播鉢である。口縁部は拡張肥厚させ、2条の沈線が施される。内面は播目が全面にみられる。

(6) 遺構外出土遺物

①包含層出土遺物(図3-69~71 643~685)

643は土師器高杯の脚部である。外面は八角形状に面取りを施す。外面と内面は摩耗する。644は土師器蓋である。外面はヘラミガキとナデ調整で、内面は摩耗する。645は土師質土器杯である。底部外面には回転ヘラ切り痕が認められる。外面は回転ナデ調整で、内面は摩耗する。内底面に凹凸がみられる。646は土師器杯である。外面と内面はナデ調整で、ヘラミガキの単位は不明である。647は土師質土器碗の底部である。外面に高台を貼付する。内面は回転ナデ調整で、凹凸が残る。一部ス

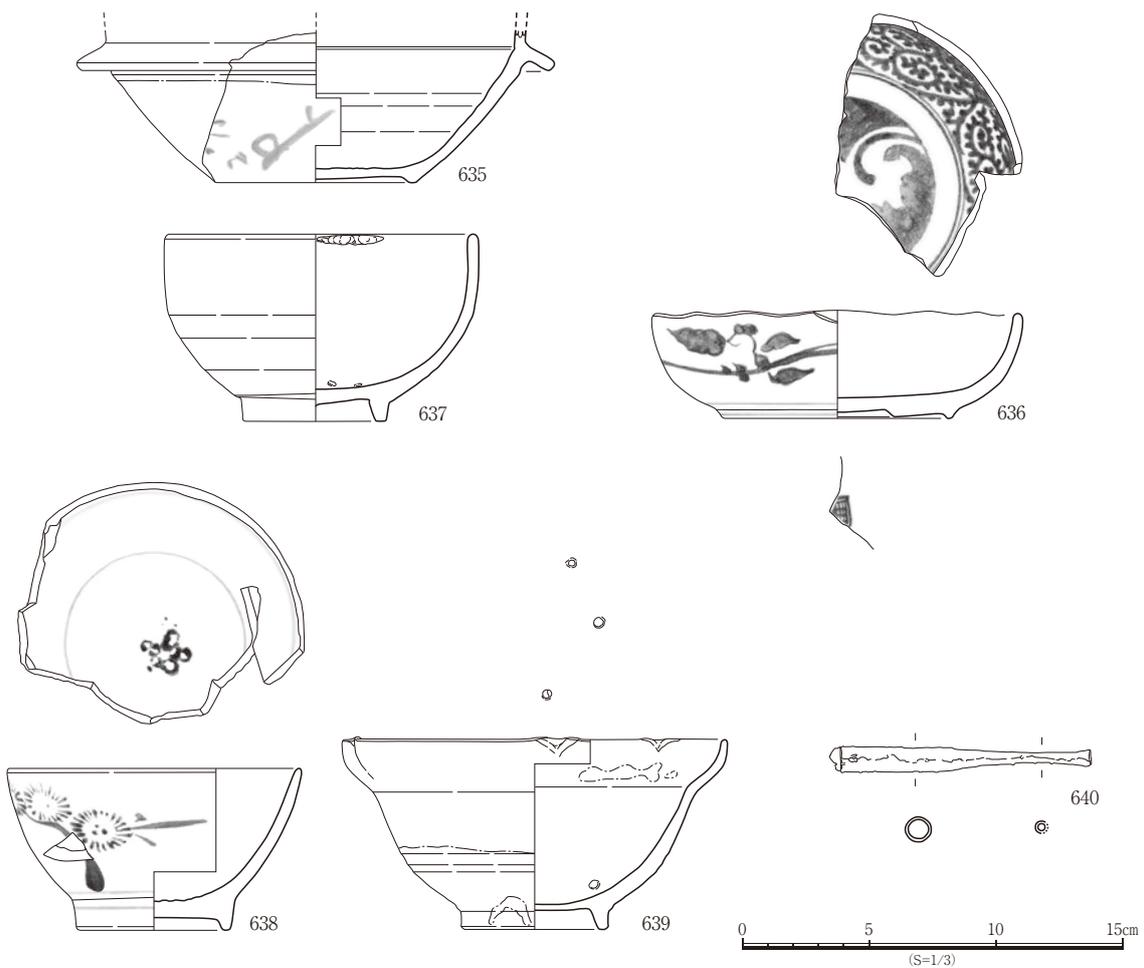


図3-67 VI区SX23・26・27出土遺物実測図

2. 検出遺構と出土遺物 (6) 遺構外出土遺物

が付着する。648も同じく椀の底部で、外面には高台が貼付される。外面と内面に回転ナデ調整が施される。649は柱状高台皿と考えられる。底部外面に回転糸切り痕が認められる。外面と内面は回転ナデ調整で、底部中央に径6～7mmの穿孔がみられる。650は土師器皿で、外面と内面に赤彩が施される。外面はヨコ方向のヘラミガキと内面は一部摩耗している。651は土師質土器椀で底部外面に高台を貼付する。外面と内面は摩耗する。652は土師器皿である。底部外面に粘土紐痕がみられる。外面と内面はヘラミガキとナデ調整が施される。底部に「□木中山」の墨書が確認できる。653は土師器皿である。外面と内面はヘラミガキとナデ調整が施される。654は土師質土器皿である。外面と内面は回転ナデ調整が施される。655と656は土師器皿で赤彩が施される。655は高台の内面と外面にナデ調整、内面は摩耗する。656は外面にナデ調整とヘラミガキ、内面は摩耗する。657～659は土師器釜である。657は口縁部下半に断面方形状の鐙が廻る。外面はナデ調整と指頭圧痕、胴部外面にタテ方向のハケ目調整、内面はナデ調整が施される。658も同じく口縁部下半に断面方形状の鐙が廻る。外面はナデ調整と指頭圧痕、胴部外面にタテ方向のハケ目調整、内面は口縁部下に強いナデ調整が施される。659は口縁部下半に断面方形状の鐙が廻る。外面はナデ調整と指頭圧痕、内面はナデ調整が施される。

660～663は須恵器の蓋である。660は宝珠形つまみをもつ。外面と内面はナデ調整を施す。661は天井部に環状つまみをもつ。外面は天井部にヘラケズリ後ナデ調整。内面はナデ調整が施される。662は環状つまみをもち、外面に自然釉がかかり、内面はナデ調整を施す。663は外面と内面にナデ調整を施す。外面は一部摩耗がみられる。664～666は須恵器杯である。664は底部外面に高台を貼付し、外面と内面にナデ調整を施す。底部外面には「□木」の墨書が認められる。665は杯の底部である。外面はヘラケズリとナデ調整。内面は不定方向のナデ調整を施す。外面には「X」の線刻が認め

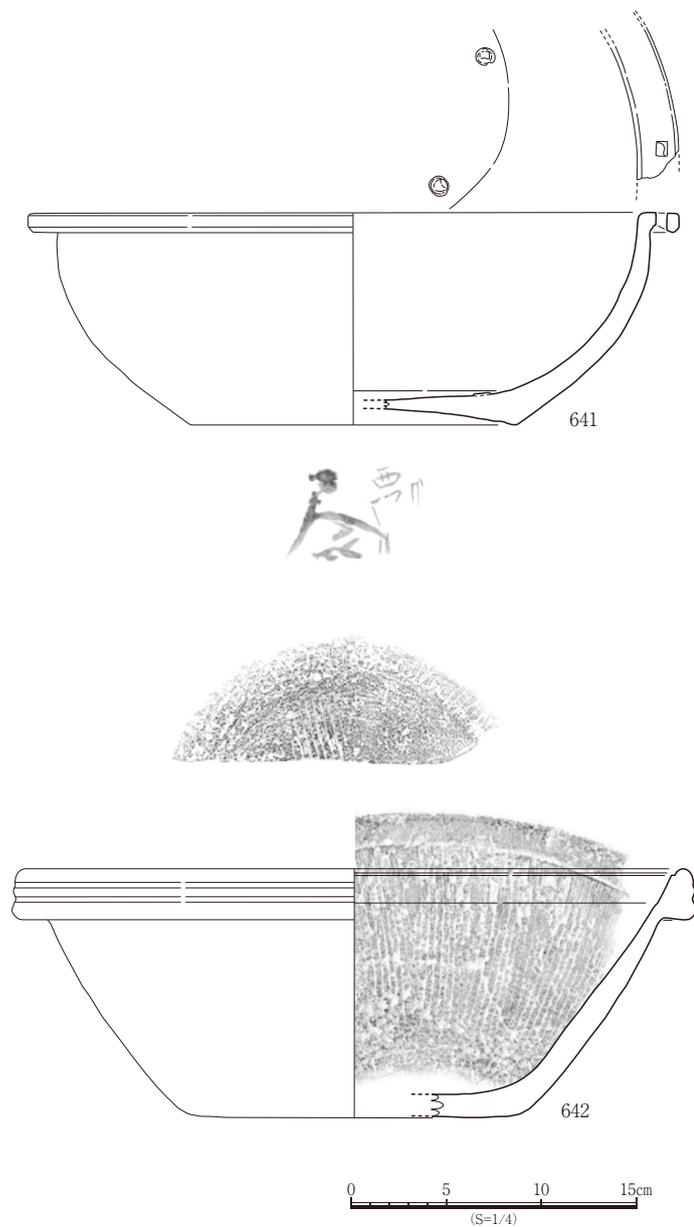


図3-68 VI区SX28出土遺物実測図

られる。666は底部外面に断面方形状の高台が付く。667は円板状高台の杯あるいは椀と考えられる。底部外面に回転糸切り痕が認められる。外面と内面には回転ナデ調整を施す。668は須恵器の壺である。肩部で、外面に自然釉がかかり、内面はナデ調整が施される。669は須恵器甕の頸部と考えられる。外面と内面には自然釉がかかる。外面と内面はナデ調整が施される。670は須恵器甕の口縁部である。外面には自然釉がかかり、内面に回転ナデ調整が施される。671と672は須恵器壺の口縁部である。口縁端部垂下形縁带状口縁を呈する。外面と内面はナデ調整で、頸部外面には斜位方向の圧痕がみられる。672も垂下形縁带状口縁を呈する。外面はタタキ目、内面はナデ調整である。673は甕の口縁部である。口縁端部は上下に拡張する。外面と内面はナデ調整で、内面には当て具痕により段差が生じる。674は甕の口縁から頸部である。頸部から体部外面は平行タタキ後ナデ調整が施される。内面は同心円状タタキ後ナデ調整である。675は甕の体部である。外面はタタキ後、ハケ目調整で、内面には赤色顔料の付着が認められる。676は甕である。外面と内面はナデ調整が施される。

677は緑釉陶器皿の底部である。外面と内面は全面施釉し、内面にはミガキが認められる。京都近郊産か。678も緑釉陶器の口縁部である。679は灰釉陶器の段皿と考えられる。外面と内面は回転ナデ調整が施される。

680と681は平瓦である。680は凹面に縄目痕、凸面は摩耗する。681は凸面はケズリとナデ調整、凹面に縄目痕が認められる。682は環状土錘である。中央部に最大径をもつ。外面にナデ調整と指頭圧痕がみられる。683は石包丁である。側縁部1箇所に抉りを施す。684は鉄製品刀子と考えられる。刀部が残る。685は碗状鉄滓である。

②表採遺物(図3-72 686~690)

686は陶器瓶の底部である。687は焙烙の口縁部である。外面と内面にナデ調整と指頭圧痕、外面に工具状の痕がみられる。外面にはススが付着する。688は棧瓦の刻印銘で、□に「野清」がみられる。689も同じく刻印銘で□に「中」とみられる。690は寛永通宝で、裏面は無文である。

2. 検出遺構と出土遺物 (6) 遺構外出土遺物

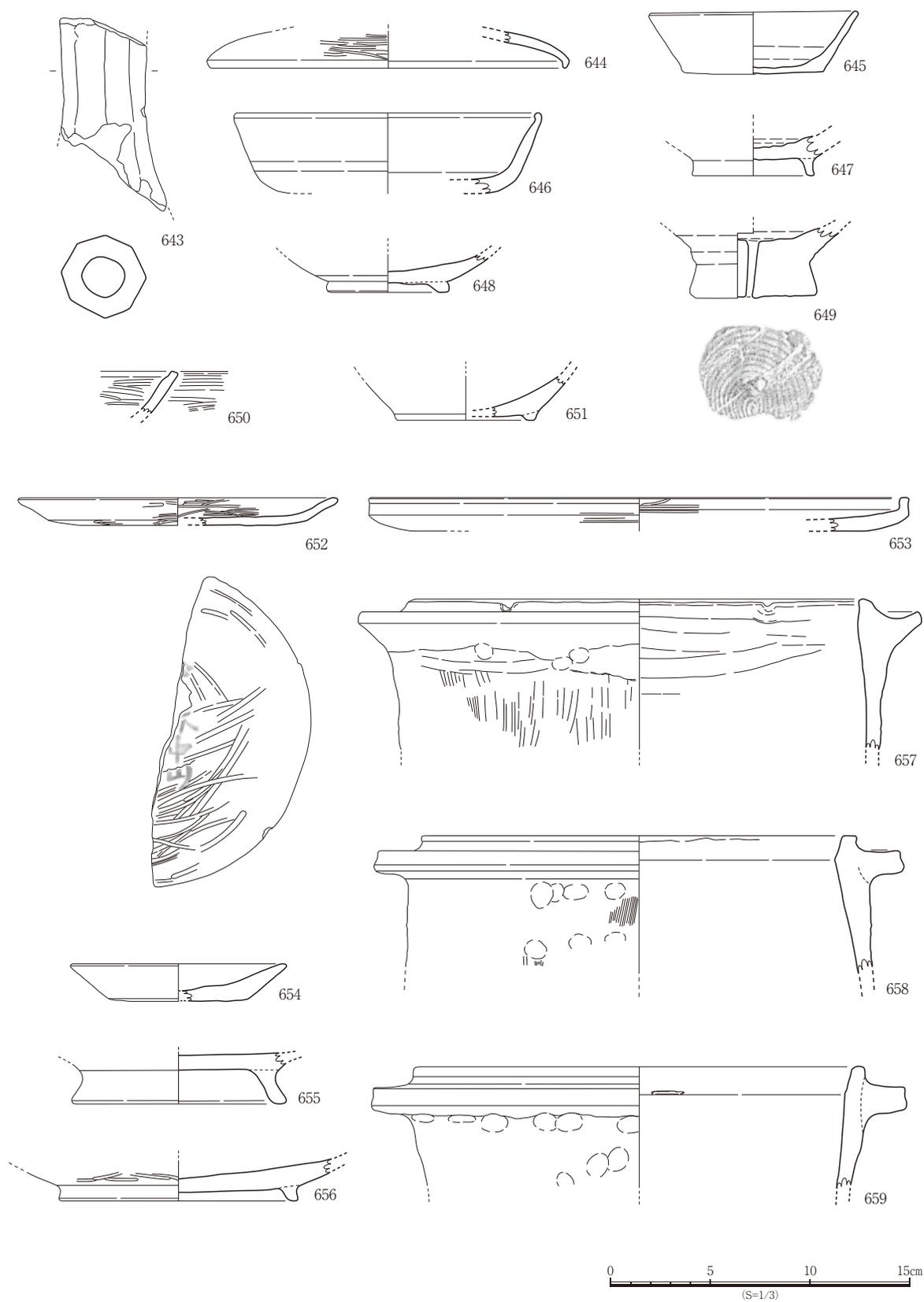


図3-69 VI区包含層出土遺物実測図1

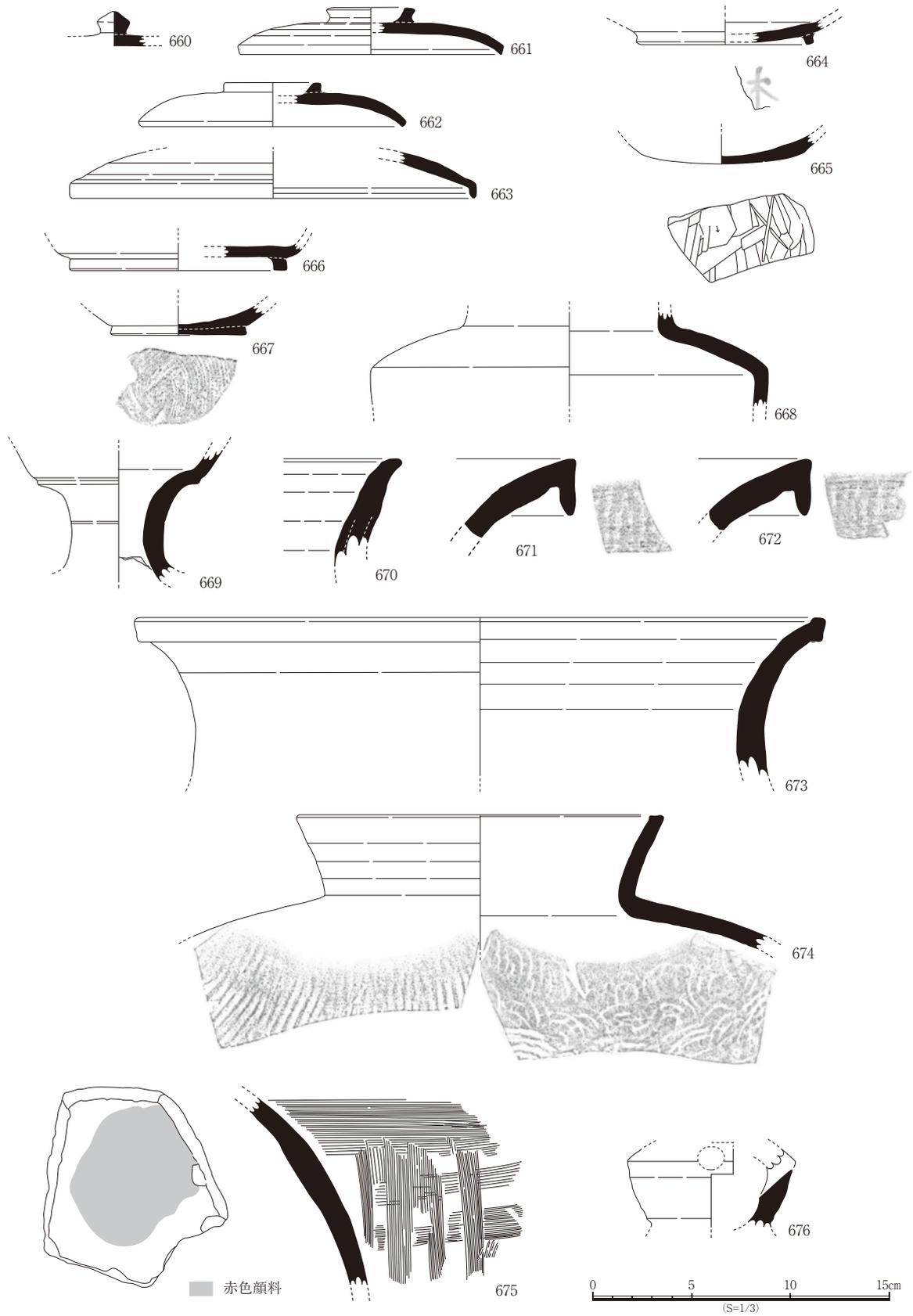


图3-70 VI区包含層出土遺物実測图2

2. 検出遺構と出土遺物 (6) 遺構外出土遺物

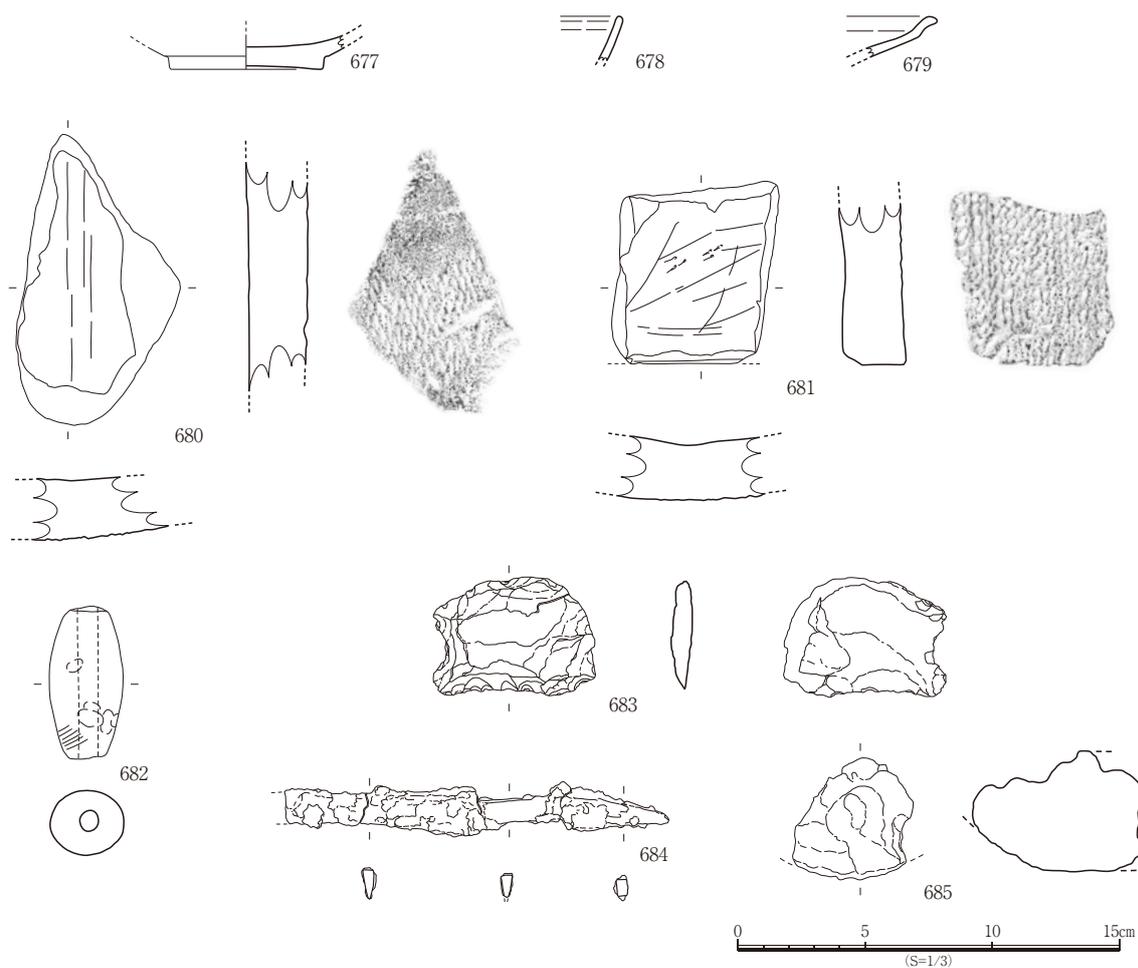


図3-71 VI区包含層出土遺物実測図3

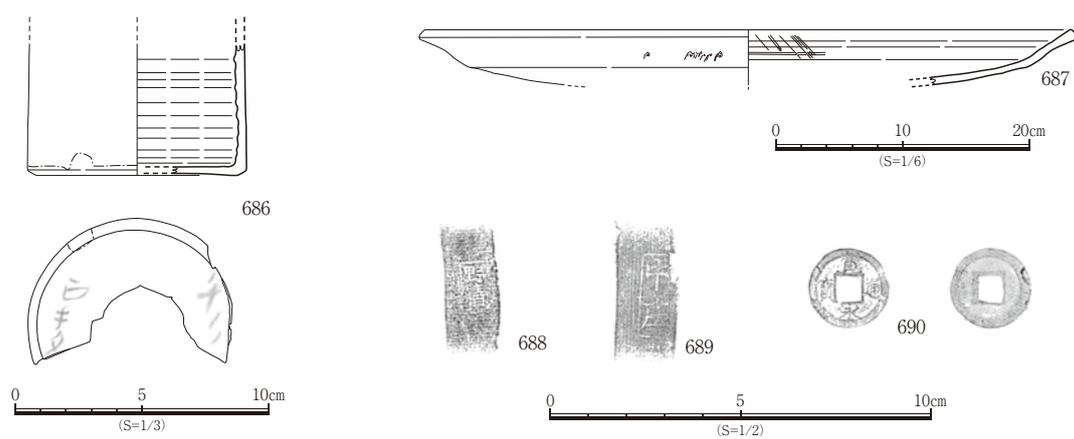


図3-72 VI区表採遺物実測図

第Ⅳ章 高田遺跡Ⅶ～Ⅺ区の調査

1. Ⅶ～Ⅺ区の概要

道路側溝跡SD1・2がⅦ区からⅩ区まで貫く区域である。Ⅶ区で柱穴や土坑が集中的に検出され、古代前期を主体とする。掘立柱建物跡等、Ⅵ区とつながる様相がある。

Ⅷ区は数条の溝跡が中心、Ⅸ・Ⅹ区は道路側溝跡が調査区内最良の遺存状態で、遺構埋土及びその堆積状態からみた分析に適する。

Ⅸ-1区、Ⅺ区北部等、調査域北側では、近世から近現代の遺構が集中的に検出された。

検出遺構の詳細は遺構計測表にまとめた。道路関連遺構については、後段でまとめて記述する。

基本層序の概要

当区域では、無遺物で古代遺構の検出面となる基盤層の構成土として、列島規模で分布する火山灰土が各所で認められ、遺物包含層や遺構埋土の基礎となっている。基盤層の最上層である黒ボク層(V層)土は、古代遺構の埋土の主体であった。

Ⅶ区以西では、Ⅷ区以東のV層のような黒ボクの高密層が安定的に認められない。Ⅶ区以西ではそれよりやや明るい「黒色」や「黒褐色」を呈し、遺物片を含む層等が認められ、東部のV層ほどには土壌化が進んでいない地山Ⅵ層に由来する可能性がある。また、赤音地が道路側溝跡の上層の他、調査区各所の遺物包含層で認められる。基本堆積層内では概して薄く、面的に存在しないが、極めて目立つ色調である。高密な赤音地を含む層をⅣ層とした。なお、このような赤音地は、後述する下層確認トレンチのいずれにおいても認められなかった。

遺構検出面(地山)は、図4-1～6のごとく調査範囲内で東西に起伏を繰り返す。Ⅳ区以東では、概して地山が高い部分に遺構が多い傾向があり、それは古代、近世以降の双方を含めて看取されるが、Ⅰ・Ⅱ区は例外である。加えて、地山面が高い区域では礫多含層が検出面となる等、削平が想定される面もある。表土厚に大きな変動はなく、遺構検出面の起伏と現地形の間に顕著な隔たりはないと捉えられる。南北方向では、Ⅸ区東部を除いて、概して南方へ緩やかに下降する。

地山となっている黒ボク、及びそれ以下の土層についてはⅧ区やⅨ-2区南壁で設定した確認トレンチで観察した。Ⅸ-2区東の南壁トレンチでは、図4-4のごとく最下層の礫層及びそれに至るまでの堆積状態が観察できた。これら地山各層の境界は遷移的な土色境界であり、明確な層理面をなしていない。地山基盤層のうち、下層で大円礫を多含する層はⅨ-1a区や同d区でも確認され、起伏をもちながら一帯の基盤層になっているとみられる。

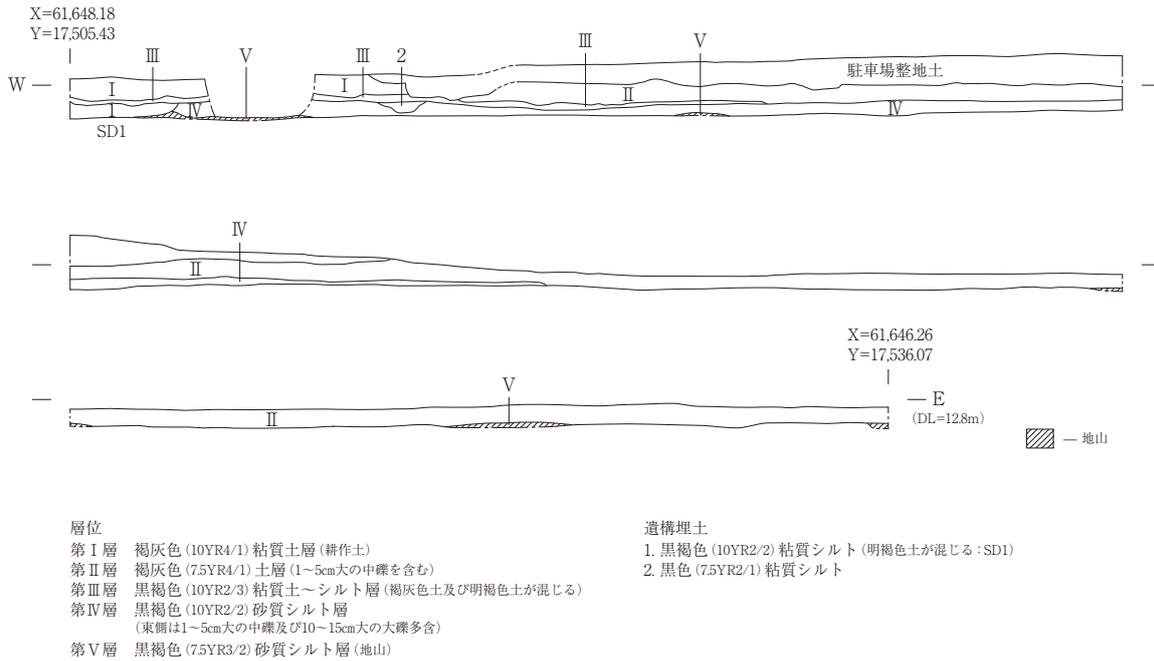
このⅨ-2区南壁トレンチで第Ⅵ章のごとく土質分析を行った結果、Ⅵ-1層、及びⅥ-2層への遷移層ではK-Ah火山灰、Ⅵ-2層ではK-Ah火山灰とAT火山灰の混在が認められた。また、最下層は30cmまでの円礫と褐色粘土からなり、火山ガラスは僅少であった。

2. Ⅶ区の調査と基本層序

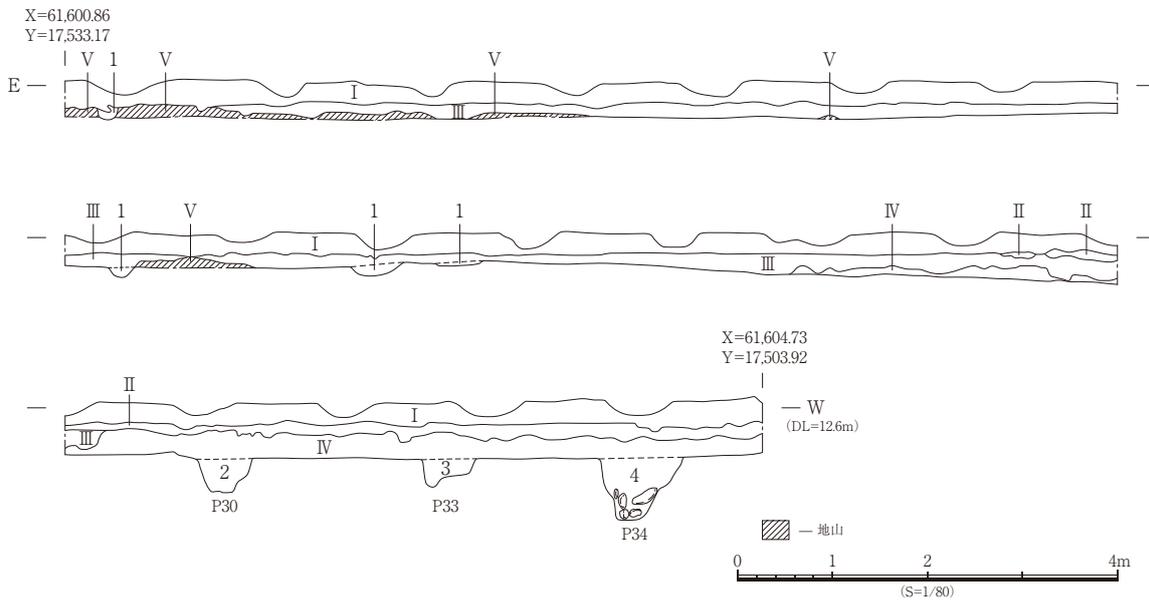
(1)調査の概要

掘立柱建物跡1棟、柱穴列1列、土坑としたもの30基、溝跡9条、性格不明遺構2基、柱穴69個を検出した。以下の文中では、出土遺物等から時期が判断できる遺構及びそのような遺構と関連する可能性のあるものを中心に記述し、その他は遺構計測表にまとめる。

2. VII区の調査と基本層序 (1)調査の概要

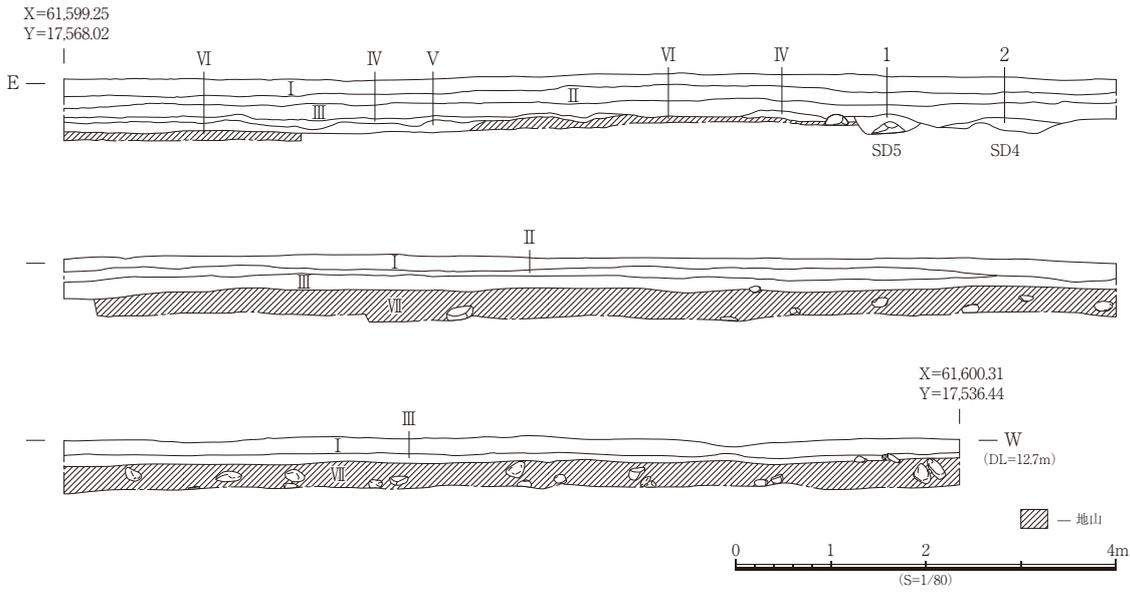


VII-1区北壁セクション図



VII-2区南壁セクション図

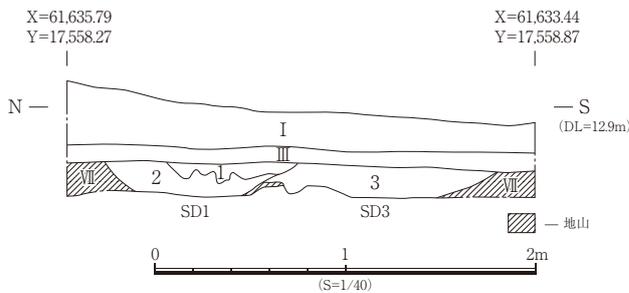
図4-1 調査区セクション図1



- 層位
- 第I層 表土層(耕作土)
 - 第II層 黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土層(上層は黄灰色粘土)
 - 第III層 黒褐色(10YR2/2)粘質土層
(小円礫を若干含む。火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
 - 第IV層 赤褐色(5YR4/6)赤音地層
 - 第V層 黒色(10YR1.7/1)黒ボク層
 - 第VI層 黒褐色(7.5YR2/2)火山灰土層(数mm大の細礫を含む:地山)
 - 第VII層 暗褐色(10YR3/3)火山灰土層(20数cm大の円礫多含:地山)

- 遺構埋土
- 1. 黒色(10YR1.7/1)黒ボク(V層と同質で明るめ:SD5)
 - 2. 黒色(10YR1.7/1)黒ボク(円礫を含み、V層と同質で明るめ:SD4)

Ⅷ区南壁セクション図



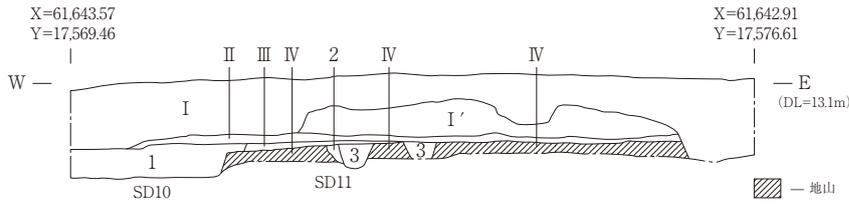
- 層位
- 第I層 表土層(耕作土)
 - 第III層 黒褐色(10YR2/2)粘質土層
(小円礫を若干含む。火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
 - 第VII層 暗褐色(10YR3/3)火山灰土層(20数cm大の円礫多含:地山)

- 遺構埋土
- 1. 赤褐色(5YR4/6)赤音地(SD1)
 - 2. 黒色(10YR1.7/1)黒ボク(SD1)
 - 3. 黒褐色(7.5YR2/2)火山灰土層(数mm大の細礫を含む:SD3)

Ⅷ区東壁セクション図(SD1・3)

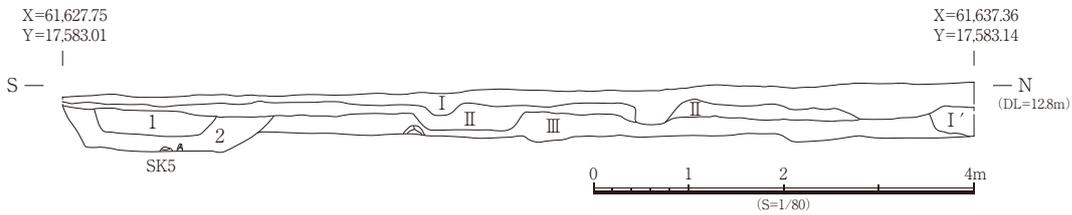
図4-2 調査区セクション図2

2. VII区の調査と基本層序 (1) 調査の概要



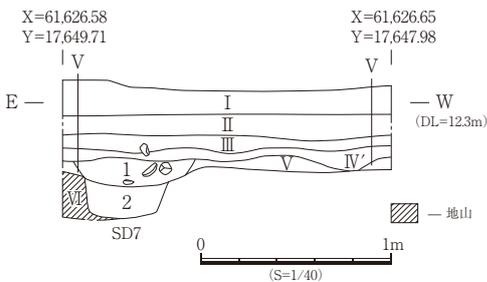
- | | |
|---|---|
| <p>層位</p> <p>第I層 現代整地層</p> <p>第I'層 現代整地層 (下層に円礫集中)</p> <p>第II層 暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト層
(西側では2cm大までの円礫を含む)</p> <p>第III層 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘土質シルト層
(3cm大までの円礫を含む, 土壌化した火山灰土を含む
とみられる: 旧耕作土)</p> <p>第IV層 暗褐色 (10YR3/3) 火山灰土層
(20cm大の円礫多含, IX-2区のVII層に対応: 地山)</p> | <p>遺構埋土</p> <p>1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
(10-30 数cm大の河原石多含: SD10)</p> <p>2. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土
(数mm大の細礫を含む, III層より暗め: SD11)</p> <p>3. 黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト
(黒ボク及び地山土 (暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト) を含み,
10 数cm大までの円礫を含む: ピット)</p> |
|---|---|

IX-1a 区北壁セクション図



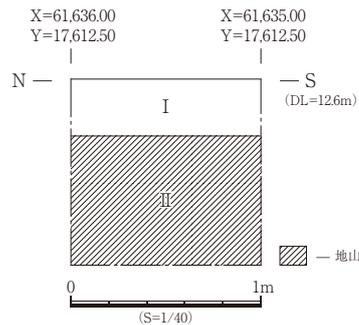
- | | |
|--|---|
| <p>層位</p> <p>第I層 現代整地層</p> <p>第I'層 現代整地層 (II層に似る)</p> <p>第II層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土層
(火山灰由来土が混じり, 小円礫を若干含む)</p> <p>第III層 暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト層
(火山灰由来土が混じり, 10cm大までの円礫を含む)</p> | <p>遺構埋土</p> <p>1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
(10 数cm大までの円礫及び瓦片, 陶磁器を含む: SK5)</p> <p>2. 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
(若干の炭粒及び瓦片, 陶磁器を含む: SK5)</p> |
|--|---|

IX-1b 区西壁セクション図



- | | |
|--|---|
| <p>層位</p> <p>第I層 表土層 (耕作土)</p> <p>第II層 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土層</p> <p>第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層
(小円礫を若干含む, 火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)</p> <p>第IV層 赤褐色 (5YR4/6) 赤音地と黒色 (10YR1.7/1) 黒ボクの互層</p> <p>第V層 黒色 (10YR1.7/1) 黒ボク層</p> <p>第VI層 暗褐色 (7.5YR3/3) 火山灰土層</p> | <p>遺構埋土</p> <p>1. 黒色 (10YR1.7/1) 黒ボク (数cm大の円礫を僅かに含む: SD7)</p> <p>2. 黒ボク (1より暗め: SD7)</p> |
|--|---|

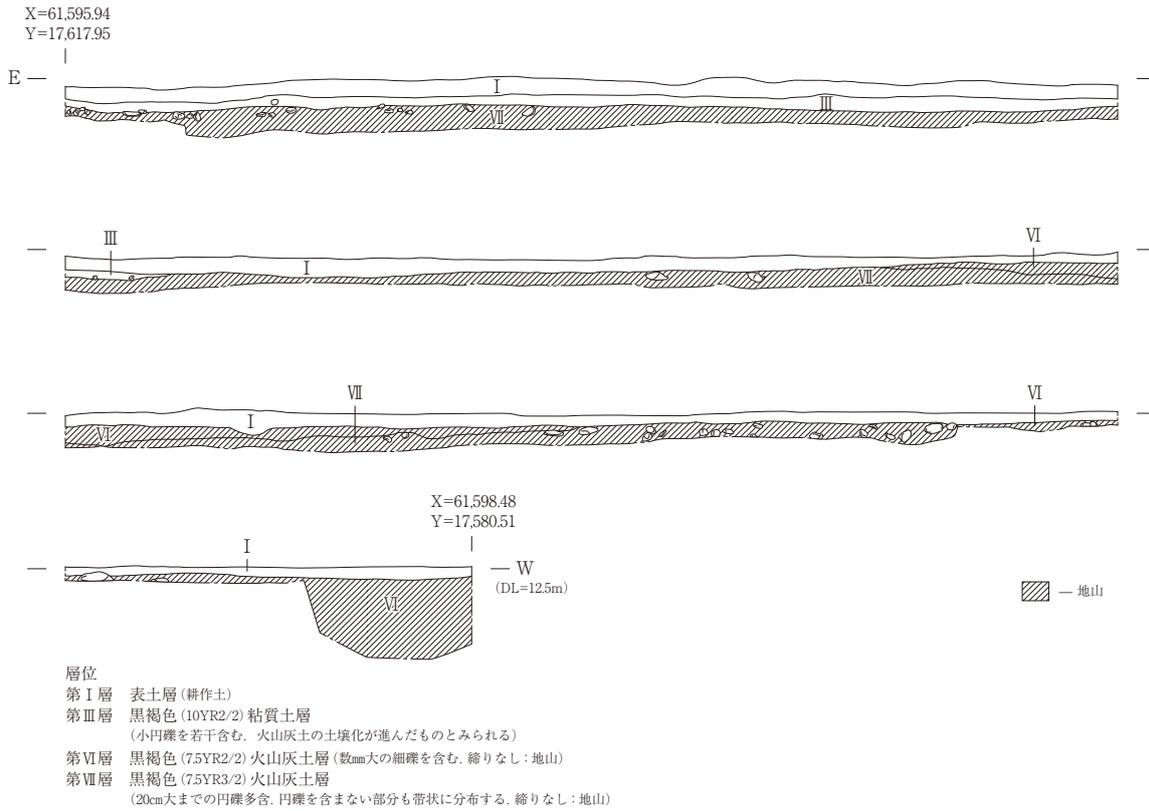
IX-1e 区南壁セクション図



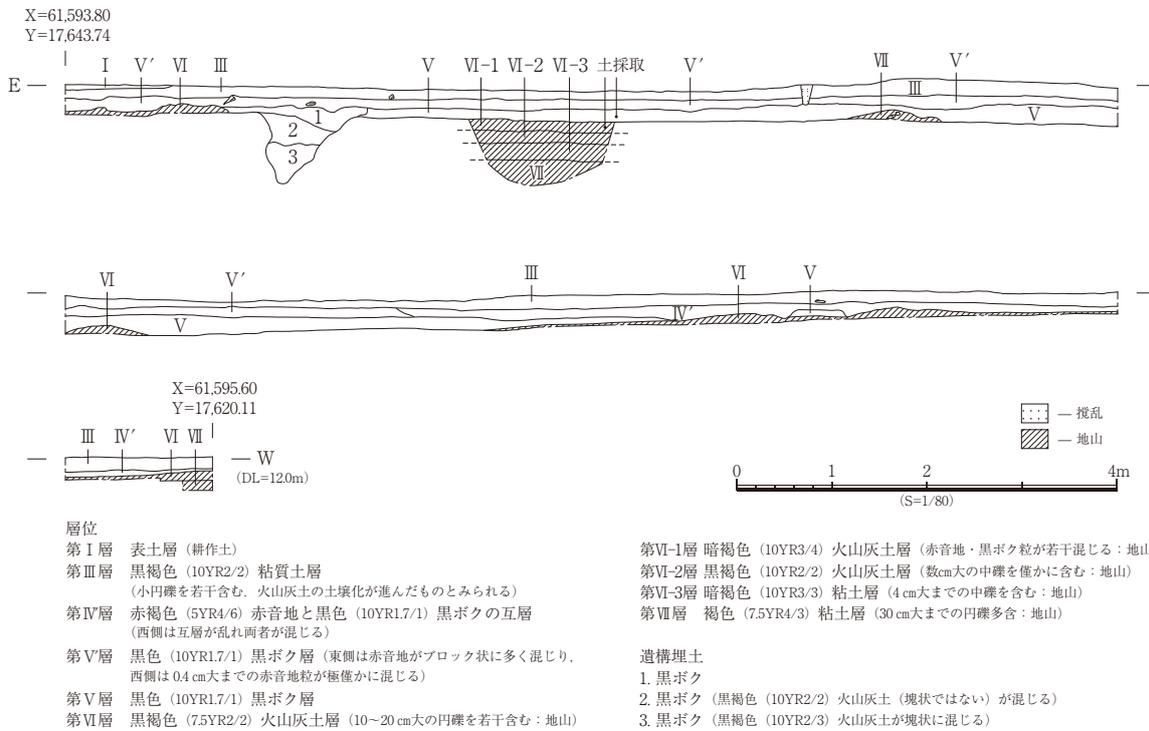
- | |
|---|
| <p>層位</p> <p>第I層 褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土層 (耕作土)</p> <p>第II層 暗褐色 (10YR3/3) シルト層
(20cm大までの円礫を含む, IX-2区のVII層に対応: 地山)</p> |
|---|

IX-1d 区東壁柱状図

図4-3 調査区セクション図3



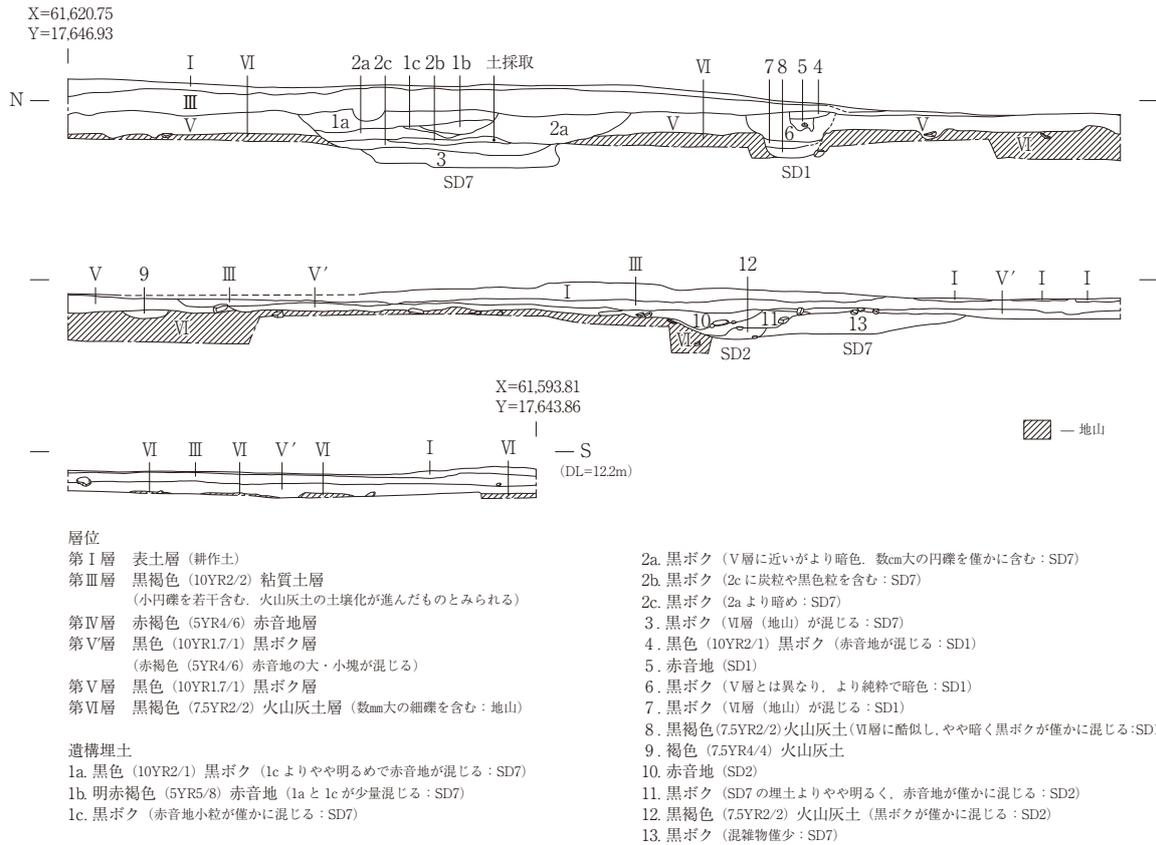
Ⅸ-2区西部南壁セクション図



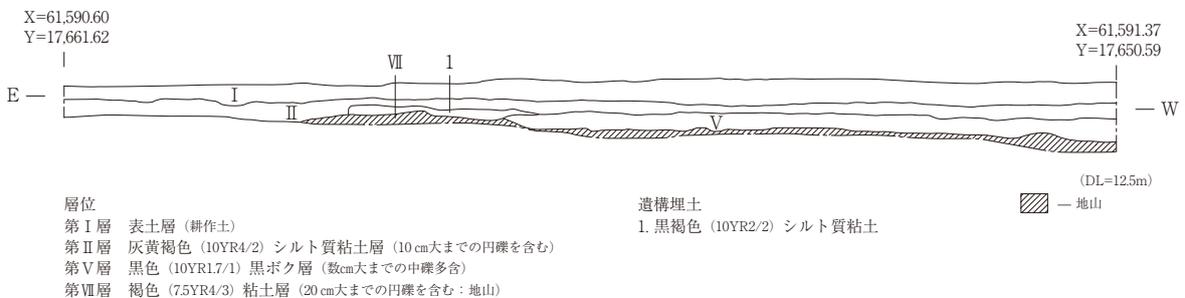
Ⅸ-2区東部南壁セクション図

図4-4 調査区セクション図4

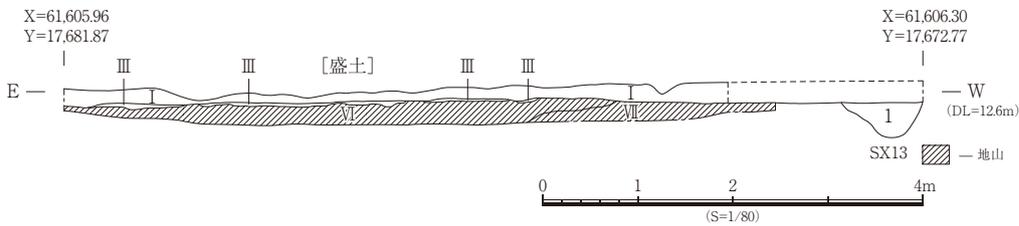
2. VII区の調査と基本層序 (1) 調査の概要



IX-2区東部東壁セクション図



X-2区南壁セクション図



XI区中央南壁セクション図

図4-5 調査区セクション図5

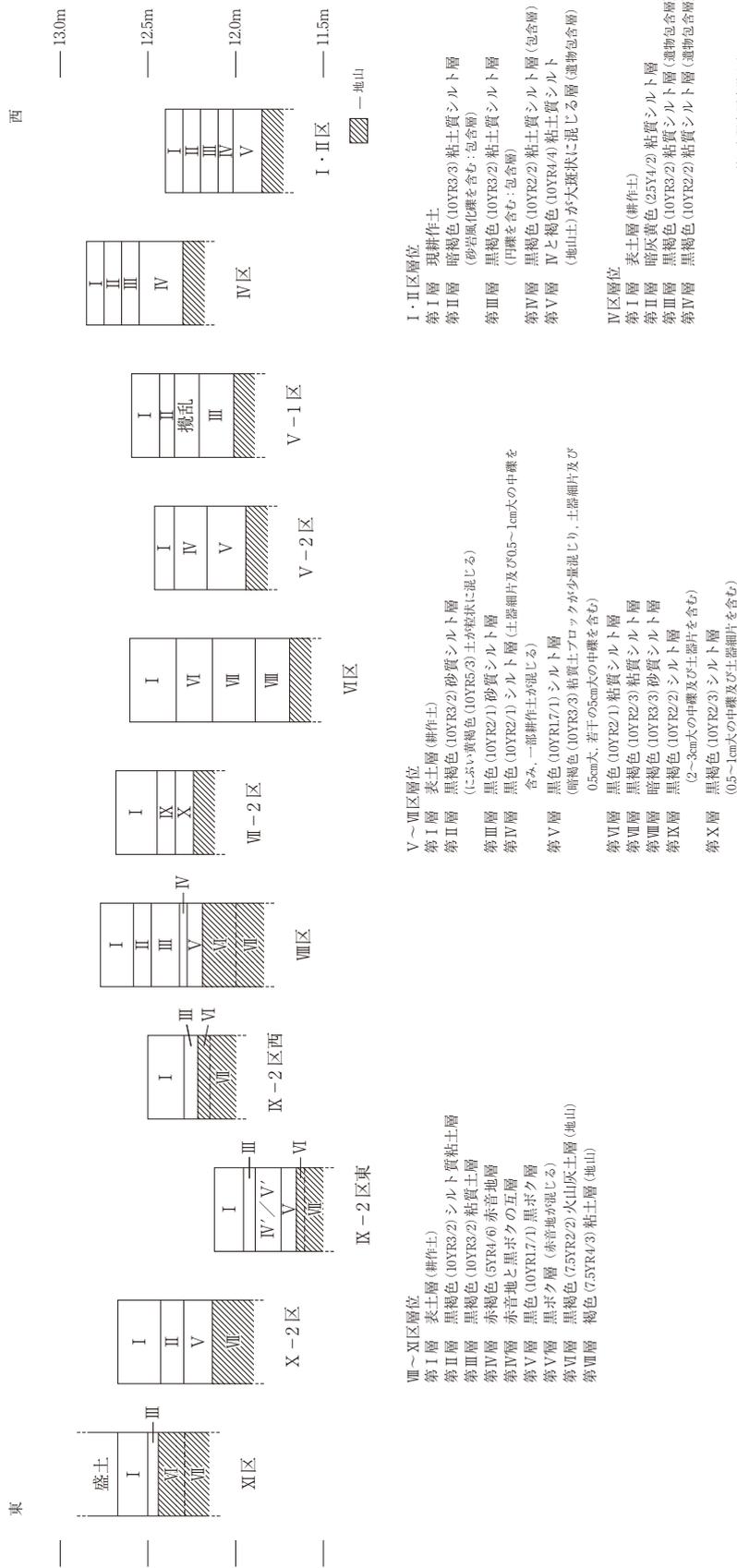


図4-6 基本層序概念図

2. VII区の調査と基本層序 (2) VII-1区の調査

当調査区では各種遺構が多数検出された。遺物も遺構内、外から出土しているが、小片が多く、図化できるものは限られていた。掲図されていないものを含めた遺構出土遺物の内容は、高田遺跡遺構計測表3・4・7～11のとおりである。

黒褐色の遺物包含層が面的に存在するが、南部の方が厚い。地山はVI区より数十cm高く、1～2cmの礫を含む層である。調査工程上、北の1区と南の2区に分割して調査を行った。

(2) VII-1区の調査

①土坑

SK6 (図4-7)

当小区南部で検出した隅丸方形の土坑で長軸1.5m、深さ24.4cmの比較的浅い遺構で、埋土は黒褐色砂質シルトに約30cmまでの円礫を含む。赤彩土師器や土師器甕、焼塩土器の破片が出土している。

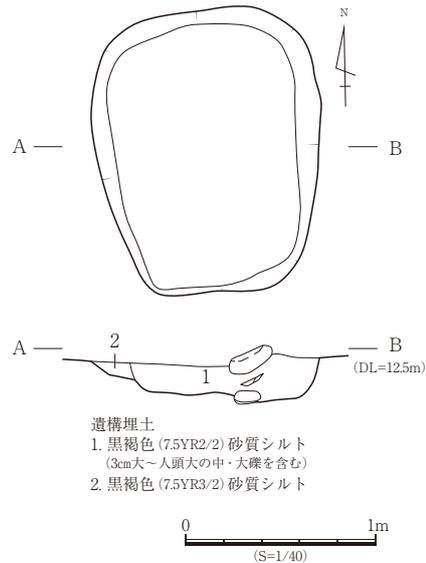


図4-7 VII-1区SK6

②溝跡

道路側溝跡を除いて、いずれの溝跡からも遺物は出土していない。

SD3・4・7 (図4-8)

方位は座標系に対して5°東振する東西溝で、本来は1条、又は関連をもったものであった可能性が高い。埋土も全て黒褐色砂質シルトを基本とする。全検出長は19.0m、幅30数cm～50cm余である。底面はSD3, 4, 7の順、即ち西に向かって傾斜率1.3%で下降する。

③柱穴 (図4-9・10)

出土遺物は総じて少ないが、時期のわかるものは古代前期に属する。これらの平面形は方形を呈さない長軸30数cm以上のものが圧倒的に多く、抽出図示したもののように底面が段をなすものがある。P13は完形の須恵器皿692が出土しており、埋納とみられる。口径18.0cm、外底回転ケズリ、口縁

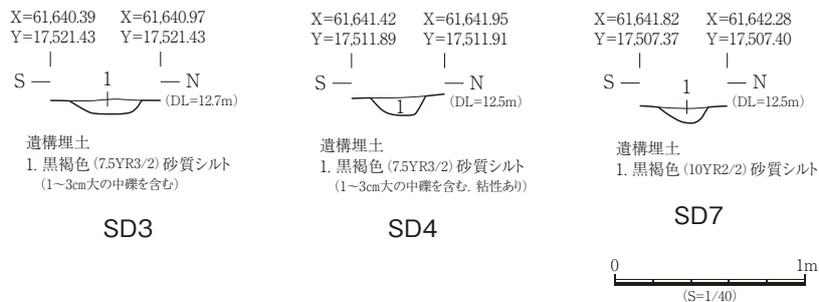


図4-8 VII-1区SD3・4・7

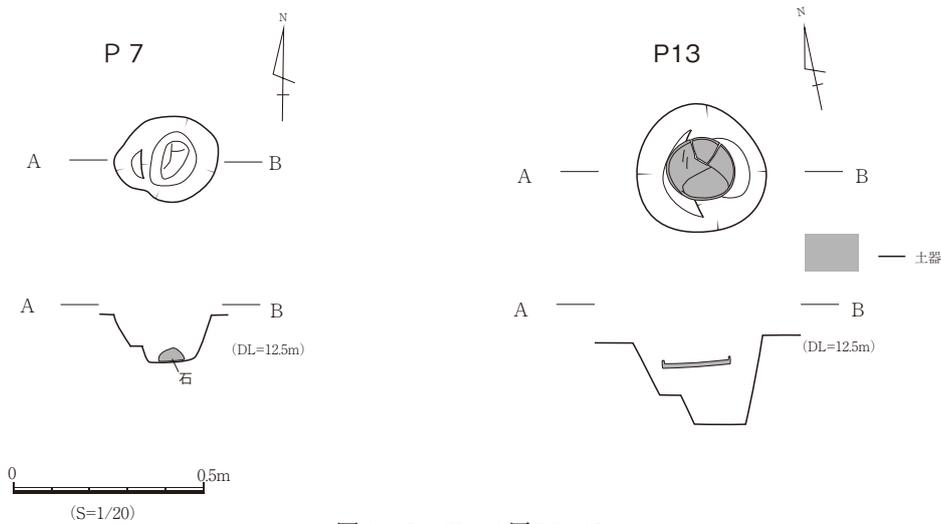


図4-9 Ⅶ-1区P7・13

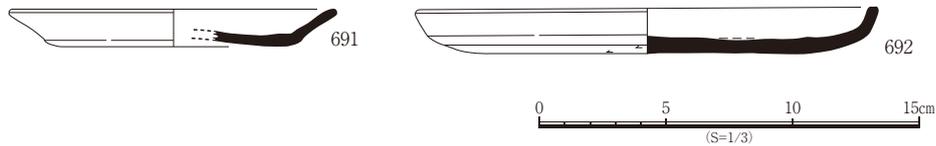


図4-10 Ⅶ-1区P7・13出土遺物実測図

端面は面取りで角張った特徴的な形状である。表面は瓦質状で、色ムラがある。

ピット群の分布状態には付図2のように粗密があり、集中部分には何らかの建物が想定できる。

(3) Ⅶ-2区の調査

①掘立柱建物跡

SB11 (図4-11)

当区南西隅で柱穴3基を検出した。柱穴中心部で測った検出長は4.3m、方位は座標系軸から8°東振、埋土は暗褐色砂質シルトである。各柱穴は一辺27～48cmの隅丸方形を呈する。

遺物は須恵器杯や甕、土師器甕片等が出土しており、時期は古代前期に限られる。Ⅵ区南東隅の建物をみれば、当柱穴群も建物跡の一部と考えられる。

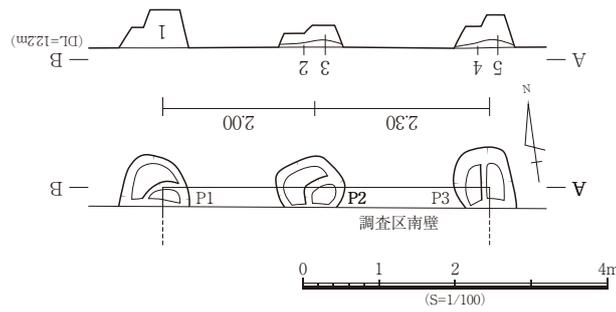
②柱列跡

SA2 (図4-12)

当小区西部にあって7個の柱穴からなり、長さ6.2mを測るが位置関係からみて3個及び4個からなるものが時期差を持って重複していると考えられる。円形基調で長径0.54～0.76mのピットが並び、方位は座標系軸から5°東振する。残存深度は11.6～30cmで、本来はさらに柱穴があって建物等を構成していたが削平された可能性も考えられる。埋土は暗褐色砂質シルトである。

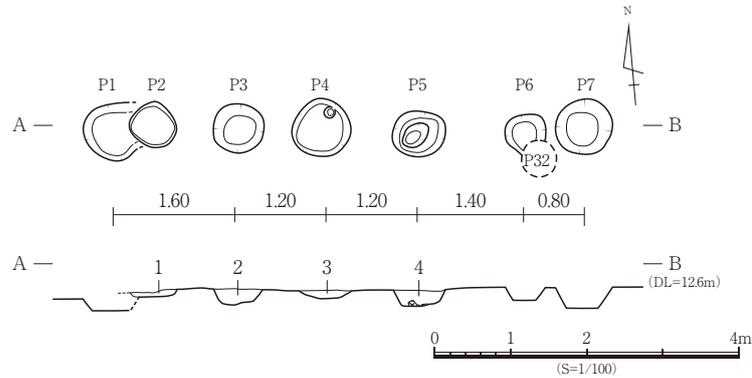
P3・5・7から遺物が出土しており、いずれも古代前期に属する。

2. VII区の調査と基本層序 (3) VII-2区の調査



- 遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト
(褐色 (10YR4/4) 土及び黒色 (10YR2/1) 土が粒状に混じり、
0.5~1cm大、5cm大の中礫を含む)
 2. 黒褐色 (10YR2/3) シルト
(褐色土が混じり、10cm大の大礫を含む)
 3. 暗褐色 (10YR3/4) シルト
(3~5cm大の中礫を含む、締り、粘質あり)
 4. 黒褐色 (10YR2/3) シルト
(土器細片及び0.5~1cm大の中礫を含む)
 5. 黒色 (10YR2/1) シルト (10cm大の大礫を含む)

図4-11 VII-2区SB11



- 遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト (0.5~1cm大、3cm大の中礫を含む)
 2. 黒褐色 (10YR2/3) シルト (褐色 (10YR4/4) 土が混じり、土器細片を含む)
 3. 黒褐色 (10YR2/3) シルト (1~3cm大、10cm大の中・大礫を含む)
 4. 黒褐色 (10YR2/3) シルト (褐色 (10YR4/4) 土が少量混じり、3cm大、10cm大の中・大礫を含む)

図4-12 VII-2区SA2

③土坑

隅丸方形や不整円形の遺構群と、短い溝状の遺構群は当小区の中央部に位置する。調査区南西部で検出された土坑群は、柱穴であった可能性が高い。出土遺物が存在し、時期判断可能なものはSK10の1片を除いて全て古代前期に属する。SK1・2では一定数が出土した。

SK1 (図4-13・14)

当小区東寄りにあって、長辺1.20m、深さ34.6cmを測る隅丸方形の遺構で、黒色シルトの埋土下層には土器片とともに炭化物を含む。遺物は高田遺跡遺構計測表4のごとく出土し、時期判断可能なものは全て古代前期に属する。

天井部内面に墨書のある須恵器蓋 693は口径18.9cm、天井部外面に弱い回転ケズリ後、回転ナデ、天井部面は丁寧なナデ。口縁端の折れは明瞭である。内外面の各所に、薄い黒色物質が付着する。

SK2 (図4-13・14)

SK1の西側で検出した長軸1.59m、深さ約32cmを測る不整円形の遺構で、埋土は暗褐色シルトの

中層には若干の炭化物を含む。遺物は高田遺跡遺構計測表4のごとく出土し、時期判断可能なものは全て古代前期に属する。

外底中心脇に墨書のある須恵器杯 694 は底径 10.9 cm, 外底を丁寧にナデるが中心にヘラ切り時の痕がヘソ状に残る。土師器皿 695・696 はいずれも内外面にミガキを施す。須恵器皿 697 は口径 17.2 cm で外底回転ケズリが認められる。

SK3・4 (図4-13・14)

当小区中央東寄りにあって、いずれも隅丸方形を呈し、長辺は各 1.02 m・0.94 m, 深さ 20 cm・14.4 cm, 埋土は黒褐色シルトに 5 cm 大までの礫や少量の炭化物を含む。いずれも高田遺跡遺構計測表 4 のごとく土師器や須恵器が出土しており、SK4 出土の 698 は丁寧に整美な仕上げである。

SK9・10・SX2 (図4-14・15)

当小区中央から東で検出した長軸が長い溝状の遺構群で、いずれも埋土は黒ボクを基本とする。軸方位はほぼ真北を指す。SD1・SK10・SX2 は平行して東西に並んでいる。

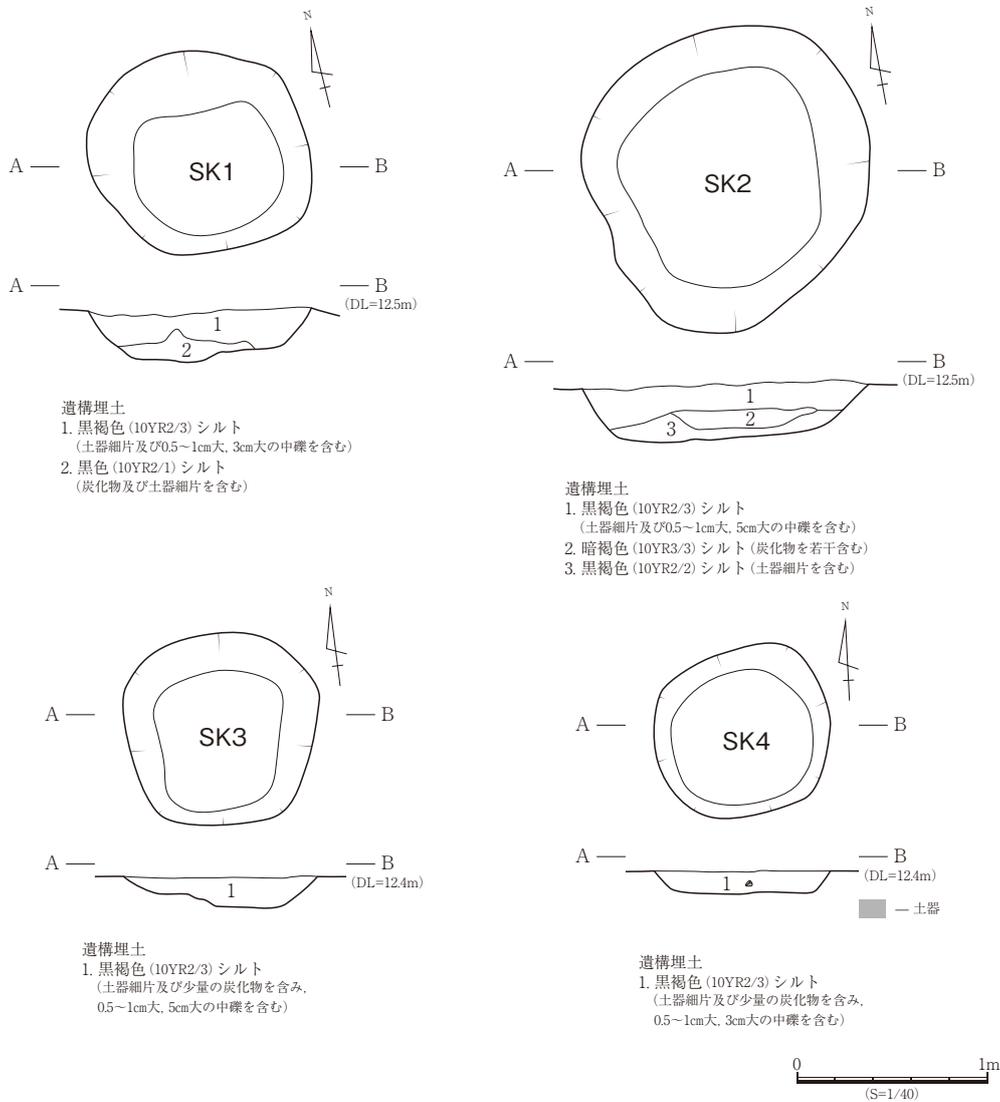


図4-13 VII-2区SK1~4

2. VII区の調査と基本層序 (3) VII-2区の調査

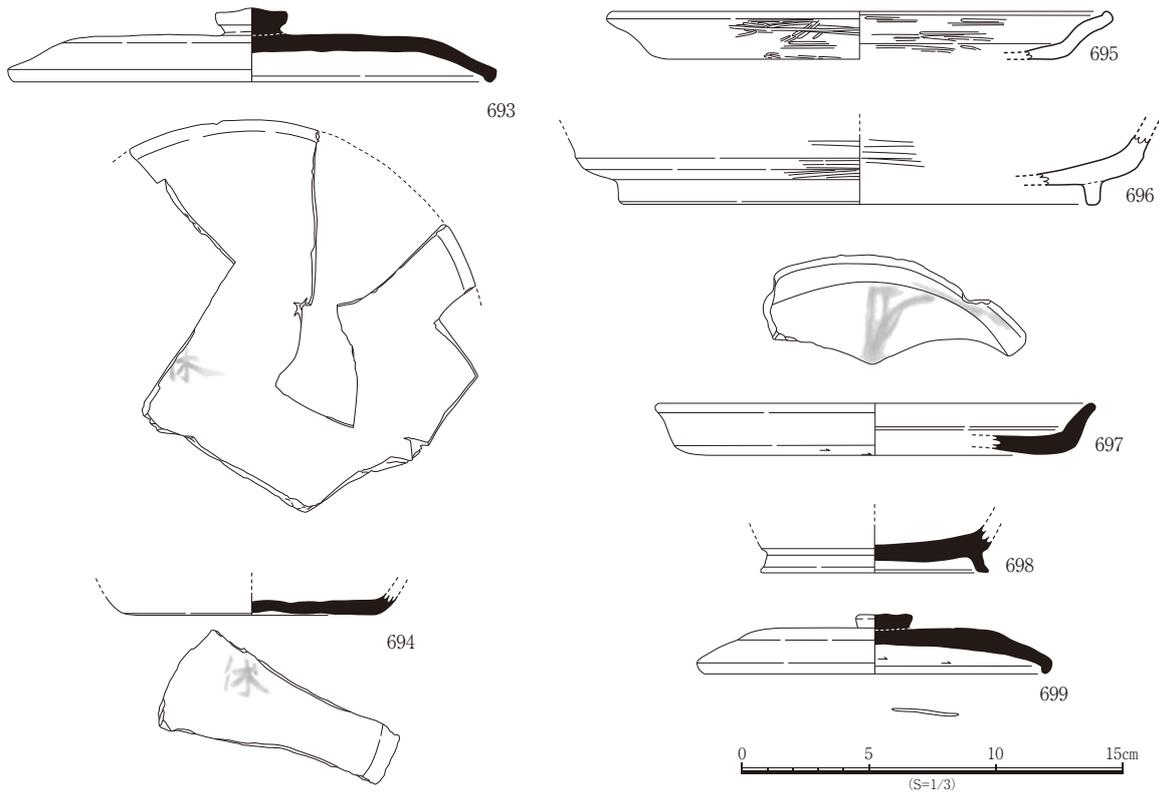


図4-14 VII-2区SK1~4・10出土遺物実測図

SK9は長軸2.70m, 短軸0.64m, 深さ39.4cm, SK10は推定長2.30m, 短軸0.93m, 深さ19.5cm, SX2は長軸2.45m, 短軸1.36m, 深さ6.8cmを測る。SK10はSK1にきられる。

遺物が出土したのはSK10のみで, 土師質土器杯片を1点含むが他は古代前期である。須恵器蓋699は内面天井に焼成前に刻んだ一文字の線刻がある。

SK13 (図4-15・16)・20

調査区中央部にあって, 長軸1.34mの楕円形及び1.51mの不整長方形を呈する。深さはそれぞれ30.7cm・34.4cm, 埋土は黒褐色シルトに数cm大の礫を含む。

いずれも古代の土器のみが出土している。SK13出土の赤彩土師器高杯700の脚はあまり高くない。701は甑底部とみられ, 外面にハケ痕が残る。

SK19・21~23 (図4-15・16)

当区南西部で検出されたこれら隅丸方形の遺構は, 周辺の同様の遺構群と併せて, 総じて柱穴であった可能性が高い。長辺0.94~1.00m, 深さ23~61cm, 埋土は黒褐色シルトを基本とする。

出土遺物はいずれも古代前期に属する。後記のP38等も同様である。SK19出土の702は須恵器杯又は小壺, SK21出土の703は大径の土師器高杯又は高台付皿の口縁部である。SK22出土の土師器甕704は胎土にチャート円礫等を多含する在地産土器である。

④溝跡

SD1 (図4-17・18)

7°東振する南北溝で, 確認長は4.23m, 古代前期の土器が出土した。他遺構とのきり合いは不明である。

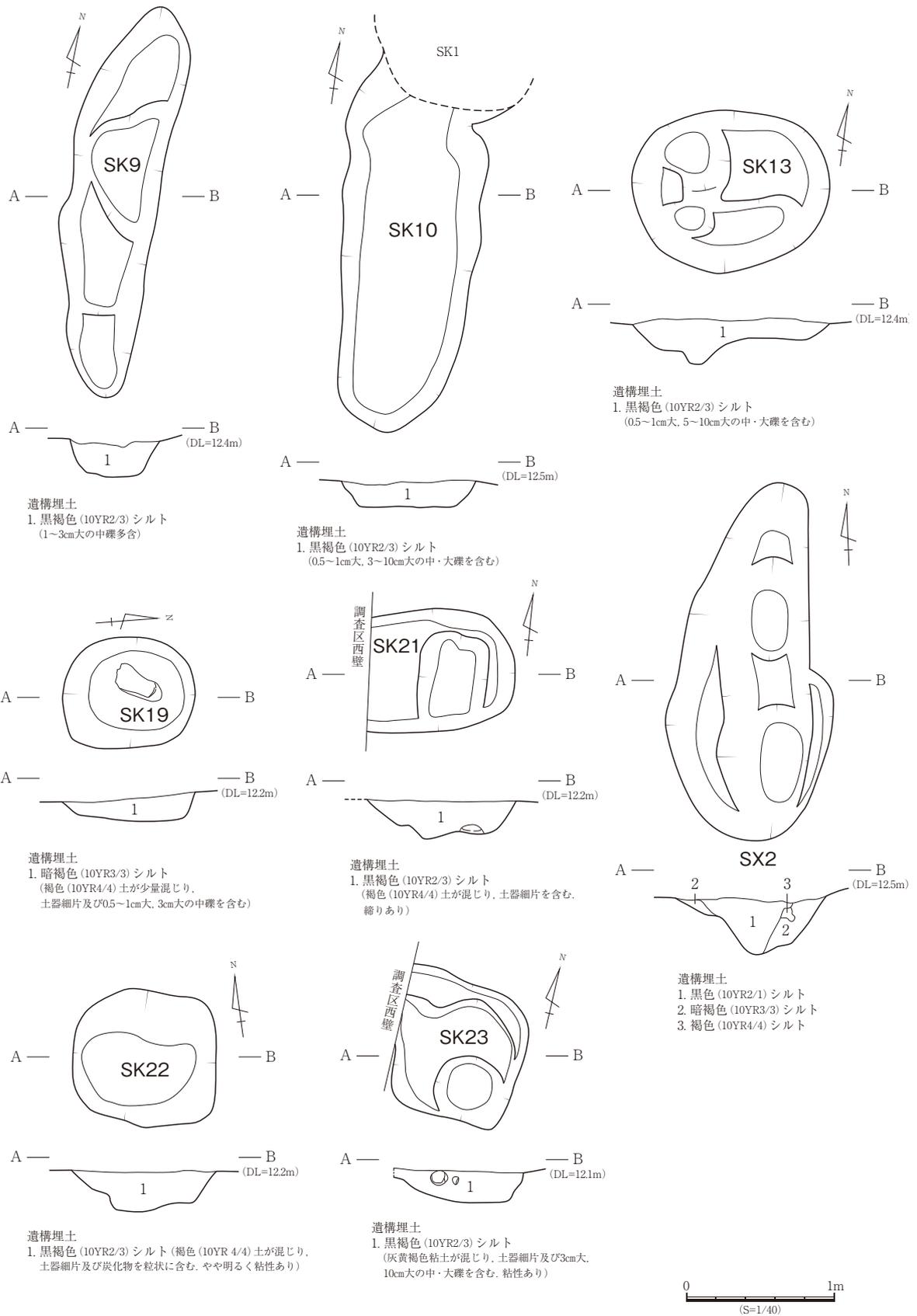


図4-15 Ⅶ-2区SK9・10・13・19・21~23・SX2

2. VII区の調査と基本層序 (3) VII-2区の調査

土師器甕 705 は口縁端部を拡張せず、丸味を有するが端面は水平である。花崗岩由来とみられる角礫を多含する胎土に特徴がある。



⑤柱穴

当区南西隅で検出されたP, SKの記号が付された遺構群は、出土遺物があるものはいずれも古代前期に属する。組合せを特定し難いが、形状、埋土ともに既述した建物や柱列の柱穴跡に類し、VI区南東隅の状況と併せて、この地点に建物が集中或いは建替えが行われたことを示す。

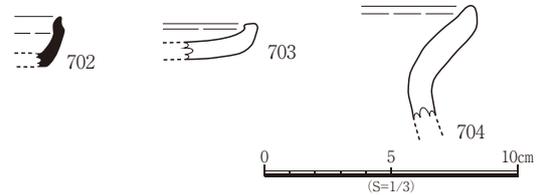
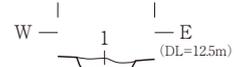


図4-16 VII-2区SK13・19・22出土遺物実測図

P16 (図4-19・20)

当区南部で検出したP16は長径0.68m、深さ22.3cmで埋土は当区H群。出土した土師器杯 706 は口径 15.4 cm、体部は連続ミガキ、底部は断続ミガキで、全面を丁寧にミガク。口縁端は明瞭に巻き込む。外面や断面に黒褐色物質が付着している。

X=61.608.08 X=61.608.00
Y=17.518.68 Y=17.519.18



遺構埋土
1. 暗褐色 (10YR3/3) シルト
(0.5~1cm大, 3cm大の中礫を含む)

図4-17 VII-2区SD1

P38 (図4-19・20)

南西部で検出したP38は楕円形で、P22にきられ、推定長軸0.70m、深さ36.3cmで埋土は当区H群。出土した須恵器蓋 707 は2/3が残り、口径14.3cm、天井全面に回転ケズリ、口縁周辺の回転ナデは明瞭で、口縁内面には回転板ナデ状痕がある。天井内面は丁寧なナデで口縁端部の折れは明瞭、全体に丁寧な仕上げである。

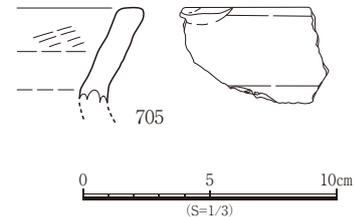


図4-18 VII-2区SD1出土遺物実測図

P40 (図4-20)

調査区西部で検出した一辺0.75m、深さ28cm余の隅丸方形のピットで、遺構計測表0のごとく、破片ではあるが多数の遺物が出土した。それらの時期的上限は8世紀前半~中頃とみられる。須恵器蓋 708 は環状つまみで、天井外面は回転ケズリと断続ケズリ、天井内面は丁寧なナデ仕上げで、極めて平滑である。

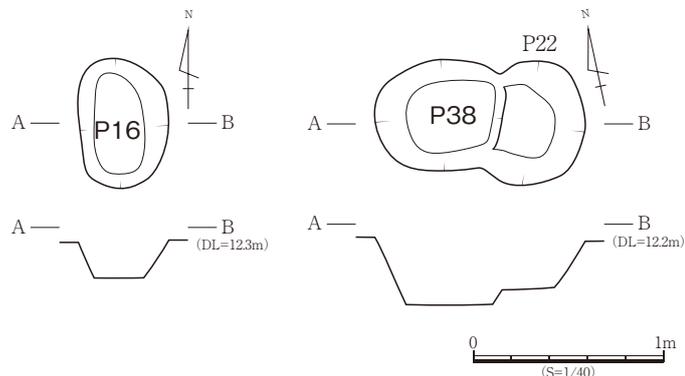


図4-19 VII-2区P16・38

⑥VII-1・2区包含層等出土遺物(図4-21~23)

VII-1区出土の土師器709は厚手の口縁部で、内外面に密なミガキを施す。高杯か皿Bである。

VII-2区III層出土の赤彩土師器710は外面に密なミガキ、内面は底部周縁をヨコナデし、体部には

左上がりの放射暗文を施す。底部のみ残るが、厚手である。711～713は土師器高杯で、脚は比較的低い。墨書のある714は土師器食器の破片で内外面ミガキ、やや大型の皿や杯の一部とみられる。砂粒を含まない、よく水簸された胎土である。墨書は「為」か。須恵器蓋715は口径21.0cm、かえりが長く、その先端は角張る。天井外面は多方向ケズリとナデ仕上げ。716は環状つまみをもち天井部外面に回転ケズリと断続ケズリ、口縁端部は折り返す。全体に丁寧な仕上げである。717は鍋の把手、718は移動式竈で体部内外面に粗目のハケ。大粒の角粒を含む。土師器甕719は口縁部がやや内湾気味で、端部を拡張しないタイプである。胎土には花崗岩由来とみられる角礫を多含する。円面硯722の陸部は使用により平滑である。723は円面硯の脚部で、一部しか残存しないが、透かし、及び穿孔のための切り込み部分が観察される。720と724は焼成時の内面への降灰の状態が類似する。725、726は緑釉陶器片である。

Ⅳ層出土の赤彩土師器皿B・727は口径21.1cm、内面に左上がりの放射暗文、内底に二重以上の連弧暗文を施す。外底には押圧痕、回転ケズリ痕。全面に化粧土塗布後、外面ほぼ全面をミガク。成形、調整、施文は概して丁寧で、素地は白っぽい。高杯728は上面を丁寧に滑面化、下面は回転ケズリ。脚は高くない。なお、焼塩土器片がⅦ区全体でⅢ層から計207g、Ⅳ層から29g、いずれの層か特定できないもの22g、合計258g出土した。

729～731は攪乱坑から出土した近世遺物で、焙烙729は口径42.0cm、均一かつ薄手で、型作りかと思われる。土師質土器としては硬質で、雲母片を多含する搬入品。730は口径41.2cm、内面は斜方向のナデ仕上げ、口縁外面はヨコナデにより外反。石英、赤色風化礫等の細粒のみ含む。

当区の遺物包含層は基本層序Ⅲ層とⅣ層で、掲図分・非掲図分を併せた概要を述べれば、古代については層位による時期差等は指摘できない。9世紀後半以降と確言できるものはなかった。Ⅲ層以上では、古代の遺物に加えて近世以降の土器・陶磁器が20数片程度出土した。Ⅳ層で取り上げた遺物のうち近世以降は播鉢1点であった。

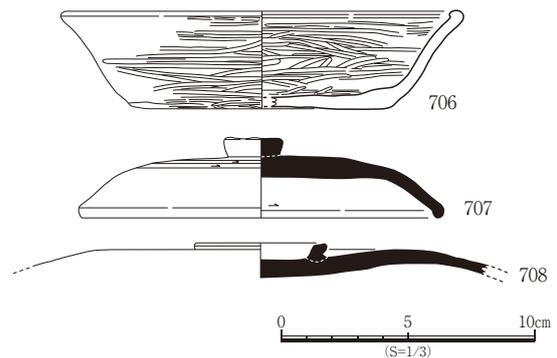


図4-20 Ⅶ-2区P16・38・40出土遺物実測図

2. VII区の調査と基本層序 (3) VII-2区の調査

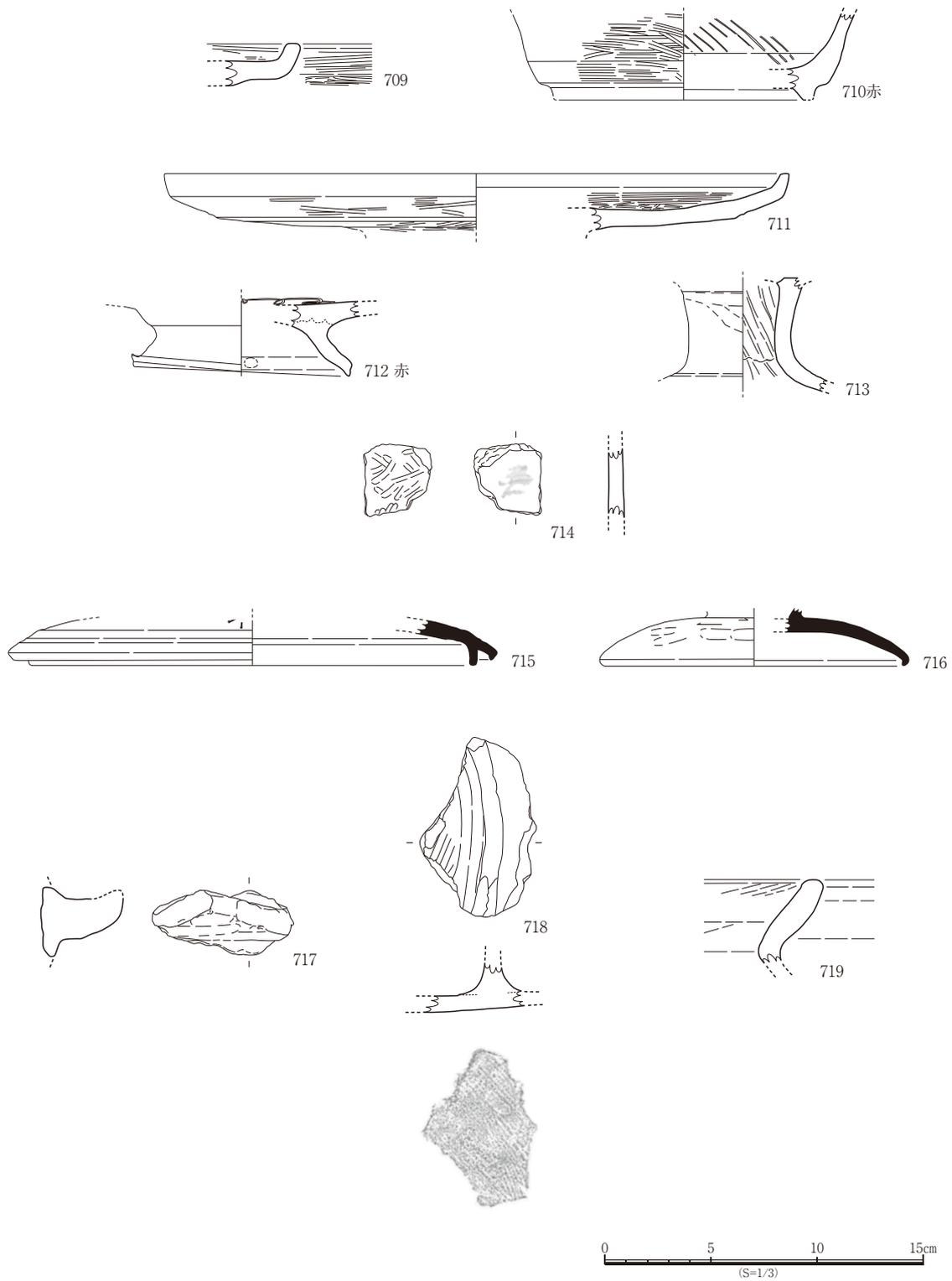


図4-21 VII区包含層等出土遺物実測図1

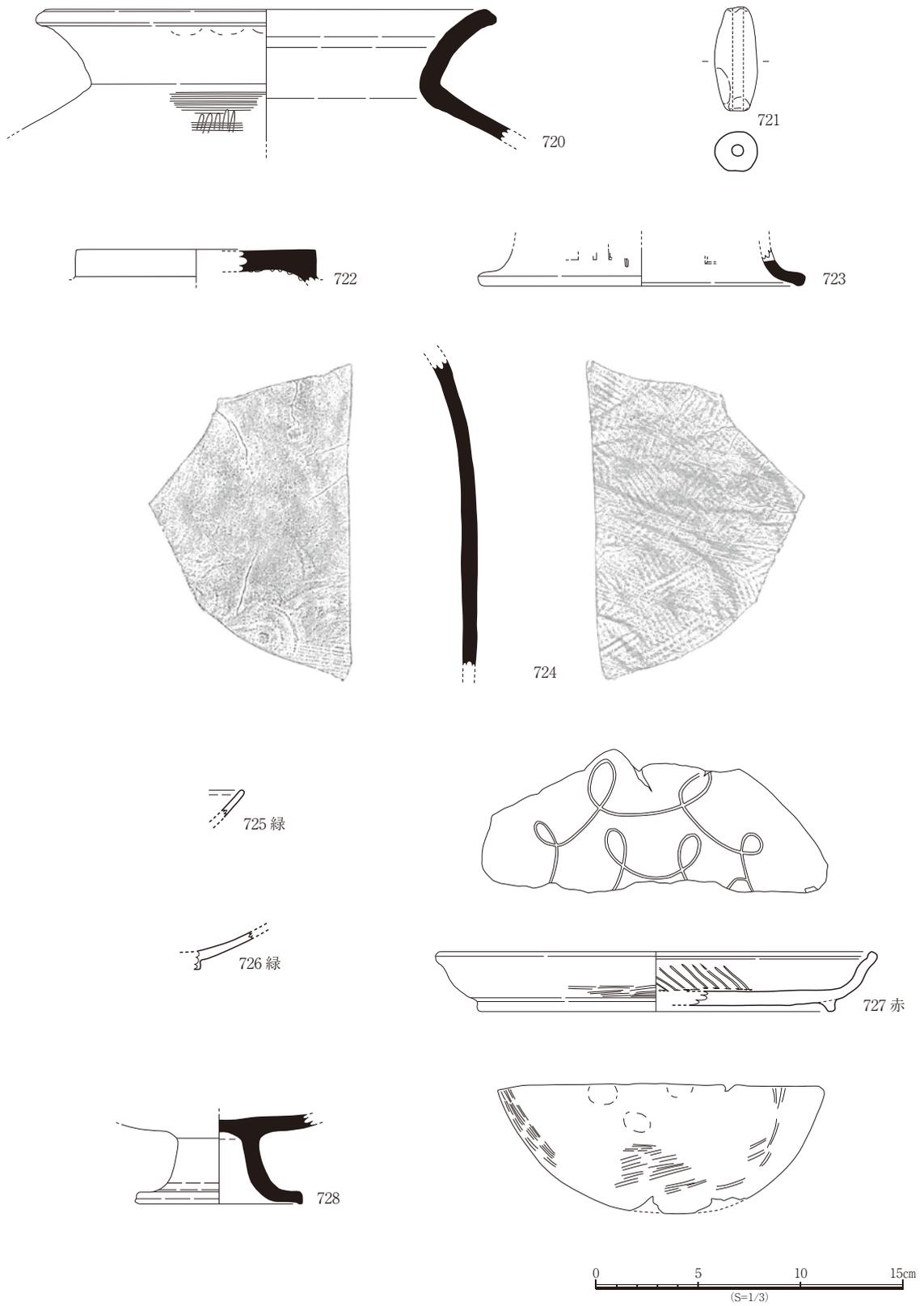


図4-22 Ⅶ区包含層等出土遺物実測図2

3. VIII区の調査 (1) 調査の概要

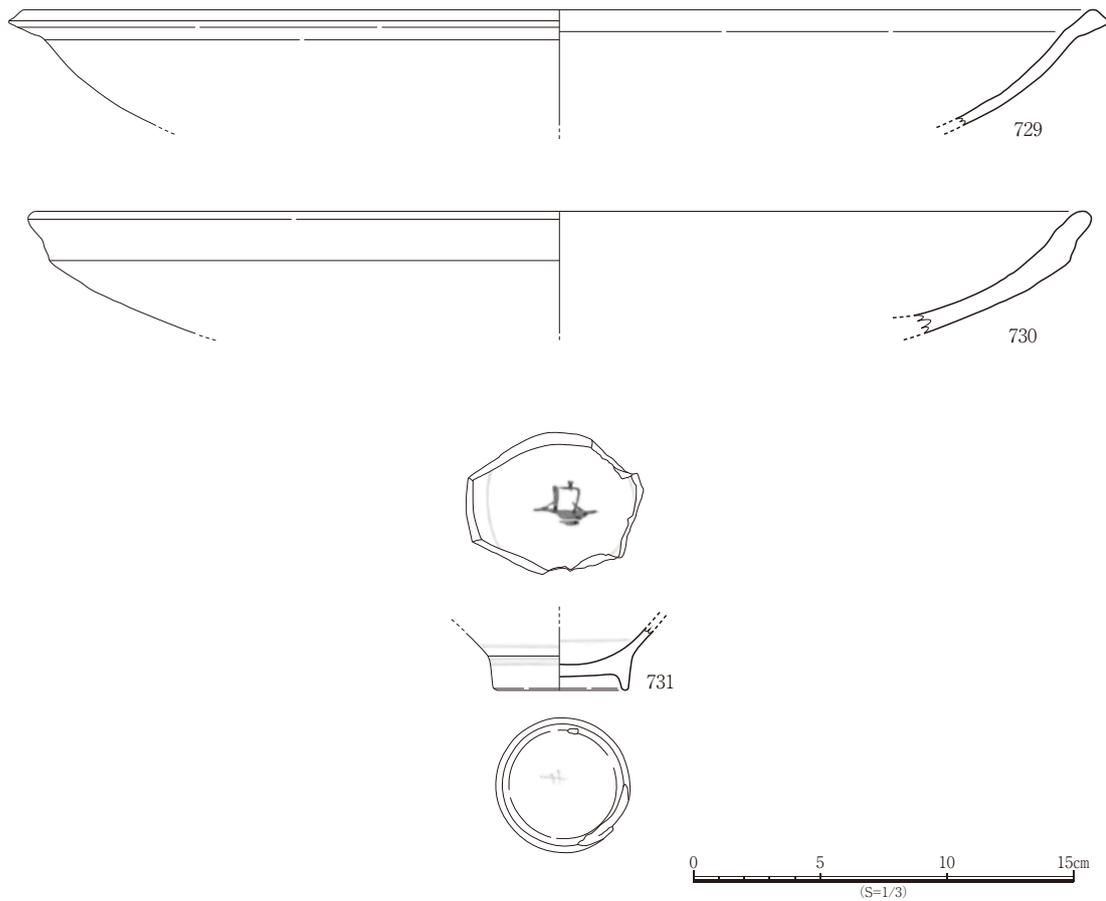


図4-23 VII区カクラン出土遺物実測図

3. VIII区の調査

(1) 調査の概要

柵列1列, 溝跡5条, 性格不明遺構3基を検出した。東縁部以外では, 地山は大振りの円礫を含むVII層で, その上面の標高も隣区同様に比較的高い位置にあり, 覆土は浅い。しかし, 東部では地山層の上に黒ボク層, その上に赤音地層があり, 後者は途切れることなく調査区東外へ続く。北側で検出した道路側溝跡上層に存在する赤音地と同様である。

一方で, 各調査区を貫く道路側溝跡でみた遺構残深は比較的浅く, 他の遺構も深いものはない。

遺構埋土は2種に大別され, 道路側溝跡とSD5は黒ボク主体で部分的に上層に赤音地層が入る。他は基本層準VI層(地山)に10cm大までの円礫を含むものである。

(2) 検出遺構と出土遺物

①柵列

SA3 (図4-24)

SD4に沿って検出された5個のピットで構成された柵列で, 長さ13.0mを測る。SD4に沿うものとするれば, 北端西方のもう1個のピットも含まれる可能性がある。各ピットは直径0.30~0.45m, 深さ16~25cm, 埋土は北端の1個のみが黒ボク主体で他は基本層準VI層に礫を含む。出土遺物は存在

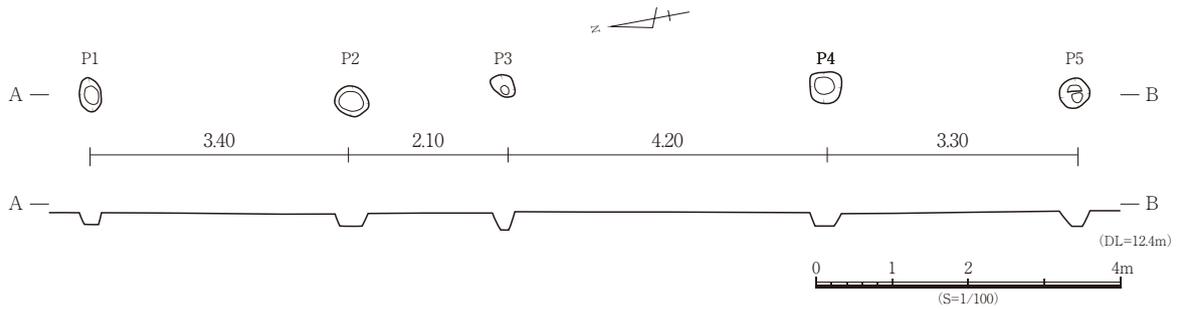


図4-24 VIII区SA3

しない。

②溝跡

SD3 (図4-25)

道路側溝跡SD1の南側に位置し、軸方位はSD1とは2°余り異なる。東壁際で幅79cm、深さ23cmを測るが、西へ向かって幅30cm台、20cm台となり、消滅する。埋土は地山VI層に礫混じりを基本としており、道路側溝跡とはやや異なる。

SD4 (図4-25)

調査区南部で検出した溝跡で、調査区内ではL字状を呈する。主軸方位は11～15°東振で、当区北部の道路側溝跡と合致する。L字型の内側にSA3が沿う。地形が東方へ向かって緩やかに傾斜する北東角に、消失部がある。幅は最大部で15.2cm、西端では幅を減じ、若干湾曲して消失する。底面は、南北溝は明確に傾斜していないが、東西溝は東へ2%の傾斜率をもち、傾斜方向は地山と一致している。埋土は地山VI層を基本とするもので、南北部分は円礫が少なめである。重なるピットにきられる。

出土遺物は須恵器甕体部片1点、古代の可能性のある土師質土器細片2点を数える。

SD5 (図4-25)

SD4の東側に平行しているが、調査区南縁で一部を検出したのみのため、不明点が多い。確認長3.4m、最大幅73cm、深さ11cm、埋土は黒ボク主体で、道路側溝跡の埋土と共通する。底面は南が低くなる点で地山の傾斜と合致している。出土遺物なし。

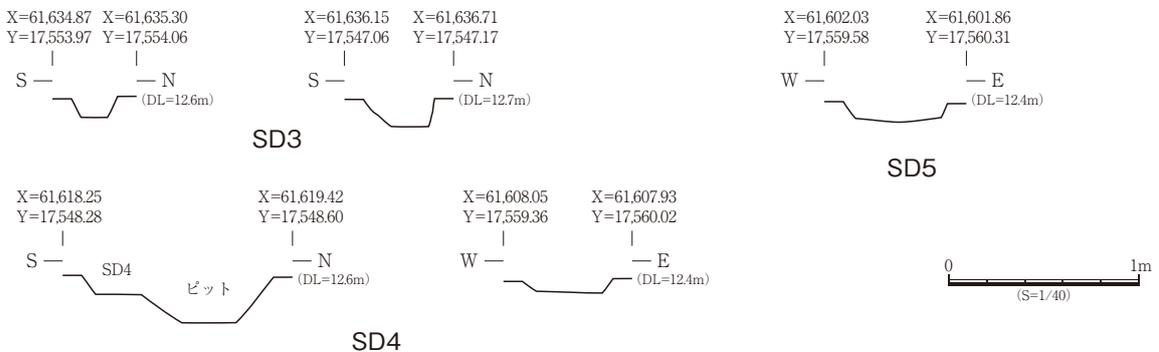


図4-25 VIII区SD3～5

3. Ⅷ区の調査 (2) 検出遺構と出土遺物

③性格不明遺構

SX1 (図4-26)

幅 1.30m, 深さ 8.5 cm で調査区北側外へのびる。南端辺は隅丸方形を呈す。埋土は地山Ⅵ層主体で円礫やや多め。遺物は土師質土器の細片5点のみ出土している。

SX2 (図4-26)

幅 1.36m, 深さ 6.8 cm で調査区北側外へのびる。平面形は不整形だが, 規模等からみて隣接するSX1と関連をもつ可能性がある。埋土もSX1同様だがやや明るい。

SX3 (図4-26)

SD4の西端にあるが, 全体的な形状がⅨ区で検出した性格不明遺構に類似しており, 植物痕等である可能性もある。

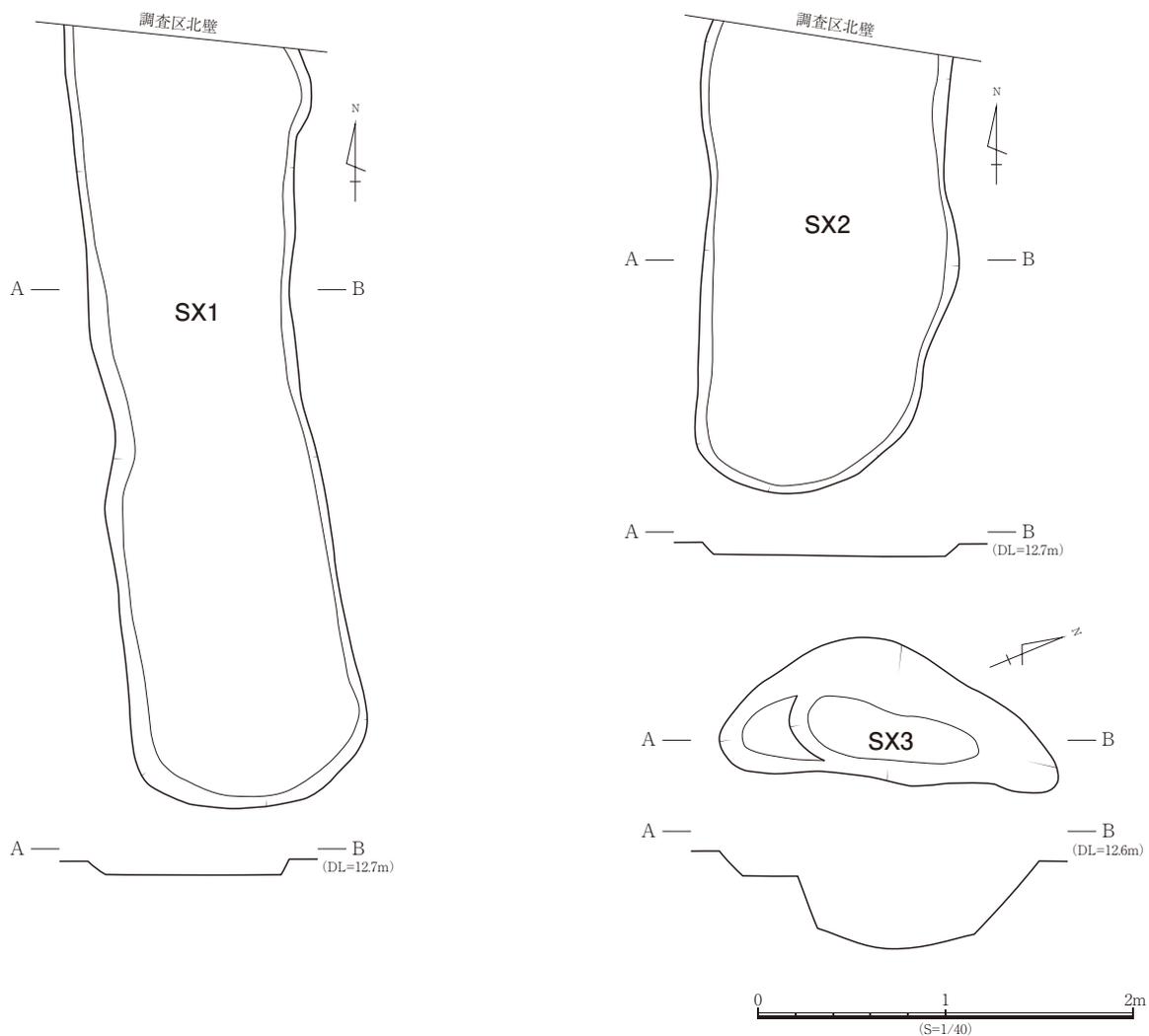


図4-26 Ⅷ区SX1~3

4. Ⅹ区の調査

(1) 調査の概要

南北に通る市道とその東辺に沿う水路(十善寺溝)より東側の調査区である。区内を東西に横断する小道の南北で検出遺構の時期や密度に大差があり、北側のⅩ-1区西部では近世以降の諸遺構が多数検出された。南側のⅩ-2区は道路遺構が横断するが、その他の遺構は近世以降を含めて疎らである。土坑34基、溝跡7条、性格不明としたもの7基、畝状遺構2条、柱穴15個を検出した。以下の文中では、出土遺物等から時期が判断できる遺構及びそのような遺構と関連する可能性のあるものを中心に記述し、その他は遺構計測表にまとめる。

基本層序をみると、西部では地山の標高が高く、大型の円礫を多含する層が露出している。東部へ向かって徐々に礫層は下降し、黒ボク層(V層)が出現して層厚を増す。V～Ⅶ層は無遺物層で、遺構はこれらの上から掘削されていた。なお、Ⅶ区以東では遺構検出面が概して南方へ緩やかに下降する中で、Ⅹ区東部のみ北側がやや低い(図4-5)。

Ⅹ-1a・b区の遺構埋土は、3種類に分かれ、Ⅰ群は黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土に若干の小礫を含み、部分的に10数cm大までの円礫を含む。基本層序Ⅱ層に似る。Ⅱ群はⅠ群に10cm大までの円礫を多く含む。Ⅲ群はⅠ群に地山ブロックを多く含み、部分的に円礫を含む。いずれも円礫は地山に多含されるものと同様である。Ⅹ-1区西部には火山灰由来とみられる土質の高密度層及び中世以前の遺物包含層は存在しない。

(2) Ⅹ-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

Ⅹ-1区

現存した小道より北側の部分である。工事用地となる前は、西部には民家があったようである。Ⅹ-1a・b区では長方形基調の土坑群が企画的に配置されている。1a区では側壁に三和土を塗った「ハンダ土坑」や、SK24といった特徴的な遺構が検出された。これらの時期は概して近世から近代で、さらに下る可能性のあるものもある。長方形土坑は平面形、規模とも類似するが、a区とb区では軸方位が異なる。検出時遺構埋土は遺構計測表7・8のごとく分類した。

Ⅹ-1e区では、検出遺構は畝状遺構群と古代の溝跡のみで、基本層序もⅩ-2区との共通性があり、Ⅹ-1a・b区とは様相を異にする。出土遺物も僅少である。

Ⅹ-1a区

Ⅹ-1区西端の小区で、西辺をコンクリート塀、水路、市道が区切る。基本層序Ⅲ層が残存する部分ではその上・下に遺構検出面があり、「上面」、「下面」とした。

上面遺構

土坑や溝跡の、明確な重複(きり合い)が認められないこと、及び「ハンダ土坑」を除いて出土遺物の時期が近世内に収まる可能性が高い点でⅩ-1b区との差異がある。

①土坑

SK22 (図4-27)

当小区北東寄りで検出した長軸0.92mの不整形で、深さ2.9cmの遺構である。埋土は当小区Ⅱ群。

SK23 (図4-27・28)

当小区中央部に位置する長軸1.68m、深さ9.6cmの浅い遺構で、陶磁器の食器や貯蔵具が一定数出

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

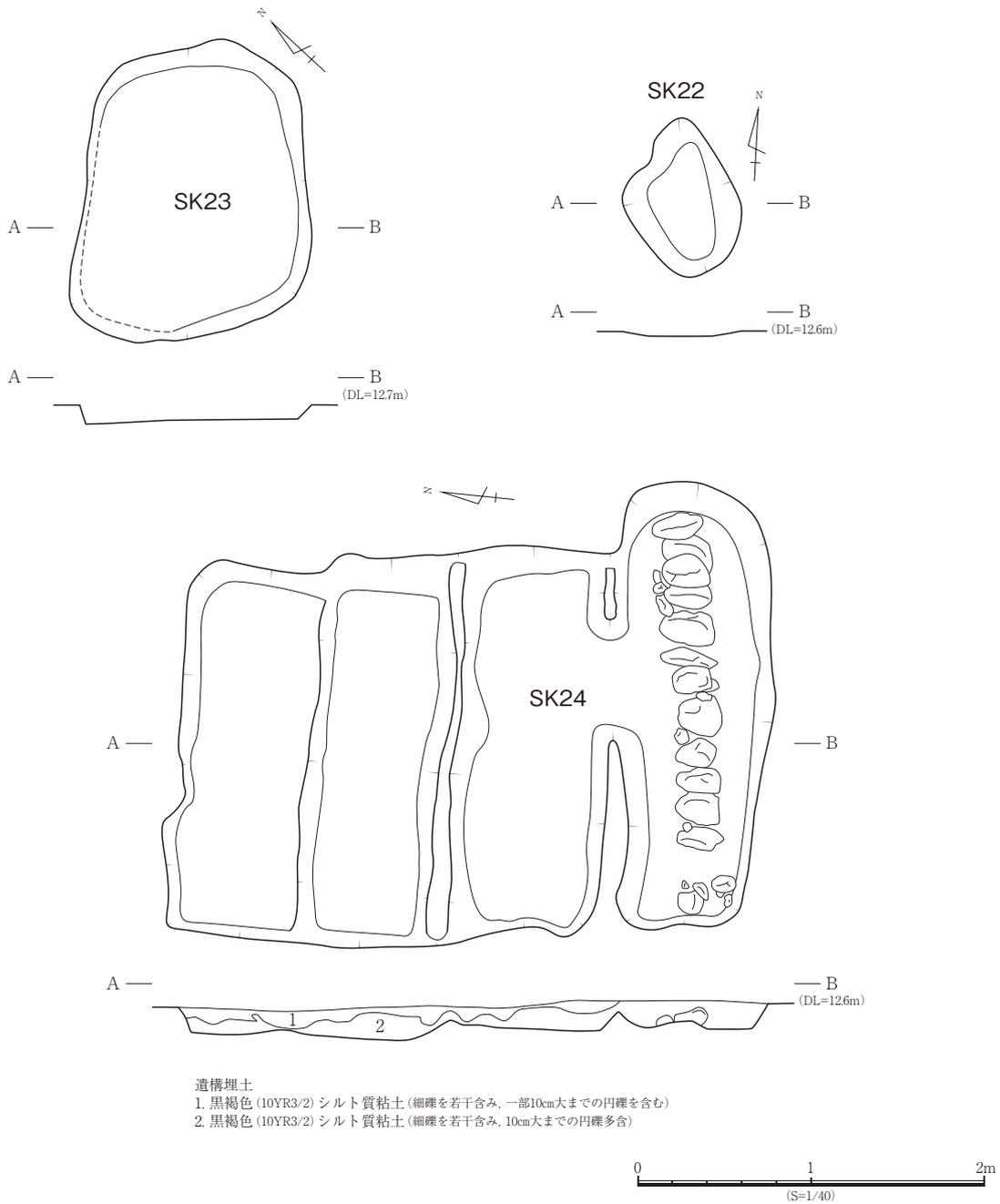


図4-27 IX-1a区SK22~24

土した。埋土は当小区Ⅱ群。732~734は染付碗で、732は高台内に「茶」銘があり、素地はやや黄味がかかる。

SK24 (図4-27)

長方形が4基連続したプランで捉えた。平面規模は3.42×2.60m、深さ21.7cm、南端は東西にやや長く、人頭大の河原石が並ぶ。埋土は上層が当小区Ⅰ群、下層はⅡ群。

SK25 (図4-29)

長軸1.66m、深さ33.2cmで埋土はSK24の下層と共通するⅡ群。SK26・27よりやや規模が小さい。

SK26・27 (図4-29)

2基が直列する。長軸は各々1.83m, 1.52m, 深さ24.7cm, 30.8cmで埋土は当小区Ⅲ群。形状, 規模ともⅨ-1b区の同種の遺構群に類するが, 軸方位は同区と異なる。

SK28 (図4-29・32)

当区東辺で一部を検出し, 方形が重なったプランを呈する。検出全長3.91m, 深さ16cm余, 埋土はⅢ群。西辺の形状から, 複数回掘削されたものである可能性がある。平瓦736は小口面に刻印がある。

SK30～32 (図4-30・32)

いわゆる「ハンダ土坑」で, SD10に沿って, 3基が近接して南北に並ぶ。南端は調査区外である。規模は各々高田遺跡遺構計測表5のとおりである。構造は外側に灰黄褐色粘土を入れ, 10数cm前後の円礫を内面に貼ったのち, ハンダを10数cmの厚さで塗っている。SK30のハンダは石灰岩とみられる数mm大の粒を含む。3基はきり合わず, 図4-30のごとく接していた。SK31は他の2基より小さく, 北部をコンクリート基礎で破壊されていた。

これらの内部は, 下層には約20cmまでの河原石が多く, 上層はSK31・32では小さめの円礫を若干含み, SK30は10cm強の円礫を多含する。SK30下層は近世～近代陶磁器や瓦, ガラス瓶等で充填されており, コンテナ数箱に及んだ。SK30・31からは鉄製品や砥石が出土しており, Ⅺ区の同種遺構との関連性が認められる。半分が調査区内にあったSK32からは, 遺物が出土していない。

SK30出土の軒丸瓦737は瓦当面に2種の刻印。同じく土師質土器焜炉738は焚口脇に刻印銘, 「三河焼」とみられる。高さ・奥行きとも19cm余で, 粘土板を組合わせて作成する。外面の側面・上面は極めて平滑に仕上げられており, ミガキによるものか。胎土には金雲母を多含する。

②溝跡

SD10 (図4-31)

当区西部を, 北西斜方向へ逸れていく溝跡で, 確認長12.9m, 東辺に20～30cm大の円礫が並ぶ。大部分が30数cm大までの円礫とその間の暗褐色粘質土で埋まっている。軸方位は9°西振。北部で東辺が広がるが, 埋土で分けることはできなかった。底面の軸方向の傾斜は認められない。型紙摺の染

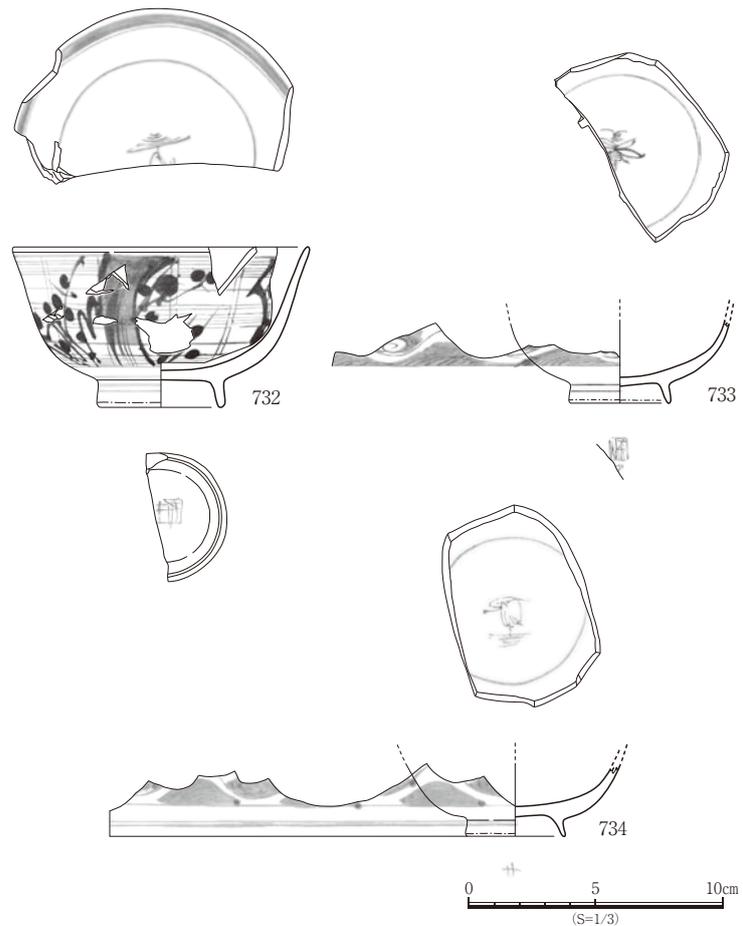


図4-28 Ⅸ-1a区SK23出土遺物実測図

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

付等の土器・陶磁器や、古代前期の須恵器長頸壺が出土している。735は窯道具で、高さ13cm、固く焼き締まる。端部を全て打ち欠いている。当遺構の側壁近くから出土した。

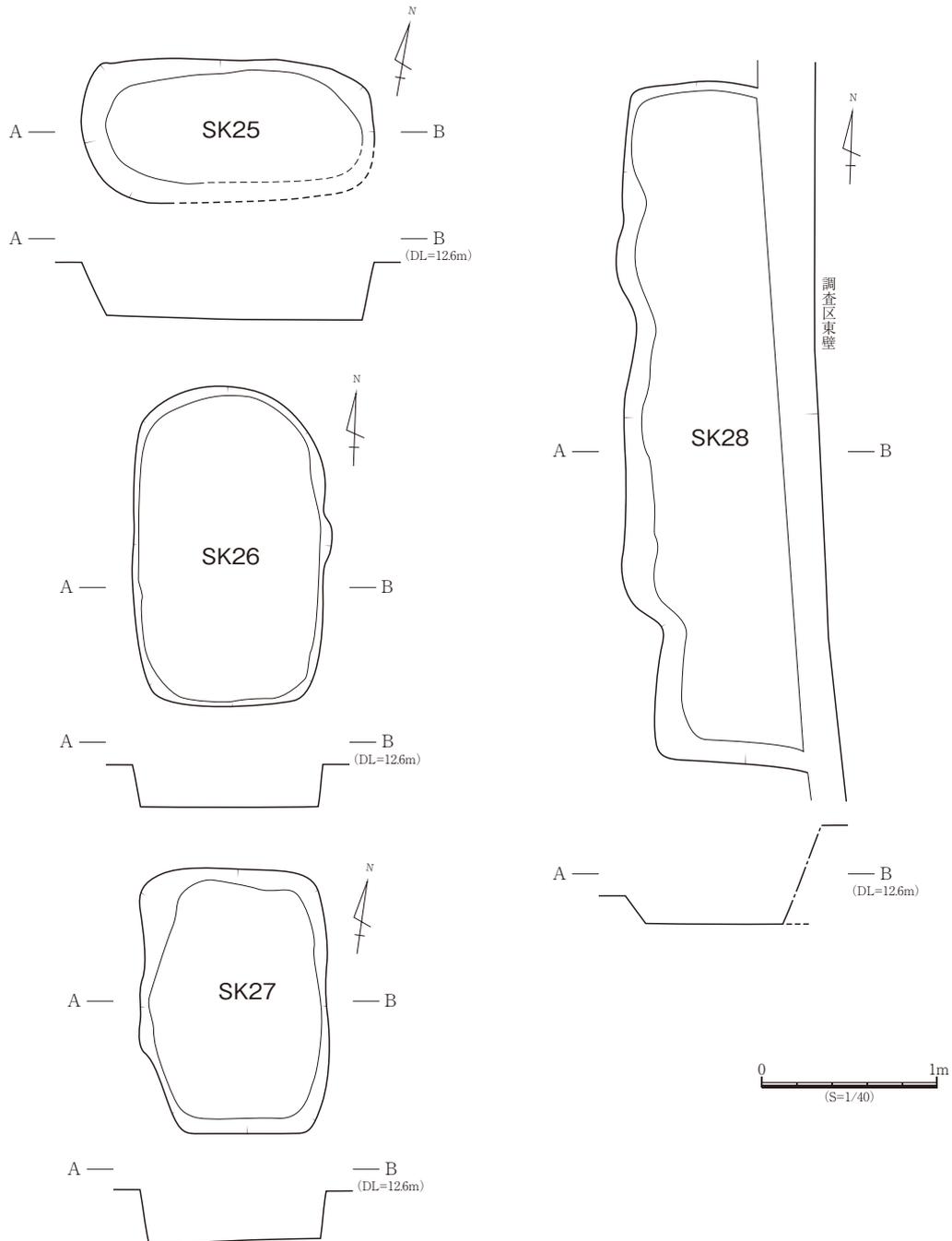


図4-29 IX-1a区SK25~28

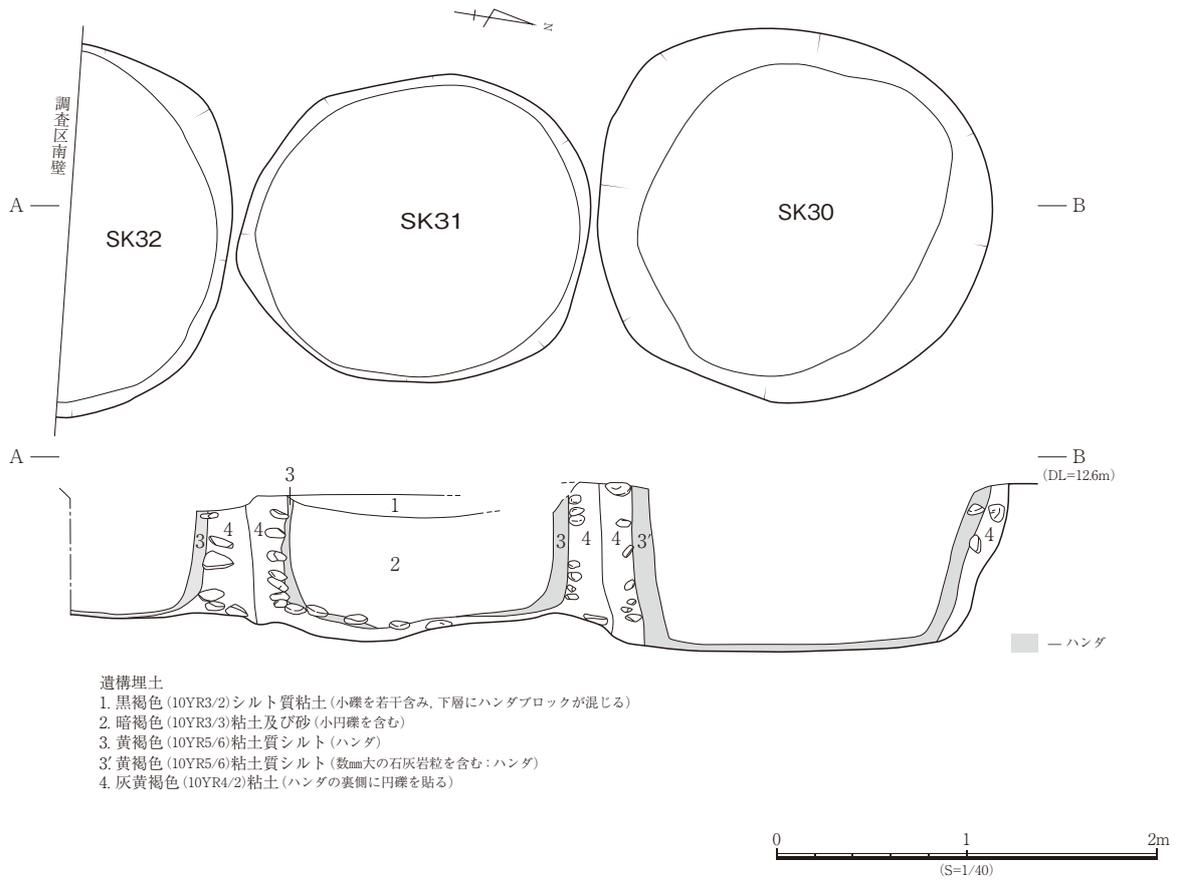


図4-30 IX-1a区SK30～32

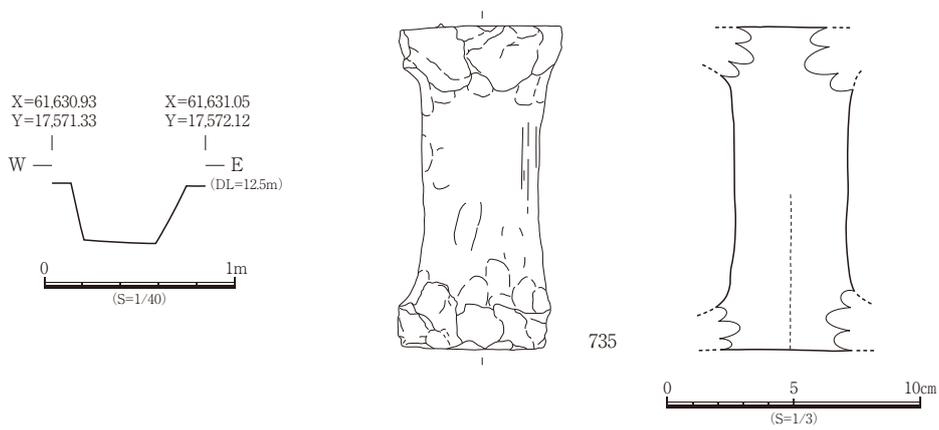


図4-31 IX-1a区SD10エレベーション図及び出土遺物実測図

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の遺構と遺物

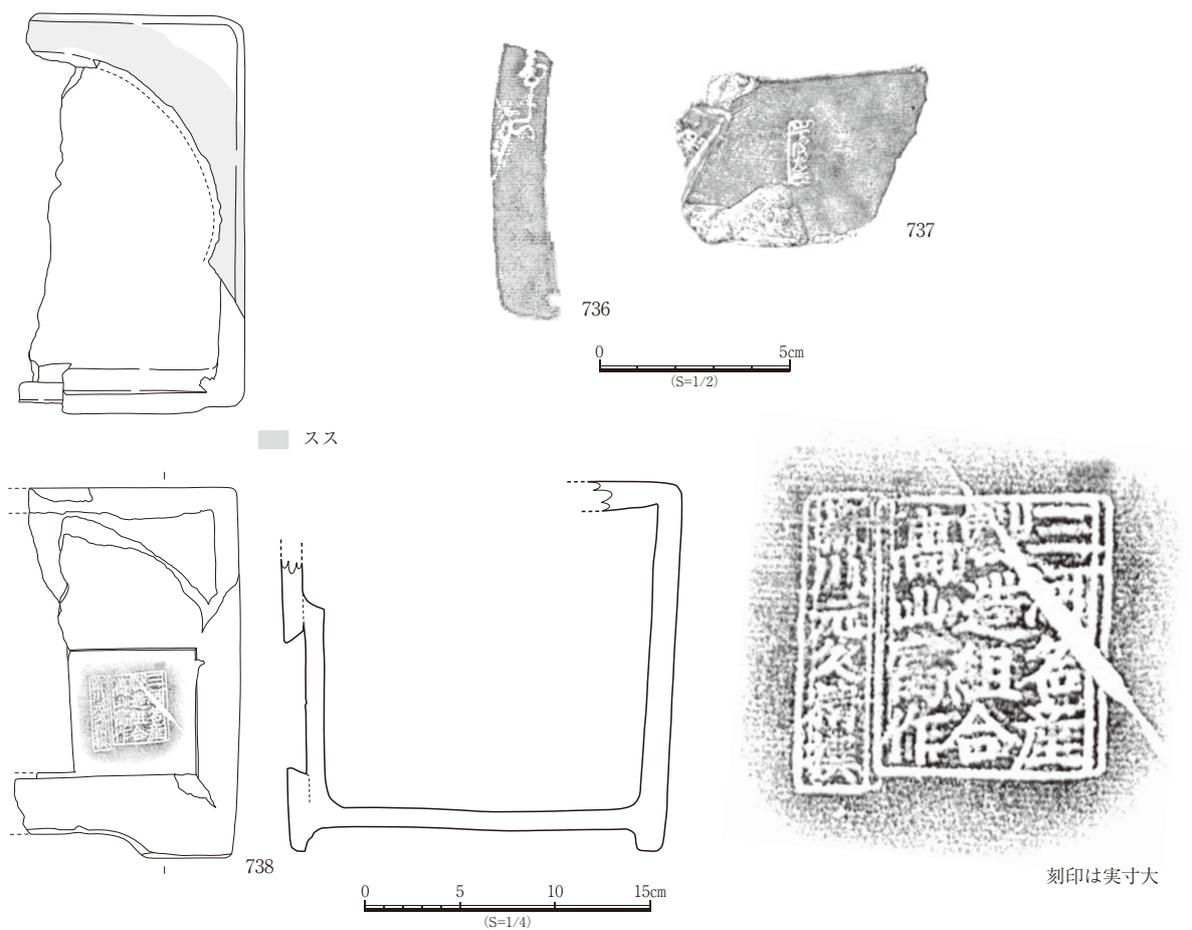


図4-32 IX-1a区SK28・30出土遺物実測図

下面遺構

最大厚8.5cmのⅢ層下で現れた遺構検出面で、37個のピットと、土坑、溝跡等を検出した。当区西縁のⅢ層が残存しない部分では1度目の検出時に下面遺構も検出されたが、埋土によって上面遺構と区別することができる。ピット群は、隣接する他区のものに比べて平面、深さともにしっかりした規模のものが目立つ。

①土坑

SK50 (図4-33)

当区中央部で検出し、長軸2.14mを測る。P15他、重なる全てのピットにきられる。埋土はピット群と共通する黒褐色粘土質シルトに黒ボクや地山土を含むものだが、やや暗めである。下層は黒ボクが多く、20数cm大までの円礫を多含する。床面上10cmの位置で不明鉄片が出土した。

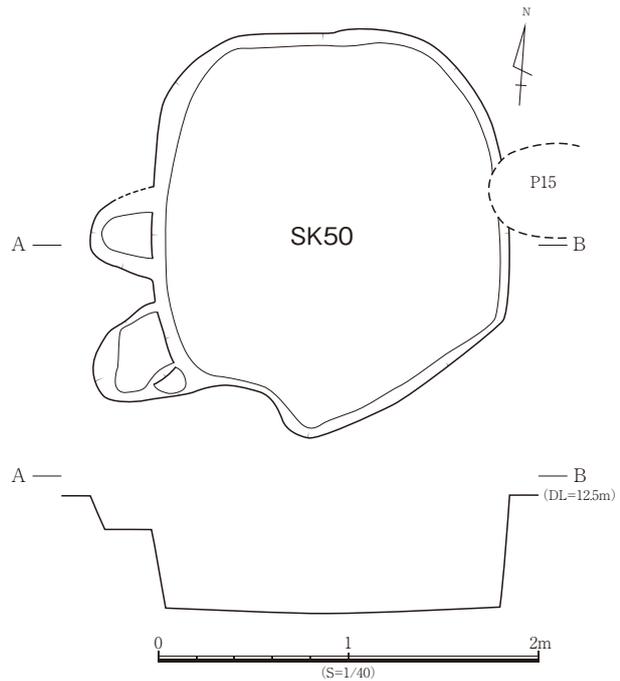


図4-33 IX-1a区SK50

②溝跡

SD1 (図4-34)

各区を横断する道路側溝跡のうち、北側の溝跡である。埋土は黒ボク主体。SK31, SD10にきられる。幅24~61cm, 深さ6.3~21.4cm, 当小区での検出長は5.5mを測る。

SD11 (図4-34)

SD10, SK24, ピットといった重なる遺構全てにきられる。埋土は黒褐色土で黒ボクに由来するとみられ、直交の位置関係にある道路側溝跡SD1と同じである。幅36~53cm, 深さ9~17.5cm, 検出長は9.0mを測る。

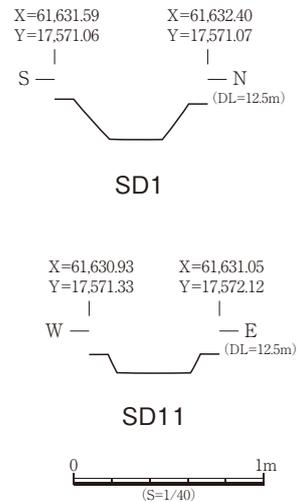


図4-34 IX-1a区SD1・11

③柱穴(図4-35)

下面検出遺構の主体を占める。総じて埋土には共通性があり、火山灰土に由来するとみられる黒褐色粘土質シルトに黒ボク、地山(10数cm大までの円礫を含む)を基本に、各遺構でその比率や混合状態が異なるのみで、上面の近世以降の遺構群とは異なる。平面形は楕円形等である。出土遺物は僅少で、無遺物のものが多い。規模は長軸0.60m, 深さ55cmから、長軸1.00m, 深さ87cmのものまでがある。

これらは建物等を構成していた可能性が高く、掘立柱構造物跡が確認できない「上面」遺構群や、IX-1b区と対照的である。具体的な組合せは、後続遺構による破壊や調査範囲の限界により、決定することが難しいため、図4-35では想定可能な列線を示した。

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

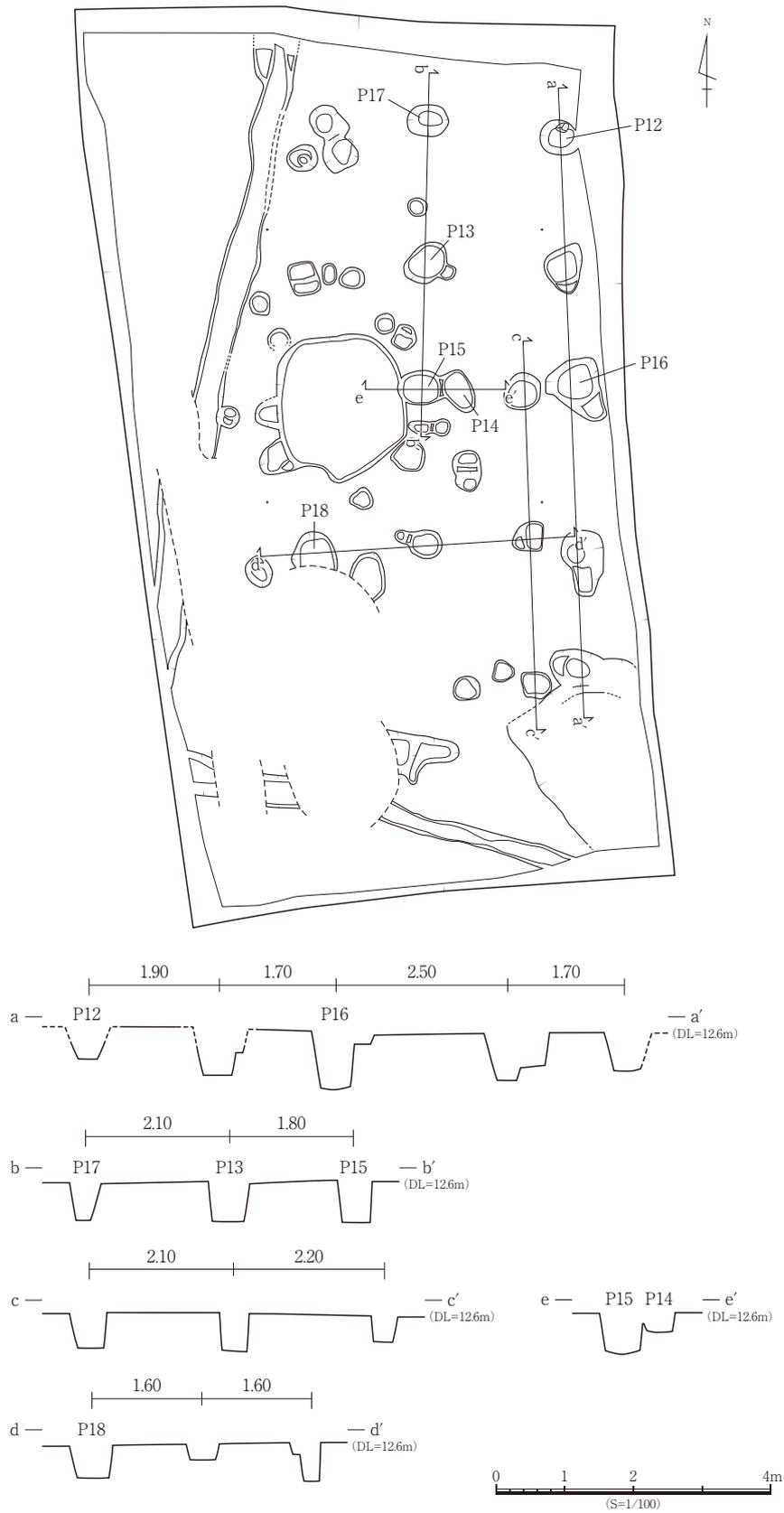


図4-35 IX-1a区ピットエレベーション図

④性格不明遺構

SX12 (図4-36)

当区南東隅で一部を検出した大型遺構で、全形は不明だが方形を呈し、北辺に接するピットは別遺構の可能性はある。検出長は2.75m、埋土上層は黒ボク由来土を基本とし、同下層は30cm台までの円礫や砂利が主体である。遺物は直上で染付片1点が出土したのみである。2回目の検出時に検出した遺構だが、他の下面遺構との時期的関係については不確定さが残る。

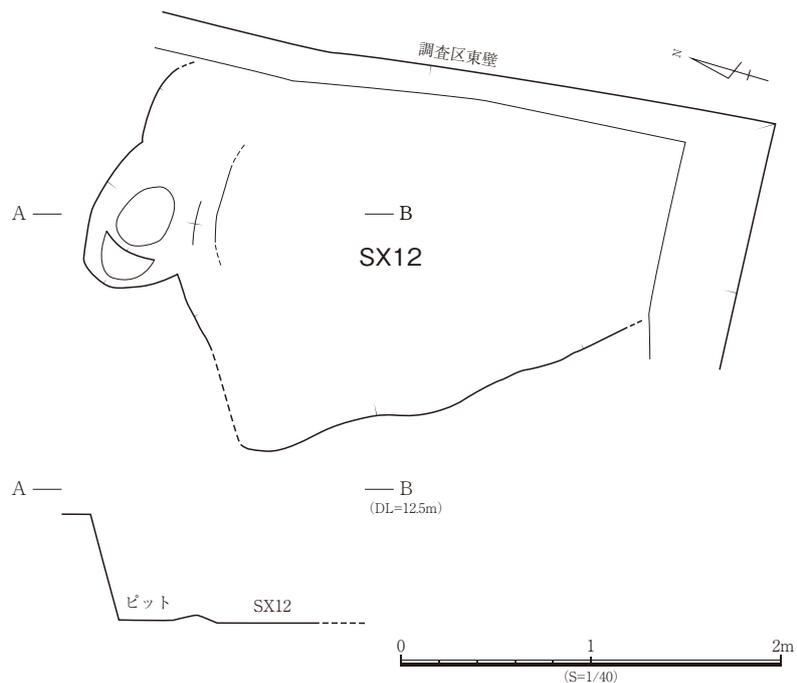


図4-36 IX-1a区SX12

IX-1b区

SK1・2・4～18の17基の土坑が検出された。基本層序はIX-1a区と大きな相違はないが、遺構検出面は1面であった。

①土坑(図4-37・38)

17基の土坑群は、長方形プランのものをはじめとして形態や規模が近似しており、軸方位の一致や位置関係からは、構築に際する企画性が看取される。時期は出土遺物からみて、近世に収まるものから明らかに近代以降に下るものまでである。長方形プランの土坑は、同様のものがIX-1a区にも存在するが、軸方位を異にする。

SK8・9・16～18は出土遺物からみて近世に属する可能性がある。長軸1.78～1.80mの長方形基調プランで規模も近似する。底面の標高はいずれも12m前後で、最も深いSK18の深さは50cm余を測る。

各遺構の時期については、高田遺跡遺構計測表5・6のごとく磁器の絵付け技法、ガラス製品や針金、ビニール類の存在が指標となる。きり合いで他遺構をきるSK1からはビニールや針金、SK2からは転写手法の染付、SK11からはガラス製品、SK15からは三和土・漆喰が、いずれも破片や断片が中心であるが出土している。量はまちまちではあるが、瓦が出土した遺構が多い。

遺構埋土は高田遺跡遺構計測表5・6のごとく分かれたが、I群とII群は円礫の量や粒度が異なるのみで基本となる土質は共通しており、その円礫も地山に多含されるものと区別できないものである。出土遺物からみても、両群の遺構に明確な時期差は指摘できない。

SK2は当小区中央部にある。長さ2.87mで、上層に炭製品の残滓状のもの、中層に植木鉢や瓦、煉瓦があり、完掘時の深さは107cmに及んだ。

SK9・10は当小区南縁にある。遺構の縁辺付近には20数cmの円礫が配された状況で、SK10では内部に石が並んでいた。

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

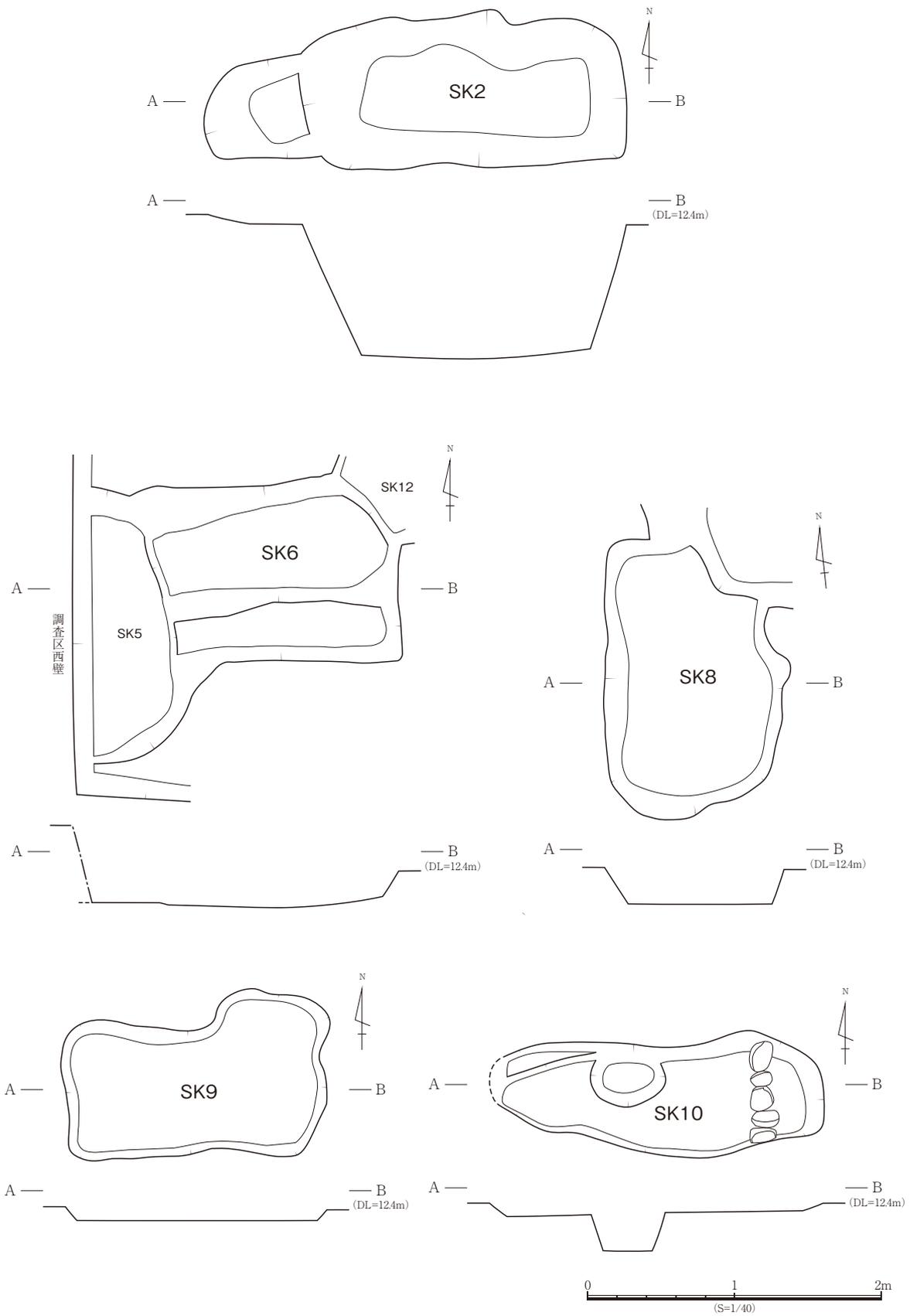


図4-37 IX-1b区SK2・6・8~10

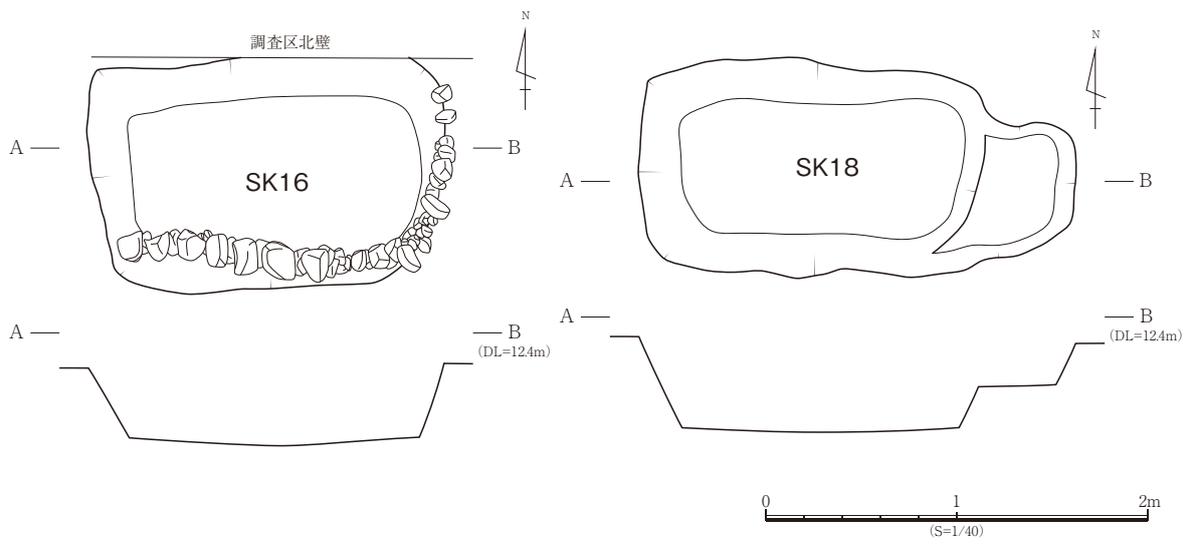


図4-38 IX-1b区SK16・18

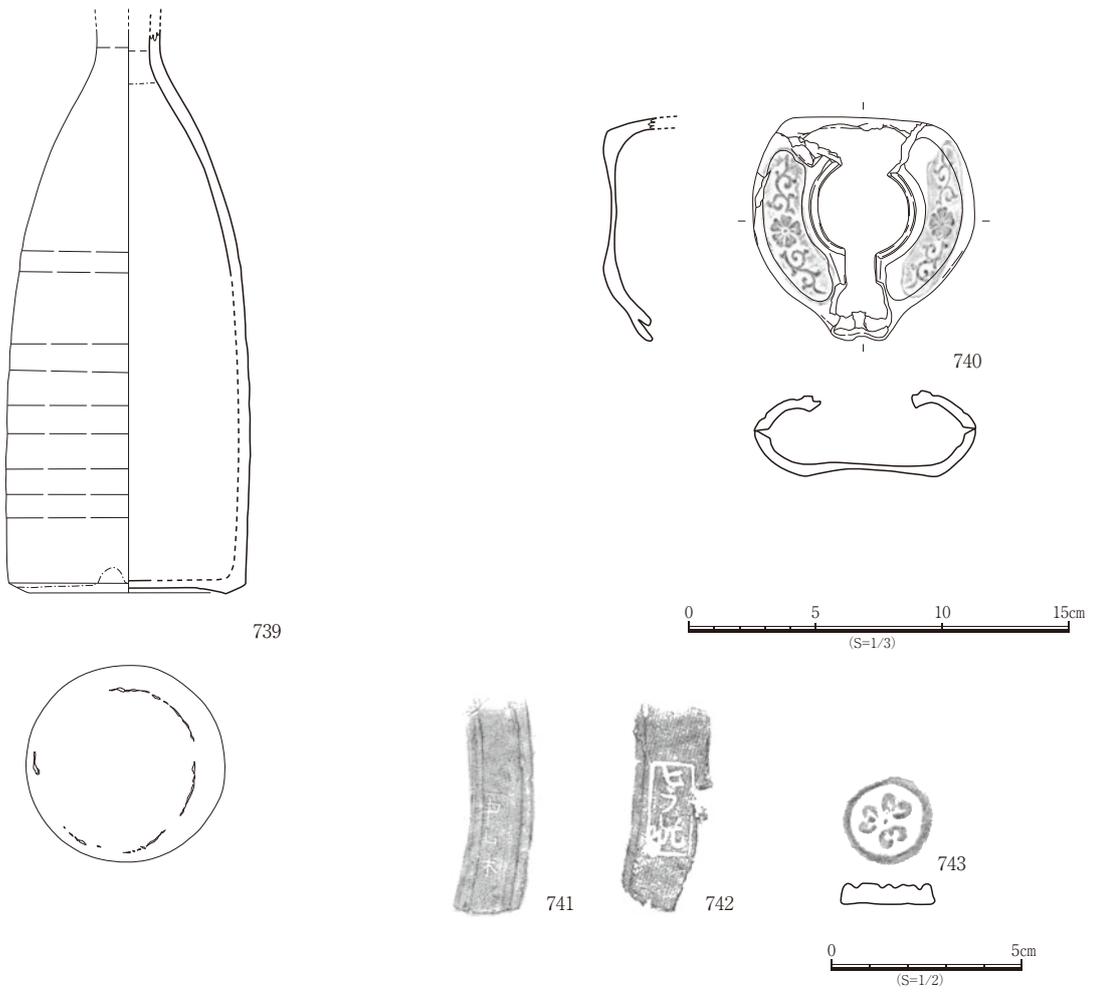


図4-39 IX-1b区SK5・11・12出土遺物実測図

4. IX区の調査 (2) IX-1区各小調査区の検出遺構と出土遺物

SK5・6・12は当小区南西隅にある。順にきり重なっており、SK6は長さ1.72m以上、SK12は1.57mを測る。きり合いで最も古いSK12では瓦、河原石と共に近世後期とみられる陶磁器や泥面子が出土した。SK16は調査区北壁際で、長さ1.87m、側壁に10～20cm大の円礫を積んでいる。

出土遺物 (図4-39)

詳細は高田遺跡遺構計測表5・6にまとめた。一定数の遺物が出土したSK5出土の陶器瓶739は内外に施釉、外底は回転ケズリで露胎、窯道具痕あり。外面下端に漬掛け時の指痕が2箇所残る。乗燭740は型作りの上下を合わせる手法で、文様も型に刻まれている。全面に薄い釉を施す。底部は全く摩耗していない。芯受口は被熱し、煤けている。

SK11出土の瓦には、小口面に刻印が認められる。SK12からは泥面子743が出土している。

IX-1c区

調査前まで宅地であった。土坑3基、ピット5個を高田遺跡遺構計測表6のごとく検出したが、遺構からの出土遺物は皆無である。遺構埋土は基本的にIX-1a・b区同様である。

遺構外出土遺物も僅少であった。検出面で硯1点が出土した。

IX-1d区

遺構は検出されなかった。土層確認トレンチは図4-3のとおりで、耕作土下に、他区と共通する地山層が現れる。

IX-1e区

IX区東部にあり、検出遺構や堆積土層はIX-2区東との関連が強い。検出遺構はSD7と、深さ数cmの溝状遺構群である。地山は上層は黒ボク、下層はVI層で、いずれも火山灰土主体である。地山及び遺構の上には、赤音地或いはそれが黒ボクと互層をなす土層が、全面ではないが存在する。上位の覆土は黒褐色で、これら地山土が攪乱され、土壌化したものとみられる。

①溝跡

SD7 (図4-40)

IX-2区から続く遺構で、埋土や基本層序との先後関係は同区と同様で、黒ボク地山層をきり、赤音地と黒ボクの互層に覆われる(図4-3)。東壁際にあるため東肩部はほとんど当小区外である。南端部では10数cm大の円礫があった。

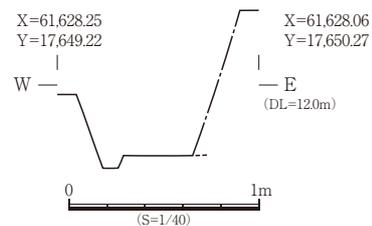


図4-40 IX-1e区SD7

②畝状遺構

SU1 (付図2)

浅い溝状の遺構群で、SU1cを西方へ延長するとa～fは大差ない間隔で並んでいる。aとbは延長すれば同軸上にある。

SU1cは間断部も含めて8.00m、幅30cm、深さ7cmを測る。方位は11°東振で道路側溝跡とは一致しない。離れているが、方位はVIII区SD3と一致する。cとbの間隔は1.72m、aとdは3.32m、dとeは1.50m、eとfは1.42mを測る。d、e、fの軸方位はc等と異なるが、検出長が短い。

埋土は高密な黒ボク主体で混入物は少なく、他区にある近世以降の遺構とは異なり、道路側溝跡等との共通性がある。遺物は出土していない。Ⅸ－2区東に同種の遺構(SU2)がある。

(3)Ⅸ－2区の調査

道路側溝跡が横断し、東縁ではSD7も検出された。当区を東西に分割する畦道より西側の区画では、遺構検出面が同東側区画より70cm程度高く、20cm大までの円礫を多含する地山が遺構の基盤層となっている。北部には近世以降の遺構が検出され、北側のⅨ－1区へのつながりがうかがえる。畦道より東では、西部の基盤面が次第に下降するとともに上位に黒ボク層が現れ、遺構の基盤層となる。東部では、古代以外と判断できる遺構はみられなかった。道路側溝跡の幅や深さが他区との比較において最大であることから、Ⅶ区以東で最も削平が少ない区域であったと考えられるが、道路関連遺構以外の遺構は少なく、建物跡や柱穴跡は検出されなかった。

基本層序

図4-4は当調査区南壁の土層断面図である。表土であった耕作土は調査前に相当搬出されており、Ⅲ層が露出している部分が多かった。Ⅲ層は基本的に黒褐色できめ細かい粒子からなり、下位に存在する火山灰高密土の土壤化が進んだものとみられる。Ⅳ'層は赤音地(Ⅶ区ではⅣ層)と黒ボクが薄い互層をなし、Ⅴ層は黒ボクに赤音地を含む土層で、両者が混在するという点では共通する。

V層は黒ボク層で、若干小礫を含む箇所もあるが概して高密度で純粹にみえる。Ⅵ層も、第Ⅵ章で分析されたように火山灰に由来する。Ⅴ層よりもやや明るく、小円礫を少量含む。30cm大までの円礫を多量に含むⅦ層面は、西部では遺構検出面となるほどに上昇しているが、東へ向かって下降する。Ⅴ層以下は遺物を含まない地山である。検出遺構はⅤ層をきって構築されていることが各所の土層断面から判断できたが、古代の遺構埋土は、赤音地が目立つ部分以外は高密な黒ボクが主体でⅤ層に酷似しており、Ⅴ層上面での検出が困難であった。

なお、図4-5のように東壁南部セクションにおいて、SD7上を基本層準Ⅴ層と見分けられない黒ボクの薄い層が覆っているが、この黒ボク層を南へ辿るとⅤ層に接していることから、層序としてはⅤ層ではなく、Ⅴ'層等が遷移したものとみられる。

(4)Ⅸ－2区の検出遺構と出土遺物

①土坑

SK19 (図4-41)

当区北縁にある。幅2.25mでSD6に接する部分が括れる。調査区北側外へ続く。ビー玉やビニール片が出土した。

SK53 (図4-41)

当区北西隅に位置し、長軸0.94mの隅丸多角形或は不整円形を呈する。深さ20.6cm、埋土は隣接する道路側溝跡SD1と共通する黒ボクを基本に、褐灰色粘土を含む。遺物は出土していない。

②溝跡

SD6 (図4-42)

調査区北側へのびるL字型プランを呈し、床面は西方へ向かって上昇して消滅する。幅0.44～0.79

4. IX区の調査 (4) IX-2区の検出遺構と出土遺物

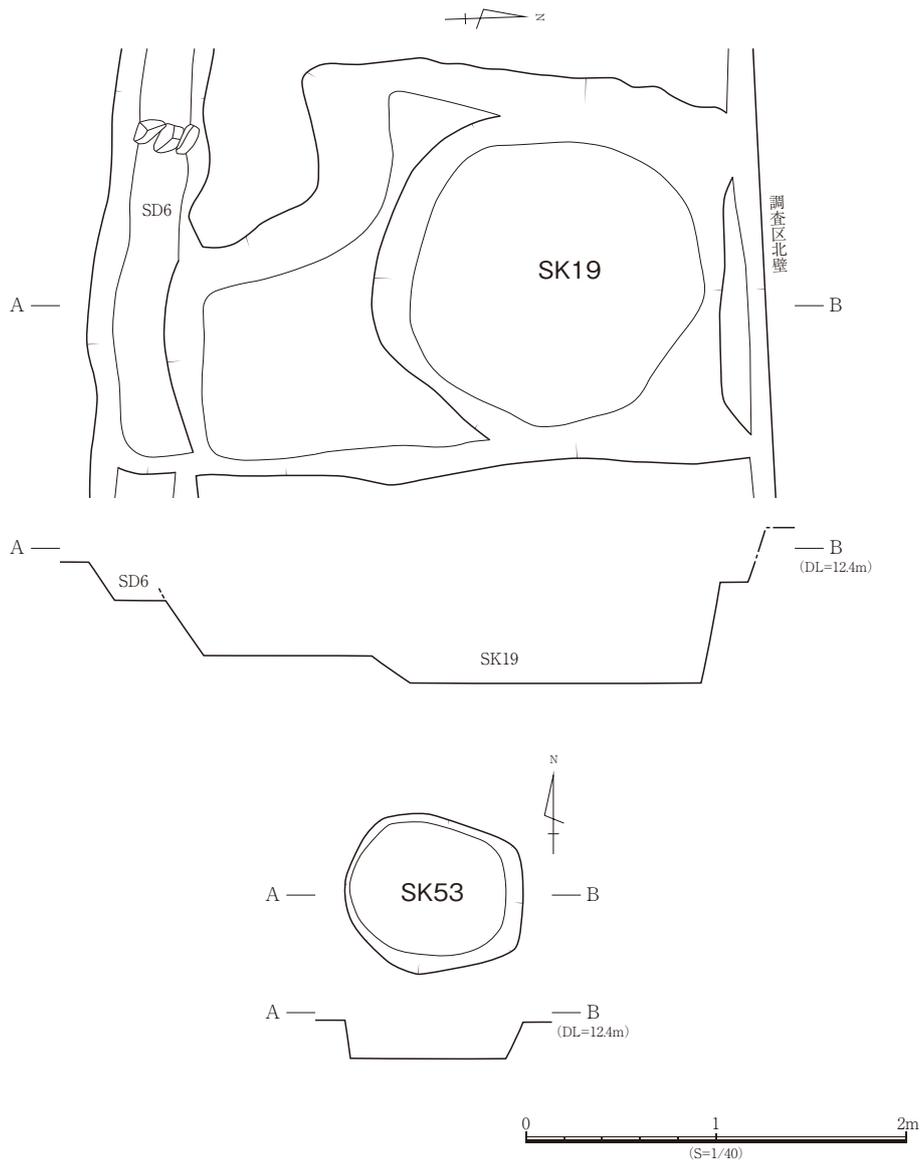


図4-41 IX-2区SK19・53

m, 埋土はいずれも黒褐色～褐色が混ざるシルト質粘土で下層は粘性を増す。SK19と同一ではないが類似性がある。SK19とのきり合いは不明であった。SK19と接する部分に礫や段差がある。底面は東へ2.9%、北へ5.5%の傾斜で下降する。SD1をきる。遺物は高田遺跡遺構計測表7の通り近世以降の陶磁器片の他、須恵器甕片3点が出土した。

SD7 (図4-42)

当区東縁で検出した南北溝跡で、大きな弧を描くが、IX-1・2両区に亘って33mを検出した。道路側溝跡2条のいずれにもきられるが、埋土はそれらに酷似する。埋土断面の観察から掘り直しが想定され、IX-1e区南壁では1期目は幅0.43m・深さ20cm以上の断面箱形、2期目は底面が上がって幅0.64m・深さ16cmの断面船底状を呈する。赤音地の高密度層が第2期の最上層のみに堆積する点は道路側溝跡と共通する。

第2期の底に炭粒や黒色粒を含む層があり、炭粒について第VI章のごとく分析を実施した。基本層

序との関係は、黒ボクのV層をきり、黒ボクと赤音地が混ざるIV'やV'層に覆われていた。

全体で底面の明らかな傾斜方向は指摘できない。底面には、直径15cm前後、深さ3～8cmの窪みが多数検出された。両側に沿って2列に並んでおり、掘削痕の可能性はある。遺物は出土していない。

③畝状遺構

SU2 (付図2)

IX-1e区のスU1と同種の遺構とみられ、3条のうち北端のスU2 aは最大幅0.48m、深さ23cm、確認長2.8mを測る。同bとの主軸心々間距離は1.70mで、スU1のb-c間と一致、a-d間の2分の1に近似する。方位は6°東振で、道路側溝跡と一致しない。埋土はスU1同様に高密度な黒ボク主体で混入物は少なく、他区にある近世以降の遺構とは異なり、道路側溝跡等との共通性がある。遺物は出土していない。

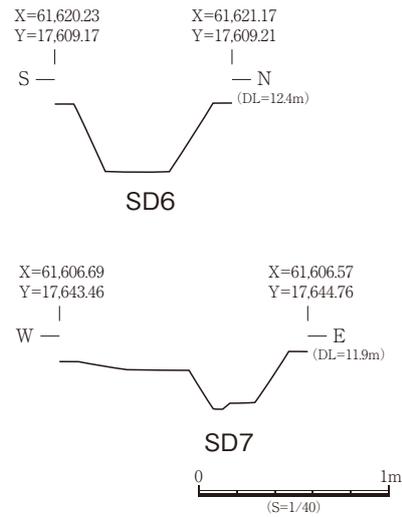


図4-42 IX-2区SD6・7

④性格不明遺構

SX4・5 (図4-43)

当区西端に位置する。全形からみて、方形等の3基の遺構が重複している可能性があるが、大きく攪乱を受け、且つ残存部分の埋土の差異も指摘できないため、不明である。方形とみられるSX5は2.2×2.4mで深さ11.2cm、SX4部分は深さ24.5cmを測る。

遺物は僅かだが須恵器片等があり、確実に古代を下るものは出土していない。埋土はいずれも黒褐色～褐色が混ざるシルト質粘土で下層は粘性を増す。当区及びIX-1区で検出された近世以降の遺構群とは異なって、暗色で粘性があり、黒ボク質がより強い。

SX6～8

当区内に散在する。長軸0.66～1.36m、深さ約31～90cmだが、いずれも平面・断面形状および埋土からみて人為性の不明確さがあり、植物痕等の可能性がある。確実な出土遺物はない。埋土は基本的に、黒ボク10YR2/2～7.5YR3/2前後。下層ないし壁際はやや茶色寄りの明るい(10YR 3/3前後)火山灰由来土である。礫や炭化物は微量または含まない(地山に含まれる数～20cmの円礫は含む場合あり)。なお、東方450mで調査された宇賀遺跡で類似した落込みが検出されている(高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡報告書)。

SX9 (図4-43)

当区北部に位置する。複雑な平面形を呈するが、きり合いの有無等は不明であった。全長3.2mで中央部へ段差をもって深くなり、最深部は深さ約30cm。埋土は黒褐色と暗褐色が混ざる火山灰性土に地山の円礫を含む。遺物は出土していない。

4. IX区の調査 (4) IX-2区の検出遺構と出土遺物

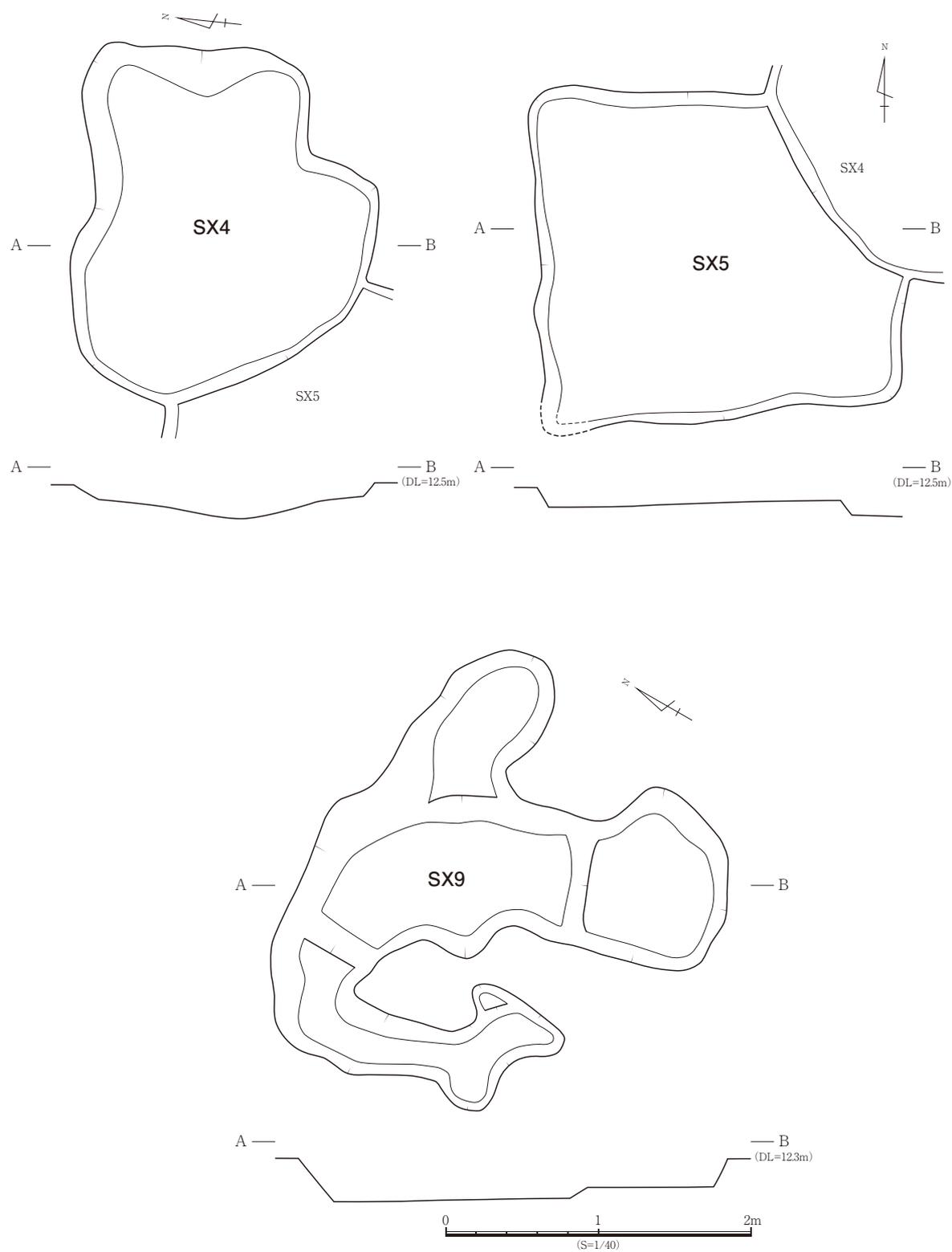


図4-43 IX-2区SX4・5・9

5.X区の調査

(1) 調査の概要と基本層序

道路側溝跡と、南北溝跡SD8の他土坑としたもの2基、溝跡1条、性格不明遺構1基を検出した。

地山は大振りの円礫を多含するⅦ層で、東方へ上昇する。それに伴い、Ⅴ層は消滅する。東部では、表土層直下が遺構検出面であり、地山Ⅶ層であった。SD8等の遺構の残深は深くない。一方で、道路側溝跡の当区における深さは20～37cmで、Ⅶ～Ⅹ区西に比べて深い。

(2) 検出遺構と出土遺物

①土坑

SK20・21 (図4-44)

当区西縁の道路側溝跡脇で検出した不整形・円形の遺構で、埋土は黒ボクに小円礫を含む。SK21は赤音地を認める。長軸は各0.84m・0.43mで深さは21.0cmと9.6cmを測る。遺物は出土していない。

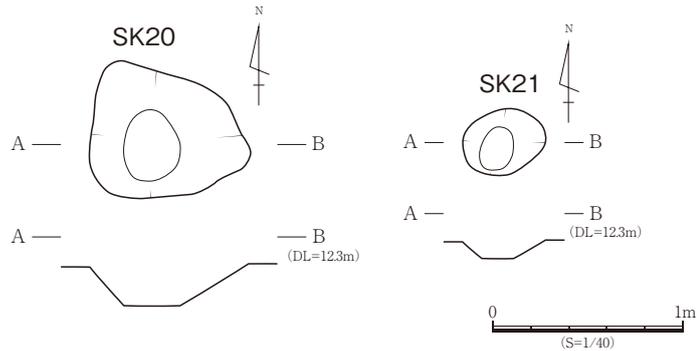


図4-44 X区SK20・21

②溝跡

SD8 (図4-45・46)

当区南を南北に縦断する。3つに分断されるが、残深からみて削平による可能性があり、且つ蛇行するが、計26.8mを検出した。軸方位は真北方向にほぼ一致し、幅38cm、深さ11cm。地山面が東から西へ下降する、その傾斜が強まる肩部にSD8は沿う。底面の標高は南端付近が北端付近より15cm低く、傾斜率は0.6%である。埋土は地山と同質の火山灰土や円礫からなり、北・中部は黒ボクに基本層序Ⅶ層を含み、南部は黒ボクに10cm大までの円礫を含む。道路側溝跡SD2と接するが、きり合いを決定し得なかった。

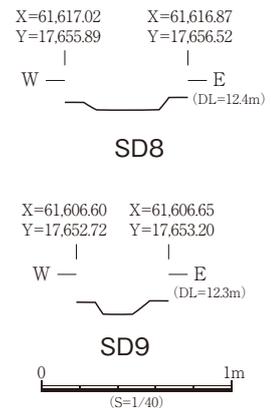


図4-45 X区SD8・9

土師質土器釜744は、時期のわかる出土遺物中で最も時期が下る播磨系土釜で、体部内面に板ナデ状の痕が僅かに残る。遺構内外ともに出土遺物が僅少な中、道路側溝跡SD1に最近接する部分の検出面で、744を含む酸化焼成の土器片が数点検出された(写真図版92)。

SD9 (図4-45)

当区の西縁近くで検出した南北方向の溝状遺構で、長さ1.47m、幅28cm、深さ7.2cmを測る。埋土は黒ボクの土壌化が進んだとみられるものに小礫を多く含む。遺物は出土していない。

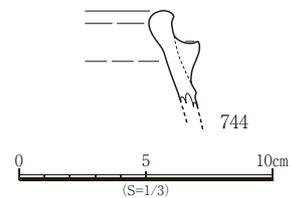


図4-46 X区SD8出土遺物実測図

③性格不明遺構

SX10

北側の小区のⅦ層上面で検出した。平面形不整で長軸2.15m, 深さ8.7cm, 遺物は出土していない。人為性は不明確である。

6. XI区の調査

(1) 調査の概要と基本層序

土坑としたもの15基, 溝跡1条, 性格不明遺構1基, ピット23個を検出した。「ハンダ土坑」以外の土坑等は比較的浅く, 出土遺物は僅少だが現代遺物片が出土したものがあつた。ピット群では播鉢1点が出土したのみである。これらは高田遺跡遺構計測表7・8・11にまとめた。遺構埋土は暗褐色や黒褐色で小礫・大礫を含み, 黒ボクや赤音地はみられない。検出時遺構埋土は計測表のごとく分類した。

基本層序では, 火山灰土に中～大礫を含む地山Ⅵ・Ⅶ層の上面が遺構検出面であるが, その標高は図4-6のごとく隣接するX区の中央部よりも35cm程度高く, I区までの全調査区中最高位にある。遺物包含層は安定的に存在しなかつた。当区では, 耕作土の上に厚さ1mに及ぶ現代盛土があり, 調査前まで自動車整備場が営まれていた。

なお, 当区の南部約1/3の区画については厚さ10cm前後の表土層の直下で地山が現れ, 遺構・遺物は皆無, 他調査区の覆土と関連する土層はみられなかつた。この区画の地山面標高は既述した北側区画の地山面に比べて25～30cm低く, 削平されている可能性がある。

(2) 検出遺構と出土遺物

①土坑

ハンダ土坑

北西部で8基が近接して検出された。断ち割り断面でもきり合いは1箇所認められるのみで, 少なくとも時期差は小さく, 各々の形状と規模, 位置関係, ハンダの土質から, 一定セット関係をもって構築され, 機能した可能性がある。石積みとハンダを用いた構築法は基本的に共通するが, ハンダの詳細な土質や, 平面形, 規模には差異を指摘できる。深さは浅・深の2種がある。軸方位は, SK38・SK46を除くと数°～10°東振する。出土遺物の時期は近世後期が中心だが, それ以降に下る可能性を含むものもある。

なお, 当区では平面隅丸方形のものが多い点はIX-1a区と異なる。

SK36・37 (図4-47・49)

平面形は隅丸方形で, 内面の法量はSK36が1.42×1.46m・深さ約64cm, SK37が1.33×1.39m・深さ約71cmを測る。内底面の標高はほぼ等しい。ハンダ土は石灰の小塊を含むが, 色調が他遺構よりやや橙色寄りである(写真図版94)。埋土はA群に属するもので, 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに5cm大までの円礫を多含, SK37の下層はそれにハンダ土を多含する。SK37は石積みをもたない。

出土したかわらけ746は薄手で, 体部ヨコナゲ時に内底周縁部を凹ませる。底部切り離しは糸切りで, 水簸した胎土をもつ。747は陶器瓶, 749は染付碗蓋。750は二彩手の陶器鉢, 播鉢751は内面が摩耗している。内面の底から出土した753, 754は和鋏, 鎌か。

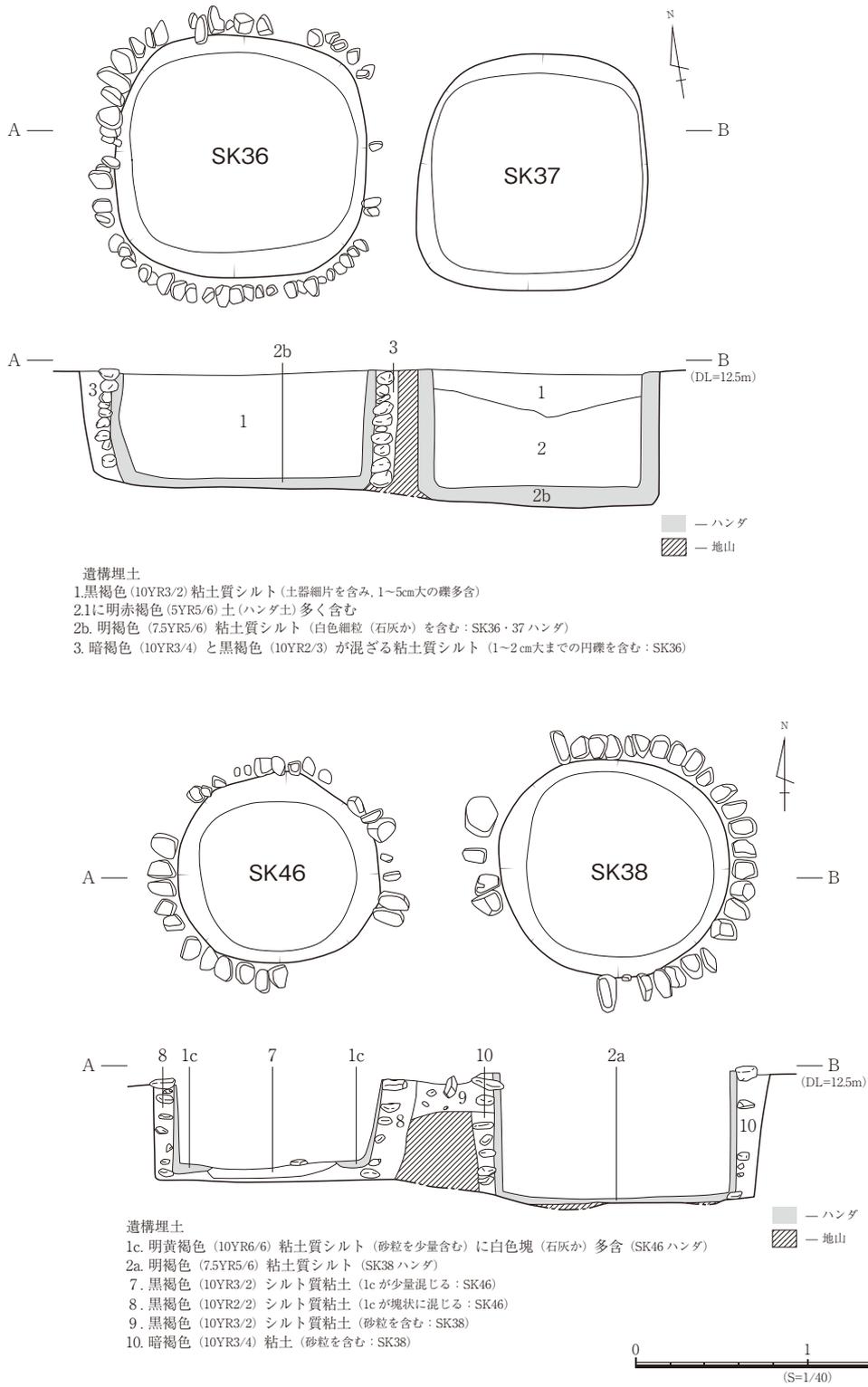


図4-47 XI区SK36~38・46

6. XI区の調査 (2) 検出遺構と出土遺物

SK38・46 (図4-47・49)

当区の同種遺構では少ない円形基調の2基で、内径の長径は各1.33m・1.17m, 深さ74.5cm・52.2cm, 平面積, 深さともにSK38が大きい。いずれも掘形内に10数cmまでの円礫を積み上げた後, ハンダを塗る。検出時埋土は黒褐色粘土質シルトに5cm大までの円礫を多く含むA群であった。SK46のハンダ土には石灰の小塊を含むが, SK38では含まない。両者が並んだ軸線の方位は他の同種グループ

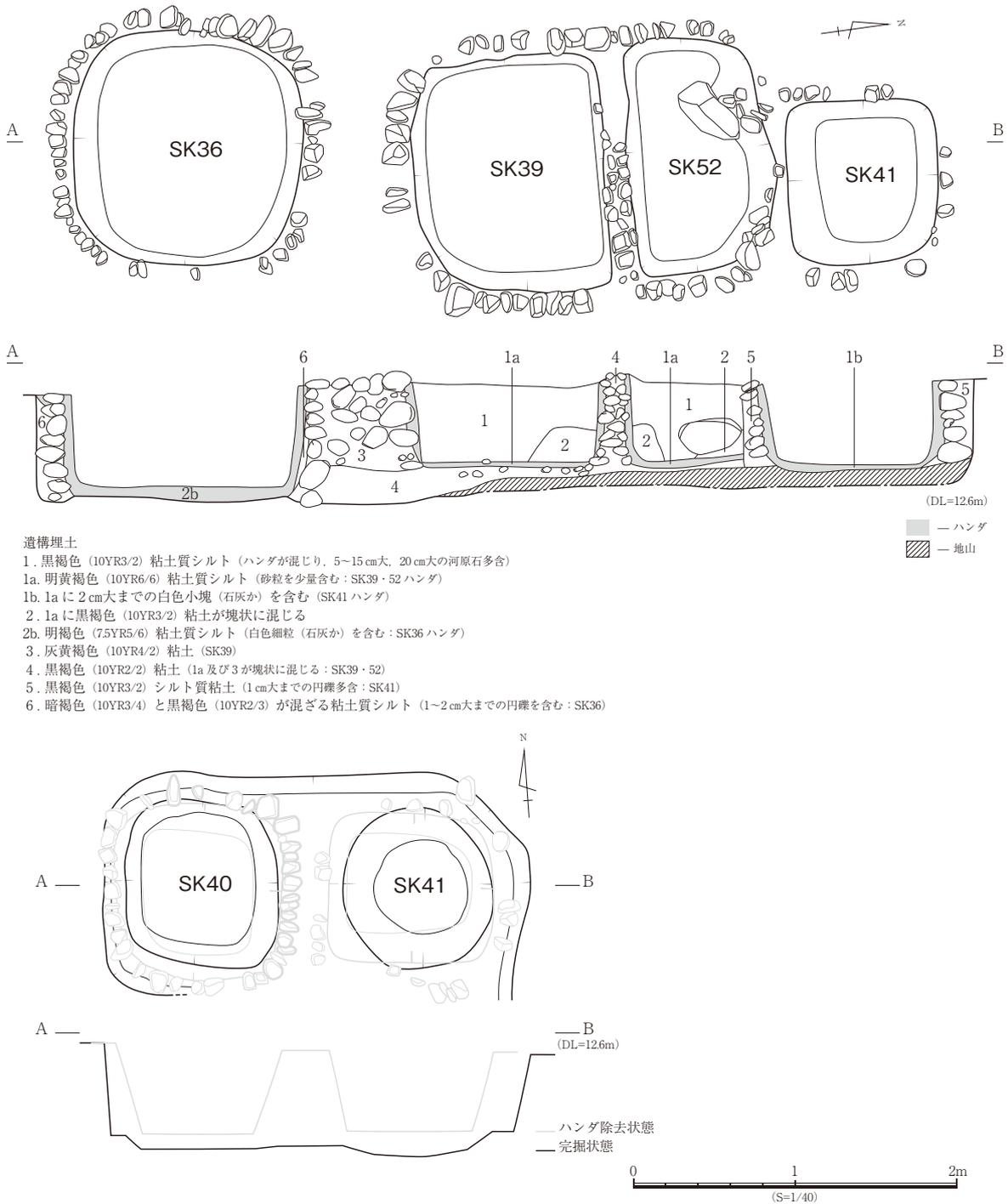


図4-48 XI区SK36・39~41・52

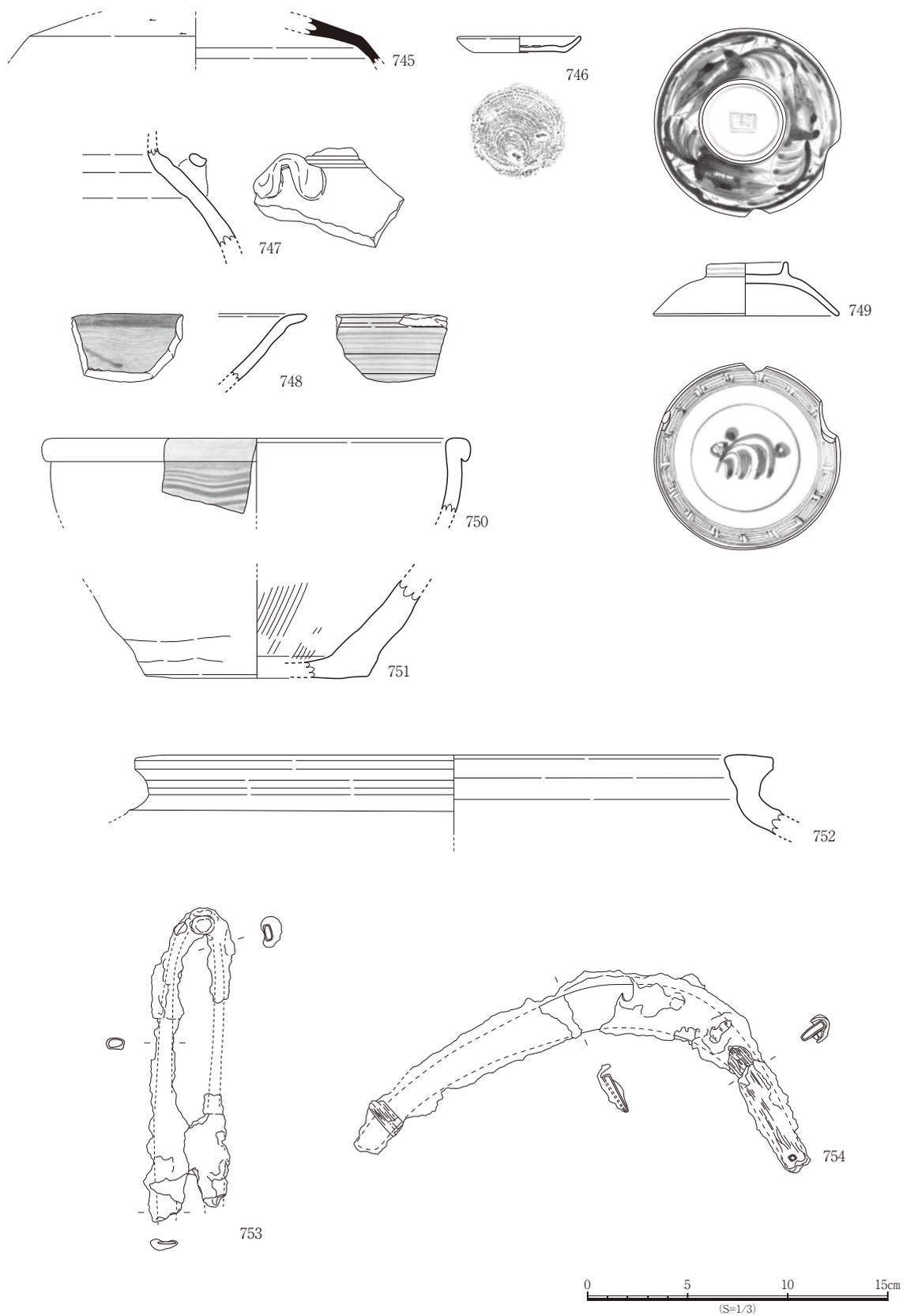


図4-49 XI区SK36・37・46・47・52出土遺物実測図

6. XI区の調査 (2) 検出遺構と出土遺物

と異なり、座標系軸に一致する。

SK46 から出土した焼締の水瓶 752 は、口縁外径 31.5 cm に復元される。口縁上端面に 3 条の弱い凹線を施す。

SK39・52 (図 4 - 48・49)

検出状況および構造から、内部を仕切った単一遺構とみられる。その場合は長軸 2.24m を測るが、北辺の一部は SK41 にきられている。深さ 54.4 ~ 55.4 cm で内底面の標高は揃っており、南に接する SK36 とは異なる。肩部を囲んで円礫を並べており、掘形内も 30 数 cm までの円礫を充填している。掘形の床面は SK36 へ向かって掘り窪められている。ハンダ土には石灰の小塊を含まない。内部は 20 cm 大までの円礫を多含し、壁際の底には崩れたハンダが混じる。SK52 の内部には長さ 52 cm の石が落ち込んでいた。

SK52 から出土した須恵器 745 は外面回転ケズリ後一部にナデ、内面はナデで内外面とも丁寧、色調は青灰色。古代前期以前のもので、杯蓋の可能性はある。

SK40・41 (図 4 - 48)

ハンダ土坑群の北端で東西に並んでおり、平面形と床面標高は揃っているが、平面規模が異なる。長軸は各 1.10m・1.02m、深さ 54.3cm・52.8cm、埋土は多量の円礫と暗褐色粘土質シルトで、上層のみハンダを含む当区 A 群。SK41 が SK52 をきる。内底面の標高は SK52 まで含めて揃っている。ハンダ土には石灰の小塊を含む。

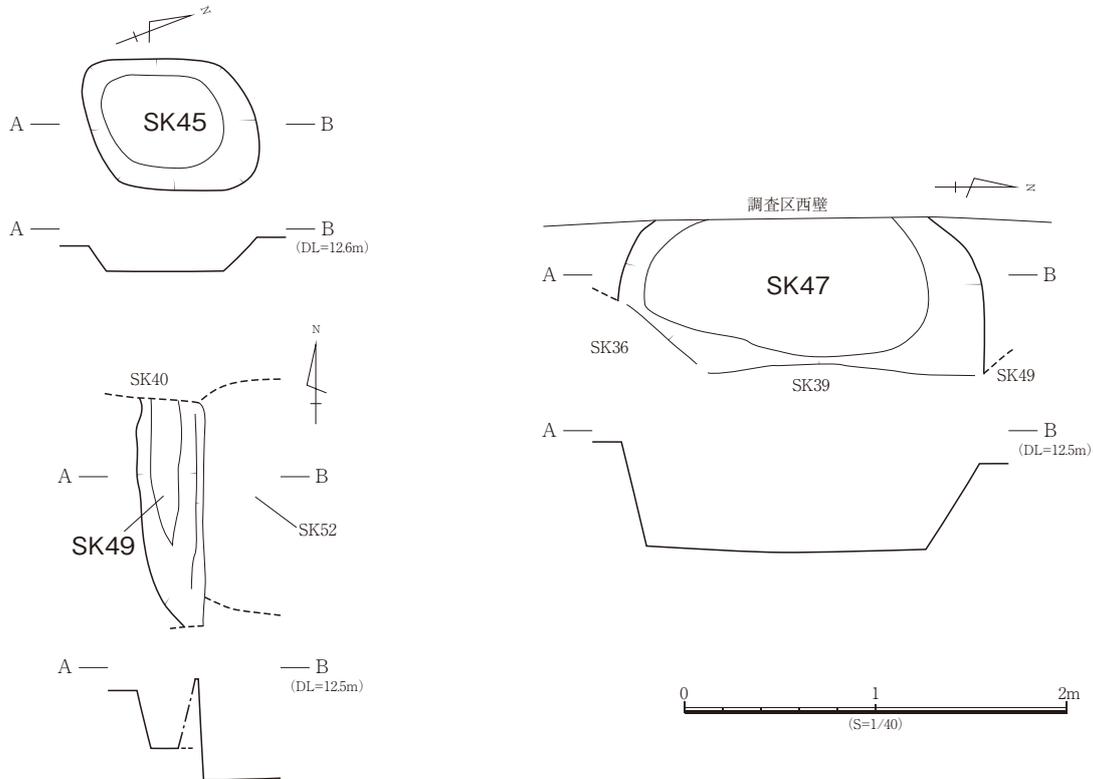


図 4 - 50 XI区SK45・47・49

②その他の土坑

SK45 (図4-50)

北部の攪乱際にある。隅丸方形で長軸0.88m, 深さ18.2cm, 須恵器甕片1点が出土した。

SK47 (図4-49・50)

SK36・39によって大きくきられ, 残存部長軸1.90m, 深さ58.7cm, 埋土は上層暗灰黄色, 下層黒褐色粘土質シルトである。748は二彩手の陶器鉢で, 錆釉, 白化粧土刷毛目, 緑釉を施す。肥前産とみられる。

SK49 (図4-50)

埋土に黒ボクを含む点が近世以降の遺構群と異なる。遺存部は長軸1.11mを測るが, SK40・52によって大きくきられた可能性がある。

③溝跡

SD12 (図4-51)

当区の中ほどで3m余を検出した東西溝跡で, 方位は座標系軸に対して8°東振, 幅46cm, 深さ10.6cmを測る。当区西外側へ続く。高田遺跡遺構計測表8のごとく近世とみられる陶磁器が出土している。

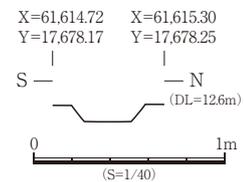


図4-51 XI区SD12

④性格不明遺構

SX13

調査区南西端で一部を検出し, 全形は不明である。深さ32cmで, 幅は横断面で見れば85cm程度の可能性がある。埋土は黒ボクに10数cm大までの円礫を含むもので, 遺物は出土していない。

⑤Ⅸ～Ⅺ区遺構外出土遺物(図4-52)

中世以前の遺物は残存度の低いものが多い。755は弥生土器で貼付口縁の端面に凹線。756は須恵器杯で胎土良好。757は須恵器壺で口縁端部をつまみ出すように成形, 胎土良好。須恵器甕758は頸部の復元直径30数cmとみられる。759は甕の体部片で内外面に調整痕を残す。760は土師質土器皿で口径8.0cm, 糸切り痕は粗い。761は土師質土器椀で高台は外側へ押しながら圧着し, 内側に蛇ノ目状の帯が残る。高台高は4.1mmと低い。内面見込み部のミガキは平行基調, 体部は斜方向。全体に平滑に仕上げる。外面もミガキとみられる。外底中心に糸切り痕が認められる。精土。762は土師質土器の柱状高台で, 粘土を螺旋状に捻って作り, 内部に螺旋状の剥離や胎土の回旋がみられる。763は土師質土器椀で内面ミガキ, 外底糸切り後ナデか。764は須恵器甕の体部片である。外面は細めのタタキ痕が認められ, 内面にはナデ調整が施される。

6. XI区の調査 (2) 検出遺構と出土遺物

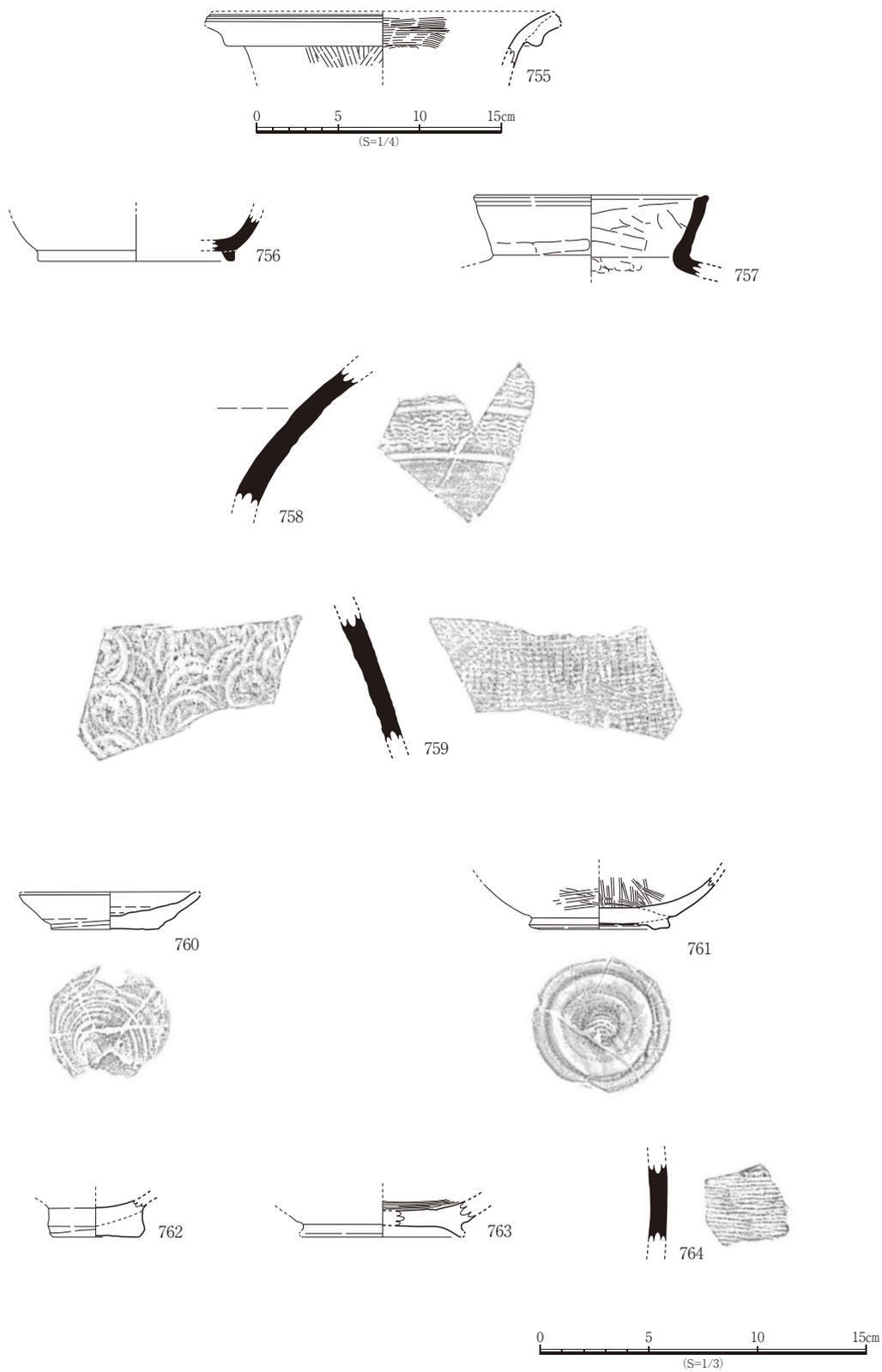


図4-52 IX～XI区包含層出土遺物実測図

7. 道路側溝跡等の調査

(1) 遺構と関連土層について

Ⅶ区からⅩ区まで検出された直線的で平行な2条の溝跡SD1・2は、道路側溝跡と判断した。以下、側溝と呼称する。総検出長は168m、2条の中軸間距離は高田遺跡遺構計測表12のとおりで、平均10.33mである。方位は真北に直行する東西軸からみて、2条とも時計回りに13.8°である。以上から、かなり正確な直線と道幅を実現しているといえる。

道路の硬化面や補修痕は検出されなかった。側溝について、幅や深さ、埋土、接する基本層序の状態からみて、残存状態が最良と考えられるⅨ-2区東部の土層観察バンク及び東壁セクションで見ると、2条とも掘り直しが想定され、第1期はSD1が幅72cm、深さ22cm以上の断面箱型ないし船底型、SD2は幅58～62cm、深さ17～27cm以上の断面箱型ないし船底型を呈する(図4-53・54)。

第2期はSD1が幅96cm、深さ33cm、SD2は北側即ち路面側の傾斜が緩くなり、幅180～210cm、深さ27cm以上となる。埋土はSD2と東壁でみたSD1は原則同様で、第1期は黒ボク高密度土、第2期は下層が黒ボクに赤音地細粒が混じり、上層は赤音地高密度充填層である。

その他の調査区では、上記のような掘り直しは観察できないが、赤音地はⅦ～Ⅹ区のいずれでも側溝埋土内に確認された。側溝第1期の状態はⅨ区東のみで確認できたことになる。Ⅹ区南の調査区壁の断面観察によると、両側溝は幅92cm、深さ38cm以上であったと考えられ、比較的残りが良い(図4-54)。Ⅶ-1区～Ⅸ-2区西では幅40～90cm、深さ20数cm前後となり、そこでは古代の遺物を包含する黒ボク土層が不在ないし薄いことや、遺構検出面が高く、礫層面であることから、削平が比較的顕著であったとみられる。しかし、検出面(地山)が図4-6および本章冒頭章で述べたように各調査区で上下する中、側溝跡はⅦ区からⅩ区まで途切れず検出されたことから、道路は基本的に地形の緩やかな起伏に抗うことなく敷設されていたと考えられる(図4-55・高田遺跡遺構計測表12)。

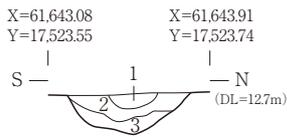
側溝跡では、高密度な赤音地の存在が特徴的である。両側溝の上層で厚く存在する部分では夾雑物が認められず、純粹にみえる。さらに土層断面図版(図4-53・54)のとおり、高密度な赤音地が両側溝間、即ち路面の範囲に大小の塊となって連続的に存在する。これらが第Ⅵ章の観察結果のごとく、水流や土壌クリーブ等の自然営力によって再堆積したものではなく、人為的に形成された堆積物であるとすると、人為的に持ち込まれて第2期の側溝上層、および路盤或いは路面を埋めたことになる。Ⅸ区東のⅥ層該当層で、部分的に火山灰由来とみられる橙色系の土層がみられたが、色の濁りや砂粒を含む点で今回「赤音地」としたものは異なり、全調査区の堆積層のいずれにも、このような「赤音地」は存在しなかった。

側溝等の道路関連遺構は、調査範囲東端のⅩ区でもその延長位置周辺を精査したが検出されていない。原因として、同中央区画では遺構検出面標高がⅩ-2区東半よりもさらに35cm前後高く、全調査区中で最も高いこと、Ⅹ区では遺構検出面が表土直下に近く大振りの円礫を含む層も露出していること、同区南区画はかなり削平を受けているとみられたことから、道路跡は存在していたが、地山とともに削平された可能性が考えられる。

(2) 出土遺物

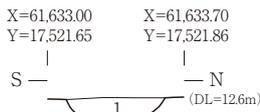
掲図分を含む総数は表4-2のとおりで、Ⅶ区及びⅨ-2区東が多い。SD1と2に留意すべき差異は認められない。

7. 道路側溝跡等の調査 (2) 出土遺物



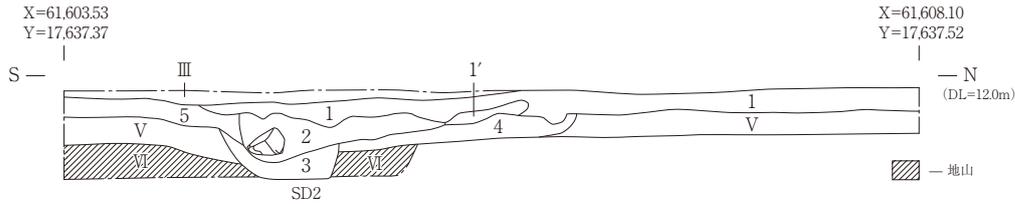
- 遺構埋土
1. 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土
 2. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト (5cm大の中礫を含む、やや締りあり)
 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質シルト

VII区SD1



- 遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR2/2) 粘質シルト

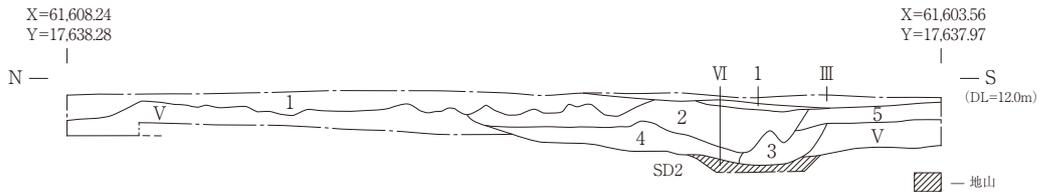
VII区SD2



- 層位
- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層 (小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
 - 第V層 黒色 (10YR1.7/1) 黒ボク層
 - 第VI層 黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土層 (数mm大の細礫を含む：地山)

- 遺構埋土
1. 黒ボクと赤音地が微小〜1cm大の粒状に混じる
 - 1' 赤音地の大アブロック (僅かに1の部分がある)
 2. 赤音地のほぼ純層 (黒ボクが僅かに嵌入する)
 3. 黒ボク (赤音地微細粒が僅かに混じる)
 4. 黒ボク (赤音地微細粒が混じる)
 5. 黒ボク (赤音地微細粒が極僅かに混じる)

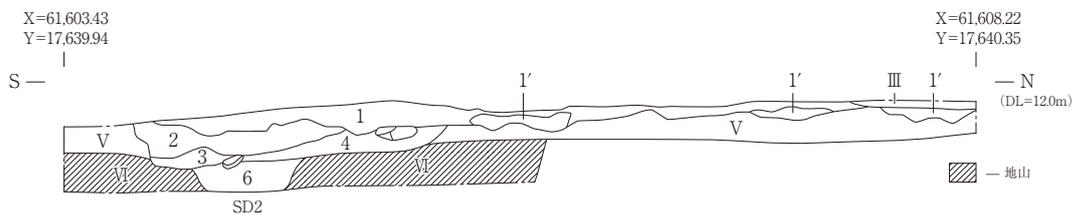
IX-2区東 SD2バンク1



- 層位
- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層 (小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
 - 第V層 黒色 (10YR1.7/1) 黒ボク層
 - 第VI層 黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土層 (数mm大の細礫を含む：地山)

- 遺構埋土
1. 黒ボクと赤音地が微小〜1cm大の粒状に混じる
 2. 赤音地のほぼ純層 (黒ボクが僅かに嵌入する)
 3. 黒ボク (赤音地微細粒が僅かに混じる)
 4. 黒ボク (赤音地微細粒が混じる)
 5. 黒ボク (赤音地微細粒が極僅かに混じる)

IX-2区東 SD2バンク2



- 層位
- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層 (小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
 - 第V層 黒色 (10YR1.7/1) 黒ボク層
 - 第VI層 黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土層 (数mm大の細礫を含む：地山)

- 遺構埋土
1. 黒ボクと赤音地が微小〜1cm大の粒状に混じる
 - 1' 赤音地の大アブロック (僅かに1の部分がある)
 2. 赤音地のほぼ純層 (黒ボクが僅かに嵌入する)
 3. 黒ボク (赤音地微細粒が僅かに混じる)
 4. 黒ボク (赤音地微細粒が混じる)
 6. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土 (VI層に近いが暗めて、赤音地微細粒が僅かに混じる)

IX-2区東 SD2バンク3

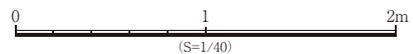
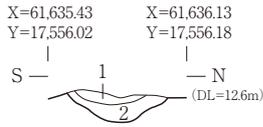


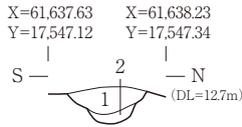
図4-53 道路側溝跡セクション図1



遺構埋土

1. 黒色 (10YR2/1) シルト
(褐色 (7.5YR4/6) 土が多く混じり、
0.5cm大の中礫を含む、やや締りあり)
2. 黒褐色 (10YR2/3) 細砂混じりシルト
(3~5cm大の中礫を含む)

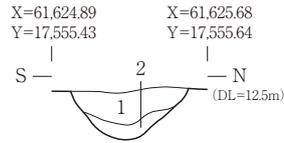
Ⅷ区SD1バンク1



遺構埋土

1. 黒色 (10YR2/1) シルト
(褐色 (7.5YR4/6) 土が混じり、
0.5~3cm大の中礫を含む、締りあり)
2. 黒褐色 (10YR2/3) 細砂混じりシルト

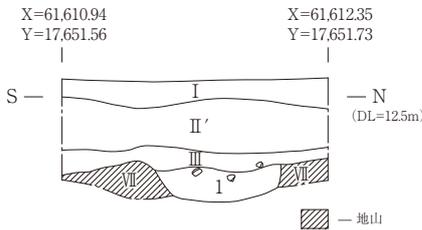
Ⅷ区SD1バンク2



遺構埋土

1. 黒色 (10YR2/1) 細砂混じりシルト
(0.5~1cm大、5~10cm大の中・大礫を含む)
2. 黒褐色 (10YR2/3) 細砂混じりシルト
(やや締りあり)

Ⅷ区SD2



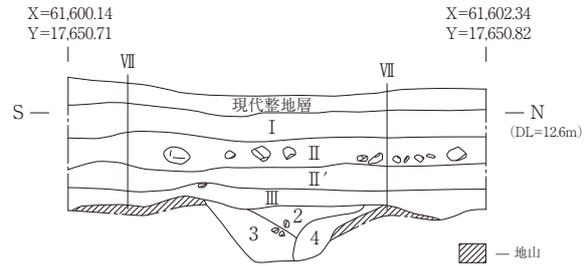
層位

- 第I層 表土層 (耕作土)
- 第II層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土層
- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層
(小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
- 第VII層 褐色 (7.5YR4/3) 粘土層 (20cm大までの円礫を含む：地山)

遺構埋土

1. 黒ボク (SD1)

X-2区西壁 SD1



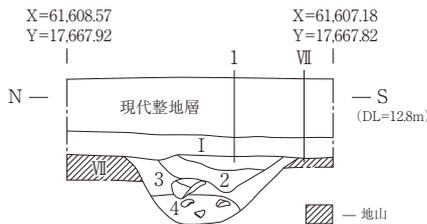
層位

- 第I層 表土層 (耕作土)
- 第II層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土層 (10cm大までの円礫を含む)
- 第II'層 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土層
- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層
(小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
- 第VII層 褐色 (7.5YR4/3) 粘土層 (20cm大までの円礫を含む：地山)

遺構埋土

2. 赤音地 (地山と同色の火山灰土が混じる：SD2)
3. 黒ボク (黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土 (地山) が若干混じる：SD2)
4. 黒ボク (3より明るめでⅦ層 (地山) が混じり、数cm大の円礫を含む：SD2)

X-2区西壁 SD2



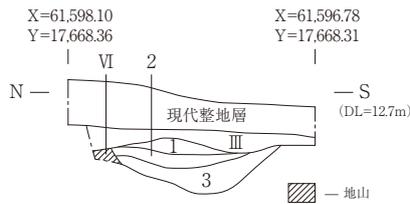
層位

- 第I層 表土層 (耕作土)
- 第VII層 褐色 (7.5YR4/3) 粘土層 (20cm大までの円礫を含む：地山)

遺構埋土

1. 黒ボク (黒褐色 (10YR3/2) 粘土が混じる：SD1)
2. 赤音地 (地山と同色の火山灰土が混じる：SD1)
3. 黒ボク (黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土 (地山) が若干混じる：SD1)
4. 黒ボク (3より明るめでⅦ層 (地山) が混じり、数cm大の円礫を含む：SD1)

X-2区東壁 SD1



層位

- 第III層 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土層
(小円礫を若干含む、火山灰土の土壌化が進んだものとみられる)
- 第VI層 黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土層 (地山)

遺構埋土

1. 黒ボク (黒褐色 (10YR3/2) 粘土が混じる：SD2)
2. 赤音地 (地山と同色の火山灰土が若干混じる：SD2)
3. 黒ボク (黒褐色 (7.5YR2/2) 火山灰土 (地山) が若干混じる：SD2)

X-2区東壁 SD2

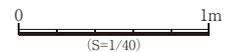


図4-54 道路側溝跡セクション図2

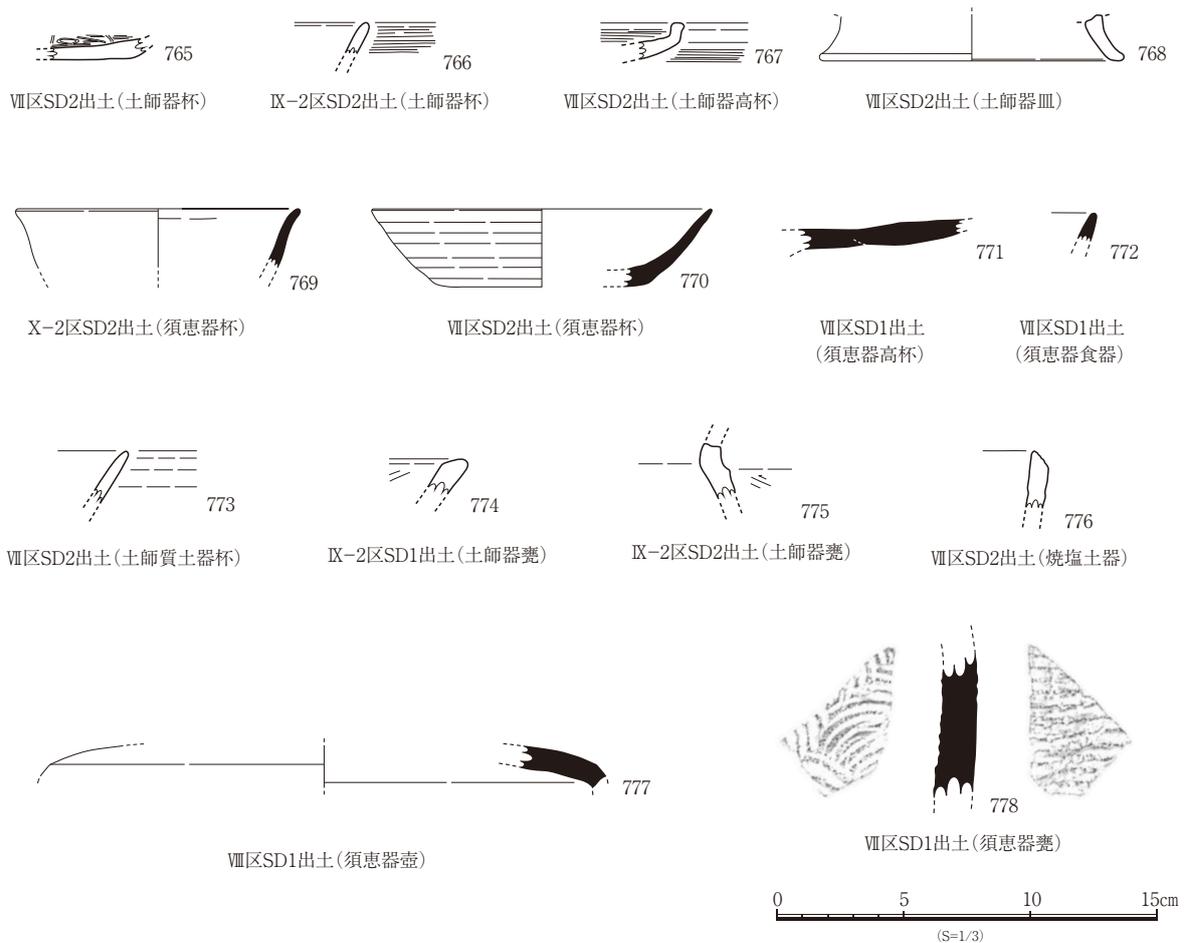


図4-56 道路側溝跡出土遺物実測図

内訳は両側溝合計で、土師器：杯3・皿B1・高杯1・不明食器9(以上赤彩含む)・甕12，須恵器：杯4・高杯1・壺1・甕3，焼塩土器2，酸化焼成で器種不明23点である。明確な中世以降の遺物は存在しない。土師器は摩耗のみられるものもあるが、須恵器ではほとんど摩耗していないものが中層や下層から出土している例が複数ある。

残存率は低いものがほとんどである。土師器杯765は内外面は密なミガキで内底に弧状の暗文か。胎土精良。土師器766・767は内外面は密なミガキ。766と767の破断部をみると器表面が橙色層となっており、薄い化粧土の可能性もある。須恵器杯口縁部769は丁寧で繊細な仕上げ。須恵器杯770は外面に回転ナデの凹凸がみられる。須恵器771は高杯杯部の脚接合部周辺である。土師質土器の杯773にはミガキが施されていれば観察できる状態であるのに観察されず、施されていないか、非常に粗い施し方であったと考えられる。土師器甕774・775は頸部まで斜方向に粗目ハケ、口縁端部は拡張せず、上端面を水平に作り、胎土は花崗岩由来とみられる角礫を多含するタイプである。776は焼塩土器口縁部片。777は肩が張る須恵器壺。須恵器甕778は器厚と湾曲率からみて大型とみられる。

7. 道路側溝跡等の調査 (2) 出土遺物

表4-1 道路関連土層分析の資料採取位置と結果一覧

遺構等	位置, 層位	写真図版	位置	層位	土質・構造	自然科学分析による評価
道路該当部分	バンク3 1層	図版101 図6-3・4・6	1・2地点	R1	黒ボクにR2微小ブロックを含む。	耕作土(畑地)
道路該当部分	バンク3 1層	図版101 図6-3・4・6	1・2地点	R2	明橙褐色ローム質。充填密。	非自然営力の堆積
道路該当部分	-	図版101 図6-3・4・6	1・2地点	R3	黒ボクに上位又は下位層の微小ブロックを含む。	人為的攪乱を受けた層
道路該当部分	基本層序V層	図版101 図6-3・4・6・7	1・2地点	R4	黒ボク主体。底層は黄褐色腐植層へ遷移。	非人為。遺構基盤層
南側溝(SD2)	バンク2 1層	図版101 図6-3・5	3地点	D1	黒ボクにD2含む。壁状構造。	-
側溝(SD2・1)	バンク2 2層, 東壁5層	図版101 図6-3・5・8	3・4地点	D2	明橙褐色ローム質。充填密。	非自然営力の堆積
北側溝(SD1)	東壁6層	図版101・102 図6-3・5・8	4地点	D3	黒ボクに上位又は下位層の微小ブロック含む。	-
北側溝(SD1)	東壁7~8層	図版101・102 図6-3・5・8	4地点	D4	最上部は充填粗。締りなし。	人為的埋土。最上部は地表物質の再堆積

※層位は第VI章高田遺跡の自然科学分析に対応

表4-2 道路側溝跡出土遺物点数

区	SD1	SD2	計
VII	7	23	30
VIII	2	5	7
IX-2	17	9	26
X-2	3	1	4
計	29	38	67

※掲図・非掲図合計

第V章 東野遠山遺跡の調査

1. 調査の契機と経過

本書は、高知県教育委員会が平成28年度に実施した試掘調査の結果を受け、平成29年度に実施した南国安芸道路埋蔵文化財発掘調査のうち東野遠山遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。東野遠山遺跡は、香南市野市町東野遠山地区に所在し、高田遺跡から東方約2.0km、平成21～23年度にかけて発掘調査を実施した東野土居遺跡からは西方約0.4kmに位置する。平成28年度に実施した試掘調査によって新たに発見された遺跡であり、試掘調査では、遺構と遺物が確認された。出土遺物から、中世から近世以降が中心と考えられる溝・土坑などの遺構や遺物が確認されている。本遺跡は地名をとって「東野遠山遺跡」と命名された。このため国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会との間で協議を行い、平成29年度に本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成29年4月1日付けで高知県教育委員会と公益財団法人高知県文化財団との間で業務委託契約をしたのち本発掘調査を実施した。

この調査は、国土交通省(四国地方整備局)が計画し実施している一般国道55号南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について発掘調査を行ったうえで出土遺物などの整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて東野遠山遺跡の調査区の設定を行った。グリッドの設定は西野々遺跡からの一連のものを使用して行った。世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、X=62,500m、Y=11,000m(北緯33°33'49"、東経133°37'07"、真北方向角-0°03'56")を原点とし、A0を組んでいる。X軸にアルファベット、Y軸にアラビア数字を配し、100m四方の大グリッド、20m四方の中グリッド、4m四方の小グリッドを設定し、大中小グリッドの間は「-」で区切って表記した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を表記している。遺構平面図、遺物出土状況図などの作図及び遺物取り上げなどの測量はこのグリッド、座標を使用して



図5-1 東野遠山遺跡調査区グリッド配置図(S=1/1,500)

2. 調査の概要 (2) 調査の概要

行った。

調査に際しての堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上まではバックフォアを使用し、遺物包含層以下は人力で行った。なお、遺物包含層であっても遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮してバックフォアで掘削を行った。遺構検出後は、必要に応じて写真撮影と実測図面の作成を行いながら遺構の掘削を行った。調査終了後は下層確認のためにトレンチ掘削を行った。

(2)調査の概要

東野遠山遺跡の所在する野市台地は、県下三大河川の一つである物部川の古期扇状地であり、緩傾斜の平坦面が数面みられる。また、台地の南側に物部川、さらに市域東部を流れる香宗川の影響を受けた還流丘陵とみられる残丘が香美山地の延長部に残されている。この丘陵地は野市台地を大きく2つの斜面に境界しており、この境界に沿って烏川が流れている。この烏川の左岸に当遺跡は立地している。当遺跡より東方約0.4kmには、弥生時代から近世にいたる複合遺跡である東野土居遺跡、また遺跡の約0.9km南西方向には平安時代から鎌倉時代の布目瓦を採取した下井遺跡、さらに南東方向約1.0kmには古墳時代から平安時代の須恵器が採取された平井遺跡が立地している。I区は対象地の西側に位置する調査区で、烏川の東側丘陵沿いに立地する。調査区西側には土佐くろしお鉄道阿佐線(ごめん・なはり線)の路線が通っており、その東側にはさらに調査区のII区が位置する。II区は調査区を南北(II-S区・II-N区)に分けて調査を実施した。その内北側の調査区については現況の水路等に配慮し、水路を挟んで3箇所(II-N-1区・II-N-2区・II-N-3区)に調査区を分割し発掘調査を行った。発掘調査時に現況は、I区は耕作地、II区は耕作地と調査区内には上物構造の基礎がみられた。

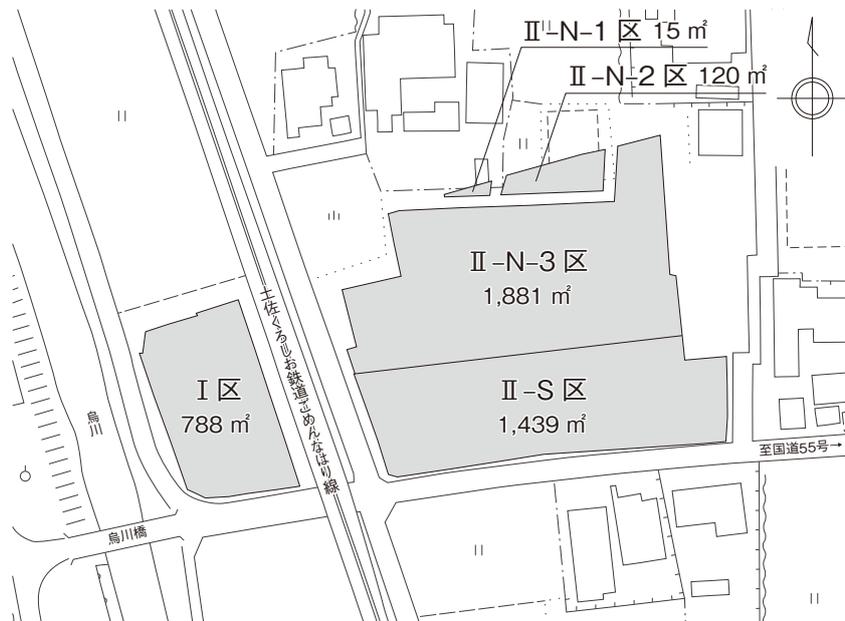


図5-2 東野遠山遺跡調査区位置図(S=1/1,500)

3. I区の調査と基本層序

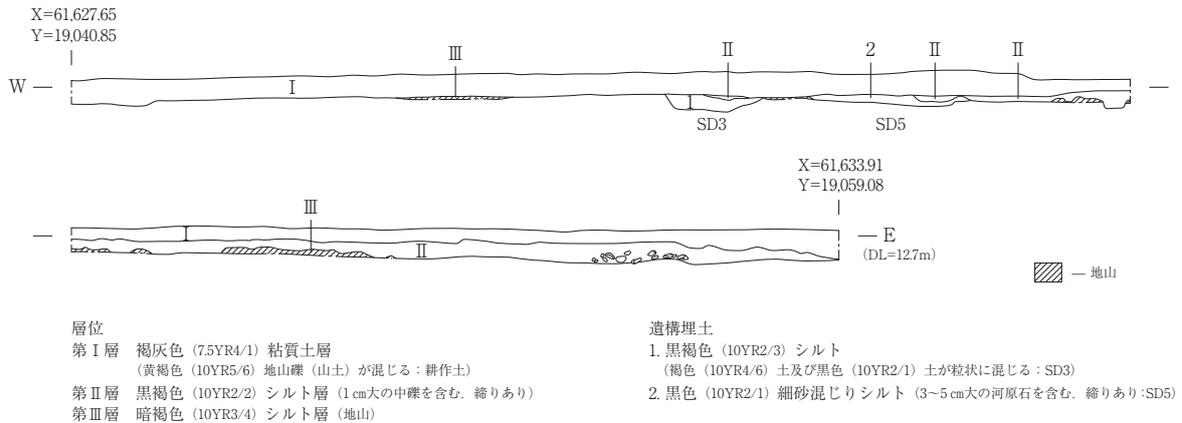
I区の現況は田畠跡であった。調査区北壁と西壁において土層観察を行った。西壁セクションには、耕作土の下に山土礫を用いた礫層がみられた。調査区の東西には現況水路が流れており、水路等を作った際に使用されたも礫が残ったものと考えられる。基本層序は以下のとおりである。

i I区北壁セクション

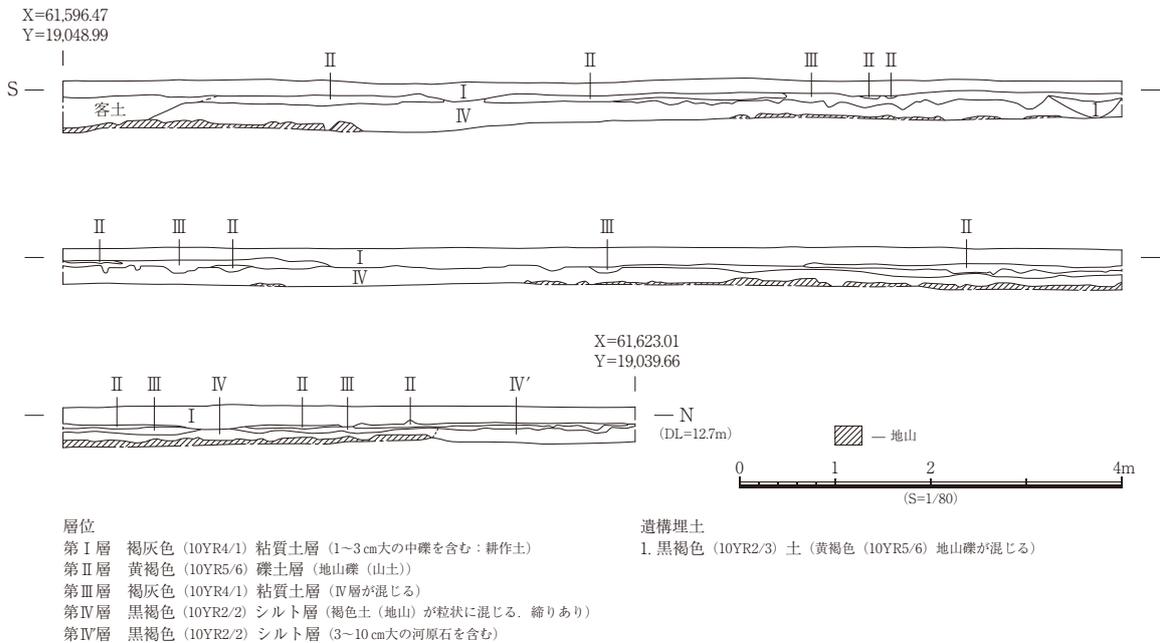
第I層 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土層(黄褐色(10YR5/6)地山礫が混じる:耕作土)

第II層 黒褐色(10YR2/2)シルト層(1cm大の礫を含む, 縮りあり)

第III層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(地山)



I区北壁セクション図



I区西壁セクション図

図5-3 I区調査区北壁・西壁セクション図

4. I 区の検出遺構と出土遺物 (1) 土坑

4. I 区の検出遺構と出土遺物

I 区の調査では、土坑12基、溝7条、柱穴31個、性格不明遺構1基を検出した。以下詳細について記載する。

(1) 土坑

SK1 (図5-4)

調査区南東部において検出した。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.88m、短径0.80m、検出面から底面までの深さは約16cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトに褐色・黒色土と0.5~2cm大の中礫が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK2 (図5-4)

調査区南東部、SK1の西約3.0mにおいて検出した。平面形は円形を呈し、径は0.89m、検出面から底面までの深さは17cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトに褐色・黒色土と0.5~2cm大の中礫が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK3 (図5-4)

調査区南部、SK2の西約5.0mにおいて検出した。平面形はほぼ円形を呈し、長径1.06m、短径0.98mで、検出面から底面までの深さは28.5cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色・黒色土と0.5~1cm大の中礫が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK4 (図5-4)

調査区南部、SK3の東約1.2mにおいて検出し、SD1をきる。平面形は円形を呈し、径は概ね0.9mで、検出面から底面までの深さは約25cmを測る。埋土は上層が黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色・黒色土を含み、下層は細砂混じりの黒褐色(10YR2/3)シルトで、出土遺物はみられなかった。

SK5 (図5-5)

調査区の南東部、SK2の北西約1.2mにおいて検出した。平面形はほぼ円形を呈し、長径1.26m、短径1.11mで、検出面から底面までの深さは約19cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに

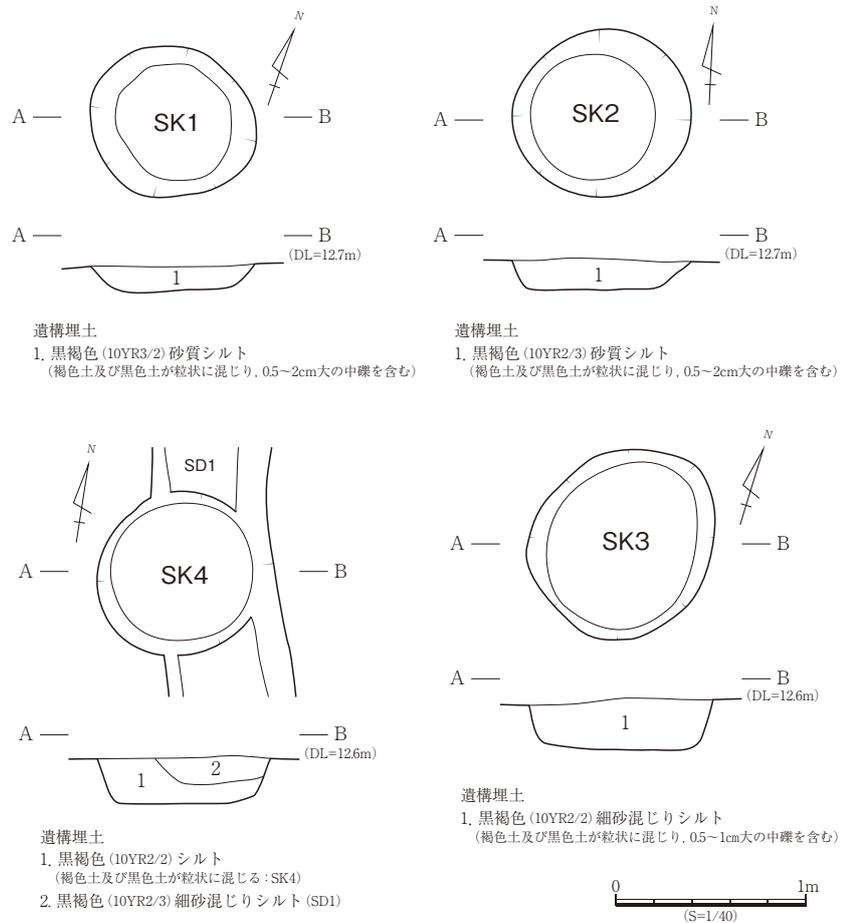


図5-4 I区SK1~4

褐色・黒色土と0.5～1cm大の中礫が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK6 (図5-5)

調査区の南部において検出した。平面形は円形状を呈し、長径1.47m、短径1.35mで、検出面から底面までの深さは約22cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色・黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK7 (図5-5)

調査区の南部中央、SK5の西約2.1mにおいて検出した。平面形は円形状を呈し、長径1.26m、短径1.10mで、検出面から底面までの深さは約27cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色・黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK8 (図5-5)

調査区南部において検出した。調査区南東部を東西方向に走るSD2をきる。平面形は円形状を呈し、長径0.94m、短径0.80mで、検出面から底面までの深さは概ね12cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色土が多く含まれる。出土遺物はみられなかった。

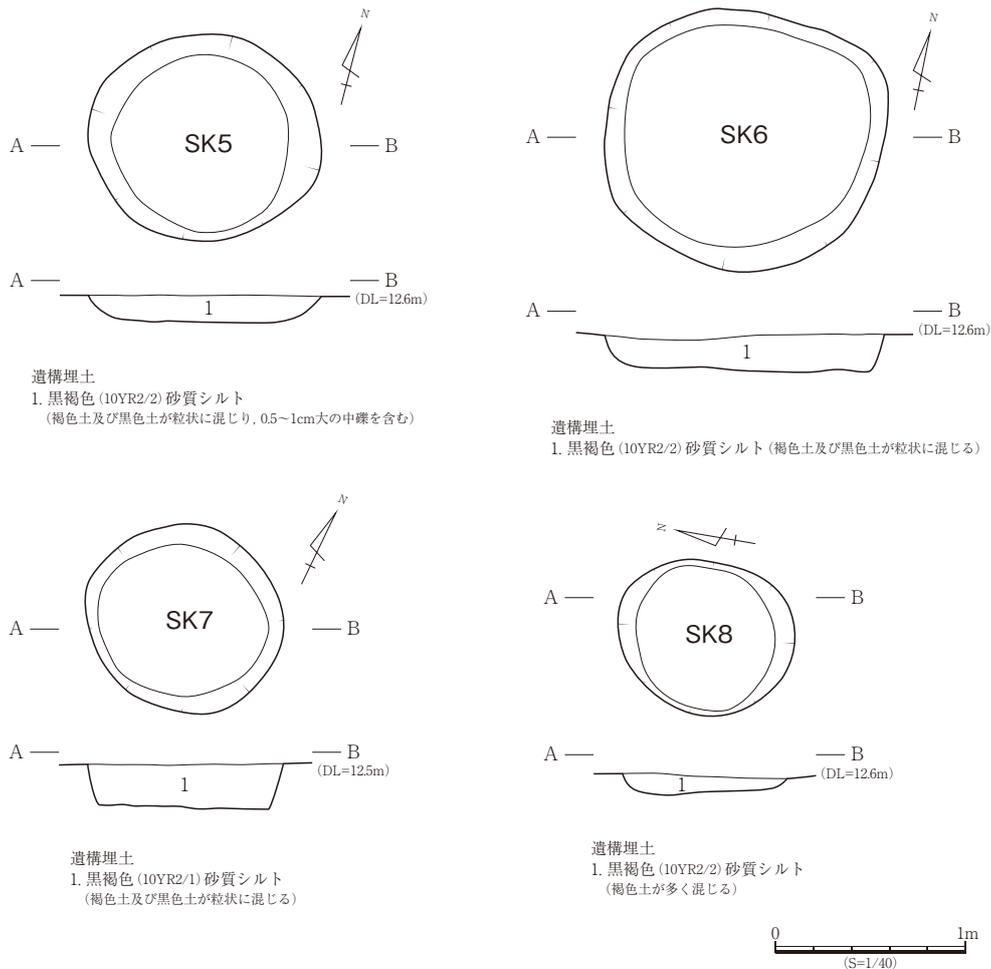


図5-5 I区SK5～8

4. I 区の検出遺構と出土遺物 (1) 土坑

SK9 (図5-6)

調査区南部, SK7 の北西約 1m において検出した。調査区中央部を南北方向に縦断する SD5 をきる。平面形は円形状を呈し, 長径 0.90m, 短径 0.82m で, 検出面から底面までの深さは約 17cm を測る。埋土は黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルトに暗褐色土及び明黄褐色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK10 (図5-6)

調査区南部, SK6 の南西 1.5m において検出した。調査区中央部を南北方向に縦断する SD5 をきる。平面形は円形を呈し, 径は概ね 1.0m で, 検出面から底面までの深さは約 30cm を測る。埋土は黒褐色 (10YR2/2) シルトに黒褐色土及び黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK11 (図5-6)

調査区南部, SK6 の北西において検出した。調査区中央部を南北方向に縦断する SD5 をきる。平面形はほぼ円形を呈し, 長径は 1.0m, 短径 0.86m, 検出面から底面までの深さは約 16cm を測る。埋土は黒褐色 (10YR2/2) シルトに褐色土及び黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

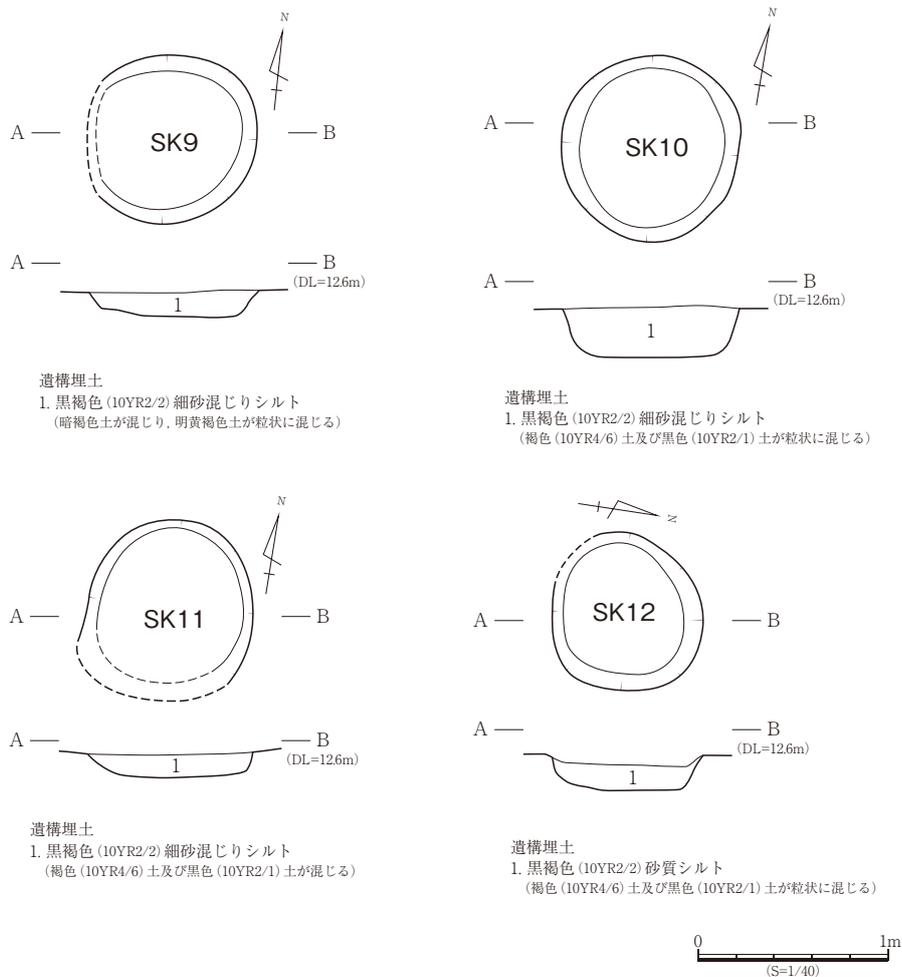


図5-6 I 区SK9~12

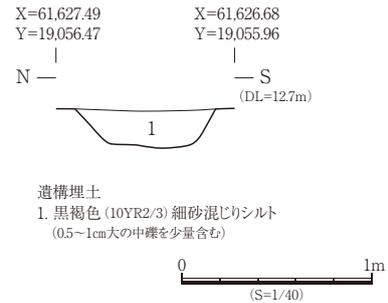
SK12 (図5-6)

調査区南部, SK3の南西において検出した。調査区南東部を東西方向に横断するSD2をきる。平面形は円形を呈し, 径は概ね0.8m, 検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトに褐色土及び黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。

(2) 溝跡

SD1 (図5-7)

調査区北西部から東側に15.94mで, 南方向に折れて約35m程直線的にのびて, 調査区外に至る。確認延長は約47.4mで, 幅は0.50~0.79m, 検出面から底面までの深さは11~25cmを測り, 北から南方向にかけて若干深くなっている。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトに褐色土と礫が含まれる。遺物は土師質土器と黒色土器の細片が出土しており, その内土師質土器2点が図示できた。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3) 細砂混じりシルト
(0.5~1cm大の中礫を少量含む)

図5-7 I区SD1

出土遺物 (図5-8 1・2)

1は土師質土器杯の口縁部である。端部は端反りし, 外面・内面は回転ナデ調整を施す。2は同じく杯の底部である。摩耗しているため, 調整等は不明である。

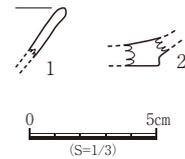
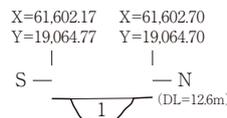


図5-8 I区SD1出土遺物実測図

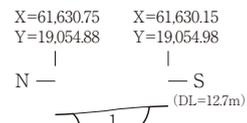
SD2 (図5-9)

調査区南東部を東西方向にのびる。西側はSD5に接し, 東側は調査区外にのびる。確認延長は11.88mで, 幅は0.32~0.38m, 検出面から底面までの深さは12~20cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)砂質シルトに褐色及び黒色土が含まれる。出土遺物はみられなかった。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2) 細砂混じりシルト
(褐色土が粒状に混じる)

SD2



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト
(褐色土及び黒色土が粒状に混じる)

SD3

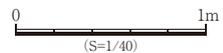


図5-9 I区SD2・3

SD3 (図5-9)

調査区北東部を東西方向に横断する。西側はSD5とSD6に接し, 東側は調査区外にのびる。確認延長は13.50mで, 幅は0.31~0.41m, 検出面から底面までの深さは12~14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトに褐色土と黒色土と礫が含まれる。遺物は土師質土器が出土しており, その内1点を図示することができ得た。

出土遺物 (図5-10 3)

口縁部のみ残存しており, 外面はナデ調整で, 内面は摩耗している。

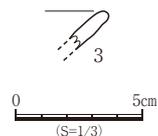


図5-10 I区SD3出土遺物実測図

SD4 (図5-11)

調査区の南東部に位置する。東側は調査区外にのびる。確認延

3. I 区の検出遺構と出土遺物 (2) 溝跡

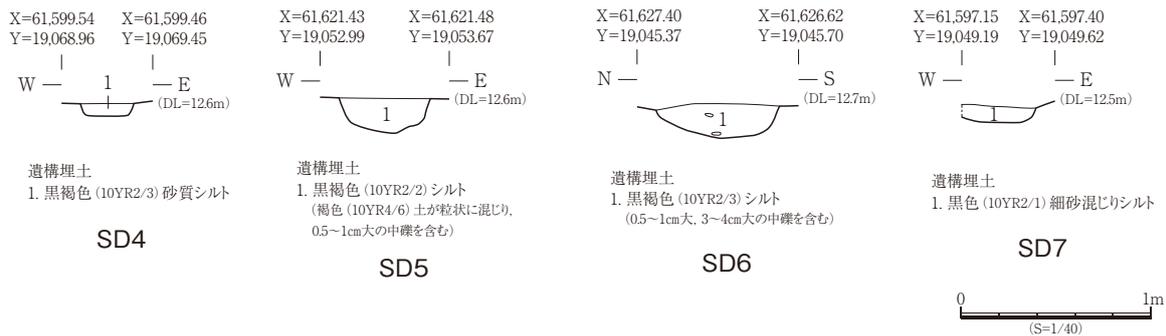


図5-11 I区SD4～7

長は4.32mで、幅は0.27m、検出面から底面までの深さは7cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD5 (図5-11)

調査区の中央部を縦断する。北西から東側に3.0mのびて南側に折れ、約35m直線的にのびて調査区外に至る。確認延長は概ね38mで、幅は0.40～0.58m、検出面から底面までの深さは19～31cmを測る。北側から南側にかけて緩やかに低くなっている。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトに褐色土及び礫が含まれる。遺物は土師質土器杯の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD6 (図5-11)

調査区の北端に位置する。西側はSD1に接し、東側は調査区外にのびる。確認延長は13.30mで、幅は0.64m、検出面から底面までの深さは6～18cmを測る。埋土は礫を含んだ黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器杯の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD7 (図5-11)

調査区の南西端に位置する。南側はカクランにきられ、北部は調査区外にのびる。確認延長は4.48mで、幅は0.28～0.40m、検出面から底面までの深さは9cmを測る。埋土は細砂混じりの黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は、陶磁器皿を図示でき得た。

出土遺物 (図5-12 4)

4は皿の底部である。内面は銅板転写による染付がみられる。

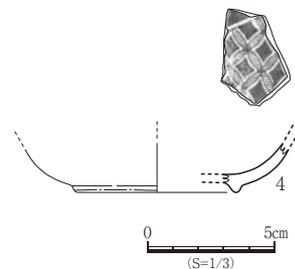


図5-12 I区SD7出土遺物実測図

(3) 柱穴

P1

調査区の南西部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.75m、短軸が0.60mで、検出面から底面までの深さは13cmを測る。埋土は暗褐色(10YR3/4)を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。出土遺物はみられなかった。

P2

調査区の南西部において検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.76m、短軸が0.52mで、検出面から底面までの深さは13cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)シルトである。出土遺物はみられなかった。

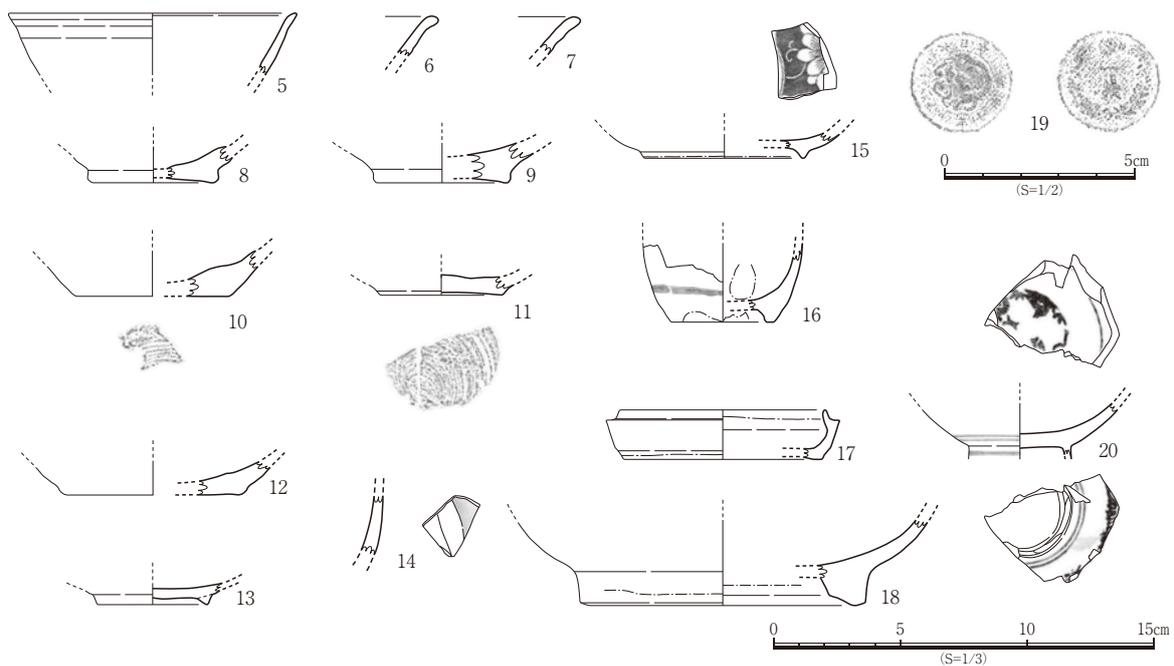


図5-13 I区遺構外出土遺物実測図

(4) 遺構外出土遺物(図5-13 5~20)

5~12は土師質土器の杯である。5の口縁部はやや外反する。外面・内面ともに摩耗のため調整は不明瞭である。6・7の口縁部はやや外反し、外面・内面にはナデ調整がみられる。8は底部である。外面・内面ともに摩耗しており、調整は不明瞭である。9も底部である。やや器壁が厚く、円盤状高台に近い。外面は回転ナデ調整で、内面は摩耗する。10は底部で、外面には回転糸切り痕が残る。内面は摩耗する。11も底部で、外面には回転糸切り痕が残る。内面はナデ調整がみられる。12も同じく底部である。外面には回転糸切り痕が残る。外面・内面ともに回転ナデ調整を施す。

13は瓦器碗の底部である。外面には断面三角形の輪高台を貼付する。内面は摩耗のため調整は不明瞭である。14は青磁碗である。外面には鎬蓮弁文がみられる。15は陶磁器の皿である。内面には銅板転写による絵付けが施される。16は磁器の小型瓶である。底部は碁笥底状を呈し、外面には1条の圏線文がみられる。17は磁器の合子である。底部外面と口縁端部を除いて施釉する。18は陶器の鉢である。底部は削り出し高台を呈し、高台を除き褐色釉を施釉している。19は一銭硬貨で、「大日本」と「明治七年」と読める。20は磁器の丸形碗である。内外面には銅板転写が施され、内面見込みに、竹あるいは松が認められる。

5. II区の調査と基本層序

II区もI区と同じく田畠跡であったが、調査区の東側は一部宅地化しており、建物基礎等が残っていた。調査区の北側には現況の水路が流れている状態であった。

基本層序は以下のとおりである。

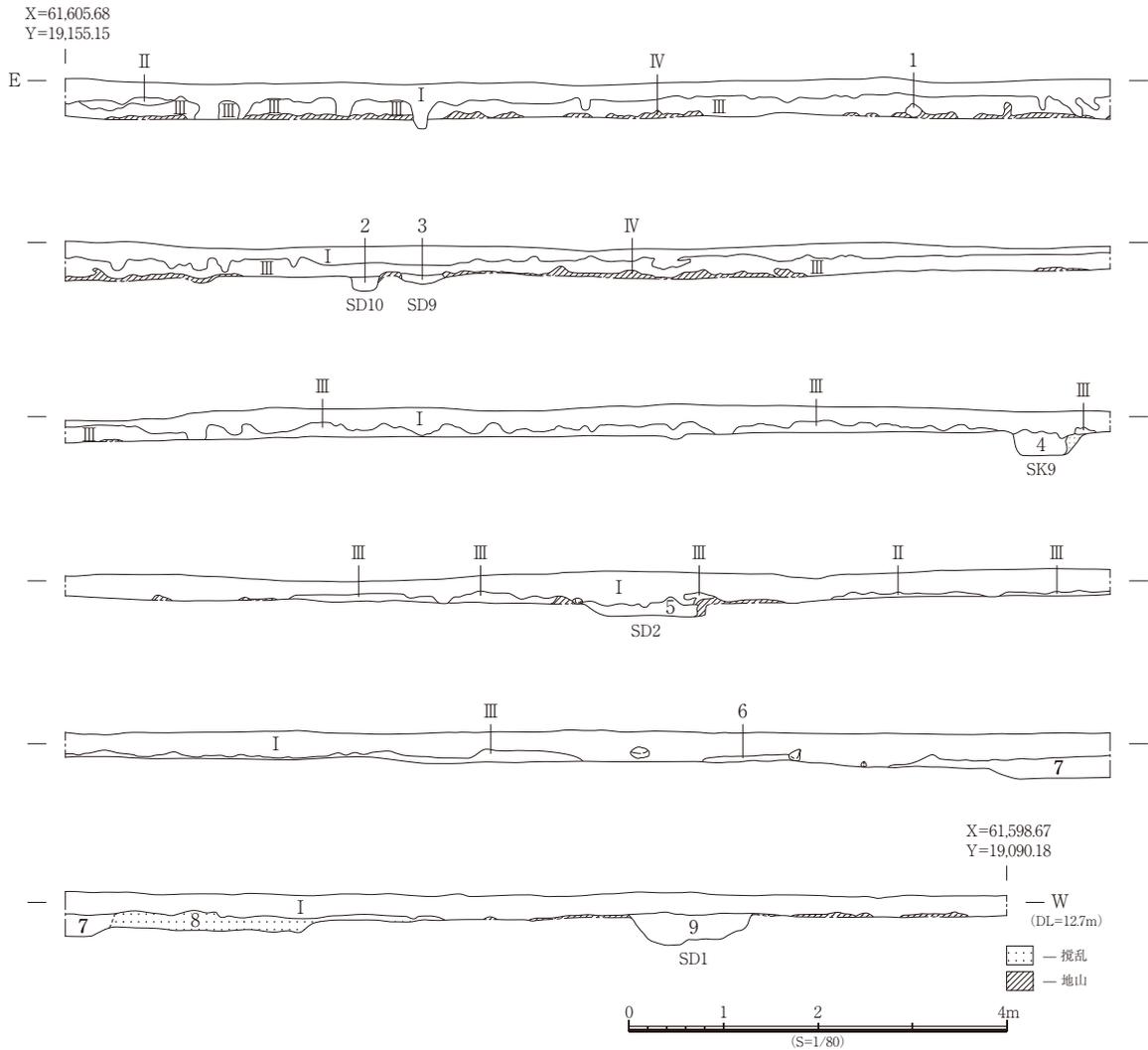
5. II区の調査と基本層序

i II区南壁セクション(II-N-S区)

- 第I層 褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルト層(一部礫等を含む:耕作土)
- 第II層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層(細砂及び0.5~1cm大の礫を含む, I層の耕作土が混じる)
- 第III層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層(細砂及び土器細片, 0.5~1cm大の礫を含む)
- 第IV層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(地山)

ii II区北壁セクション(II-N-2区)

- 第I層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト層(耕作土)



- 層位
- 第I層 褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルト層(一部地山礫等を含む:耕作土)
 - 第II層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層(褐灰色(7.5YR4/1)耕作土が多く混じり, 0.5~1cm大の中礫を含む)
 - 第III層 黒褐色(10YR2/2)砂質シルト層(土器細片及び0.5~1cm大の中礫を含む)
 - 第IV層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(地山)

- 遺構埋土
- 1. 褐灰色土(黄褐色土が混じる)
 - 2. 黒色(10YR2/1)細砂混じりシルト(褐色(10YR4/4)土ブロックが混じる:SD10)
 - 3. 黒褐色(10YR2/3)細砂混じりシルト(褐色(10YR4/4)土が粒状に混じり, 土器片を含む:SD9)
 - 4. 黒色(10YR2/1)シルト(褐色土が粒状に混じる:SK9)
 - 5. 黒褐色(10YR2/2)細砂混じりシルト(SD2)
 - 6. 暗褐色(10YR3/4)シルト(地山に黒褐色土(包含層)が混じる)
 - 7. 黒褐色(10YR3/1)土(瓦片及び1~5cm大の中礫を含む:道路)
 - 8. 灰黄褐色(10YR4/2)土(1~3cm大, 5~10cm大の中・大礫を多く含む:攪乱)
 - 9. 黒褐色(10YR2/3)シルト(黄褐色土が混じり, 10~15cm大の河原石を含む:SD1)

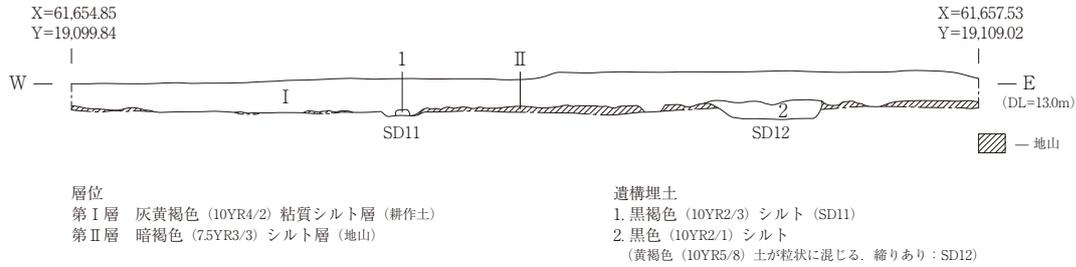
図5-14 II区調査区南壁セクション図

第I'層 褐色(10YR4/4)粘質土層

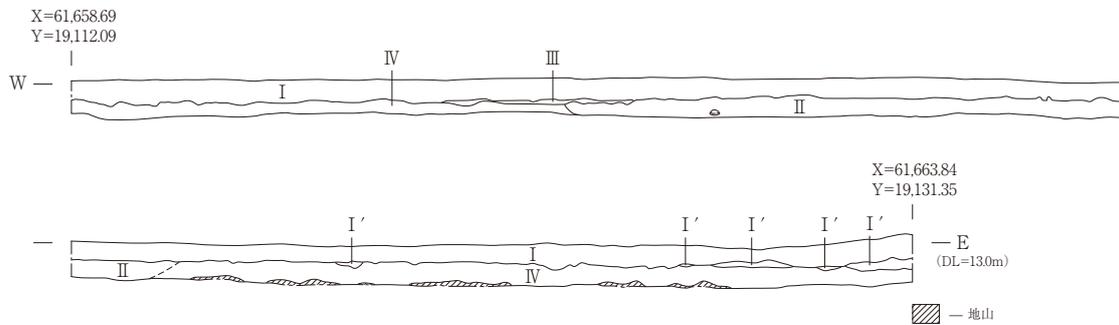
第II層 黒褐色(10YR2/3)シルト層(0.5~3cm大, 5cm大の礫が多く含まれる)

第III層 黒褐色(10YR2/2)シルト層(細砂混じる, 褐色(10YR4/4)土が混じる)

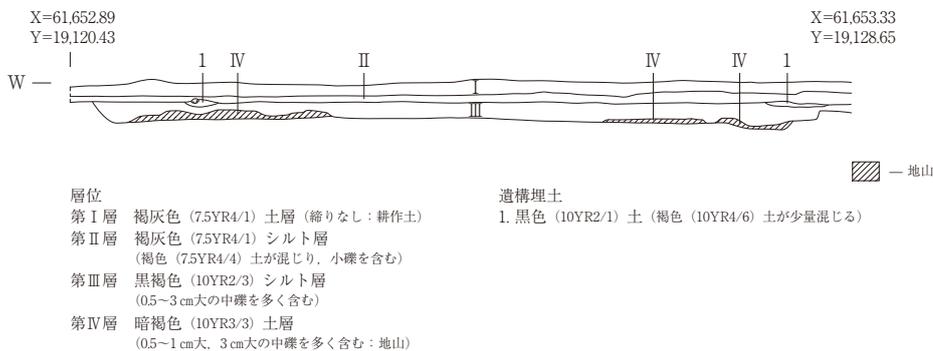
第IV層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト層(細砂が混じる)



II-N-1 区北壁セクション図



II-N-2 区北壁セクション図



II-N-3 区北壁セクション図

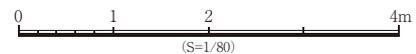


図5-15 II区調査区北壁セクション図

6. II区の検出遺構と出土遺物

II区では掘立柱建物跡2棟、土坑56基、溝跡25条、柱穴811個、性格不明遺構14基を検出した。遺構は調査区の中央部から南側にかけてみられ、中央部から北側についてはやや希薄な状況を示している。ここでは主な遺構について記載する。

(1) 掘立柱建物跡

SB1 (図5-16)

調査区南部のII-S区中央部において検出した。調査区南部を東西方向に直線的にのびるSD3をきる。規模は桁行5間(11.7m)、梁行2間(4.0m)の東西棟で、軸方向はN-85°-Wである。建物西側柱を構成する中央の柱穴は、上面の攪乱により確認できなかった。柱間寸法は1.90~2.60mを測り、その内2.20mを測るものが多くみられる。床面積は46.80㎡である。

柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、柱穴の規模は円形が径0.21~0.33m、楕円形は長径が0.30~0.63m、短径は0.24~0.40mを測る。検出面から底面までの深さは29~56cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトと暗褐色(10YR3/3)砂質シルトである。出土遺物はP2~4・6・7・9・11・12の埋土中からは土師質土器片や瓦器が出土しており、その内、土師質土器7点と瓦器椀2点が図示できた。

出土遺物 (図5-17 21~29)

21~23は土師質土器の皿である。21は平底で、外面に回転糸切り痕が残る。口縁部は外上方に短くのびる。摩耗のため調整は不明瞭である。22も同じく平底で、口縁部は外方に短くのび開く。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。23も同じく平底で、外面には回転糸切り痕が残る。

体部から口縁部は外上方に短くのびる。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。24は土師質土器の杯である。器壁が厚く、底部外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面にはナデ調整を施す。25は土師質土器の杯である。口縁部が外方に開き、やや外反する。外面と内面には回転ナデ調整を施す。26・27は土師質土器の杯である。外面・内面ともにナデ調整で、外面の一部は摩耗している。28・29

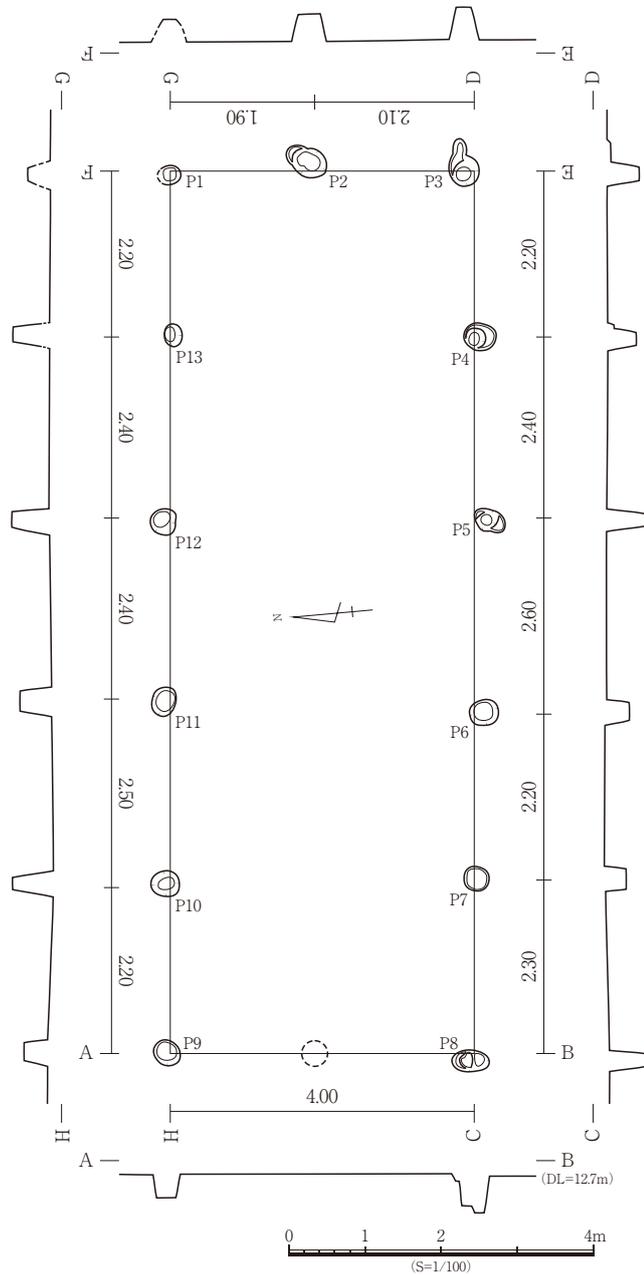


図5-16 II区SB1

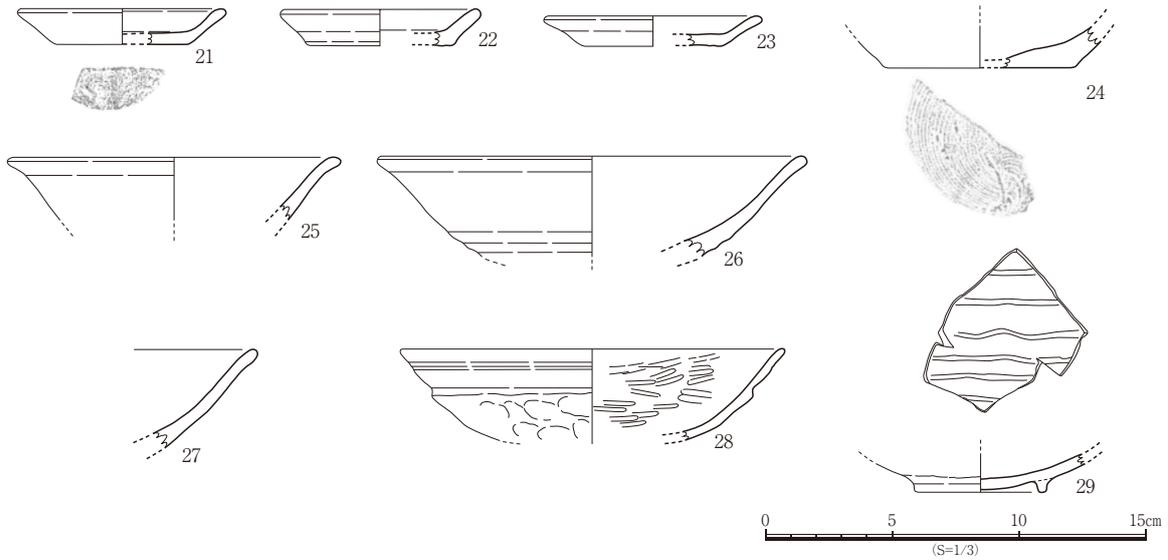


図5-17 II区SB1出土遺物実測図

は瓦器碗である。28の口縁部外面は強いヨコ方向のナデ調整により段を呈する。体部外面には指頭圧痕が顕著である。内面にはヘラミガキが施される。29は底部外面に断面三角形から方形状の高台を貼付する。貼付部分は密なナデ調整で、内面には平行のヘラミガキを施す。

SB2 (図5-18)

調査区南部のII-S区において検出した。規模は桁行2間(4.6m)、梁行2間(3.3m)の東西棟で、軸方向はN-86°-Wである。建物東側柱を構成する中央の柱穴は、上面の攪乱により確認できなかった。柱間寸法は1.60~2.40m、床面積は15.18㎡である。

柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、柱穴の規模は円形が径0.35m、楕円形は長径が0.28~0.60m、短径は0.21~0.35mを測る。検出面から底面までの深さは6~70cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトと暗褐色(10YR3/3)砂質シルト、さらに褐色土を含む黒色(10YR2/1)シルトである。出土遺物はP1の埋土中から土師質土器とP7の埋土中からも土師質土器が出土しており、その内3点を図示することができた。

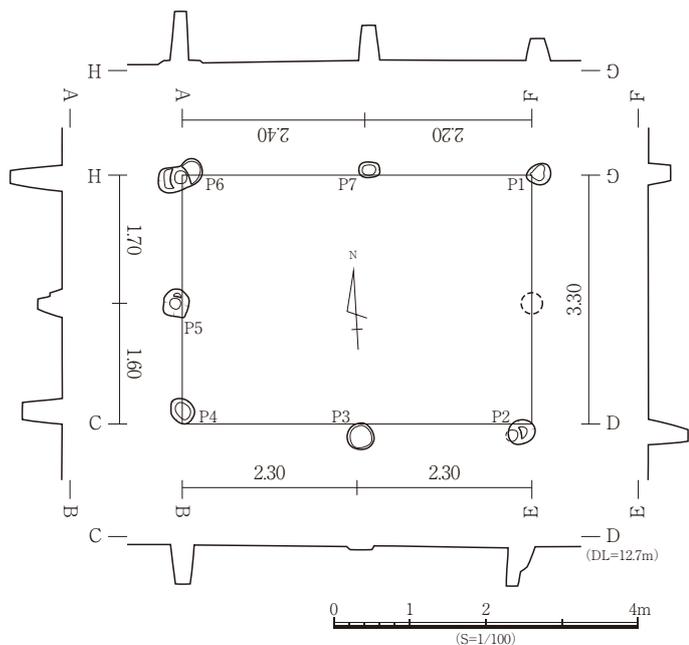


図5-18 II区SB2

出土遺物 (図5-19 30~32)

31は土師質土器杯である。平底で、外面は回転糸切り痕が残る。外面・内面は回転ナデ調整がみられる。30は大

6. II区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

型の土師質土器杯である。平底で、器壁は厚く底部外面には回転糸切り痕が残る。外面・内面は回転ナデ調整を施す。32も同じく大型の土師質土器鉢あるいは甕である。底部外面は回転糸切り痕残り、外面と内面は回転ナデ調整、底部内面にヨコ方向のナデ調整がみられる。

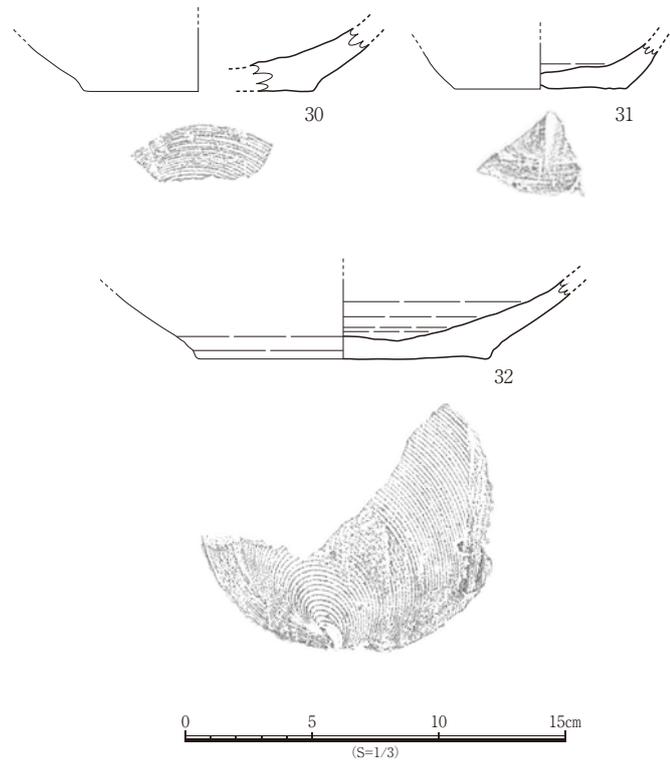


図5-19 II区SB2出土遺物実測図

(2) 土坑

SK1 (図5-20)

調査区南部のII-S区西部において検出したハンダ土坑である。検出面から約20cm下には10cm大の円礫(河原石)を確認した。これら円礫は土坑の周囲に巡らされており、遺構と一連のものと考えられる。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-80°-Eを示す。長径は2.07m, 短径1.83mで、検出面から底面までの深さは約63cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトにハンダ土及び10~15cm大、人頭大の大礫が含まれる。また、側面及び底部はハンダ土で固められていた。SK1の東側には同様な規模のSK2が位置しており、2基が対になって使用されたものと考えられる。遺物は土師質土器・瓦質土器・陶磁器・瓦・金属製品などが出土しており、その内瓦質土器の鉢と染付筒形碗、棧瓦、煙管が図示できた。

出土遺物 (図5-21 33・38・40・41)

33は肥前系磁器の筒形丸碗である。外面に虫籠文。口縁部内面は二重圏線間に斜格子文を施す。38は瓦質土器の火入れである。40は金属製品の煙管の雁首である。外面には数条の凹みが巡る。41は棧瓦である。側面に「ヤス」の刻銘がみられる。

SK2 (図5-20)

調査区南部のII-S区西部において検出したハンダ土坑である。西側にはSK1が隣接する。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-86°-Eを示す。長径は1.89m, 短径1.68mで、遺構の東側は一部テラス状を呈する。検出面から底面までの深さは約60cmを測る。埋土は灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトにハンダ土と10~20cm大の大礫が含まれる。また、SK1と同様に掘方の周囲には5~10cm大の円礫(河原石)が一部確認できた。遺物は土師質土器・陶磁器・土製品が出土しており、その内陶器皿・碗、染付碗、土製の土人形が図示できた。

出土遺物 (図5-21 34~37・39)

34は染付の小型丸碗である。底部は削り出し高台で、高台暈付け以外は全面施釉である。外面口縁部に竹あるいは笹の文様、高台脇に圏線文を施す。35も同じく染付の小型丸碗である。底部は削り出

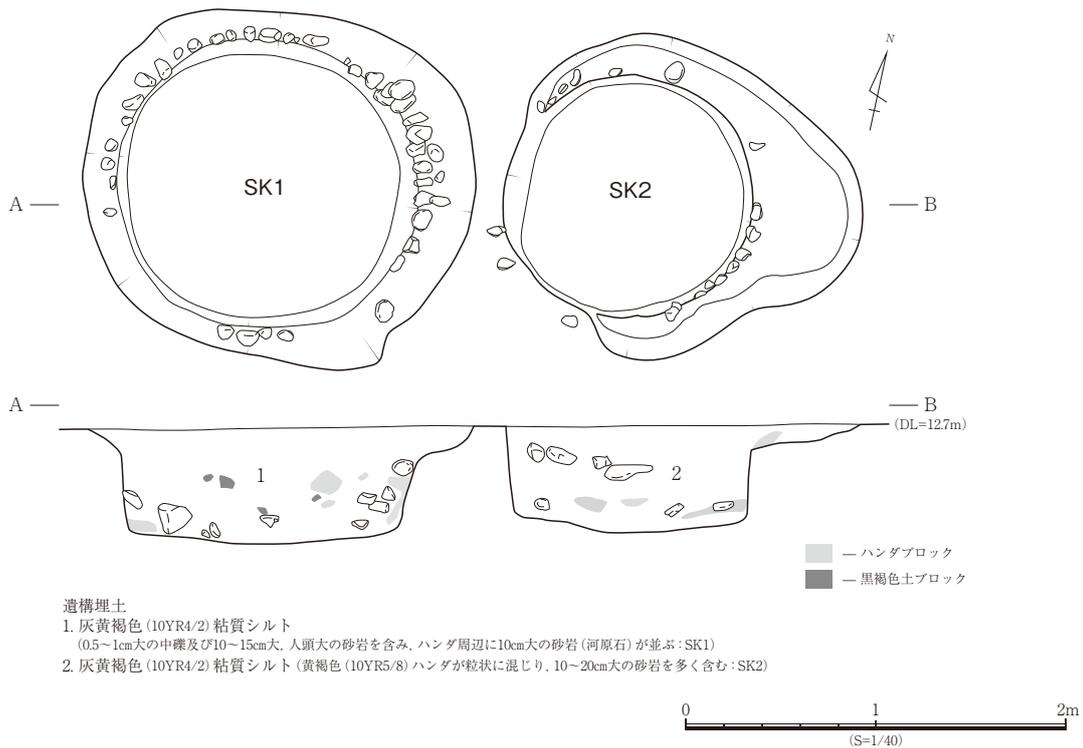


図5-20 II区SK1・2

し高台で、外面には圈線がみられる。内面は無釉である。36は陶器の皿である。底部は削り出し高台で、高台畳付けは無釉である。内面に鉄絵が施される。37は陶器の碗である。内外面に施釉し、細かい貫入が入る。39は土製品土人形である。型作りを呈し、中心部は中空である。一部は摩耗する。

SK3

調査区南部中央において検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを示す。長径は1.98m、短径1.0mで、遺構の北側は一部テラス状をなしている。検出面から底面までの深さは約21cmを測る。埋土は黒褐色(7.5YR3/2)シルトに褐色(7.5YR4/3)粘質土と褐灰色(7.5YR4/1)土が含まれる。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK4

調査区南部中央において検出した。SK3より南東約2.4mに位置する。遺構の北東側は倒木痕跡にきられる。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-4°-Wを示す。径は0.7m前後で、検出面から底面までの深さは約13cmを測る。埋土は黒色土と褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK5 (図5-22)

調査区南部中央において検出した。SK4の西約0.3mに位置する。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-0°を示す。径は0.85m前後で、検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と黒色(10YR2/1)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで細礫も含まれる。出土遺物はみられなかった。

6. II区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

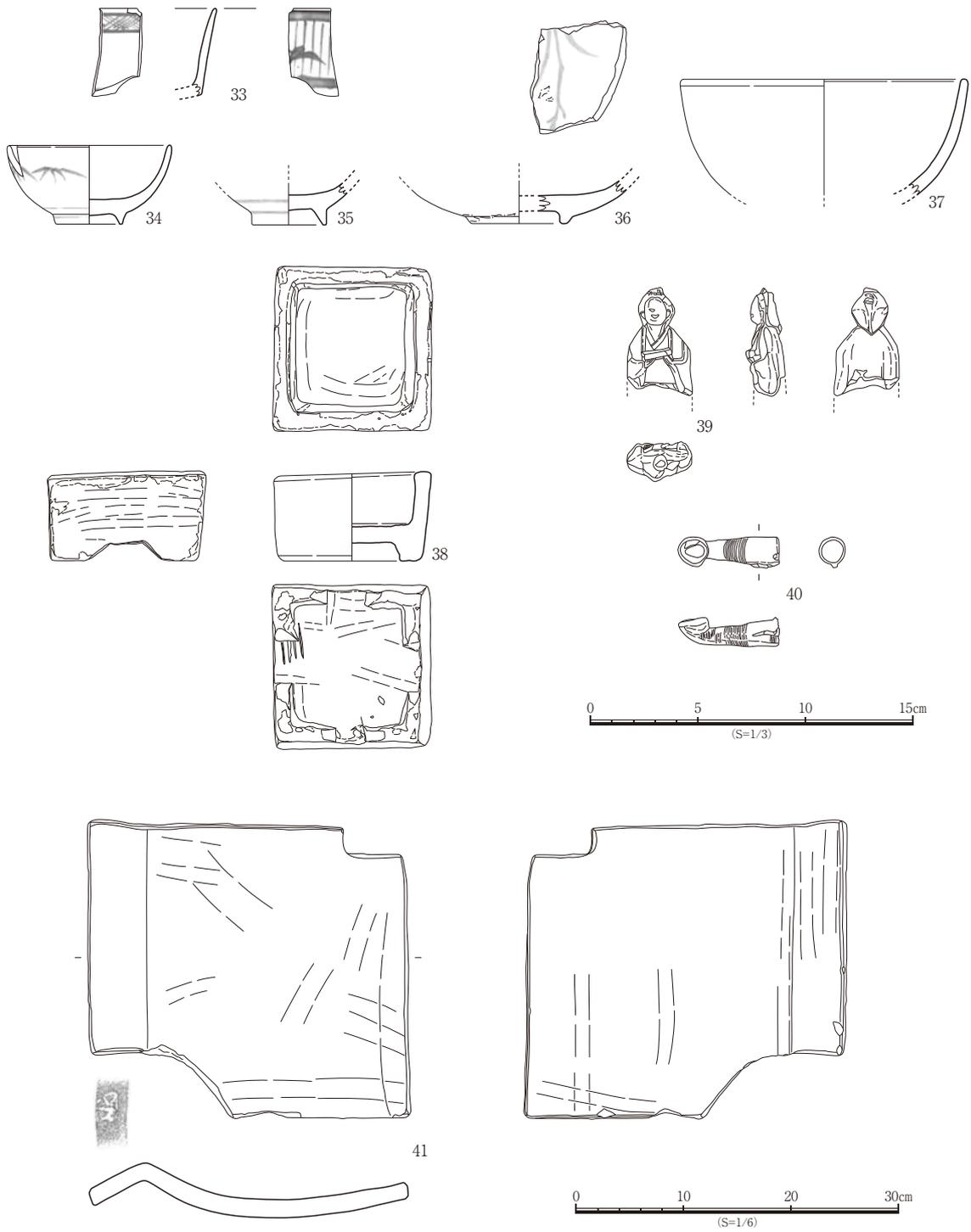


図5-21 II区SK1・2出土遺物実測図

SK6 (図5-22)

調査区南部中央において検出した。SK5の西約0.3mに位置する。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-83°-Eを示す。長径は0.77m、短径0.67mで、検出面から底面までの深さは約13cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と黒色(10YR2/1)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで細礫も含まれる。出土遺物はみられなかった。

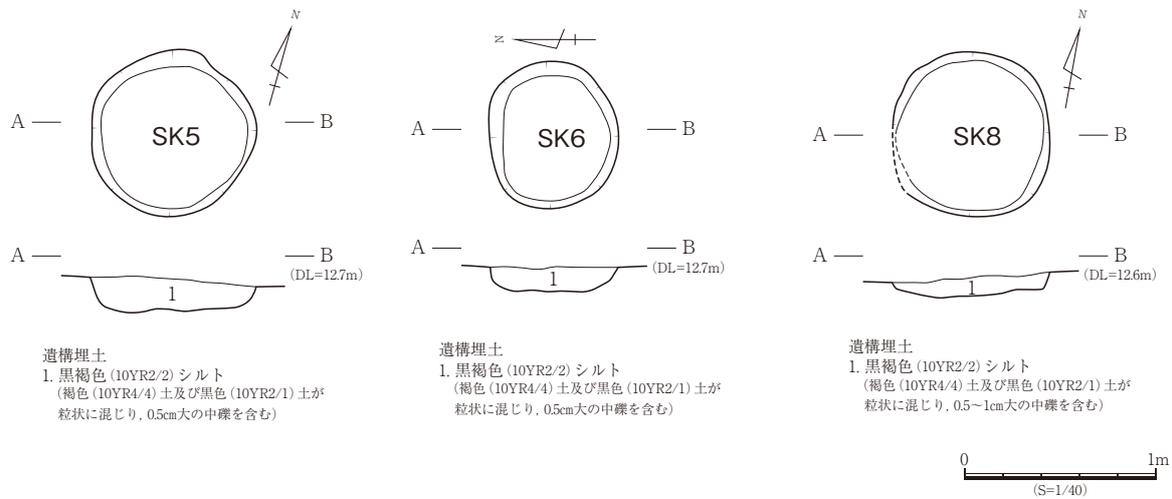


図5-22 II区SK5・6・8

SK8 (図5-22)

調査区南部中央において検出した。SK4の南東約0.7mに位置する。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-11°-Wを示す。径は0.80m前後で、検出面から底面までの深さは約15cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と黒色(10YR2/1)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで細礫も含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK9 (図5-23)

調査区南端部中央の調査区壁際において検出した。確認できた平面形からは楕円形状を呈すると考えられる。長径は0.90m、短径0.60m以上で、検出面から底面までの深さは約25cmを測る。埋土は褐色土(10YR4/4)が混じる黒色(10YR2/1)である。遺物は土師質土器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図5-24 42)

42は土師質土器の杯である。底部は平底で、切り離しは回転糸切りである。口縁部にかけて外方に開き、口縁部端部はやや外反する。外面と内面には回転ナデ調整を施す。

SK10 (図5-25)

調査区の南部中央において検出した。SK9の北東約2.6mに位置する。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-44°-Eを示す。径は0.70m前後で、検出面から底面までの深さは約23cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と黒色(10YR2/1)土が混じる黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK12

調査区南部中央において検出した。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-0°を示す。径は0.75m前後で、検出面から

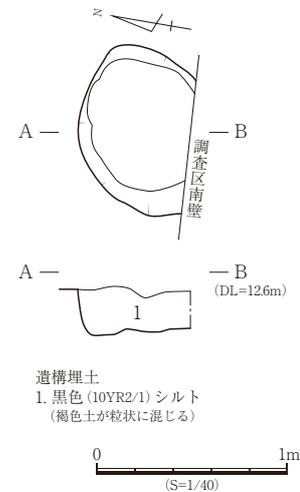


図5-23 II区SK9

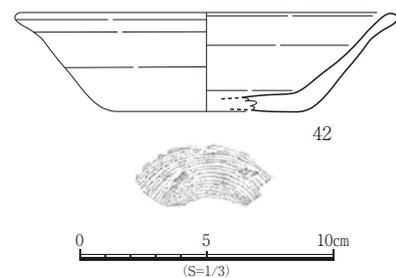


図5-24 II区SK9出土遺物実測図

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

底面までの深さは約 16cm を測る。埋土は黒褐色 (10YR2/3) シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK13 (図 5 - 25)

調査区南端部中央において検出した。SK10 の北東約 0.75m に位置する。平面形は長楕円形を呈し、主軸方向は N - 28° - W を示す。長径は 1.50m, 短径 0.79m で検出面から底面までの深さは約 26 cm を測る。埋土は褐色 (10YR4/4) 土が混じる黒褐色 (10YR2/3) シルトで、細礫も含まれる。遺物は土師質土器片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK14 (図 5 - 25)

調査区南部中央において検出した。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は N - 63° - E を示す。長径は 0.92m, 短径 0.79m で検出面から底面までの深さは約 24 cm を測る。埋土は褐色 (10YR4/4) 土が混じる黒褐色 (10YR3/2) シルトで、細礫も含まれる。遺物は土師質土器片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK15 (図 5 - 25)

調査区南部中央において検出した。SK12 の東側に隣接する。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向

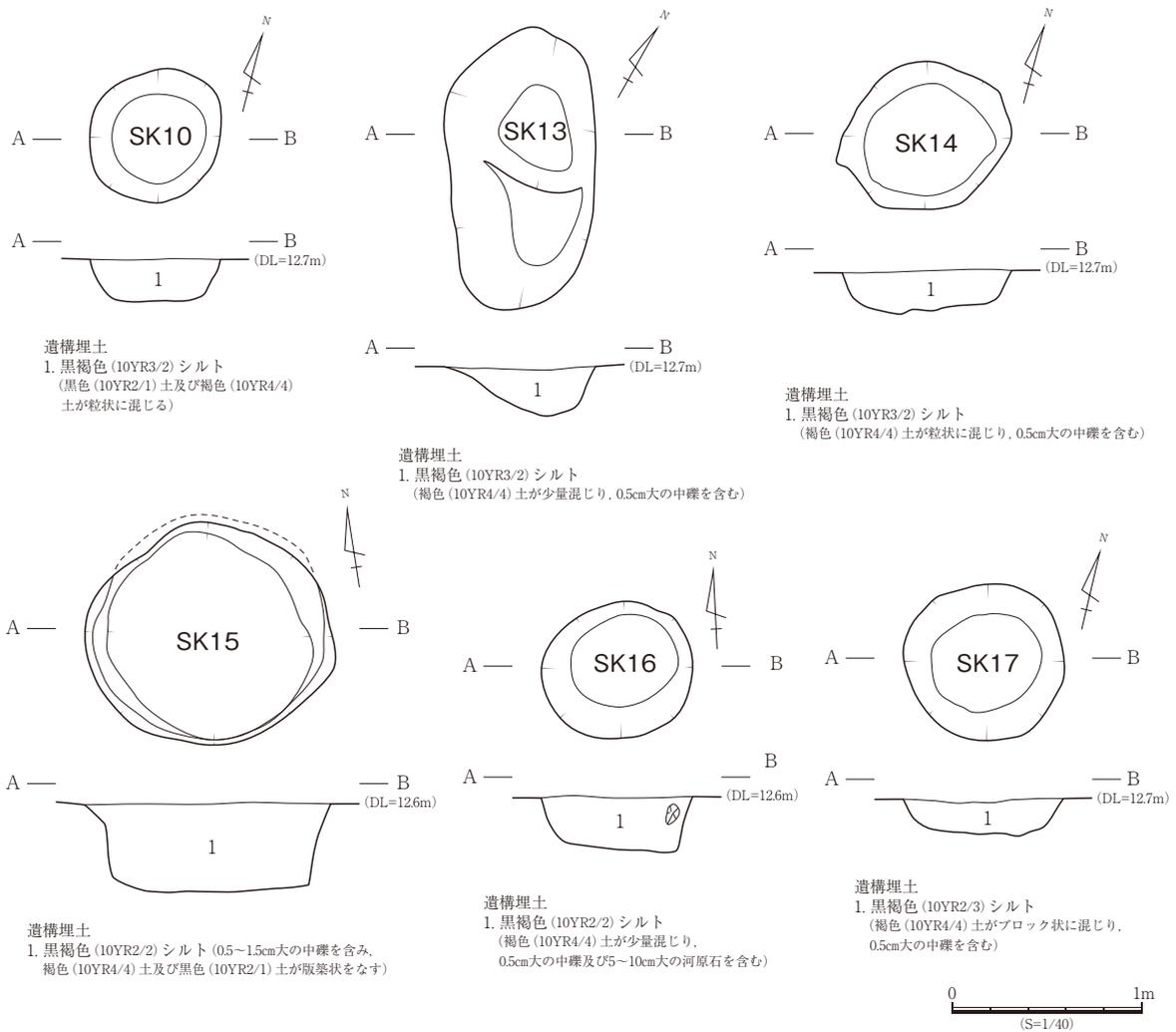


図 5 - 25 II 区 SK10・13~17

はN-84°-Wを示す。長径は1.31m、短径1.19mで検出面から底面までの深さは約48cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土及び黒色(10YR2/1)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで、礫も含まれる。遺物は弥生土器の細片と土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK16 (図5-25)

調査区南端部中央において検出した。SK13の南東約2.7mに位置する。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-68°-Eを示す。長径は0.80m、短径0.71mで検出面から底面までの深さは約30cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで、細礫及び河原石が含まれる。遺物は土師質土器が出土しており、その内皿と杯が図示できた。

出土遺物 (図5-26 43~45)

43は土師質土器の皿である。底部は平底で、回転糸切り痕が残る。口縁部にかけては短く外方にのびる。外面・内面は回転ナデ調整を施す。44は土師質土器の杯の底部である。外面には回転糸切り痕が残る。外面は摩耗しているが、内面にはナデ調整がみられる。45は土師質土器碗と考えられる。口縁部は外方に広がり、口縁部端部は外反する。外面・内面ともに回転ナデ調整を施す。

SK17 (図5-25)

調査区中央部において検出した。SK14の北西約0.8mに位置する。平面形は円形を呈し、主軸方向はN-90°を示す。径は0.85m前後で検出面から底面までの深さは約21cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトに細礫が含まれる。出土遺物はみられなかった。

SK18 (図5-27)

調査区南東部において検出した。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-90°を示す。径は0.95m前後で、検出面から底面までの深さは約37cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)土及び褐色(10YR4/4)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトで、土器細片と細礫が含まれる。遺物は弥生土器と土師質土器が出土しており、その内土師質土器の杯と碗が図示できた。

出土遺物 (図5-28 46~48)

46は土師質土器の杯である。底部外面には回転糸切り痕が残る。外面は摩耗し、内面には回転ナデ調整がみられる。47も同じく土師質土器の杯である。底部外面は摩耗するが、回転糸切り痕が残る。内面は黒色化している。炭素吸着か。48は土師質土器の碗である。底部外面には断面三角形の高台を貼付している。外面・内面は摩耗する。

SK20 (図5-27)

調査区南東部において検出した。SK18の北東約1.0mに位置する。平面形は概ね円形を呈し、主軸方向はN-57°-Eを示す。径は0.85m前後で、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土と褐灰色が少量混じる黒褐色(10YR2/3)シルトを含む。出土遺物はみられなかった。

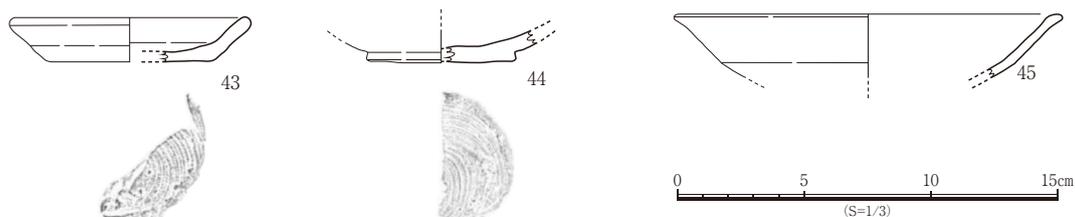


図5-26 II区SK16出土遺物実測図

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

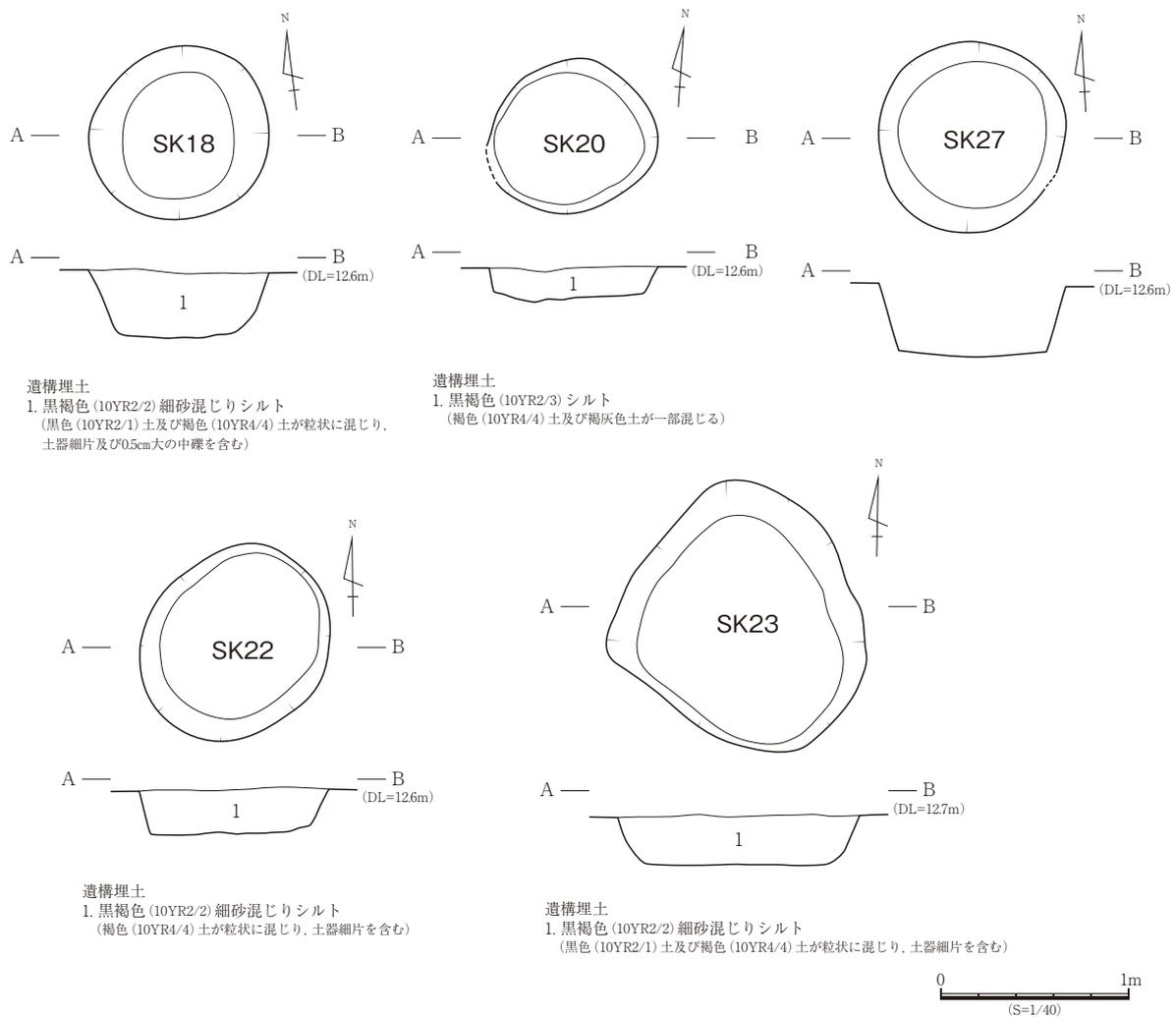


図5-27 II区SK18・20・22・23・27

SK22 (図5-27)

調査区南東部において検出した。SK18の北約1.0mに位置する。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-46°-Eを示す。長径1.09m、短径0.94mで検出面から底面までの深さは約26cmを測る。埋土は褐色(10YR4/4)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器と土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

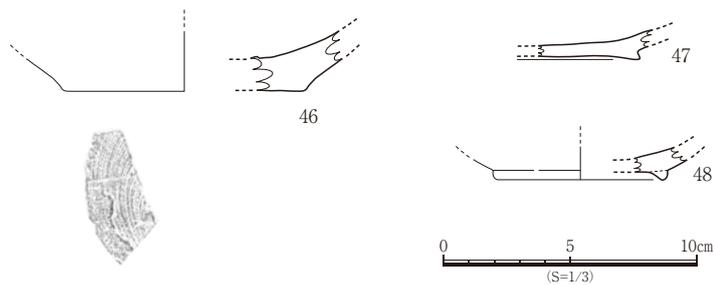


図5-28 II区SK18出土遺物実測図

SK23 (図5-27)

調査区の中央東部において検出した。SK22の北西約1.6mに位置する。平面形は不整形を呈し、軸方向はN-50°-Wを示す。長径は1.33m、短径1.25mで検出面から底面までの深さは約30cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)土及び褐色(10YR4/4)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質

土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK27 (図5-27)

調査区の中央東部において検出した。SK23の北東約0.5mに位置する。平面形は円形を呈し、軸方向はN-3°-Eを示す。径は約1.0mで、検出面から底面までの深さは約40cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。出土遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK28 (図5-29)

調査区II-N-2区において検出した。SK31と調査区を東西に直線的にのびるSD12をきる。平面形は円形を呈し、主軸方向はN-2°-Wを示す。径は約2.0mで、検出面から底面までの深さは約52cmを測る。また底面には深さは3~8cmを測る周溝が掘られている。埋土は褐色(10YR4/6)土と礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトが主体で、下層にはより褐色土が多く含まれる。遺物は土師質土器、染付、金属製品が出土しており、その内土師質土器杯、染付碗、銭貨が図示できた。51の銭貨は基底面直上より出土している。

出土遺物 (図5-30 49~52)

49は土師質土器の杯である。底部は平底で、外面に回転糸切り痕が残る。口縁部は外上方に開き、口縁部端部はやや外反する。外面・内面ともに回転ナデ調整がみられる。50は染付碗の口縁部である。外面には二重の圏線文を施す。51・52は寛永通宝である。ともに完形であるが、51の通と宝は摩耗する。

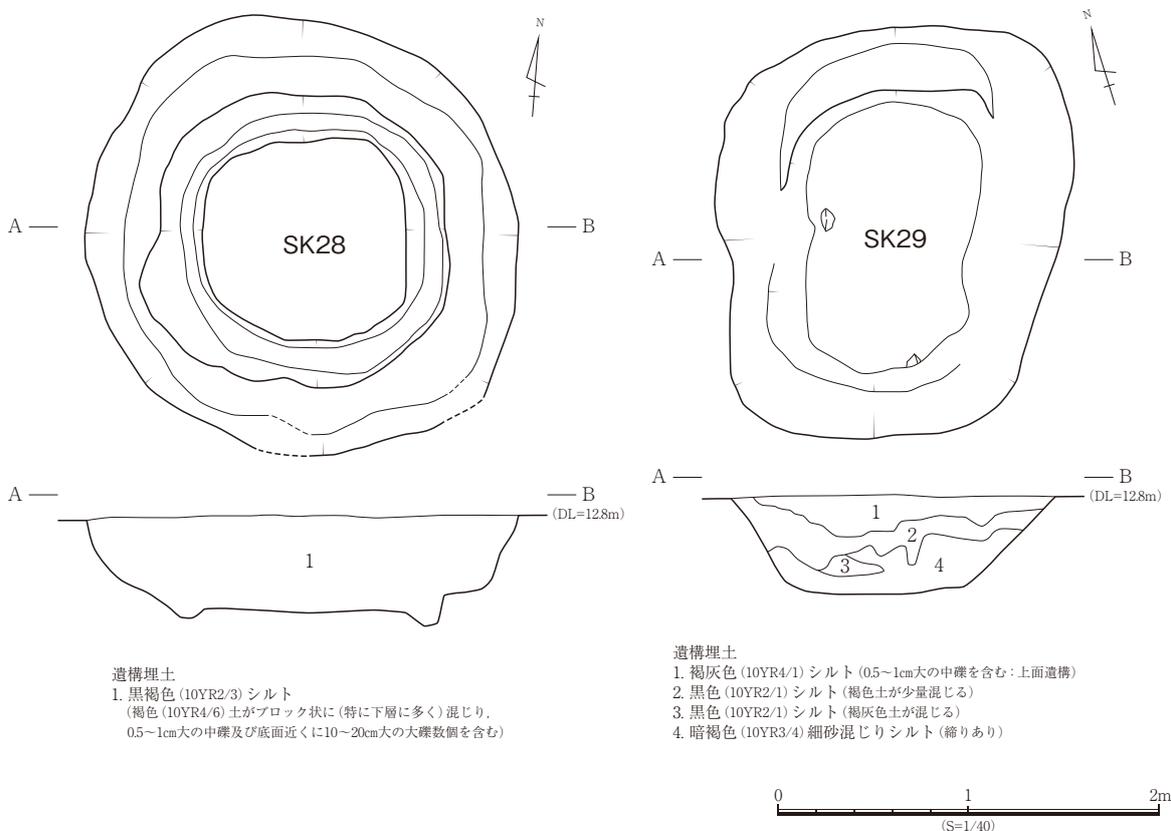


図5-29 II区SK28・29

6. II区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

SK29 (図5-29)

調査区II-N-2区において検出した。SK31の西側に位置し、南東部はP71ときり合い、調査区を東西にのびるSD12と南北にのびるSD13をきる。遺構の上面は後世の攪乱を受けていた。平面形は隅丸方形形状を呈し、主軸方向はN-8°-Eを示す。長径は2.18m、短径1.84mで、検出面から底面までの深さは約53cmを測る。遺構の北側は一部テラス状で、段を呈す。埋土は褐色土が混じる黒色(10YR2/1)シルトと細砂混じりの暗褐色(10YR3/4)シルトで

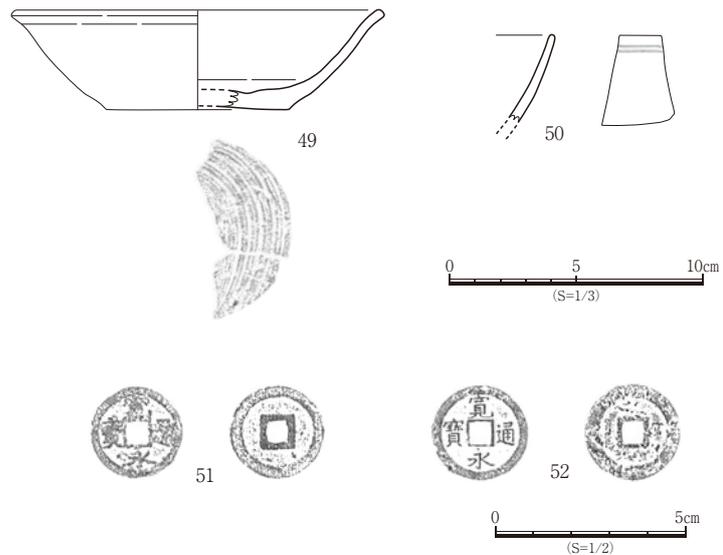


図5-30 II区SK28出土遺物実測図

ある。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK31 (図5-31)

調査区II-N-2区において検出した。SK29の東側に位置し、遺構の大半はSK28にきられる。平面形は不整長方形を呈し、主軸方向はN-85°-Wを示す。長径3.76m、短径2.03mで、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。埋土は褐色(10YR4/6)土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトと0.5~1cm大の礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK32 (図5-31)

調査区中央部西側において検出した。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-80°-Wを示す。長径は0.89m、短径は0.77mで検出面から底面までの深さは約19cmを測る。埋土は褐色(10YR4/6)土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK33 (図5-31)

調査区中央西側において検出した。SK32の南西約2.4mに位置し、調査区の南東部をL字状にのびるSD2の北端に接する。平面形は不整形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを示す。一辺が1.1m前後で、遺構の南部はテラス状の段を呈する。検出面から底面までの深さは約55cmを測る。埋土は黒褐色と褐色シルトが混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK34 (図5-32)

調査区中央西側において検出したハンダ土坑である。遺構の西側半分はSX6にきられる。遺構上面の周囲には10~15cm大の石がみられる。平面形は残存形状から円形状と推定される。残存径は南北が1.53m、東西は0.82mで、検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は5~10cm、15cm大の礫及びハンダ土を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。遺物は土師質土器、陶磁器が出土しており、その内染付碗、陶器碗、播鉢が図示できた。

出土遺物 (図5-33 53~56)

53は染付の丸形あるいは筒形碗である。外面・内面ともに釉を施し、口縁部外面には圏線間に格子目状の文様がみられる。54は陶器の丸形碗である。底部は削り出し高台で、畳付けを除き外面・内

面に釉を施す。55は播鉢である。口縁部は上下に肥厚し、外面に2条の沈線を施す。内面は口縁部下から全面に播目を施す。播目上端にはナデ調整がみられる。56は陶器の甕である。口縁部は直立してのび、端部は左右に肥厚する。外面は体部に沈線を施し、口縁部下には径2cmの浮文を貼付する。内面はナデ調整で、体部にはタタキ目が残る。全面に褐釉を施す。

SK38

調査区中央において検出した。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN-18°-Eを示す。径は0.90m前後で検出面から底面までの深さは19cmを測る。埋土は褐色土及び黒色土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK40 (図5-34)

調査区の中央部にいて検出した。SK5の北側約1.0mに位置する。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-14°-Eを示す。長径は0.97m、短径0.70mで、検出面から底面までの深さは約26cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトと褐色(10YR4/4)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK41 (図5-34)

調査区の中央部より検出した。平面形は隅丸方形形状を呈し、主軸方向はN-88°-Eを示す。長径は2.23m、短径1.92mで検出面から底面までの深さは約11cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

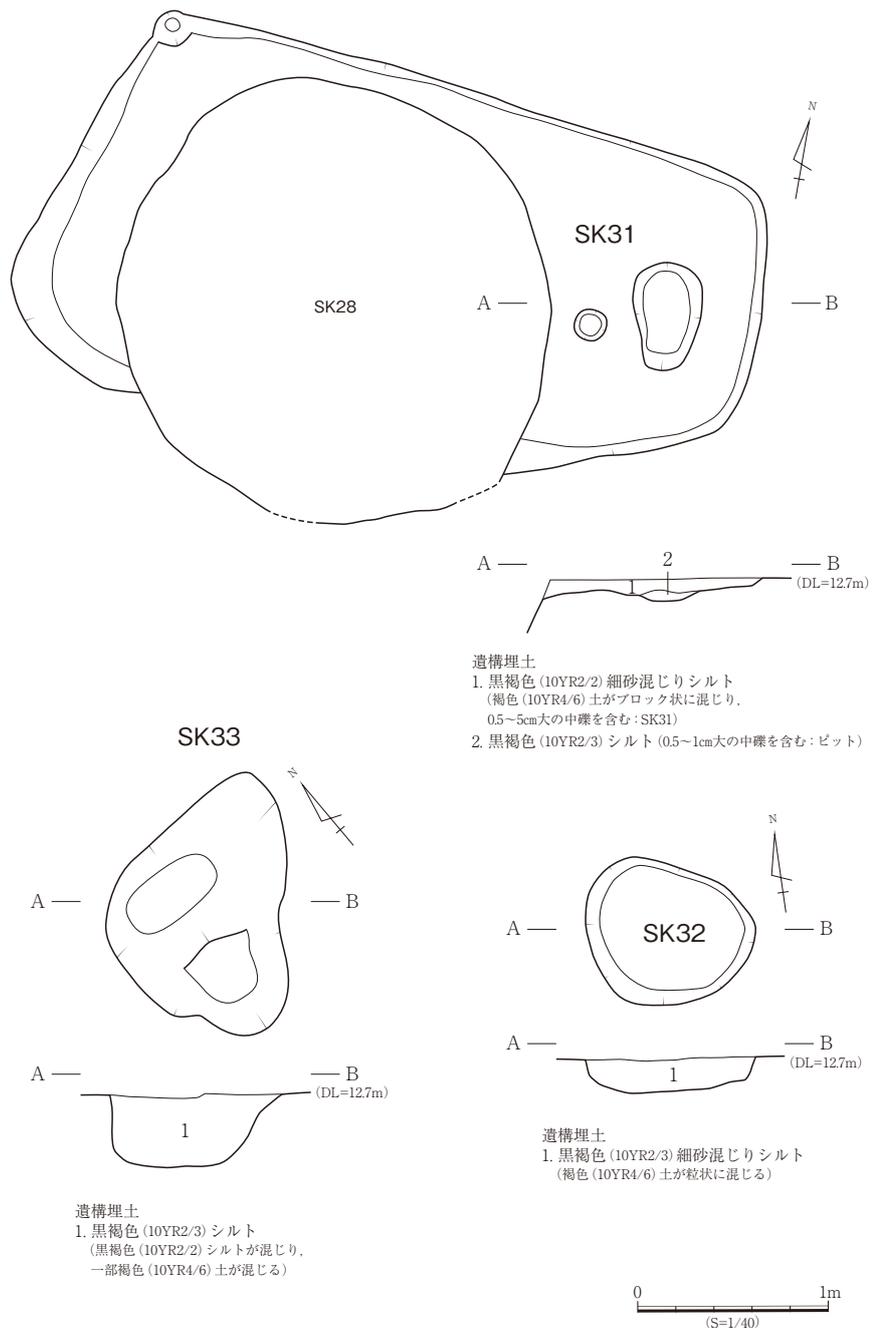


図5-31 II区SK31~33

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

SK42 (図 5 - 34)

調査区の中央北部において検出した。平面形は隅丸形状を呈し、主軸方向は $N - 86^\circ - W$ を示す。長辺は 1.40m、短辺 1.19m で検出面から底面までの深さは約 8cm を測る。埋土は褐色土がブロックで混じる黒褐色 (10YR2/2) シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK43 (図 5 - 34)

調査区の中央東部において検出した。上面は後世の水道工事等の攪乱を受けている。平面形は円形を呈し、主軸方向は $N - 73^\circ - E$ を示す。径は 1.0m 前後で、検出面から底面までの深さは約 20cm を測る。埋土は 5~10cm 大の礫を含む黒褐色 (10YR2/3) シルトと暗褐色 (10YR3/4) シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK45 (図 5 - 34)

調査区中央部において検出した。平面形は円形状を呈し、主軸方向は $N - 90^\circ$ を示す。径は 0.90m 前後で、検出面から底面までの深さは約 21cm を測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色 (10YR2/2) シルトが主体である。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK46 (図 5 - 34)

調査区北部中央端において検出した。遺構の大半は調査区外にのびると考えられる。残存径は南北 0.62m 以上、東西は約 2.0m で検出面から底面までの深さは約 34~45cm を測る。埋土は暗褐色粘質土が混じる黒褐色 (10YR2/2) を主体とする。断面セクションからは遺構のきり合いが考えられる。遺物は陶磁器と金属製品が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SK47 (図 5 - 35)

調査区中央部において検出した。平面形は隅丸形状を呈し、主軸方向は $N - 89^\circ - E$ を示す。一辺は 0.85m 前後で、検出面から底面までの深さは約 17cm を測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色 (10YR2/3) シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK48 (図 5 - 35)

調査区中央東部において検出した。平面形は円形状を呈し、主軸方向は $N - 90^\circ$ を示す。径は 0.85m 前後で、検出面から底面までの深さは約 14cm を測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色 (10YR2/3) シルトである。出土遺物はみられなかった。

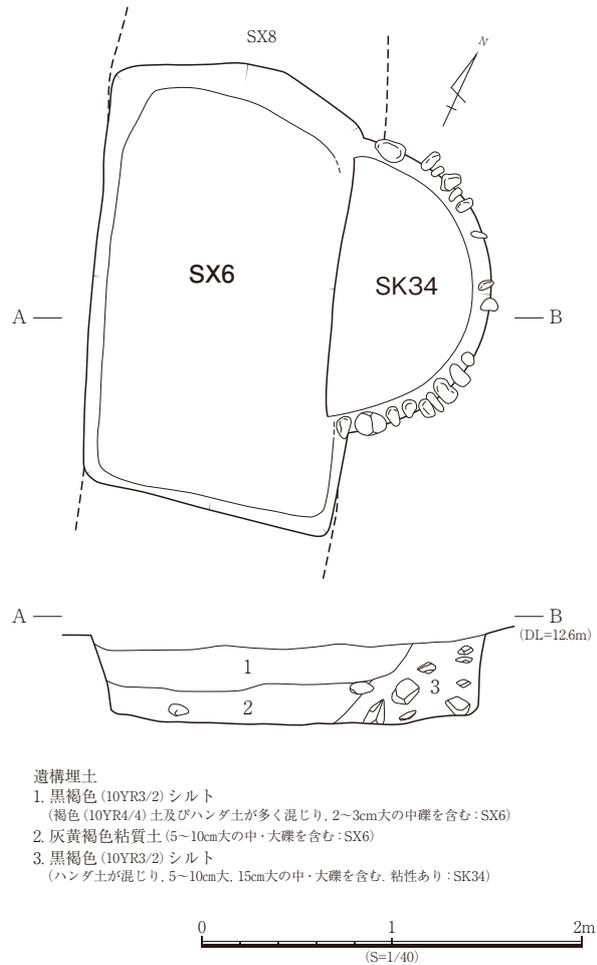


図 5 - 32 II 区 SK34・SX6

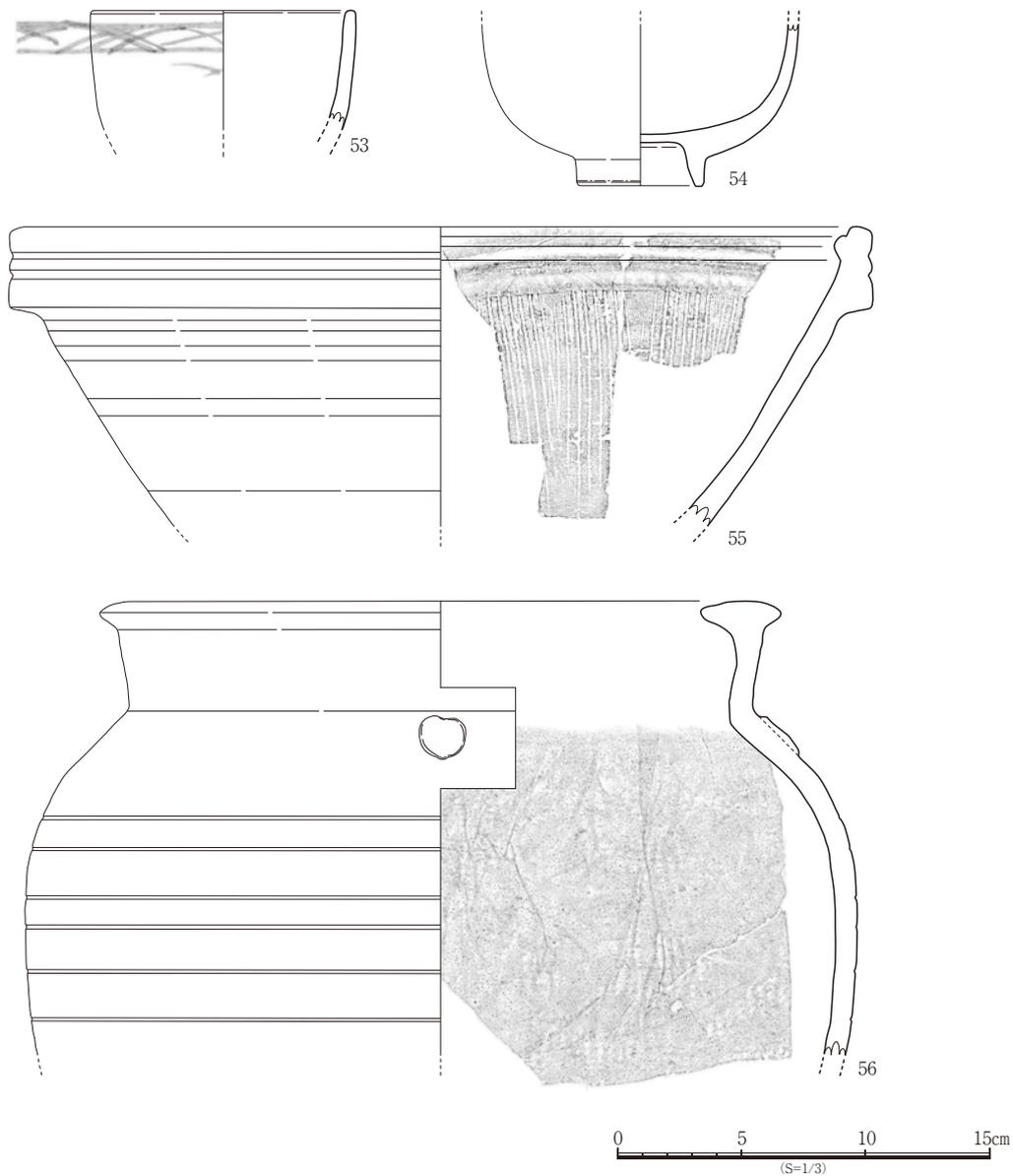


図5-33 II区SK34出土遺物実測図

SK49 (図5-35)

調査区中央東部において検出した。SK48の東側約0.7mに位置する。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN-5°-Eを示す。径は1.10m前後で、検出面から底面までの深さは約23cmを測る。埋土は褐色土及び黒色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK50 (図5-35)

調査区中央東部において検出した。SK51の南西約0.45mに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-70°-Wを示す。一辺は0.80m前後で、検出面からの底面までの深さは約21cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK51 (図5-35)

調査区中央東部において検出した。SK50の北東約0.45mに位置する。平面形は楕円形を呈し、主

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

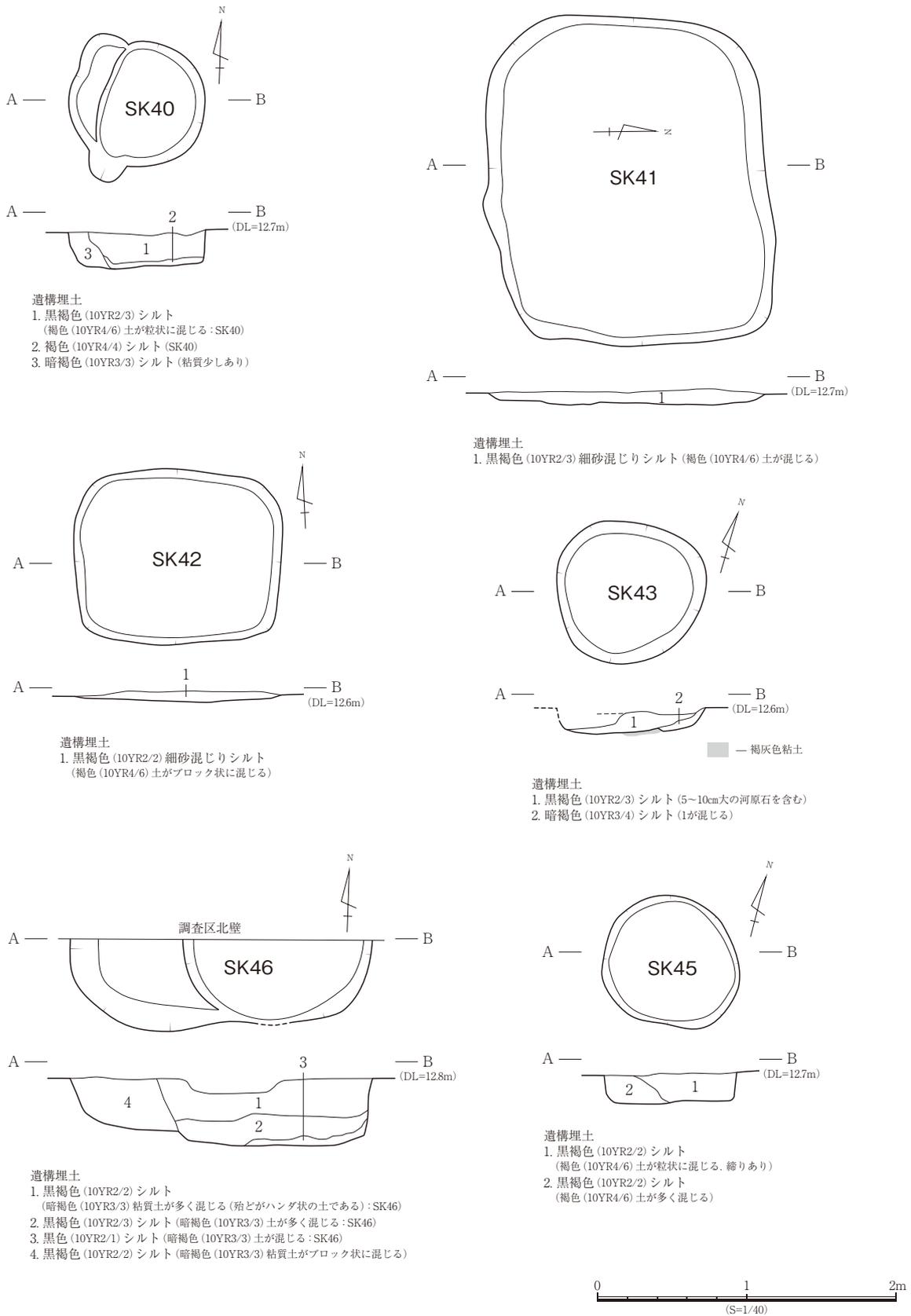


図5-34 II区SK40~43・45・46

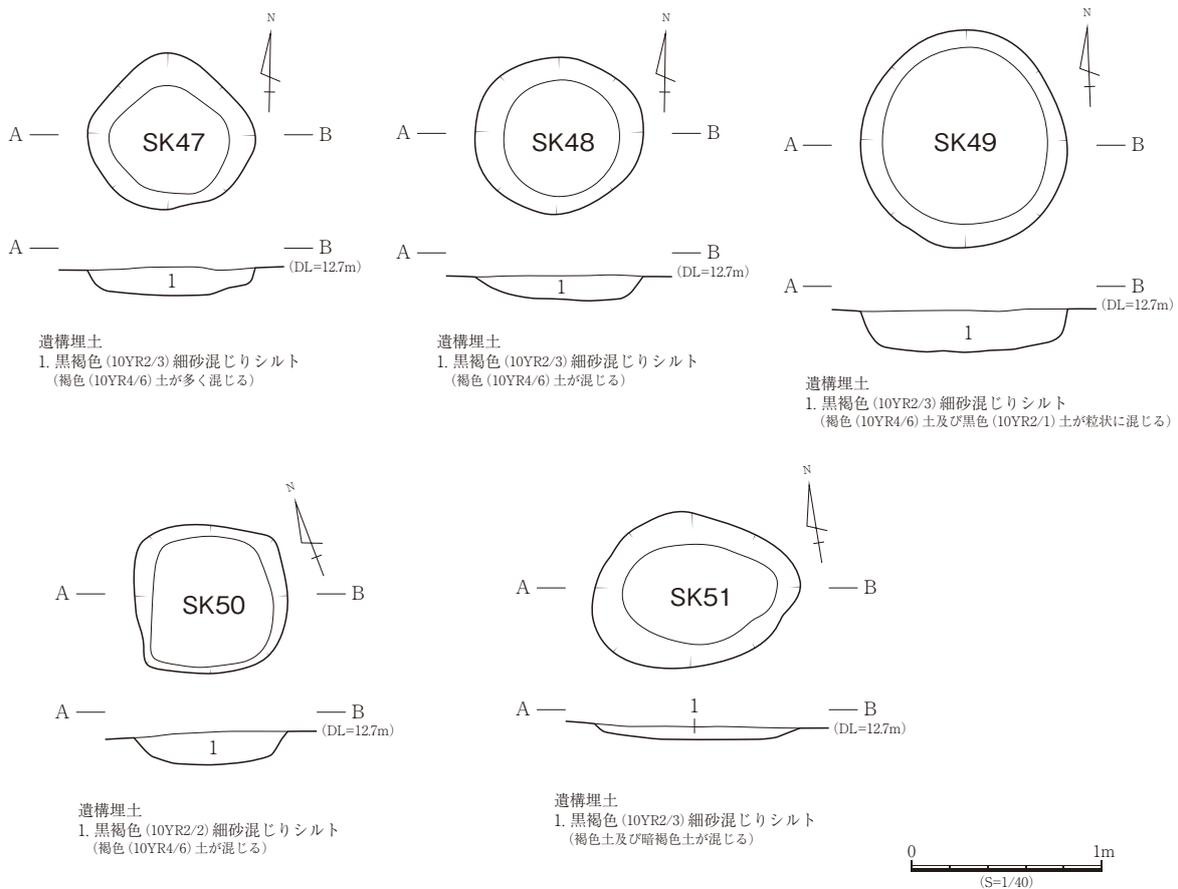


図5-35 II区SK47～51

軸方向はN - 87° - Wを示す。長径は1.11m, 短径0.83mで, 検出面から底面までの深さは約9cmを測る。埋土は褐色土及び暗褐色土が含まれる黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK52 (図5-36)

調査区北部において検出した。平面形は楕円形状を呈し, 主軸方向はN - 89° - Wを示す。長径は1.58m, 短径1.40mで, 検出面から底面までの深さは37cm前後を測る。遺構の西側はテラス状を呈し, 底面には浅い溝が巡る。埋土は暗褐色土のハンダ土と0.5~1cm大の礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが, 図示でき得るものはなかった。

SK53 (図5-36)

調査区中央東部において検出した。SK49の東側約0.4mに位置する。平面形は楕円形状を呈し, 主軸方向はN - 59° - Wを示す。長径は1.04m, 短径0.89mで, 検出面から底面までの深さは約37cmを測る。埋土は褐色土と黒色土及び0.5~1cm大の礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器及び土師質土器が出土しており, その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図5-37 57・58)

57は土師質土器の杯である。平底で, 底部には回転糸切り痕が残る。内面底部には凹凸がみられる。58も土師質土器の杯である。口縁部はやや外反している。外面・内面には回転ナデ調整がみられる。

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (2) 土坑

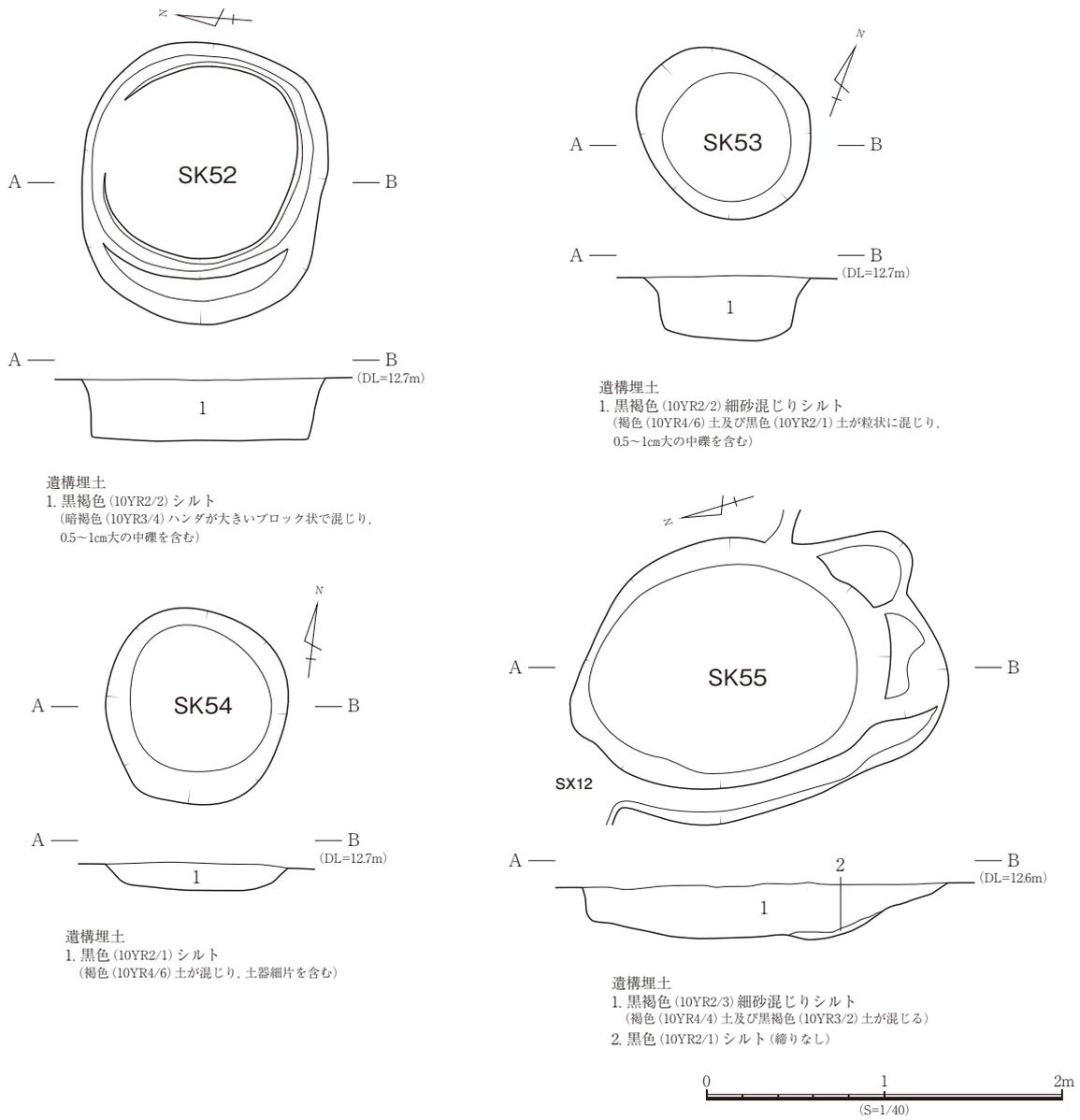


図5-36 II区SK52~55

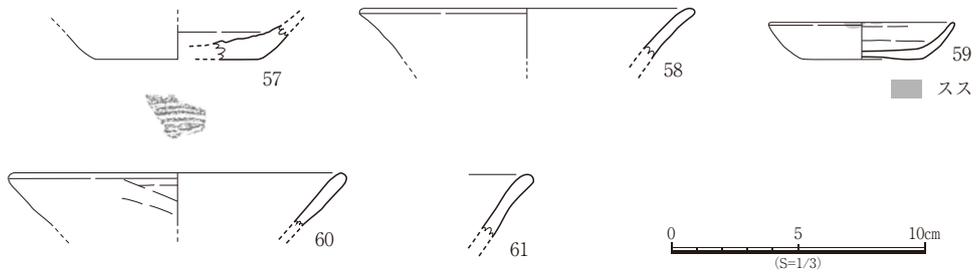


図5-37 SK53・54出土遺物実測図

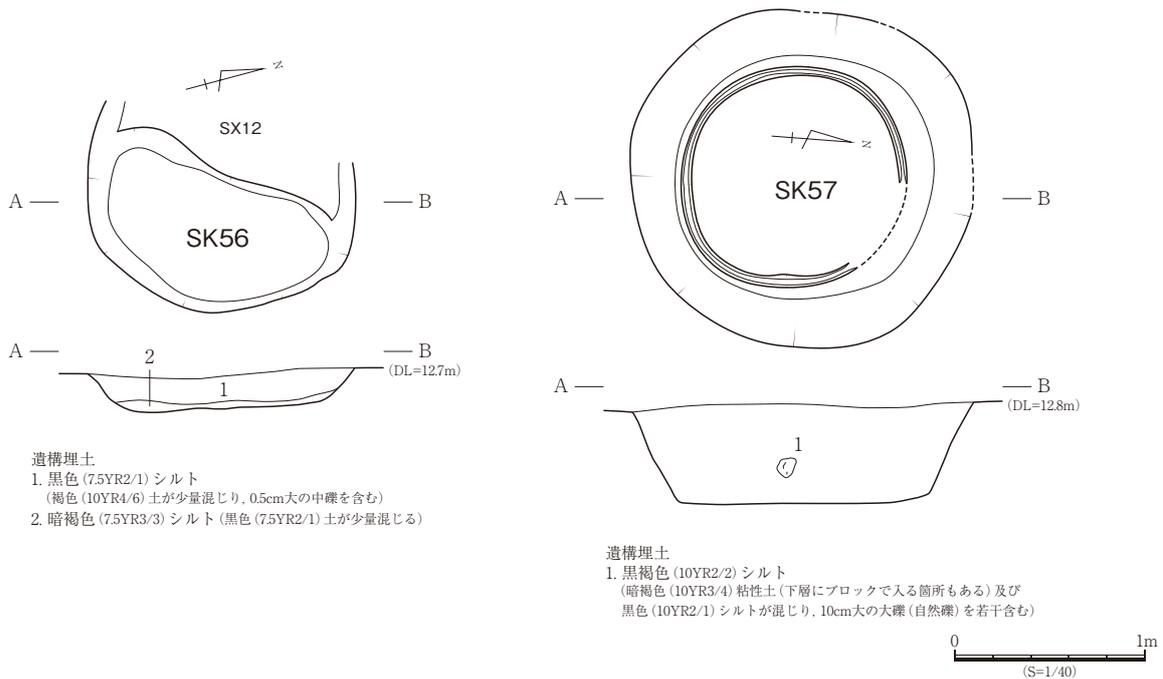


図5-38 II区SK56・57

SK54 (図5-36)

調査区中央東部において検出した。SK53の東側約0.3mに位置する。平面形は円形状を呈し、主軸方向はN-2°-Eを示す。径は1.05m前後で、検出面から底面までの深さは約16cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は土師質土器が出土しており、その内皿と杯が図示できた。

出土遺物 (図5-37 59~61)

59は土師質土器の皿である。平底で、口縁部にかけて斜め上方に短くのびる。外面と内面は回転ナデ調整で、口縁部端部には一部スガみられる。灯明皿の可能性がある。60・61は土師質土器の杯である。60の外面と内面にはナデ調整がみられる。61の口縁部はやや外方に開く。外面と内面にもナデ調整がみられる。

SK55 (図5-36)

調査区の北部において検出した。SK52の南方約3.9mに位置する。平面形は楕円形状を呈し、主軸方向はN-3°-Eを示す。長径は2.07m、短径1.40mで、検出面から底面までの深さは約35cmを測る。埋土は褐色土及び黒褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトと黒色(10YR2/1)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK56 (図5-38)

調査区の北部において検出した。SK55の東側に位置する。遺構の西側はSK55にきられるため平面形は不明である。残存径は長径1.41m、短径0.82mで、検出面から底面までの深さは25cmを測る。褐色土と細礫を含む黒色(7.5YR2/1)シルトと黒色土が少量含まれる暗褐色(7.5YR3/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SK57 (図5-38)

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

調査区北東部において検出した。平面形は円形を呈し、主軸方向はN-0°を示す。径は1.80m前後で、検出面から底面までの深さは約53cmを測る。基底面に浅い溝が巡る。埋土は暗褐色粘質土と黒色シルト及び10cm大の礫が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。出土遺物はみられなかった。

(3) 溝跡

SD1 (図5-39)

調査区南西部において検出した。調査区南壁側から北側に向かって直線的にのびる溝跡で、遺構の南部は調査区外に続くと考えられる。中央から南側は2条の溝跡を呈するが、北端は合流し1条になる。確認延長は20.25m、幅0.67~1.57mで、検出面から底面までの深さは10.7~29.2cmを測る。埋土は褐灰色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトが中心である。埋土中には、自然石が集中して出土した箇所もみられた。出土遺物は土師質土器が出土しており、その内杯と甕が図示できた。

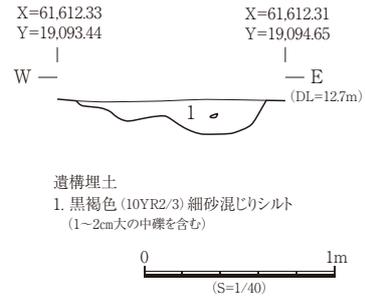


図5-39 II区SD1

出土遺物 (図5-40 62~67)

62~64は土師質土器杯の口縁部である。62は外面と内面にナデ調整がみられる。63は口縁部外面には強いナデ調整による浅い段状を呈する。64は外面にナデ調整がみられるが、内面は摩耗のため調整等は不明瞭である。65は土師質土器杯の底部である。平底で、外面には回転糸切痕が残る。内面はナデ調整がみられる。66は土師器甕の口縁部である。口縁部端部をやや上方に肥厚させている。外面と内面にはナデ調整がみられる。67は土師質土器の杯と考えられる。器壁が厚く、底部には回転糸切り痕が残る。外面と内面には回転ナデ調整を施す。

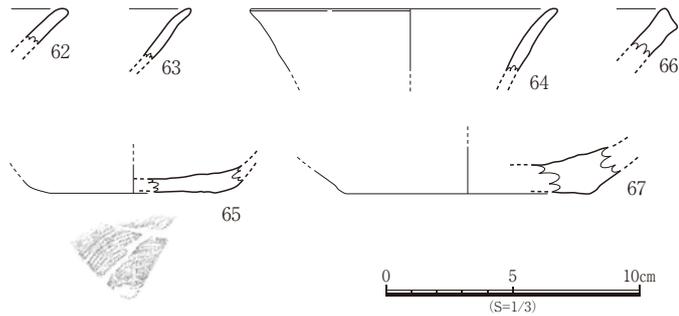
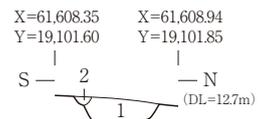


図5-40 II区SD1出土遺物実測図

SD2 (図5-41)

調査区南西部において検出した。ハンダ土坑SK1と調査区南部を東西に横断するSD3をきる。調査区中央南壁から西側に向かって17.0mのび、さらに北側に屈曲し13.0mのびる。遺構の南部は調査区外に続くと考えられる。幅は0.34~0.65mで、検出面から底面までの深さは5.2~15.6cmを測る。埋土は褐色及び黄褐色土が混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は弥生土器、土師質土器、陶磁器が出土しており、その内弥生土器甕、土師質土器杯、陶器火入れが図示できた。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2) 細砂混じりシルト
2. 褐灰色土

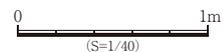


図5-41 II区SD2

出土遺物 (図5-42 68~73)

68は弥生土器の甕である。外面頸部までタタキ目が認められる。口縁部外面はナデ調整で、内面は摩耗し、一部に指頭圧痕がみられる。

器壁は厚い。69も弥生土器の甕である。口縁部はやや外反し、外面は口縁部下までタタキ目が認められる。口縁部は外面内面ともにナデ調整で、体部内面は指頭圧痕とナデ調整がみられる。70は土師質土器杯の底部である。外面には回転糸切り痕が残し、内面と外面は摩耗するが、外面の一部にナデ調整がみられる。71は土師質土器の杯あるいは椀である。体部は内湾し、口縁端部は端反りしている。内面と外面は回転ナデ調整が施される。72も同じく土師質土器の杯あるいは椀である。外面はナデ調整で、内面は摩耗している。器壁は薄いつくりを呈する。73は陶器の口縁部である。筒形と推定され、外面に施釉、内面は無釉である。火入れの可能性が考えられる。

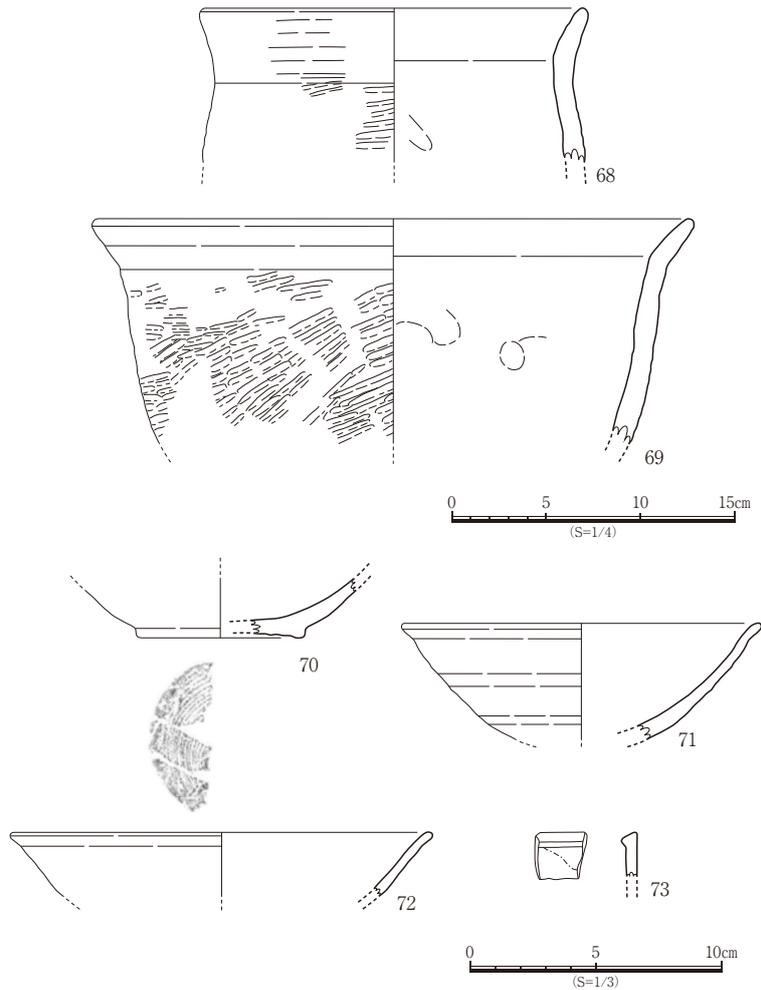


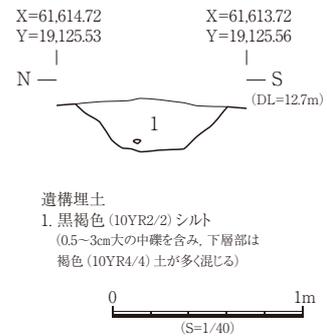
図5-42 II区SD2出土遺物実測図

SD3 (図5-43)

調査区南部において検出した。調査区を東西に直線的にのびる溝跡で、遺構の西部はSD1とSX3にきられ、SD2とSD6・8・9をきる。遺構の東部は調査区外に続くと考えられる。確認延長は60.73m、幅0.43～0.99m、検出面から底面までの深さは7.5～27.0cmを測る。埋土は褐色土と黄褐色土及び細礫が混じる黒褐色(10YR3/2)シルトが主体で、下層には黒褐色土が混じる褐色(10YR4/4)土がみられる。また、底面近くには10～20cm大の礫が集中して出土した箇所もある。遺物は土師質土器、瓦器、石製品などが出土しており、その内土師質土器皿・杯、瓦器椀、石斧、叩石が図示できた。

出土遺物 (図5-44 74～89)

74は土師質土器の皿である。平底で外面には回転糸切り痕が残る。器壁はやや厚く、口縁部にかけて外方に短くのびる。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。75～81は土師質土器の杯である。75は口縁部は外方に開く。外面内面ともに回転ナデ調整を施す。76も口縁部は外方に開き、やや外反する。外面と内面は摩耗のため調整等は不明瞭である。77も杯の口縁部である。口縁部はやや外方に広がり、外



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)シルト
(0.5～3cm大の中礫を含み、下層部は褐色(10YR4/4)土が多く混じる)

図5-43 II区SD3

6. II区の検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

面と内面には回転ナデ調整がみられる。78は平底を呈し、底部外面は摩耗する。内面はナデ調整がみられる。79も杯の底部である。外面と内面は摩耗のため調整等は不明瞭である。80は平底を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。外面はナデ調整で、内面はやや摩耗する。81も同じく杯の底部である。底部外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面にはナデ調整がみられる。82は土師質土器の鉢と考えられる。器壁は厚みもち、外面と内面には回転ナデ調整が施される。83～85は瓦器碗である。83は碗の底部で、外面に断面が扁平な三角形の高台を貼付する。内面は摩耗しており、調整は不明瞭

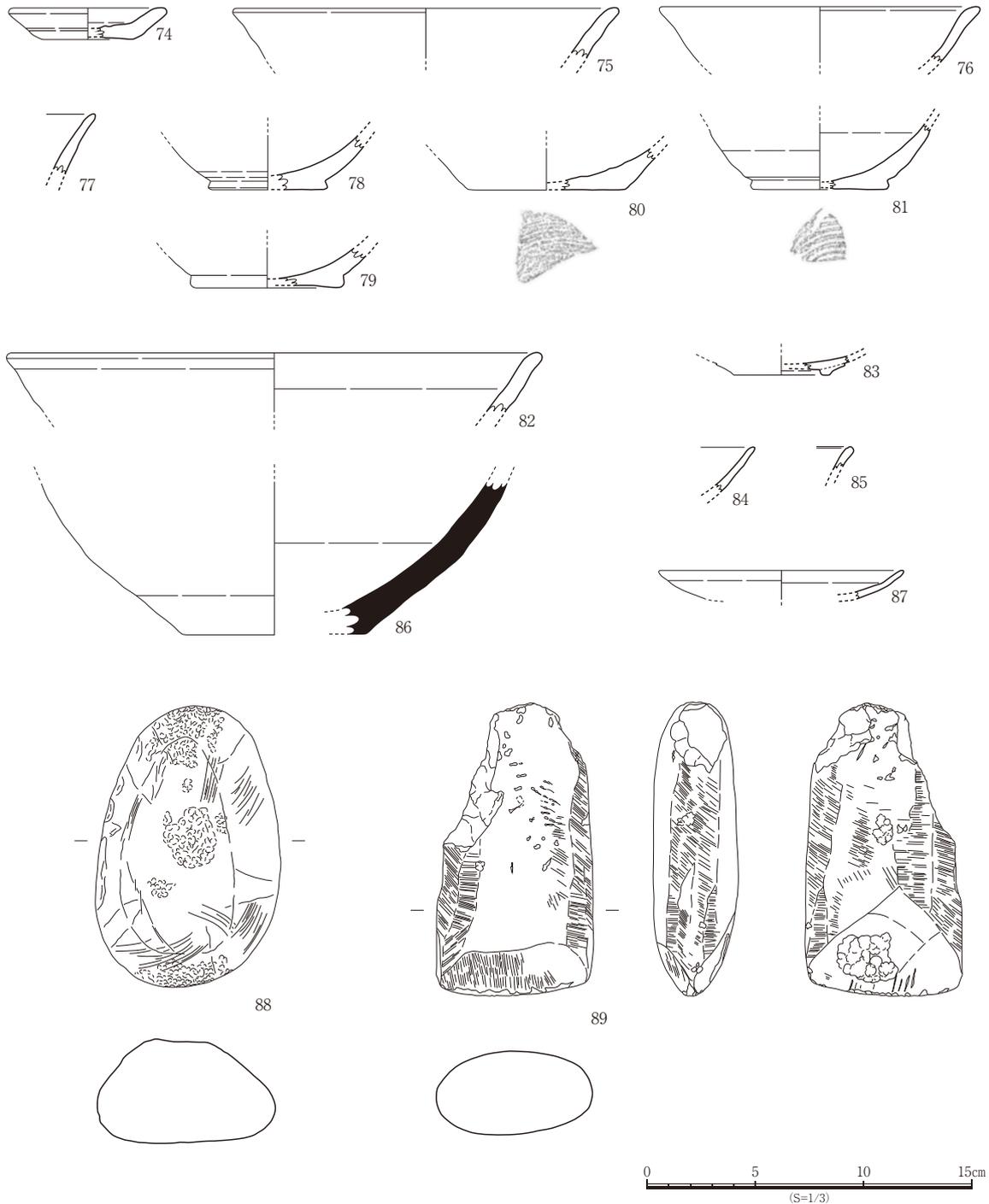


図5-44 II区SD3出土遺物実測図

である。84は碗の口縁部で、胎土は土師質であるが、形状等は瓦器に類似している。外面内面ともにナデ調整がみられる。85は口縁部内面に1条の沈線がみられる。外面内面ともにナデ調整を施す。86は須恵器で壺または鉢の可能性が考えられる。外面内面ともにナデ調整がみられる。87は青磁皿である。全体に薄いつくりを呈し、口縁部は途中内側に折れ、上方に開く。外面内面ともに施釉している。88は叩石である。砂岩製で中央部に敲打による凹みがみられる。側面は一部剥離する。89は大型蛤刃石斧である。緑色岩製である。刃部は一部欠損がみられる。

SD4

調査区南西端において検出した。確認延長は3.05m，幅0.57mで、検出面から底面までの深さは14cmを測る。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD5

調査区中央南部において検出した。東西方向の溝跡で、遺構の東側は後世のカクランによってきられる。確認延長は東西方向1.88m，南北0.35mで、検出面から底面までの深さは11cmを測る。埋土は細砂混じりの暗褐色(10YR3/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD6 (図5-45)

調査区中央南部において検出した。南北方向の溝跡で、北部はSD3によってきられる。確認延長は南北方向2.23m，東西方向0.34mで、検出面から底面までの深さは11cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は土師質土器、瓦器、黒色土器が出土しており、その内土師質土器皿・杯、瓦器碗、黒色土器杯が図示できた。

出土遺物 (図5-46 90～93)

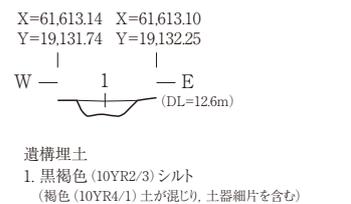
90は土師質土器の皿である。口縁部は外方に短くのびる。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。91は瓦器碗の口縁部である。口縁部外面には強いナデ調整により内側にやや屈曲する。92は黒色土器の口縁部と考えられる。内面には炭素吸着がみられる。外面内面ともにナデ調整を施す。93は土師質土器の杯である。口縁部は外方に開く。外面内面ともに回転ナデ調整を施す。

SD7

調査区南東部において検出した。東西方向の溝跡で、確認延長は3.85m，幅0.21～0.41mで検出面から底面までの深さは6cmを測る。埋土は褐色土が混じる黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD8 (図5-47)

調査区の南東部から中央部にかけて検出した。逆L字またはコの字状を呈する溝跡である。確認延長は東西方向約18.0mで南方向に屈曲し、約13.0mのびてSD3に接する。幅は0.28～0.65mで、検出面から底面までの深さは6.8～31cmを測る。SD3より南側のSD9に接続すると考えられる。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトが主体で、下層は褐色土を含む黒色(10YR2/1)シ



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/3)シルト
(褐色(10YR4/1)土が混じり、土器細片を含む)

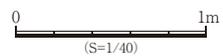


図5-45 II区SD6

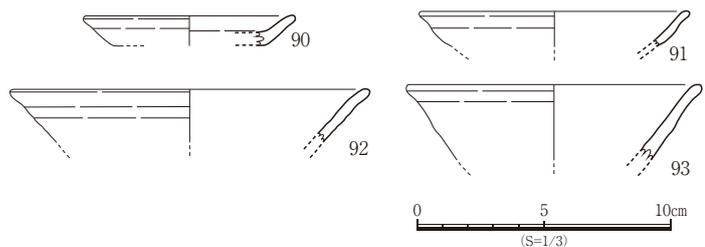


図5-46 II区SD6出土遺物実測図

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

ルトである。遺物は弥生土器, 土師質土器, 瓦器が出土しており, その内土師質土器杯が図示できた。

出土遺物 (図5 - 48 94 ~ 99)

94は土師質土器の杯である。平底を呈し, 外面には回転糸切り痕が残る。体部から口縁部は斜め上方に立ち上がり口縁部に至る。口縁部はやや外反する。外面内面ともに回転ナデ調整を施し, 底部内面には凹凸がみられる。95は同じく土師質土器の杯である。底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部にかけて斜め上方に立ち上がり, 口縁端部はやや肥厚する。外面内面ともに回転ナデ調整を施す。底部内面には凹凸がみられる。96は土師質土器の杯である。底部から体部にかけて斜め上方に立ち上がり口縁部に至る。口縁部はやや外反する。口縁部から体部にかけては回転ナデ調整がみられる。97も土師質土器の杯である。口縁部は外方に開き, 口縁端部はやや外反する。外面と内面は摩耗のため調整は不明瞭である。98は土師質土器の杯である。口縁部は外方に開く。外面内面ともに回転ナデ調整がみられる。99は足高高台の杯あるいは皿である。外面は摩耗し, 内面はナデ調整で脚部内底には上部との接合部に指頭圧痕がみられる。

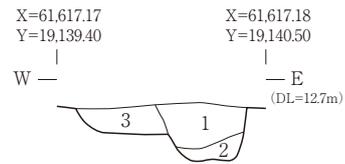
SD9 (図5 - 49)

調査区の南東部において検出した。南北方向の溝跡で, 確認延長は12.4m, 幅0.44~0.66mで, 検出面から底面までの深さは8.8~12cmを測る。遺構の北側はSD8に接続し, 南側は調査区外にのびると推定される。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は弥生土器, 土師質土器, 瓦器が出土しており, その内土師質土器の皿・杯と瓦器碗が図示できた。

出土遺物 (図5 - 50

100 ~ 102)

100は土師質土器の皿である。底部は若干歪みがみられる。外面には回転糸切り痕が残る。平坦な底部から口縁部は外方に大きく開く。外面と内面はナデ調整がみられる。101は土師質土器の杯である。底部はやや摩耗しているが, 回転糸切り痕が残る。内面にはナデ



遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト
(褐色 (10YR4/4) 土が粒状に (3より多く) 混じる: SD8)
2. 褐色 (10YR4/6) シルト
(黒褐色 (10YR2/2) 土が混じり, 0.5cm大の中礫を含む: SD8)
3. 黒褐色 (10YR2/2) 細砂混じりシルト
(褐色 (10YR4/4) 土が粒状に混じる: ピット)

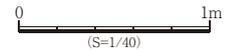


図5 - 47 II 区SD8

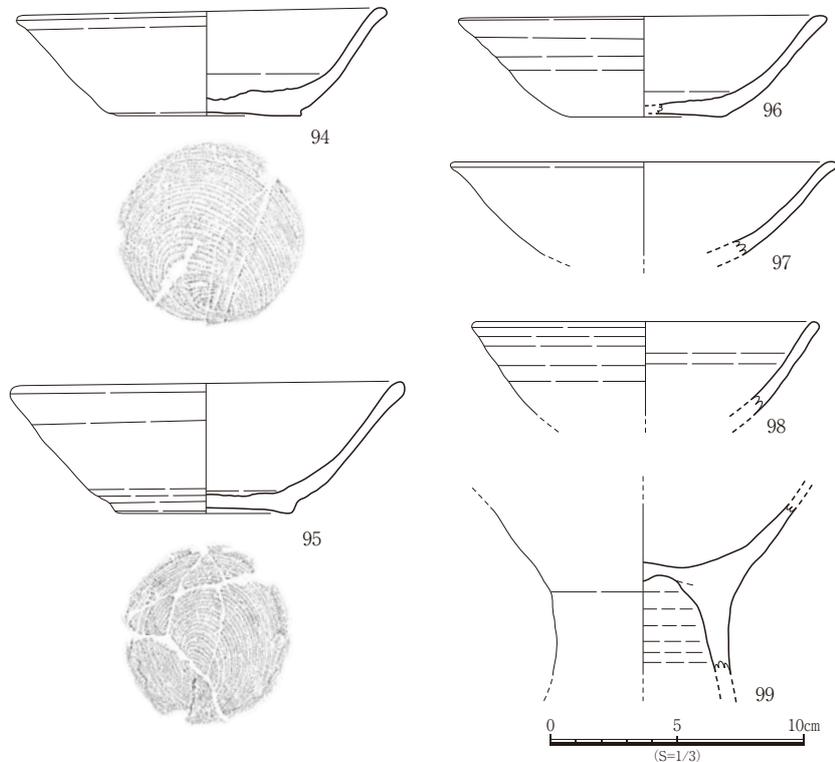


図5 - 48 II 区SD8出土遺物実測図

調整がみられる。102は瓦器椀の底部である。外面には断面三角形の高台を貼付する。外面内面ともに摩耗のため調整は不明瞭である。

SD10 (図5-49)

調査区の南東部において検出した。南北方向の溝で、SD9にきられる。確認延長は3.37m、幅0.37mで、検出面から底面までの深さは15cmを測る。遺構の南側は調査区外にのびると推定される。埋土は褐色土が混じる黒色(10YR2/1)シルトである。

遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD11

北側の調査区N-1区において検出した。南北方向の溝で、確認延長は1.23m、幅0.37m、検出面から底面までの深さは6cmを測る。調査区の外にのびると推定され、また調査区を東西方向にのびるSD12に接続すると考えられる。埋土は黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物はみられなかった。

SD12

北側の調査区N-1区からN-2区にかけて検出した。SK28とSK29にきられる。東西方向の溝で、確認延長はN-1区で2.22m、N-2区は14.69mを測る。幅は0.27~0.38mで、検出面から底面までの深さは6~13.4cmを測る。埋土は黄褐色及び褐色土が混じる黒色(10YR2/1)シルトが主体である。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD13

北側の調査区N-2区において検出した。南北方向の溝で遺構の北側はSK29にきられる。確認延長は1.55m、幅0.30m、検出面から底面までの深さは約8cmを測る。埋土は黒色土と褐色土が含まれる暗褐色(10YR3/3)シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD14

調査区北西部において検出した。東西方向の溝で、東側は上面のカクランによってきられ、西側は調査区外に続くと推定される。確認延長は11.39m、幅0.28~0.45m、検出面から底面までの深さは約15cmを測る。埋土は褐色土が含まれる黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD15

調査区の北東部において検出した。逆L字状を呈する溝で、東西方向に約5.60mのびて南に屈曲し、約9.20mのびる。遺構の南側は二叉状を呈する。幅は0.48~1.00mで、検出面から底面までの深さは5.6~14.7cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺構の南側の延長線上にはSD1が位置しており、同一の溝の可能性も考えられる。出土遺物はみられなかった。

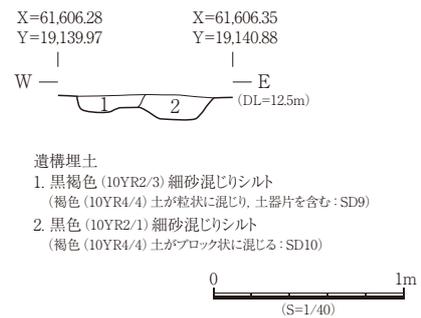


図5-49 II区SD9・10

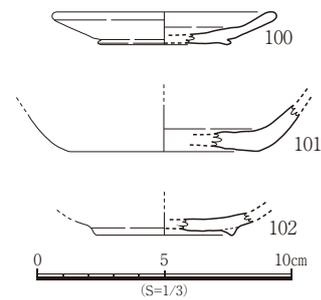


図5-50 II区SD9出土遺物実測図

6. II区の検出遺構と出土遺物 (3) 溝跡

SD16

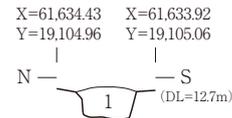
調査区の北西部において検出した。南北方向の溝で、確認延長は2.22m、幅0.37m、検出面から底面までの深さは約6cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD17 (図5-51)

調査区の北西部に位置する。東西方向の溝で、確認延長は11.0m、幅0.31～0.42m、検出面から底面までの深さは6～24cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘質シルトで、下層には褐灰色粘質シルトが含まれる。遺物は土師質土器、須恵器、陶磁器が出土しており、その内、土師質土器杯、焙烙、陶器碗、播鉢が図示できた。

出土遺物 (図5-52 103～108)

103は土師質土器の杯である。底部は平坦で、外面には回転糸切り痕が残る。体部は外方に開き口縁部に至る。外面内面ともに回転ナデ調整がみられる。104も同じく土師質土器の杯である。器壁が薄く、体部は外方に開き口縁部に至る。外面内面には回転ナデ調整を施す。105は陶器の小型丸碗である。外面内面ともに施釉しており、口縁部外面には釉垂れがみられる。106は陶器の丸形碗である。底部は削り出し高台で、高台を除き施釉がみられる。内面見込みには2箇所が目跡が残る。107は播鉢である。口縁部は上下に肥厚し、外面に2条の沈線、内面1条の沈線がみられる。内面は全面に播目を施す。108は焙烙の口縁部である。外面と内面にナデ調整がみられる。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
(下層に褐灰色(10YR4/1)粘質シルトが混じる)

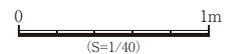


図5-51 II区SD17

SD18

調査区中央西部において検出した。東西方向の溝でSD21をきり、確認延長は5.72m、幅0.26～0.44m、検出面から底面までの深さは5～11cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/1)粘質シルトである。遺物は土師質土器の細片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD19

調査区の中央西部において検出した。東西方向の溝で、P60にきられる。確認延長は7.17m、幅0.26～0.35mで、検出面から底面までの深さは8cm前後を測る。埋土は褐灰色土を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。出土遺物はみられなかった。

SD20 (図5-53)

調査区の中央部において検出した。東西方向の溝で、遺構の南側はSD8にきられる。確認延長は西側が4.35m、東側は11.62m、幅は概ね0.55mで、検出面から底面までの深さは5.8～10.8cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。遺物は土師質土器が出土しており、その内杯が図示できた。

出土遺物 (図5-54 109・110)

109は土師質土器の杯である。外面内面とも摩耗のため調整は不明瞭である。110も同じく土師質土器の杯である。口縁部は外方に開き、口縁端部はやや外反する。調整等は摩耗のため不明瞭である。

SD21

調査区の東部において検出した。南北方向の溝で、上面はカクランとSD18にきられる。確認延長は1.76m、幅0.37～0.46mで、検出面から底面までの深さは約5cmを測る。埋土は細礫を含む黒褐色

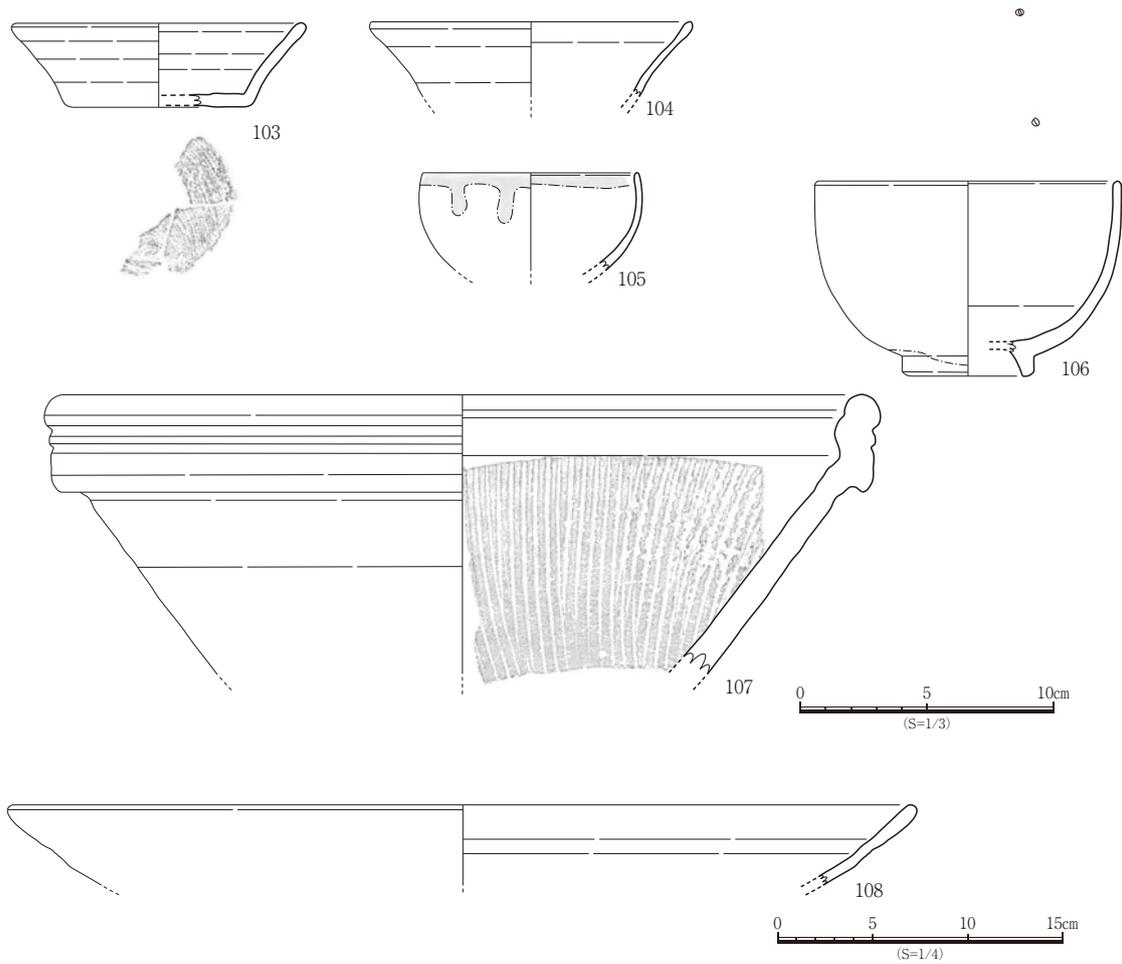
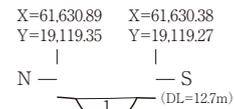


図5-52 II区SD17出土遺物実測図

(10YR2/3)砂質シルトである。遺物は土師質土器が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SD23

調査区の北東部において検出した。東西方向の溝で、SK57と南北方向にのびるSD24にきられる。確認延長は4.39m、幅0.51~0.64mで、検出面から底面までの深さは約10cmを測る。埋土は褐灰色土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。出土遺物はみられなかった。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)シルト
(褐色(10YR4/6)土が粒状に混じる)

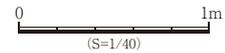


図5-53 II区SD20

SD24

調査区の北東部において検出した。南北方向の溝で、東西方向にのびるSD23をきる。確認延長は5.31m、幅0.43~0.56mで、検出面から底面までの深さは約6~14cmを測る。埋土は褐色土および褐灰色土を含む黒褐色(10YR2/2)シルトで、出土遺物はみられなかった。

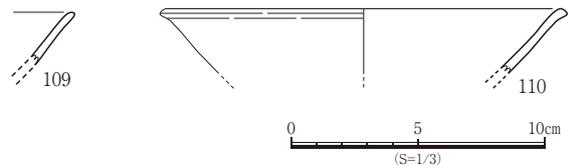


図5-54 II区SD20出土遺物実測図

SD25

調査区の北東部において検出した。東西方向の溝である。確認延長は西側が1.58mで、途中

6. II区の検出遺構と出土遺物 (4) 柱穴

が途切れて東側で2.23mを確認した。幅は0.47mで、検出面から底面までの深さは約7cmを測る。埋土は黒色(10YR1.7/1)シルトである。出土遺物はみられなかった。

(4) 柱穴

P24 (図5-55)

調査区の南部中央において検出した。平面形は楕円形状で、規模は長軸が0.44m、短軸は0.34mを測る。検出面からの底面までの深さは25cmである。埋土は黄褐色土を含んだ黒褐色(10YR2/3)シルトである。遺物は埋土中から土師質土器が出土しており、その内杯が図示でき得た。

出土遺物 (図5-56 111)

111は土師質土器の杯である。底部は平底を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。体部は上方に開いてのびる。内面はナデ調整がみられるが、外面は摩耗しており調整は不明瞭である。

P29 (図5-55)

調査区の南部中央において検出した。平面形は不整形を呈し、規模は長軸0.45m、短軸0.42mを測る。検出面から底面までの深さは39cmである。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR2/3)シルトである。埋土中からは土師質土器や陶磁器片が出土しており、その内、土師質土器杯2点と土師質土器皿1点が図示でき得た。

出土遺物 (図5-56 112～114)

112は土師質土器の皿である。平坦な底部をもち、外面には回転糸切り痕が残る。口縁部は外上方に開き短くのびる。外面は回転ナデ調整で、内面は摩耗するが、一部にナデ調整がみられる。113は土師質土器の杯である。平坦な底部を呈し、体部は外方にのびる。底部外面には摩耗するが回転糸切り痕が残る。114も同じく土師質土器の杯である。体部は外方に開き、口縁部に至る。口縁端部はやや外反する。外面と内面には回転ナデ調整がみられる。

P47 (図5-55)

調査区の南東隅において検出した。平面形は円形を呈し、規模は55cm前後を測る。検出面から底面までの深さは12cmである。埋土は礫を含む黒褐色(10YR2/2)砂質シルトである。埋土中からは土師質土器や瓦器が出土しており、その内土師質土器杯が図示でき得た。

出土遺物 (図5-56 115)

115は土師質土器の杯と考えられる。大型で厚い器壁をもつ。底部は平坦で外面には回転糸切り痕が残る。体部は外方に開き、外面と内面は回転ナデ調整を施す。外面には回転ナデ調整による凹凸がみられる。

P59 (図5-55)

調査区の中央部において検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.63m、短軸が0.56mで検出面から底面までの深さは25cmを測る。埋土は褐色を含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。埋土中からは土師器が出土しており、その内甕を図示でき得た。

出土遺物 (図5-55 116)

116は土師器の甕の口縁部である。口縁部は外方に開く。外面と内面はナデ調整で、口縁部内面下半には一部ヘラケズリがみられる。

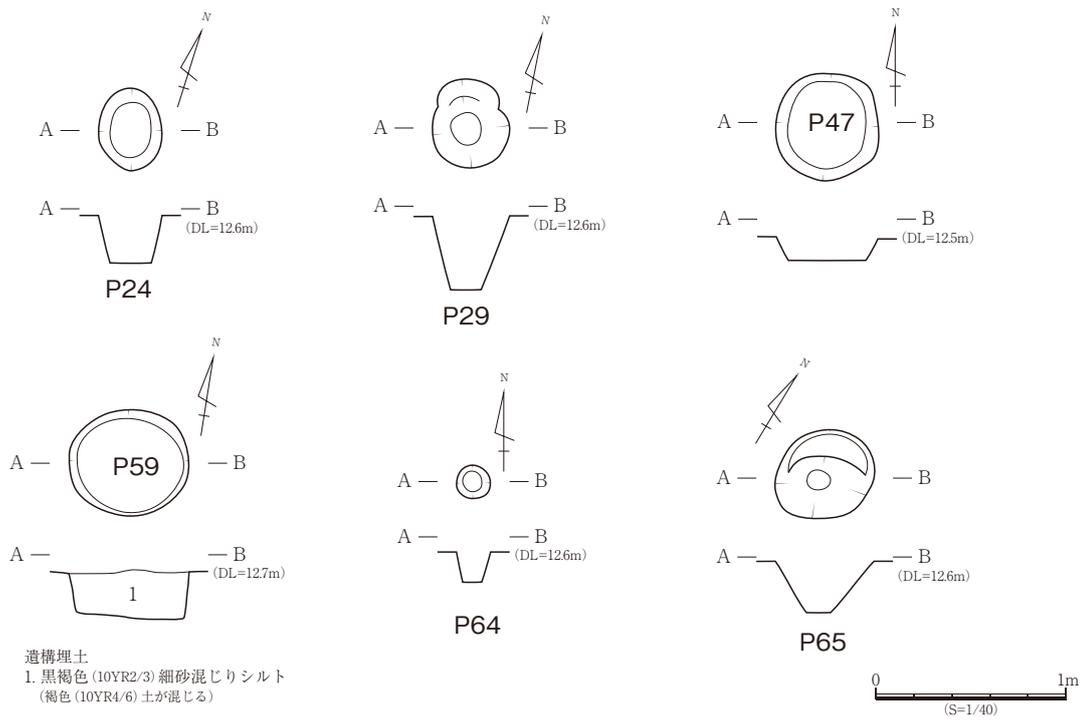


図5-55 II区P24・29・47・59・64・65

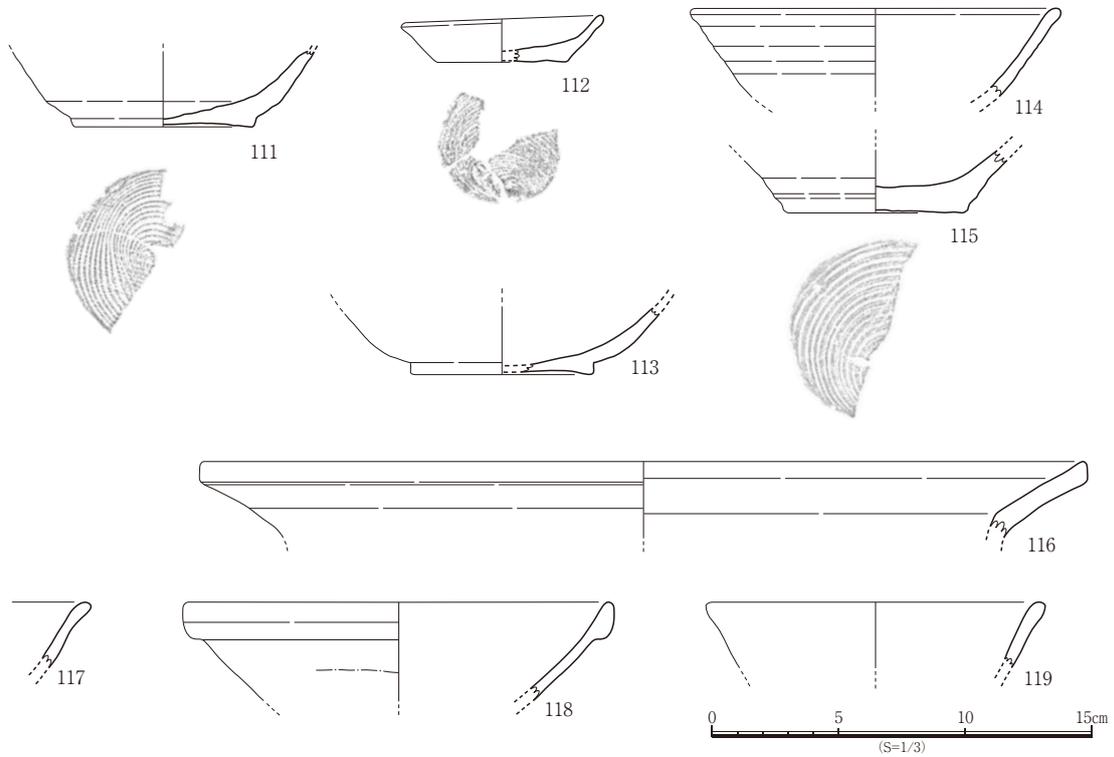


図5-56 II区P24・29・47・59・64・65出土遺物実測図

6. II 区の検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

P64 (図5-55)

調査区の東部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね 0.2m を測る。検出面から底面までの深さは 16cm である。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質シルトである。埋土中からは土師質土器等が出土しており、その内土師質土器杯と白磁碗を図示することができ得た。

出土遺物 (図5-56 117・118)

117は土師質土器の杯である。口縁部は外方に開き、端部はやや外反する。内面は摩耗しているが、外面には回転ナデ調整がみられる。118は白磁の碗である。口縁部は端部を肥厚させ玉縁状を呈する。内面及び体部外面の途中まで施釉がみられる。

P65 (図5-55)

調査区の南部において検出した。平面形は円形を呈し、規模は径が概ね 0.5m を測る。検出面から底面までの深さは 27cm である。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質シルトである。埋土中からは土師質土器等が出土しており、その内土師質土器杯を図示することができ得た。

出土遺物 (図5-56 119)

119は土師質土器の杯である。口縁部は外方に開き、端部はやや外反する。内面は摩耗しているが、外面には回転ナデ調整がみられる。

(5) 性格不明遺構

SX4 (図5-57)

調査区の北部II-N-2区において検出した。遺構の南側は現況の水路によってきられる。確認された平面形は隅丸長形状を呈し、規模は長軸(東西)は 4.50m、短軸(南北)が 0.95m を測る。検出面から底面までの深さは 13cm である。埋土は褐色土が含まれる黒褐色(10YR2/3)砂質シルトである。埋土中からは土師質土器、陶磁器が出土しており、その内陶磁器2点を図示することができ得た。

出土遺物 (図5-58 120・121)

120は陶器の丸形碗である。外面と内面に施釉し、細かい貫入がみられる。121は染付丸形碗の口縁部である。外面は松等の植物の文様がみられる。

SX6 (図5-57)

調査区の西部中央において検出した。平面形は不整形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを示す。SK34とSX8に接し、両遺構をきる。規模は長軸 2.70m、短軸が 1.40m で、検出面から底面までの深さは 47cm を測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトと灰黄褐色(10YR5/2)粘質土である。埋土中から土師質土器、陶磁器、瓦などが出土しており、その内土師質土器1点、陶磁器9点を図示することができ得た。SK34とSX8の切り合いからはSK34とSX8の遺物の可能性も考えられる。

出土遺物 (図5-59 122～132)

122は土師質土器の杯である。平坦な底部を呈し、外面に回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整を施す。123は陶器の小型丸碗である。底部は削り出し高台を呈し、高台を除き内面と外面には施釉がみられる。124は染付の皿あるいは蓋である。外面に1条の圏線文、内面は植物と思われる文様がみられる。125は染付の小型丸碗である。底部は削り出し高台を呈し、口縁部外面に植物の文様、高台脇は二重の圏線文をがみられる。内面は無文である。126は染付丸形碗である。底部は削り出し高台で、高台豊付けを除き施釉する。豊付けには砂が溶着している。外面は口縁部に二重の圏

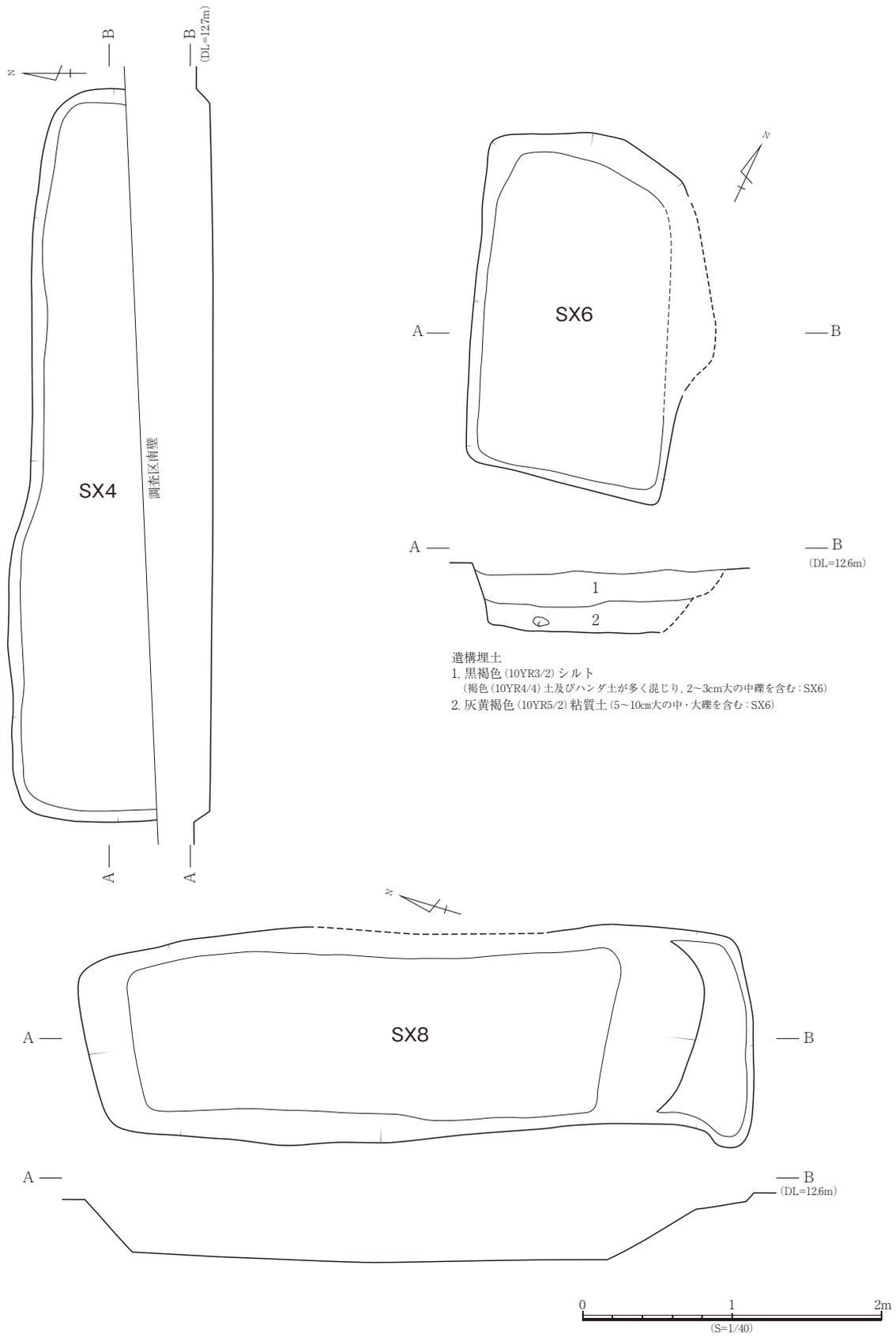


図5-57 II区SX4・6・8

6. II区の検出遺構と出土遺物 (5) 性格不明遺構

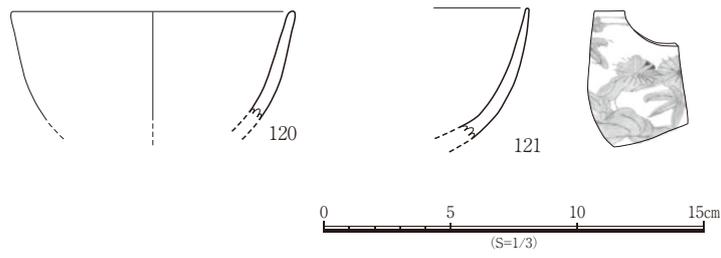


図5-58 II区SX4出土遺物実測図

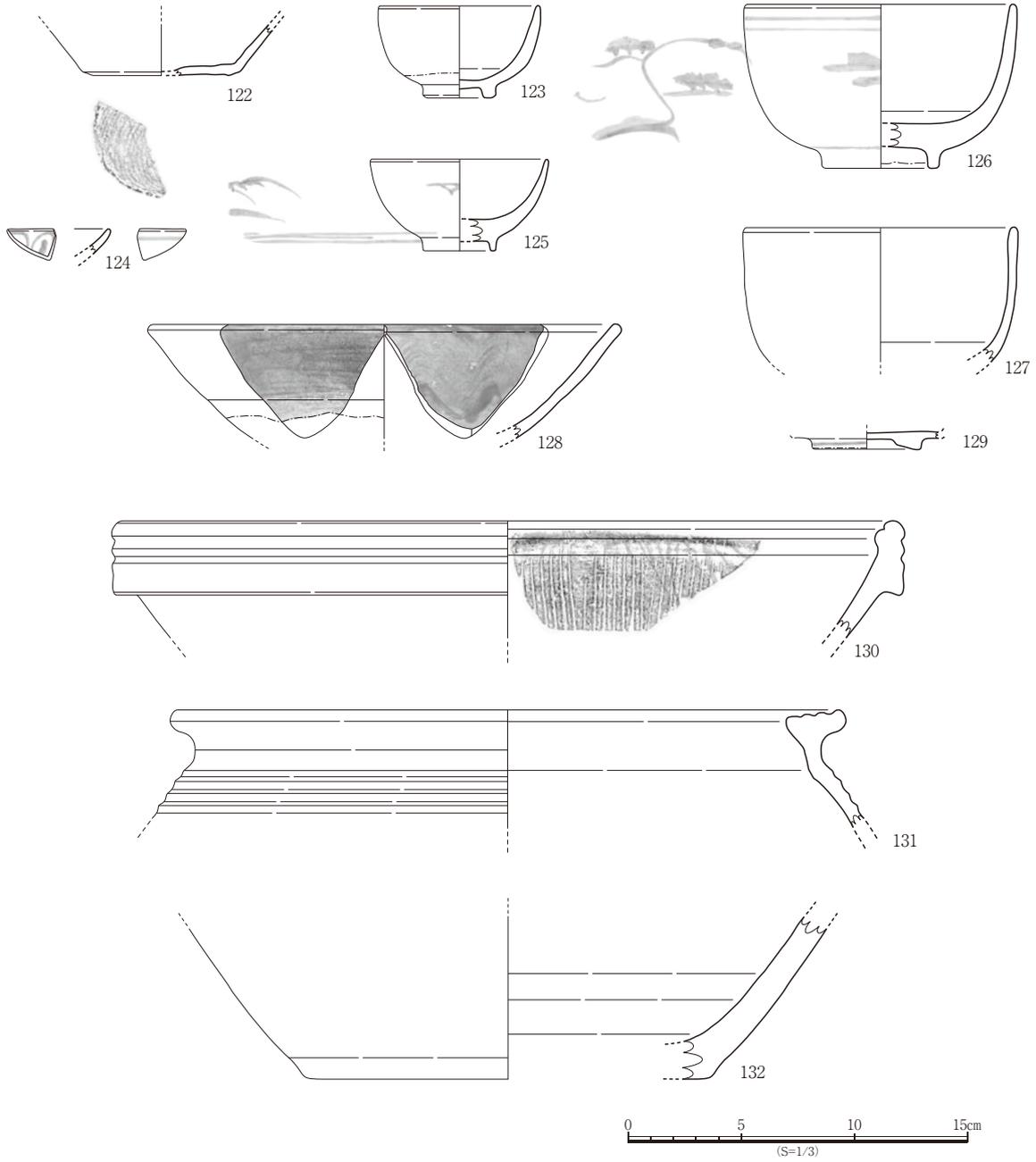


図5-59 II区SX6出土遺物実測図

線文と松と雲と考えられる文様がみられる。内面は無文である。127は陶器の丸形碗である。口縁部のみで外面内面には施釉がみられる。128は陶器の皿である。底部に高台が付くものと考えられる。外面と内面に刷毛目による文様があり、内面は波状の刷毛目文様がみられる。129は染付の香炉あるいは火入れの底部と考えられる。高台外面に一重の圏線文、高台畳付けは無釉である。130は播鉢である。口縁部は肥厚させ外面に2条の枕線、口縁端部内面には1条の沈線を施す。131は陶器の甕である。口縁端部は左右に肥厚し、端部には3条の枕線を施す。頸部外面にはロクロ目がみられる。全面に褐釉を施す。132は陶器の甕である。底部のみであるが、内面には一部自然釉がかかる。外面と内面は回転ナデ調整がみられる。

SX8 (図5-57)

調査区の西部中央において検出した。平面形は不整形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを示す。規模は長軸が4.45m、短軸は1.45mで検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は褐灰色(7.5YR5/1)粘質土である。埋土中からは土師質土器、陶磁器、瓦などが出土しているが、図示でき得るものはなかった。

SX12

調査区の北部に置いて検出した。平面形は不整形を呈し、SK55とSK56にきられる。規模は長軸が5.26m、短軸は2.40mで検出面から底面までの深さは13cmを測る。埋土は褐色土を含む黒褐色

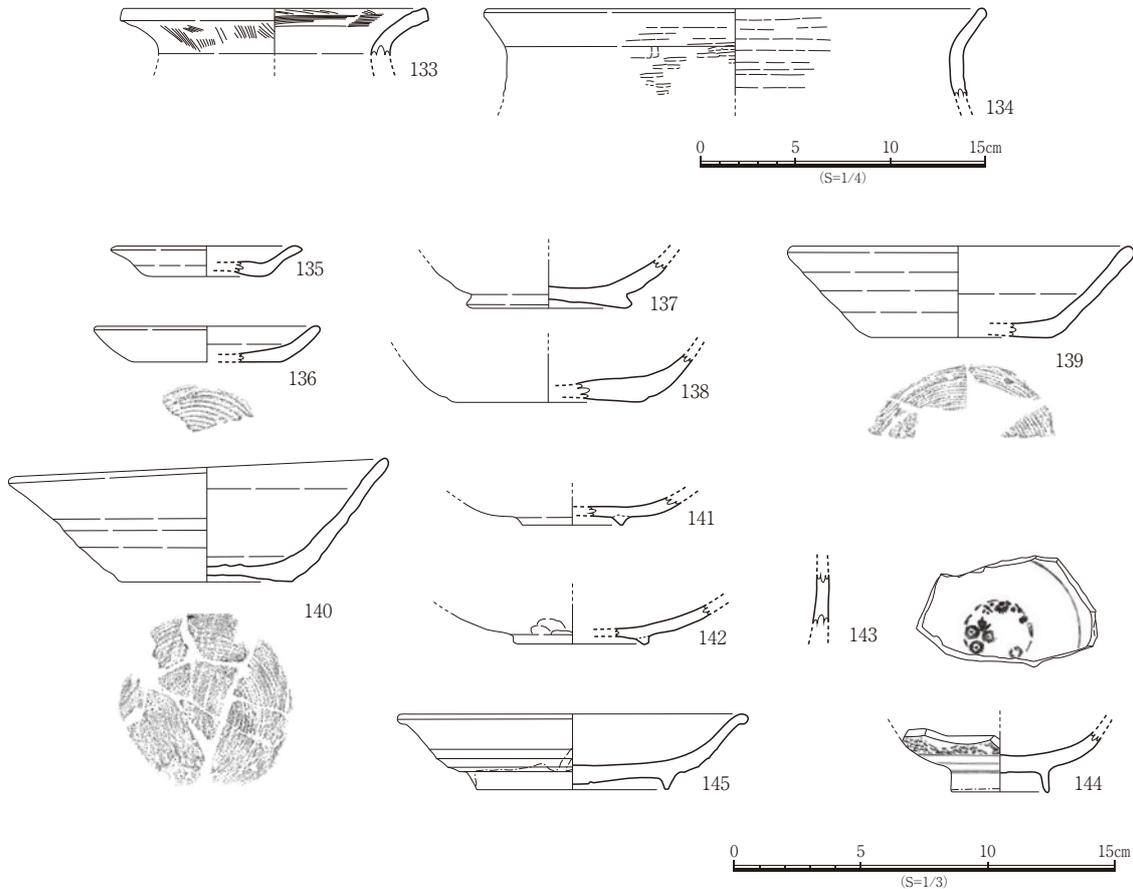


図5-60 II区包含層出土遺物実測図

(10YR2/3)砂質シルトである。埋土中からは陶器片が出土しているが、図示でき得るものはなかった。

(6) 遺構外出土遺物

①包含層出土遺物(図5-60 133~145)

133は弥生土器甕の口縁部である。口縁部は外方に開き、口縁端部は平坦面を呈する。外面は口縁部端部はナデ調整、口縁部から頸部にかけてはタテ方向のハケ目調整が施される。内面はヨコ方向のハケ目調整と斜位方向のハケ目調整がみられる。134も同じく弥生土器の甕と考えられる。口縁部は緩やかにくの字状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。外面には頸部にまでタタキ目が残り、口縁部はナデ調整を施す。内面にヨコ方向のナデ調整がみられる。135と136は土師質土器の皿である。135は底部が平坦面を呈し、口縁部は外方に開く。外面と内面は摩耗のため、調整等是不明瞭である。136の底部は平坦面を呈し、外面に回転糸切り痕が残る。口縁部はやや内傾気味に開く。外面と内面は回転ナデ調整を施す。137~140は土師質土器の杯である。137は平坦な底部をもち、外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は摩耗のため調整は不明瞭である。138はやや器壁が厚い。平坦な底部をもち、外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整がみられる。139は平坦な底部を呈し、体部から口縁部にかけて外方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整を施す。140は底部は平坦面を呈し、体部から口縁部にかけて外上方に開く。底部外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整を施し、外面には凹凸がみられる。141は瓦器碗の底部である。底部外面には断面三角形状の高台を貼付する。外面と内面は摩耗のため調整等是不明瞭であ

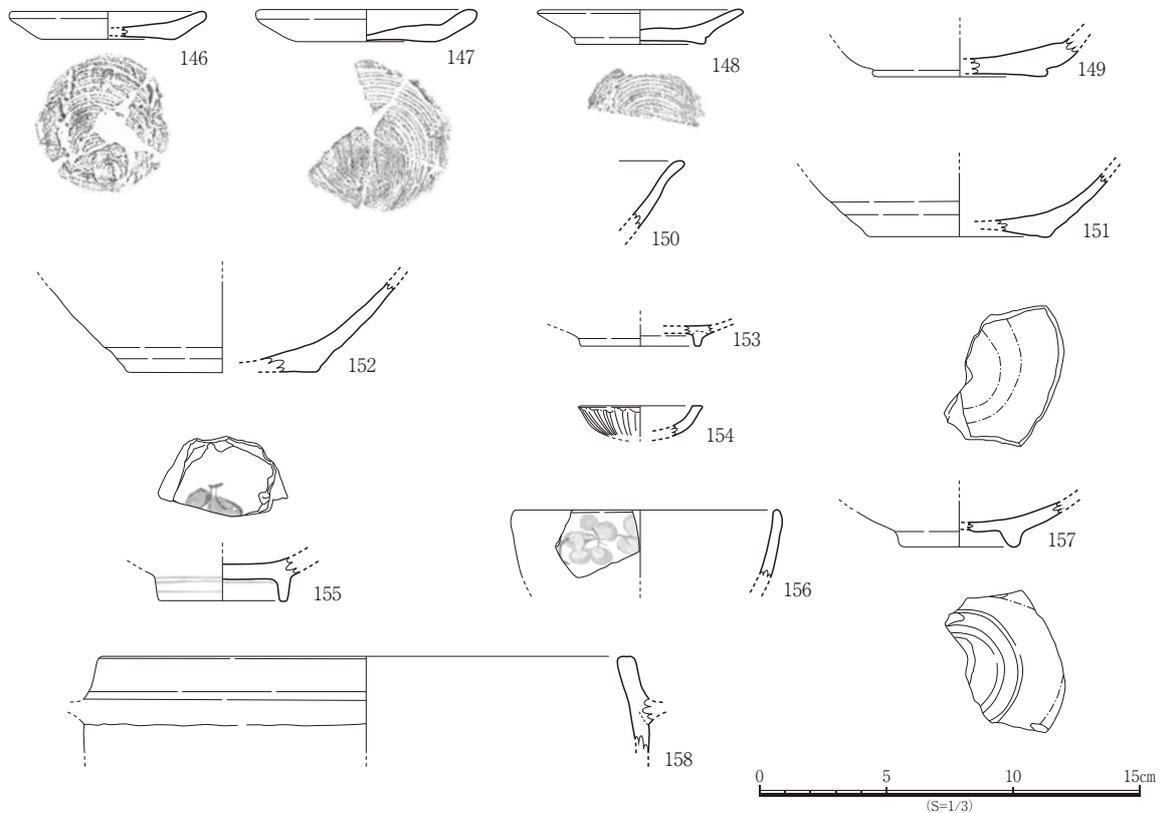


図5-61 II区検出面出土遺物実測図

る。142 も同じく瓦器碗の底部である。底部外面には断面三角形の高台を貼付する。外面の一部には指頭圧痕がみられる。143 は青磁碗である。外面と内面は無文である。144 は磁器の丸形碗である。底部は削り出し高台を呈し、高台畳付けを除き施釉がみられる。145 は陶器の皿である。底部は削り出し高台を呈し、口縁部は外上方に開き、端部は外反する。高台を除き内面から外面まで浅黄色の釉を施す。外面は体部から高台脇まで回転ケズリ、内面と口縁部外面にはナデ調整がみられる。

②検出面出土遺物(図5-61 146~158)

146 は土師質土器の皿である。底部は平坦面を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。口縁部は外方に開く。外面と内面は回転ナデ調整を施す。147 も同じく土師質土器の皿である。底部は平坦面を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。口縁部にかけて外方に開く。外面と内面は回転ナデ調整を施し、底部内面には凹みがみられる。148 は土師質土器の皿である。底部は平坦面を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。口縁部は外方に開く。外面は回転ナデ調整で、内面は摩耗のため調整は不明瞭である。149 は土師質土器の杯である。底部は平坦面を呈し、外面は摩耗しているが、回転糸切り痕が残る。

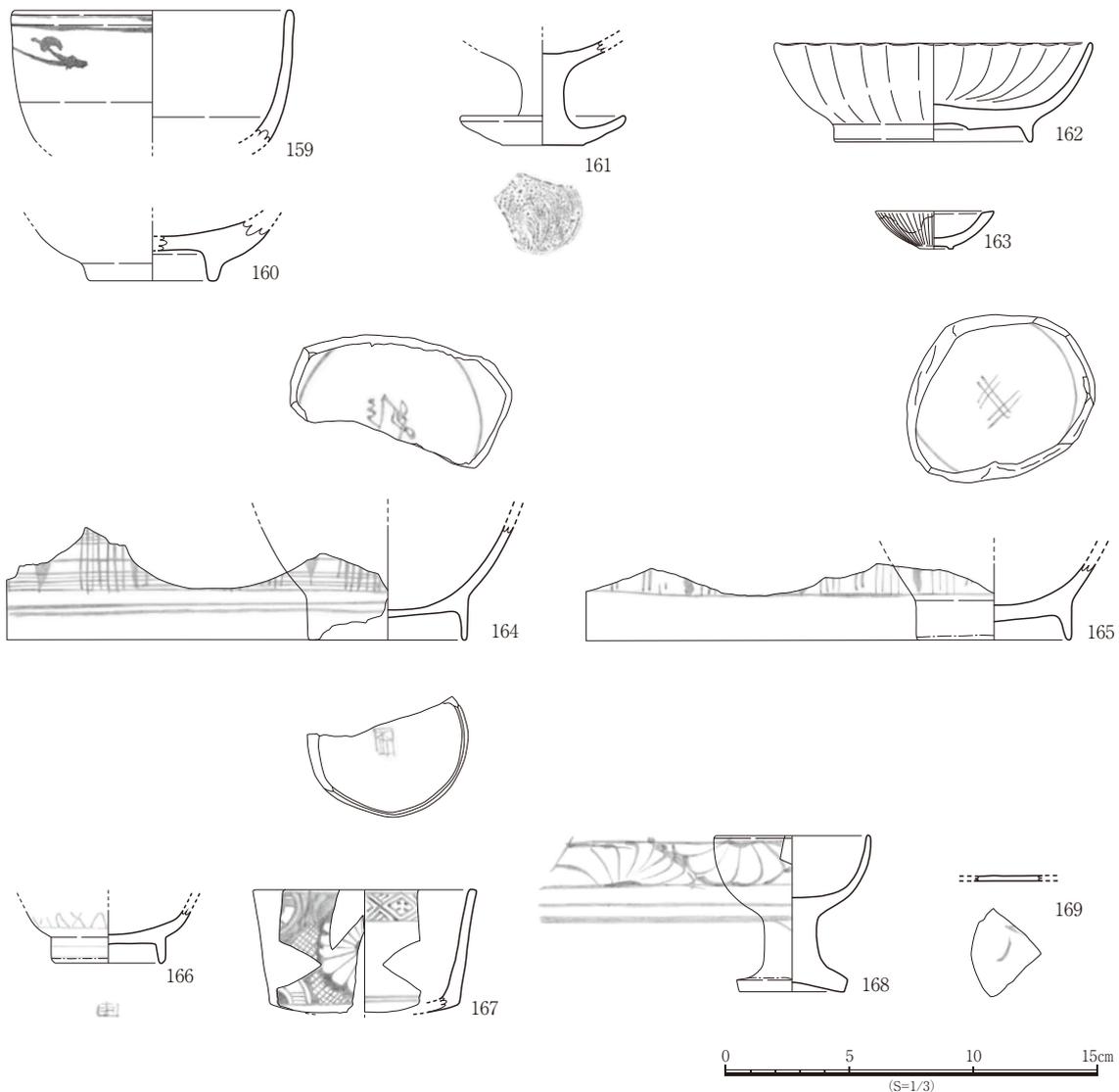


図5-62 II区表採遺物実測図

7. まとめ

器壁は厚い。150は土師質土器の杯である。口縁端部はやや外反する。外面と内面にナデ調整がみられる。151は土師質土器の杯である。底部は平坦面を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。体部は外方に開く。外面と内面にナデ調整がみられる。底部内面は摩耗する。152は土師質土器の杯である。やや大振りの底部をもつ。底部は平坦面を呈し、外面には回転糸切り痕が残る。外面と内面は回転ナデ調整を施し、底部外面は強いナデ調整がみられる。

153は瓦器碗の底部である。外面には断面方形形状の高台を貼付する。高台の貼付部分は丁寧なナデ調整を施す。154は磁器の紅皿である。型押し成形で、外面は貝殻状の凹凸がみられる。口縁端部の幅がやや広く、内面と外面の口縁部下にかけて施釉がみられる。155は染付の碗の底部である。底部は削り出し高台を呈し、外面は高台脇に三重の圈線文と内面に植物と考えられる文様がみられる。156は陶器の丸形碗の口縁部である。外面には梅花の文様がみられる。157は陶器の皿である。底部は削り出し高台を呈し、内面見込みは蛇ノ目釉ハギを施す。158は瓦質土器の羽釜である。鏝の部分は欠損している。口縁部はやや内傾してのび、口縁端部は平坦面を呈する。外面と内面は摩耗しており、調整等不明瞭である。

また、表採出土遺物については東野遠山遺跡遺物観察表7に記載する。

7. まとめ

東野遠山遺跡の当調査区では、弥生時代から近世にかけての遺構と遺物が確認された。主な時期について述べる。

(1) 弥生時代

明確な遺構は確認されていないが、Ⅱ区より弥生土器と石製品が確認されている。弥生土器は調査区南西部で検出したSD2の埋土と遺物包含層からのもので、SD2より甕が2点、包含層からは甕が2点出土している。弥生時代後期後半に属するものと考えられる。また、調査区南部を東西方向にのびるSD3より緑色岩製の太型蛤刃石斧1点が出土している。SD2の埋土からは古代末から近世にかけての遺物が出土しており、SD3の埋土からも古代末から中世前期を中心とした遺物が出土していることから、遺構の中心時期は古代末から中世前期と考えられる。弥生時代に属する遺構の確認には至らなかったが、これら遺物の出土は周辺に弥生時代の集落等が存在していた可能性を示唆するものと考えられる。

(2) 古代末から中世前期

主な遺構としては、Ⅱ区において検出されたSB1、SD3、SD8があげられる。SB1は調査区の南部中央に位置する桁行5間、梁行2間の掘立柱建物跡である。建物を構成するピットから地元産の土師質土器皿・杯の他、瓦器碗が出土している。SD3は同じく調査区南部を東西方向に横断する溝跡で、土師質土器の他瓦器が出土している。SB1とSD3はきり合うが、前後関係は不明である。SD8は調査区南部を東西方向と南北方向の逆L字状を呈する溝跡である。埋土中からは土師質土器の杯を中心に出土している。

出土遺物

主な遺物では地元産の土師質土器の他、瓦器、貿易陶磁器などを中心とした遺物が出土している。

土師質土器

皿, 杯, 椀が出土している

皿は平底を呈し, 底部切り離しは回転糸切りがみられる。底部から口縁部にかけては外方に開く。口径8.0cm前後, 底径5.0～5.7cm, 器高は概ね1.5cmを測る。

杯は平底を呈し, 底部切り離しは回転糸切りがみられる。底部から口縁部にかけては斜め上方に開き口縁部に至る。口径は16.7～17.7cm, 底径が概ね7.5cm, 器高は4.2～5.4cmを測るタイプがみられる。また, 杯には底径が5.0～6.0cm前後のものもみられる。

瓦器

瓦器椀が出土している。口縁部外面は強いヨコ方向のナデによる段を有するタイプで, 内面にヘラミガキ, 体部に指頭圧痕が顕著である。底部に断面三角形から方形状の輪高台を貼付している。和泉型の瓦器椀と考えられる。

貿易陶磁器

白磁碗が出土している。口縁部は玉縁状を呈するもので白磁IV類に属する。

(3) 近世以降

近世以降の主な遺構としてはハンダ土を壁面に巡らした土坑が挙げられる。調査区では4基確認しており, 調査区南西部において検出したSK1とSK2は2基が並列した状態であったことから同時期に機能していたものと考えられる。また調査区の北方Ⅱ-N区において検出したSK28では寛永通宝が出土している。

(4) SD8出土の土師質土器杯について

SD8からは土師質土器の杯が出土しており, その法量及び形態には次のような特徴がみられる。底部は平底を呈し, 底部の切り離しは回転糸切りである。土佐において底部の切り離しに回転糸切りがみられ出すのは, 概ね11世紀代であると考えられ, それ以降, 手づくね皿を除き, 土師質土器皿と杯の底部切り離しは回転糸切り中心となる。土佐における11世紀代以降の基準資料としては, 同じ香南市に所在する曾我遺跡SK1と深淵北遺跡SD11・12, さらに隣接市である香美市に所在する高柳遺跡SK1があげられる。また南国市に所在する土佐国衙跡のSK118・119からも良好な資料が出土している。深淵遺跡SD11・12の杯を見ると, 杯は口径が概ね15.5cm, 底径5.8～6.75cm, 器高4.0～4.95cmを測る。共伴遺物として白磁Ⅱ類が出土している。

曾我遺跡SK1は手づくね皿であるが, 杯の法量は口径が概ね14.4cm, 底径5.8cm, 器高4.5cmを測る。同じく共伴遺物として白磁Ⅱ類が出土している。高柳遺跡SK1は皿, 杯, 椀の一括資料である。杯の法量は口径が14.4～17.0cm, 底径5.7～7.6cm, 器高4.0～4.9cmを測る。土佐国衙跡SK118は, 皿, 杯が出土しており, 杯の法量は口径が14.0～15.0cm, 底径7.2～7.6cm, 器高3.6～4.5cmを測る。さらに瓦器椀と青磁皿が共伴している。

当遺跡のSD8出土の杯は, 底部の切り離しは回転糸切りで, 口径が16.7～17.7cm, 底径7.5～7.8cm, 器高4.2～5.4cmを測る。形態及びその法量からは高柳遺跡SK1に類似した特徴をもつ。高柳遺跡SK1は, 瓦器椀や青磁皿・碗が共伴する土佐国衙跡SK118よりやや遡ると考えられている。東野遠山遺跡のSD8の埋土中からは瓦器の破片が出土していることから考えると, 高柳遺跡SK1から土佐国衙跡SK118の古代末から中世前期に位置付けられるのではないかと考えられる。

7. まとめ

本調査区で確認された遺構と遺物は調査区の中央部から南部において多く検出されている。遺構検出状況からは、今回の調査区より南部に遺構の広がりが続くものと思われる。また、出土遺物では古くは弥生時代後期末のものも出土している。遺跡の中心時期としては、古代末から中世前期が考えられる。

参考文献

野市町教育委員会 1996 年『深淵北遺跡』

野市町教育委員会 1989 年『曾我遺跡発掘調査報告書』

土佐山田町教育委員会『高柳遺跡』

第Ⅵ章 高田遺跡の自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

高知県南国市の高田遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表6-1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表6-1 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37780	調査区: IX-2区 遺構: SD7	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位 不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

(3) 結果

表6-2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図6-1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表6-2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-37780	-25.76 \pm 0.29	1320 \pm 20	1320 \pm 20	660-690 cal AD (62.3%) 753-759 cal AD (5.9%)	656-715 cal AD (79.3%) 744-765 cal AD (16.1%)

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおり

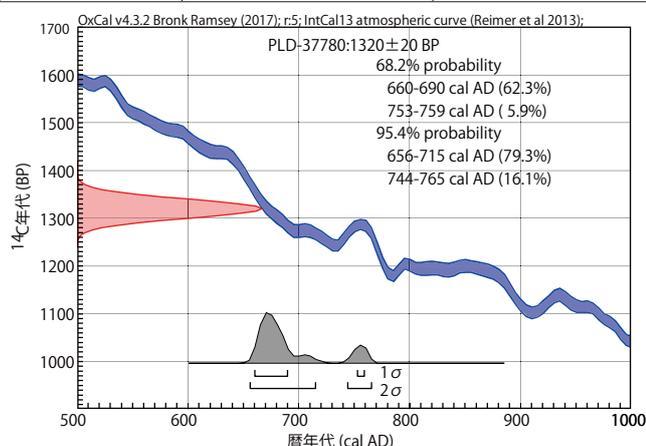


図6-1 暦年較正結果

1. 放射性炭素年代測定

である。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) まとめ

IX-2区SD7において検出された炭化材の 2σ 暦年代範囲は、7世紀半ば～8世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代の暦年代を示した。この暦年代値からは、SD7が古代のなかで埋没した可能性が考えられる。

ただし、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、最終形成年輪が確認できない部位不明の炭化材である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

2. 高田遺跡出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

高田遺跡で出土した炭化材の樹種同定結果を示す。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

(2) 試料と方法

試料は、IX-2区SD7から出土した炭化材1点である。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、炭化材は広葉樹のクワ属であった。同定結果を表6-3に示す。

表6-3 炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	種類	樹種	年代測定番号
1	SD7	炭化材	クワ属	PLD-37780

以下に、同定された分類群の特徴を記載し、図6-2に走査型電子顕微鏡写真を示す。

クワ属 Morus クワ科 図6-2 1a-1c (No.1)

年輪のはじめに大型の道管が並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜め方向に断続的に複合する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が方形となる異性で、幅1~6列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し、日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

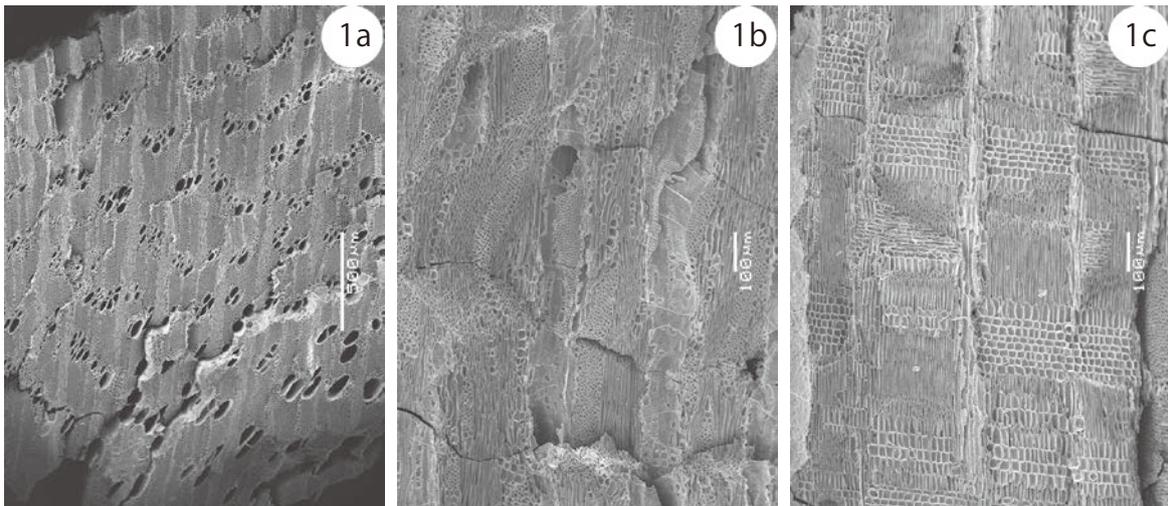
(4) まとめ

SD7から出土した炭化材は、クワ属であった。クワ属は堅硬な樹種で、薪炭材としても普通に利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。遺跡周辺に生育していたクワ属が伐採利用されていた可能性がある。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

3. 土壌薄片作製・観察



1a-1c.クワ属 (No.1)
a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

図6-2 高田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

3. 土壌薄片作製・観察

(1) はじめに

今回分析を実施するⅦ～Ⅹ区では、古代の南海道の可能性のある道路側溝が検出された。この道路側溝の上部には、明橙褐色をなすローム質堆積物が特徴的に充填されていた。また、明橙褐色ローム質堆積物は、道路側溝だけでなく、道路部分にも層厚2～3cm程度あるが、上位の堆積層に削平されずにわずかに残存した部分が数カ所存在する状況が観察された。

これらの明橙褐色ローム質堆積物は、本地域において「赤音地」(アカオンジ)と呼ばれる鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井, 1978)起源の土壌に非常に類似する(堀川, 2007)。ただし、後述する深掘トレンチでのテフラ分析結果で確認されるように、本遺跡が立地する野市台地の段丘構成層では、「赤音地」が確認されない。

上記の検出状況から、明橙褐色ローム質堆積物は、古代の官道の敷設と関係して人為的に持ち込まれた造成土もしくは整地土の可能性が示唆された。このような官道の造成と明橙褐色ローム質堆積物との関係については、その被覆層と基盤層を含めた堆積状況の把握が、検討を行う際の基礎的情報の1つになると考えられる。しかし、現地での堆積層観察では、これらの堆積層がいずれも塊状無層理をなし、層相変化にも乏しい状況であった。さらに、道路部分の明橙褐色ローム質堆積物は、上記のように削平により層厚2～3cm程度しか残存しない。このため明橙褐色ローム質堆積物およびその被覆層と基盤層の詳細な堆積状況の観察・記載は、現地の断面観察だけでは困難であった。これらの状況をふまえ、今回の自然科学分析では、土壌薄片による顕微鏡下での堆積物の観察・記載を適用して、明橙褐色ローム質堆積物の形成および埋没過程の検討を試みた。

(2) 試料

土壌薄片試料は、4つの地点で採取した。図6-3に試料採取状況を示す。古代の官道の道路部分の試料採取地点は、1地点と2地点である。道路側溝部分の試料採取地点は、3地点(南側側溝のSD2)、4

地点(北側側溝のSD1)である。

道路部分の層序については、最上部に人為的に擾乱された耕作土と推定される黒ボク土主体の古代以降の堆積層が載る。明橙褐色ローム質堆積物は、この人為的擾乱層の直下で検出される。直上の人為的擾乱層によって大きく削平されており、堆積層として残存している部分はわずかである。さらに、その層厚は、2～3cm程度が残存するのみである。明橙褐色ローム質堆積物の基盤には、黒ボク土が堆積する。発掘調査では、この黒ボク土から考古遺物が検出されていない。無遺物層の黒ボク土の下位は、後述するテフラ分析による調査区の深掘断面で確認される。この断面観察によると、黒ボク土の下位には、黄褐色土が存在する。道路部分での土壌薄片の採取層準では、その底部付近が黒ボク土と黄褐色土の漸移層に相当する。



写真1 1, 2, 3 地点の試料採取位置



写真2 1 地点の試料状況



写真3 2 地点の試料状況



写真4 3 地点の試料状況



写真5 4 地点の試料採取位置



写真6 4 地点の試料状況

図6-3 土壌薄片試料採取状況

3. 土壌薄片作製・観察

道路側溝では、3地点のSD2埋土の最上部に黒ボク土の累重が認められる。一方、4地点のSD1埋土では、最上部に黒ボク土が堆積していない。SD1の最上部には、明橙褐色ローム質堆積物が充填される。明橙褐色ローム質堆積物は、3地点と4地点ともに溝埋土の上部から最上部を埋積する。下部から底部では、黒ボク土もしくはこれよりやや黒みの薄い褐色土が堆積する。

(3) 分析方法

土壌薄片の作成は、まず試料を80℃で1日間乾燥した後、樹脂(ペトロポキシおよびシアノポンド)で固化を行い、片面の研磨を実施した。次に、固化および研磨済みの試料の研磨面を、スーパーセメダインを用いてスライドガラスに接着する。その後、厚さ70 μ m程度になるまで反対側の面を研磨し、カナダバルサムによりカバーガラスを接着した。なお、土壌薄片による層相や構造記載については、久馬・八木訳監修(1989)の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照した。

(4) 結果

試料と土壌薄片画像を図6-4・5に、顕微鏡写真を図6-6~8に示す。

土壌薄片による層相(微細堆積相)観察により、道路部分はR1~R4層に、道路側溝部分はD1~D4層に層序区分された。以下の土壌薄片観察の結果は、この層序区分にもとづき記載する。

・道路部分(1地点・2地点)

最上部の黒ボク土からなるR1層では、微細構造において亜角塊状構造が発達する(1地点:図6-6の写真1・2)。また、層内には、直下の明橙褐色ローム質堆積物の微小ブロック土(偽礫)が多く含まれる(1地点:図6-6の写真3, 2地点:図6-7の写真11)。

R2層は、今回の古代官道部分で特徴的に検出された明橙褐色ローム質堆積物に相当する。本層の微細構造は、基本的に壁状構造をなし、堆積物の充填が密である(1地点:図6-6写真4, 2地点:図6-7写真12)。層内には、管状をなすチャンネル孔隙や、不定形のバグ構造が少量存在する。また、2地点では、根痕と思われる生物擾乱で堆積層の一部が大きく擾乱されている部分がある。R3層との層界面は平坦ではなく、かなり乱れた様相を呈する。

R3層は、黒ボク土で構成される。微細構造は、軟粒状構造を基本とする。層内には、チャンネル孔隙、バグ構造などの孔隙が存在するが、その分布密度は低い。本層には、上位の明橙褐色ローム質堆積物もしくは下位の黄褐色土が起源と認識される微小ブロック土が含まれる(1地点:図6-6の写真5・6, 2地点:図6-7の写真13)。本層は、全体的に均質で平坦な層相を示し、下位のR4層よりも相対的に土壌構造に乏しい。このような特徴は、試料写真でも確認できる。

R4層は、黒ボク土が主体の堆積層となる。ただし、底部付近では、黒ボク土から黄褐色土への漸移層となる。微細構造は、亜角塊状構造である。底部付近以外の層準では、亜角塊状をなす粒団の構成物質は、黒ボク土からなる腐植含量の高い軟粒状粒団の集合体からなる(1地点:図6-6の写真7・8, 2地点:図6-7の写真14)。底部の黒ボク土から黄褐色土への漸移層では、亜角塊状構造の発達が相対的に弱くなるとともに、腐植含量が少なくなり、ローム質堆積物が主体となる(1地点:図6-6の写真9・10, 2地点:図6-7の写真15・16)。漸移層部分では、黒ボク土からなる軟粒状粒団の集合体は認められない。

・側溝部分(3地点・4地点)

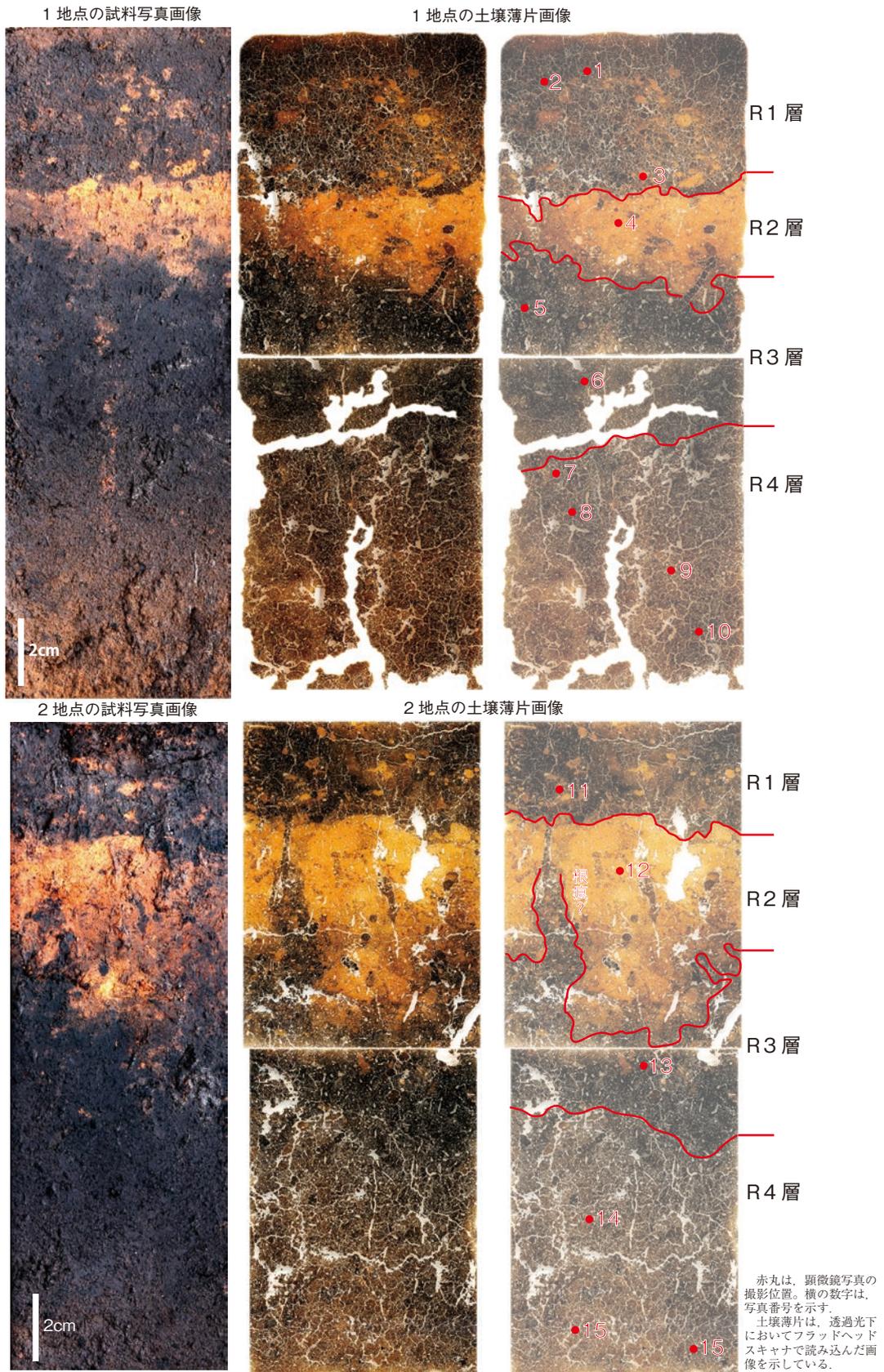


図6-4 1地点と2地点の試料と土壌薄片画像

3. 土壌薄片作製・観察

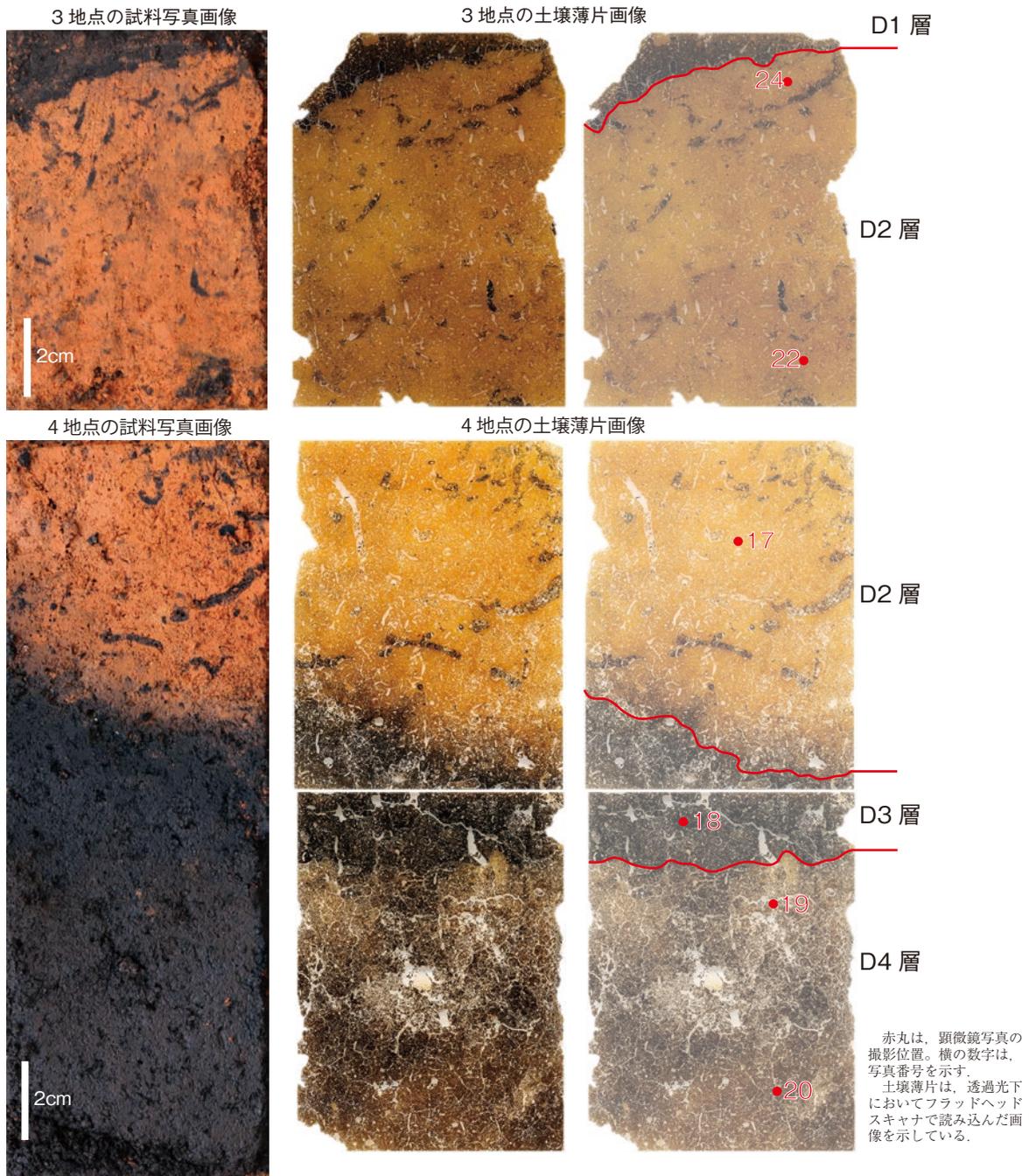


図6-5 3地点と4地点の試料と土壌薄片画像

黒ボク土主体の明橙褐色ローム質堆積物を被覆するD1層は、3地点のみに存在する。土壌薄片では、その最下部のみがわずかに作製範囲となっている。微細構造は壁状で、直下の明橙褐色ローム質堆積物を多く含む。

D2層は、明橙褐色ローム質堆積物に相当する。3地点では、壁状構造を主体としており、チャンネル孔隙を伴う(図6-8の写真21・22)。4地点では、バグ孔隙が目立つ(図6-8の写真17)。バグ孔隙が目立つ領域は、ブロック土もしくは生物擾乱によって形成された棲管部分に対応する可能性がある。3地

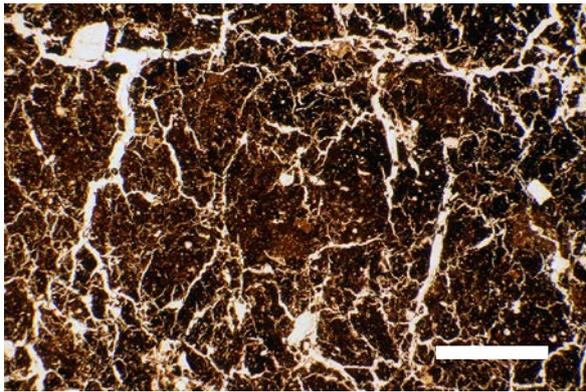


写真1 1地点R1層

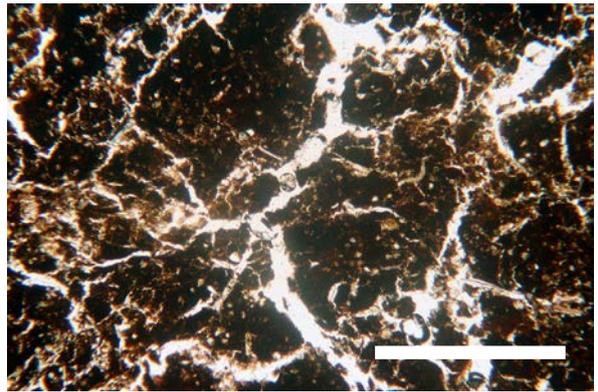


写真2 1地点R1層

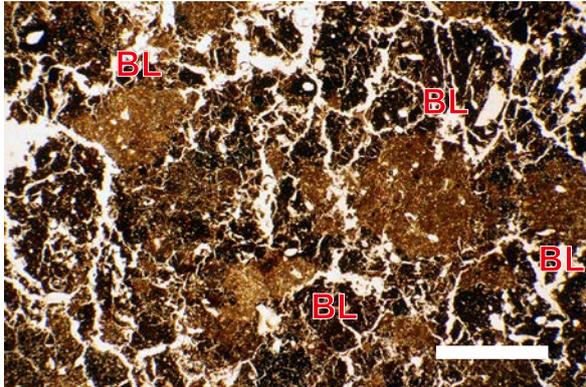


写真3 1地点R1層

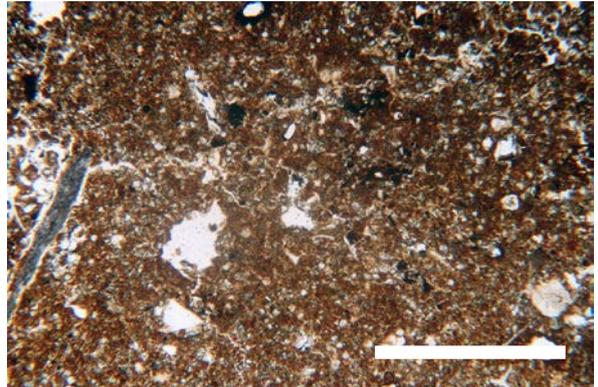


写真4 1地点R2層

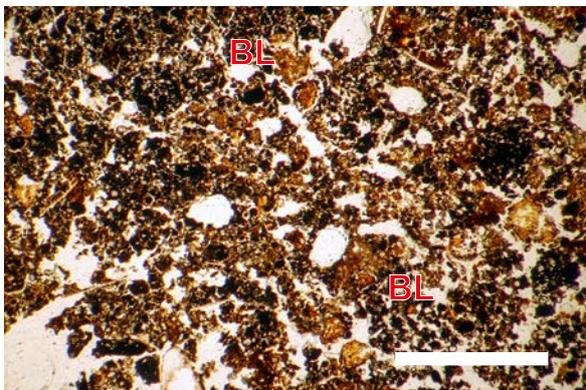


写真5 1地点R3層

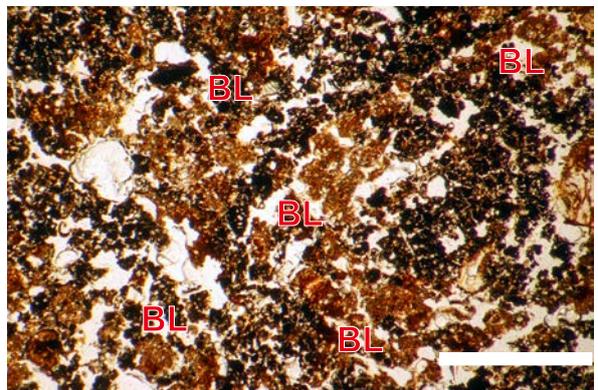


写真6 1地点R3層

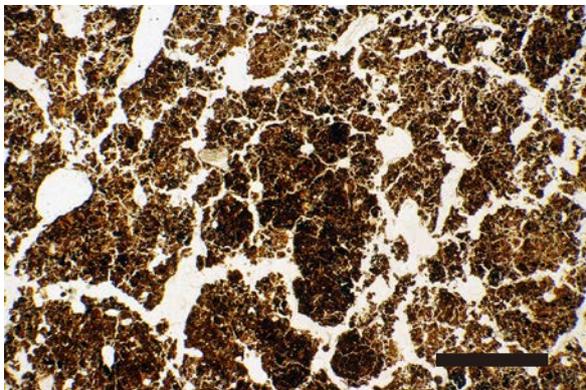


写真7 1地点R4層

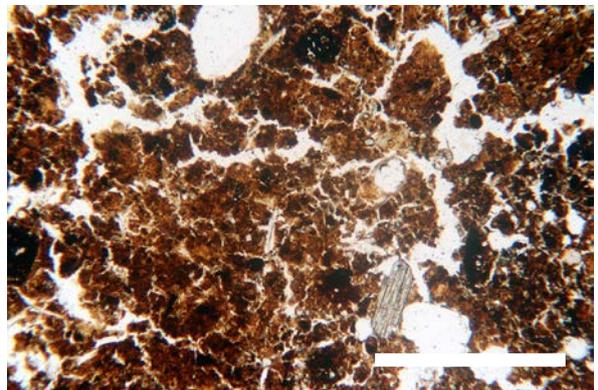


写真8 1地点R4層

写真はすべて下方ポーラ. 凡例 BL (微小ブロック土) スケール: 写真1,3,7が2.0mm, それ以外は1.0mm

図6-6 顕微鏡画像1

3. 土壌薄片作製・観察

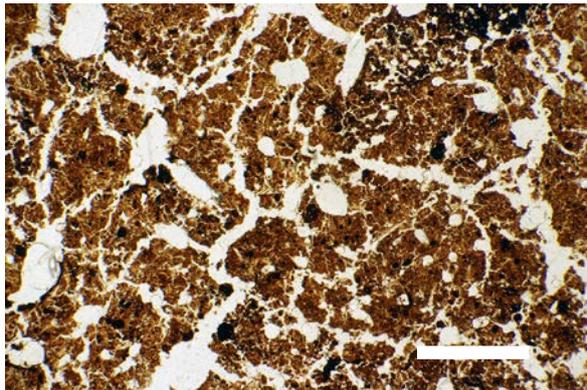


写真9 1地点R4層

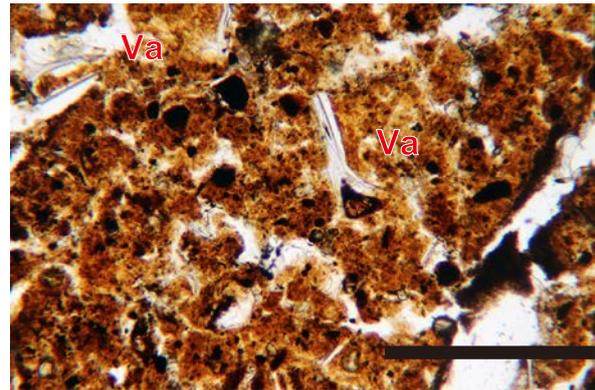


写真10 1地点R4層

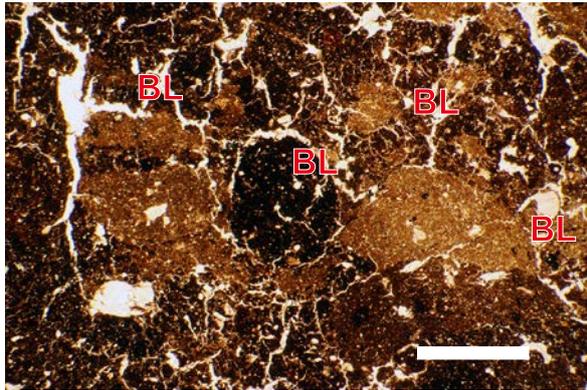


写真11 2地点R1層

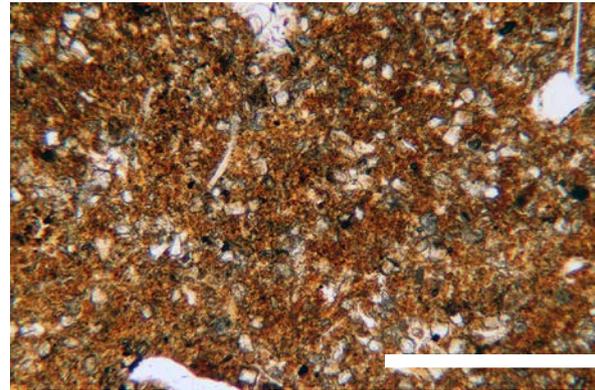


写真12 2地点R2層

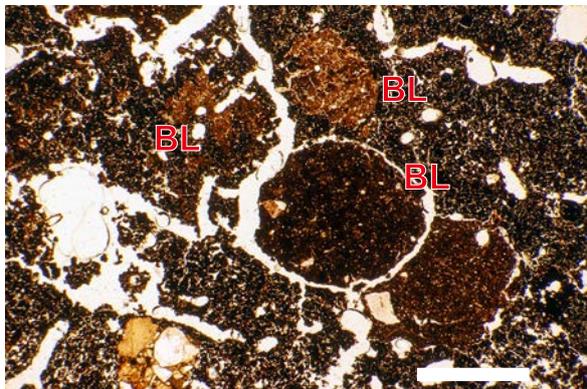


写真13 2地点R3層

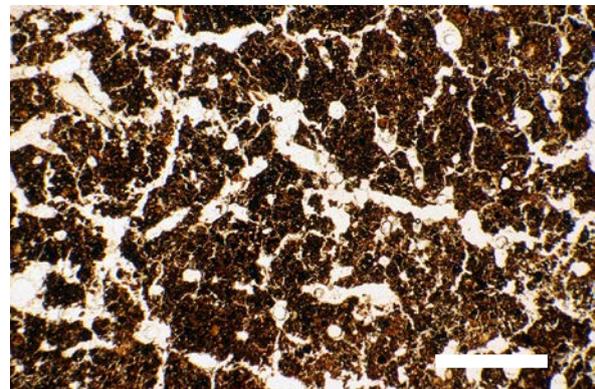


写真14 2地点R4層

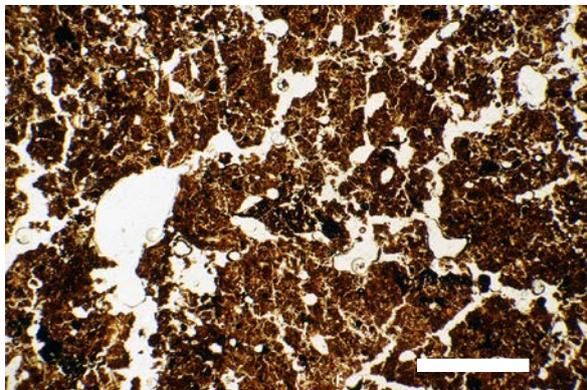


写真15 2地点R4層

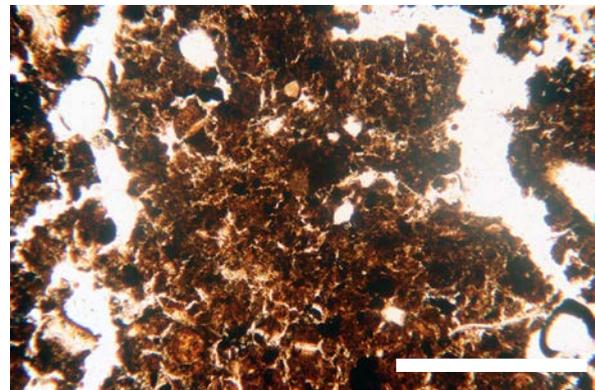


写真16 2地点R4層

写真はすべて下方ボース。凡例 BL (微小ブロック土) Va (火山ガラス)
 スケール: 写真 10, 12 が 0.5mm, 写真 16 が 1.0mm, それ以外は 2.0mm

図6-7 顕微鏡画像2

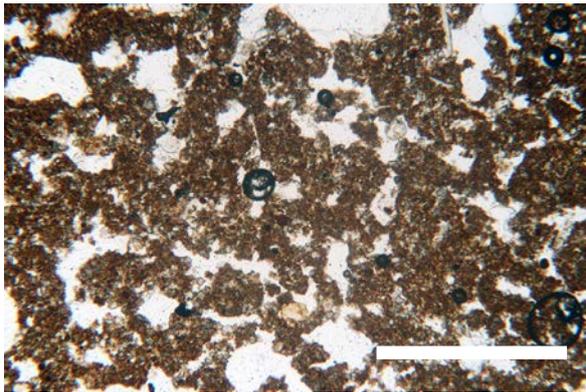


写真 17 4 地点 D2 層

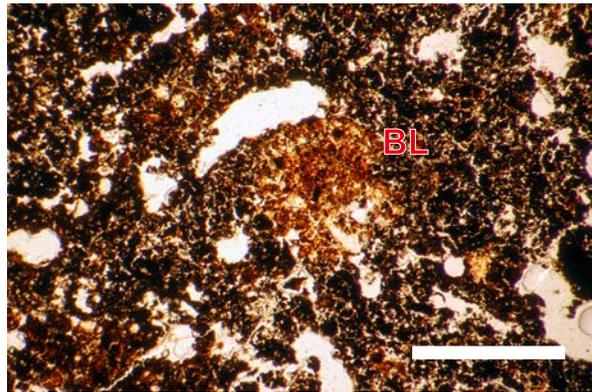


写真 18 4 地点 D3 層

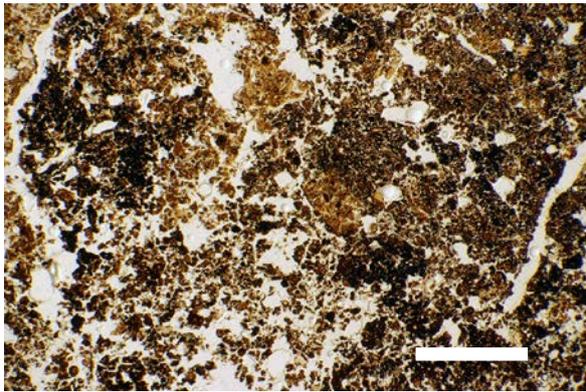


写真 19 4 地点 D4 層

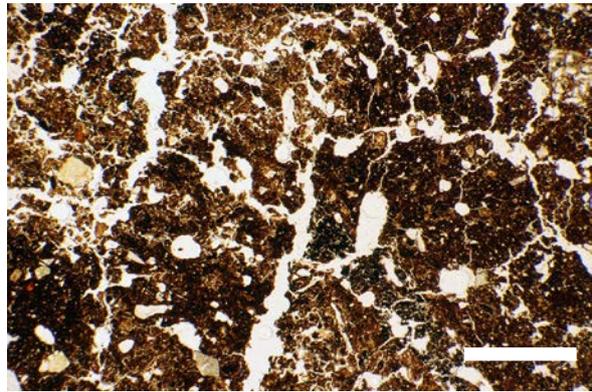


写真 20 4 地点 D4 層

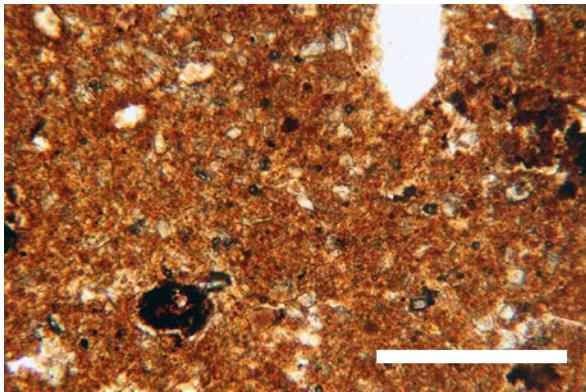


写真 21 3 地点 D2 層

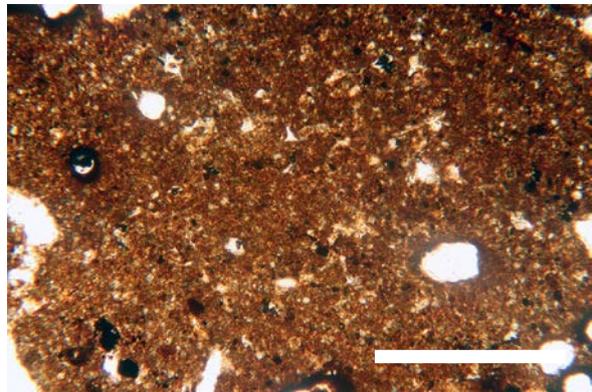


写真 22 3 地点 D2 層

写真はすべて下方ポーラ. 凡例 BL (微小ブロック土) スケール: 写真 19,20 が 2.0mm, それ以外は 1.0mm

図6-8 顕微鏡画像3

点と4地点のD2層では、孔隙の分布状況が異なるが、双方の地点で明瞭に分離したブロック土が含まれず、全体的には堆積物の充填が密である。

D3層とD4層の土壌薄片作製は、4地点のみである。D3層は、黒ボク土で構成され、軟粒状構造をなす。層内には、上位の明橙褐色ローム質堆積物もしくは下位の黄褐色土が起源とみられる微小ブロック土が含まれる(4地点:図6-8の写真18)。

D4層は、黒ボク土よりもやや黒みの薄い褐色土で構成される。最上部はパッキング孔隙を多く含み、堆積物の充填が非常に粗でしまりの悪い層準が載る(4地点:図6-8の写真19)。この層準の下部

3. 土壌薄片作製・観察

では、亜角塊状構造が発達する(4地点:図6-8の写真20)。

(5) まとめ

道路部分で明橙褐色ローム質堆積物を削平して形成される、黒ボク土主体の耕作土と考えられる人為的擾乱層(R1層)では、亜角塊状構造が発達する。水中で堆積物が強く攪拌(しろかき作業)される水田土壌では、壁状の微細構造が形成される(斉藤, 1971)。これに対し、大気下で堆積物が耕耘される畑地土壌は、粒団などの土壌構造の発達程度が水田土壌に比べ相対的に強い(寺沢, 1983)。このような既往の研究にもとづくと、R1層は、畑地耕作土であると考えられる。特に、古代の官道に伴う道路部分の明橙褐色ローム質堆積物は、畑地の造成とその後の耕作活動によって大きく削平されたとみられる。

明橙褐色ローム質堆積物(R2層・D2層)は、道路部分と側溝部分のいずれも堆積物の充填が密で、基本的な微細構造として壁状構造が形成される。層内に分布する孔隙のうち、生物活動によって生成される場合が多いチャンネル孔隙(Stoops et al, 2018)は、埋没後に形成されたと推測される。上述のように、水田でのしろかき作業といった人間による強い生物擾乱で壁状構造が形成される事例はあるものの、基本的にこの微細構造は、乾湿変動、凍結融解、生物擾乱(人間を含む)の影響を受けない堆積物で形成される事例が多い(Stoops et al, 2018)。

このような壁状構造が形成された明橙褐色ローム質堆積物内に、水流などによる再堆積を示唆するような葉理は観察されない。この点は、側溝部分でも同様である。さらに、側溝部分の明橙褐色ローム質堆積物では、溝の中心部に向かって傾斜して積層するような堆積状況も認められない、もしくは明瞭ではない。一般的に、溝などの凹地部分では、塊状無層理(壁状構造)の層相を示すものの、上記のような堆積状況が形成されている場合には、周囲から土壌葡行(土壌クリープ)などの重力性の移動・堆積営力(マス・ムーブメント)によって、地表物質が集団として斜面下方へ再堆積するとみなされる。また、側溝部分に充填される明橙褐色ローム質堆積物については、その底部の傾斜がかなり緩く、マス・ムーブメントが強く作用する条件ではないと考えられる。これらの点を考慮すると、側溝部分の明橙褐色ローム質堆積物では、再堆積の営力として予想される降雨等に伴う地表流などの水流や、斜面で作用する土壌クリープなどのマス・ムーブメントなどが作用していなかったか、もしくは影響がかなり小さかったと推定される。

この他の特徴としては、側溝部分において明橙褐色ローム質堆積物が溝埋土の上半部付近に挟在する点も注目される。明橙褐色ローム質堆積物が道路部分のみに存在し、さらに側溝部分が開口していた場合には、側溝内の底部から下部にかけて、明橙褐色ローム質堆積物が崩積性のブロック土や斜面下方を土壌クリープした再堆積物として多く含まれると考えられる。しかし、本調査区の道路の側溝部分では、北側のSD1と南側SD2ともに、溝の底部から下部において明橙褐色ローム質堆積物の挟在がほとんど認められない。さらに、北側のSD1では、溝埋土の最上部を埋積する明橙褐色ローム質堆積物が、南側に位置する道路側とその反対側の北側の道路外の双方から流入したような堆積状況を示し、さらに両側において顕著な堆積量の差は認められない(図6-3の写真6)。

上記した特徴にもとづくと、側溝内の明橙褐色ローム質堆積物は、道路部分からの再堆積とは必ずしも言えない。

また、後述するテフラ分析結果から確認されるように、明橙褐色ローム質堆積物は、調査区内やその近傍の野市台地の基本層序中に存在していない。この点については、東野土居遺跡(高知県文化財団

埋蔵文化財センター編, 2014・2018 など)といったこれまでの野市台地上の発掘調査と基本層序のテフラ分析結果からも追認される。さらに、今回のテフラ分析では、明橙褐色ローム質堆積物と深堀トレンチで確認される鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準では、砂粒組成や重・軽鉱物組成が大きく異なる結果が得られている。

よって、本調査区の古代の官道部分で検出された明橙褐色ローム質堆積物は、自然営力で堆積したのではなく、道路建設に伴って人為的に周辺から持ち込まれた異地性堆積物の可能性が極めて高いと考えられる。そして、明橙褐色ローム質堆積物は、道路部分と側溝部分の双方において、凹地に充填する客土にみられるような空隙(孔隙)の多い、しまりの悪いブロック土(偽礫)主体の層相を示さず、非常に密な堆積状況をなす。このような微細構造から、明橙褐色ローム質堆積物は、道路部分や側溝上部に空隙を生じないように、人為的に密に充填しながら積層させた層準と推察される。

以上を総合すると、土壌薄片観察を行った明橙褐色ローム質堆積物は、道路部分だけでなく側溝部分の上半部を含めて、造成土もしくは整地土として人為的に形成された堆積物が、ほとんど再堆積せずに残存していると推定される。

堀川(2007)によると、不攪乱状態の「赤音地」は、透水性が良いとされる。このような透水性の良さは、「赤音地」である明橙褐色ローム質堆積物が造成土もしくは整地土として地表に人為的に被覆された要因の一つとも考えられる。ただし、今回検出されたような攪乱状態での透水性に関するデータは得られていない。「赤音地」をなす明橙褐色ローム質堆積物が古代の官道部分に人為的に充填された要因については、現段階ではその由来を含め不明な点が多く、今後の検討課題である。

なお、道路部分の黒ボク土主体のR3層には、上位の明橙褐色ローム質堆積物もしくは下位の黄褐色土が起源と思われる微小なブロック土が含まれる。したがって、R3層の黒ボク土は、自然堆積層ではなく、道路建設時に人為的な擾乱を受けた層準と推定される。この点は、本層が下位のR4層に比べて土壌構造の発達に乏しく、全体的に均質な層相を示す特徴からも支持される。このような層相は、道路造成時の人為的な地表攪乱により、それまでの土壌発達によって形成された土壌構造が破壊された状況を示唆している。

R3層の特徴をふまえると、道路層およびその構築時の人為的擾乱は、R4層を基盤層として行われたと判断される。本層で発達する亜角塊状の土壌構造については、道路造成以前の土壌生成によって形成されたと考えられる。R4層では、人為的な擾乱層が観察されず、遺物や粗大な炭化物も含まれない。よって、古代の官道が構築される以前のR4層段階には、調査区付近で人間活動が活発ではなかったと捉えられる。

側溝部分でも、黒ボク土主体のD3層中には、上位の明橙褐色ローム質堆積物もしくは下位の黄褐色土が起源と思われる微小なブロック土が含まれる。この下位のD4層では、亜角塊状構造が発達する。亜角塊状構造は、土壌生成に伴ってしばしば形成される土壌微細構造と考えられる(百原・永塚, 1997など)。しかし、現地での層相観察では、側溝の埋土において土壌発達を示すような層相や構造が観察されない。したがって、この部分での亜角塊状構造は、溝内を充填する掘削土に由来すると推測される。また、最上部の孔隙の多いしまりの悪い層準は、溝近傍の地表物質の再堆積物と推定される。道路側溝では、D4層とD3層が埋積した後に明橙褐色ローム質堆積物が充填されている。このような層位関係にもとづくと、明橙褐色ローム質堆積物の形成段階は、道路造成の最初期段階ではなく、側溝の埋没が認められるような一定期間が過ぎた後であった可能性も考えられる。

4. テフラ分析

引用文献

- 堀川幸也(2007)アカオンジ(赤音地)とクロオンジ(黒音地). 日本ペドロロジー学会編「土壌を愛し, 土壌を守る-日本の土壌, ペドロロジー学会50年の集大成-」, 265-267, 博友社.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター (2014)東野土居遺跡 I. 第 XI 章, 高知県文化財団埋蔵文化財センター.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター (2018)東野土居遺跡 IV. 第 IV 章, 高知県文化財団埋蔵文化財センター.
- 久馬一剛・八木久義訳監修(1989)土壌薄片記載ハンドブック. 176p, 博友社.
- 町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.
- 百原香織・永塚鎮男(1997)黄褐色森林土と赤黄色土の微細形態学的特徴. ペドロジスト, 41, 99-108.
- 斉藤万之助(1971)水田土壌の凝集性. 土木試験所報告, 56, 1-49.
- Stoops, G., Marcelino, V., Mees, F. (2018) Micromorphological features and their relation to processes and classification. In: Stoops, G., Marcelino, V., Mees, F. (eds) Interpretation of micromorphological features of soils and regoliths 2nd Edition. Elsevier, 895-917.
- 寺沢四郎(1983)各種のインパクトを受けた土壌の物理性と微細形態の特徴. 農業技術研究所報告 B 土壌, 肥料, 36, 233-267.

4. テフラ分析

(1) はじめに

高田遺跡は, 物部川左岸の野市台地の西縁部付近に立地する。今回の発掘調査では, 調査区の基本層序を確認するために, 深掘トレンチを掘削して, 野市台地の段丘礫層上に累重するローム質堆積物の試料を採取した。また, 古代の南海道と推定される道路の側溝の埋土内では, 本地域で「赤音地」(アカオンジ)と呼ばれる火山灰土に非常に類似する明橙褐色のローム質堆積物が検出された。

今回採取したこれらのローム質堆積物について, テフラ層序や堆積物の由来および性状を明らかにする目的で, 鉍物組成や火山ガラスの形態分類, 屈折率測定を行った。

(2) 試料

分析試料は, 5地点から採取した10点と3地点から採取した1点の, 合計11試料である(表6-4)。

図6-9に試料の採取状況を示す。5地点の試料は, 調査区南壁沿いに設定した深掘トレンチで採取した層位試料である。3地点の試料は, アカオンジの明橙褐色のローム質堆積物の試料である。3地点は, 古代の南海道と推定される道路の南側の側溝(SD2)のセクション部分に位置する。

層位的に連続して採取した5地点の試料は, 最上部に黒ボク土の分析No.1, その下位の黄褐色土への漸移層準の分析No.2, 黄褐色土の分析No.3, 黄褐色土と暗褐色土の漸移層準の分析No.4, 暗褐色土の分析No.5と分析No.6, 褐色土もしくは褐色土と黄色土の漸移層準の分析No.7, 砂礫混じりの黄色土の分析No.8, 分析No.9, 分析No.10である。砂礫混じりの黄色土の下位には, 段丘礫層を構成する砂礫層が存在する。また, 分析No.1の黒ボク土の上位には, 遺物包含層をなす古代以降の黒ボク土が堆積する。最上部には, 近世以降の耕作土である黒ボク土を主体とする表土が存在する。

分析No.1の黒ボク土の下位の黄褐色土から最下層の砂礫層(段丘礫層)までの間には, ローム質の

表6-4 分析資料とその特徴

分析No.	採取地点	採取位置	堆積物の色調	礫の最大径	備考
1	5地点	深堀 トレンチ	黒色(2.5Y2/1)土壌, 礫少量混じる	3.0mm	
2			黒色(2.5Y2/1), 土壌		
3			黒褐色(10YR 2/3), 土壌		
4			黒褐色(10YR 2/4), 砂質土壌	3.5mm	
5			黒色(2.5Y2/1), 砂混じり土壌	2.5mm	
6			黒褐色(10YR 2/2), 砂質土壌	4.0mm	
7			黒褐色(10YR 2/3), 礫混じり土壌	11.5mm	
8			暗褐色(10YR 3/3), 礫混じり粘土	20.0mm	
9			褐色(10YR 4/4), 礫混じり粘土	22.0mm	
10			褐色(10YR 4/4), 礫混じり粘土	25.0mm	
11	3地点(SD2)	道路側溝内	赤褐色(5YR 4/8), 粘土, 礫少量混じる	10.0mm	アカオンジ

堆積物が連続的に累重する。このローム質堆積物は、色調によって下位から砂礫混じりの黄色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土に層序区分される。ただし、各土層の境界は、明確な層理面ではなく土色境界となっており、漸移的である。ローム質堆積物については、風成堆積物が主たる母材となる土壌化層準とみなされる。

(3) 方法

各試料を、以下の方法で処理した。

湿潤重量21.09～40.48gを秤量した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)、4.5φ(0.044mm)の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。

4φ篩残渣について、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物については、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破砕型フレーク状(c1)、急冷破砕型塊状(c2)に分類した。なお、分析No.11(アカオンジ)には、植物珪酸体が多く含まれており、植物珪酸体も同時に計数した。

重鉱物については、封入剤レークサイドセメントを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、カンラン石(Ol)、ジルコン(Zr)、磁鉄鉱(Mg)を同定・計数した。

4φ残渣中の火山ガラスは、横山ほか(1986)に従って温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

なお、分析No.11(アカオンジ)は、攪拌直後の懸濁物をスポイトで採取し、レーザー回折式粒度分布測定装置((株)堀場製作所製LA-960)を用いて粒度計測も行った。

(4) 結果

以下に、粒度組成の概略、鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率測定(以上、図6-10・11を参照)、分析No.11(アカオンジ)の粒度計測について述べる。

[分析No.1～No.10(5地点:深堀トレンチ試料)]

4. テフラ分析

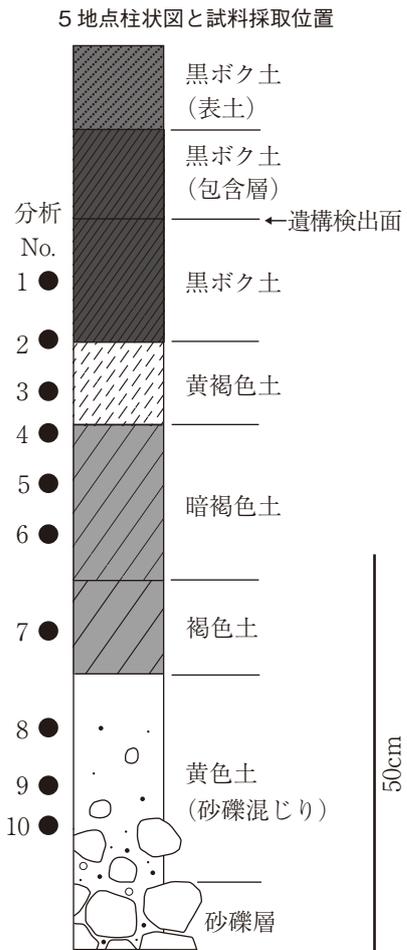


写真1 SD2 溝埋土 明橙褐色ローム質堆積物 試料採取状況 (3 地点: SD2)



写真2 調査区南壁沿いの深掘トレンチ掘削位置 (5 地点)

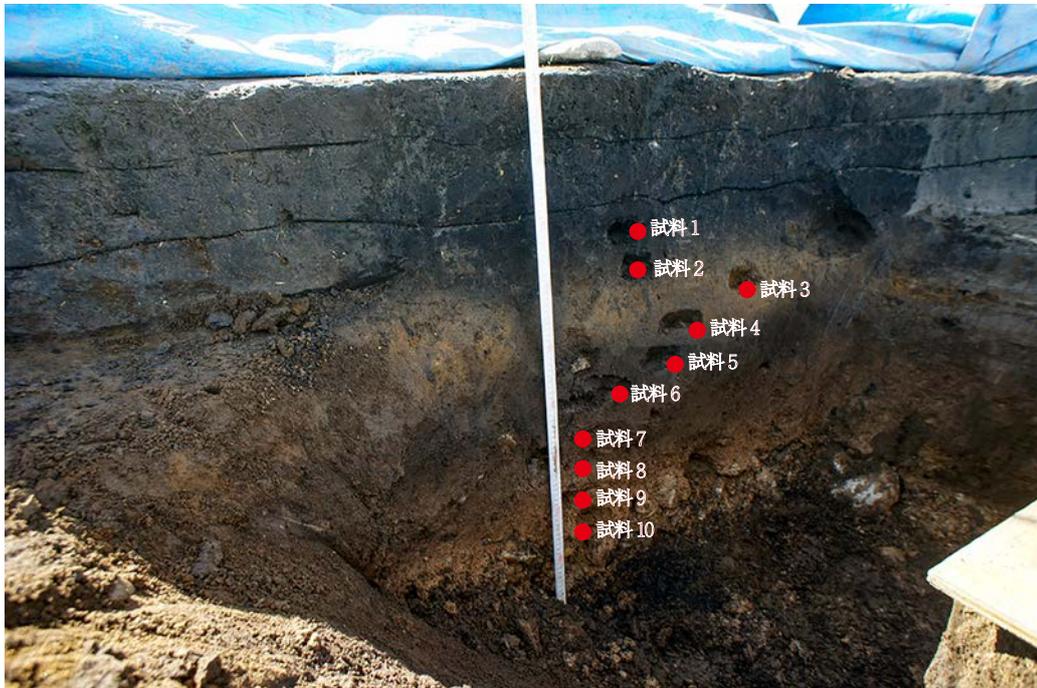


写真3 5 地点の深掘トレンチ断面と試料採取位置

図6-9 3 地点, 5 地点のテフラ分析試料採取状況

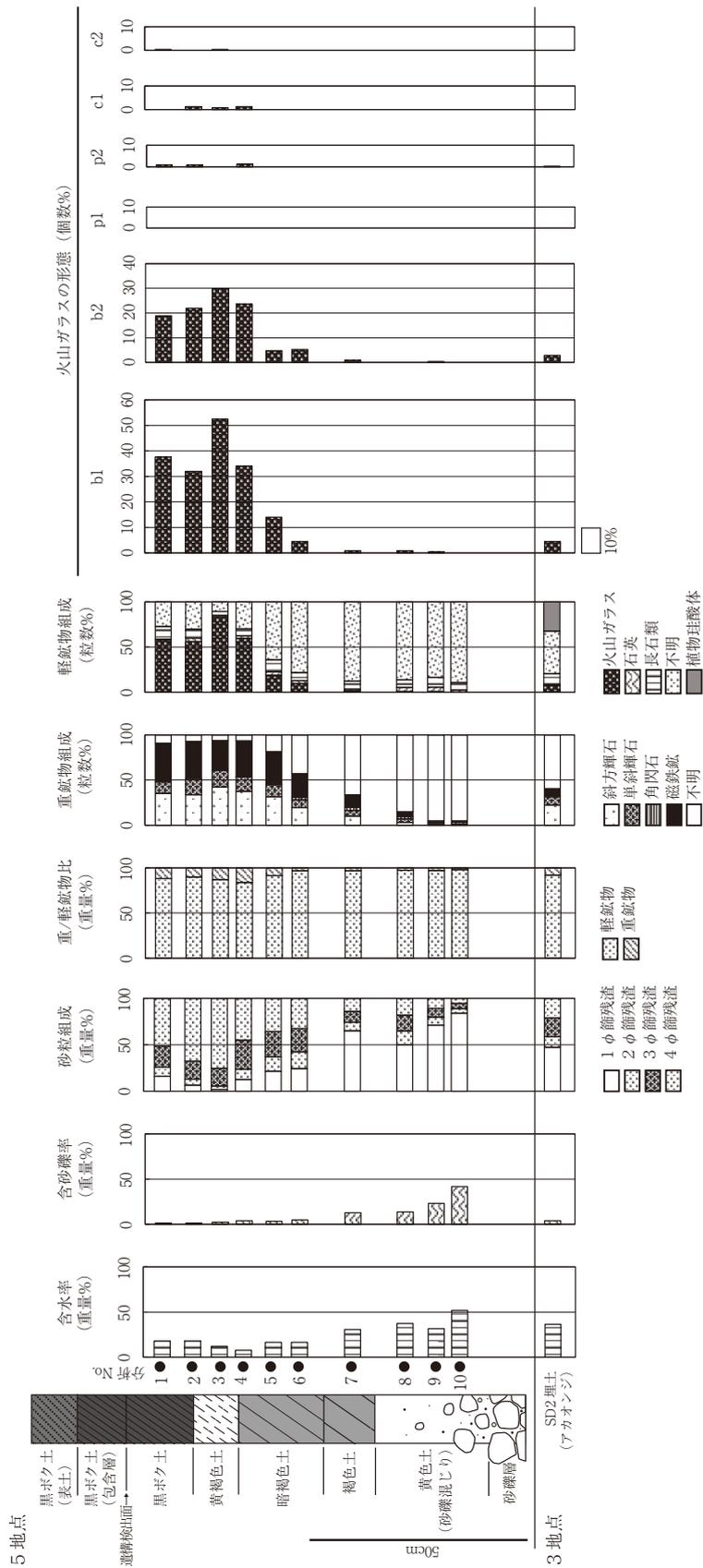


図6-10 鉱物組成の分布図(カンラン石・ジルコンは不明粒子に含めて表示)

4. テフラ分析

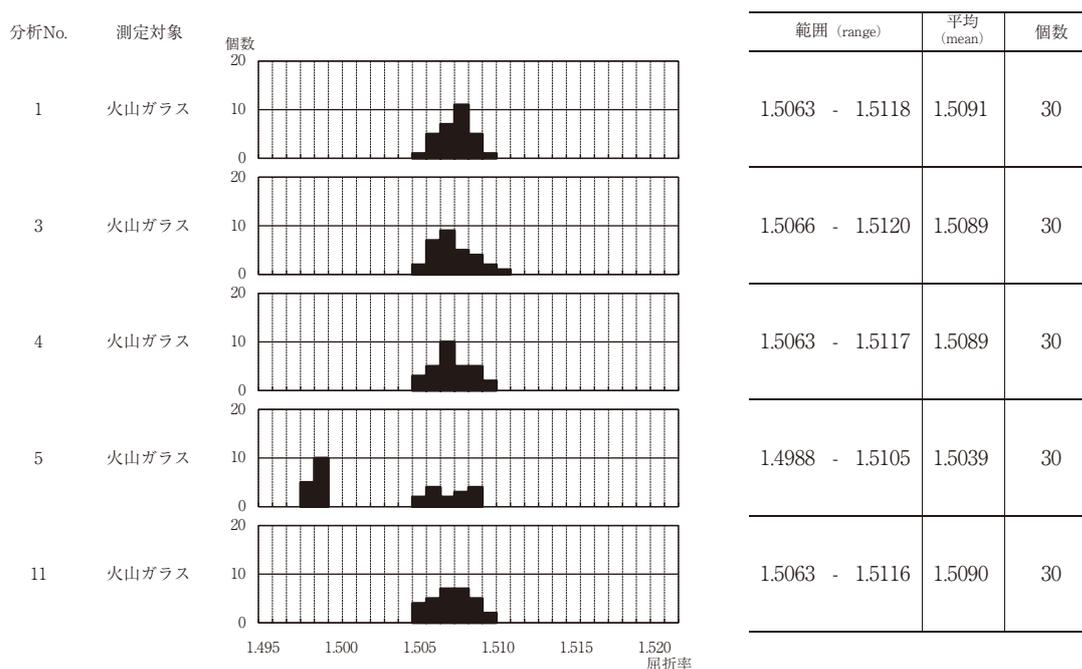


図6-11 火山ガラスの屈折率測定結果

表6-5 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

分析No.	採取地点	処理湿重 (g)	砂粒分の粒度組成 (重量g)					軽・重鉱物組成 (重量g)	
			1φ	2φ	3φ	4φ	4.5φ	軽鉱物	重鉱物
1	5地点	24.52	0.05	0.03	0.07	0.16	0.11	0.15	0.02
2		25.07	0.02	0.02	0.06	0.21	0.11	0.18	0.02
3		24.51	0.01	0.02	0.10	0.40	0.18	0.20	0.03
4		21.09	0.10	0.09	0.25	0.36	0.13	0.21	0.04
5		24.87	0.18	0.13	0.23	0.30	0.15	0.21	0.02
6		25.18	0.29	0.22	0.30	0.39	0.18	0.31	0.01
7		26.23	2.19	0.30	0.40	0.47	0.22	0.31	0.01
8		32.63	2.21	0.67	0.77	0.80	0.39	0.37	0.01
9		31.93	5.26	0.65	0.69	0.80	0.39	0.33	0.01
10		40.48	14.14	0.85	0.89	0.95	0.43	0.47	0.01
11	3地点	32.72	0.58	0.14	0.25	0.26	0.43	0.23	0.02

表6-6 φ篩残渣中の鉱物組成(軽鉱物)

分類群分析No.	軽鉱物										軽鉱物合計	
	石英 (Qu)	長石 (Pl)	植物珪酸体 (PO)	不明 (Opq)	火山ガラス							ガラス合計
					バブル(泡)型		軽石型		急冷破砕型			
					平板状 (b1)	Y字状 (b2)	繊維状 (p1)	スポンジ状 (p2)	フレーク状 (c1)	塊状 (c2)		
1	3	35		68	94	47		2		1	144	250
2	10	25		75	80	55		2	3		140	250
3	4	11		26	131	75			2	1	209	250
4	6	20		74	85	59		3	3		150	250
5	10	33		160	35	12					47	250
6	8	22		196	11	13					24	250
7	5	22		219	2	2					4	250
8	11	22		215	2						2	250
9	12	27		209	1	1					2	250
10	6	21		223							0	250
11	2	30	81	118	11	7		1			19	250

試料は、分析No.1～No.3が土壌、分析No.4～No.7が砂質または砂・礫混じり土壌、分析No.8～No.10が礫混じり粘土である(表6-4)。

粒度組成では、分析No.1～No.6において4φ篩残渣が最も多く、分析No.7～No.10において礫を含むため1φ篩残渣が最も多い。重液分離では、いずれの試料も軽鉱物の割合が高い(表6-5)。

軽鉱物は、分析No.1～No.4に薄手の火山ガラスが多く含まれ、バブル型平板状ガラス(b1)やバブル型Y字状ガラス(b2)が特徴的で、褐色ガラスを伴う。分析No.5とNo.6は火山ガラスが少ないものの、厚手のバブル型平板状ガラス(b1)やバブル型Y字状ガラス(b2)が含まれていた。分析No.7～9は火山ガラスは非常に少なく、バブル型平板状ガラス(b1)あるいはバブル型Y字状ガラス(b2)が含まれていた。分析No.10は火山ガラスが含まれていなかった(表6-6)。ただし、計数以外の火山ガラスはごく少量含まれていた。

重鉱物は、分析No.1～No.6において斜方輝石(Opx)や磁鉄鉱(Mg)が多く、単斜輝石(Cpx)や角閃石(Ho)あるいはカンラン石(Ol)を伴う。分析No.7～No.10には斜方輝石(Opx)や磁鉄鉱(Mg)、単斜輝石(Cpx)を含むものの、不明粒子が多い(表6-7)。

火山ガラスの屈折率測定では、分析No.1が範囲1.5063-1.5118(平均1.5091)、分析No.3が範囲1.5066-1.5120(平均1.5089)、分析No.4が範囲1.5063-1.5117(平均1.5089)、分析No.5が範囲1.4988-1.5105(平均1.5039)であった(図6-11)。

なお、分析No.5の屈折率は、測定範囲の異なる2種類の浸液でそれぞれ15点の火山ガラスを測定した。

[分析No.11(3地点:SD2側溝内のアカオンジ)]

赤褐色(5YR 4/8)で礫が少量混じる粘土である(表6-4)。

粒度組成では、1φ篩残渣と4.5φ篩残渣が多い。重液分離では、軽鉱物の割合が高い(表6-5)。

軽鉱物は、不明粒子や植物珪酸体が特徴的に多く、薄手のバブル型平板状ガラス(b1)やバブル型Y字状ガラス(b2)がやや多く、軽石型スポンジ状ガラス(p2)を伴う(表6-6)。重鉱物は、不明粒子がやや多いものの、斜方輝石(Opx)が多く、単斜輝石(Cpx)や磁鉄鉱(Mg)、角閃石(Ho)を伴う(表6-7)。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.5063-1.5116(平均1.5090)であった(図6-11)。

なお、攪拌直後の懸濁物の粒度計測では、平均粒径(D_φ)が6.12、分級度(標準偏差σ)が1.27、歪度(Sk)が-0.64、尖度(K)が3.31、最頻値が7φであった(表6-8・9、図6-12)。

(5) まとめ

①調査区の基本層序

5地点の深堀トレンチ試料(分析No.1～No.10)では、分析No.1～No.4において、褐色ガラスを伴い、主に薄手のバブル型ガラスを多く含む。火山ガラスの屈折率が1.5063～1.5120と比較的広い範囲を示すため、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と同定される。

また、分析No.5およびNo.6においては、火山ガラスが少ないものの厚手のバブル型ガラスを含む。分析No.5の火山ガラスの屈折率では、低い範囲1.4988-1.4998と高い範囲1.5064-1.5105を示し、屈折率が高い鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と屈折率が低い始良Tn火山灰(AT)が混在する。

以下に、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と始良Tn火山灰(AT)の概要について示す。

始良Tn火山灰(AT)は、南九州始良カルデラを噴出源として噴出した降下軽石、巨大火砕流堆積

4. テフラ分析

表6-7 φ篩残渣中の鉱物組成(重鉱物)

分類群 分析No.	重鉱物							重鉱物 の合計
	斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	カンラン石 (Ol)	ジルコン (Zr)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opq)	
1	88	32	3			104	23	250
2	84	42	4			102	18	250
3	106	46				82	16	250
4	94	40	1			98	17	250
5	79	33	3			88	47	250
6	49	21	7	3		66	104	250
7	25	16	9			34	166	250
8	8	9	7	1	1	13	211	250
9	4	4		2		4	236	250
10	3	6		2		3	236	250
11	56	23	2			20	149	250

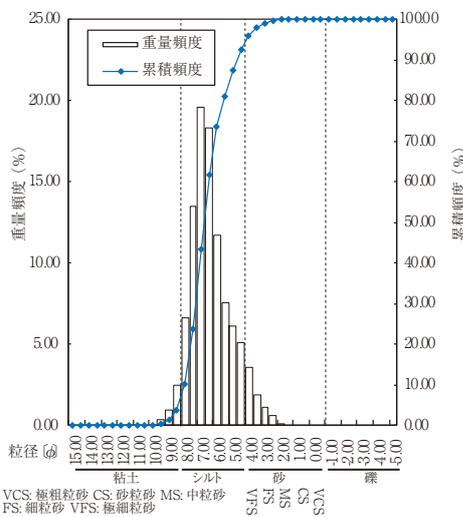


図6-12 分析 No.11 (攪拌直後の懸濁物)の粒度分布図

表6-8 分析No.11の粒度指標

統計値/分析No.	No.11
平均粒径 (D _φ)	6.12
分級度 (標準偏差σ)	1.27
歪度 (Sk)	-0.64
尖度 (K)	3.31
モード数	単峰性
最頻値	7φ

表6-9 分級度, 歪み度, 尖度の評価 (Folk and Ward,1957)

(σ分級度)		(Sk歪み度)		(KG尖度)	
0.35以下	非常に良い	0	対称	1	正規分布曲線
0.35~0.50	良い	-1.00~-0.30	著しく負	0.67以下	非常に扁平
0.50~0.71	やや良い	-0.30~-0.10	負の歪み	0.67~0.90	扁平
0.71~1.00	普通	-0.10~+0.10	ほぼ対称	0.90~1.11	中間的
1.00~2.00	悪い	+0.10~+0.30	正の歪み	1.11~1.50	突出
2.00~4.00	非常に悪い	+0.30~+1.00	著しく正の歪み	1.50~3.00	非常に突出
4.00以上	極めて悪い	正:	粗い方へ偏する	3.00以上	極めて突出
		負:	細かい方へ偏する		

物とその降下火山灰である。このAT火山灰は、日本列島をすっぽり覆い、日本海全域、朝鮮半島、東シナ海、太平洋四国海盆を広く覆っている。分布面積は4 × 106 km²以上で、1,400kmの遠方でも認められる。また、この火山灰は輝石流紋岩質の火山ガラスに富むテフラで、部層にかかわりなくきわめて均質である。火山ガラスの屈折率は範囲1.498-1.501(最頻値1.499-1.500)で、きわめて狭い範囲を示し、均質な巨大マグマが一気に噴出した様子を暗示する(町田・新井, 2003)。なお、水月湖クロノロジーに基づいた年代は、30,009 ± 189 (2σ) SG062012 yr BPである(Smith et al.,2013)。

鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)は、南九州鬼界カルデラから約7,300年前に噴出した降下軽石(pfa)、火砕流堆積物(pf), 降下火山灰(afa)である。このテフラは、輝石デイサイト質のガラス質テフラで、部層により大差なくほぼ均質である。バブル型の多い火山ガラスは、始良Tn火山灰(AT)のそれに比べると、薄手で淡褐色を帯びるものがあり、屈折率はかなり高く、広い屈折率範囲1.508-1.516を示す。斜方輝石(Opx)の屈折率(γ)は1.704-1.713である(町田・新井, 2003)。

②野市台地のテフラ層序

野市台地上に立地する遺跡では、台地の東縁部に位置する東野土居遺跡(図6-13)において段丘礫層上のローム質堆積物のテフラ分析が行われている(高知県文化財団埋蔵文化財センター編, 2014・

2018)。東野土居遺跡のⅡA-1区の深掘トレンチのテフラ分析地点では、段丘礫層の上部に、砂礫混じりの粘土質の黄褐色土、ローム質の褐色土、漸移層を挟んでローム質の暗褐色土、ローム質の褐色土の順に積層しており、褐色土の上部が黒ボク土となる。この地点でのテフラ分析結果からは、ATの降灰層準が褐色土と暗褐色土の間の漸移層、K-Ahの降灰層準が褐色土とされる(高知県文化財団埋蔵文化財センター編, 2018)。

東野土居遺跡で確認された段丘礫層上部のローム質堆積物の土壌層序とテフラ層序と同様の堆積は、野市台地の西縁部に位置する高田遺跡の今回の深掘トレンチの5地点でも確認される。すなわち、高田遺跡の今回の分析試料と東野土居遺跡のⅡA-1区の深掘トレンチのテフラ分析試料では、今回の分析No.8, 9, 10の砂礫混じりの黄色土が東野土居遺跡の砂礫混じりの粘土質の黄褐色土、分析No.7が東野土居遺跡の褐色土、分析No.5, 6が東野土居遺跡の漸移層および暗褐色土、分析No.3, 4の暗褐色土と黄褐色土の漸移層と黄褐色土が東野土居遺跡の褐色土に対比される。

以上の高田遺跡と東野土居遺跡の現地調査による段丘構成層の記載とテフラ分析結果から、野市台地では、段丘礫層上に累重するローム質の堆積物において、共通した基本層序が存在する状況が確認された。テフラの噴出年代から、ATを挟在する褐色土からK-Ahを挟在する黄褐色土は、3万年前前後から7千年前前後の後期旧石器時代から縄文時代早期に堆積したと捉えられる。よって、この層準のローム質堆積物中には、当該期の遺構・遺物が埋没している可能性もある。ただし、野市台地では、ローム質堆積物が全面的に厚く累重せず、離水した扇状地堆積物の砂礫が地表面付近まで露出する部分も多い。したがって、後期旧石器時代から縄文時代早期の層準が良好に堆積する領域

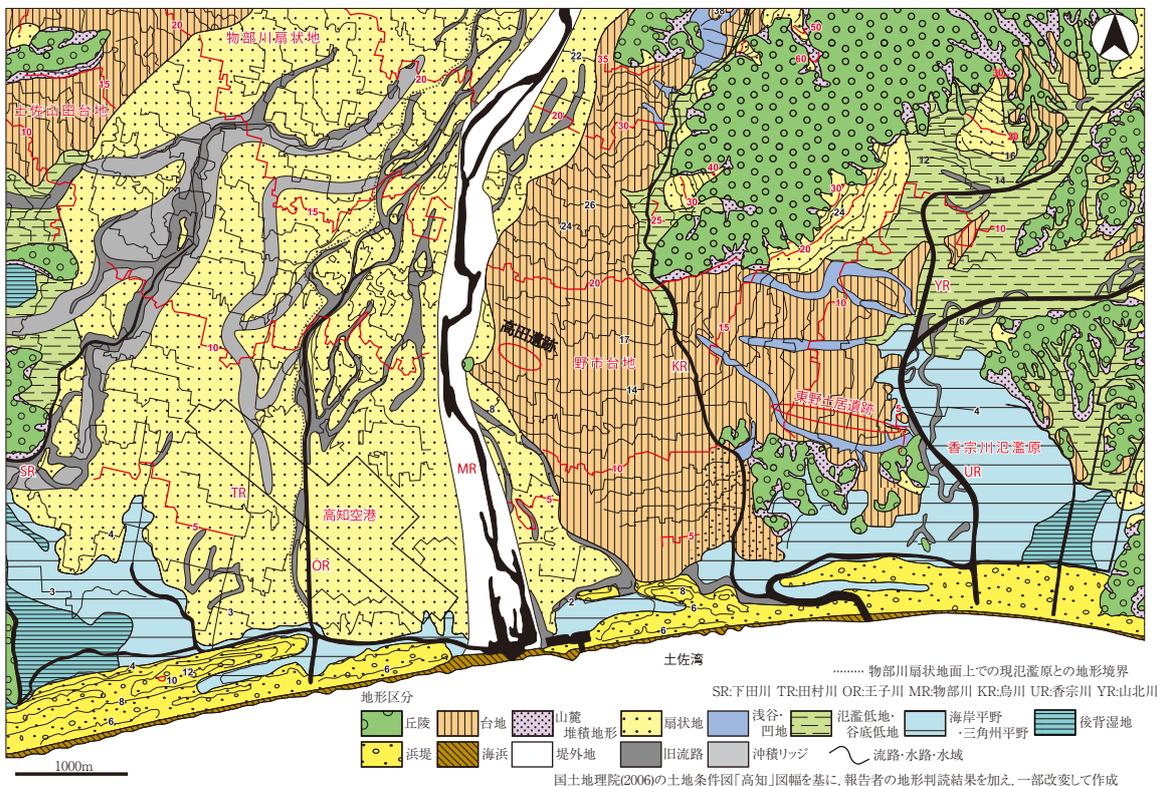


図6-13 野市台地とその周辺の地形分類図

4. テフラ分析

は、かなり少ないと考えられる。

③明橙褐色ローム質堆積物(アカオンジ)

3地点の道路側溝内のアカオンジ(分析No.11)は、薄手のバブル型ガラスがやや多く含まれ、火山ガラスの屈折率が1.5063-1.5116を示すため、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)と同定される。なお、軽鉱物では、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体(主にファン型)が多く含まれていた。

四国地方には、古くからアカオンジ(赤音地)と呼ばれている火山灰起源の土壤があり、腐植をほとんど含まない黄褐色～明橙褐色の土壤である。このアカオンジには礫を含まず、指先ですり合わせて粉末を吹き飛ばすと、ガラス状の細片が指に多く付着し、陽光にキラキラと光る特徴がある(堀川, 2007)。

今回の分析No.11は、礫が少量含まれ、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)起源の火山ガラスは特に多く含まれていない。攪拌直後の懸濁物の粒度計測では、平均粒径が6.12 ϕ 、歪度が-0.64、分級度が1.27であり、粒度が細かく、分級度も悪く、細い方へ偏する分布である。元来、知られているアカオンジ(赤音地)は、腐植を含まない火山灰起源の土壤である。

5地点の深掘トレンチのテフラ分析で確認されるように、野市台地の段丘構成層上部のローム質堆積物にアカオンジは挟在しない。発掘調査および土壤薄片観察の結果から、3地点のアカオンジは、人為的に持ち込まれ、道路と側溝部分に使用された二次的な堆積物とみなされる。古代の官道に伴うアカオンジの性状の検討を進めていくには、今後、一次的で典型的なアカオンジと比較・検討してみる必要がある。

引用文献

Folk, R. L. and Ward, W. (1957) Braros river bar; a study in the significance of grain size parameters. *J. Sed. Petrol.*, 27, 3-26.

堀川幸也(2007)アカオンジ(赤音地)とクロオンジ(黒音地). 日本ペドロロジー学会編「土壤を愛し、土壤を守る－日本の土壤、ペドロロジー学会50年の集大成－」, 265-267, 博友社.

国土地理院(2006) 1:25000 土地条件図 高知. 国土地理院地理調査部防災地理課.

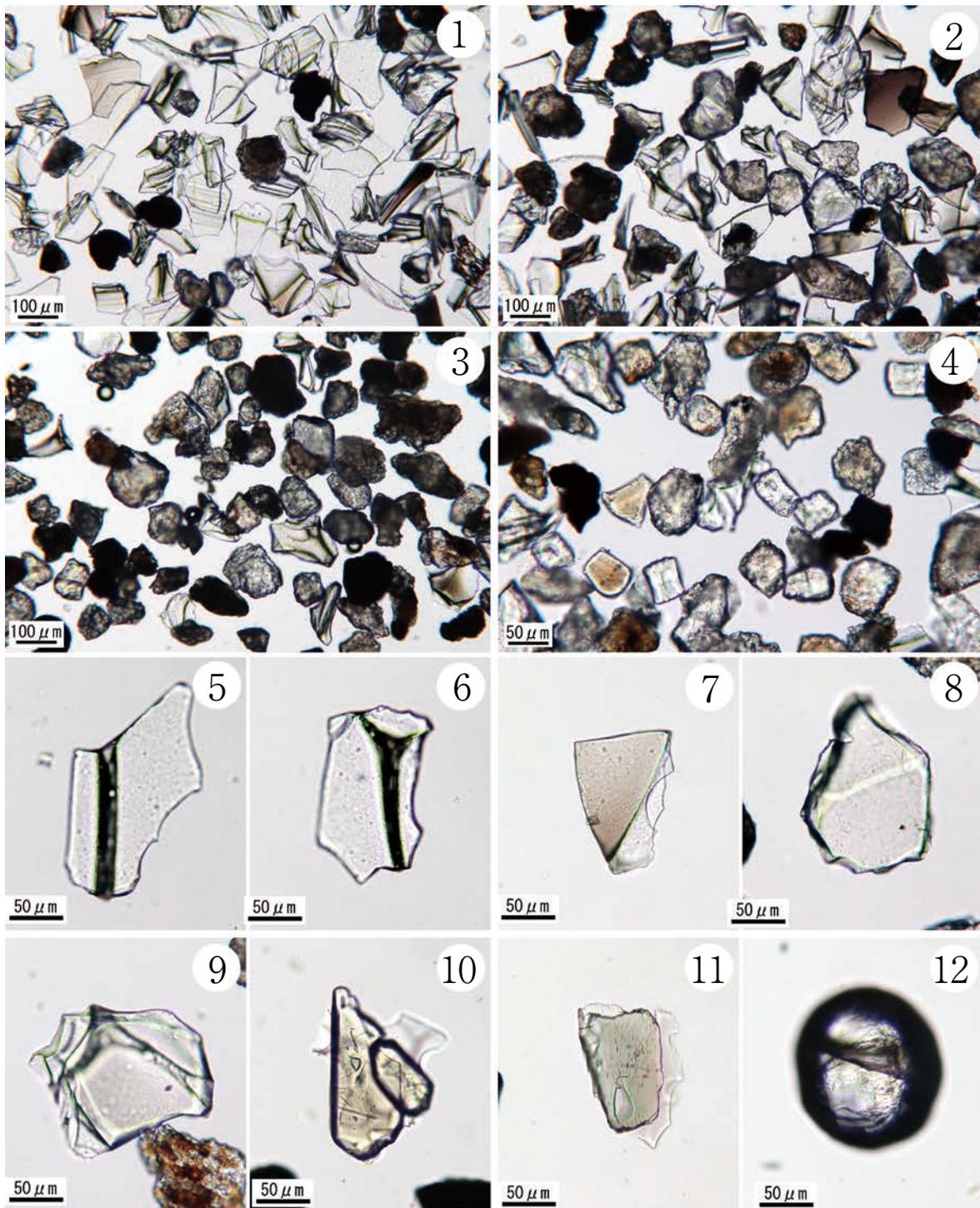
高知県文化財団埋蔵文化財センター (2014)東野土居遺跡Ⅰ. 第Ⅺ章, 高知県文化財団埋蔵文化財センター.

高知県文化財団埋蔵文化財センター (2018)東野土居遺跡Ⅳ. 第Ⅳ章, 高知県文化財団埋蔵文化財センター.

町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336.

Smith V. C., Staff R. A., Blockley S. P. E., Bronk Ramsey C., Nakagawa T., Mark D. F., Takemura K., Danhara T., Suigetsu 2006 Project Members(2013)Identification and correlation of visible tephtras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/ west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews*, 67, 121-137.

横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25, 21-30.



1. 分析 No.3 (4φ軽鉱物) 2. 分析 No.4 (4φ軽鉱物) 3. 分析 No.6 (4φ軽鉱物)
 4. 分析 No.11 (4φ軽鉱物) 5. バブル型平板状ガラス (分析 No.3)
 6. バブル型Y字状ガラス (分析 No.3) 7. バブル型平板状ガラス (分析 No.3)
 8. バブル型平板状ガラス (分析 No.6) 9. バブル型Y字状ガラス (分析 No.6)
 10. 斜方輝石 (分析 No.1) 11. 単斜輝石 (分析 No.1) 12. カンラン石 (分析 No.6)

図6-14 テフラ粒子の偏光顕微鏡写真

5. 高田遺跡出土土師器付着の赤色顔料の蛍光X線分析

(1) はじめに

土師器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

(2) 試料と方法

分析対象は、土師器2点(分析No.1, 2)に付着する赤色顔料で、いずれも内外面に塗布されている(表6-10 1・2, 図6-16 1a・2a)。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取して分析試料とした。

表6-10 分析対象

分析No.	図版番号	種別	付着範囲
1	474	土師器	内外面
2	510	土師器	内外面

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。

装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。

本分析での測定条件は、50kV, 1.00mA(自動設定による)、ビーム径100 μ m、測定時間500sに設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

(3) 結果

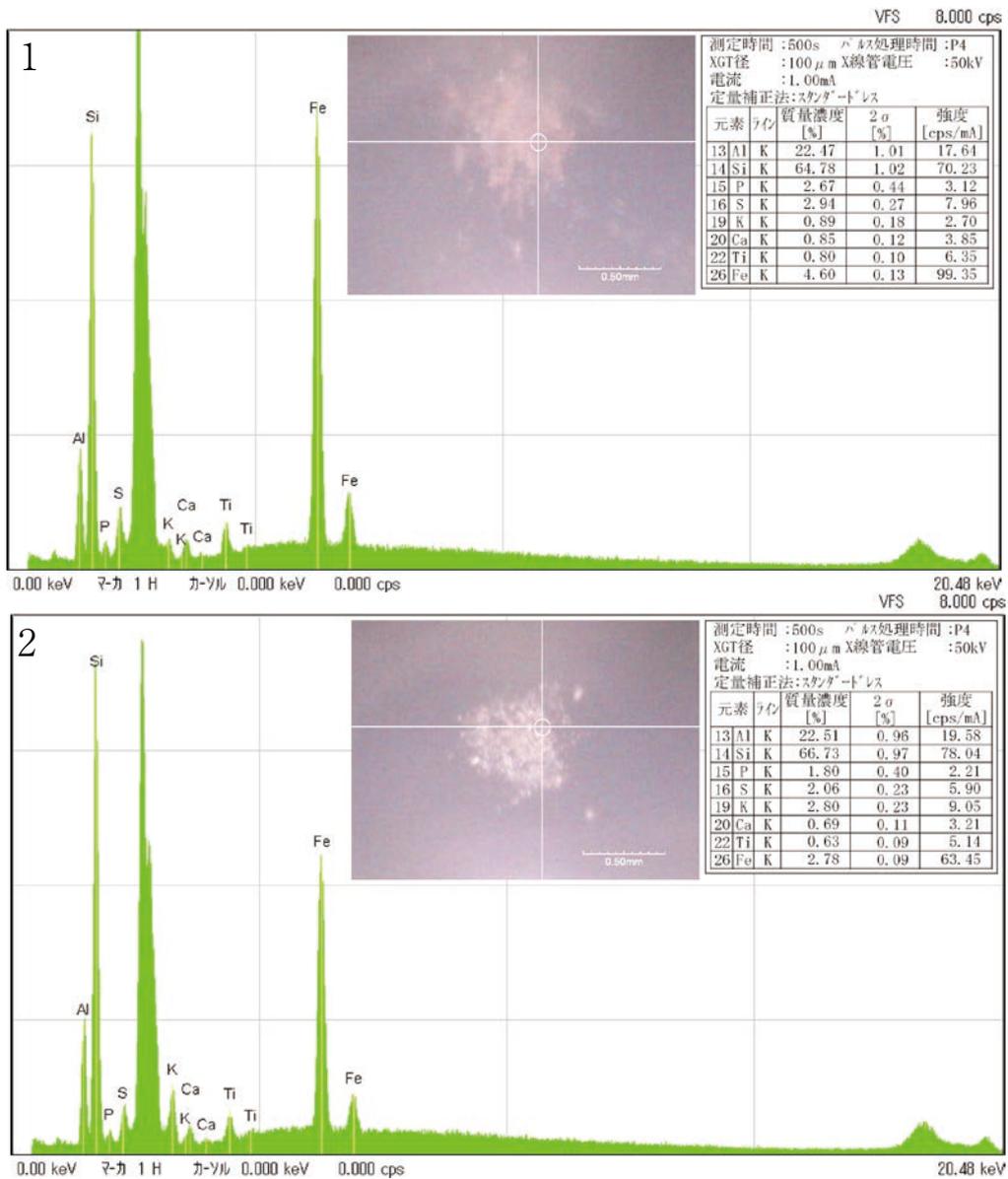
分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を示す(図6-15 1・2)。

いずれも、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、鉄(Fe)が検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を示す(図6-16 1b・2b)。いずれも、赤色パイプ状の粒子は観察されなかった。

(4) まとめ

赤色顔料の代表的なものとしては、朱(水銀朱)とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(III)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬, 2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μ mのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており(岡田, 1997)、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す(成瀬, 1998)。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した試料2点は、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されており、赤い発色は鉄によると推定できる。すな



スペクトル図と分析結果については、上段の1が分析No.1、下段の2が分析No.2の結果を示す。

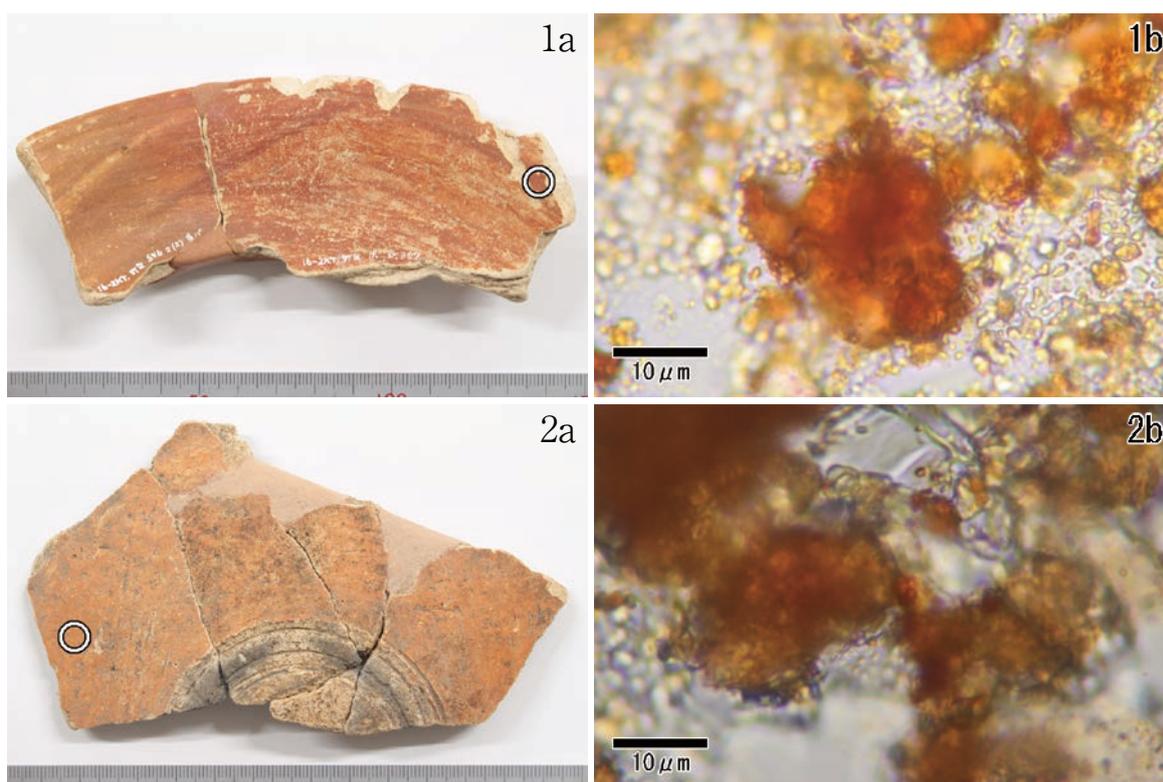
図6-15 赤色顔料のX線分析結果

わち、顔料としてはベンガラにあたる。また、生物顕微鏡観察ではパイプ状粒子が確認されなかったため、いわゆるパイプ状ベンガラではない。2点とも鉄の含有量はそれほど多くなく、鉄化合物以外の不純物を多く含んでいるといえる。色調が褐色がかっており、赤みはそれほど強くない。

(5) おわりに

土師器2点に付着する赤色顔料について分析した結果、いずれも鉄(III)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

5. 高田遺跡出土土師器付着の赤色顔料の蛍光X線分析



1. 分析 No.1 (図版番号 474) 2. 分析 No.2 (図版番号 510)

図6-16 分析対象遺物(a, 白丸は試料採取位置)および赤色顔料の生物顕微鏡写真(b)

引用文献

成瀬正和(1998)縄文時代の赤色顔料 I—赤彩土器—.考古学ジャーナル, 438, 10-14, ニューサイエンス社.

成瀬正和(2004)正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 26, 13-61, 宮内庁正倉院事務所.

岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

第Ⅶ章 高田遺跡 総括

1. 弥生時代

高田遺跡では平成27年度の調査で、Ⅰ区とⅡ区において9軒の竪穴建物跡と土器棺墓を2基、平成28・29年度の調査では、今回報告するⅤ-1区においてST1、Ⅴ-2区でST2～4の竪穴建物跡を4軒、Ⅳ区で土器棺墓4基を検出しており、当遺跡では合わせて13軒の竪穴建物跡と6基の土器棺墓を確認することができた。その内弥生時代に位置付けられる主な竪穴建物について取り上げ、その時期について考えてみたい。

Ⅰ区 ST1

調査区の北西部において検出した。平面形は隅丸形状を呈し、規模は一辺が4.7mを測る。床面からは中央ピットと支柱穴が検出されている。中央ピットは長軸0.8m、短軸0.4m、深さ約7cmを測る楕円形状を呈し、竪穴建物跡床面の南寄りに位置する。遺物は壺、甕、鉢、高杯が出土している。壺は広口壺で口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。端部外面とさらに肩部に櫛描波状文を配する。甕は底部が出土している。平底を呈し、外面はハケ目調整後ナデ調整を施す。内面にはナデ調整と指頭圧痕が認められる。高杯は杯部が椀状を呈し、杯部口縁部はヨコナデ、外面にはハケ目調整とナデ調整で、脚部外面にはヘラミガキがみられる。

Ⅱ区 ST2

Ⅱ区において検出した。平面形は多角形あるいは不整形形状を呈し、規模は長軸が7.13m、短軸6.67mを測る。床面からは中央ピットと支柱穴、壁溝及びベッド状遺構が検出されている。中央ピットは長軸1.7m、短軸0.7m、深さ約23cmを測る楕円形状を呈し、ST1と同じく床面の南寄りに位置する。

遺物は壺、甕、鉢、高杯が出土している。壺は広口壺、甕は口縁部がくの字状を呈し、外面には頸部までタタキ目が認められ、口縁部にタテ方向のハケ目調整が施されるものや胴部外面にタテ方向のハケ目調整が施される甕もみられる。底部は平底である。鉢は底部が平底を呈し、外面にはタタキ目が残り、ナデ調整。内面はハケ目調整とナデ調整が施される。また、ヘラミガキが施される鉢も出土

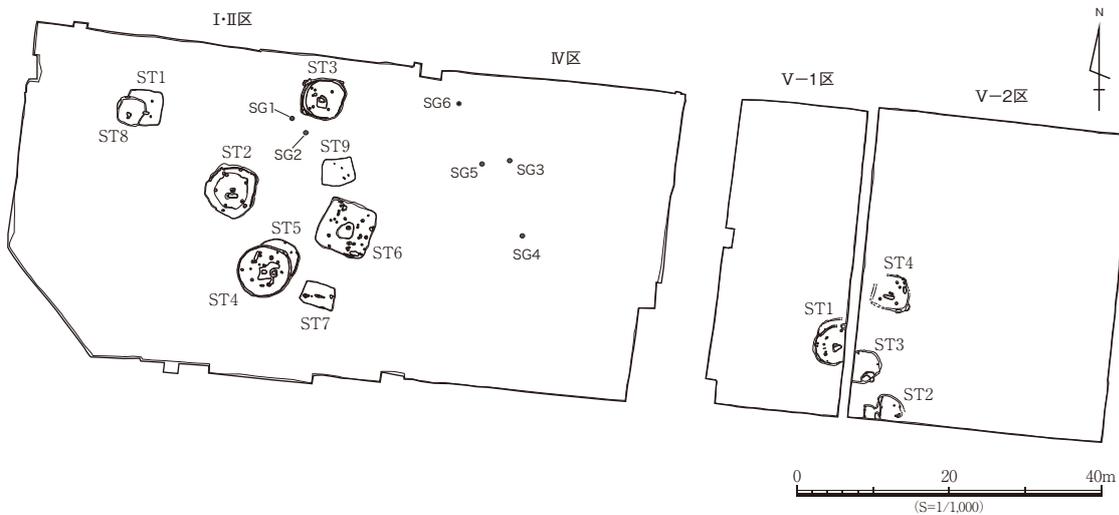


図7-1 高田遺跡竪穴建物跡位置図

1. 弥生時代

している。高杯は脚部外面にヘラミガキ、内面にはハケ目調整が施される。

Ⅱ区ST3

平面形は不整形を呈し、規模は長軸5.66m、短軸5.44mを測る竪穴建物跡である。床面からは中央ピットと考えられる土坑と支柱穴、壁溝が検出されている。土坑は不整形で長軸は約1.6m、短軸1.4mで、深さ約25cmを測る。遺物は壺、甕、鉢、高杯と管玉が出土している。壺は広口壺と長頸壺と考えられる口縁部がみられる。広口壺は口縁端部を上下に肥厚させている。広口壺の中には口縁端部に凹線文を巡らしたものもみられる。甕は出土遺物の中で主体を占める。底部が平底で、口縁部はくの字状を呈し、外面は口縁部にナデ調整、胴部はハケ目調整が施される。甕の胴部内面にはナデ調整を施すものと、ヘラケズリを施すものがみられる。鉢は平底を呈し、口縁部が外反するものと、しないものがある。外面はタテ方向のハケ目調整やヘラミガキ、また内面もハケ目調整及びナデ調整が施される。口縁端部は面取り状をなすものが多い。高杯は杯部が椀状を呈する。脚部にはヘラミガキが施される。

Ⅱ区ST4

遺構の北東はST5と接し、きられる。平面形は円形を呈し、規模は長軸が約7.38m、短軸は約7.00mを測る。遺跡の中では最大規模の竪穴建物跡である。床面からは中央ピットと支柱穴、壁溝が検出されている。中央ピットは長軸0.7m、短軸0.5m、深さ27cmを測る楕円形で、床面のほぼ中央に位置している。遺物は壺、甕、鉢、高杯、金属製品が出土している。壺は底部のみである。甕は出土遺物の中で主体を占める。平底を呈し、口縁部はくの字状を呈し、胴部外面にタタキ目の後、タテ方向のハケ目調整を施す。また口縁部が貼付口縁状を呈し、端部に刻目が施される甕が出土している。胴部外面にタタキ目が認められる。鉢は大型と小型の鉢があり、口縁端部は面取り状をなし、外面はタテ方向のハケ調整とナデ調整、内面にナデ調整が施される。

Ⅱ区ST5

遺構の南西部はST4と接し、きる。平面形は隅丸方形と推定される。規模は長軸が6.50m、短軸約5.86mで、床面からは広範囲の焼土が検出されており、焼失住居と考えられている。床面からは貯蔵穴と考えられる土坑や柱穴、壁溝が検出されている。遺物は壺、甕、鉢、石製品が出土している。壺は広口壺と頸部が短く、口縁部が外反する小型の壺が出土している。甕は口縁部がくの字状を呈し、外面は頸部までタタキ目、ハケ目調整とナデ調整が施される。鉢は大型と小型があり、口縁端部は面取り状をなすものと、丸くおさめるもの、さらに口縁部が外反するタイプと直線的にのびるタイプがみられる。外面はタテ方向のハケ調整とナデ調整、内面にナデ調整が施される。

Ⅱ区ST6

平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸が6.90m、短軸6.49mを測る。床面からは中央ピットと土坑、支柱穴、壁溝が検出されている。中央ピットは楕円形状で床面のほぼ中央部に位置している。遺物は壺、甕、鉢、高杯、金属製品が出土している。壺は小型の壺と広口壺があり、広口壺の口縁端部に凹線文が施される。甕は鉢と共に出土遺物の主体を占める。甕の口縁部はくの字状を呈し、外面は頸部までタタキ目が残る、ハケ調整とナデ調整が施される。内面はハケ目調整とナデ調整である。鉢は大型と小型があり、口縁部が直線的にのびるタイプが主体をしめる。

Ⅱ区ST7

平面形は隅丸長形状を呈し、規模は長軸が4.50m、短軸3.14mを測る。高田遺跡の中では最小規

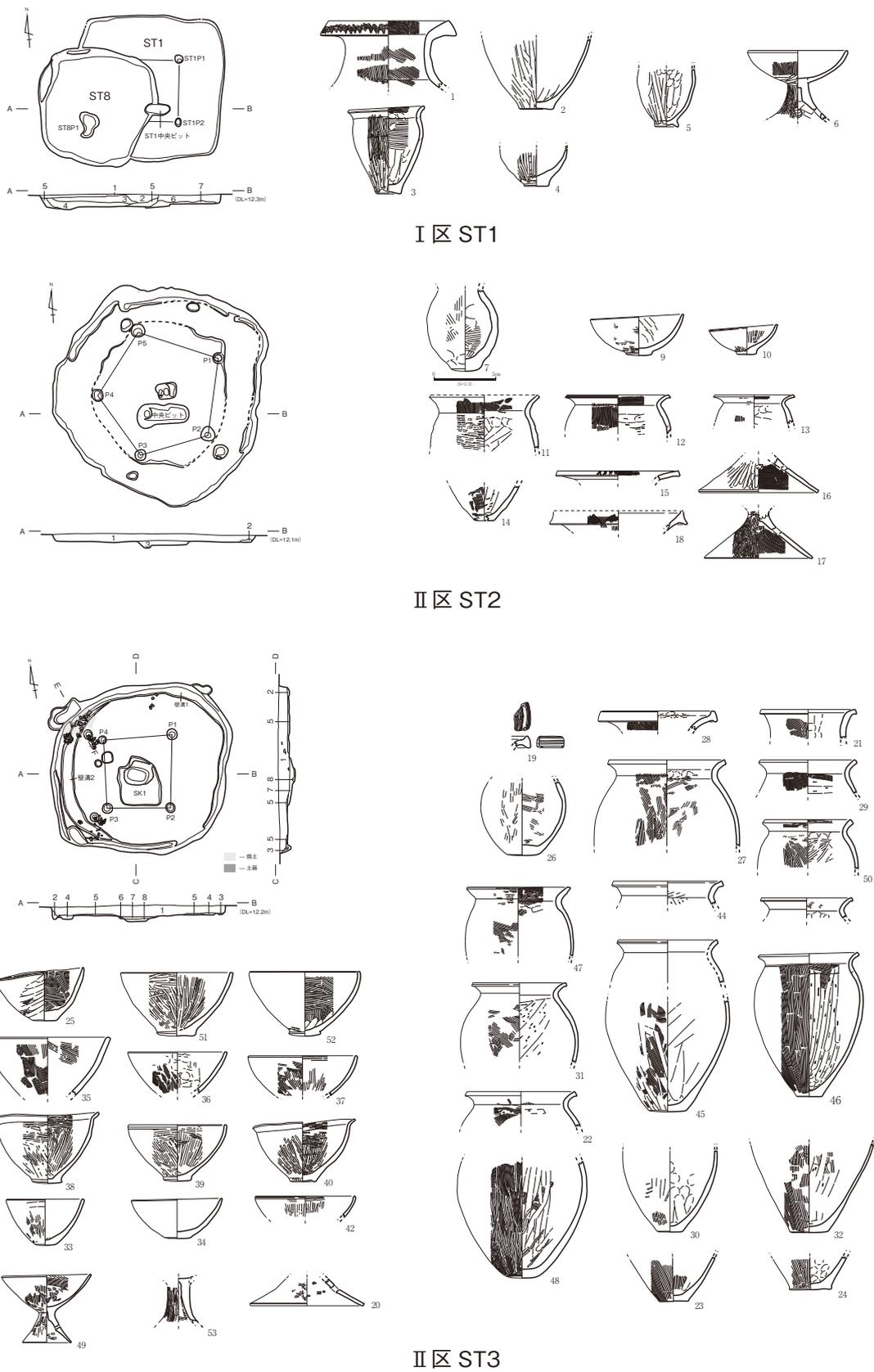


図7-2 高田遺跡 I 区と II 区竪穴建物跡と出土遺物(遺構 S = 1/200, 遺物 S = 1/5, 1/10)

1. 弥生時代

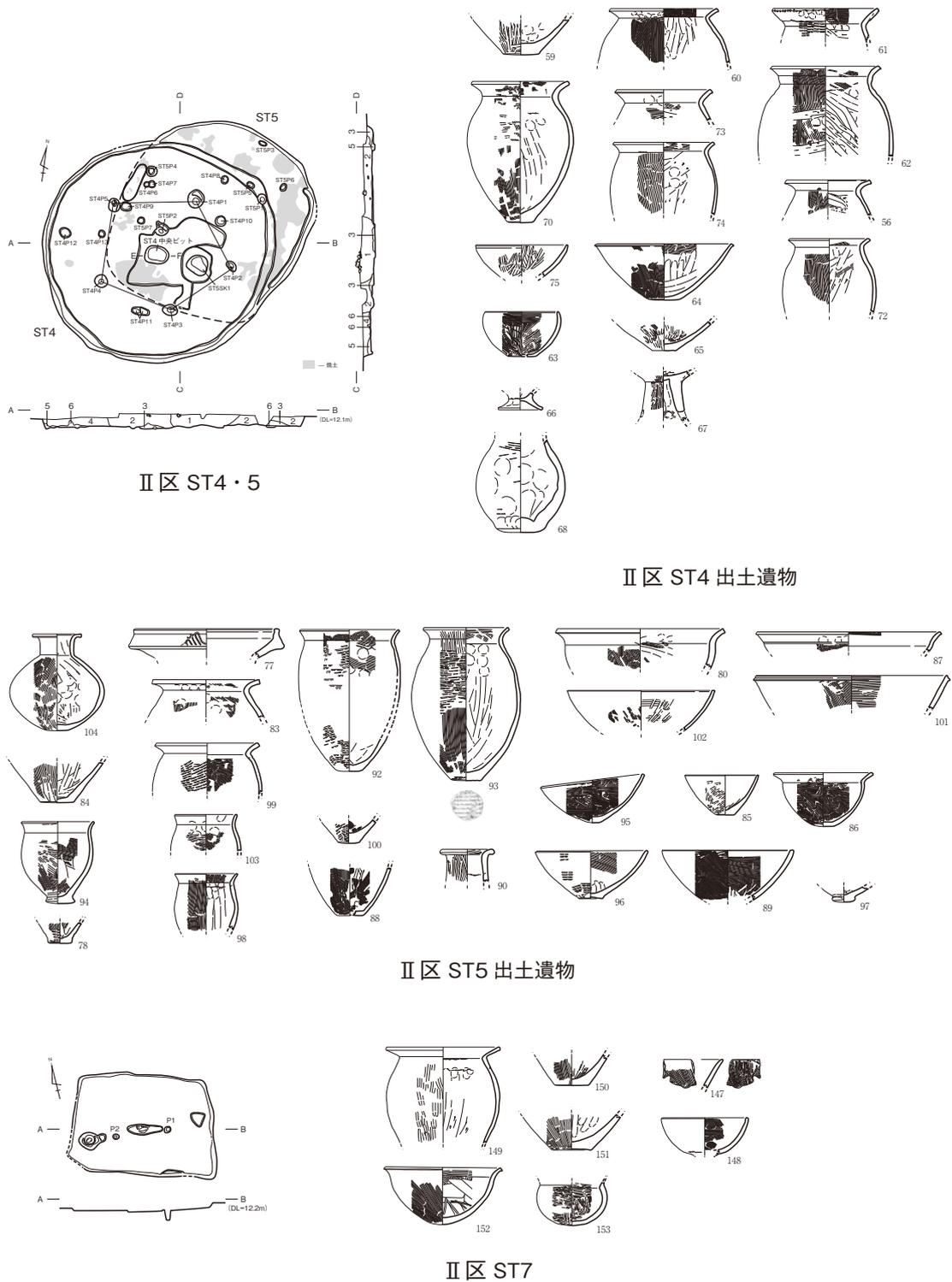


図7-3 高田遺跡II区竪穴建物跡と出土遺物(遺構S=1/200, 遺物S=1/5, 1/10)

模の竪穴建物跡である。床面からは支柱穴と考えられる柱穴が検出されている。

遺物は壺, 甕, 鉢, 高杯, 金属製品が出土している。甕は口縁部がくの字状に強く外反し, 外面にタタキ後のヘラミガキ, 内面はナデ調整と指頭圧痕, 下半部にヘラケズリが施される。鉢は丸底状を呈

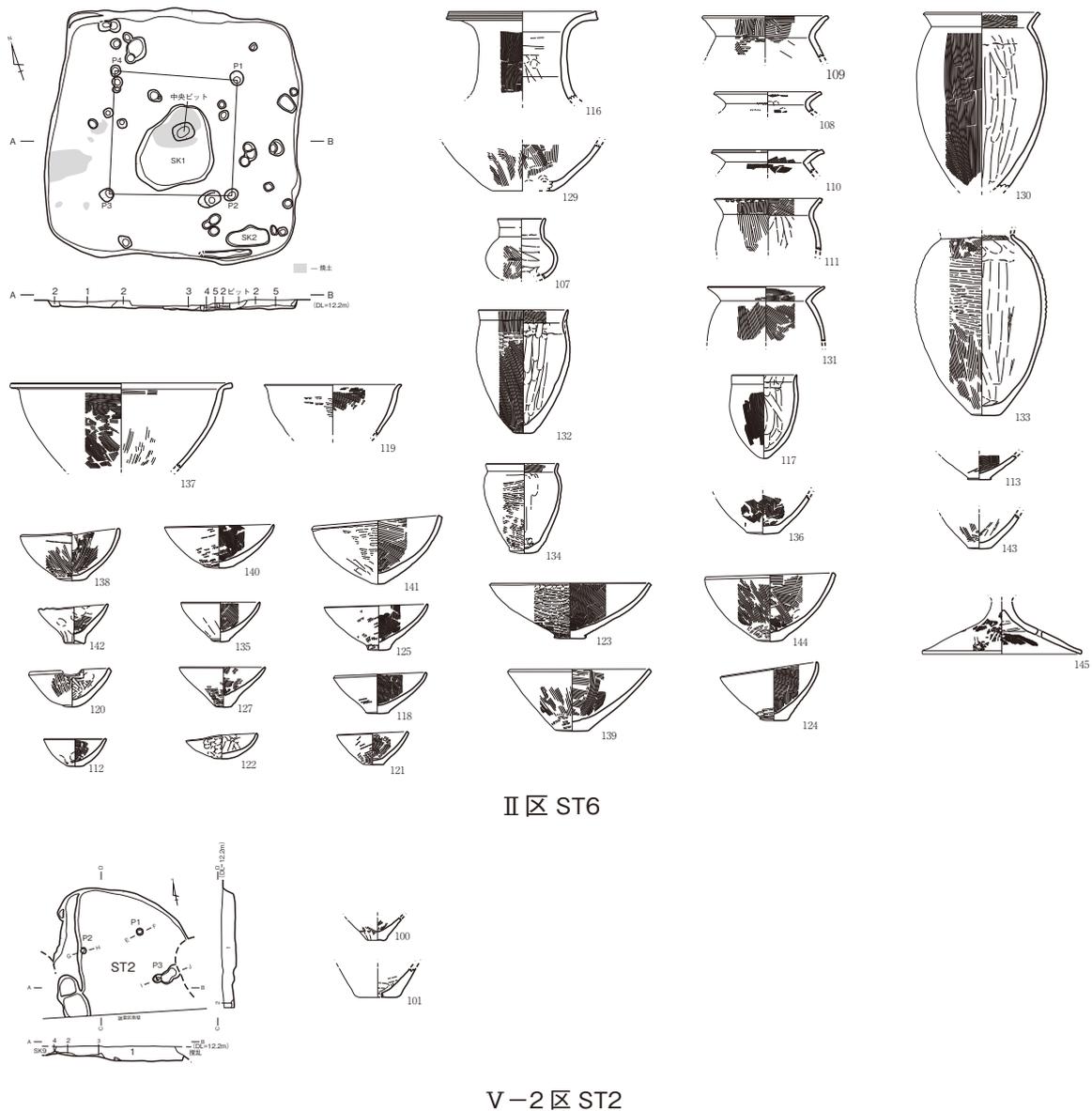


図7-4 高田遺跡Ⅱ区とⅤ区竪穴建物跡と出土遺物(遺構 S=1/200, 遺物 S=1/10)

し、口縁部は外反する。高杯は杯部が椀状を呈するタイプである。

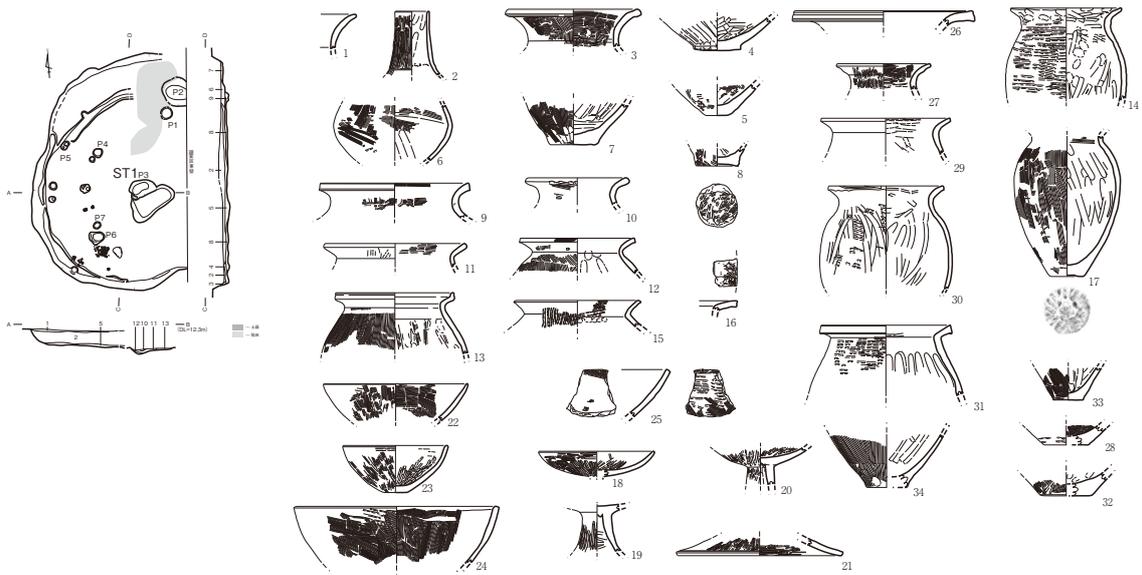
V-1区 ST1

V-1区において検出した。遺構の東側は調査区外のため確認できなかった。規模は南北6.27m, 東西4.0m以上を測る。床面からは中央ピット, 主柱穴, 壁溝が検出されている。中央ピットは長軸0.62m, 短軸0.41m, 深さ約20cmの楕円形状で、床面の中央寄りに位置している。遺物は壺, 甕, 高杯が出土している。壺は広口壺と小型の長頸壺がみられる。甕は出土遺物の中で主体を占める。底部は平底で、頸部外面までタタキ目が残り、ハケ目調整とナデ調整, 内面はナデ調整が施される。鉢は大と小型があり、口縁部は直線的にのびる。高杯は杯部が皿状を呈し、外面にヘラミガキが施される。

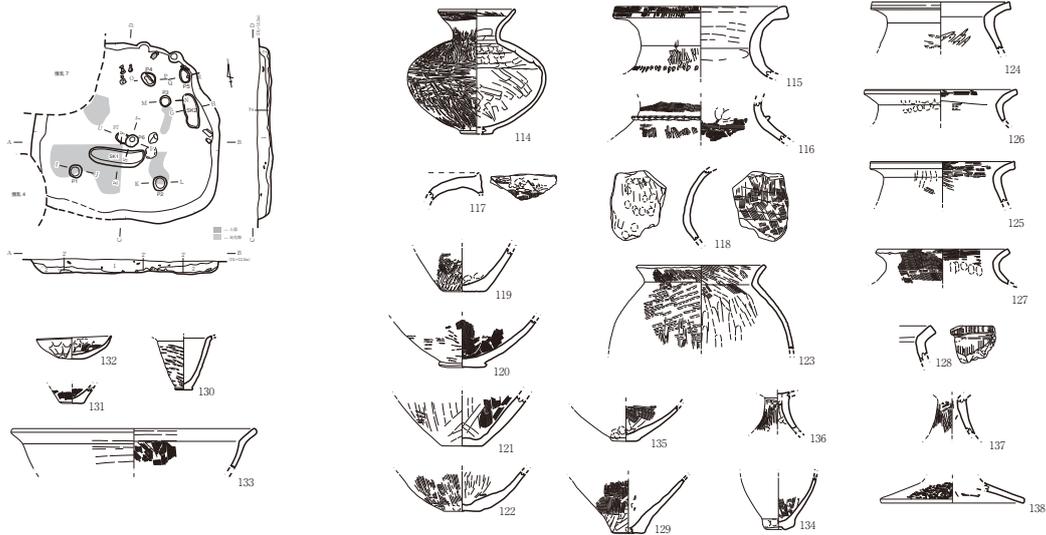
V-2区 ST4

V-2区において検出した。遺構は上面のカクランによって削平されていたが、平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸4.88m, 短軸4.60mを測る。床面からは中央ピット, 主柱穴, 土坑などが検出され

1. 弥生時代



V-1区 ST1



V-2区 ST4

図7-5 高田遺跡V区竪穴建物跡と出土遺物(遺構S=1/200, 遺物S=1/10)

ている。中央ピットは長軸1.46m, 短軸0.48m, 深さ12cmを測る楕円形を呈し, 床面のやや南寄りに位置している。遺物は壺, 甕, 鉢, 高杯, 石製品が出土している。壺は広口壺, 長頸壺, 小型の壺があり, 広口壺の口縁端部にはハケ目状工具による刺突, 頸部にも刺突が施される。甕は平底を呈し, 口縁部がくの字状を呈し, 外面にタタキ目が残り, ハケ目調整とナデ調整, 内面はハケ目調整とナデ調整が施される。鉢は大型で, 口縁部が外反するタイプがみられる。

竪穴建物跡とその出土遺物について概要を述べた。Ⅱ区ST4では貼付口縁をもつ甕が出土しており, やや古い様相をもつ。Ⅱ区ST5は甕が主体であるが, 鉢の比率が多くなり, 大型と小型のものが

みられる。Ⅱ区ST6も鉢の比率が多くなり、同じく大型と小型のものがみられる。Ⅰ区ST3も甕が主体であるが、鉢の比率も同様に多くなり、法量がまとまっている。高杯では杯部が椀状を呈する。Ⅴ-1区ST1は甕が主体であり、甕には外面にタタキ目が残る。鉢は大型と小型のものがあり、高杯は杯部が皿状を呈する。

竪穴建物跡の出土遺物からみた時期は、概ね弥生時代後期後葉に位置付けられる。それぞれの竪穴建物跡の存続時期はⅡ区ST4が最も古く、次にⅡ区ST3とST7、さらにⅠ区ST1とⅡ区ST2が続き、最終段階として、Ⅱ区ST6とⅤ-1区ST1・Ⅴ-2区ST4、Ⅱ区ST5が継続していたものと考えられる。

土器棺墓

高田遺跡では調査区の西部にあたるⅡ区とⅣ区において土器棺墓(SG1~6)が6基確認されている。弥生時代後期から古墳時代にかけて県内の遺跡において土器棺の検出例が増えており、高田遺跡の北方0.4kmに位置する下ノ坪遺跡で2基、さらに北方約1.6kmに所在する深淵遺跡でも2基、当遺跡の東方約2.5kmに位置する東野土居遺跡では7基の土器棺を検出している。各遺跡とも壺棺で、蓋として甕を使用したものと考えられている。

高田遺跡で検出された6基の内、図7-6で図示したようにSG1は甕、SG2では壺、甕、鉢、SG3・4は壺、SG5は壺と壺、SG6では壺と高杯がみられる。SG1以外は全て壺棺で、SG2は甕あるいは鉢を蓋として被せていたと思われる。また、SG5は壺を蓋とし、SG6では高杯の杯部を蓋に使用していたものと考えられる。県内出土の土器棺墓は壺棺の使用例がもっとも多く、甕の使用は少ない。また、蓋としては壺がもっとも多く、甕と鉢もみられるが、高杯を使用したものは、東野土居遺跡で1例のみ確認されている。今回当遺跡で確認された土器棺の特徴としては、壺棺が主体であり、蓋には壺の他甕や鉢、または東野土居遺跡のみでみられた高杯の使用がSG6でみとめられた。その出土地点であるが、SG1と2は竪穴建物跡に近接した地点で検出されているが、SG3~6に関しては竪穴建物跡の空白地より検出されており、その埋葬地点に差がみられる。

高田遺跡は物部川左岸沿いの野市台地上に立地している。調査で確認されたこれら竪穴建物跡等は、台地上の縁辺部に近い西側調査区に集中し、東側の調査区にいくほど遺構・遺物等は希薄になっている。これら状況からは、台地上の縁辺部を中心に集落が形成されていたものと考えられる。

同じく物部川左岸沿いの台地上には、約1.6km上流側から深淵遺跡、下ノ坪遺跡、北地遺跡、西野遺跡等の弥生集落が点在している。各遺跡の消長及び盛行時期には差がみられるが、高田遺跡とともに当地域の弥生社会を構成していたものと考えられ、巨視的にみると台地上縁辺部を居住域、台地下の沖積平野を生産域として利用していたものと推測される。

参考文献・報告書

高知県文化財団埋蔵文化財センター2018年『高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡』

高知県文化財団埋蔵文化財センター2018年『東野土居遺跡Ⅳ』

野市町教育委員会1998年『下ノ坪遺跡Ⅱ』

野市町教育委員会1989年『深淵遺跡発掘調査報告書』

1. 弥生時代

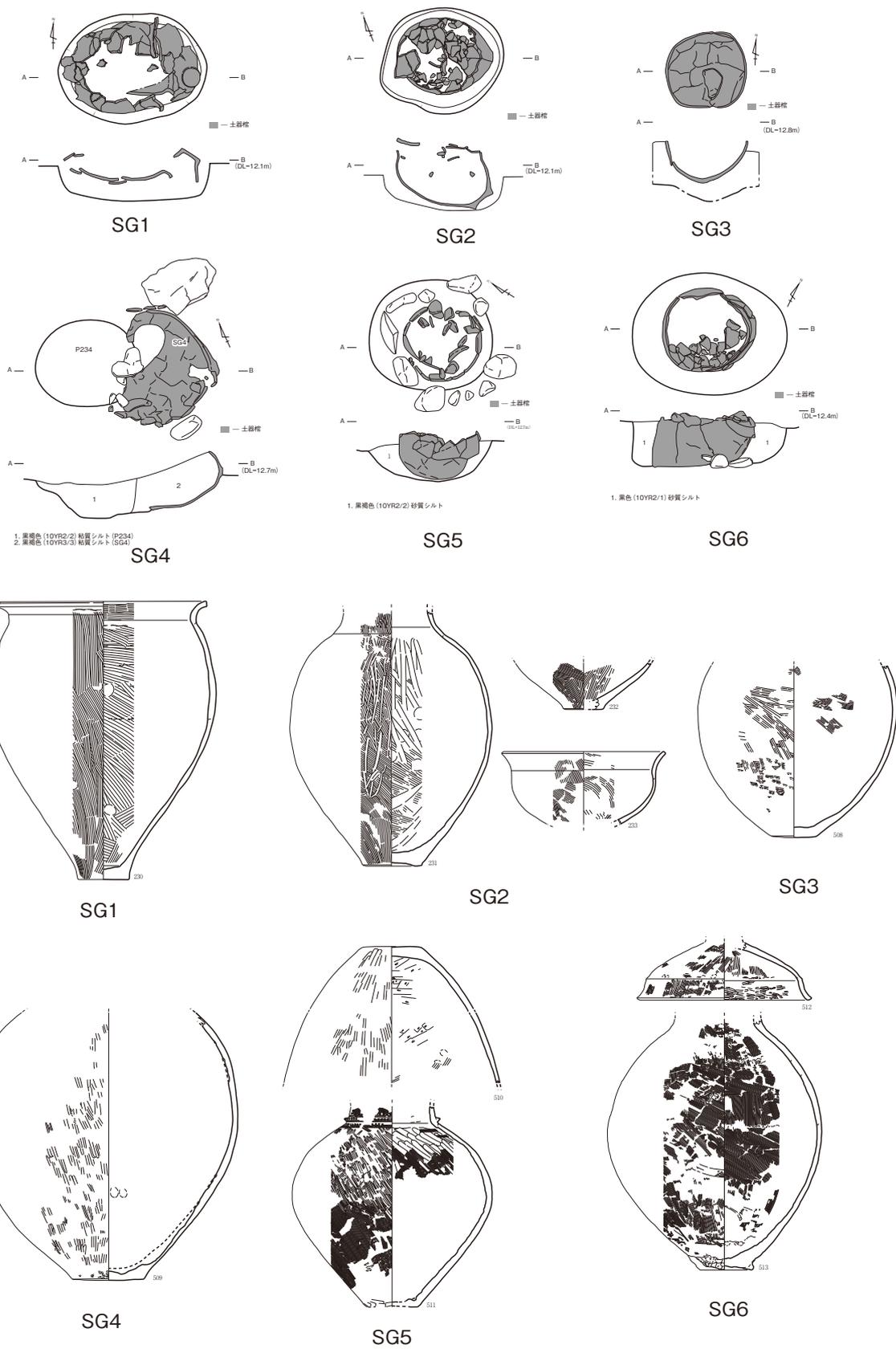


図7-6 高田遺跡土器棺墓(遺構S=1/25, 土器棺S=1/10)

2. VI区SX6出土の古代土器について

(1) 分類と属性

分類名称は平城宮発掘調査報告で使用されているもの（奈良国立文化財研究所1962）を基本に、本県の状況に応じて設定する。本土器群で見られる属性についても記す。

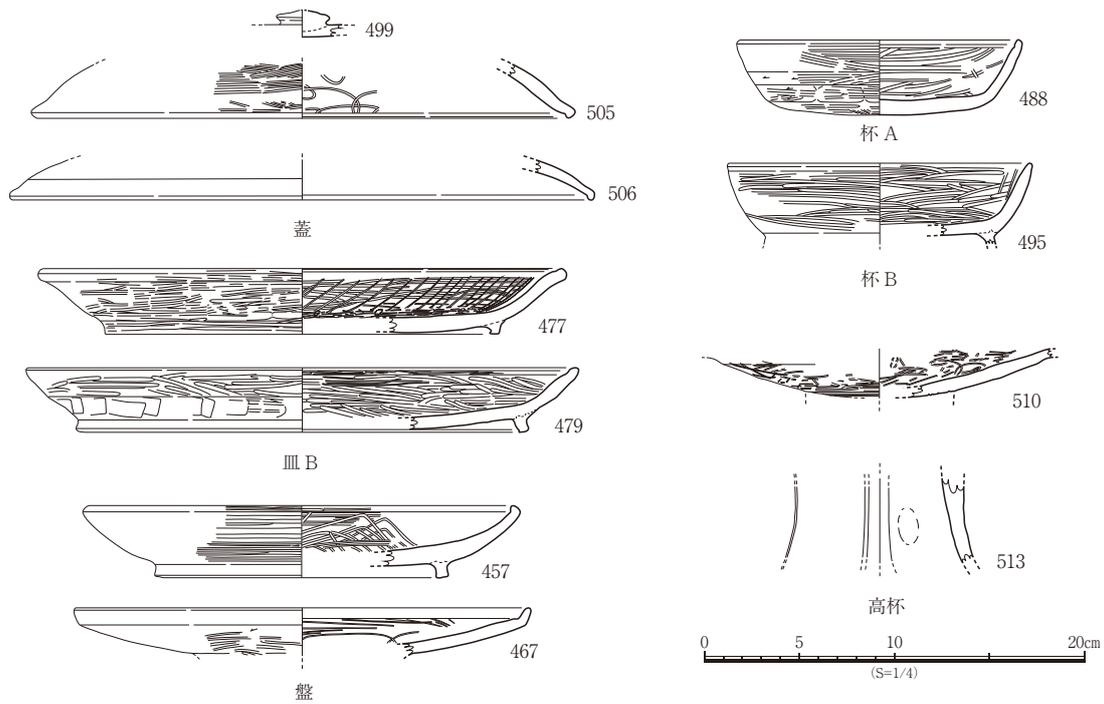


図7-7 VI区SX6土師器食膳具

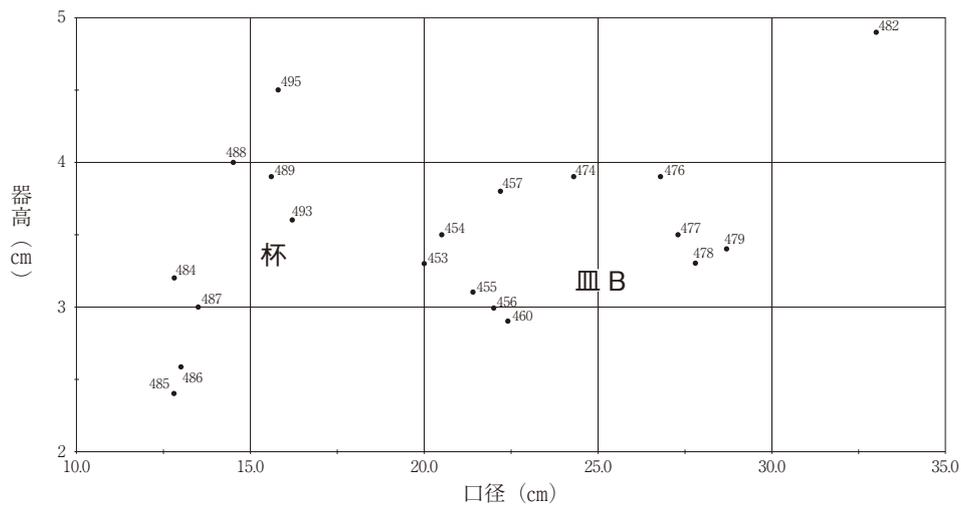


図7-8 VI区SX6土師器杯皿法量分布

2. VI区SX6出土の古代土器について

①土師器食膳具

i) 皿

平底の皿Aは、非図化分も含めて確認できなかった。

皿B

体部の立ち上がり部に高台が貼付されている。体部は短く、やや外反する口縁部の端部内面に凹線又は沈線を巡らせるため、内側に巻き込んだような断面形状が基本である。内外両面赤彩で、胎土も後述のごとく統一されている。外面の底部や体部の立ち上がり部に「手持ち」ケズリを施すものが主体であり、ミガキは隙間が殆どないほど密で、底部を含めて全面に施す。内面に暗文を認めるものがあり、体部に斜めに施す「放射状」や内底に円弧を連ねる「連弧状」暗文がある。高台の貼付部には2条の溝を刻んで接着性を確保している。以上は、例外や摩耗等により確認できないものを除いて当類に共通する。

ii) 盤

皿部の中央から口縁部まで連続的にのび、口縁は外反しない。口縁端部は上方に引き上げられるものや面をもっておさめるものがある。即ち蓋を反転した形態で、口縁部だけではどちらか判別が難しいものが多い。高台は皿Bよりも内側に付く。皿部の中央付近が厚手である。他遺跡では高台のバリエーションがある。

iii) 杯身

杯A

全形は後記の須恵器杯Aに準ずる。口縁端部内面に凹線又は沈線を巡らせるものが主体だが、例外も存在する。外面下部にケズリ、全面的にミガキを施す。ケズリは外面底部には回転ケズリや断続ケズリ、体部のミガキは回転ミガキとみられるものがある。赤彩と非赤彩がある。

杯B

形態は後記の須恵器杯Bに準ずる。表7-1のとおり客体的存在だが、属性は観察できた。赤彩、胎土、ケズリ、ミガキの施し方は杯Aと共通するが、口縁端部は巻き込んでいない。

iv) 蓋

口縁部についての盤との関係は既述のとおりだが、当資料では盤や高杯の高台や脚部は少ないことから、一定の数比の存在は推定される。形態は須恵器に準ずるものがあるが、口縁部がやや異なるものもあるとみられる。

v) 高杯

皿部は盤や蓋との区別が難しいとみられるが、脚部や508, 509のような資料によって存在が確認できる。赤彩するものや、上面に連弧状暗文を施すもの、脚の接合面には5条に及ぶ溝を円形に刻むものがある。脚に縦長方形の透孔を有するものもある。

②須恵器食膳具

i) 杯身

杯A

直線的な体部が立ち上がる、箱型の断面形を基本とする。平底ではあるが、底部が外(下)側にやや出るものや、立ち上がり部あるいは体部の断面形に丸味をもつ点が留意される。丁寧な仕上げのもの

の多いが、底部の切り離し痕等は完全には消されてないものが多い。

杯B

体部は杯Aに準じ、高台を貼付している。高台は一定の高さがあり、外側へ蹴り出す形状で、畳付け部分を凹面とするものや、角部分を外側や内側に引き出したり、鋭くつくる等、角部分が強調された形状である。底部は内外面ともナデ仕上げを原則とし、外底には事前にケズリを施す等、成形や仕上げが丁寧なものが多い。

ii) 蓋

調整を確認できるものでは、天井部外面の中心から口縁部までの径の1/2以上の範囲にケズリ、内面に回転ナデ以外のナデを施す。丁寧な調整のものが多い。口縁端は下方へ明瞭に突出させ、外端面をもつ。その外端面はしばしば凹面をなして強調的である。口縁内面に回転ケズリのような、回転

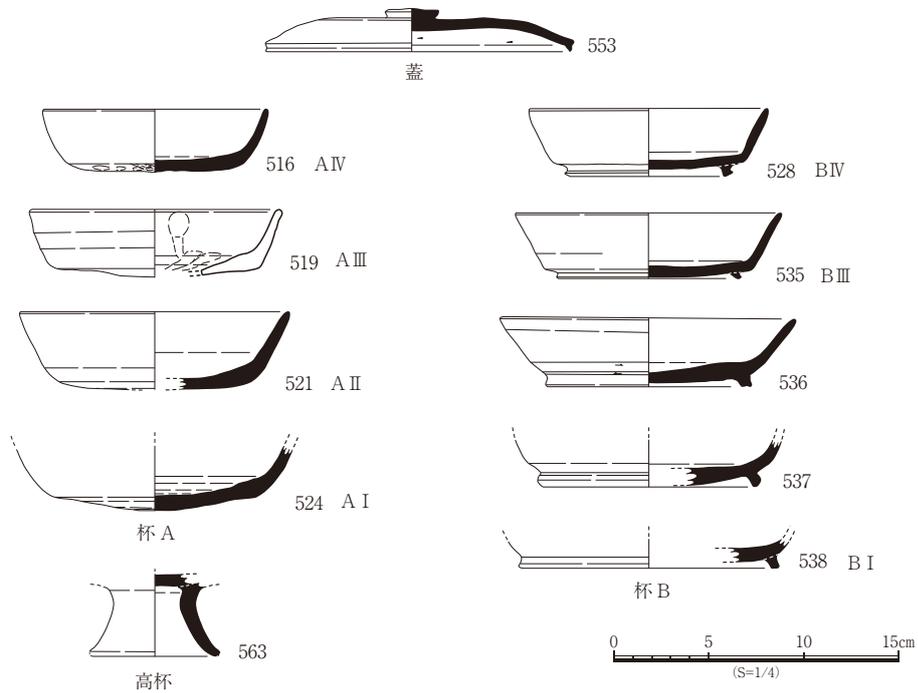


図7-9 VI区SX6須恵器食膳具

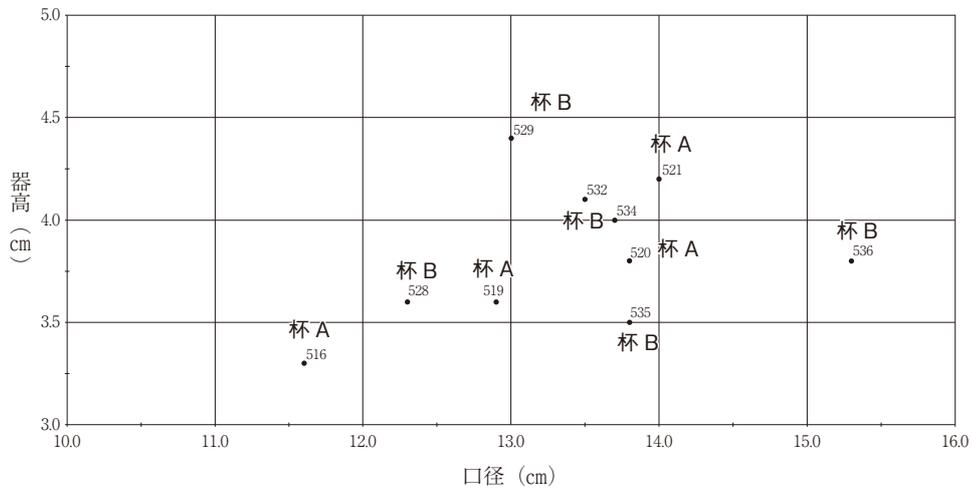


図7-10 VI区SX6須恵器杯皿法量分布

2. VI区SX6出土の古代土器について

調整による砂粒の動きを認めるものがある。つまみは扁平だが基部は大きく括れ、中心がごく低い円錐状のものと凹むものがある。葱坊主形のものも認める。

iii) 高杯

当資料中では僅少で、図化し得た脚部563は直線的にのびる部分をもたない。

③ 煮炊具

全て土師器である。甕K以外には形態と手法の両面で器種を超えた共通項があり、形態的には胴部径が口縁部径を超えず、緩い下膨れ状の体部と、くの字形に外反する口縁部を有する。手法的には、目の粗いハケ原体による調整と内面の押圧・ナデ痕が観察できる。ハケ方向は体部外面がタテ又は斜方向、口縁部はヨコ方向である。口縁外面はヨコナデ仕上げ、口縁内面はヨコナデによりヨコハケ痕がやや消される。

i) 鍋

口径比が1/2以下と浅手のもの。上反する舌状の把手が付くとみられ、当資料中の把手には赤彩されたものがある。

ii) 甕

甕 A1

口縁端部の断面形が方形に近い。断ち切った状態から明確な拡張や摘み上げを行わないものである。端部角部に丸みをもたせるものや、内面に弱い凹線が巡るものがある。

甕 A2

口縁上端を摘み上げ、外端面が垂直或いはやや傾いた面をなす。端部の成形は強めのヨコナデによってなされる。

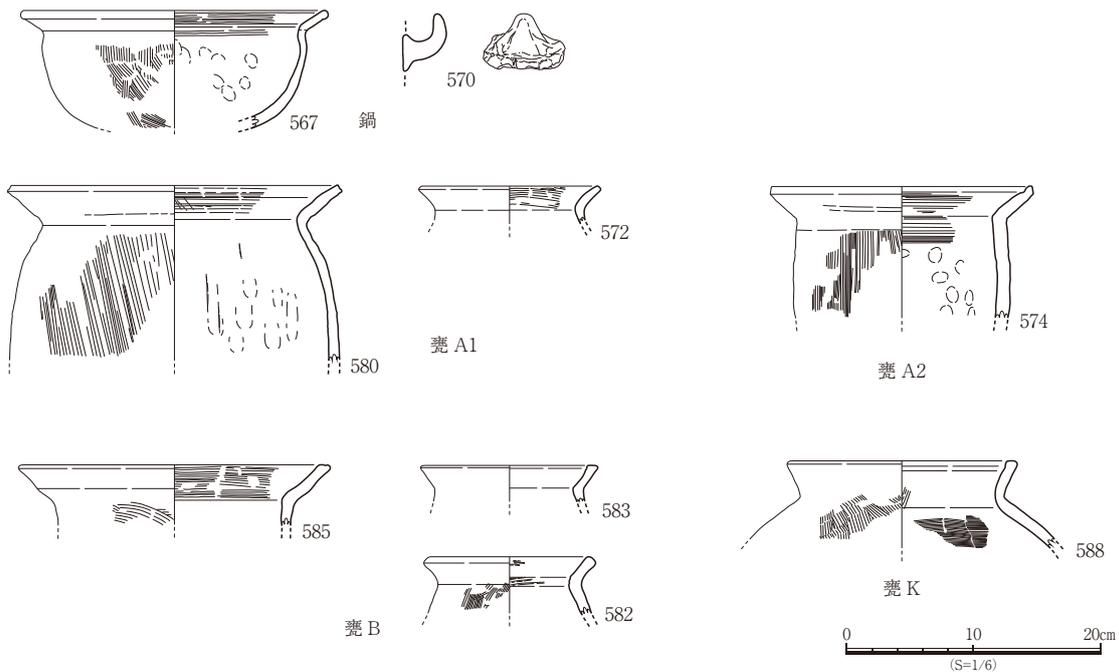


図7-11 VI区SX6土師器煮炊具

表7-1 VI区SX6出土土器器種別計測表

器種	食膳具														煮炊具				焼塩土器	貯蔵具						
	土師器(赤彩)						土師器(非赤彩)						須恵器				土師器				須恵器					
	皿		杯		蓋	高杯	皿		杯		蓋	高杯	皿		杯		蓋	高杯	鍋	甕			竈			
	皿B	口縁のみ	A	B	分類不可		皿B	口縁のみ	A					A	B	A・B不明				A1	A2	B			甕	壺
非実	42	91	1			16	3		1	8	12	1	2	7	6	7	21			9	11	13	2			1
掲図	25	1	5	2	5	6	3	4	1	1	2	5	1	7	14	1	23	2	4	7	5	6	2		9	1
点数	67	92	6	2	5	22	6	4	2	9	14	6	3	14	20	8	44	2	4	16	16	19	4		9	2
小計(1)	159		13			22	6	6	9	14	6	3	42			44	2	4	51			4	193.3g	11		
比率	40.2%		3.3%			5.6%	1.5%	1.5%	2.3%	3.5%	1.5%	0.8%	10.6%			11.1%	0.5%	13.9%			1.0%		2.8%			
小計(2)	200						35						91				59				193.3g	11				

※点数は掲図分・非図化分の合計。土師器甕A1には鍋の可能性のあるものも含む。竈には赤彩2点含む。分類不可は主に残存度による。

甕B

口縁部内面がやや内反気味で、端部は丸味をもたせる。端面はほぼ水平なものが主だが、内外に傾くものもある。体部上方外面のハケが斜めを向く点も本類の特徴である。

甕K

体部径が口縁径を明らかに上回る。調整等が一定判るものは2点だが、上記の他類に比べて口縁部が短い、或いはくの字形に外折しないことや、口縁部にヨコハケ痕がみられない点が異なる。

iii) 移動式竈

破片のみで全形は明確でないが、鏝をもつとみられる。

④貯蔵具

須恵器甕

全体を復元できるものがないが、外反して端部を引き上げ、断面三角形とする口縁部、外面綾杉状のタタキで内面は当て具痕を半ば擦り消す体部片、内面当て具に円礫等を使用したかとみられる体部片を認識しておく。

(2) 本土器群の諸相

①土器様相の概要

以上で述べてきたように、食膳具にみる属性は斉一的で、各器種内での形式的細分はできない。土師器甕は4種に分類できたが、時期差に繋がるか否かは不明で、他遺跡の状況をみても並存期間を有した可能性は否定できない。以上から、当資料の食膳具は短期間或いは同時期に使用されたものが遺棄された資料と推察され、煮炊具にもその可能性がある。

量比は表7-1のごとく、赤彩土師器皿Bが圧倒的に多く、土師器甕、須恵器杯・蓋が次ぐ。なお、杯A・Bの身と蓋との組合せについて、いずれかとの排他的な組合せであったか否かは不明であるが、杯A・Bの身の合計数と蓋の数はほぼ合致する。

②法量分化および蓋と身の関係

須恵器杯A・Bの身の法量分布については図7-10のごとくである。杯B Iの最小と同皿の最大、

2. VI区SX6出土の古代土器について

同Ⅲの最小と同Ⅳとの間には、高台径において1cm余りの差が認められ、区分の指標となる。

須恵器杯Aは判断できる資料がやや少ないが、口縁部の残るもので3種に分けることができ、さらに524からA Iの存在が推定される。524の口径はB Iと同程度と推測される。

蓋は、口径値をみれば杯身の4段階に対応する分化は十分想定できる。6段階に分けられる可能性があり、最大のものに対応する身は539のような特大型の可能性はある。

土師器杯についても、「入れ子」可能な法量差があるが、資料数が須恵器より少なく、規格性を明言し難い部分がある。図7-8のごとく、口径が1cm前後飛躍するところで少なくとも2段階には区分できる。この境界では、器高にも1cm近い差がある。

土師器皿Bは当資料中で最大数比を占める器種で、口径の値域幅も大きい。その分布は漸移的に区分が難しい。3段階程度の区分を想定する。

以上のように、法量分化は食膳具各種において確認できた。土佐における律令期の土器様式において、8世紀後半には相当の法量分化が認められる例があり(野市町1998)、「律令的土器様式」の指標の1つとなってきたが、それをいつまで遡り得るかはこれまで明らかでなかった。当資料はその点でも、当地における律令期的な土器様式の定着に関して重要な知見となる。

③土師器の胎土や塗彩について

土師器食膳具では、器種組成中で最大比を占める皿Bが全て赤彩されており、杯類でも赤彩が過半である点に、当資料における特性がある。赤色は第Ⅵ章のごとく、鉄(Ⅲ)によるものと分析された。赤彩土師器の胎土は、灰白色を呈し、含む砂粒はほぼ石英細粒のみに限られるという特徴がある。赤彩しないものは長石や赤色風化礫が主体で、精良な胎土ではあるが含有鉱物自体は在地土器一般に普遍的な胎土と共通しており、上記の赤彩土師器に特徴的な胎土をⅠ群、通常の土師器の胎土をⅡ群とする。このような胎土分類は下ノ坪遺跡の赤彩土師器共伴資料と共通するもので、Ⅰ群は土師器においては赤彩土器特有の胎土と認識される。なお、Ⅰ群と共存する時期のⅡ群土器は、非赤彩で

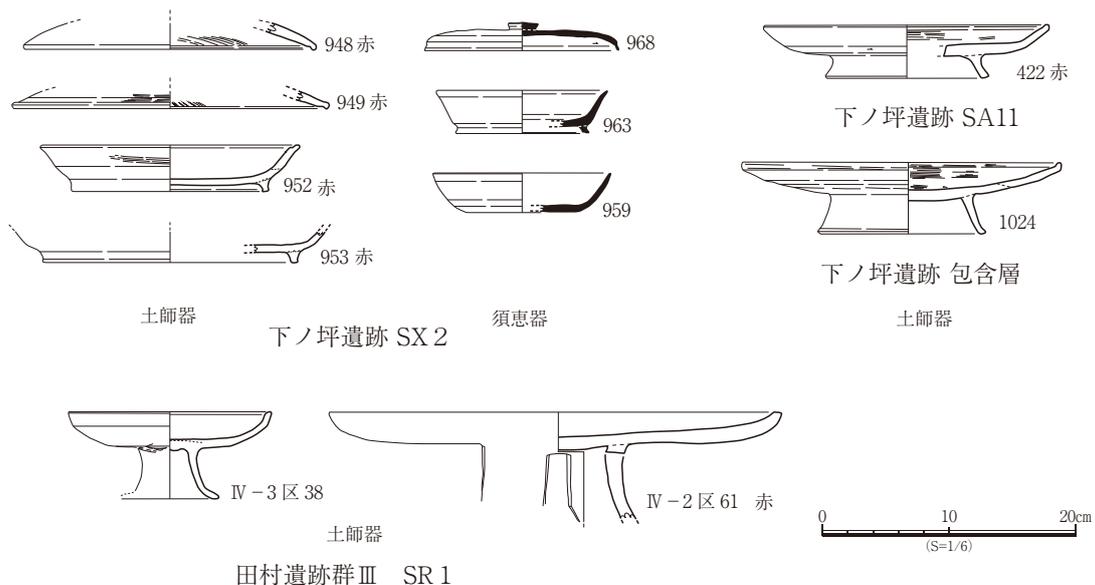


図7-12 他遺跡出土遺物実測図(948・949は報告書図を改変)

も橙色を呈するものが多い。SX6における杯Aは、赤彩と非赤彩が相半ばだが、胎土は前者が既述のⅠ群、後者がⅡ群で、胎土と赤彩の有無が符合している。

土師器甕では3種類の胎土があり、Ⅰ群はチャートや泥岩・砂岩の円粒を含む、当地の酸化焰焼成土器の伝統的な胎土である。Ⅱ群は石英や長石の角粒を多含する。石英・長石は分離しているものが多いが、共存している粗粒も若干認められる。酸化焰焼成としては硬質な手触りで、胎土の状態と併せて、上記のⅠ群及び古墳時代までの土器とは異なっている。Ⅲ群は一粒内に石英と長石を認める粗粒と、石英・長石にほぼ分離した小角粒を多含する。粗粒は花崗岩が風化、崩壊したようにみえる。器体は硬質な手触りである。このような混ぜ砂の質と状態は、県内の在地土器胎土の中で時代を問わず特異である。県内他遺跡の同群では、金雲母を含むものも散見される。なお本県では、花崗岩やその風化礫が展開している地域は、少なくとも主要平野部周辺には存在しない。以上の煮炊具胎土と形態・調整分類の間には関連性があり、甕Bは全て胎土Ⅲ群である。甕A1は胎土Ⅰ群とⅡ群があり、甕A2は当資料中のものは胎土Ⅰ群である。甕KはⅠ群に限られている。

(3) 他資料との比較と位置付け

本土器群に対する比較資料を求めると、近隣の下ノ坪遺跡や田村遺跡群出土資料で該当するものがみられる。下ノ坪遺跡SX2では図7-12をはじめとする土器群が出土しており、器種組成、土師器及び須恵器食膳具の形態、ケズリやミガキ等の施し方、土師器において赤彩したものが主体であること、須恵器杯Bや蓋の各細部形状及びケズリの範囲、ナデによる仕上げ方といった諸属性が高田遺跡Ⅵ区SX6と共通する。以下、高田遺跡Ⅵ区SX6と下ノ坪遺跡SX2出土土器群の共通点を記すと、土師器皿Bは赤彩且つ胎土はⅠ群で、高台貼付部に2～3条の溝を刻む。鍋は同形態・同胎土で、両面を赤彩するものがある。鍋には上反する舌状の把手が付く。移動式竈もあり、胎土はいずれもⅠ群である。須恵器甕は、597の口縁部及び605の内面当て具痕と同様の特徴を1個体内にもつもの(下ノ坪遺跡978)が存在する。当地では貯蔵具の分類・編年が現状では難しい中、一括性資料中で認識できる貴重な事例となる。

その他、下ノ坪遺跡SB9やSD26でも上記と同様の属性を有する土器群が出土している。下ノ坪遺跡では、県内で最も充実した古代土器資料群の検討による土器編年がなされており、SX2、SB9、SD26出土土器は8世紀前半～9世紀前半頃に該当する「Ⅰ期」のうちの前半に位置付けられている(野市町教委1998)。従って、高田遺跡SX6出土土器群もそれらと同時期に比定される。

田村遺跡群では、量及び内容が豊富な土器群がⅣ区SR1にあるが、流路跡故に一括性には慎重になるべきである。その中で、高田遺跡では破片にとどまっている土器の全形を推察できる資料が存在する。

なお、器種組成において、表7-1にみる皿Bの比率は現在県内で抜群に高い。土器群が使用された場の性格に関わる事象として留意される。

3. 高田遺跡における古代の概要

以下では、前項で得た知見および先行研究の成果に依拠し、本遺跡の一連の調査で検出された主な建物や遺物の概要をまとめる。本県では土器編年の年代定点を得るのに有効な紀年銘資料や木簡等が得られていない中、敢えて実年代表記に努めるが、その根拠は先行研究(野市町教委1998、池澤

3. 高田遺跡における古代の概要

2000b)に拠る⁽¹⁾。

(1) VI区SX6以前

当該期の遺物は全体でも僅少だが、VI区包含層では須恵器甕等が出土している。XI区の須恵器745は、下っても7世紀代であろう。V-1区SK11ではかえりを持つ須恵器蓋47が出土している。

(2) 8世紀前半から中頃

土坑出土で墨書がある693は形態と調整の施し方、694は外底の丁寧なナデが留意され、今次VI区SX6や下ノ坪遺跡SX2と並行ないしその直後で、いずれも既述した「I期」の前半～中頃、実年代では8世紀前半～中頃と考えられる。

V-2区ST2出土土器、同区のピット出土の須恵器蓋216、高杯211、土師器甕B208・219はいずれも今次VI区SX6や下ノ坪遺跡SX2の様相に合致する。VII-1区ピット出土の須恵器皿692も外底の回転ケズリと形態から、8世紀前半に位置付けられる。

その他にも、SX6出土土器群と同じ属性を有するものは、赤彩土師器、須恵器杯身・蓋等が諸遺構や包含層から出土しており、該当期即ち推定年代8世紀前半～中頃に一定の盛期があったことを示唆している。当遺跡で検出した古代前期の建物中最大級であるVI区SB8・SB9の図化遺物は、VI区SX6と同時期とみられる遺物のみで占められている。両建物は重複しており、建て替えの関係にあると考えられるが、SX6はその西妻側に東辺を揃えているとみることができる。

(3) 8世紀から9世紀前半頃

VI区SB7出土土器には8世紀末～9世紀前半頃に属するものが含まれている。重複するSX6とのきり合いは、埋土が似ていることや、北東隅から2番目の柱穴が別遺構にきられていることに難点もあるが、SB7-P2がSX6をきるという調査所見である。同区SB10も8世紀末～9世紀前半頃の土器が出土しており、SB7とは逆L字型の位置関係にある。同区遺物包含層からは墨書のある土師器皿652が出土しており、形態とミガキから9世紀前半頃に比定できる。

既報告調査区では、II区に桁行5間の建物SB12がある。そのうち、瓦器、土師質土器碗が出土している柱穴は他遺構ときり合う位置にあり、建物の構造及び平面隅丸方形の柱穴から考えると混入の可能性はある。その場合、他の柱穴から出土している須恵器皿の属性や焼塩土器から、SB12は8世紀後半頃に廃絶された可能性が高い。

掘立柱建物群の西端域であるI区では南北に縦列する建物群があり、全出土遺物の詳細が不明なものもあるが、SB4から出土している土師器蓋は8世紀代に比定される。これらのような桁行2間程度で柱間が短い建物が縦列する8世紀の事例は十万遺跡や田村遺跡群F4区でも検出されており、収納施設と考えられる。

その他、道路側溝跡も、別記のとおり出土遺物から、当該期に埋没したと考えられる。県内出土の越州窯系青磁2例中の1つであるI区包含層出土青磁碗は全面施釉で、9世紀代を中心とする製作年代が考えられる。

(4) 平安時代中期

9世紀後半以降を中心とする緑釉・灰釉陶器が、既報告区も含めて出土している。本書VI区では土

坑墓SK4が構築されており、出土した土師質土器杯は10世紀後半～11世紀初頭頃に属すとみられる。

(5)平安時代末期

I区では、棟方位が真北より15°前後東振する掘立柱建物群が検出されている。報告遺物は少ないが、それらの柱穴の1つであるSB24-P3から出土している土師質土器皿・椀は、皿の法量や椀の形態から11世紀末～12世紀に比定できる。近隣のP17からも同期の椀が出土している。いずれも古代前期の柱穴より平面規模が小さく円形である。

V-2区からVI区まで横断する東西溝、V-2区SD10、VI区SD1・13では糸切りの土師質土器杯底部や末期型式の土師質土器椀が図化報告されており、12世紀中～後半頃の埋没が考えられる。軸方位は真北直交軸から14～15°時計回りで、道路側溝および既述したI区SB24と一致する。

(6)まとめ

以上のように、本遺跡の一連の調査では、奈良時代前半から平安時代末期までの建物跡等が検出された。西端部のI・II区や本書のVI区南部のような、本遺跡検出建物中の大型建物が重複或いは建て替えられる地点では、年代観を一定把握することができた。また墨書土器や施釉陶器等も、奈良時代前半～中頃、平安時代初期、平安時代前半頃の各期にわたることを認識した。

遺構の軸方位について全体的にみれば、道路側溝は後述する「香長条里」に近い向きで構築されており、その規制は平安末期にも現れていた。一方で、律令期の建物群は東振5°以下のものが主体である。

律令期に位置付けられた建物群を、当地の同時期の事例と比較すると、下ノ坪遺跡のような桁行10mを大きく超える建物は検出されていない。建物配置には碁盤目状の敷地内企画が認められないばかりか、各建物の軸方位が不揃いで、香長条里による方位規制も働いていない。L字型の建物配置自体は4箇所で見られるが、他の官衙的遺跡に比べて配置企画性が厳格でない。

以上、出土遺物の内容と、このような建物の規模や配置からみた位置付けは、地域の中での本遺跡の性格や機能を考えるための基本的な資料となる。

4. 高田遺跡の道路遺構と古代の香長平野

(1) 高田遺跡の道路関連遺構

①西端終点と建物群

道路側溝跡の西端はVII区西縁まで検出されたが、その先のVI区では検出されていない。南側側溝の延長上にあたるVI区北東隅にはSB3～5があり、いずれも隅丸方形の柱穴で、図化遺物は8世紀～9世紀初頭までの須恵器である。このことから2通りの可能性が考えられ、道路はVI区にも続いていたが後世に側溝まで削平されたもので、上記の建物とは、短いが時期差があったのか、少なくとも側溝は検出状態の通り断絶していたかである。道路の西延長上には上記以外の建物群は存在しないので前者の可能性は受け入れ易いが、VII区以東では相当の削平が推察される地点でも、特に南側側溝は途切れていなかったことが留意される。後者ならば建物群と道路の共存は難しく、道路は短命で8世紀代に廃絶され、間もなく建物が建ったか、或いは道路が建物より後出するかであるが、当道路遺構の規模や南海道変遷との関連を考慮すると、いずれにも疑問の余地がある。なお、V・VI区で

4. 高田遺跡の道路遺構と古代の香長平野

は、道路側溝の延長から南へずれた筋違いの位置に同方向の溝跡が横断しているが、既述のように12世紀中～後半頃の埋没である。

検出された道路側溝跡を西方に延長すると、物部川河岸の上岡山裾に至る。上岡山は比高差約40mだが周囲の景観の中で目立つ小丘で、北側には下ノ坪遺跡をはじめとする遺跡群が広がっており、当地の視覚的目標物になっていた可能性がある。

②SD7等との関係

IX-2区東縁の南北溝SD7は南側側溝SD2にきられることが観察されたが、両者の埋土は黒ボク主体で酷似しており、両者の時期差、並存期間の有無については必ずしも明確ではない。SD7も第1期は断面箱形、第2期は底面が上がり舟底形で、上層に赤音地が堆積しており、掘り直しがあること、その前・後の断面形状、及び埋土のいずれもが道路側溝跡と共通する。SD7の機能は明確でないが、東側のX区へ向かって上昇する地山面の裾部に沿って構築されている可能性がある。SD7の両側を精査した結果、深さ6.1～15.2cmの不整形等で大小の窪みが西肩の道路面相当部分で付図2のように検出されたが、その性格は不明である。

なお、IX-1a区SD11は道路側溝跡と直交する点で重要であるが、交点は現在の堀と水路できられていた。

③出土遺物と時期

道路側溝跡出土遺物について、図化できなかった破片を含めて第IV章に記した。遺存状態は小片が主体である。出土点数は、VII区及びIX区南東からのものが多かった。VII区は地山面の削平が比較的多めとみられるが、ピットや土坑の集中区に近く、IX区南東は削平が少ないとみられるが古代のピット等は検出されなかった調査区である。図4-56のとおり、密なミガキを施した土師器杯或いは皿・盤、土師器甕B、焼塩土器、須恵器高杯、肩部が屈曲する壺等、VI区SX6出土遺物と共通するものや、既述したI期前半～中頃に比定されるものがほとんどである。その中で、須恵器杯770はI期後半頃の可能性、土師質土器杯773はI期末以降の可能性がある。これら2点はVII区の南側側溝出土で、同区では側溝跡をきる遺構が複数ある。

なお、IX-2区SD7埋土から採取した炭化材について放射性炭素年代測定を行った。採取土層は、掘り直された第2期SD7の最下層である。結果は第VI章の通りであるが、年輪のどの部位であるかを明らかにできないことが問題点である。

(2) 香長平野の古代道路

①香長平野の古代道路遺構

古代の寺院跡や官衙比定地が集中する物部川下流域の平野は、郡名から香長平野と呼ばれる。当平野ではこれまでも古代に属するとみられる道路遺構が検出されている。いずれも南国市で、祈年遺跡では側溝跡とみられる2条の溝跡が検出されている。出土遺物は「須恵器、土師器」とのみ報告されており、7世紀代とみられる竪穴建物跡をきる。側溝の心々間距離は5.0～5.4m、軸方位は真北から13°東振する。西野々遺跡では、平行および重複する3条の道路跡の存在を示す直線溝跡群が検出されており、側溝心々間は各々4.5～5.6m、3.8～4.0m、3.4～3.8mを測る。軸方位は真北から12～16°東振し、「波板状遺構」も検出されている。出土遺物は、7世紀後半頃や8世紀末頃の食膳具と施

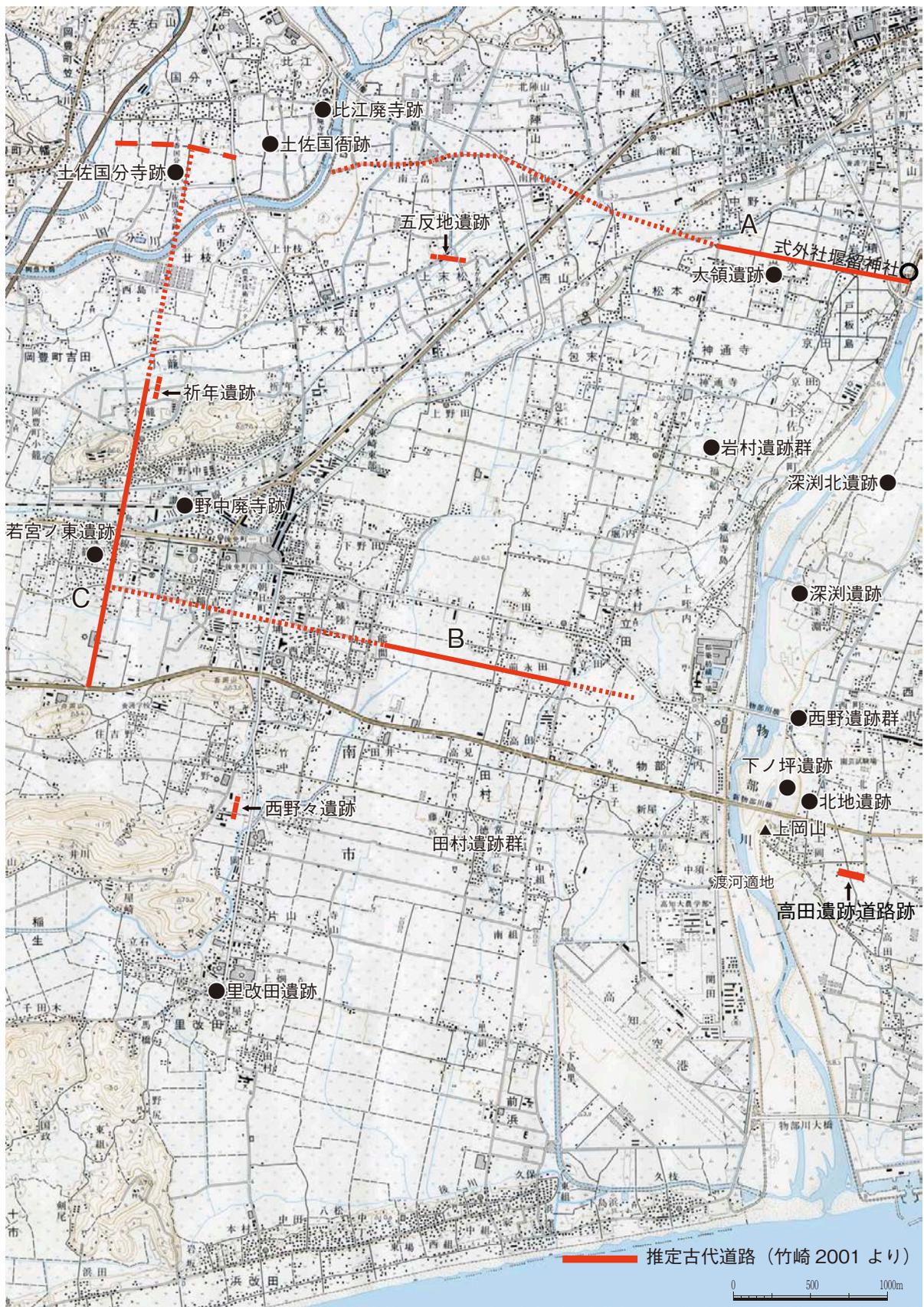


図7-13 香長平野の道路遺構及び条里余剰帯による推定路線

4. 高田遺跡の道路遺構と古代の香長平野

釉陶器が混在する溝や、東播系須恵器鉢が報告されている溝がある。

五反地遺跡では両側の心々間距離2.7～3.6mで、真北直交軸から時計回りに8°振る側溝跡と、「波板状遺構」や小礫敷部分が検出されている。出土遺物は「須恵器片2点」と報告される。

当平野では図7-13のように、方格線が真北方向から約12°時計回りに振る地割がみられる。「香長条里」と呼ばれ、その分布範囲や施工時期、条・里界等について歴史地理学的研究がなされてきた。考古学的にみた場合、該当地域の発掘調査で検出される建物跡等が8世紀前半頃以降、香長条里に同調する例が多いことから(池澤1998)、該期以前の条里施工が考えられる。

祈年遺跡と西野々遺跡の道路跡は既述のごとくいずれも「香長条里」の方位にほぼ沿っており、図7-13のように、祈年遺跡の道路跡の北方延長上には土佐国分寺跡、南方延長は年越山が大きく挟めた鞍部を越えて野中廢寺跡西方を通り、若宮ノ東遺跡に向かう。西野々遺跡の道路跡の北方延長上には土佐国衙跡と比江廢寺跡、南方には里改田遺跡がある。里改田遺跡では、桁行が5間以上で約12m或いはそれ以上となる可能性を含むものをはじめとする掘立柱建物跡群が検出されている。建物柱穴からの出土遺物は須恵器片等で8世紀代に属する可能性が高く、地方官衙の関連施設である可能性が高い。

②文献および歴史地理学的先行研究より

古代駅路としての南海道土佐路は、『続日本紀』の記述から養老2(718)年に伊予廻りから阿波廻りに変更されたことが知られる。さらに延暦15(796)年にはそれまでの駅家を廃して、四国山地を縦断するいわゆる「北山越え」路線に変更される(『日本紀略』・『日本後紀』)。

このような南海道の実態については、歴史地理学的手法により具体的な位置を提示した先行研究がある(日野1978)。竹崎は、余剰帯の検出による道路の復元を意図して坪の各辺を計測した結果、図7-13のA、B、Cライン(以下A、B、C路)に余剰帯を検出した(竹崎2001)。A路は日野の想定位置至近で、「大リヨウ」等、郡衙に関連する可能性のある小字を通過する。南北方向のC路には、若宮ノ東遺跡や野中廢寺跡、祈年遺跡が近接或いは近在する。

現在県内最大の掘立柱建物をはじめ、配置企画性の強い掘立柱建物跡群が検出された下ノ坪遺跡の北側には、長宗我部地検帳によると、郷境を兼ねた「堺の大道」があり、その西方対岸から西方へも、香長条里に沿った直線的な「大道」が復元される(池澤2004)。その位置は竹崎のB路にほぼ沿う。なお、竹崎B路とC路の想定交差点に近い若宮ノ東遺跡では、溝と大型の柵で囲まれた長大な掘立柱建物跡や古代前期の大型倉庫群が近年検出されている(埋文センター2016, 2018)。

(3) おわりに — 周辺遺跡との関係から —

高田遺跡で検出された道路跡は、その規模と正確な設計、出土遺物の時期からみて「官道」とみられ、当地における南海道の議論においても今後欠かせない資料となる。位置と方向も、夜須町の海に張り出す山丘によって東縁を閉じられる当平野を直線的に横断する場合、最も合理的な位置に近いといえる。一方で、余剰帯の分析では東西道が2条想定され、さらに本遺跡の道路跡の位置がそれらに一致しないことについては、渡河・上陸地点との関係、時期差、及び各々の道路の機能を考える必要がある。高田遺跡から西野遺跡群に至る上岡山周辺は古代前期から中世前期まで注目すべき遺構や遺物が検出されており、互いの関連を考慮しなければならない遺跡地帯を物部川東岸に形成し

ている。さらに、対岸に所在する田村遺跡群でも同様の遺構・遺物が複数の調査区で検出されており(埋文センター2006, 2015他), 両岸の様相を併せて、渡河を含めた水陸交通との関係を考えなければならぬ。さらに高田遺跡の道路遺構の西延長方面には、既述のような成果を得た西野々遺跡や若宮ノ東遺跡があり、香長平野全域を視野に入れた検討が必要となってくるのは必然といえよう。

註

(1) 一括性資料群の編年的分析と、それに時折含まれる搬入品の年代による。

※ 特に道路関連遺構に関して、鳥根大学教授 大橋泰夫氏の指導を得た。

参照・引用文献

- 池澤俊幸 1998「土佐における古代の遺跡 -官衙的遺跡を中心に-」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題 -官衙的遺跡を中心に-』古代学協会四国支部 第12回大会発表資料
- 池澤俊幸 2000a「土佐における古代前期の建物群」『古代文化』第52巻第6号 古代学協会
- 池澤俊幸 2000b「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会
- 池澤俊幸 2004「土佐国」『日本古代道路事典』八木書店
- 竹崎仁 2001「古代土佐国における物部川流域の歴史地理学的考察」鳴門教育大学大学院学校教育研究科
- 日野尚志 1978「南海道の駅路 -阿波・讃岐・伊予・土左四国の場合-」『歴史地理学紀要』第20巻 歴史地理学会
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999『辺路石南遺跡・五反地遺跡』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000『里改田遺跡 -室ノ内・岩路地区-』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006『田村遺跡群Ⅱ』第9分冊
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011『祈年遺跡Ⅰ』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2011『西野々遺跡Ⅲ』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2015『田村遺跡群Ⅲ』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2016『平成28年度 若宮ノ東遺跡説明会資料』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2018『平成30年度 若宮ノ東遺跡説明会資料』
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2018『高田遺跡Ⅰ・宇賀遺跡』
- 奈良国立文化財研究所編 1962「平城宮発掘調査報告Ⅱ」
- 南国市 1979『南国市史』
- 野市町教育委員会 1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』
- 野市町教育委員会 1998「南四国における古代前期の土器様相 -下ノ坪遺跡の成果を中心に-」『下ノ坪遺跡Ⅱ』

高田遺跡・東野遠山遺跡
遺物観察表・遺構計測表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品・金属製品・瓦の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、胴径が全厚(cm)、底径が重量(g)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

特徴に記している「赤」は赤色塗彩のことである。

器種の概要は以下の通り。食膳具の名称は基本的に奈良国立文化財研究所報告（「平城宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所編 1962年他）による。第Ⅶ章 2. 参照。

皿 A：平底のもの。

皿 B：底部周縁に低い高台が付くもの。

杯 A：平底のもの。

杯 B：底部周縁に低い高台が付くもの。

甕 A：胴部が張らず、胴部径は口縁部径より小さい。ハケ調整を用い、口縁端部は基本的に、断ち切った形や、上方へつまみ上げた形がある。

甕 B：全形や調整は甕 A に準じ、口縁はやや内反気味で端面は水平に近い。胎土に特徴がある。

Ⅵ区遺構埋土

- A：黒褐色(10YR2/3)砂質シルト
- B：黒褐色(10YR2/2)砂質シルト(土器細片が粒状に混じる)
- C：黒色(10YR2/1)砂質シルト(褐色土が若干含まれる)
- D：Aに黒色土と褐色土が粒状に混じる
- E：Bに褐色土と黒色土が粒状に混じる
- F：褐灰色(7.5YR5/1)粘質土(現代)
- G：暗灰色(現代)
- H：暗褐色(10YR3/3)砂質シルト
- I：黒褐色(10YR3/2)シルト(一部暗灰色がかかる)

Ⅶ区遺構埋土

- Ⅳ層：赤褐色(5YR4/6)赤音地
- Ⅴ層：黒色(10YR1.7/1)黒ボク
- Ⅵ層：黒褐色(7.5YR2/2)火山灰土(数mm大の小礫含)

Ⅸ-Ⅰ区遺構埋土

- Ⅰ：黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土に若干の小礫含。部分的に10cm強大までの円礫含
- Ⅱ：Ⅰに10cm大までの円礫多含
- Ⅲ：Ⅰに地山小ブロック多含。部分的に円礫含
- Ⅳ：黒褐色(10YR2/3)火山灰由来土に3cm大までの円礫(地山に多含)含
- ピット群：黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトに黒ボク、地山土(暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトに10数cm大までの礫含)、10数cmまでの円礫含。下半に大型礫が多いものが多い

Ⅺ区遺構埋土

- A：5～10cm大の円礫で礫間は暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト、上層のみ暗褐色粘土質シルトとハンダが多い
- B：黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに5～15cm大、20cm大の円礫多含
- C：黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに2～3cm大、10cm大の礫含
- D：暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトに5～10cm大の円礫含
- E：黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトに2～3cm大の小礫含

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
1	V-1	ST1埋土	弥生土器壺	-	(4.6)	-	-	外面ナデ調整。内面摩耗。	
2	〃	〃	〃	4.2	(8.5)	-	-	外面は口縁端部にナデ調整, その他はハケ目, ヘラミガキ。内面はナデ調整。	頸部下方に接合痕。
3	〃	〃	〃	17.0	(5.0)	-	-	口縁端部はナデ調整。外面はハケ目, ナデ調整。内面はハケ目とナデ調整。頸部は指頭圧痕。	
4	〃	〃	〃	-	(4.3)	-	6.2	平底。底部側面に指頭圧痕。外面はヘラケズリ。内面は指頭圧痕, ナデ調整。	
5	〃	〃	〃	-	(4.2)	-	3.6	平底。外面にタタキ目, ナデ調整, 一部ヘラケズリ。内面はナデ, 一部ハケ目調整か。	
6	〃	〃	〃	-	(7.4)	15.6	-	外面にタタキ目, ハケ目と下半部にハケ目とナデ調整。内面はハケ目とナデ調整。	
7	〃	〃	〃	-	(5.4)	-	6.4	外面はタタキ目, ハケ目, 指頭圧痕及びナデ調整。内面は指頭圧痕, ユビナデ, 工具状のナデ調整か。	
8	〃	〃	〃	-	(2.4)	-	5.5	平底。底部外面にはハケ目調整。外面にタタキ目, ハケ目調整。内面はナデ調整。	
9	〃	〃	〃甕	19.3	(4.6)	-	-	外面口縁下にナデ調整。頸部はハケ目調整。内面はハケ目状のナデ調整, 頸部はハケ目調整と指頭圧痕。	
10	〃	〃	〃	13.0	(3.6)	-	-	外面は口縁端部下までタタキ目, 指頭圧痕。内面は摩耗。	
11	〃	〃	〃	18.2	(3.2)	-	-	外面はユビナデ, 一部指頭圧痕。内面口縁部にハケ目, 頸部はナデ調整。	外面に一部ススあり。
12	〃	〃	〃	15.0	(4.7)	-	-	外面は口縁部下にナデ調整, 頸部から体部にハケ目調整。内面は摩耗, 一部にナデ調整と指頭圧痕。	
13	〃	〃	〃	15.2	(8.1)	-	-	外面は口縁部にナデ調整。頸部下はハケ目調整。内面口縁部はナデ調整, 頸部下に指頭圧痕, ユビナデと一部ハケ目調整。	外面の一部にスス。
14	〃	〃	〃	14.4	(12.4)	15.9	-	外面頸部までタタキ目。口縁部に指頭圧痕とナデ調整。内面口縁部に指頭圧痕とナデ調整。体部は指頭圧痕, ナデ。下半部にヘラケズリ。	床上。外面全体にスス。
15	〃	〃	〃	16.0	(3.5)	-	-	外面は頸部に粗いハケ目調整。口縁端部はナデ調整。内面口縁部に粗いハケ目調整と頸部に指頭圧痕。	
16	〃	〃	〃	-	(1.3)	-	-	外面と内面はナデ調整。内面には線描きの文様がみられる。	
17	〃	〃	〃	-	(18.7)	14.0	4.5	外面にタタキ目。頸部はナデ調整, 体部はタテ方向のハケ目調整。内面は頸部にナデ調整, 体部に指頭圧痕とユビナデ。	
18	〃	〃	〃高杯	15.0	(3.4)	-	-	外面はヘラミガキとナデ調整。内面は摩耗し, ヘラミガキと口縁端部にナデ調整。	
19	〃	〃	〃	-	(6.2)	-	-	外面は一部器面が剥離。タテ方向のヘラミガキ。内面はヘラケズリ, ナデ調整。	
20	〃	〃	〃	-	(4.9)	-	-	外面と内面にヘラミガキ, ナデ調整。脚部内面にヘラケズリ。	
21	〃	〃	〃	-	(2.3)	-	21.3	外面は端部にナデ調整, ヘラミガキ。内面はヘラミガキとナデ調整。	
22	〃	〃	〃鉢	18.9	(5.0)	-	-	外面はハケ目, ナデ調整。内面はヨコ方向と斜位方向のハケ目調整。	
23	〃	〃	〃	13.6	6.3	-	3.2	平底。外面は口縁部下にナデ調整, その他ハケ目, ナデ調整。内面は口縁部下にナデ調整, 体部から底部にヘラミガキ。	
24	〃	〃	〃	26.2	(7.6)	-	-	外面は口縁部までタタキ目, ハケ目調整。内面はナデ調整とヨコとタテ方向のハケ目調整。	
25	〃	〃	〃	-	(6.3)	-	-	外面は口縁端部までタタキ目。下半部はハケ目, ナデ調整。内面はハケ目, ナデ調整。	

高田遺跡遺物観察表 2

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
26	V-1	ST1 埋土	弥生土器 壺	23.0	(2.0)	-	-	口縁端部は上下に拡張。端部外面は2条の凹線状を呈する。外面内面ともに摩耗。	床上
27	〃	ST1-P3 埋土	〃 壺か	12.2	(3.4)	-	-	外面はタテ方向のハケ目、ナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目、ナデ調整。	
28	〃	ST1-P1 埋土	〃 壺	-	(2.5)	-	6.2	平底。外面はタタキ目、ナデ調整。内面はタテ方向のハケ目調整。	
29	〃	ST1 〃	〃 甕	16.9	(4.9)	-	-	口縁端部外面はナデ調整。内面はナデ調整。頸部はへら状工具によるナデ調整。	床上。外面にはスス。外面は器面が剥離。
30	〃	〃 〃	〃 〃	14.9	(13.7)	17.5	-	外面は頸部近くまでタタキ目。ナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、体部下半部にユビナデ。	床上。外面から口縁部内面までスス。
31	〃	〃 〃	〃 〃	16.9	(9.4)	-	-	外面は頸部までタタキ目が残り、ナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、頸部から体部はユビナデ。	床上
32	〃	〃 〃	〃 〃	-	(3.0)	-	7.2	平底。外面には一部タタキ目が残り、タテ方向のハケ目。内面は指頭圧痕、ナデ調整。	床上
33	〃	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	4.0	平底。外面には一部タタキ目。ハケ目調整、へらケズリ。内面はユビナデ。	床上
34	〃	ST1-P5 埋土	〃 〃	-	(7.1)	-	5.4	平底。外面はタテ方向のハケ目調整、指頭圧痕。内面はへら状工具によりナデ調整、一部ハケ目調整。	外面スス付着。
35	〃	SB1-P3 埋土	磁器 碗	10.2	7.5	-	4.9	染付の丸形碗。高台豊付けは露胎。全面施釉。外面に圏線と植物、内面無文。	内面見込みには目跡か。
36	〃	SB1-P10 埋土	須恵器 甕	-	(7.4)	-	-	外面は斜位方向とタテ方向のハケ目調整。頸部はナデ調整。内面はナデ調整で、頸部はヨコ方向のハケ目調整。	
37	〃	SK1 埋土	〃 杯	-	(1.2)	-	8.1	底部外面に高台を貼付。外面内面ともにナデ調整。被熱を受けている。	
38	〃	〃 〃	石製品 石臼	(17.0)	(8.2)	(2.5)	(550)	砂岩製。挽き臼。受皿部。縁辺部と外面にハツリ痕。	
39	〃	SK2 埋土	銭貨	直径 2.5	内径 2.0	孔径 0.6	-	寛永通宝。裏面は無文。	
40	〃	SK6 埋土	須恵器 壺か	-	(3.2)	-	-	口縁端部は平坦面を呈し、内面は自然釉がかかる。外面内面は回転ナデ調整。	
41	〃	SK7 埋土	陶器 皿	-	(2.0)	-	4.4	内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、底部は削り出し高台。高台外面は露胎。内外面銅緑釉。	
42	〃	SK8 埋土	磁器 香炉	10.1	(3.9)	-	-	香炉あるいは火入れ。口縁部は内側に折り込む。内外面とも施釉。	
43	〃	SK10 埋土	須恵器 壺	-	(2.3)	-	8.5	外面に高台を貼付。高台外面はナデにより段を生じる。内面はナデ調整。外面は高台上にへらケズリ。	
44	〃	〃 〃	〃 杯	-	(1.2)	-	7.4	外面に高台を貼付。外面は高台上にへらケズリ、ナデ調整。内面はナデ調整。	
45	〃	〃 〃	磁器 皿	-	(2.2)	-	-	肥前系磁器か。染付皿。内面口縁下に圏線。内外面に施釉。	
46	〃	SK11 埋土	須恵器 杯	-	(2.1)	-	10.2	外面は底部がへらケズリとナデ調整。内面はナデ調整。	
47	〃	〃 〃	〃 蓋	基部 径 14.6	(1.7)	-	-	断面三角形のかえりが付く。外面天井部は一部へらケズリと回転ナデ調整。内面はナデ調整。	
48	〃	〃 〃	弥生土器 甕	-	(1.3)	-	2.8	底部は平底。外面はナデ調整。内面はへら状工具によるナデ調整。	
49	〃	SK12 埋土	陶器 鉢	-	(3.6)	-	12.4	底部削り出し高台。高台側面は一部面取り。外面は高台側面まで化粧土。内面にも化粧土。内面に離れ砂熔着。	
50	〃	SK13 埋土	須恵器 杯	-	(2.1)	-	9.1	底部高台を貼付。高台接合部はナデ調整。外面はナデ調整で自然釉あり。内面はナデ調整。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
51	V-1	SK13埋土	磁器皿	13.6	3.2	-	8.5	染付皿。口縁端部に錆釉。外面には草花文。内面に草花文と圏線。高台畳付け露胎。	肥前系磁器か。
52	〃	SK14埋土	土師質土器杯	-	(1.1)	-	5.3	底部切り離しは回転糸切。外面内面ともに回転ナデ調整。	
53	〃	SK21埋土	陶器鉢	-	(6.0)	-	-	口縁端部は外側に折り曲げ肥厚。外面は刷毛目の波状文。内面は刷毛目に横線。	
54	〃	〃	磁器碗	12.0	(4.7)	-	-	肥前系磁器。丸形碗。外面に植物の染付か。内面無文。	
55	〃	SD2埋土	弥生土器壺	-	(3.0)	-	7.3	平底。底部外面にタタキ目。外面は一部タタキ目が残り、ナデ調整。内面はナデ調整。	
56	〃	〃	土師質土器椀	-	(1.4)	-	5.7	底部外面に高台を貼付。外面内面ともに摩耗。調整は不明瞭。	
57	〃	P1埋土	弥生土器高杯	-	(7.9)	-	18.8	外面はタテ方向のハケ目、裾部はナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目、ナデ調整。	孔径0.7cmの円孔を2箇所。推定4箇所。
58	〃	P15埋土	土師器皿	13.8	3.5	-	9.4	底部外面に粘土紐痕。内面は口縁端部下に沈線。摩耗するが一部ナデ調整。外面は摩耗、一部ナデ調整。	
59	〃	P17埋土	弥生土器甕	-	(2.0)	-	-	外面は端部にナデ調整、頸部にかけてハケ目調整。内面はハケ目と指頭圧痕。	
60	〃	P24埋土	土師器皿	-	(2.0)	-	-	内面口縁部下には浅い凹み。外面はナデ調整、ヘラミガキ。内面はナデ調整、ヘラミガキ。	端部と外面にスス。
61	〃	〃	須恵器甕	-	(17.8)	-	-	外面はタテ方向とヨコ方向のタタキ目、ハケ状工具によるナデ調整。内面は同心円状のタタキ目、ナデ調整。	
62	〃	P66埋土	弥生土器甕	-	(4.5)	-	-	外面は口縁端部下までタタキ目。端部に指頭圧痕。内面はヨコ方向のハケ目調整。	
63	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	3.8	平底。外面はタタキ目が残る。底部外面にナデ調整。内面はナデ調整と一部ヘラ状工具によるナデか。	
64	〃	〃	〃	-	(3.8)	-	5.0	底部は平底。外面にはタタキ目が残り、ナデ調整。底部外面はナデ調整。内面はナデ調整。ヘラ状工具によるナデ調整か。	
65	〃	〃	鉢	7.0	3.7	-	2.2	小型鉢。底部平底。外面はタタキ目が残り、ナデ調整。底部外面ナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目、内面底部に指頭圧痕。	
66	〃	〃	土製品支脚	-	14.4	-	9.3	2本指で指間は半円弧状を呈する。外面は指頭圧痕が顕著。ユビナデ。内面は中空でしほり痕が残る。	
67	〃	P96埋土	土師質土器椀	-	(1.8)	-	6.6	底部外面に輪高台を貼付。外面内面ともに摩耗。	
68	〃	P100埋土	〃杯	12.8	(3.3)	-	-	外面は回転ナデによる段が生じる。内面は回転ナデ調整。	杯又は椀。
69	〃	SX1埋土	〃	11.4	3.5	-	7.4	底部切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。内面は一部摩耗。	外面にはスス。
70	〃	SX4埋土	陶器鉢	24.4	(10.3)	-	-	外面は刷毛目による化粧土。内面は刷毛目による横線。	
71	〃	SX13埋土	焙烙	42.0	(4.1)	-	-	口縁部にかける器壁が厚くなる。外面は指頭圧痕、ナデ調整。内面はナデ調整で口縁部近くに工具痕あり。	外面はススが付着。
72	〃	〃	陶器播鉢	30.4	(9.1)	-	-	外面は回転ナデ調整。内面は12条の播目を単位とし、放射線状に播目を入れる。口縁部内面はナデ調整。	
73	〃	〃	瓦	残存長 8.2	残存厚 1.4	瓦当高 4.6	-	軒平瓦。瓦当中央に花文、周囲に唐草。左側に「アカ」の刻印。凹面・凸面にナデ調整。	
74	〃	SX17埋土	青磁香炉か	-	(3.3)	-	8.0	筒形。高台は輪高台か。高台脇に三足の一部が残る。内面は無文。	肥前系磁器か。
75	〃	SX18埋土	瓦質土器火鉢	-	(10.7)	-	-	脚部、獣足の一部か。外面はナデ調整、爪の部分はヘラで刺突。内面はハケ状工具のナデ調整と指頭圧痕。内面から穿孔。	

高田遺跡遺物観察表 4

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
76	V-1	SX19埋土	陶器皿	13.3	3.9	-	4.9	底部削り出し高台。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。高台は露胎。内面に銅緑釉で外面は一部化粧土がかかる。	
77	〃	SX25埋土	〃向付	-	4.7	-	-	型作り。底部外面3箇所を高台貼付。隅対部の対極に施釉。鉄絵を施す。	
78	〃	〃	〃播鉢	29.8	(10.7)	-	-	外面はナデ調整。内面は口縁部下に1条の沈線、全面に摺目。摺目上端はナデ調整。	
79	〃	包含層	弥生土器甕	9.9	(6.8)	-	-	外面は指頭圧痕、体部はナデ調整。内面はハケ目調整、指頭圧痕、ナデ調整。	
80	〃	〃	須恵器甕	13.0	(3.1)	-	-	口縁部浅い凹面を呈す。外面はナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、頸部下に青海波文のタタキ目。	
81	〃	〃	白磁碗	-	(1.8)	-	6.0	底部のみ。断面方形の高台をもつ。	
82	〃	〃	磁器紅皿	4.4	1.6	-	1.2	肥前系磁器。貝殻状の型押し成形。内面は施釉。外面は口縁部下から無釉。	1820年代以降か。
83	〃	〃	青花皿	14.1	(2.5)	-	-	口縁部は端反り。外面は口縁部下に圏線文。内面にも圏線文。	
84	〃	〃	磁器皿	11.3	3.4	-	4.1	肥前系磁器か。染付皿。底部削り出し高台。内面は見込みに蛇ノ目釉剥ぎ。線描きの文様。高台は露胎。	V期以降か(1680~1860年代)。
85	〃	〃	陶器壺	-	(9.7)	-	7.7	花入か。外面内面は施釉。内面にロクロ目が残る。外面には4箇所の脚を貼り付けか。外面に梅花の文様。	茶器か。
86	〃	表採	土師質土器焙烙	46.0	(4.0)	-	-	外面は体部から底部にナデ調整、指頭圧痕。内面はナデ調整。	
87	〃	〃	瓦質土器焜炉	12.8	(8.6)	-	-	外面はヘラケズリ、ナデ調整。内面は口縁下にヘラ状工具の圧痕、ナデ調整。	粘土紐痕が残る。
88	〃	〃	青磁皿	-	(2.4)	-	13.0	肥前系磁器の中皿か。底部外面は蛇ノ目凹形高台。内面に陰刻文、外面は無文。	1650~1740年代か。
89	〃	〃	磁器碗	11.9	5.4	-	5.1	染付の小型丸碗。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。内面は釉ハギ部分に砂付着。見込みにコンニャク印判。外面に圏線と丸文。	肥前系磁器
90	〃	〃	〃	12.6	7.0	-	6.5	染付の広東形碗。底部削り出し高台。高台畳付けは露胎。外面に船、楼閣、山文、内面見込みには2箇所の目跡あり。	
91	〃	〃	〃	10.4	7.2	-	5.1	染付の丸形碗。外面は口縁部に二重の圏線と線描き文様か。内面は無文。高台畳付けは露胎。	肥前系磁器
92	〃	〃	陶器皿	12.1	4.3	-	5.1	底部は削り出し高台。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、外面高台脇まで褐釉を施釉。	包含層と接合。
93	〃	〃	〃碗	11.1	7.4	-	4.6	丸形碗。底部削り出し高台。高台畳付けは露胎でそれ以外は施釉。	
94	〃	〃	〃	12.0	8.1	-	5.2	丸形碗。底部削り出し高台。畳付けは露胎でそれ以外は全面施釉。	
95	〃	〃	〃香炉又は火入	11.4	(7.4)	-	-	底部削り出し高台。外面は口縁部下に葉状の文様。内面は無文。高台畳付け以外は施釉。	
96	〃	〃	〃壺	6.6	(5.7)	-	-	火入れか。外面は口縁部は露胎。内面も露胎。ナデ調整。	
97	〃	〃	〃鉢	36.0	12.2	-	12.9	底部削り出し高台。高台側面は面取り。外面は口縁部に褐釉、その他露胎。内面に白化粧土、刷毛目の波状文。	
98	〃	〃	〃	21.0	8.7	-	7.4	底部削り出し高台。外面内面は刷毛目による横線。	
99	〃	〃	〃播鉢	21.9	8.0	-	11.2	外面は回転ヘラケズリ、ナデ調整。内面は、摺目を施す。底部中央に櫛目の印。口縁部内面はナデ調整。	
100	V-2	ST2埋土	弥生土器壺	-	(3.2)	-	2.7	平底。外面は一部にタタキ目、ヘラミガキとナデ調整。内面はナデ調整、一部ヘラミガキ。	上層

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
101	V-2	ST2埋土	弥生土器壺	-	(4.1)	-	6.0	平底。外面は摩耗。内面はナデ調整がみられる。一部摩耗する。	上層
102	〃	〃	土師器皿	15.3	(2.4)	-	-	口縁部内面に浅い凹み。外面は、一部ナデ調整とヘラケズリ。内面は、一部にナデ調整。	上層
103	〃	〃	〃	-	(4.2)	-	-	内面に赤色塗彩か。外面は摩耗。内面は口縁端部下に1条の沈線、ナデ調整。	上層
104	〃	〃	須恵器杯	-	(2.1)	-	10.0	底部は高台を貼付。外面は高台脇にナデ調整。内面の一部はナデ調整。	南拡張部
105	〃	〃	〃甕	19.0	(4.7)	-	-	外面は摩耗し、頸部下にタタキ目が残る。内面は頸部下に同心円状のタタキ目。	上層。軟質
106	〃	ST3埋土	土師器皿	18.4	1.8	-	14.7	口縁部内面浅い凹みを呈する。外面は摩耗し、一部にナデ調整。内面は摩耗する。	中層。ススが付着。
107	〃	〃	〃	-	(2.4)	-	-	口縁部下内面に1条の沈線。外面内面ともにヨコ方向のヘラミガキ。	上層
108	〃	〃	〃杯	-	(1.2)	-	15.4	外面内面ともに摩耗する。底部外面には一部ナデ調整がみられる。	上層
109	〃	〃	須恵器杯	13.8	(3.2)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	下層
110	〃	〃	〃蓋	14.3	(1.8)	-	-	外面はナデ調整、強いナデにより一部凹み状を呈する。内面はナデ調整。	上層
111	〃	〃	〃	17.8	(2.3)	-	-	外面は天井部が回転ヘラケズリ、端部までナデ調整。内面は天井部は不定方向のナデ調整、端部までは回転ナデ調整。	中層
112	〃	〃	〃	14.8	(1.6)	-	-	転用硯。内面に墨付着か。内面は回転ナデ調整。外面天井部は回転ヘラケズリ、端部にかけてナデ調整。	西拡張部
113	〃	〃	製塩土器	-	(4.2)	-	-	内面に布目痕。外面は摩耗する。	下層
114	〃	ST4埋土	弥生土器壺	9.8	16.6	18.2	4.2	外面は頸部から胴部中央にヘラミガキ、以下ヘラケズリとミガキ。内面は口縁部にヘラミガキ。体部に指頭圧痕とナデ調整。	下層
115	〃	〃	〃	22.2	(9.4)	-	-	広口壺。外面は口縁端部に粘土帯を貼付し肥厚。刻目を施し、ハケ目調整。頸部にヘラミガキと列点文。内面はナデ調整。	上層
116	〃	〃	〃	-	(5.2)	-	-	外面は頸部に粘土帯貼付し刻目。頸部から胴部上半部にハケ目後ヘラミガキ。内面は指頭圧痕とナデ、ヨコ方向のハケ目調整。	上層
117	〃	〃	〃	-	(3.4)	-	-	広口壺。端部は上下に肥厚。外面は頸部までタタキ目、タテ方向のハケ目調整、ナデ調整。内面は摩耗。	器面の一部が剥離。
118	〃	〃	〃	-	(9.3)	-	-	外面はユビナデ、タテ方向のハケ目調整。内面はハケ目調整、指頭圧痕とナデ調整。	
119	〃	〃	〃	-	(5.8)	-	6.3	外面はタタキ目、ハケ目調整とナデ調整。内面はナデ調整と指頭圧痕。	
120	〃	〃	〃	-	(6.4)	-	6.0	平底。外面にはタタキ目が残る。ハケ目とナデ調整。内面に細かいハケ目調整。	下層・中層
121	〃	〃	〃	-	(6.7)	-	5.6	外面に一部タタキ目、ナデ調整、一部工具状のナデか。内面はヘラケズリとタテ方向のハケ目調整。底部内面には指頭圧痕。	
122	〃	〃	〃	-	(5.3)	-	5.0	外面はタタキ目が残る。指頭圧痕、体部から底部にはタテ方向のハケ目調整。内面はハケ目調整後ナデ調整。	上層・中層
123	〃	〃	〃甕	16.6	(11.2)	24.2	-	外面は頸部までタタキ目、口縁部にハケ目調整。内面は口縁部から頸部に斜位方向のハケ目、頸部以下指頭圧痕、ユビナデ。	上層
124	〃	〃	〃	17.8	(6.3)	-	-	外面にタタキ目が残る。口縁端部はナデ調整により凹みあり。内面はナデ調整で、頸部下半に一部ヘラケズリがみられる。	上層
125	〃	〃	〃	18.8	(5.5)	-	-	外面はハケ目調整、ナデ調整。内面は口縁部にヨコ方向のハケ目、ナデ調整。	床面

高田遺跡遺物観察表 6

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
126	V-2	ST4埋土	弥生土器甕	19.7	(4.2)	-	-	口縁端部は平坦面で、ナデ調整。外面は指頭圧痕、ナデ調整。内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整とナデ調整。	上層
127	〃	〃	〃	17.0	(4.7)	-	-	口縁端部外面にハケ目調整で、頸部にハケ目調整。内面は口縁部にハケ目調整、頸部にかけて指頭圧痕、ナデ調整。	上面検出
128	〃	〃	〃	-	(4.8)	-	-	口縁端部外面にハケ目を刺突状に施す。外面はハケ目調整、ナデ調整、指頭圧痕。内面は頸部にヘラケズリ、ナデ調整。	下層
129	〃	〃	〃	-	(7.3)	-	4.3	外面はタテ方向のハケ目、底部にヘラミガキ。内面は器壁が剥離、一部ハケ目調整。	
130	〃	〃	〃	-	(7.2)	-	2.3	外面はタタキ目を施し、頸部近くにはナデ調整。内面はナデ調整。底部外面にナデ調整。	上面検出
131	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	3.2	外面は底部にタタキ目が残る。タテ方向のハケ目調整。内面はハケ目調整とヘラ状工具によるナデ調整。	中層
132	〃	〃	〃 小型鉢	9.8	3.1	-	3.3	手づくね成形。外面はヘラ状工具によるナデ調整と指頭圧痕。内面はハケ目と指頭圧痕。	
133	〃	〃	〃 鉢	31.8	(5.3)	-	-	外面は摩耗するが、頸部にナデ調整。内面は口縁部にナデ調整、頸部下にタテ方向・斜位方向のハケ目調整、ナデ調整。	
134	〃	〃	〃 甕か	-	(6.8)	-	2.6	底部は平底で中央部は凹みあり。外面は底部側面に指頭圧痕、体部にナデ調整。内面はハケ目、ナデ調整。	床面
135	〃	〃	〃 鉢か	-	(4.7)	-	3.6	外面は底部に指頭圧痕とナデ調整。内面は底部に指頭圧痕、ハケ目とナデ調整。	上層
136	〃	〃	〃 高杯	-	(5.2)	-	-	外面はタテ方向のヘラミガキ。内面はナデ調整。脚部に穿孔がみられる。孔径 0.8 cm。	
137	〃	〃	〃	-	(4.7)	-	-	外面はヘラミガキ、内面はしほり痕が残り、ナデ調整。	上層
138	〃	〃	〃	-	(2.7)	-	18.6	外面はヘラミガキ、ナデ調整。内面はナデ調整、一部ヨコ方向のハケ目調整。	中層
139	〃	〃	須恵器壺	-	(4.5)	-	-	壺肩部。外面にはナデ調整、一部自然釉がかかる。内面はナデ調整。	下層・古代とのきり合いが。
140	〃	〃	石製品 石包丁	8.4	6.8	1.7	122.5	未製品か。側面は抉りの敲打痕か。裏面は自然面。	
141	〃	〃	〃	10.3	5.7	1.4	100.7	未製品か。側縁部の一部を打ち欠く。	
142	〃	〃	〃 台石	22.3	20.2	5.8	3,300	砂岩製。片面のみ使用か、裏面は自然面。中央部中心に擦痕がみられる。	
143	〃	〃	〃	31.7	32.4	9.0	14,000	砂岩製。表面は中央部から下半にかけて凹み。擦痕あり。周縁部は自然面を残す。	
144	〃	〃	〃	25.6	11.8	6.4	3,130	砂岩製。左右側縁部は割れ面。表面と裏面の中心部を中心に使用痕跡がみられる。	
145	〃	SB3-P5埋土	須恵器甕か	32.4	(3.6)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。外面にヘラ描きの波状文。	
146	〃	SK1埋土	手づくね皿	9.3	2.7	-	6.6	底部外面に板状の圧痕。外面は指頭圧痕とナデ調整。内面に指頭圧痕とナデ調整。	
147	〃	〃	〃	9.2	2.7	-	5.7	底部外面に板状の圧痕がみられる。外面は指頭圧痕とナデ調整。内面にナデ調整。	
148	〃	〃	〃	9.3	2.5	-	7.0	底部外面に板状の圧痕がみられる。外面は指頭圧痕とナデ調整。内面にナデ調整。	
149	〃	SK2埋土	弥生土器甕	-	(1.3)	-	-	口縁端部は平坦面を呈し、外面にナデ調整。内面はナデ調整。	
150	〃	SK3埋土	土師質土器皿	8.0	1.9	-	5.8	底部切り離しは回転糸切り。外面内面ともに回転ナデ調整。	口縁端部タール付着か。

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
151	V-2	SK3埋土	磁器小杯	-	(2.3)	-	2.2	肥前系磁器。底部削り出し高台。高台途中まで施釉。高台に砂熔着。	IV期以降か(1690~1780年代)。
152	〃	SK4埋土	陶器碗	17.2	(4.2)	-	-	透明度の高い釉薬。貫入がみられる。	
153	〃	〃	土師器盤	-	(1.8)	-	13.4	外面は底部に高台を貼付。ナデ調整。内面は赤色塗彩。ヘラミガキ、ナデ調整。	
154	〃	SK21埋土	土師質土器碗	-	(1.4)	-	6.0	底部は高台を貼付。高台内外面はナデ調整。内面はナデ調整、一部摩耗する。	
155	〃	〃	須恵器杯	-	(2.7)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	
156	〃	SK24埋土	〃甕	-	(12.7)	-	-	歪みが顕著。外面にタタキ目と溶着痕あり。内面は同心円状のタタキ目が残る。	ST1とのきり合いか、底面近くで確認。
157	〃	SD1埋土	土師質土器碗	-	(1.7)	-	6.5	底部に輪高台を貼付。高台はナデ調整。外面はナデ調整、摩耗。内面はナデ調整一部摩耗。	
158	〃	〃	須恵器杯	18.9	(3.3)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
159	〃	〃	〃甕	-	(3.9)	-	-	口縁端部は上下に肥厚させる。上端はナデ調整により凹む。外面内面ともにナデ調整。	
160	〃	〃	〃	-	(9.0)	-	-	外面はタテ方向のタタキ目と自然釉がかかる。内面はハケ目状のナデ、同心円状のタタキ目。粘土紐接合痕あり。	
161	〃	SD3埋土	青磁碗	-	(5.1)	-	12.0	青磁碗あるいは盤か。外面は無文。内面は陰刻文。	
162	〃	SD4埋土	土師器杯	13.6	(2.3)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	口縁端部にスス付着。
163	〃	〃	須恵器杯	-	(1.6)	-	10.9	底部高台を貼付。外面高台はナデ調整。内面はナデ調整。	
164	〃	〃	〃蓋	13.5	(1.4)	-	-	外面天井部近くは回転ヘラケズリ。端部にかけてナデ調整。内面はナデ調整。	
165	〃	〃	〃	16.9	(1.6)	-	-	外面内面ともにナデ調整。外面は一部摩耗。端部は内面に折り返す。	
166	〃	SD9埋土	弥生土器甕	11.0	(2.6)	-	-	口縁端部外面にヨコ方向のハケ目。口縁部から頸部にナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目、頸部下方はナデ調整。	
167	〃	SD10埋土	土師質土器碗	-	(1.7)	-	5.3	底部に高台を貼付。外面は体部にナデ調整。内面は摩耗、器面剥離。	
168	〃	〃	須恵器杯	-	(2.5)	-	11.3	底部外面に高台を貼付。外面高台内外面はナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。	
169	〃	SD11埋土	磁器杯	8.0	(3.9)	-	-	染付杯。口縁部は端反り。外面には文様。内面は無文。	
170	〃	SD12埋土	磁器杯	-	(2.3)	-	3.2	底部削り出し高台。高台畳付けは露胎。	1680~1860年代か。
171	〃	〃	陶器播鉢	35.0	(12.1)	-	-	外面はナデ調整、ヘラ状工具によるナデ調整。内面に播目、播目の上端部はナデ調整。	
172	〃	〃	〃甕	29.8	(17.2)	34.9	-	外面は頸部に2条の粘土帯を貼付し、上から押圧。内面口縁部はナデ調整、頸部から体部にワッフル状のタタキを施す。	
173	〃	SD13埋土	土師器高杯	-	(8.0)	-	-	断面七角形を呈し、外面はヘラミガキを施す。内面はナデ調整。面取り幅は約2.0cm。	
174	〃	SD17埋土	土師質土器杯	12.6	(1.9)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	杯又は皿。
175	〃	〃	須恵器壺	-	(6.2)	17.6	-	壺体部か。外面内面は回転ナデ調整。	

高田遺跡遺物観察表 8

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
176	V-2	SD18埋土	須恵器皿	14.0	2.0	-	12.0	口縁端部は外反。外面内面はナデ調整。	
177	〃	〃	〃杯	-	(1.4)	-	9.3	底部外面に高台を貼付。高台の外面内面にナデ調整。内面はナデ調整。	
178	〃	〃	陶器碗	-	(5.0)	-	5.6	丸形碗。削り出し高台で、高台畳付けは露胎。以外は施釉。	
179	〃	〃	〃鉢	21.4	(6.0)	-	-	外面は刷毛目による横線。内面は刷毛目による波状文。外面体部下半は露胎。白色の化粧土に緑色釉。	
180	〃	〃	磁器碗	-	(1.7)	-	6.2	染付碗。底部見込みに植物文。高台外面に三重の圏線文。高台畳付けは露胎。	肥前系磁器か。
181	〃	〃	瓦質土器羽釜	21.2	(4.1)	-	-	口縁部は内傾し、外面鏝は途中欠損する。外面は摩耗。内面は摩耗、一部ヨコ方向のハケ目調整。	
182	〃	SD19埋土	須恵器盤	25.6	(4.3)	-	-	口縁端部は上方につまみ上げる。外面内面は回転ナデ調整。外面底部には回転ケズリ。	上層
183	〃	〃	〃蓋	-	(1.3)	-	-	つまみ径2.6cm。扁平な宝珠形を呈す。外面内面はナデ調整、外面は一部摩耗する。	下層
184	〃	SD20埋土	土師質土器皿	7.1	1.4	-	3.9	底部切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。一部摩耗する。	
185	〃	〃	〃	7.6	1.4	-	3.9	底部切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。内面にナデ調整による凹凸がみられる。	
186	〃	〃	磁器碗	-	(3.8)	-	5.2	肥前系磁器。染付碗。底部削り出し高台。高台畳付けは露胎。内面見込みに五弁花。高台外面と内底面に圏線文。	
187	〃	〃	瓦	(10.8)	(16.2)	(1.6)	-	棧瓦片。凹面・凸面はナデ調整。一部摩耗する。	
188	〃	P7埋土	土師質土器皿	8.6	1.6	-	5.4	底部切り離しは回転糸切り。外面内面ともに回転ナデ調整。底部には切り離し後の圧痕がみられる。	
189	〃	〃	須恵器杯	-	(1.7)	-	12.0	底部外面に高台を貼付。外面内面はナデ調整。	
190	〃	P58埋土	〃壺	-	(4.3)	-	-	外面には長方形の突起を貼付。ナデ、指頭圧痕。自然釉がかかる。内面は回転ナデ調整。	
191	〃	P63埋土	〃甕	21.0	(6.7)	-	-	口縁端部は上方に肥厚する。外面は平行のタタキ目、内面はナデ調整。	
192	〃	P70埋土	弥生土器壺	-	(7.2)	-	4.8	外面にタタキ目、タテ方向のハケ目、ナデ調整。内面はナデ、工具状のナデ調整。	
193	〃	P73埋土	須恵器壺	8.6	(7.7)	-	-	外面と内面は回転ナデ調整。内面に一部自然釉がかかる。	
194	〃	〃	土師器甕	18.8	(2.9)	-	-	外面は口縁部から頸部はナデ調整、タテ方向のハケ目調整。内面はナデ調整。	
195	〃	P80埋土	弥生土器甕	11.1	(6.3)	10.1	-	外面は口縁部までタタキ目、口縁部から体部にハケ目調整。内面は口縁部はナデ、頸部からは指頭圧痕とナデ調整。	
196	〃	P91埋土	須恵器杯	-	(1.3)	-	9.0	底部切り離しは回転ヘラ切りか。高台を貼付。外面内面は回転ナデ調整。	
197	〃	P92埋土	土師器皿	17.3	(2.1)	-	-	口縁端部は平坦面を呈す。外面内面はナデ調整。	
198	〃	P108埋土	土師質土器皿	8.0	1.6	-	4.8	底部外面切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。外面ロクロ目顕著。	
199	〃	〃	〃碗	-	(1.6)	-	6.2	底部外面切り離しは回転糸切り。底部に高台を貼付。外面内面は、一部ナデ調整。	
200	〃	P118埋土	土製品	15.0	14.0	2.4	331.8	鋤状。須恵器のような焼成。外面内面ともに指頭圧痕とナデ調整。差し込み部は凹状を呈し、周囲はナデ調整。	上部に厚みをもち、先端部にかけて薄いつくりとなる。

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
201	V-2	P120埋土	須恵器杯	15.6	(3.6)	-	-	外面は摩耗。内面は一部摩耗する。回転ナデ調整。	
202	〃	〃	〃蓋	13.0	(1.5)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
203	〃	P124埋土	石製品石包丁	8.1	5.0	0.6	31.4	片岩系。全体に摩耗。左側縁1箇所、右側縁2箇所、側縁部を打ち欠く。裏面には剥離面が残る。	
204	〃	P127埋土	土師器皿	28.8	(1.7)	-	-	皿あるいは盤か。赤色塗彩。外面は摩耗。内面はヘラミガキとナデ調整。	
205	〃	P138埋土	〃	-	(1.9)	-	-	外面内面は摩耗する。口縁端部はナデ調整。	
206	〃	〃	〃杯	-	(1.1)	-	10.2	底部外面に高台を貼付。外面は摩耗あり、一部ナデ調整。内面はナデ調整、一部ヘラミガキがみられる。	
207	〃	〃	須恵器杯	15.4	(3.0)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。外面は一部摩耗する。	
208	〃	〃	土師器甕	25.8	(4.2)	-	-	口縁端部は平坦面で浅い凹みを呈する。外面内面ともにナデ調整。	
209	〃	P146埋土	黒色土器椀	-	(3.6)	-	-	外面内面ともに黒色。外面は摩耗するが、ヨコ方向のヘラミガキ。内面もヨコ方向の密なヘラミガキ。	
210	〃	P149埋土	〃	14.0	4.9	-	8.2	内黒を意識したものか。炭素吸着は薄い。底部外面に高台を貼付。外面内面は回転ナデ調整。	
211	〃	P158埋土	須恵器高杯	-	(3.2)	-	10.8	外面内面ともに摩耗するが、一部ナデ調整が残る。	
212	〃	P183埋土	〃杯	14.0	3.3	-	10.3	外面内面ともに摩耗するが、回転ナデ調整が一部残る。	
213	〃	〃埋土・柱痕	土師質土器杯	-	(2.1)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
214	〃	P184埋土	瓦	(8.9)	(9.6)	1.6	-	凹面は布目痕、凸面に格子状のタタキ目が残る。全体に摩耗する。	
215	〃	P184・185上面埋土	土師器高杯	-	(2.7)	-	-	外面は脚部にナデ調整、杯部はナデ調整とヘラミガキ。	
216	〃	〃	須恵器蓋	15.8	(1.8)	-	-	端部は下方にのびる。外面内面ともにナデ調整。	
217	〃	P212埋土	弥生土器鉢	10.0	5.5	-	3.9	外面内面に指頭圧痕とナデ調整。内面はナデ調整。外面は工具によるナデ調整。	外面には亀裂あり。
218	〃	P236埋土	〃	17.0	7.4	-	3.9	外面は底部から口縁部までタタキ目。ハケ目と一部ヘラミガキ。内面にハケ目後ヘラミガキ。	外面にスス。
219	〃	P237埋土	土師器甕	-	(3.5)	-	-	口縁端部は丸くおさめる。内面はナデ調整、外面にナデ調整。一部摩耗する。	スス付着。
220	〃	〃	金属製品鉄斧	7.1	4.5	2.5	87.7	袋状鉄斧。基部は折り曲げ袋状を呈する。	
221	〃	P238埋土	土師器高杯	-	(1.3)	-	14.1	外面内面ともにナデ調整。	
222	〃	SX5埋土	磁器杯	6.5	(3.3)	-	-	染付の筒形小杯。体部外面に圏線と四方禪文。内面は無文。	肥前系磁器か。
223	〃	〃	石製品石臼	(16.4)	(16.7)	(9.5)	(3.430)	砂岩製。上臼。側面と上部部にハツリ痕及び供給口。底面には放射状の臼目。	
224	〃	SX7埋土	土師器皿	16.8	1.7	-	13.6	外面内面はナデ調整、ヘラミガキを施す。底部外面に粘土紐痕か。	
225	〃	〃	須恵器杯	12.1	3.5	-	6.5	底部に高台を貼付。外面は摩耗する。内面はナデ調整。	

高田遺跡遺物観察表 10

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
226	V-2	SX14	土師器 羽釜	19.6	(3.5)	-	-	断面三角形の鏝を貼付。外面はナデ調整と鏝下半に指頭圧痕。内面はナデ調整、ヨコ方向のハケ目調整。	
227	〃	SX15	〃 〃	24.0	(4.3)	-	-	外面は口縁部にナデ調整、指頭圧痕、体部はハケ目調整。内面はナデ調整で一部摩耗する。	棋津型羽釜
228	〃	〃	須恵器 蓋	基部 径 8.2	(1.5)	-	-	かえり高 0.45 cm。内面には断面三角形のかえり。外面内面ともに回転ナデ調整。	
229	〃	〃	〃 甕	22.0	(4.5)	-	-	外面に一部自然釉がかかる。外面内面は回転ナデ調整。	
230	〃	〃	土師質土器 皿	7.4	1.4	-	4.6	底部切り離しは回転糸切り。外面内面に回転ナデ調整。	外面にススが付着。
231	〃	〃	〃 〃	6.6	1.0	-	4.2	底部切り離しは回転糸切り。外面内面に回転ナデ調整。灯明皿か。	口縁端部にススが付着。
232	〃	〃	〃 皿か	-	(0.6)	-	4.2	底部切り離しは回転糸切り。底部外面に墨書。内面に回転ナデ調整。	
233	〃	SX14	瓦質土器 火鉢	35.6	(5.0)	-	-	外面は口縁部下方に1条の沈線。下半部にワッフル状のタタキ目。内面はナデ調整。	
234	〃	SX15	〃 壺	21.7	(7.1)	-	-	外面内面ともにナデ調整。内面には指頭圧痕。	
235	〃	〃	〃 播鉢	33.8	(4.0)	-	-	外面は摩耗が顕著、指頭圧痕が残る。内面はナデ調整、7条の播目がみられる。	
236	〃	SX16	陶器 皿	-	(2.8)	-	4.4	褐釉皿。底部削り出し高台。内面は蛇ノ目釉ハギ。高台は露胎。	
237	〃	SX15	〃 碗	12.0	8.4	-	5.4	丸形碗。削り出し高台。高台以外は全面施釉。内面見込みに4箇所目跡が残る。	
238	〃	〃	〃 〃	12.2	8.3	-	4.5	丸形碗。削り出し高台。高台畳付け以外は全面施釉。外面にロクロ目が残る。	
239	〃	SX14	〃 〃	9.4	6.8	-	5.4	筒形碗あるいは火入れ。陶胎染付。外面に植物の染付、内面と体部下半から高台にかけて露胎。	
240	〃	SX17	〃 播鉢	14.8	5.0	-	6.0	外面はナデ調整。内面は7条単位の放射線状の播目。底部内面で交差。播目上端はナデ調整。	小型播鉢
241	〃	SX16	〃 〃	35.0	14.1	-	15.2	外面はナデ調整、下半部はケズリとナデ調整。内面は全面に播目、上端部はナデ調整。	
242	〃	SX14	〃 鉢	43.0	(11.2)	-	-	口縁端部は外方に拡張、肥厚、端部は凹状。内面は銅緑釉薬に刷毛目の横線。外面は底部途中まで施釉。	
243	〃	SX15	〃 〃	-	(12.4)	-	14.0	外面は口縁部下に波状文。高台畳付けの一部まで施釉。内面は露胎。	
244	〃	〃	青磁 皿	23.5	(2.3)	-	-	段皿状を呈する。外面内面に施釉。	肥前系磁器か。
245	〃	〃	〃 盤か	-	(1.9)	-	13.7	大皿か。底部外面は蛇ノ目釉ハギ。外面内面に施釉。	
246	〃	SX14	磁器 皿	16.0	3.8	-	9.4	染付の輪花皿。銅板転写か。外面は植物、高台に雷文。内面見込みに植物。	
247	〃	SX14・15	〃 〃	-	(4.2)	-	17.4	染付皿。削り出し高台。高台畳付け以外は施釉。内面に芙蓉手、植物文。外面に圏線文。	肥前系磁器か。
248	〃	SX15	〃 〃	13.4	3.8	-	8.2	染付皿。削り出し高台。内面見込みに五弁花コンニャク印判、竹と笹。外面は口縁部に唐草か、高台見込みに渦福の銘。	肥前系磁器
249	〃	SX17	青花 皿	-	(2.1)	-	6.9	削り出し高台。高台畳付けは釉ハギ。高台内に飽痕。内面見込みに藤花文。	
250	〃	SX16	〃 〃	-	(1.7)	-	7.3	外面高台内に飽痕。高台畳付けは釉ハギで砂が溶着。外面は高台に圏線、内面は植物文。	

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
251	V-2	SX16	磁器碗	8.0	3.7	-	3.1	染付の小型丸碗。底部削り出し高台。高台量付けは露胎。外面に植物文、内面は無文。	肥前系磁器
252	〃	〃	〃	9.9	5.7	-	4.0	染付の丸形碗。外面は高台脇に圈線と植物文。内面は無文。	肥前系磁器
253	〃	SX14	〃	10.1	5.2	-	4.3	染付の丸形碗。外面は体部に植物、高台に二重圈線。内面は無文。高台内面に銘あるいは文様か。	
254	〃	〃	〃蓋	6.6	2.4	-	-	つまみ径 0.7 cm。天井部外面に染付。内面接触部には砂が溶着。	
255	〃	SX15	〃鉢	26.0	(7.4)	-	-	染付の丸形鉢。外面に二重圈線と植物文。内面は帯状の圈線。	肥前系磁器Ⅲ期以降か。1670年代以降。
256	〃	SX14	〃碗	11.6	8.0	-	5.3	染付の丸形碗。染付部分は滲む。高台量付けと内面は露胎。釉は透明度をもたない。	
257	〃	〃	磁器瓶	-	(8.6)	13.1	6.3	青磁瓶。底部削り出し高台。高台量付けと内面は露胎。	肥前系磁器
258	〃	SX14・15	〃香炉	11.1	8.3	-	7.1	筒形。香炉あるいは火入れ。底部は蛇ノ目凹高台。青磁釉。	
259	〃	SX15	瓦	瓦当径 15.3	-	-	-	瓦当に三巴紋と周囲に珠紋。外面はヘラ状工具によるナデ調整、指頭圧痕。内面はヘラケズリとナデ調整。	
260	〃	〃	〃	-	-	-	-	「アカ」の刻印銘	
261	〃	〃	〃	7.1	12.0	3.3	-	凹面は格子状のタタキ目が薄く残る。凸面は摩耗する。	
262	〃	〃	石製品硯	5.4	4.1	1.9~2.4	-	陸部の一部が残存。陸部の一部は凹状をなす。側縁部と底部は摩耗する。	
263	〃	包含層	弥生土器甕	18.5	(8.0)	-	-	外面頸部までタタキ目。口縁部から頸部にナデ調整と指頭圧痕。内面は口縁部にナデ調整、体部はナデ調整とヘラケズリ。	
264	〃	〃	ミニチュア土器	3.8	2.6	-	2.3	鉢か。外面は指頭圧痕、ナデ調整。内面に指頭圧痕。	
265	〃	〃	土師器蓋	-	(1.4)	-	-	扁平なつまみを貼付。つまみ径 2.4 cm。外面はナデ調整。内面は摩耗する。	
266	〃	〃	〃	17.1	3.5	-	-	つまみ径 2.5 cm。宝珠形を呈す。外面はヘラミガキ。内面はヘラミガキとナデ調整。	南トレンチ
267	〃	〃	〃高杯	-	(2.5)	-	-	脚部との接合部はナデ調整。外面は杯部にヘラミガキとナデ調整。内面は杯部にヘラミガキとナデ調整。脚部はナデ調整。	
268	〃	〃	〃	-	(4.0)	-	-	杯内面はヘラミガキ、ナデ調整。脚部外面はヘラ状工具によるナデ調整。内面はナデ調整。	
269	〃	〃	〃	-	(2.2)	-	-	外面内面とも摩耗のため調整不明瞭。	
270	〃	〃	土師器皿	-	(2.4)	-	4.0	底部切り離しは回転糸切り。外面はナデ調整。内面は回転ナデ調整。内面底部に凹凸。	柱状高台
271	〃	〃	〃	-	(3.2)	-	6.4	底部切り離しは回転糸切り。外面はナデ調整、ハケ目が残る。内面は摩耗。柱状部に内面より径 5 mm の穿孔。	柱状高台
272	〃	〃	〃	-	(2.6)	-	-	底部切り離しは回転糸切り。外面はナデ調整、一部摩耗。内面は摩耗。柱状部に内面より径 4 mm の穿孔。	柱状高台
273	〃	〃	〃	18.1	(2.1)	-	-	外面内面は赤色塗彩。外面内面はヘラミガキ、摩耗する。	
274	〃	〃	〃	11.7	1.5	-	8.7	底部切り離しはヘラ切りか。外面内面は回転ナデ調整。内面の器面が一部剥離。	
275	〃	〃	手づくね皿	13.8	(1.9)	-	-	手づくね成形。外面内面はナデ調整、体部にかけて指頭圧痕が顕著。	

高田遺跡遺物観察表 12

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
276	V-2	表採	土師器 羽釜	22.0	(5.3)	-	-	断面方形の鐏が巡り、接合部はナデ調整、指頭圧痕。内面はナデ調整。	楕津型
277	〃	包含層	〃 甑	-	(5.5)	-	-	甑把手。外面接合部は指頭圧痕、ナデ調整。内面は指頭圧痕、ナデ調整。	
278	〃	〃	須恵器 蓋	13.8	2.0	-	-	つまみ径2.3cm。扁平なつまみ。外面は天井部に回転ヘラケズリ、端部まではナデ調整。内面はナデ調整。	
279	〃	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	環状のつまみ。つまみ径5.2cm。貼付部分はナデ調整。外面は天井部に回転ヘラケズリ。内面はナデ調整。	
280	〃	〃	〃 〃	21.6	(1.8)	-	-	外面は天井部にヘラケズリ、端部にかけて回転ナデ調整。内面はナデ調整。外面口縁端部に一部ヘラケズリ。	
281	〃	〃	〃 杯	12.0	3.9	-	7.0	底部外面にはヘラ状工具の圧痕がみられる。外面内面ともに回転ナデ調整。	
282	〃	〃	〃 〃	11.0	4.0	-	9.4	底部切り離しは回転ヘラ切りの後ナデ調整か。外面内面ともにナデ調整。	
283	〃	〃	〃 〃	12.0	2.9	-	8.1	底部外面切り離し後にナデ調整。外面・内面は回転ナデ調整。外面は一部摩耗。	
284	〃	〃	〃 皿	15.7	(2.2)	-	-	口縁端部は浅い凹状を呈する。外面内面はナデ調整。底部外面にもナデ調整。	
285	〃	〃	〃 高杯	-	(1.8)	-	-	杯底部には自然釉が全面にかかる。外面はナデ調整。	検出面
286	〃	〃	〃 〃	-	(7.2)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。外面には一部自然釉がかかる。	
287	〃	〃	〃 〃	-	(3.7)	-	-	外面内面はナデ調整。	
288	〃	包含層	〃 壺	-	(4.6)	-	-	外面にタテ方向の粘土帯を貼付。貼付部分はナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
289	〃	〃	〃 〃	-	(4.4)	17.3	-	外面に一部自然釉がかかる。外面内面はナデ調整。	
290	〃	〃	〃 〃	-	(10.2)	19.0	13.4	底部外面に高台を貼付。外面はナデ調整。内面は指頭圧痕とナデ調整、接合痕あり。	
291	〃	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	9.5	外面は高台脇強いナデ、側面にヘラ状工具によるナデ調整。内面ナデ調整と指頭圧痕。	
292	〃	〃	〃 甕	17.9	(6.2)	-	-	外面は口縁部はナデ、頸部はタタキ目。内面はナデ調整で、頸部に同心円状のタタキ目。	
293	〃	〃	土師質土器 椀	15.8	5.6	-	6.5	外面高台内に○に上の墨書。外面は口縁部から体部に回転ナデ調整、下半は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ調整。	
294	〃	〃	〃 皿	8.0	1.3	-	5.9	底部切り離しは回転糸切り。外面内面はナデ調整。	
295	〃	〃	黒色土器 椀	-	(3.0)	-	-	外面内面ともに細かいヘラミガキ。	
296	〃	〃	瓦	-	-	(1.6)	-	凹面は布目痕、ナデ調整。凸面は格子状のタタキ目が残る。還元炎色を呈する。	
297	〃	〃	石製品 石包丁	8.7	5.0	1.1	68.0	両側縁部に抉りを施し、摩滅がみられる。	
298	〃	〃	〃 〃	7.7	4.1	0.9	(46.6)	粘板岩系。側縁部1箇所抉りをもうける。片側縁部は欠損する。	
299	〃	〃	〃 〃	6.5	4.1	0.7	25.5	片岩系。側縁部に抉りを施す。刃部にミガキあり。使用痕か。	
300	〃	〃	金属製品 鉄鏝	(5.8)	2.9	0.7	(18.5)	茎部残存。断面は方形を呈する。	

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
301	V - 2	包含層	金属製品 毛抜き	7.0	0.6	0.2	5.9	U字状を呈する。断面形は隅丸長方形状を呈する。	
302	〃	〃	須恵器 蓋	14.1	(1.2)	-	-	外面内面はナデ調整。	
303	〃	〃	〃 杯	-	(1.9)	-	9.4	底部外面は高台を貼付。外面内面はナデ調整。貼付部分に段が生じる。	
304	〃	〃	土師器 高杯	-	(5.2)	-	-	杯部外面は器面が剥離、一部ナデ調整。脚部は外面にナデ調整、内面にしぼり痕とナデ調整。	
305	〃	〃	磁器 碗	13.0	(5.4)	-	-	染付の丸形碗。外面は口縁下に二重圏線と植物文。内面は無文。	
306	〃	表採	〃 〃	10.0	6.0	-	5.1	染付の広東形碗。削り出し高台。外面に山水か。高台見込みに「サ」の銘。内面に圏線。	能茶山焼

高田遺跡遺物観察表 14

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
307	Ⅵ	SB2 - P10 埋土	須恵器 甕	-	(22.4)	-	-	外面は斜位と格子状のタタキ目。内面は同心円状のタタキ目。	
308	〃	SB4 - P5 埋土	〃 壺	-	(2.1)	-	-	底部外面に輪高台貼付。外面内面にナデ調整。	
309	〃	SB5 - P3 埋土	〃 皿	17.2	1.8	-	13.0	外面内面ともに摩耗する。外面の一部にはナデ調整。	
310	〃	SB7 - P13 埋土	土師器 皿	10.4	1.2	-	6.4	底部外面に粘土紐痕。外面内面ともに回転ナデ調整。内面底部はヨコ・斜位方向のナデ調整。	口縁部内面一部にスス付着。
311	〃	SB7 - P8 埋土	〃 〃	-	(1.5)	-	9.0	底部外面に高台を貼付。内面底部はナデ調整。底部外面は摩耗する。	検出面
312	〃	〃 〃	〃 杯	-	(1.4)	-	9.2	底部外面に高台を貼付。外面内面ともにナデ調整。	杯 B
313	〃	SB7 - P12 埋土	〃 〃	-	(2.5)	-	10.0	底部は輪高台を貼付。外面内面ともに丁寧なナデ調整。	杯 B
314	〃	SB7 - P8 埋土	須恵器 杯	-	(1.9)	-	10.0	底部に粘土紐痕残る。外面はナデ調整。内面もナデ調整。	杯 A
315	〃	SB7 - P5 埋土	〃 蓋	14.2	(1.9)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。外面に自然釉。	
316	〃	SB7 - P9 埋土	土師器 高杯	-	(4.7)	-	-	杯部内面にヘラミガキ。脚部外面は摩耗。内面は回転ナデ調整。	
317	〃	SB7 - P14 埋土	〃 〃	-	(2.2)	-	7.9	外面内面ともにナデ調整。外面内面の一部に赤色塗彩が残る。	
318	〃	SB7 - P6 埋土	須恵器 蓋	14.8	2.5	-	-	環状のつまみ。つまみ径 5.6 cm。外面天井部は回転ヘラケズリ、回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
319	〃	SB7 - P1 埋土	〃 壺	-	(7.0)	17.7	-	内面は肩部上方に回転ヘラケズリ、体部にナデ調整。外面肩部に自然釉。	
320	〃	SB7 - P8 埋土	須恵器 壺又は甕	29.7	(3.2)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。外面内面に自然釉。	
321	〃	SB7 - P12 埋土	土製品 土錘	4.9	1.9	1.8	9.6	径約 0.6 cm の孔。中央部に最大径をもつ。外面は摩耗。	
322	〃	SB7 - P1 埋土	〃 〃	(2.4)	0.8	0.8	(1.4)	径約 0.4 cm の孔。外面は一部指頭圧痕。	
323	〃	SB7 - P3 埋土	金属製品	(7.5)	-	-	(4.5)	棒状鉄製品。両端は欠損。断面は方形状を呈する。	紡錘車の軸か
324	〃	SB8 - P4 埋土	土師器 皿	25.0	1.3	-	22.2	外面底部は摩耗。口縁部外面は回転ナデ調整。内面はナデ調整、ヘラミガキ。	
325	〃	SB8 - P5 埋土	〃 〃	-	(2.0)	-	-	底部は高台を貼付。外面底部は摩耗。内面は摩耗するが、一部ヘラミガキ。	皿 B
326	〃	SB8 - P4 埋土	〃 〃	31.2	(2.8)	-	-	底部は高台が剥離。口縁部内面に沈線。外面内面は回転ナデ調整。内面にヘラミガキ。	一部スス付着。
327	〃	SB8 - P7 埋土	〃 〃	-	(3.9)	-	-	内面に赤彩。外面はナデ調整。	器壁厚い。一部にスス。
328	〃	SB8 - P4 埋土	土師器 高杯	-	(2.4)	-	19.3	外面内面は回転ナデ調整。	焼成不明
329	〃	SB8 - P8 埋土	須恵器 杯	-	(2.1)	-	11.2	底部外面に高台を貼付。体部外面内面は回転ナデ調整。内面底部はヨコ・斜位方向のナデ調整。	杯 B
330	〃	SB9 - P8 埋土	土師器 蓋	17.6	(2.4)	-	-	外面内面は摩耗する。	
331	〃	SB10 - P5 埋土	〃 皿	15.6	2.1	-	13.4	外面内面は摩耗する。	

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
332	VI	SB10 - P6埋土	土師器杯	-	(1.6)	-	9.5	外底面に粘土紐痕。外面内面ともにヘラミガキ。	杯 A
333	〃	SB10 - P2埋土	〃 〃	13.8	3.4	-	8.8	外面内面は回転ナデ調整。下方はヘラミガキ。底部外面までヘラミガキ。	
334	〃	SB10 - P5埋土	須恵器皿	15.9	2.6	-	13.3	底部切離しは回転ヘラ切り。外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整とヨコ方向のナデ調整。	焼成は土師器に類似。
335	〃	SB10 - P6埋土	〃 杯	12.7	(4.0)	-	9.0	外底面にはヘラ痕。外面内面は回転ナデ調整。外面内面には一部火襷あり。	
336	〃	SB10 - P5埋土	〃 蓋	19.4	(2.0)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	歪みあり。
337	〃	SK1埋土	土師質土器碗	-	(1.2)	-	6.2	底部外面に高台を貼付。高台脇は回転ナデ調整。内面は摩耗。	
338	〃	SK2埋土	土師器甕	-	(1.8)	-	-	外面はナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目。	
339	〃	SK4埋土	土師質土器杯	10.1	3.1	-	7.3	外面と内面は回転ナデ調整。底部内面にはユビナデによる凹凸がみられる。内面は一部摩耗する。	
340	〃	〃 〃	〃 〃	10.1	3.2	-	6.5	外面と内面は摩耗する。底部内面にはユビナデによる凹凸がみられる。	
341	〃	〃 〃	須恵器瓶	5.1	10.0	-	8.9	口縁端部は片口状をなす。外面と内面は回転ナデ調整。底部外面に回転ヘラ切り後ナデ調整か。	
342	〃	〃 〃	鉄製品 刀子	(16.4)	1.4	0.3	(20.9)	刃部残存。基部は途中欠損。	
343	〃	〃 〃	棒状鉄製品	(5.2)	(0.7)	(0.5)	(4.8)	断面長方形形状を呈する。	
344	〃	〃 〃	〃	(4.8)	(0.8)	(0.5)	(4.6)	断面長方形形状。木質が付着。	
345	〃	〃 〃	〃	8.2	0.5	0.9	9.4	断面長方形形状。木質付着か。	
346	〃	〃 〃	〃	(8.1)	0.8	0.6	(11.8)	断面方形形状。下方は断面厚薄くなる。	
347	〃	〃 〃	〃	(4.7)	(0.4)	(0.4)	(1.4)	断面方形形状、先端屈曲する可能性あり。	
348	〃	〃 〃	〃	(2.0)	(0.4)	(0.4)	(0.6)	先端部のみ残存。断面隅丸方形形状。	
349	〃	〃 〃	〃	(1.9)	(0.3)	(0.2)	(0.5)	断面長方形形状。木質が付着。	
350	〃	〃 〃	〃	3.4	1.0	0.5	1.6	断面方形形状、下方先になるほど断面厚薄い。先端屈曲する。	
351	〃	〃 〃	〃	(1.4)	(0.3)	(0.5)	(0.4)	断面長方形形状、先端屈曲する。	
352	〃	SK7埋土	須恵器壺	-	(3.1)	-	8.8	底部外面は高台を貼付。外面内面はナデ調整。高台貼付部は丁寧なナデ調整。	
353	〃	〃 〃	〃 〃	-	(3.8)	-	-	短頸壺。外面内面は回転ナデ調整。	
354	〃	〃 〃	土師器蓋	22.1	(1.7)	-	-	外面内面はナデ調整、ヘラミガキ。	
355	〃	SK11埋土	土師質土器杯	-	(1.9)	-	7.2	杯あるいは碗か。底部は円盤状高台で、切離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。内面は摩耗。	
356	〃	〃 〃	〃 碗	17.7	(3.8)	-	-	杯あるいは碗か。外面内面は回転ナデ調整で、ナデによる凹凸あり。	外面の一部にスス付着。

高田遺跡遺物観察表 16

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
357	VI	SK12 埋土	土師質土器 杯	9.5	3.1	-	6.3	底部切離しは回転ヘラ切り。外面内面は回転ナデ調整。	
358	〃	〃 〃	〃 椀	20.7	(6.6)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	外面の一部スス付着か。
359	〃	〃 〃	土師器 甕	24.7	(3.2)	-	-	外面はナデ調整。内面はヨコ方向のハケ調整。	外面はスス付着。
360	〃	SK13 埋土	〃 高杯	-	(5.9)	-	-	断面は八角形を呈し、外面はケズリ、一部摩耗。内面はナデ調整、摩耗。	精選された胎土。
361	〃	SK15 埋土	陶器 火入れ 又は香炉	10.3	7.0	-	5.4	底部は削り出し高台。内面口縁部下から外面底部まで施釉。外面に染付。	
362	〃	SD1 埋土	土師質土器 杯	-	(1.5)	-	6.0	底部切離しは回転糸切り。外面内面ともに回転ナデ調整。	
363	〃	SD2 埋土	〃 椀	-	(1.4)	-	6.8	底部外面に高台を貼付。外面は回転ナデ調整。内面は摩耗。	
364	〃	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	-	5.1	底部外面に高台を貼付。外面内面ともに摩耗。	
365	〃	〃 〃	土師器 高杯	-	(2.2)	-	-	外面内面はナデ調整。内面は摩耗あり。	
366	〃	SD6 埋土	須恵器 蓋	-	(1.7)	-	-	宝珠形のつまみを貼付。つまみ径 1.8 cm。外面には自然釉がかかる。	
367	〃	SD10 埋土	〃 杯	14.3	(3.0)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	
368	〃	〃 〃	〃 〃	-	(1.7)	-	7.9	底部に高台を貼付。底部外面は回転ヘラ切りか。外面内面は回転ナデ調整。	
369	〃	〃 〃	〃 壺	13.0	(1.7)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
370	〃	〃 〃	〃 〃	21.9	(2.1)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
371	〃	SD11 埋土	土師質土器 杯	13.8	3.9	-	8.4	底部切り離しは回転ヘラ切り。外面内面はヨコ方向のヘラミガキ。	
372	〃	SD13 埋土	須恵器 蓋	17.9	(2.2)	-	-	外面内面はナデ調整。	
373	〃	SD18 埋土	土製品 土錘	4.8	1.7	1.7	11.1	ほぼ完形。外面はナデ調整。一部指頭圧痕。径 0.5 cm の円孔。	
374	〃	SD36 埋土	須恵器 甕	26.2	(3.5)	-	-	外面はナデ調整。内面は自然釉がかかる。	
375	〃	P1 埋土	〃 蓋	-	(2.5)	-	-	宝珠形のつまみ。つまみ径 1.8 cm。外面は自然釉。内面は回転ナデ、斜位方向のナデ調整。	
376	〃	P2 埋土	土師質土器 杯	13.0	3.0	-	8.6	底部切離しは回転ヘラ切り。外面内面は回転ナデ調整。底部に板状圧痕か。	
377	〃	〃 〃	〃 〃	13.3	3.3	-	8.0	底部切離しは回転ヘラ切り。外面内面は回転ナデ調整。	
378	〃	P5 埋土	〃 椀	-	(1.6)	-	6.1	底部高台を貼付。外面内面ともに摩耗。高台内面はナデ調整。	
379	〃	P36 埋土	〃 杯	13.0	(2.4)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
380	〃	P46 埋土	須恵器 杯	-	(1.3)	-	7.2	底部外面内面ともに不定方向のナデ調整。外面に一部ヘラケズリと圧痕が残る。	
381	〃	P48 埋土	石製品 砥石	12.5	3.3	2.6	175.9	両面使用。石質は泥岩系か。風化する。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
382	VI	P70 埋土	土師器 杯	-	(1.8)	-	8.7	底部外面に高台を貼付。外面内面は一部に赤色塗彩が残る。	
383	〃	P72 埋土	須恵器 杯	12.9	3.5	-	8.0	外面内面ともに回転ナデ調整。	
384	〃	P78 埋土	土師質土器 杯	12.6	2.8	-	6.8	底部粘土紐痕か。外面は回転ナデと体部にヘラミガキ。内面は回転ナデ調整。	
385	〃	P81 埋土	須恵器 杯	-	(1.1)	-	9.4	底部に高台を貼付。外面内面はナデ調整。	
386	〃	P101 埋土	土師器 甕	-	(2.2)	-	-	長胴甕。外面はナデ調整。内面はヨコ方向のハケ目調整。	
387	〃	P102 埋土	須恵器 杯	17.2	6.3	-	10.9	底部切り離しは回転ヘラ切り。底部は高台を貼付。外面内面は回転ナデ調整。内底部は不定方向のナデ調整。	
388	〃	P104 埋土	土師器 杯	-	(1.2)	-	9.0	底部粘土紐痕か。外面は摩耗。内面は回転ナデ、一部摩耗。	
389	〃	P109 埋土	〃 皿	-	(1.6)	-	-	口縁部下内面は沈線状を呈す。外面はヘラミガキ、内面はナデと一部にヘラミガキ。	
390	〃	P113 埋土	〃 〃	17.8	2.4	-	11.0	底部高台を貼付。高台内外面はナデ調整。内面は摩耗、外面は摩耗し一部ナデ調整。	口縁端部にはスス付着。
391	〃	P123 埋土	須恵器 杯	12.3	(2.6)	-	-	外面内面ともに摩耗。一部回転ナデ調整。	
392	〃	P137 埋土	土師器 皿	17.0	1.8	-	13.7	内面は摩耗。	外面にはタール状の物質付着。
393	〃	P143 埋土	土師質土器 杯	10.8	4.3	-	6.5	底部切り離しは回転ヘラ切り。外面内面は回転ナデ調整。底部脇には工具状の圧痕。	
394	〃	〃 〃	〃 〃	10.7	3.1	-	7.8	外面は回転ナデ調整。内面は摩耗。底部切り離しは摩耗のため不明。	
395	〃	〃 埋土・包含層	〃 椀	18.4	(6.5)	-	(9.4)	底部外面に厚い高台を貼付。外面内面は回転ナデ調整。	外面内面にはタールが付着。
396	〃	〃 埋土	黒色土器 椀	-	(3.8)	-	-	外面内面ともにヨコ方向のヘラミガキ。	搬入品か。
397	〃	〃 〃	土製品 土錘	(3.3)	1.3	-	(2.4)	外面はナデ調整。	
398	〃	P156 埋土	須恵器 蓋	20.8	(1.7)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
399	〃	P161 埋土	土師器 杯	-	(2.9)	-	-	外面内面ともにヨコ方向のヘラミガキ。	
400	〃	P162 埋土	土師質土器 杯	15.0	(2.5)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
401	〃	P163 埋土	黒色土器 椀	-	(1.3)	-	7.1	内面黒色。底部外面に高台を貼付。高台周囲は回転ナデ調整。内面にはヘラミガキ。	搬入品か。
402	〃	〃 〃	須恵器 壺	18.9	(2.0)	-	-	外面は回転ナデ。内面には自然釉。	
403	〃	P164 埋土	〃 蓋	13.8	(0.6)	-	-	内面は回転ナデ。外面には自然釉。	
404	〃	〃 〃	土製品 土錘	(3.0)	2.4	2.6	(15.0)	両端部は欠損。孔径 0.7 cm。	
405	〃	P178 埋土	土師器 皿	-	(2.3)	-	-	外面は摩耗。内面は口縁部がナデ調整、ヘラミガキ。	
406	〃	〃 〃	須恵器 杯	-	(2.1)	-	-	外面内面は回転ナデ調整。	

高田遺跡遺物観察表 18

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
407	VI	P178 埋土	須恵器 蓋	13.4	(1.2)	-	-	外面と内面は回転ナデ調整。一部摩耗。	
408	〃	P181 埋土	土師器 盤	-	(3.0)	-	9.4	内面と外面は赤彩。内面は一部摩耗。外面と内面はナデ調整。	
409	〃	P188 埋土	土師質土器 杯	11.5	(2.1)	-	-	外面と内面ともに回転ナデ調整。	
410	〃	〃 〃	土師器 杯	-	(2.4)	-	9.4	外面は摩耗。内面にヘラミガキ。	杯 A
411	〃	〃 〃	須恵器 蓋	-	(1.8)	-	-	扁平な擬宝珠形のつまみ。つまみ径 2.9 cm。天井部外面はヘラケズリ、その他回転ナデ調整。内面はナデ調整、一部摩耗。	
412	〃	P189 埋土	土師器 杯	-	(4.4)	-	-	外面は摩耗。内面はナデ調整、ヘラミガキ。	
413	〃	〃 〃	〃 〃	-	(4.3)	-	-	外面はナデ調整、ヨコ方向のヘラミガキ。内面はタテ方向のヘラミガキ。	
414	〃	P192 埋土	〃 皿	20.8	(1.5)	-	-	外面は摩耗。内面はナデ調整、一部ヘラミガキか。	白色系の胎土。
415	〃	P197 埋土	〃 〃	-	(1.7)	-	-	底部外面に高台を貼付。高台外面はナデ調整。内面はナデ調整、内底部にヘラミガキ。	
416	〃	〃 〃	須恵器 皿	14.3	(2.0)	-	-	外面は回転ナデ調整。外底面はナデ調整、一部摩耗。内面は摩耗。	
417	〃	〃 〃	〃 杯	10.0	(2.9)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。	
418	〃	P198 埋土	〃 蓋	21.8	(1.5)	-	-	外面はナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
419	〃	P204 埋土	〃 〃	18.1	(1.5)	-	-	外面は天井部にナデ、一部摩耗。内面天井部他ナデ調整。	
420	〃	P213 埋土	〃 甕	-	(5.9)	-	-	外面内面ともに摩耗。頸部内面工具によるナデ調整か。	
421	〃	P242 埋土	土師器 蓋	22.4	(1.6)	-	-	外面内面ともナデ調整、ヘラミガキ。天井部は欠損。	
422	〃	P246 埋土	須恵器 蓋	13.3	(1.0)	-	-	杯蓋。高さ 4 mm のかえりが付く。外面内面は丁寧なナデ調整。	
423	〃	P249 埋土	土師器 皿	15.8	1.9	-	10.6	底部外面は粘土紐痕か。外面はナデ調整、ヘラミガキ。内面はナデ調整、ヘラミガキ。	内面スス付着。
424	〃	〃 〃	〃 〃	16.6	1.9	-	13.0	外底部に粘土紐痕。外面はナデ調整、ヘラミガキ。内面は回転ナデ調整、ヨコ方向のヘラミガキ。	
425	〃	〃 〃	〃 〃	17.8	1.8	-	14.6	外底面は粘土紐痕。外面内面ともに摩耗。	
426	〃	〃 〃	〃 〃	13.6	2.4	-	10.8	外面内面は摩耗する。	
427	〃	〃 〃	〃 杯	10.4	3.3	-	6.4	底部切離しは回転ヘラ切り。外面は回転ナデ調整、ヘラミガキ。内面は摩耗、一部ナデ調整。	杯 A
428	〃	〃 〃	〃 〃	13.8	(2.8)	-	-	口縁部下に浅い沈線。外面は回転ナデ調整、ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	
429	〃	〃 〃	〃 〃	17.4	(4.8)	-	-	外面は回転ナデ調整、ヨコ方向のヘラミガキ。内面は摩耗、回転ナデ調整、一部にヘラミガキ。	スス付着。
430	〃	〃 〃	〃 蓋	18.7	3.6	-	-	つまみ径 2.4 cm。外面はナデ調整、ヘラミガキ。内面は回転ナデ調整。	
431	〃	〃 〃	〃 甕	19.6	(6.5)	-	-	外面は口縁部にナデ調整、頸部から体部はハケ目調整。内面は口縁部ハケ目。頸部から体部はヨコ方向のハケ目とナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
432	VI	P249 埋土	土師器 甕	19.2	(6.7)	-	-	外面は口縁部ナデ調整。頸部から体部はハケ目調整。内面は口縁部にハケ目調整。頸部から体部は指頭圧痕、ナデ調整。	
433	〃	〃	〃	18.0	(5.6)	-	-	外面は摩耗。内面は口縁部にヨコ方向のハケ目調整。頸部から体部は摩耗。	
434	〃	〃	棒状鉄製品	(6.7)	(0.6)	(0.6)	(6.8)	断面は方形状。下方は断面厚薄くなる。	
435	〃	〃	金属製品 刀子	(2.9)	(0.9)	(0.6)	(2.0)	刃部のみ残存。	
436	〃	SX1 埋土	土師器 杯	13.7	4.4	-	10.0	底部外面には粘土紐痕。外面内面摩耗。一部回転ナデ調整。	
437	〃	〃	須恵器 蓋	-	(2.2)	-	-	つまみ径 1.9 cm。外面自然釉。内面は天井部に不定方向のナデ、口縁部は回転ナデ調整。	
438	〃	〃	〃 壺	-	(6.5)	-	-	外面内面には自然釉。外面内面ともにナデ調整。	
439	〃	〃	〃 甕	-	(6.0)	-	-	外面は斜位方向のタタキ目。内面はタタキ成形後、工具等によるナデ調整。口縁部は外面内面ともに回転ナデ調整。	
440	〃	SX5 埋土	黒色土器 椀	-	(2.9)	-	-	内黒椀。外面内面ともにヘラミガキ、ナデ調整。	搬入品か。
441	〃	〃	須恵器 杯	13.0	3.6	-	9.1	底部外面に粘土紐痕か。外面内面ともに回転ナデ調整。	
442	〃	〃 検出面	〃	-	(2.7)	-	10.4	底部外面粘土紐痕か。外面内面ともにナデ調整、一部は摩耗。	
443	〃	〃	〃	-	(2.0)	-	12.2	底部外面に高台を貼付し、貼付部は丁寧なナデ。外面内面ともにナデ調整。	杯 B
444	〃	〃 埋土	〃	-	(2.0)	-	8.0	底部外面に高台を貼付。外面内面は回転ナデ調整。	杯 B
445	〃	〃	〃 蓋	11.4	(1.7)	-	-	外面内面は回転ナデ調整、天井部内面は不定方向のナデ調整。	
446	〃	〃	〃	15.0	(1.6)	-	-	天井部外面は回転ヘラケズリ。基部口縁部は内外面ともにナデ調整。	
447	〃	〃	土師器 甕	-	(2.8)	-	-	長胴。外面はヨコ方向のナデ調整。内面は摩耗。	
448	〃	〃	〃 羽釜	-	(1.8)	-	-	鏝部分。外面は摩耗。	摂津型羽釜
449	〃	〃	須恵器 甕	-	(8.0)	-	-	外面内面ともにナデ調整。	
450	〃	SX6	土師器 皿か	16.8	(2.9)	-	-	赤。内外面ミガキ。口縁内端の凹線は不明瞭。胎土は特別ではない。	内面：赤褐色 断面：灰白色
451	〃	〃	〃 皿	17.2	(2.0)	-	-	内外面ミガキ、器表は平滑。薄手。	外面：明赤褐色 焼良
452	〃	〃	〃	-	(2.2)	-	14.4	赤。内面は左上がりの放射暗文か。高台接着部に2条の溝を彫る。高台端巻込み。	外面：明赤褐色 断面：灰白色 皿 B
453	〃	〃	〃	20.0	3.3	-	16.6	赤。内外面ミガキ、内底は摩耗、弧状の部分あり。体部外面下半と外底はケズリか。	内面：赤褐色 断面：浅黄褐色 皿 B
454	〃	〃	〃	20.5	3.5	-	15.7	赤。内外面ミガキ。口縁巻込み。	外面：明赤褐色 断面：灰白色 皿 B
455	〃	〃	〃	21.4	3.1	-	17.4	赤。内底周縁に連弧、体部内面左上がり放射暗文。内外面ミガキ。外面下半～底はケズリ(非回転)。全面ミガキか。口縁端巻込み。	内面：明赤褐色 断面：明褐色 皿 B
456	〃	〃	〃 盤又は高杯	22.0	(3.0)	-	-	内外面ミガキ。外面回転ミガキ。口縁端部は角を引き出して強調。赤い発色。	外面：明赤褐色 精土

高田遺跡遺物観察表 20

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
457	VI	SX6	土師器 盤	22.2	3.8	-	15.4	内面のミガキは上面観多角形或は分割的。外面は回転ケズリ後密な回転ミガキ。口縁端部明確に巻込む。	外面：明赤褐色 断面：橙色 精土
458	〃	〃	〃 皿又は盤	-	(1.7)	-	16.0	底部内外面ミガキ。外底は事前に回転ケズリ、回転ミガキか。	内面：赤褐色 断面：にぶい褐色
459	〃	〃	〃 皿か	-	(1.5)	-	15.4	赤。全面ミガキ。薄い赤彩。	外面：橙色 断面：にぶい 橙色 精土
460	〃	〃	〃 皿	(22.4)	(2.9)	-	19.7	赤。内外面ミガキ、外底ケズリ、口縁部巻込み。高台接着部に2条の溝を彫り接着。	外面：赤褐色 断面：灰白色 皿B
461	〃	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	器厚 1.0	赤。内外面ミガキ。口縁内凹線。	内面：赤褐色 断面：にぶい橙色 皿B
462	〃	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	器厚 0.7	赤。内面左上がり放射暗文、外面ミガキ。口縁巻込み。	内面：明赤褐色 断面：にぶい黄褐色 皿B
463	〃	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	-	赤。外面ミガキ、内面放射暗文痕か。口縁内細沈線。	外面：赤褐色 断面：灰白色 皿B
464	〃	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	器厚 0.9	赤。内外面ミガキ。高台接着部に2条の溝を彫って接着。一部被熱、黒変。	内面：赤褐色 断面：にぶい橙色 皿B
465	〃	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	-	赤。体部内面左上がりの放射暗文。外面ミガキ仕上げ。口縁巻込み。	外面：赤色 断面：灰白色
466	〃	〃	〃 皿又は盤	-	(3.0)	-	-	摩耗により調整不明瞭。内外面ミガキとみられる。口縁巻込み。	外面：にぶい橙色 精土、皿Bか。
467	〃	〃	〃 盤又は高杯	23.8	(2.5)	-	-	赤。内面連弧+放射暗文。外面ケズリとミガキ。赤彩の発色不鮮明。	外面：橙色 断面：にぶい黄褐色
468	〃	〃	〃 皿	-	(1.5)	-	19.2	赤。内外面ミガキ。高台接着部に2条の溝を彫って接着。	内面：明赤褐色 断面：浅黄褐色 皿B
469	〃	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	19.0	赤。内外面ミガキ、外底ケズリ。外底中央は無塗彩。高台接着部に溝を彫り接着。	内面：赤褐色 断面：淡黄色 皿B
470	〃	〃	〃 〃	-	(1.7)	-	17.0	赤。外面に化粧土残る。外底ケズリ。高台形状・接合法がI群赤彩とは異なる。	外面：にぶい赤褐色 断面：浅黄褐色 皿B
471	〃	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	18.4	赤。内外面ミガキ、内面右上りの放射暗文、へらあて痕を伴う。外底回転ケズリ。高台は角を拡張。内面黒変。	外面：明赤褐色 断面：にぶい橙色 皿B
472	〃	〃	〃 〃	-	(1.9)	-	20.3	赤。摩耗で調整痕不明瞭だが、内面に密なミガキ。高台の正確な形状も不明瞭。	内面：明赤褐色 断面：浅黄褐色 皿B
473	〃	〃	〃 〃	24.0	3.5	-	19.8	赤。内外面ミガキ。高台接着部に2条の溝を彫り接着。口縁部巻き込み。	内面：明赤褐色 断面：浅黄色 皿B
474	〃	〃	〃 〃	24.3	3.9	-	19.4	赤。内外面ミガキ、体部内面ミガキは分割的。体部外面下位は事前にケズリ。	外面：赤褐色 断面：灰白色 精土 皿B
475	〃	〃	〃 〃	24.8	(3.2)	-	(19.8)	赤。内外面ミガキ、体部下部は事前のケズリ、口縁部巻込み。高台接着部は溝を彫り接着。	外面：赤褐色 皿B
476	〃	〃	〃 〃	26.8	3.9	-	22.2	赤。内外面は摩耗。口縁部巻き込み。高台接着部に2条の溝を彫って接着か。	内面：明赤褐色 断面：浅黄褐色 皿B
477	〃	〃	〃 〃	27.3	3.5	-	20.6	赤。内底周縁に連弧、体部内面に放射暗文。内外面ミガキ。体部外面下位～底はケズリと粗ミガキ。口縁端部は巻込み。	内面：明赤褐色 断面：にぶい褐色 皿B
478	〃	〃	〃 〃	27.8	3.3	-	22.0	赤。全面ミガキ。体部下半以下は事前にケズリ。口縁部巻込み。高台端面凹。	外面：明赤褐色 断面：にぶい黄褐色 皿B
479	〃	〃	〃 〃	28.7	3.4	-	23.8	赤。内外面ミガキ、体部外面下半～底はケズリ。口縁端部巻込み。高台接着部に2条の溝を彫り接着。	内面：明赤褐色 断面：にぶい褐色 皿B
480	〃	〃	〃 〃	28.8	(1.9)	-	-	赤。内外面ミガキ。内面ミガキは粗い。左上がりの放射暗文。口縁巻込み。高台接着部に2条の溝を彫り貼付。体部短い。	内面：明赤褐色 外面：明赤褐色 皿B
481	〃	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	28.3	赤。ミガキにより滑らか。エッジの効いた細部形状。外底はミガキ前にケズリ。	外面：橙色 断面：浅黄 褐色 精良な胎土 皿B

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
482	VI	SX6	土師器皿	33.0	4.9	-	27.4	赤。内外面ミガキ。外面のミガキは粗か、外面体部下半～底はケズリ。口縁端は小さく巻込み。	外面：橙色 断面：浅黄橙色 皿 B
483	〃	〃	〃	41.6	(3.8)	-	-	赤。内外面ミガキ仕上げ。口縁内凹線。残存率が小さく、口径の不正確性大だが大径。	外面：明赤褐色 断面：灰白色
484	〃	〃	〃 杯	12.8	3.2	-	9.5	赤。全面ミガキ、外面は体部下部～底部に事前にケズリか。口縁内端面取り。口縁外面に粘土紐接合痕。	内面：明赤褐色 断面：浅黄橙色 杯 A
485	〃	〃	〃 杯又は皿	12.8	(2.2)	-	-	赤。内外面ミガキ仕上げ。口縁内沈線。	外面：赤褐色 断面：浅黄橙色 口縁内にス。
486	〃	〃	〃	13.0	2.6	-	8.0	赤。内外面ミガキ、体部はヨコ方向。外底不定方向ケズリ、へら切り又は粘土紐痕残る。口縁内凹線、外端に僅かな凹線状線。	外面：明赤褐色 精土 杯 A
487	〃	〃	〃 杯	13.5	3.0	-	10.2	外底にケズリ、周縁部は回転ケズリ。体部回転ミガキ。底部粘土紐の螺旋状痕残。底部内外面は同心円状ミガキ。	内面：明赤褐色 断面：橙色 杯 A
488	〃	〃	〃	14.5	4.0	-	10.5	赤。全面ミガキ。外面は口縁以外ケズリか。	外面：明赤褐色 断面：浅黄橙色 杯 A
489	〃	〃	〃	15.6	3.9	-	(12.4)	赤。全面ミガキ。暗文認めず。外底は事前にケズリ。口縁内端巻込み。	外面：明赤褐色 精土 杯 A
490	〃	〃	〃	14.6	(3.8)	-	-	赤。内外面ミガキ、口縁内凹線。	外面：明赤褐色 断面：浅黄橙色
491	〃	〃	〃	-	(4.6)	-	-	内外面ミガキ。	外面：橙色 精土 内面にス。
492	〃	〃	〃	-	(4.2)	-	器厚 0.7	赤。内面はミガキ + 左上がりの放射暗文。外面はミガキ。口縁巻込み。	内面：明赤褐色 断面：灰白色
493	〃	〃	〃	16.2	3.6	-	13.0	赤。内外面ミガキ。外底はケズリか、口縁浅い巻込み。	外面：赤褐色 断面：浅黄橙色 杯 A
494	〃	〃	〃	15.3	(3.6)	-	-	内外面ミガキ、回転ミガキの可能性あり。口縁端巻込み。赤い発色。	外面：明赤褐色
495	〃	〃	〃	15.8	(4.4)	-	(12.4)	赤。内外面ミガキ。外面体部下半～底部はケズリか。高台接着部に1条の溝を彫って接着。口縁端やや外反させる。	内面：明赤褐色 断面：浅黄橙色 杯 B
496	〃	〃	〃	-	(1.1)	-	-	赤。内面ミガキ、外底回転ケズリ（土器右回転）。	内面：橙色 断面：灰白色 杯 B
497	〃	〃	〃 皿又は杯	19.4	(4.0)	-	-	赤。内外面ミガキ。口縁内浅い凹線。断面は浅黄橙色と黒灰色。	内面：明赤褐色 断面：浅黄橙色
498	〃	〃	〃 皿又は高杯	20.0	(1.9)	-	器厚 0.9	赤。口縁内に左上がり放射暗文僅かに残る。下面断続ケズリ。口縁内凹線。	内面：橙色 断面：浅黄橙色
499	〃	〃	〃 蓋	-	(1.4)	-	-	赤。擬宝珠形をつまみ。つまみ径 2.8 cm。	外面：明赤褐色 断面：灰白色
500	〃	〃	〃	-	(1.7)	-	-	つまみ径 2.1 cm。	外面：赤褐色 断面：明赤褐色 精土
501	〃	〃	〃	15.2	(1.5)	-	-	赤。調整の詳細不明。口縁内に弱い凹線。	内面：明赤褐色 断面：浅黄橙色
502	〃	〃	〃	15.4	(2.5)	-	-	赤。内外面ミガキ、口縁内に凹線。石英等の微細粒多含。	外面：赤褐色 断面：にぶい黄橙色
503	〃	〃	〃	-	(1.5)	-	-	口縁端は面をもって下突。	外面：明赤褐色 断面：明赤褐色 精土
504	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	-	赤。内外面ミガキ。内面周縁事前にケズリ。	外面：明赤褐色 断面：浅黄橙色
505	〃	〃	〃	27.8	(2.9)	-	-	赤。内面連弧暗文が三重以上に巡る。外面天井部は分割的ミガキか。口縁巻込む。	内面：明赤褐色 断面：浅黄色
506	〃	〃	〃	30.4	(2.1)	-	-	赤。天井外面ケズリ。化粧土剥離著。口縁端は巻込む。やや被熱か、桃色化。	内面：赤褐色 断面：淡橙色

高田遺跡遺物観察表 22

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
507	VI	SX6	土師器 高杯か	16.4	(2.6)	-	器厚 1.0	内外面ミガキ。外下面に若干の凹凸。口縁内凹線。粘土紐接合部で剥離。赤色風化礫含。内外黒変・赤変。	外面：灰褐色 断面：浅黄橙色 精土
508	〃	〃	〃 高杯又は蓋	16.8	(1.6)	-	-	内外面多方向の密なミガキ。外面にヘラ切り痕僅かに残る。	内面：明赤褐色 断面：橙色
509	〃	〃	〃 高杯	-	(2.0)	-	-	内面ミガキ仕上げとみられる。赤礫多含、希に6mm大の礫含。2次被熱か。	外面：にぶい褐色 断面：淡赤橙色
510	〃	〃	〃 〃	-	(2.6)	-	-	赤。内外面ミガキ。内面は暗文の可能性。外面は事前に断続的なケズリ。脚接合部に5条の溝を彫る。脚部剥離。	外面：橙色 断面：灰白色
511	〃	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	-	円筒状の脚部は回転ナデ仕上げ。	外面：明赤褐色 断面：灰褐色
512	〃	〃	〃 高杯か	-	(2.0)	-	11.0	赤。下端外面スス。	外面：橙色 断面：灰白色
513	〃	〃	不明 高杯	-	(4.5)	-	-	脚部に透かし、孔数不明。	外面：橙色 断面：橙色
514	〃	〃	須恵器 皿又は高杯	13.9	(1.6)	-	-	内面ミガキで極平滑。下面は丁寧な回転ケズリ。	内面：黄灰色
515	〃	〃	〃 〃	26.0	(2.3)	-	-	内面と外面は摩耗。	外面：灰白色 焼不良 皿 B
516	〃	〃	〃 杯	11.6	3.3	-	9.2	外底は中央にヘラ切りの名残。押圧、ケズリ、ナデ。全体的に丸みを有する形。	内面：褐灰色 杯 A
517	〃	〃	〃 〃	12.8	(2.9)	-	-	回転ナデ調整。	外面：浅黄色
518	〃	〃	〃 〃	-	(3.2)	-	-	丁寧な仕上げ。	外面：黄灰色 精土
519	〃	〃	〃 〃	12.9	3.6	-	10.7	外底の刻みは焼成前かとみられる。内底部は中心を通る雑なナデ。底部下垂。総じて厚手、稚拙。若干の火襷。	外面：灰白色 断面：灰白色 焼不良 杯 A
520	〃	〃	〃 〃	13.8	3.8	-	11.3	底部は下方にやや膨らむ。外底はナデ処理とみられる。	内面：灰白色 焼不良 杯 A
521	〃	〃	〃 〃	14.0	4.2	-	10.1	底部は下方にやや出て丸みがある。内面は滑らか、体部と底部の境に回転ナデ。	外面：灰白色 焼不良 杯 A
522	〃	〃	〃 〃	-	(2.5)	-	11.6	立上がり外形は丸みをもつ。	外面：灰白色 焼不良 杯 A
523	〃	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	10.6	外底ヘラ切り痕残る。内面外面は摩耗。	内面：灰白色 外面：灰黄色 焼不良 杯 A
524	〃	〃	〃 〃	-	(3.5)	-	10.6	底部下垂、体部はやや丸みを有す。外底ヘラ切り痕、内底回転ナデ痕。瓦質焼成。	外面：黄灰色 断面：灰黄色 杯 A
525	〃	〃	〃 〃	-	(1.8)	-	7.8	高台は面取りし、内角を三角形に突出させる。全体に薄手。内底は断続ナデ。内底や各所の隅部に橙色土が残留。	外面：灰色 杯 B か。
526	〃	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	10.1	内底はナデ。	外面：にぶい黄橙色 杯 B
527	〃	〃	〃 〃	-	(2.1)	-	9.2	外底回転ケズリ、内底ナデ。高台は角部を強調。高台内側に爪状圧痕。全体に丁寧。	外面：灰黄色 精土 杯 B
528	〃	〃	〃 〃	12.3	3.6	-	8.8	外底は回転ケズリ+ナデ。内底ナデ。高台は端部を鋭く仕上げ。全体的に丁寧。	外面：黄灰色 杯 B
529	〃	〃	〃 〃	13.0	4.4	-	9.7	高台高6mmで端面は明確に凹む。外底ヘラ切り後周縁をナデ、爪状圧痕。内底断続ナデ。	内面：灰黄色 外面：灰黄色 杯 B
530	〃	〃	〃 〃	-	(2.3)	-	10.7	底部内外面ナデ仕上げ。高台内角は尖る。	外面：黄灰色
531	〃	〃	〃 〃	-	(2.0)	-	9.8	底部内外面ナデ。底部に若干の爪形圧痕。高台端はやや拡張。概して丁寧。	外面：黄灰色 杯 B

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
532	VI	SX6	須恵器杯	13.5	4.1	-	9.2	体部下位は回転ナデ又はケズリ。高台は角端部を強調。底部内外面ナデ仕上げ。内底部はナデ。	外面：灰黄褐色 焼やや不良 杯B
533	〃	〃	〃	12.2	(3.6)	-	-	口縁部巻込み。	外面：灰黄色 杯B
534	〃	〃	〃	13.7	4.0	-	11.7	外底回転ケズリ，内底ナデ。高台端面は若干凹み，内角を引き出す。	外面：灰黄色
535	〃	〃	〃	13.8	3.5	-	9.6	高台は細いが，外方へ蹴り出す。内底はナデ仕上げか。全体的に比較的丁寧。	外面：灰白色 焼不良 杯B
536	〃	〃	〃	15.3	3.8	-	10.7	回転ナデ調整及び底部ヘラ切り時の回転方向は時計回り。内底多方向ナデ，外底ヘラ切り後部分的にナデ。高台端面凹む。	内面：浅黄色 外面：灰黄色 焼やや不良 杯B
537	〃	〃	〃	-	(2.5)	-	11.7	高台断面半月形。底部内外面丁寧な仕上げ。全体に丁寧。高台を除いた下部は緩やかに丸みを有す。	外面：灰色 精土 杯B
538	〃	〃	〃	-	(1.6)	-	13.7	内底は条痕を残すナデ。	外面：灰白色 焼不良 杯B
539	〃	〃	〃	19.2	(6.9)	-	-	下端は底部に向かって屈曲する部分か。	外面：褐灰色
540	〃	〃	蓋	-	(2.2)	-	-	つまみ径1.9cm。天井部外面ケズリ，内面ナデ。屈曲して口縁部に向かう。	外面：黄灰色
541	〃	〃	〃	12.4	(1.7)	-	-	天井内面は極めて滑らか，黒色付着物。転用硯か。外面回転ケズリ，降灰。口縁外端は面取り。	内面：褐灰色
542	〃	〃	蓋か	13.3	(1.7)	-	-	内面と外面は回転ナデ調整。	外面：にぶい黄橙色
543	〃	〃	蓋	14.4	(1.5)	-	-	天井部外面は回転ケズリ，内面に多方向ナデ調整。平滑。	外面：黄灰色 精土
544	〃	〃	〃	13.8	(1.4)	-	-	内面ナデ仕上げ。口縁内，焼成時変色。外面降灰。	外面：灰黄色
545	〃	〃	〃	14.8	(1.6)	-	-	天井は，外面ケズリ，内面ナデ。口縁端は僅かに段をなして下屈。	外面：黄灰色
546	〃	〃	〃	14.8	(2.0)	-	-	口縁端の下屈は大振り。内面は丁寧なナデ。天井外面はケズリ。口縁下部が淡色。	外面：黄灰色
547	〃	〃	〃	14.8	1.8	-	-	つまみ径2.4cm。天井外面の1/2に回転ケズリ。天井内面ナデとみられる。	外面：灰黄色 焼不良
548	〃	〃	〃	15.2	(2.1)	-	-	天井外面回転ケズリ。内面丁寧なナデ。口縁端は断面三角形で明確に下突。	外面：黄灰色
549	〃	〃	〃	15.2	(1.4)	-	-	口縁端は明瞭に下屈。口縁端のみ暗色。	外面：灰白色 焼不良
550	〃	〃	〃	-	(0.9)	-	-	口縁外端に沈線。	外面：灰色
551	〃	〃	〃	-	(1.7)	-	-	天井外面は全面ケズリ。口縁部はシャープに作る。天井内面は断続的なナデ。	外面：黄灰色
552	〃	〃	〃	15.4	2.5	-	-	天井外面の1/2以上に回転ケズリ。天井内面タテ・ヨコ方向のナデ。口縁内面回転調整痕。	内面：灰黄色 外面：灰色 焼やや不良
553	〃	〃	〃	15.8	2.3	-	-	つまみ径2.8cm。内面中央は極平滑。天井周縁部に沿って多角形状のナデ。天井外面はケズリか。口縁端部は下方へ引き出す。	内面：灰オリーブ色 外面：灰色
554	〃	〃	〃	-	(1.3)	-	-	つまみ径2.5cm。	断面：灰白色 焼やや不良 比較的精土
555	〃	〃	〃	15.2	(1.7)	-	-	口縁端は鋭い面取り。天井外面やや雑なナデ。歪みあり。口縁下部が濃色。	外面：黄灰色
556	〃	〃	〃	15.7	(1.4)	-	-	丁寧な仕上げ。	外面：黄灰色

高田遺跡遺物観察表 24

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
557	VI	SX6	須恵器蓋又は高杯	-	(1.8)	-	器厚 0.9	外面はナデ仕上げ。内面は中央部は極めて平滑、硯転用の可能性。	外面：灰黄褐色
558	〃	〃	〃蓋	15.7	(2.6)	-	-	天井部は外面回転ケズリ、内面ナデ。口縁端の屈曲は大きく明瞭。	外面：褐灰色
559	〃	〃	〃	16.7	(2.1)	-	-	天井部は外面回転ナデ、内面ナデ仕上げ。口縁内面に回転擦痕。	外面：灰黄褐色
560	〃	〃	〃	17.9	(1.2)	-	-	天井部は外面ケズリ、内面ナデ。口縁外端面凹状。	外面：灰黄褐色
561	〃	〃	〃	15.9	(1.6)	-	-	口縁は薄手で、端部を巻込むように下屈。内面はハケ状痕。外面はナデ仕上げ。	外面：灰黄色
562	〃	〃	〃	16.3	(2.1)	-	-	天井部外面 2/3 に回転ケズリ、火襷。	外面：にぶい黄橙色 焼不良
563	〃	〃	〃高杯	-	(4.1)	-	6.9	白色粒含。	外面：灰黄色 生焼け
564	〃	〃	土師質土器杯	-	(3.9)	-	5.9	底は当初、厚さ 0.8 cm の円盤か。外底螺旋状ヘラ切り痕。火山ガラス含。	外面：明赤褐色 精土
565	〃	〃	黒色土器杯又は椀	14.1	(1.6)	-	-	内黒、内面のみミガキ。長石等の微細粒のみ含む。搬入品か。	外面：にぶい黄橙色 断面：褐灰色 焼良
566	〃	〃	土師器鍋	22.7	(5.6)	-	-	外面タテハケ痕。チャートや泥岩の円礫含。胎土軟。非赤であろう。	内面：にぶい橙色 体部 外面ススケ 胎土 I 群
567	〃	〃	〃	23.7	(9.4)	-	-	体部外面、口縁～頸部内にハケ痕。内面のハケ痕は弱くナデ消す。口縁端僅かに玉縁状。口縁僅かにススケ。	外面：にぶい黄橙色 焼やや不良 胎土 I 群
568	〃	〃	〃	28.8	(8.5)	-	-	内外面指頭圧痕、外面ハケ。口縁内端凹線。	外面：浅黄橙色 断面：灰白色 焼不良 胎土 I 群
569	〃	〃	〃	30.6	(7.8)	-	-	外面ハケ、口縁～頸部内面ヨコハケ、外面ヨコナデで外折させ、成形。体部内面、板ナデ後、ナデ。口縁端断ち落とし、内端凹む。	内面：にぶい黄褐色 胎土 I 群 外面ススケ
570	〃	〃	〃鍋 (把手)	-	(4.6)	-	-	赤。化粧土僅かに残る。手捻りで成形。	外面：橙色 胎土 I 群
571	〃	〃	〃	-	(2.3)	-	-	赤。接合部で剥離。つまんで成形。	外面：赤褐色 断面：灰白色
572	〃	〃	〃甕	13.8	(3.0)	-	-	口縁内面は粗目ハケ後、弱いナデ。外面はヨコナデ仕上げ。	外面：にぶい黄橙色 甕 D
573	〃	〃	〃	-	(4.4)	-	-	胴部外面粗目タテハケ。内面調整痕なし。口縁端は断ち切り、端面やや凹む。	外面：明赤褐色 胎土 II 群 硬質
574	〃	〃	〃	20.4	(10.5)	17.1	-	外面タテハケ。口縁～頸部は内面にヨコハケ、外面ヨコナデで外折させ成形。体部内面ナデ。口縁外端面取り、内端凹状。	外面：にぶい橙色 胎土 I 群
575	〃	〃	〃	21.2	(12.4)	20.2	-	外面は全体的にススケ残。内面は黒化。口縁内面のみ黒化なし。	外面：にぶい黄橙色 胎土 I 群
576	〃	〃	〃	21.6	(3.9)	-	-	外面タテハケ、内面は口縁～頸部ヨコハケ口縁部ヨコナデ。口縁端は肥厚させ、内側に段。	外面：灰黄褐色 胎土 I 群 内外にススケ
577	〃	〃	〃	22.2	(11.5)	-	-	外面タテハケ、口縁～頸部は、内面にヨコハケ、体部ナデ。外面ヨコナデで外折させ、成形。口縁外端面取り、内端弱い凹み。	外面：にぶい黄橙色 胎土 I 群
578	〃	〃	〃	23.7	(6.8)	-	-	外面体部・内面口縁～頸部にハケ、口縁外面 2 段ヨコナデ。口縁端部やや玉縁状、内面浅い沈線。	内面：にぶい黄橙色 各所赤変 甕 D
579	〃	〃	〃	26.3	(6.8)	-	-	外面タテハケ。口縁～頸部は内面にヨコハケ、外面ヨコナデで外折させ成形。体部内面ナデ。口縁外端面取り、内端凹む。	内面：にぶい橙色 胎土 I 群 上部赤変
580	〃	〃	〃	25.6	(14.0)	26.0	-	体部外面、口縁内面に粗目のハケ。口縁外面ヨコナデ。体部内面のタテ方向条痕は板ナデ等の痕か。	外面：橙色 焼やや良
581	〃	〃	〃	26.5	(7.0)	24.8	-	外面タテハケ。口縁～頸部は、内面にヨコハケ、体部ナデ。外面ヨコナデで外折させ、成形。口縁外端面取り、内端凹む。	外面：にぶい黄橙色 胎土 I 群

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
582	VI	SX6	土師器甕	12.3	(4.7)	-	-	体部外面タテ方向、口縁・頸部内面ヨコ方向の粗目ハケ、口縁内外面はヨコナデで消す。	外面：明赤褐色 胎土Ⅲ群 甕B
583	〃	〃	〃	13.5	(2.9)	-	-	花崗岩由来とみられる角礫多含。	外面：明赤褐色 断面： 黄灰色 胎土Ⅲ群 甕B
584	〃	〃	〃	23.6	(7.2)	-	-	内外面粗目のハケ。口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ。口縁上端面やや凹む。	外面：明赤褐色 胎土Ⅲ群 甕B
585	〃	〃	〃	24.0	(4.8)	-	-	外面斜方向の粗いハケ、口縁～頸部内面はヨコハケ後、ナデ消す。口縁外面2段ヨコナデ。	外面：にぶい橙色 胎土Ⅲ群 内面ススケ 甕B
586	〃	〃	〃	22.8	(2.7)	-	-	口縁端面ヨコナデで凹む。口縁部やや内反、2段のヨコナデ。花崗岩破砕礫多含。	外面：にぶい赤褐色 焼堅 胎土Ⅲ群 甕B
587	〃	〃	〃	25.7	(3.6)	-	-	口縁内粗目のハケ、口縁内外面ヨコナデ。硬質。	内面：明赤褐色 胎土Ⅲ群 甕B
588	〃	〃	〃	17.6	(7.0)	-	-	チャート円粒含む。	内面：にぶい黄橙色 胎土Ⅰ群 外面ススケ
589	〃	〃	〃	21.2	(4.0)	-	-	内面ナデ。外面上胴部にタテハケ残る。口縁内面の凹線をヨコナデで潰す。内面黒色物付着。	外面：にぶい黄橙色 胎土Ⅰ群 甕D
590	〃	〃	〃 器形不明	25.5	(7.1)	-	器厚 1.3	口縁内・頸部外面粗目のハケ。頸部内面ヨコ方向のケズリ。	内面：灰黄褐色 外面： 褐灰色 胎土Ⅰ群 外面 及び口縁内面ススケ。
591	〃	〃	製塩土器	-	(3.6)	-	-	内面布目痕。口縁部剥離。砂岩円礫等多含。	内面：橙色 断面：黄灰色
592	〃	〃	土師器甗	-	(5.5)	-	15.4	内外面ハケ痕残る。下端は丸く成形。	外面：にぶい黄褐色
593	〃	〃	〃 竈	-	(13.4)	-	器厚 0.9	外面はナデ+粗目のタテハケ。内面はタテ方向のナデ。幅6.5cmの粘土帯を接合し製作。内外面被熱赤変。石英・長石角粒含む。	外面：浅黄褐色 断面：にぶい黄褐色
594	〃	〃	〃	-	(15.6)	-	-	鋳部？外面ハケ後ナデ、内面ナデ、端部強いヨコナデ。接合部はナデで圧着。断面被熱変色。チャート円礫含む。	外面：にぶい橙色 内面ススケ
595	〃	〃	〃 甕か	34.8	(2.0)	-	-	赤。口縁内から口縁端外側に赤彩。口縁裏は仕上げ雑。口縁端は角部をやや引き出して強調。接合部で折損。泥岩円礫等多含。	内面：明赤褐色 甗鋳の可能性あり
596	〃	〃	須恵器壺	-	(3.4)	-	5.6	下部回転ケズリ、高台端面凹む。	外面：黄灰色
597	〃	〃	〃 甕か	20.0	(4.2)	-	-	口縁内縁に貼付する細い突帯を施す。口縁部は2段の回転成形痕。	外面：灰黄褐色
598	〃	〃	〃 甕	21.6	(2.7)	-	-	口縁端部はヨコナデで強調。	外面：灰黄色
599	〃	〃	〃	-	(3.0)	-	-	口縁部ヨコナデ、端部はやや肥厚するが、丸く仕上げ。上端面の所々に欠けあり。	外面：黄灰色
600	〃	〃	〃	-	(5.2)	-	-	内面、頸部直下まで当て具痕。口縁部折損。	外面：暗オリブ灰色 断面：灰褐色
601	〃	〃	〃	-	(7.2)	-	器厚 0.6	外面は格子目タタキ、ハケ調整。内面は同心円当て具痕。	外面：灰色
602	〃	〃	〃	-	(7.4)	-	器厚 0.7	内面は放射状等の当て具痕。外面はタタキ後、交差するハケ痕。	外面：灰黄色
603	〃	〃	〃	-	(5.4)	-	器厚 1.0	内面は青海波状当て具痕。外面は平行タタキ痕。内面下部に自然釉溜まる。	内面：オリブ黒色 外面：褐灰色
604	〃	〃	〃	-	(9.8)	-	器厚 0.8	外面は平行タタキ後、粗い板ナデか。内面は円礫を当て具としたか。	外面：灰黄褐色
605	〃	〃	〃	-	(11.5)	-	器厚 0.6	外面は綾杉状タタキ。内面は当て具痕をナデ消す。	外面：黄灰色
606	〃	〃	土製品 土錘	(4.7)	1.5	1.6	(11.1)	孔径0.6cm	外面：灰黄色

高田遺跡遺物観察表 26

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	孔径	底径		
607	VI	SX6	銅製品 鈍尾	(2.0)	(1.8)	(0.3)	残厚 0.18	全面に錆、裏側は錆による荒れあり。表側周縁の稜は比較的明瞭。裏側の1箇所には鋳足跡か。	
608	〃	〃	鉄製品 刀子	20.2	2.3	-	35.6	茎後端は欠失か。2箇所折損。厚さ0.6cm。	
609	〃	〃	〃 紡錘車	復元長 30.7	全幅 4.7	-	61.7	円板径4.7cm、厚さ0.6cm、軸は太さ0.45～0.65cm。軸先端は尖り、上端はやや膨らむか。6箇所折損。	
610	〃	〃	鉄器	(7.8)	(0.8)	(0.5)	8.6	基部切損。やや括れる部分あり。	
611	〃	〃	鉄滓	3.1	3.3	2.3	31.6	上半に大きな気泡が集中。1側面が面をなす。重量感あり。	
612	〃	SX9 埋土	磁器 皿	28.8	4.8	-	15.8	染付の輪花大皿。底部は削り出し高台。内面は雲と鶴。底部外面に目跡が残る。離砂が付着。	
613	〃	〃 〃	〃 〃	13.3	3.5	-	8.9	染付の輪花皿。型紙摺か。底部蛇ノ目凹高台。内面見込みに5箇所の目跡。	
614	〃	〃 〃	〃 碗	10.2	5.8	-	4.2	染付の丸形碗。外面に草花文、内面見込みは壽が崩れた文字か。高台畳付けは露胎。	瀬戸焼か。
615	〃	〃 〃	陶器 灯明皿	6.4	4.6	-	4.0	底部切り離しは回転糸切り。底部は露胎。その他は褐釉。口縁部の一部にタール付着。	仏飯器か。
616	〃	〃 〃	磁器 火鉢	16.0	19.7	-	19.3	口縁部から高台畳付けまで施釉。外面に型紙摺による人物・植物・雷文などの染付。内面見込みに「ヤ」の墨書か。	
617	〃	〃 〃	陶器 瓶	-	(20.0)	16.5	8.4	底部は削り出し高台。高台脇まで黒褐色釉。高台内面は露胎。	
618	〃	〃 〃	石製品 硯	8.1	4.7	1.1	(86.5)	粘板岩系。海部側外面に線刻による文様。	
619	〃	〃 〃	銭貨	直径 2.5	内径 2.0	孔径 0.6	2.8	寛永通宝。裏面は無文。	
620	〃	〃 〃	〃	直径 2.2	内径 1.8	孔径 0.6	1.6	寛永通宝。裏面は無文。	
621	〃	SX10 埋土	磁器 皿	30.2	4.8	-	17.6	八角皿。底部削り出し高台。外面唐草文。内面口縁部に植物、見込みに波・船・雷文。底面に墨書。「玩」銘あり。	御荘焼か。
622	〃	SX13 埋土	瓦	-	-	-	-	□に「清」の刻印銘。	
623	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	□に「山兵」の刻印銘。	
624	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	「石忠」の刻印銘か。	
625	〃	SX17 埋土	磁器 碗	-	(3.5)	-	5.9	染付碗。底部削り出し高台。畳付けは露胎。高台見込みに「茶」の銘。	能茶山焼
626	〃	〃 〃	陶器 甕	30.2	(13.1)	-	32.4	外面内面ともに褐釉。外面は口縁下は沈線状を呈する。内面は回転ナデ調整。	
627	〃	〃 〃	瓦	-	-	-	-	軒平瓦。唐草文を配す。「石忠」の刻印銘。	
628	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	軒平瓦。唐草文を配す。「石忠」の刻印銘。	
629	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	軒平瓦。「○」の刻印銘。	
630	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	「石忠」の刻印銘	
631	〃	〃 〃	〃	-	-	-	-	「石忠」の刻印銘	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
632	VI	SX18 埋土	瓦	-	-	-	-	軒平瓦。唐草文を配す。□に「王我」か。	
633	〃	〃	〃	-	-	-	-	軒平瓦。唐草文を配す。□に「野清」か。	
634	〃	SX22 埋土	磁器 碗	11.2	6.6	-	6.6	染付碗。高台内面見込みに「茶」の銘。外面に梅花文。内面見込みに鷺の文様。高台畳付けは露胎。	
635	〃	SX23 〃	陶器 羽釜	-	(6.1)	-	8.0	外面に鏝が巡り、鏝部分は施釉。鏝より下方は露胎。内面回転ナデ調整。外面側面には墨書あり。	
636	〃	〃	磁器 皿	14.3	4.3	-	9.1	輪花皿。底部蛇ノ目凹高台で中央部に銘あり。外面は草花、内面に唐草文、見込みに波文。	肥前系磁器V期(1780～1860年代)
637	〃	SX26 埋土	陶器 碗	12.0	7.5	-	5.6	底部削り出し高台。内面見込みに4箇所の目跡が残る。高台以外は施釉。	
638	〃	SX27 埋土	磁器 碗	11.3	6.5	-	6.1	染付の広東形碗。外面に草花文。内面見込みに文様あり。	目跡か。溶着痕あり。
639	〃	〃	陶器 鉢	15.0	7.6	-	5.8	輪花鉢。底部削り出し高台。内面と外面下半部に施釉。釉薬は白濁化する。	
640	〃	〃	煙管	9.9	1.0	1.0	15.2	吸口。先端は細いつくり。	
641	〃	SX28 埋土	陶器 鉢	34.2	11.2	-	17.2	底部に墨書。口縁部0.7×0.6cmの長方形孔。	
642	〃	〃	〃 播鉢	34.9	13.2	-	17.4	口縁部肥厚。内面全面に播目。	
643	〃	包含層	土師器 高杯	-	(9.8)	-	-	外面は八角形に面取り。外面内面は摩耗のため調整は不明瞭。	
644	〃	〃	〃 蓋	17.7	(1.8)	-	-	外面はナデ調整、ヘラミガキ。内面は摩耗。	
645	〃	〃	土師質土器 杯	10.3	3.2	-	7.1	底部切り離しは回転ヘラ切り。外面は回転ナデ調整。内面は摩耗、内底部は凹凸が残る。	
646	〃	〃	土師器 杯	15.0	(4.1)	-	-	外面内面ともにナデ調整。ヘラミガキの単位不明。	
647	〃	〃	土師質土器 椀	-	(2.0)	-	6.0	底部外面高台を貼付。高台外面内面がナデ調整。内面は回転ナデ調整。凹凸が残る。	一部スス付着。
648	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	6.1	底部外面に高台を貼付。外面内面ともに回転ナデ調整。	
649	〃	〃	〃 皿	-	(3.5)	-	6.3	底部切り離しは回転糸切り。外面内面はナデ調整。内面にはナデによる凹凸が残る。底面中央に径6～7mmの穿孔あり。	柱状高台
650	〃	〃	土師器 皿	-	(2.1)	-	-	外面内面は赤色塗彩、ヨコ方向のヘラミガキ。内面は一部摩耗。	
651	〃	〃	土師質土器 椀	-	(2.3)	-	7.0	底部外面は高台を貼付。外面内面は摩耗。	
652	〃	〃	土師器 皿	15.6	1.5	-	12.9	底部外面粘土紐痕。外面内面ともナデ調整、ヘラミガキ。底部中央に「□木中山」。	
653	〃	〃	〃	26.5	1.7	-	22.6	外面内面はナデ調整、ヘラミガキ。	
654	〃	〃	土師質土器 皿	10.5	1.9	-	7.0	底部切り離しは摩耗のため不明。外面内面は回転ナデ調整。	
655	〃	〃	土師器 皿	-	(2.6)	-	10.7	外面内面に赤色塗彩。高台外面内面にナデ調整。内面は摩耗。	皿B
656	〃	〃	〃	-	(2.1)	-	12.0	赤色塗彩。外面底部はナデ、体部はナデ調整とヘラミガキ。内面は摩耗。	皿B

高田遺跡遺物観察表 28

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
657	VI	包含層	土師器 羽釜	22.5	(7.6)	-	-	口縁部下半に断面方形の鑊が巡る。外面はナデ調整と指頭圧痕、胴部にタテ方向のハケ目調整。内面はナデ調整。	
658	〃	〃	〃 〃	21.6	(7.0)	-	-	外面はナデ調整、胴部タテ方向のハケ目調整と指頭圧痕。内面は口縁下に強いナデ調整。その他ナデ調整。	摂津型羽釜
659	〃	〃	〃 〃	22.2	(6.2)	-	-	口縁下外面に鑊が巡る。外面はナデ調整、指頭圧痕。内面はナデ調整。	摂津型羽釜
660	〃	〃	須恵器 蓋	-	(1.8)	-	-	宝珠形をつまみ。つまみ径 1.6 cm。外面内面はナデ調整。	
661	〃	〃	〃 〃	13.2	(2.4)	-	-	つまみ径 4.6 cm。環状をつまみ。外面天井部ヘラケズリ後ナデ調整。内面ナデ調整、天井部は使用痕跡ありか。	
662	〃	〃	〃 〃	13.2	2.2	-	-	つまみ径 4.8 cm。環状をつまみ。外面には自然釉、内面はナデ調整。	
663	〃	〃	〃 〃	20.4	(2.4)	-	-	外面内面ともに回転ナデ調整。外面は一部摩耗。	
664	〃	〃	〃 杯	-	(1.3)	-	9.0	底部高台を貼付。外面内面はナデ調整。底部外面に「□木」。	杯 B
665	〃	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	-	外面はヘラケズリ、ナデ調整。内面は不定方向のナデ調整。外面「×」の線刻あり。	
666	〃	〃	〃 〃	-	(1.4)	-	11.0	外面内面ともに回転ナデ調整。	杯 B
667	〃	〃	〃 椀	-	(1.5)	-	6.9	円盤状高台。底部切り離し回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。	椀 B
668	〃	〃	〃 壺	-	(4.8)	-	-	外面には自然釉。内面は回転ナデ調整。	
669	〃	〃	〃 甗	-	(6.8)	-	-	外面内面は自然釉。外面内面はナデ調整。	
670	〃	〃	〃 甗	-	(5.5)	-	-	口縁部外反。外面には自然釉。内面は回転ナデ調整。	
671	〃	〃	〃 壺	-	(4.0)	-	-	口縁端部は下方に拡張。外面内面はナデ調整。外面頸部に斜位方向の圧痕あり。	
672	〃	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	-	垂下形縁帯状口縁。外面はタタキ目。内面はナデ調整。	
673	〃	〃	〃 甗	34.4	(8.1)	-	-	口縁端部は上下に拡張する。外面と内面は回転ナデ調整。内面には当て具による段差が生じる。	
674	〃	〃	〃 〃	18.3	(6.9)	-	-	口縁部外面と内面は回転ナデ調整。頸部から体部外面は平行タタキ後ナデ調整。内面は同心円状のタタキ後ナデ調整。	
675	〃	〃	〃 〃	-	(9.6)	-	-	外面はタタキ後、ハケ目。内面はタタキ目。内面に赤色顔料付着。	
676	〃	〃	〃 甗	-	(4.0)	-	-	外面はナデ調整。内面もナデ調整。	
677	〃	〃	緑釉陶器 皿	-	(1.4)	-	5.9	内面外面は全面施釉。内面にはミガキが残る。京都近郊産か。	
678	〃	〃	緑釉陶器	-	(1.8)	-	-	内面外面は摩耗する。	
679	〃	〃	灰釉陶器 皿	-	(1.6)	-	-	段皿。外面内面は回転ナデ調整。	K90 窯式段階か。
680	〃	〃	瓦	(11.4)	(6.1)	2.4	-	平瓦。凸面に縄目痕。凹面は摩耗。	
681	〃	〃	〃	(6.9)	(6.0)	2.2	-	表面はケズリ、ナデ調整。裏面には縄目痕が残る。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
682	Ⅵ区	包含層	土製品 土錘	6.1	2.9	2.6	41.4	孔径 0.8 cm。管状土錘。中央部に最大径をもつ。ナデ調整と指頭圧痕。	
683	〃	〃	石製品 石包丁	6.4	4.7	0.8	30.0	側縁部1箇所に抉りを設ける。刃部残存する。	泥岩系か。
684	〃	検出面	鉄製品 刀子	(15.1)	1.2	0.4	(20.9)	刃部は残る。基部は断面方形状を呈する。	
685	〃	包含層	碗状鉄滓	6.5	4.8	4.1	126.8	-	
686	〃	表採	陶器 瓶	-	(5.2)	-	8.6	内面は回転ロクロ成形により段が生じる。底部外面は露胎。底部は墨書あり。	
687	〃	〃	焙烙	51.0	(4.4)	-	-	外面と内面はナデ調整、指頭圧痕、外面には工具痕か。	
688	〃	〃	瓦	-	-	-	-	□に野清の刻印銘。	
689	〃	〃	〃	-	-	-	-	□に中の刻印銘か。	
690	〃	〃	銭貨	直径 2.1	内径 1.8	孔径 0.6	2.0	寛永通宝	

高田遺跡遺物観察表 30

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
691	Ⅶ-1	P7	須恵器 皿	12.8	1.5	-	9.0	薄手。	外面：灰白色
692	〃	P13	〃 〃	18.0	1.9	-	12.7	外底回転ケズリ。口縁端面面取り。表面は瓦質状で、色ムラあり。	内面：黄灰色 断面：浅黄色
693	Ⅶ-2	SK1	〃 蓋	18.9	2.9	-	-	つまみ径 2.8 cm。天井外面は弱い回転ケズリとナデ調整。内面は丁寧なナデ。口縁端のかえりが明瞭。中心のやや左に墨書。	外面：にぶい橙色 全体に還元色
694	〃	SK2	〃 杯	-	(0.9)	-	10.0	外底丁寧なナデ、中心にヘラ痕がへそ状に残る。外底中心の左上に墨書。	外面：灰黄色 杯 A
695	〃	〃	土師器 皿	19.6	1.9	-	16.3	内外面密なミガキ。口縁端巻込み。	外面：橙色
696	〃	〃	〃 〃	-	(2.9)	-	19.0	体部内外面ミガキ。	外面：橙色 破断部スケカ。皿 B か
697	〃	〃	須恵器 皿	17.2	2.1	-	16.0	外底回転ケズリ。内面火摺。	外面：にぶい黄橙色
698	〃	SK4	〃 杯	-	(1.9)	-	9.0	内外底丁寧なナデ仕上げ。高台断面脚状。全体に整美。	外面：灰色 杯 B
699	〃	SK10	〃 蓋	13.4	2.4	-	-	つまみ径 2.2 cm。天井内外面ナデ。やや厚手。天井内面に刻印か。	外面：灰黄色
700	〃	SK13	土師器 高杯	-	(2.6)	-	-	赤。上面著しく摩耗。外面に赤彩残る。脚接合部は溝を彫る。	外面：橙色 断面：にぶい黄橙色
701	〃	〃	〃 甌か	-	(3.9)	-	-	外面ハケ痕。端部はヨコナデで僅かに玉縁状に成形。内面ナデ。砂岩円粒、チャート含。	外面：橙色
702	〃	SK19	須恵器 杯か	-	(2.0)	-	-	平底か。外面に薄い自然釉。	外面：黄灰色
703	〃	SK21	土師器 皿又は高杯	-	(1.3)	-	-	内外面は摩耗。内外面にミガキか。	外面：橙色 皿 B か高杯。
704	〃	SK22	〃 甌	-	(4.6)	-	-	内面は細目のヨコハケか。外面にヨコナデ。破断部赤変。	外面：にぶい橙色 チャート円礫等多く含む。
705	〃	SD1	〃 〃	-	(3.8)	-	-	口縁内、斜方向の粗いハケ、その後2段のヨコナデ。	外面：にぶい赤褐色 花崗岩角礫多含 甌 B
706	〃	P16	〃 杯	15.4	3.9	-	10.1	全面密なミガキ、体部は連続、底部は断続。口縁端は明瞭に巻込み。外面と断面に黒褐色附着物。	内面：明赤褐色 精土、長石含 杯 A
707	〃	P38	須恵器 蓋	14.0	3.2	-	-	外面は天井全面回転ケズリ、口縁周辺回転ナデ。内面口縁は回転板ナデか。天井丁寧なナデ。口縁端のかえり明瞭。全体に丁寧。	外面：灰黄色
708	〃	P40	〃 〃	-	(1.4)	-	-	つまみ径 5.2 cm。天井外面は回転ケズリ + 断続ケズリ。天井内面に丁寧なナデ仕上げ。極めて平滑。	外面：灰黄色
709	Ⅶ-1	包含層	土師器 皿	-	(2.0)	-	-	内外面密なミガキ。厚手。	外面：橙色 皿 B か
710	Ⅶ-2	Ⅲ層	〃 杯	-	(4.1)	-	(12.1)	全赤。外面は密なミガキ。内面底部周縁ヨコナデ、体部左上がりの放射暗文。厚手。	外面：明赤褐色 杯 B
711	〃	〃	〃 高杯	29.2	(2.8)	-	-	厚手で、角張った口縁端。外底回転ケズリ。内外面ミガキ。	外面：橙色
712	〃	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	10.2	赤。内面はミガキ + 連弧状暗文。杯部下に2条の溝を彫り脚部を接着。脚下端は強いヨコナデで脚内面の一部に化粧土附着。	内面：橙色 断面：にぶい黄橙色
713	〃	〃	〃 〃	-	(5.4)	-	-	脚内面に絞り目。外面は回転ナデやナデ痕。接合部で剥離。やや軟。	外面：橙色
714	〃	〃	〃 皿又は杯	-	-	-	器厚 0.7	内外面ミガキ。やや大型の皿や杯の一部とみられる。墨書「為」か。	内面：橙色 外面：橙色 精土で砂粒非含。
715	〃	〃	須恵器 蓋	21.0	(2.2)	-	-	かえりは長く、先端角張る。天井外面は多方向ケズリとナデ調整。	外面：にぶい黄橙色

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
716	Ⅶ-2	Ⅲ層	須恵器蓋	14.1	(2.8)	-	-	天井は外面回転ケズリ+断続ケズリ。内面ナデ。全体に丁寧。環状つまみ。丸みをもつ形態。内面周縁部に降灰。	外面：灰色
717	〃	〃	土師器鍋(把手)	-	(3.3)	-	-	指頭成形痕。接合部で剥離。比較的軟。	外面：にぶい黄橙色チャート、砂岩粒含
718	〃	〃	移動式竈	-	-	-	-	体部内外面に粗目のハケ。鈎部はヨコナデ。	内面：明赤褐色 断面：橙色 花崗岩?角粒含
719	〃	〃	土師器甕	-	(4.0)	-	-	口縁内、斜方向の粗いハケ後、2段のヨコナデ。	外面：にぶい赤褐色 花崗岩角礫多含 甕B
720	〃	〃	須恵器甕	21.2	(6.5)	-	-	体部外面タタキ+回転ヨコハケ。口縁端部外面に指圧状痕。口縁部丁寧なヨコナデ。	外面：黄灰色 砂粒極少
721	〃	〃	土製品土錘	5.1	2.1	1.9	19.6	孔径 0.6 cm。	長石等細粒のみ含。
722	〃	〃	須恵器円面硯	-	(1.6)	-	-	円面硯の硯面部。硯面は使用により平滑。裏面の窯内降着物からみて723と同一個体の可能性。	外面：灰色
723	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	15.4	透かし、及び穿孔のための切り込み部分が観察される。脚内面の焼成時の降灰等からみて、722と同一個体の可能性。	外面：褐灰色
724	〃	〃	〃甕	-	(15.2)	-	-	外面はタタキ後粗目のハケ。内面は同心円当て具とナデ調整。一部ハケ目。	外面：黄灰色
725	〃	〃	緑釉陶器皿	-	(1.3)	-	-	素地は硬質。薄い釉。	内面：灰白色 断面：灰白色
726	〃	〃	皿又は椀	-	(1.9)	-	-	素地は硬質。高台基部は僅かに扶れる。	内面：灰白色 断面：灰色
727	〃	Ⅳ層	土師器皿	21.1	3.0	-	17.4	赤。外底に押圧痕、高台内面回転ケズリ。全面化粧土塗布、外面全面ミガキ。内面は左上がりの放射暗文と内底に連弧状暗文。	内面：明赤褐色 断面：灰白色 石英、赤礫等の細粒含。石英細粒 気孔 皿B
728	〃	〃	須恵器高杯	-	(4.4)	-	8.2	体部内面は丁寧に滑面化、下面回転ケズリ。	外面：灰黄色 焼やや不良
729	〃	カクラン	土師質土器焙烙	42.0	(4.6)	-	-	薄手均一の体部厚。外面は平滑で調整痕なし、型使用か。内面にヨコナデ。	内面：灰色 外面：暗灰黄色 雲母片多含 外面ススケ
730	〃	〃	〃	41.2	(4.9)	-	-	内面は斜方向のナデ仕上げ。口縁外面はヨコナデにより外反。内底やや黒ずみあり。外底被熱。	内面：橙色 断面：灰褐色 石英、赤礫等の細粒含。外面にススケ
731	〃	〃	磁器碗	-	(2.5)	-	5.3	染付碗。見込帆船文、外底「サ」。やや黄色がかった発色。広東碗。	
732	Ⅸ-1a	SK23	〃	11.6	6.4	-	5.0	染付碗。やや黄味がかった素地色。高台内「茶」。	
733	〃	〃	〃	-	(3.3)	-	4.0	染付碗。薄手、畳付けのみ釉ハギ。高台内に銘。	
734	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	3.8	染付碗。高台内「サ」。畳付けのみ釉ハギ。	
735	〃	SD10南上層	窯道具トチン	-	全高13.0	-	全幅(6.4)	素地塊を手で成形した際の縦の接合痕が残る。鉄分粒子が融裂。	外面：灰白色 断面：灰黄褐色 堅緻 長石角礫含
736	〃	SK28	瓦	-	-	-	-	小口に押印。	
737	〃	SK30	〃	-	-	-	-	軒平瓦。	
738	〃	〃	土師質土器焜炉	奥行19.6	高さ19.7	-	-	各接合部内面から粘土圧着。外面の側面・上面はミガキか、平滑。焚口脇に、押印による銘。	金雲母多含 上面開口部にススケ
739	Ⅸ-1b	SK5	陶器瓶	-	(22.5)	9.6	9.3	内外面施釉。外底露胎、回転ケズリ、窯道具痕。外面下端に漬掛け時の指痕2箇所。	
740	〃	〃	〃乗燭	-	(3.4)	-	幅8.7	内外面に薄い釉。上・下を別に型作り後、合わせているが、接合部に隙間多い。芯受口は被熱。	外面：明赤褐色 断面：にぶい橙色 ススケ

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
741	IX - 1b	SK11	瓦 棧瓦か	-	-	-	-	「中山□」	
742	〃	〃	瓦	-	-	-	-	小口に押印。	
743	〃	SK12	土製品 泥面子	2.5	2.4	0.6	-	花文。	「完存」
744	X - 2	SD8 上面	土師質土器 釜	-	(3.9)	-	-	体部内面板ナデか。	外面：橙色 長石細粒， 赤礫，白雲母状の微細粒含。
745	XI - N	SK52 掘方下面	須恵器 不明	-	(2.4)	-	-	外面は回転ケズリに一部ナデ。内面はナデ。 内外面とも丁寧な仕上げ。	外面：灰色 焼良
746	〃	SK36	かわらけ 皿	6.1	0.9	-	4.5	薄手。体部ヨコナデ時に，内底周縁部が凹 むように成形。糸切り。	外面：にぶい黄橙色 精土
747	〃	SK37	陶器 水瓶	-	(5.0)	-	-	オリーブがかった釉調。	長石角粒等含む。
748	〃	SK47	〃 鉢	-	(3.4)	-	-	二彩手。錆釉と白化粧土に刷毛目。縁釉。	錆釉部分：黒褐色 焼堅緻
749	〃	SK37	磁器 碗蓋	9.2	2.7	-	-	つまみ径 4.1 cm。染付碗蓋。	
750	〃	〃	陶器 鉢	20.4	(3.7)	-	-	外面は白濁釉を刷毛目施文。	精土 硬質
751	〃	〃	〃 播鉢	-	(5.0)	-	(11.2)	内面摩耗。	
752	〃	SK46	〃 水瓶	29.9	(4.1)	-	-	口縁上端面に3条の僅かな凹線。	
753	〃	SK37 床面	鉄製品 和鉄	(15.9)	(3.5)	-	44.1	錆顕著。	
754	〃	SK36 床面	〃 鎌か	刃部幅 2.8	-	0.4	111.4	保存状態により各所で折損。錆付着。	
755	IX - 2	南西 トレンチ	弥生土器 壺	(20.7)	(3.3)	-	-	貼付口縁，端面凹線。口縁内面多方向ハケ， 頸部外面タテハケ痕か。内外面荒れ。	外面：橙色 断面：黒褐色 剥離あり。
756	〃	〃 〃	須恵器 杯	-	(2.2)	-	9.1	胎土良。	外面：黄灰色 杯 B
757	〃	II層	〃 壺	10.5	(3.8)	-	-	口縁端部をつまみ出すように成形。口縁部 ヨコナデ後，ナデ。内面頸部下ユビオサエ。	外面：灰白色 良土
758	〃	検出面	〃 甕	-	(7.5)	-	器厚 1.1	残存する頸部の復元直径は30数cmとみられ る。外面は凹線間に櫛描波状文。	外面：黄灰色
759	X - 2	〃	〃 〃	-	(6.0)	-	-	外面は格子タタキ。内面は同心円当て具痕 をほとんどナデ消さない。	外面：黄灰色
760	IX - 2	包含層	土師質土器 皿	8.0	1.7	-	5.0	粗い糸切り。口縁端は失っている可能性あ り。	外面：にぶい橙色
761	〃	〃	〃 椀	-	(2.4)	-	6.4	高台は外側へ向き圧着し，高台高は4.1mm。 内面ミガキは，見込部は平行，体部は斜方向。 外面もミガキ。外底は糸切り痕。	内面：にぶい黄橙色 精土で，細粒のみ少含。
762	X - 1	検出面	〃 柱状高台	-	(1.7)	-	4.3	粘土を螺旋状に捻ってつくっており，内部 に螺旋状の剥離や胎土の回旋がみられる。	外面：浅黄橙色
763	X - 2	〃	〃 椀	-	(1.7)	-	(7.6)	内面はミガキ。外底は糸切り後ナデか。	外面：灰白色
764	XI - N	〃	須恵器 甕	-	(3.6)	-	-	体部片。外面は細めのタタキ痕。内面はナ デ仕上げか。	外面：灰色
765	VII	SD2	土師器 杯か	-	(0.8)	-	-	内外面な密なミガキ。内底は弧状の暗文か。 外底ヘラ切り痕僅かに残る。橙色で，薄い化 粧土の可能性もあり。	外面：橙色 精土

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
766	IX-2	SD2	土師器 杯か皿	-	(1.2)	-	-	内外面密なミガキ。	外面：橙色
767	VII	〃	〃 高杯	-	(1.5)	-	-	内外面密なミガキ。口縁端部やや拡張。橙色で、薄い化粧土の可能性もあり。	外面：橙色 断面：にぶい黄橙色
768	〃	〃	〃 皿	-	(1.8)	-	12.0	盤又は皿Bの高台。接合部で剥離。	外面：橙色 皿B
769	X-2	〃	須恵器 杯	11.1	(2.4)	-	-	丁寧な回転ナデ、口縁端部は特に繊細に仕上げ。	外面：灰黄色
770	VII	〃	〃 〃	13.4	3.1	-	7.9	外面は回転ナデによる凹凸。	外面：灰白色
771	〃	SD1	〃 高杯	-	(1.2)	-	-	一端は脚接合部に近い。内面はナデ。	外面：灰黄色
772	〃	〃	須恵器	-	(1.1)	-	-	口縁部小片。	外面：灰黄色
773	〃	SD2	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	-	外面に回転ナデ痕。ミガキなし。	外面：橙色
774	IX-2	SD1 2層	土師器 甕	-	(1.4)	-	-	口唇部小片。上端が面をなす。	外面：にぶい黄褐色 花崗岩角礫多含。甕B
775	〃	SD2	〃 〃	-	(2.2)	-	-	体部外面、粗目ハケによる斜上方向へのカキ上げ後、頸部ヨコナデ。	外面：にぶい黄褐色 花崗岩とみられる角礫多含。甕B
776	VII	〃	焼塩土器	-	(2.3)	-	-	内面は布目。	外面：明黄褐色 断面：褐灰色 角礫多含
777	VIII	SD1	須恵器 壺	-	(1.7)	-	-	肩が張る形態。	外面：灰黄色
778	VII	〃	〃 甕	-	(5.9)	-	器厚 1.4	外面は格子タタキ。内面に同心円当て具痕。大型とみられる。	外面：灰色

東野遠山遺跡遺物観察表 1

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
1	I	SD1 埋土	土師質土器 杯	-	(2.0)	-	-	内外面ナデ調整。	
2	〃	〃	〃	-	(1.2)	-	-	杯底部。内外面は摩耗。	
3	〃	SD3 埋土	土師質土器 杯	-	(1.6)	-	-	口縁部のみ残存。外面ナデ、内面摩耗。	
4	〃	SD7 埋土	磁器 皿	-	(2.0)	-	6.5	高台畳付けは露胎。銅板転写。	近代以降
5	〃	検出面	土師質土器 杯	11.4	(2.5)	-	-	口縁部のみ残存。内外面は摩耗する。	
6	〃	〃	〃	-	(1.6)	-	-	口縁端部は外反。内外面はナデ調整。	
7	〃	〃	〃	-	(1.5)	-	-	口縁部片。やや外反する。	
8	〃	〃	〃	-	(1.4)	-	5.1	内外面ともに摩耗。	底部器壁厚い。
9	〃	〃	〃	-	(1.6)	-	5.4	底部は円盤状高台か。底部切り離し回転糸切り。外面回転ナデ調整、内面摩耗。	
10	〃	〃	〃	-	(1.8)	-	6.0	底部切り離し回転糸切り。内外面は摩耗。	
11	〃	〃	〃	-	(0.8)	-	4.8	底部切り離し回転糸切り。内面ナデ調整。	
12	〃	〃	〃	-	(1.4)	-	7.1	底部切離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
13	〃	〃	瓦器 椀	-	(0.9)	-	4.4	底部外面に断面三角形の高台を貼付。内外面は摩耗。	和泉型か。
14	〃	TR (検出面か)	青磁 碗	-	(2.4)	-	-	体部片。外面竊蓮弁文。	13世紀後半～14世紀前半
15	〃	検出面	陶磁器 皿	-	(1.0)	-	6.3	高台畳付け露胎。銅板転写。内面草花文か。	
16	〃	〃	磁器 瓶	-	(3.2)	-	4.1	染付小型瓶。底部は碁笥底状。外面に1条の圏線。	肥前系か。
17	〃	〃	〃 合子	8.1	2.0	-	7.8	口縁端部と底部外面は露胎。	
18	〃	〃	陶器 鉢	-	(3.4)	-	11.2	施釉陶器。削り出し高台。高台畳付けは露胎。内外面は褐釉。	
19	〃	〃	銭貨	-	-	-	6.0	一銭硬貨。外縁外径27.5mm。外縁内径25.4mm。外縁厚1.4mm。大日本帝国。	
20	〃	表土I層	磁器 碗	-	(2.3)	-	-	丸形碗。銅板転写。見込みに竹・松か。	
21	II-S	SB1-P12	土師質土器 皿	7.8	1.4	-	5.1	底部切り離しは回転糸切り。内外面は摩耗。	器壁は薄い。
22	〃	SB1-P4	〃	7.6	1.5	-	5.6	口縁部外方に開き、端部は丸くおさめる。内外面はナデ調整。	器壁は厚い。
23	〃	SB1-P3	〃	8.3	1.2	-	5.5	底部切り離しは回転糸切り。内外面ともに回転ナデ調整。	器壁は薄い。
24	〃	SB1-P4	〃 杯	-	(1.7)	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ、内底部はヨコナデ。	器壁は厚い。
25	〃	〃	〃	12.9	(2.5)	-	-	口縁部は外方に開き、外反する。内外面は回転ナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
26	II - S	SB1 - P3	土師質土器 杯	16.7	(4.0)	-	-	端部は丸くおさめる。外面下方はロクロ目が残る。内外面は回転ナデ調整。	
27	〃	SB1 - P4	〃 〃	-	(4.0)	-	-	内外面ともに回転ナデ調整。外面の一部は摩耗。	
28	〃	〃	瓦器 椀	15.1	(3.6)	-	-	口縁部外面は強いナデにより段差あり。体部外面は指頭圧痕。内面はヘラミガキ。	型押成形か。
29	〃	〃	〃 〃	-	(1.5)	-	5.2	底部外面には断面三角形の高台を貼付。内面見込みには平行のミガキ（暗文）。	和泉型か。
30	〃	SB2 - P1	土師質土器 杯又は鉢	-	(2.5)	-	9.0	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	器壁厚い。
31	〃	〃	〃 杯	-	(1.8)	-	6.8	底部切り離しは回転糸切り。内外面はナデ調整。	器壁は厚い。
32	〃	SB2 - P7	〃 鉢	-	(3.2)	-	11.6	底部切り離しは回転糸切り。内外面に回転ナデ調整。内底部はヨコ方向のナデ。	鉢又は甕。
33	〃	SK1 埋土	磁器 碗	-	(4.1)	-	-	染付の筒形丸碗。外面虫籠文。口縁部内面は二重圏線間に斜格子文。	肥前系か。
34	〃	SK2 埋土	〃 〃	7.5	3.7	-	3.1	染付の小型丸碗。外面に植物文。削り出し高台。	
35	〃	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	3.4	染付の小型丸碗。外面の高台脇に圏線。	埋土下層出土。肥前系磁器
36	〃	〃 〃	陶器 皿	-	(2.1)	-	4.6	内面見込みに鉄絵。畳付けは露胎。焼成はやや不良。	埋土下層出土。肥前系陶器
37	〃	〃 〃	〃 碗	13.0	(5.4)	-	-	丸形碗。内外面は施釉。	埋土下層出土
38	〃	SK1 埋土	瓦質土器 火入れ	14.5	8.4	-	12.3	外面内面ナデ調整、指頭圧痕。	
39	〃	SK2 埋土	土製品 土人形	(5.1)	3.0	1.8	-	土人形。型作り。下半部は欠損し、顔部分は摩耗。中心は中空。女官か。	
40	〃	SK1 埋土	金属製品 煙管	4.7	1.5	1.4	8.0	煙管。雁首。吸口部は欠損。	
41	〃	〃 〃	瓦	28.1	29.7	1.7	-	棧瓦。側面に「ヤス」の刻印銘。	
42	〃	SK9 埋土	土師質土器 杯	14.6	3.9	-	8.0	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
43	〃	SK16 埋土	〃 皿	9.0	1.8	-	6.8	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
44	〃	〃 〃	〃 杯	-	(1.3)	-	5.9	底部切り離しは回転糸切り。外面は摩耗、内面はナデ調整。	
45	〃	〃 〃	〃 椀か	15.1	(2.6)	-	-	口縁部は外方に開き端部は外反する。内外面はナデ調整。	全体的に硬質。
46	〃	SK18 埋土	〃 杯	-	(2.4)	-	9.4	底部切り離しは回転糸切り。外面は摩耗。内面は回転ナデ調整。	
47	〃	〃 〃	〃 〃	-	(1.2)	-	-	底部切り離しは回転糸切り。外面は摩耗。内面は炭素吸着か。	
48	〃	〃 〃	〃 椀	-	(1.3)	-	6.8	底部外面に断面三角形の高台を貼付。内外面は摩耗。	
49	II - N - 2	SK28 埋土	〃 杯	14.2	4.0	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。口縁部は外上方に開き外反。内外面は回転ナデ調整。	
50	〃	〃 〃	磁器 碗	-	(3.5)	-	-	染付碗。外面は口縁部下に二重圏線。透明度のある施釉。	

東野遠山遺跡遺物観察表 3

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
51	II - N - 2	SK28 埋土	錢貨	-	-	-	3.0	外縁外径2.47cm, 外縁内径1.99cm, 外縁厚0.14cm, 「寛永通寶」 寛と寶がつぶれている。	
52	〃	〃 〃	〃	-	-	-	2.0	外縁外径2.54cm, 外縁内径2.02cm, 外縁厚0.13cm, 「寛永通寶」	完形
53	II - N - 3	SK34 埋土	磁器 碗	10.4	(4.9)	-	-	肥前系磁器。外面口縁部に圈線と格子文。内外面ともに施釉。	
54	〃	〃 〃	陶器 碗	-	(6.6)	-	5.2	陶器丸形碗の染付碗。高台削り出し。高台畳付け以外は施釉。釉には細かい貫入あり。	SX6 と接合。
55	〃	〃 〃	〃 播鉢	33.8	(12.2)	-	-	口縁部は上下に肥厚。外面は2条の沈線。内面は全面に播目。播目上部はヨコナデ。	
56	〃	SK34・SX8	〃 甕	25.2	(18.5)	33.5	-	全面褐釉を施す。口縁部は左右に拡張肥厚。内面はタタキ目とナデ調整。	外面は口縁部下に径2cmの浮文を貼付。
57	〃	SK53 埋土	土師質土器 杯	-	(1.4)	-	6.4	底部切り離しは回転糸切り。内底面はロクロ目。外面体部は摩耗。	
58	〃	〃 〃	〃 〃	13.0	(2.0)	-	-	口縁部はやや外反。内外面は回転ナデ調整。	
59	〃	SK54 埋土	〃 皿	7.2	1.5	-	4.6	底部外面は摩耗。その他は回転ナデ調整。口縁部の一部にスス。灯明皿。	
60	〃	〃 〃	〃 杯	12.9	(2.1)	-	-	内外面はナデ調整, 一部摩耗。	
61	〃	〃 〃	〃 〃	-	(2.5)	-	-	口縁部はやや外方に開く。端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整。	
62	II - S	SD1 埋土	〃 〃	-	(1.4)	-	-	口縁部内外面は回転ナデ調整。	
63	〃	〃 〃	〃 〃	-	(2.0)	-	-	口縁部下方外面はナデ調整による段を呈する。内面外面は摩耗。	
64	〃	〃 〃	〃 〃	12.0	(2.5)	-	-	外面は回転ナデ調整。内面は摩耗。	
65	〃	〃 〃	〃 〃	-	(1.1)	-	6.6	底部切離しは回転糸切り。内面は回転ナデ調整。やや摩耗。	
66	〃	〃 〃	土師器 甕	-	(2.0)	-	-	口縁端部は上方に肥厚する。内外面ともにナデ調整。	
67	〃	〃 〃	土師質土器 杯又は鉢	-	(1.8)	-	10.0	底部外面に回転糸切り痕。内外面ともにナデ調整。	
68	〃	SD2 埋土	弥生土器 甕	20.0	(8.2)	-	-	外面頸部までタタキ痕。口縁部はナデ調整。内面は摩耗, 一部に指頭圧痕。	器壁は厚い。
69	〃	〃 〃	〃 〃	31.4	(12.0)	-	-	口縁部下までタタキ目あり。口縁部外面内面はナデ調整。体部内面は指頭圧痕とナデ調整。	
70	〃	〃 〃	土師質土器 杯	-	(2.4)	-	6.6	底部切り離しは回転糸切り。内外面は摩耗。外面一部ナデ調整。	
71	〃	〃 〃	〃 杯又は碗	14.0	(4.7)	-	-	体部は内湾し, 口縁部は端反り, 内外面は回転ナデ調整。	
72	〃	〃 〃	〃 〃	16.5	(2.6)	-	-	外面はナデ調整。内面は摩耗。	器壁は薄い。
73	〃	〃 〃	陶器 袋物 又は火入れ	-	(1.8)	-	-	筒形。外面は施釉。内面は無釉。	
74	〃	SD3 埋土	土師質土器 皿	6.8	1.5	-	4.7	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	器壁は厚い。
75	〃	〃 〃	〃 杯	17.6	(2.3)	-	-	内外面は回転ナデ調整。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
76	II-S	SD3埋土	土師質土器 杯	14.6	(2.6)	-	-	内外面ともに摩耗。	
77	〃	〃	〃	-	(2.8)	-	-	内面外面は回転ナデ調整。	
78	〃	〃	〃	-	(2.5)	-	5.5	底部切り離しは不明瞭。内外面はナデ調整。	器壁は厚い。
79	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	7.1	内外面は摩耗。底部切り離しは回転糸切りと考えられる。	
80	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。外面はナデ、内面は摩耗と一部ナデ調整。	
81	〃	〃	〃	-	(3.1)	-	6.3	底部切り離しは回転糸切り。外面回転ナデ、内面ナデ調整。	
82	〃	〃	〃 鉢か	24.3	(2.8)	-	-	内外面は回転ナデ調整。口縁端部は丸くおさめる。	
83	〃	〃	瓦器 椀	-	(0.9)	-	4.4	底部には断面三角形の高台を貼付。内面は摩耗。	
84	〃	〃	〃 椀か	-	(2.1)	-	-	内面外面は摩耗する。	胎土・焼成は土師質。地元産の瓦器椀か。
85	〃	〃	〃 椀	-	(1.1)	-	-	口縁端部内面には1条の沈線。内面外面にナデ調整。	
86	〃	〃	須恵器 鉢か	-	(7.1)	-	8.4	外面は回転ナデ、内面ナデ調整。	
87	〃	〃	磁器 皿	11.2	(1.4)	-	-	口縁部は途中内側に折れる。内外面は施釉。	青磁皿か。
88	〃	〃	石製品 叩石	13.1	8.2	4.9	714	砂岩製。中央部に敲打痕。被熱をうける。	
89	〃	〃	〃 石斧	13.7	7.2	3.9	646	蛤刃石斧。緑色岩。	
90	〃	SD6埋土	土師質土器 皿	8.2	1.2	-	6.0	内外面回転ナデ調整。	
91	〃	〃	瓦器 椀	10.5	(1.4)	-	-	外面口縁下は強いナデ調整。	和泉型か。
92	〃	〃	黒色土器 杯	11.4	(3.0)	-	-	内面は炭素吸着。内外面ナデ調整。黒色土器の可能性あり。	
93	〃	〃	土師質土器 杯	13.9	(2.1)	-	-	内外面回転ナデ調整。	器壁薄い。
94	II-N-3	SD8埋土	〃	14.3	4.3	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。	
95	〃	〃	〃	14.9	5.2	-	7.0	底部切り離しは回転糸切り。外面内面は回転ナデ調整。	
96	〃	〃	〃	13.8	4.0	-	6.1	外面内面は回転ナデ調整。	
97	〃	〃	〃	15.0	(3.7)	-	-	口縁部はやや外反する。内外面は摩耗のため調整は不明瞭。	
98	〃	〃	〃	13.3	(3.8)	-	-	内外面は回転ナデ調整。外面には黒斑か。	
99	〃	〃	〃 杯又は皿	-	(6.8)	-	-	高足高台。内外面摩耗。脚部内面は回転ナデ調整。脚部との接合部にユビオサエ。	
100	II-S	SD9埋土	〃 皿	8.4	1.3	-	5.3	底部切り離しは回転糸切り。外面内面ともにナデ調整。	器壁薄い。

東野遠山遺跡遺物観察表 5

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
101	II-S	SD9埋土	土師質土器 杯	-	(1.8)	-	7.4	底部には回転糸切り痕残る。外面は摩耗、内面はナデ調整。	
102	〃	〃	瓦器 椀	-	(0.9)	-	5.4	底部外面に断面三角形の高台を貼付。内外面摩耗。	
103	II-N-3	SD17埋土	土師質土器 杯	11.3	3.3	-	7.3	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
104	〃	〃	〃	12.6	(3.0)	-	-	内面外面は回転ナデ調整。	器壁は薄いつくり。
105	〃	〃	陶器 碗	8.3	(3.9)	-	-	小型丸碗。内外面は施釉。口縁部外面には文様の様な釉だれ。	
106	〃	〃	〃 碗	11.8	7.8	-	5.2	丸形碗。削り出し高台で、内面見込みに釜道具の痕がみられる。	
107	〃	〃	〃 播鉢	31.3	(11.1)	-	-	口縁部は肥厚。内面は全面に播目。	
108	〃	〃	焙烙	47.4	(4.3)	-	-	外面と内面はナデ調整。	
109	〃	SD20埋土	土師質土器 杯	-	(2.1)	-	-	内外面は摩耗。	
110	〃	〃	〃	15.6	(2.6)	-	-	口縁部は外方に開き外反。内外面は摩耗。	器壁は薄い。
111	〃	P24埋土	〃	-	(3.0)	-	7.0	底部切り離しは回転糸切り。外面体部上方は摩耗。下方はナデ調整。内面はナデ調整。	
112	II-S	P29埋土	〃 皿	7.7	1.9	-	5.2	底部外面の切り離しは回転糸切り。外面は回転ナデ調整。内面は口縁部摩耗。一部ナデ調整。	
113	〃	〃	〃 杯	-	(2.7)	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。内外面は摩耗。	
114	〃	〃	〃	14.4	(3.6)	-	-	口縁部はやや外反する。端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ調整。	
115	〃	P47埋土	〃 杯又は鉢	-	(2.5)	-	7.2	底部切り離しは回転糸切り。外面は回転ナデ調整。内面も回転ナデ調整で内底面は一部ヨコ方向のナデ。	
116	〃	P59埋土	土師器 甕	34.6	(3.0)	-	-	内外面はナデ調整。口縁下内面はヘラケズリか。	
117	II-N-3	P64埋土	土師質土器 杯	-	(2.6)	-	-	内面は摩耗、外面は回転ナデ調整。	
118	〃	〃	白磁 碗	16.6	(3.9)	-	-	口縁部は玉縁状を呈す。内面から体部途中まで施釉。	白磁IV類碗
119	II-S	P65埋土	土師質土器 杯	13.0	(2.6)	-	-	口縁端部はやや肥厚する。内外面は摩耗。	
120	II-N-2	SX4埋土	陶器 碗	11.0	(4.3)	-	-	陶器丸形碗。内外面は施釉。細かい貫入が入る。	
121	〃	〃	磁器 碗	-	(5.3)	-	-	染付碗。外面は松等の文様か。やや焼成不良。	
122	II-N-3	SX6埋土	土師質土器 杯	-	(2.3)	-	6.9	底部切り離しは回転糸切り。内面外面は回転ナデ調整。	
123	〃	〃	陶器 碗	7.0	4.1	-	3.2	小型丸碗。底部は削り出し高台。高台以外は施釉。	
124	〃	〃	磁器 皿	-	(1.2)	-	-	染付皿。外面口縁部下に一重の圏線。内面に草花文か。	皿又は蓋。
125	〃	〃	〃 碗	7.7	4.1	-	3.1	染付の小碗。外面は高台脇に2条圏線、口縁部に草木文。	波佐見焼か。

東野遠山遺跡遺物観察表 6

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
126	II - N - 3	SX6・SK34埋土	磁器碗	11.7	7.4	-	5.2	肥前系磁器染付碗。丸形碗。口縁部に二重、高台脇に一重圏線。圏線間に松と雲。	波佐見 V - 1 (1680 ~ 1740年)
127	〃	SX6埋土	陶器碗	12.0	(6.0)	-	-	丸形碗。内外面施釉。	
128	〃	〃	〃皿	20.6	(5.1)	-	-	内面外面には刷毛目文様。内面は波状の刷毛目文様。	1780 ~ 1860年代か。
129	〃	〃	磁器香炉	-	(0.8)	-	4.8	染付の香炉。高台脇に一重の圏線。	香炉又は火入れ。器壁は薄いつくり。
130	〃	〃	播鉢	34.8	(5.2)	-	-	口縁部は肥厚。内面は全面に播目。	
131	〃	〃	陶器甕	29.2	(5.2)	-	-	口縁端部は肥厚し、3条の沈線を施す。外面は褐釉。外面口縁下にはロクロ痕。	
132	〃	〃	〃	-	(7.3)	-	17.9	内面外面は回転ナデ調整。内面には自然釉が一部みられる。	
133	II - S	包含層	弥生土器甕	15.7	(2.5)	-	-	端部は平坦面をなす。外面はタテ方向のハケ目。内面はヨコ方向のハケ目、端部近くは斜位方向のハケ目。	口縁部のみ残存。
134	〃	〃	〃	26.0	(4.7)	-	-	口縁部はくの字状に屈曲。外面は頸部までタタキ目、ナデ調整。内面はヨコ方向のナデ調整。	口縁部一部のみ残存。
135	〃	〃	土師質土器皿	7.0	1.2	-	5.0	内外面は摩耗し、調整は不明瞭。	
136	〃	〃	〃	8.7	1.5	-	5.9	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
137	〃	〃	〃杯	-	(1.9)	-	6.5	底部切り離しは回転糸切り。内外面は摩耗。	
138	〃	〃	〃	-	(1.9)	-	7.5	底部切り離しは回転糸切り。内外面はナデ調整。	
139	〃	〃	〃	13.3	3.7	-	7.1	底部切り離しは回転糸切り。内外面はナデ調整。	
140	〃	〃	〃	14.7	4.9	-	6.8	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。外面にはロクロ目が残る。	
141	〃	〃	瓦器椀	-	(1.1)	-	4.0	底部外面には断面三角形の高台を貼付(輪高台)。内外面は摩耗。	
142	〃	〃	〃	-	(1.6)	-	6.0	底部外面には断面方形の高台を貼付。内外面は摩耗、外面には一部指頭圧痕。	
143	〃	〃	青磁碗	-	(2.0)	-	-	無文の碗か。内外面は施釉。	
144	〃	〃	磁器碗	-	(2.4)	-	3.8	染付碗。型紙摺絵。内面見込みには松竹梅か。高台畳付け以外は施釉。	瀬戸・美濃焼系
145	〃	〃	陶器皿	13.5	3.0	-	7.6	底部削り出し高台。高台を除き施釉。体部から高台脇まで回転ケズリ、ナデ調整。	
146	〃	検出面	土師質土器皿	7.7	1.1	-	5.3	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	器壁は厚い。
147	〃	〃	〃	8.0	1.3	-	5.6	底部切り離しは回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。内面中央部は凹み、ヨコ方向のナデ調整。	器壁は厚い。
148	〃	〃	〃	7.8	1.4	-	5.0	底部切り離しは回転糸切り。外面は回転ナデ調整。内面は摩耗。	
149	〃	〃	〃杯	-	(1.5)	-	6.8	底部切り離しは回転糸切り。内外面ともに摩耗。	器壁厚い。
150	〃	〃	〃	-	(2.7)	-	-	口縁部は外反、端部は丸くおさめる。内外面はナデ調整。	

東野遠山遺跡遺物観察表 7

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量				特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径		
151	II - S	検出面	土師質土器 杯	-	(2.5)	-	7.3	底部切り離しは回転糸切り。内外面はナデ調整。一部は摩耗。	
152	〃	〃	〃 〃	-	(3.6)	-	7.6	底部切り離しは回転糸切り。内外面ともに回転ナデ調整。	
153	〃	〃	瓦器 椀	-	(0.8)	-	4.7	底部に断面方形形状の輪高台を貼付。高台周辺はナデ調整。	胎土・焼成は土師質。地元産の瓦器椀か。
154	〃	〃	磁器 紅皿	4.7	(1.3)	-	-	貝殻状の型押し成形。内面から口縁端部にかけて施釉。	1820年以降か。
155	〃	〃	〃 碗	-	(1.8)	-	5.0	染付碗。削り出し高台。外面高台脇に三重圏線。内面見込みに文様を染付。	
156	〃	〃	陶器 碗	10.3	(2.7)	-	-	丸形碗。口縁部外面に梅花文。内外面は施釉。	
157	〃	〃	〃 皿	-	(1.8)	-	4.7	内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。削り出し高台。底部以外は施釉。	
158	II - N - 3	〃	瓦質土器 羽釜	20.8	(3.9)	-	-	口縁部下に鏝を貼付。鏝部分は途中欠損。内面外面は摩耗。	
159	II - S	表採	陶器 碗	11.0	(5.4)	-	-	丸形碗。口縁部外面に圏線と文様あり。内外面施釉。	
160	〃	〃	〃 〃	-	(2.4)	-	5.1	底部削り出し高台。高台畳付け部分は露胎。内外面は施釉。	
161	〃	〃	〃 灯明皿	-	(4.2)	-	3.2	底部切り離しは回転糸切り。底部外面以外は褐色釉がかかる。	
162	〃	〃	磁器 皿	12.6	4.0	-	7.9	菊皿。型押し成形。高台見込みは蛇ノ目釉ハギ、削り出し高台。内外面は施釉。	
163	〃	〃	〃 紅皿	4.7	1.6	-	1.4	貝殻模様の型押し成形。内面と口縁部外面上部まで施釉。	完形・1820年以降か。
164	II - N - 3	〃	〃 碗	-	(4.7)	-	6.4	広東碗。外面格子文、内面見込みに宝文か。高台見込みには「茶」の銘。能茶山焼。	
165	〃	〃	〃 〃	-	(3.1)	-	6.3	広東碗。外面格子文。高台畳付け露胎し、砂熔着。	
166	II - S	〃	〃 〃	-	(2.2)	-	4.6	小型丸碗。染付碗。外面は網目文。高台脇に圏線。高台見込みに銘。焼成不良。	
167	〃	〃	〃 〃	9.0	(5.0)	-	-	染付筒形碗。外面丸に菊、格子文。内面口縁部に四方禪文。底部近くは二重圏線。	肥前系磁器
168	II - N - 3	〃	〃 仏飯器	6.1	6.4	-	4.2	肥前系磁器。底部は露胎。杯部外面に半菊文を染付。	V期 (1780 ~ 1860年)
169	〃	〃	陶器	-	(0.2)	-	-	底部外面に墨書。薄い器壁をもつ。	

掘立柱建物跡計測表

V-1区

遺構名	長軸	規模 (桁行×梁行)	面積 (㎡)										備考	
			5～ 10	10～ 15	15～ 20	20～ 25	25～ 30	30～ 35	35～ 40	40～ 45	45～ 50	50～ 55		
SB1	N-4°-E	3間×2間				○								古代後期
SB2	N-4°-E	3間×2間				○								古代後期

V-2区

遺構名	長軸	規模 (桁行×梁行)	面積 (㎡)										備考	
			5～ 10	10～ 15	15～ 20	20～ 25	25～ 30	30～ 35	35～ 40	40～ 45	45～ 50	50～ 55		
SB1	N-5°-E	3間×2間			○									古代前期
SB2	N-3°-W	2間×2間以上		(○)										古代前期
SB3	N-90°	4間×3間				○								
SB4	N-79°-W	2間×1間	○											

VI区

遺構名	長軸	規模 (桁行×梁行)	面積 (㎡)										備考	
			5～ 10	10～ 15	15～ 20	20～ 25	25～ 30	30～ 35	35～ 40	40～ 45	45～ 50	50～ 55		
SB1	N-0°	3間×2間			○									総柱建物
SB2	N-90°	3間×2間			○									古代前期
SB3	N-79°-E	3間×1間以上		(○)										
SB4	N-1°-Eか	2間×1間以上	(○)											古代前期
SB5	N-2°-E	3間×2間					○							古代前期
SB6	N-90°	3間×2間					○							古代前期, SD10・SX12にきられる
SB7	N-83°-W	5間×3間							○					古代前期, SX6をきる
SB8	N-85°-W	4間×3間以上									(○)			古代前期, SB9をきり, SB10にきられる
SB9	N-85°-W	4間×3間以上										(○)		古代前期, SB8・10にきられる
SB10	N-5°-E	3間×2間以上				(○)								古代前期, SB8・9をきる

掘立柱建物跡・柱列跡計測表

遺構名	調査区	間数	規模(m)	主軸方向	柱穴			出土遺物	備考	埋土
					平面形	平面規模 (cm)	深さ (cm)			
SB11	Ⅶ-2区	不明×2	不明×4.3	N-8°-E	円形	90前後	27～48	ピットの項参照		ピットの項参照
SA2	Ⅶ-2区	3か	6.2	N-85°-W	円形	54～76	12～30	土:杯・蓋2 甕A(在), 塩	3間程度の柱列が 重複か	暗褐色(10YR3/3) 砂質シルト
SA3	Ⅷ区	4	13.0	N-11°-E	円形	30～45	16～25	-	SD4南北溝に平行	基層Ⅵ層にⅤ層が 混じる

高田遺跡遺構計測表 2

土坑計測表

V-1区

遺構名	平面形態	規模			備考
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK1	不整長方形	2.50	1.80	57.8	
SK2	不整楕円形	(0.90)	(0.70)	43.7	SX12に大部分きられた残りを検出
SK3	円形	0.78	0.70	44.0	攪乱の下で検出
SK4	円形	2.30	2.30	33.5	攪乱17の下で検出
SK5	不整楕円形	(1.50)	0.70	30.0	西へ続く(調査区壁際)
SK6	不整長方形	3.10	2.25	56.8	SK19の掘り方か
SK7	円形	1.72	1.67	49.3	SX2をきるか? 埋土にハンダが混じる
SK8	楕円形	1.90	1.62	40.5	P35・P78にきられる, SK20とペア
SK9	円形	2.10	2.03	51.2	
SK10	隅丸方形	2.30	2.10	50.2	SX18基底面で検出
SK11	隅丸長方形	(2.00)	1.57	43.5	P92・SX24にきられる, 白い粘土塊が出土, 東へ続く(調査区壁際)
SK12	隅丸方形	2.20	2.20	33.6	SX19にきられる
SK13	楕円形	2.09	(1.30)	48.8	SK15をきり, SK21にきられる
SK14	楕円形	1.26	(0.80)	31.4	北へ続く(調査区壁際)
SK15	楕円形	2.05	(1.30)	51.8	SK13・SK21にきられる
SK16	隅丸長方形	3.40	2.10	50.7	SK17・SK18の掘り方か
SK17	円形	1.40	1.40	49.0	SK16をきる, SK18とペア
SK18	円形	1.21	1.13	24.1	SK16をきる, SK17とペア
SK19	隅丸長方形	2.03	1.36	48.9	SK6をきる
SK20	円形	1.60	1.60	66.0	SK8とペア
SK21	円形	1.50	1.41	53.7	SK13・SK15をきる, SK22とペア
SK22	円形	1.62	1.55	57.2	SK21とペア
SK23	円形	0.67	0.62	17.9	小型のハンダ土坑, P24とペアか

V-2区1

遺構番号	平面形態	規模			備考
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK1	隅丸方形	0.89	(0.65)	23.8	西へ続く(調査区壁際)
SK2	不整形	1.26	1.06	6.6	P59にきられる
SK3	楕円形か	(1.29)	(1.06)	5.8, 27.6	SX7ときり合い, 二段掘り状
SK4	不整楕円形	1.30	1.05	31.6	SX7ときり合い
SK5	不整形	1.42	1.24	41.2	
SK6	不整楕円形	3.00	1.23	28.3	
SK7	不整楕円形	0.54	0.38	9.0 ~ 17.9	
SK8	楕円形	(1.68)	1.10	13.5	SD4・SD6にきられる
SK9	隅丸長方形	(1.80)	(1.33)	23.4	ST2をきる
SK10	不整楕円形	1.30	0.75	27.1	
SK11	長楕円形	1.36	(0.42)	10.3	攪乱8にきられる
SK12	不整形	(1.78)	1.10	12.7	攪乱にきられる
SK13	楕円形	0.94	0.58	69.8	
SK14	隅丸長方形	0.96	0.69	15.6	
SK15	楕円形	0.78	0.57	38.3	
SK16	不整形	1.40	(0.82)	30.9	東へ続く(調査区壁際)
SK17	不整形	1.35	1.30	10.1 ~ 16.0	
SK18	不整形	1.50	1.50	6.4	P15にきられる
SK19	隅丸長方形	1.23	0.94	14.2	

土坑計測表

V-2区2

遺構名	平面形態	規模			備考
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK20	不整長楕円形	1.78	0.85	54.6	
SK21	長楕円形	3.80	1.67	20.4	
SK22	楕円形か	(1.68)	(0.54)	8.6	東へ続く (調査区壁際)
SK23	楕円形	(1.34)	0.83	23.3	ST4・P216 にきられる
SK24	楕円形か	南北 (0.93)	東西 (0.74)	25.0	ST2 掘削時に検出

VI区

遺構名	平面形態	規模			備考
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK1	不整形	2.27	1.82	9.1	浅く不整形, 窪みか
SK2	隅丸方形	1.15	1.10	22.1, 42.7	P12 にきられる, 基底面にビット状の掘り込み
SK3	不整形	(0.84) 3.54	2.28	9.8	浅く不整形
SK4	隅丸長方形	2.27	0.98	27.7	集石出土
SK5	楕円形	0.78	0.69	13.7	土器集中
SK6	不整楕円形	0.94	0.83	16.3	
SK7	不明	(1.50)	(0.65)	29.6	SX5・SX11 にきられる, SX5 基底面で検出
SK8	楕円形	1.23	(0.70)	24.8	SX5・SX11 にきられる
SK9	不明	(1.45)	(0.95)	28.3	SX5・SX11 にきられる, SX5 基底面で検出
SK10	楕円形か	1.42	(0.93)	(24.0)	SX5・SX12 にきられる, SX5 基底面で検出, 上層削平を受ける
SK11	不整楕円形	1.45	1.37	25.6	
SK12	隅丸長方形	1.57	1.12	22.6	
SK13	隅丸方形	1.22	1.11	33.6	SX8 ときり合い
SK14	楕円形	1.80	(0.92)	52.5	東へ続く (調査区壁際)
SK15	楕円形	1.20	0.75	15.0	
SK16	楕円形	1.45	1.19	52.5	
SK17	楕円形	1.15	0.87	14.7	
SK18	長方形	2.34	1.13	34.7	
SK19	円形	1.25	1.25	25.6	
SK20	楕円形	1.76	1.68	69.0	
SK21	円形	1.20	1.20	38.7	
SK22	円形	1.07	1.07	42.4	

VII-1区

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SK1	不整形	295 × 130	舟底	57.7	-	-	C	植物痕等か
SK2	不整長方形	210 × 53	皿状	13.5	-	-	B+D	
SK3	溝状	277 × 70	舟底	20.3	-	-	E	
SK4	不整楕円形	112 × 58	舟底	29.6	-	-	B	
SK5	不整楕円形	159 × 86	逆台形	63.3	-	-	C	植物痕等か
SK6	隅丸方形	150 × 120	逆台形	24.4	土(赤): 高台片	土: 甕体部, 塩	B+D	円礫あり
SK7	不整楕円形	117 × 103	舟底	38.0	-	-	B+D	床面に段

高田遺跡遺構計測表 4

土坑計測表

VII-2区

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	高さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SK1	隅丸方形	120 × 109	舟底	34.6	土: 杯A底部・ 皿B (or 高杯)・ 皿(or杯), 須: 蓋2	土: 甕体部片, 須: 甕, 塩2	C	I 期中頃
SK2	円形か	159 × 150	逆台形	31.9	土: 杯A底部・皿A・ 皿B・皿(or杯) 4蓋, 須: 杯A・蓋・皿2	土: 甕A1(搬)・ 甕体部3, 須: 甕体部片2, 塩	B	〃
SK3	隅丸方形	102 × 100	逆台形	19.9	土: 皿(or杯)	土: 甕体部(搬)	B	〃
SK4	隅丸方形	94 × 87	逆台形	14.4	須: 杯B	-	B	I 期前半
SK5	楕円形	97 × 85	逆台形	22.1	-	-	-	
SK6	楕円形	113 × 100	逆台形	17.9	-	-	H	
SK7	楕円形	83 × 78	逆台形	15.4	-	-	B	
SK8	楕円形	134 × 100	舟底	22.0	-	-	B	
SK9	溝状	269 × 64	舟底	39.4	-	-	B	
SK10	長楕円形	(228) × 93	逆台形	19.5	土: 不明2, 須: 蓋・ 皿	土: 甕体部(搬), 土質: 杯(混か)	B	I 期前半頃
SK11	楕円形	123 × 84	不整形	29.1	-	-	B	
SK12	楕円形	178 × 109	舟底	39.2	-	-	B	
SK13	楕円形	134 × 111	不整形	30.7	土(赤): 高杯	土: 甕・甕体部(搬)	B	I 期前半
SK14	楕円形	111 × 75	-	25.5	-	-	-	
SK15	楕円形	127 × 85	舟底	22.0	-	-	B	
SK16	楕円形	102 × 87	舟底	25.9	-	-	B	
SK17	楕円形	(96) × 62	不整形	24.3	-	-	B	
SK18	楕円形	102 × 78	鉢状	42.1	-	-	B	
SK19	隅丸方形	94 × 76	逆台形	23.0	土: 杯・蓋, 須: 蓋	土: 甕B2, 須: 甕・杯, 塩	H	I 期前半
SK20	不整長方形	151 × 90	逆台形	34.4	須: 杯B・皿	塩	B	I 期前半頃
SK21	隅丸方形	(99) × 84	逆台形	23.4	土: 高杯・盤, 土(赤)3, 須: 杯B	土: 甕体部 (搬7在1), 須: 甕2, 塩3	B	SK23をきる, I 期前半
SK22	隅丸方形	98 × 93	逆台形	29.6	土: 皿, 土(赤)2, 須: 高杯	土: 甕A	B	P42にきられる, I 期前半
SK23	隅丸方形	93 × (86)	舟底	61.1	-	土: 甕(搬1在3), 須: 甕3	B	SK21にきられる

IX-2区

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	高さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SK19	不整形	290 × 225	-	62.0	-	近世以降陶磁器10, ビー玉, 現代タイル	-	
SK53	楕円形	94 × 83	舟底	20.6	-	-	-	

土坑計測表

X区

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SK20	不整楕円形	84 × 69	-	21.0	-	-	黒ボク	
SK21	楕円形	43 × 34	-	9.6	-	-	黒ボク, 赤音地	

IX-1a区

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK22	不整形	92 × 68	皿状	2.9	近世土器陶磁器13	近世	II	上層遺構, ごく浅い
SK23	隅丸長方形	168 × 132	逆台形	9.6	染付碗3, 近世土器陶磁器25	近世後期	II	上層遺構
SK24	不整長方形	342 × 260	逆台形	21.7	近世土器陶磁器15	近世後期か	I, II	上層遺構, SD11をきる
SK25	長楕円形	166 × 83	舟底	33.2	-	-	II	上層遺構
SK26	隅丸長方形	183 × 113	逆台形	24.7	染付碗	近世後期	III	上層遺構, 攪乱にきられる
SK27	隅丸長方形	152 × 108	逆台形	30.8	褐釉皿	近世後期	III	上層遺構
SK28	方形が重複か	391 × (95)	逆台形	16.3	陶磁器3, 平瓦	近世後期か	III	上層遺構
SK30	円形	207 × 196	逆台形	内面86.5 掘形96.9	土質焼炉, 軒丸瓦, 近世以降土器陶磁器 70, 瓶類, 目薬瓶, 軒瓦14, 棧瓦, 砥石, 板状鉄	目薬瓶	II	上層遺構, 中・下層は瓦・円礫, 目薬瓶「エミール」, 棧瓦「新鹿」銘
SK31	円形	183 × 162	U字	内面69.9 掘形76.4	近世後期陶磁器13, 砥石	近世後期	ハンダ 内はI	上層遺構, SK51をきる
SK32	円形か	(200) × (85)	U字	内面59.7 掘形69.9	-	-	ハンダ 内はI	上層遺構
SK50	不整隅丸多角 形か	214 × 188	U字	64.5	鉄片	不明	-	下層遺構, P15他ビットにきられる

IX-1b区1

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK1	長方形	194 × 158	舟底	48.0	近世～近代土器 陶磁器30, 型紙摺染付	型紙摺染付, 針金, ビニール	炭化物 含む	SK8・16・17をきる
SK2	長方形	287 × 105	舟底	106.6	近世～近代土器陶 磁器15, 「山兵」銘瓦	転写染付	-	SK4をきる, 上層は炭状物質, 下層は灰色シル ト質粘土に炭化物, ビニール片を1片含む
SK4	不整長方形	227 × 80	-	8.9	素焼植木鉢3, 染付, 陶器	型紙摺染付, ビー玉	I	SK2・11にきられる
SK5	楕円形か	194 × (73)	逆台形	23.0	陶器瓶・乗燭, 近世～近代土器陶 磁器20	不明	I	SK6をきる
SK6	長方形	(172) × 125	-	25.0	近世～近代土器陶 磁器20, 須・甕片	近世～近代土器 陶磁器	I	SK12をきる, SK5にきられる
SK7	方形	145 × 137	-	4.1	近世染付碗2	近世染付碗	I	
SK8	隅丸方形	192 × 124	舟底	26.6	近世後期陶磁器3 (見込コノヤケ印判碗, 蛇ノ目釉刺高台皿)	近世後期	II	SK1にきられる, 最下層のみ黄灰色シルト質粘土
SK9	不整長方形	178 × 110	-	9.5	-	-	I	

高田遺跡遺構計測表 6

土坑計測表

IX-1b 区 2

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK10	不整長楕円形	222 × 78	-	9.2	-	-	I	
SK11	不整形	231 × 198	皿状	24.3	近世～近代土器陶磁器ガラス130, 平瓦2	型紙摺染付, 転写染付	II	SK4をきる
SK12	隅丸方形	157 × 100	舟底	33.7	近世後期陶磁器20 (緑釉見込釉剥皿), 泥面子, 煙管	近世後期	II	SK6にきられる
SK13	隅丸長方形	140 × 122	鉢状	64.2	近世染付碗	近世	I	
SK14	不整形	245 × 135	舟底	31.3	丸瓦	丸瓦	II	SK15にきられる
SK15	不整形	143 × 138	舟底	22.2	漆喰, 土器	近世以降	II	SK14をきる, ハング・漆喰含む
SK16	長方形	187 × 121	逆台形	46.7	近世以降陶磁器5 (紅皿舎)	近世以降	I	SK1にきられる
SK17	長方形	(160) × 104	-	31.9	近世以降陶磁器4	近世以降	I	SK1にきられる
SK18	長方形	180 × 116	舟底	50.5	近世播鉢	近世	-	上層は20cm大までの砂礫, 中・下層は黄灰色シルト質粘土

IX-1c 区

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK33	隅丸方形	186 × 86	舟底	28.5	-	-	I	
SK34	楕円形	93 × 70	-	20.9	-	-	IV	
SK35	不整形	(136) × 114	-	17.9	-	-	IV	

XI区 1

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK36	隅丸方形	内面:146×142 掘形:190×162	U字	内面63.5 掘形77.7	近世土器陶磁器50, 瓦4, 鉄滓, カワラケ, 鉄製品・鎌	土瓶	E	ハンダ土坑
SK37	隅丸方形	内面:139×133 掘形:154×148	U字	内面70.9 掘形84.4	近世土器陶磁器60, 瓦10, 砥石, 鉄製品・和鉄	染付端反碗	A + ハング	ハンダ土坑, 側面に石は築いていない
SK38	円形	内面:133×128 掘形:181×178	U字	内面74.5 掘形82.5	-	-	A + ハング	ハンダ土坑
SK39	隅丸長方形	内面:149×119 掘形:(172)×167	U字	内面55.4 掘形66.5	近世後期陶磁器14	-	B + ハング	ハンダ土坑, SK52と一体か
SK40	隅丸方形	内面:110×105 掘形:138×120	U字	内面54.3 掘形68.3	近世後期陶磁器2, 須:甕	-	A + ハング	ハンダ土坑
SK41	隅丸長方形	内面:102×93 掘形:133×130	U字	内面52.8 掘形64.1	近世後期陶磁器3	-	A + ハング	ハンダ土坑, SK52をきる
SK42	楕円形	128 × 97	舟底	19.4	モルタル片か	現代か	C	
SK43	楕円形	148 × 88	舟底	21.3	-	-	C	
SK44	楕円形	174 × 104	舟底	18.9	-	-	E	
SK45	隅丸方形	88 × 70	-	18.2	須:甕	-	-	
SK46	円形	内面:117×111 掘形:156×156	U字	内面52.2 掘形62.0	近世後期陶磁器15, 須:甕2, 砥石	-	A + ハング	ハンダ土坑, SK48にきられる
SK47	楕円形	190 × (80)	-	58.7	近世後期陶磁器5, 須:甕	植木鉢(近世以降か)	下層E	

土坑計測表

XI区 2

遺構名	平面形態	規模(cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		
SK48	不整楕円形	118 × 89	-	11.2	-	-	D	SK46をきる
SK49	楕円形か	111 × (40)	-	34.3	染付瓶	-	-	SK52にきられる
SK52	不整長方形	内面:148×91 掘形(180)×(127)	U字	内面54.4 掘形61.1	須:杯H蓋か	-	B+ ハンダ	ハンダ土坑, SK39と一体, SK49を きる, SK41にきられる

溝跡計測表

VII-1区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD3	N-83°-W	37~67 平均50前後	皿状	4.3~9.0 平均7.2	-	-	I	西へ下り勾配1.3%, 確認長19.0m
SD4	N-87°-W	38	舟底	13.9	-	-	I	確認長2.13m
SD5	N-10°-E	35	舟底	9.4	-	-	I	SD1にきられる, 確認長3.43m
SD6	N-59°-W	50	皿状	6.8	-	-	I	確認長2.80m
SD7	N-85°-W	25~46 平均35前後	舟底	7.7~12.9 平均10.4	-	-	I	確認長3.20m
SD8	N-18°-E	33~56 平均45前後	皿状	5.5~14.1 平均8.8	-	-	I	SD2にきられる, 確認長4.75m

VII-2区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD1	N-7°-E	35~49 平均40前後	舟底	6.4~11.3 平均8.8	須:高杯	土:甕B, 須:甕	H	確認長4.23m, I期前半

VIII区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD3	N-79°-W	23~79 平均35前後	舟底	8.2~22.5 平均12.5	-	-	基層VI 層	東へ下り勾配2.0%, 確認長14.50m
SD4	東西溝: N-75°-W 南北溝: N-11°-E	東西溝:27~65 平均45 南北溝:31~128 平均50	舟底	6.6~15.2 平均10.5	-	須:甕体部, 土質2	基層VI +V層	ピットにきられる, 東西溝は東へ下り勾配2.0%
SD5	N-13.5°-E	47~73 平均65前後	逆台形	4.0~10.9 平均7.0	-	-	黒ボク 主体	南へ下り勾配2.5%, 確認長3.40m

IX-2区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD6	東西溝: N-87°-W 南北溝: N-4.5°-E	44~79 平均:東西溝60, 南北溝70	-	6.7~43.9 平均27.4	-	近世以降陶磁器 23, 須:甕3	-	SD1をきる, 南北溝は北へ下り勾配5.5%
SD7	N-4°-W~ N-18°-E	41~61 平均50前後	舟底	8.7~32.9 平均23.9	-	-	黒ボク 主体	

高田遺跡遺構計測表 8

溝跡計測表

X-2区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD8	N-0°	北部(n):37~72 中部(m):38~80 南部(s):30~54 平均50前後	舟底	北(n):75 中(m):45 ~108 南部(s):81 平均64	-	弥生, 須:甕, 土質:釜	-	確認全長26.8m
SD9	N-6°-W	28	-	7.2	-	-	-	確認長1.47m

IX-1a区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD1	-	61	舟底	21.4	-	-	IV	道路側溝跡, SD10・SK31にきられる
SD10	N-9°-W	51~(168) 平均70前後	逆台形	182~345 平均25.8	窯道具:トチン, 近世以降土器陶 磁器12, 須:壺K	型紙摺染付	-	上層遺構, SD11をきる
SD11	N-12°-E	36~53 平均45前後	舟底	90~17.5 平均12.2	-	-	-	下層遺構, SD10・SK24・P3にきられる

IX-1e区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD7	N-10°-E	(82)	舟底	29.4~33.0 平均31.1	-	-	黒ボク 主体	IX-2区東へ続く, 床面に10~20cm大の円礫多数, 確認長7.0m

XI区

遺構名	方位	幅(cm)	断面形状	深さ(cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
SD12	N-82° -E	32~46 平均40前後	-	10.6	口縁芭蕉文染付 碗, 刷毛目片口大鉢	碗(近世後期か)	-	確認長3.13m

柱穴計測表

VII-1区1

遺構名	規模(cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
P1	83	33.3	-	-	E	楕円形, 短軸68cm
P2	47	30.9	土(赤)	塩	A	楕円形, 短軸35cm
P3	26	12.3	土	-	D	
P4	48	33.6	-	-	E	楕円形, 短軸34cm
P5	33	24.9	土	-	A	I期
P6	46	26.9	土	-	B	
P7	54	25.1	須:皿	-	B	
P8	62	25.0	-	塩	A	楕円形, 短軸50cm
P9	50	16.2	-	塩	A	
P10	61	41.5	-	塩	B+D	楕円形, 短軸42cm
P11	37	26.0	-	-	A	
P12	50	16.9	土	-	A	楕円形, 短軸33cm, I期初
P13	34	23.6	須:皿(完形)	-	A	須:皿埋納
P14	54	15.5	-	-	B+D	楕円形, 短軸40cm

柱穴計測表

VII-1区2

遺構名	規模 (cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
P15	37	(10.7)	土: 皿	土: 甕(Cか)・甕B小	B	無名遺構の底で検出, II期
P16	51	(27.5)	-	塩2	-	SD2・8の底で検出, 楕円形, 短軸39cm
P17	50	26.5	-	-	A	
P18	61	20.8	土(赤)	-	B	楕円形, 短軸39cm
P19	36	25.4	-	土: 甕(搬)	B	
P20	37	(16.6)	土: 杯底部	-	B	無名遺構の底で検出, II期
P21	49	14.4	須: 杯	-	E	
P22	37	14.9	土	-	B+D	
P23	39	(11.6)	土: 皿B	-	A	攪乱の底で検出, I期前半

VII-2区1

遺構名	規模 (cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
P1	52	22.3	-	-	H+ 磔	
P2	54	22.6	-	-	H	楕円形, 短軸40cm
P3	48	21.3	-	須: 甕	H+ 磔	楕円形, 短軸35cm
P4	32	15.3	須: 杯	-	H	
P5	32	17.1	土(赤)	-	H	
P6	59	17.6	-	-	H+ 磔	楕円形, 短軸42cm
P7	42	25.6	-	土: 甕体部, 須・壺	H	I期中頃
P8	54	16.1	-	塩	A	楕円形, 短軸38cm
P9	40	26.0	-	-	H	
P10	53	24.4	-	土: 甕体部2	H	
P11	52	37.3	-	-	H	楕円形, 短軸36cm
P12	88	16.6	-	-	H+ 磔	不整形, 短軸77cm
P13	65	39.1	-	土: 甕A, 須: 甕, 塩2	H	楕円形, 短軸50cm
P14	40	31.2	-	土: 甕小A	-	
P15	33	23.7	-	塩	H	
P16	68	22.3	土: 杯A・杯	土: 甕	H	楕円形, 短軸47cm
P17	49	27.6	土: 杯A・杯	-	H	
P18	42	28.8	土(赤): 盤	-	H	
P19	74	28.0	-	土: 甕A(在)	H	SA2-P7
P20	24	15.5	須: 杯A	-	H	ビットをきる
P21	30	13.8	土(赤): 杯(or皿)	砥石	-	
P22	62	21.1	土(赤): 杯	土: 甕A(在)	B	
P23	62	25.3	-	-	I	
P24	50	21.8	-	-	H	
P25	32	13.0	-	-	-	
P26	41	13.5	-	土: 甕B	H	P30をきる
P27	69	37.8	土: 蓋2	塩	H	I期, SA2-P5
P28	72	4.3	-	-	H	

高田遺跡遺構計測表 10

柱穴計測表

VII-2区2

遺構名	規模(cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		
P29	66	29.9	土: 杯	-	H	I期, SA2-P3
P30	(82)	48.2	須: 杯	土: 甕4, 須: 甕	H	P26にきられる, SB11-P3
P31	(38)	10.9	土: 蓋	-	H	I期
P32	49	16.1	-	-	H	ピットをきる
P33	90	33.3	須: 杯A	-	H	床面段差は柱痕か, I期, SB11-P2
P34	91	27.3	土(赤): 蓋, 須: 杯	-	B	I期前半, SB11-P1
P35	38	10.0	-	-	H	
P36	29	20.6	須: 杯	-	B	SK19・P44をきる
P37	36	15.8	須: 杯	土: 甕	H	P34をきる
P38	68	36.3	土(赤): 高杯・杯B, 土: 杯B(2), 須: 蓋	土: 甕A(在)2甕, 須: 甕2	H	P22にきられる, I期前半
P39	65	33.6	土(赤): 蓋, 土: 杯・ 皿, 須: 杯	土: 甕4, 塩4	H	I期前半
P40	75	28.4	土(赤): 杯, 土: 高 杯・杯B・皿・盤, 須: 杯・蓋(環摘)	土: 甕10甕A(II群), 須: 甕6壺, 塩2	H	ピットをきる, 隅丸方形, I期前半
P41	34	29.9	-	須: 壺K	H	
P42	43	26.0	須: 蓋(環摘)	須: 甕	Gに近い	SK22・ピットをきる, I期前半
P43	66	29.6	土: 皿, 須: 杯	-	H	楕円形, 短軸45cm, I期
P44	61	27.9	土(赤)2	土: 甕A(在)	I	SK19をきる, P36にきられる
P45	47	24.1	土: 高杯2, 須: 杯A	土: 甕3, 須: 甕2	H	
P46	35	39.9	-	-	H	

IX-1a区

遺構名	規模(cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	全出土遺物	最新遺物		
P1	42	20.7	-	-	黒ボク, 褐色 褐灰色が混ざ るシルト質粘土	上層遺構, 楕円形, 短軸32cm
P2	34	7.7	-	-	〃	上層遺構, SD10をきる
P3	42	60.7	-	-	〃	下層遺構, SD11をきる
P12	(57)	(47.6)	-	-	凡例 「ピット群」	下層遺構, SK26底で検出
P13	67	60.4	-	-	〃	下層遺構, 楕円形, 短軸52cm
P14	65	29.3	-	-	〃	下層遺構, P15をきる, 楕円形, 短軸42cm
P15	63	60.3	-	-	〃	下層遺構, SK50をきる, P14にきられる, 楕円形, 短軸50cm
P16	100	87.2	-	-	〃	下層遺構, 楕円形, 短軸75cm
P17	60	55.2	-	-	〃	下層遺構, 楕円形, 短軸46cm
P18	64	48.8	-	-	〃	下層遺構, SK30にきられる

IX-1c区1

遺構名	規模(cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	全出土遺物	最新遺物		
P4	45	16.8	-	-	IV	内部に20cm大の石
P5	43	19.3	-	-	IV	

柱穴計測表

IX-1c 区 2

遺構名	規模 (cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	全出土遺物	最新遺物		
P6	26	4.8	-	-	IV	
P7	38	17.5	-	-	IV	
P8	45	22.2	-	-	IV	楕円形, 短軸 34cm

XI区

遺構名	規模 (cm)		出土遺物		埋土	備考
	平面	深さ	全出土遺物	最新遺物		
P9	65	43.7	近世播鉢	-	D	
P10	58	15.0	-	-	E	
P11	67	30.6	-	-	C	

性格不明遺構計測表

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					須恵器・土師器 食器	調理・貯蔵具, 土師質, 他		

VII-2区

SX1	長楕円形	183 × 89	舟底	38.2	-	-	C+H	
SX2	-	245 × 112	舟底	64.9	-	-	C+H	

VIII区

SX1	端部隅丸方形	(415) × 129	-	8.5	-	土質5	-	
SX2	不明	(245) × 136	-	6.8	-	-	-	
SX3	不明	181 × 74	舟底	53.5	-	-	-	

IX-2区

SX4	不整形	236 × 200	逆台形	24.5	土10, 須: 食器	須: 甕	-	
SX5	長方形	240 × 220	逆台形	11.2	-	鉄滓, 不明土塊2	-	
SX6	不整楕円形	259 × 136	鉢状	89.5	-	-	-	
SX7	楕円形	63 × (56)	-	31.3	-	-	-	
SX8	楕円形	121 × 66	-	42.1	-	-	-	
SX9	不整形	302 × 243	-	29.8	-	-	-	

X-1区

SX10	不整形	215 × 155	-	8.7	-	-	-	浅く不整形
------	-----	-----------	---	-----	---	---	---	-------

遺構名	平面形態	規模 (cm)	断面形状	深さ (cm)	出土遺物		埋土	備考
					全出土遺物	最新遺物		

IX-1a区

SX12	方形か	(275) × (209)	-	44.8	染付碗	近世以降	-	下層遺構
------	-----	---------------	---	------	-----	------	---	------

XI区

SX13	楕円形か	(260) × (85)	舟底	32.0	-	-	黒ボク	
------	------	--------------	----	------	---	---	-----	--

高田遺跡遺構計測表 12

道路側溝跡計測表

遺構名	道幅(心々) (m)	幅(cm)	深さ(cm)	検出面標高 (m)	きり合い・勾配等
VII-1区					
SD1	10.26	(調査区) 西壁:53 東壁:46	(調査区) 西壁:17.6 東壁:12.7	(調査区) 西壁:12.44 東壁:12.65	SD5をきる, 東へ下り勾配0.8%
SD2		(調査区) 西壁:47 東壁:66	(調査区) 西壁:24.6 東壁:17.9	(調査区) 西壁:12.40 東壁:12.62	東へ下り勾配1.0%
VIII区					
SD1	10.32	(調査区) 西壁:56 東壁:89	(調査区) 西壁:13.4 東壁:19.6	(調査区) 西壁:12.56 東壁:12.62	東へ下り勾配1.0%
SD2		(調査区) 西壁:48 東壁:38	(調査区) 西壁:9.6 東壁:16.2	(調査区) 西壁:12.48 東壁:12.25	西側をビット5個(灰色埋土)にきられる 東へ下り勾配1.5%
IX-2区					
SD1	10.48	(調査区) 東壁:95	(調査区) 東壁:50.1	(調査区) 東壁:12.09	SD7をきる, 東へ下り勾配1.8% IX-2区東のバンク東面より採土
SD2		(調査区) 西壁:50 東壁:198	(調査区) 西壁:15.3 東壁:31.7	(調査区) 西壁:12.38 東壁:11.89	SD7をきる, 東へ下り勾配1.5% IX-2区東のバンク2東面より採土 同バンク3東面より採土
X-2区					
SD1	10.34	(調査区) 西壁:65 東壁:90	(調査区) 西壁:20.1 東壁:37.0	(調査区) 西壁:12.14 東壁:12.50	西へ下り勾配1.2% 調査区中央~東にかけて遺構内に7~25cm大の円礫多数
SD2		(調査区) 西壁:92 東壁:88	(調査区) 西壁:33.4 東壁:29.8	(調査区) 西壁:12.14 東壁:12.46	西へ下り勾配1.8%

掘立柱建物跡

遺構番号	長軸	規模 (桁行×梁行)	面積 (㎡)										備考	
			5～ 10	10～ 15	15～ 20	20～ 25	25～ 30	30～ 35	35～ 40	40～ 45	45～ 50	50～ 55		
SB1	N - 85° - W	5間×2間										○		
SB2	N - 86° - W	2間×2間			○									

土坑計測表

I 区

遺構番号	平面形態	規模			備考
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK1	ほぼ円形	0.88	0.80	15.5	
SK2	円形	0.89	0.89	17.0	
SK3	ほぼ円形	1.06	0.98	28.5	
SK4	円形	(0.93)	0.84	25.3	SD1 をきる
SK5	ほぼ円形	1.26	1.11	19.1	
SK6	円形	1.47	1.35	22.4	
SK7	円形	1.26	1.10	26.8	
SK8	円形	0.94	0.80	11.5	SD2 をきる
SK9	円形	0.90	(0.82)	17.1	SD5 をきる
SK10	円形	1.00	0.84	29.5	SD5 をきる
SK11	ほぼ円形	1.00	0.86	16.2	SD5 をきる
SK12	円形	0.86	0.80	19.8	SD2 をきる

II 区 1

遺構番号	調査区	平面形態	規模			備考
			長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK1	II - S 区	楕円形	2.07	1.83	62.5	SD2 をきる, 周囲に河原石あり, SK2 とペア
SK2	〃	楕円形	1.89	1.68	59.8	下層に黒土, SK1 とペア
SK3	II - N - 3 区・II - S 区	隅丸長方形	1.98	0.99	21.4	
SK4	II - S 区	概ね円形	0.71	0.64	13.3	
SK5	〃	概ね円形	0.89	0.85	19.0	
SK6	〃	楕円形	0.77	0.67	12.9	基底面よりピット 2 個検出
SK8	〃	概ね円形	0.87	0.77	14.7	
SK9	〃	楕円形	0.90	(0.60)	25.4	南側立ち上がりは調査区外
SK10	〃	概ね円形	0.76	0.68	22.9	
SK11	〃	楕円形	0.53	0.47	27.5	
SK12	〃	概ね円形	0.77	0.73	16.3	
SK13	〃	長楕円形	1.50	0.79	26.1	
SK14	〃	楕円形	0.92	0.79	23.6	
SK15	〃	概ね円形	1.31	1.19	47.6	
SK16	〃	楕円形	0.80	0.71	29.7	
SK17	〃	円形	0.86	0.84	21.1	
SK18	〃	概ね円形	0.96	0.92	36.8	
SK19	〃	円形	0.78	0.76	16.5	
SK20	〃	概ね円形	0.88	0.80	19.8	
SK21	〃	楕円形	0.67	0.64	27.7	SK25・SK26・SK27 をきる
SK22	〃	楕円形	1.09	0.94	25.5	
SK23	〃	不整形	1.33	1.25	30.1	

東野遠山遺跡遺構計測表 2

土坑計測表

Ⅱ区 2

遺構番号	調査区	平面形態	規模			備考
			長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	
SK24	Ⅱ-S区	円形	0.68	0.66	15.5	
SK25	〃	楕円形	0.65	(0.36)	15.2	SK21 にきられる, SK26 とさり合い
SK26	〃	楕円形	0.71	(0.40)	27.2	SK21 にきられる, SK25 とさり合い
SK27	Ⅱ-N-3区・Ⅱ-S区	円形	1.02	1.00	39.9	SK21 にきられる
SK28	Ⅱ-N-2区	円形	2.29	2.29	51.5 (床面)	SK31・SD12 をきる, 床面より深さ約 8 cm の周溝あり
SK29	〃	隅丸方形	2.18	1.84	53.4	SK30・SD12・SD13 をきる
SK30	〃	楕円形	0.72	(0.68)	20.9	SK29 にきられる
SK31	〃	不整長方形	3.76	2.03	19.6	SD12 をきり, SK28 にきられる
SK32	Ⅱ-N-3区	楕円形	0.89	0.77	19.1	
SK33	〃	不整楕円形	1.14	1.06	55.1	
SK34	〃	楕円形か	1.53	(0.82)	50.0	SX6・SX8 にきられる, 周囲に河原石あり
SK35	〃	不整長楕円形	1.46	0.71	65.1	攪乱 19 の底で検出
SK36	〃	不整長楕円形	1.39	0.68	40.6	基底面凹凸が多い
SK37	〃	不整長楕円形	2.25	0.78	48.3	基底面凹凸が多い
SK38	〃	円形	0.94	0.89	19.0	
SK39	〃	不整形	(1.51)	1.03	13.4	周囲に河原石あり
SK40	Ⅱ-N-3区・Ⅱ-S区	不整楕円形	0.97	0.70	26.4	
SK41	Ⅱ-N-3区	隅丸方形	2.23	1.92	10.8	
SK42	〃	隅丸方形	1.40	1.19	7.5	
SK43	〃	円形	1.00	0.96	20.3	攪乱 1 の下で検出
SK44	〃	円形	0.84	0.81	14.0	
SK45	〃	円形	0.93	0.87	21.3	
SK46	〃	不整楕円形	2.02	(0.62)	45.4	北へ続く (調査区壁際)
SK47	〃	隅丸方形	0.88	0.82	16.6	
SK48	〃	円形	0.88	0.83	13.7	
SK49	〃	円形	1.16	1.09	22.7	
SK50	〃	隅丸方形	0.81	0.79	20.5	
SK51	〃	楕円形	1.11	0.83	9.4	
SK52	〃	楕円形	1.58	1.40	37.5	
SK53	〃	楕円形	1.04	0.89	36.6	
SK54	〃	円形	1.10	1.02	15.9	
SK55	〃	不整楕円形	2.07	1.40	(34.8)	SX12 基底面で検出
SK56	〃	不明	1.41	0.82	25.0	SX12 にきられる
SK57	〃	円形	1.81	1.79	54.1	SD23 をきる, 床面より深さ約 2 cm の周溝あり

圖 版

高田遺跡 V-1区





調査前風景(南西より)



調査区遺構検出状態(西より)

図版2



調査区北側遺構検出状態(西より)



調査区南側遺構検出状態(北西より)



遺構完掘状態(上空より)



遺構完掘状態(東より)

図版4



ST1 検出状態 (北西より)



ST1 完掘状態 (西より)



ST1 セクション (北東より)



ST1 セクション及び調査区セクション (北西より)

図版6



ST1 弥生土器出土状態



ST1 弥生土器出土状態



ST1 弥生土器出土状態



ST1 床面石製品・弥生土器出土状態



ST1 床面遺構検出状態 (西より)



ST1 床面遺構検出状態 (西より)



ST1 弥生土器甕 (30) 出土状態



ST1 完掘状態 (西より)



SB1 完掘状態(南より)



SB2 完掘状態(南より)

図版8



SK11石出土状態(北より)



SK17・18完掘状態(西より)



SD1セクション(西より)



SD2セクション(東より)



P1弥生土器高杯(57)出土状態



P15土師器皿(58)出土状態



P18須恵器出土状態



P24須恵器甕(61)出土状態



P66土製品支脚(66)出土状態



P66土製品支脚(66)出土状態



SX1セクション(北より)



SX1土師質土器杯(69)出土状態



SK1セクション(西より)



SX18石列検出状態(西より)



調査区遺構検出作業風景(南西より)



調査区遺構掘削風景(南より)

图版10



弥生土器(高杯·壺·甕·鉢), 土師質土器(杯), 土製品(支脚)

高田遺跡 V-2区





調査前風景(南東より)



調査前風景(北東より)

図版12



遺構検出状態(東より)



遺構検出状態(北西より)



遺構完掘状態 (上空より)



遺構完掘状態 (西より)

図版14



調査区南壁セクション(北より)



調査区北壁セクション(南より)



ST2検出状態(北西より)



ST2完掘状態(北東より)

図版16



ST3検出状態(北より)



ST3完掘状態(東より)



ST4検出状態(南より)



ST4バンクセクション(東より)

図版18



ST4床面遺構検出状態(東より)



ST4完掘状態(東より)



SB1 完掘状態(北より)



SB2 完掘状態(北より)



ST4検出面集石・遺物出土状態



ST4遺物出土状態



ST4石製品台石(144)出土状態



ST4弥生土器出土状態



ST4弥生土器壺(114)出土状態



ST4上層弥生土器壺(115)出土状態



ST4弥生土器出土状態



ST4バンクセクション(南東より)



SK1 手づくね皿 (146～148) 出土状態



SK1 セクション (南より)



P237 鉄製品鉄斧 (220) 出土状態



P236 弥生土器鉢 (218) 出土状態



SK24 須恵器甕 (156) 出土状態



SD4 セクション (西より)



SD4 集石出土状態 (北西より)



SD7・8・14 完掘状態 (東より)

図版22



SD13土師器高杯(173)出土状態



SD17セクション(北より)



SD18陶器碗(178)出土状態



P29根石出土状態



P58須恵器壺(190)出土状態



P108土師質土器椀(199)出土状態



P118土製品(200)出土状態



P118土製品(200)出土状態



P124石製品石包丁(203)出土状態



P183須恵器杯(212)出土状態



P149黒色土器碗(210)出土状態



P212弥生土器鉢(217)出土状態



SX5集石出土状態(北より)



SX5石製品石臼(223)出土状態



包含層遺物出土状態



包含層土師質土器碗(293)出土状態



弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(高杯)



弥生土器(鉢), 黒色土器(椀), 手づくね皿, 土製品, 石製品(石包丁)

图版 26



土師質土器(碗), 石製品(石包丁), 金属製品(鉄鏃・鉄斧)

高田遺跡 Ⅵ区





調査前風景(北西より)



遺構検出状態(東より)



遺構完掘状態(上空より)



遺構完掘状態(東より)



調査区南壁セクション(北東より)



調査区南壁セクション(北西より)

図版30



SB1完掘状態(北より)



SB2完掘状態(東より)



SB5完掘状態(北より)



SB6完掘状態(東より)

図版32



SB7完掘状態(東より)



SB8完掘状態(東より)



SK4 上面集石及び遺物出土状態



SK4 鉄製品刀子 (342) 出土状態



SX6 遺物出土状態



SX6 遺物出土状態



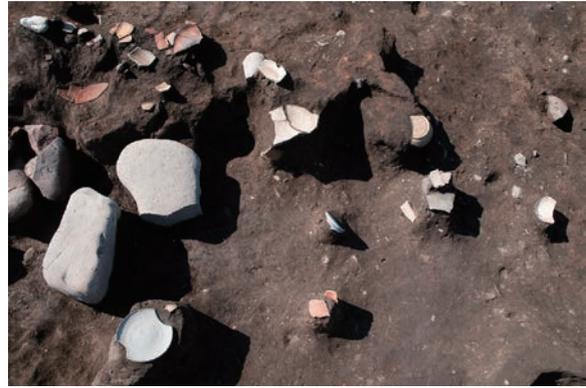
SX6バンクセクション(北西より)



SX6バンクセクション(南西より)



SX6バンクセクション(南より)



SX6遺物出土状態



SX6鉄製品刀子(608)出土状態



SX6鉄製品刀子(608)出土状態



SX6鉄製品紡錘車(609)出土状態



SX6銅製品鈍尾(607)出土状態

図版36



SK2 セクション (南より)



SK4 遺物 (339～341) 出土状態



SK15 遺物出土状態



SK11 セクション (南より)



SK12 セクション (東より)



SK15 セクション (東より)



SD1 セクション (東より)



SD6 セクション (東より)



SD3セクション(北より)



SD13セクション(東より)



P2土師質土器杯(376・377)出土状態



須恵器出土状態



P143土師質土器杯(393)出土状態



須恵器出土状態



SX13完掘状態(西より)



包含層須恵器出土状態

图版38



土師質土器(杯), 須恵器(皿・瓶), 鉄製品(刀子・紡錘車)

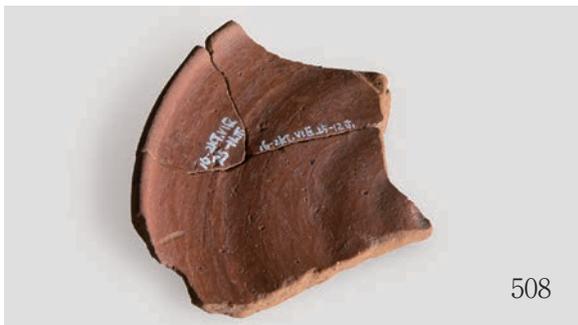


土師器 (皿・皿または蓋・皿または高杯)

図版40



土師器(皿・杯・杯または皿)



土師器 (杯・蓋・高杯または蓋・高杯)



須恵器(杯・皿または高杯)



須恵器(杯・蓋)



須恵器(蓋), 土師器(鍋・甕)



土師器 (甕・器形不明)



土師器(甕・竈), 須恵器(甕), 銅製品(鉞尾), 鉄器, 鉄滓

高田遺跡 Ⅶ区





調査前風景(西より)



Ⅶ-1区全景(東より)

図版48



Ⅶ-1区北壁西部セクション(南西より)



Ⅶ-1区北壁東部セクション(南西より)



Ⅶ-1区西壁北部セクション(東より)



Ⅶ-1区西壁南部セクション(東より)



Ⅶ-1区遺構完掘状態(上空より)



Ⅶ-1区P13須恵器皿(692)出土状態



Ⅶ-2区遺構検出状態(北より)



Ⅶ-2区遺構完掘状態(上空より)



Ⅶ-2区遺構完掘状態(北西より)



Ⅶ-2区南壁セクション(北東より)



Ⅶ-2区SB11完掘状態(西より)



Ⅶ-2区P30セクション(東より)



Ⅶ-2区P33セクション(西より)



Ⅶ-2区P33柱痕半截状態(北より)



Ⅶ-2区P34セクション(西より)



VII-1区SD3セクション(東より)



VII-1区SD4セクション(東より)



VII-1区SD5セクション(南より)



VII-1区SD6セクション(西より)



VII-1区SD7セクション(東より)



VII-1区SD8セクション(南より)



VII-1区SK1セクション(南より)



VII-1区SK2セクション(東より)



Ⅶ-1区SK3セクション(東より)



Ⅶ-1区SK4セクション(南より)



Ⅶ-1区SK5セクション(西より)



Ⅶ-1区SK6セクション(北より)



Ⅶ-1区SK7セクション(北より)



Ⅶ-1区P1セクション(東より)



Ⅶ-2区SD1セクション(南より)



Ⅶ-2区SD1周辺完掘状態(北より)



Ⅶ-2区SK1須恵器蓋(693)出土状態



Ⅶ-2区SK1セクション(南より)



Ⅶ-2区SK2セクション(南より)



Ⅶ-2区SK3セクション(南より)



Ⅶ-2区SK4セクション(南より)



Ⅶ-2区SK5セクション(南より)



Ⅶ-2区SK6セクション(南より)



Ⅶ-2区SK7セクション(南より)



Ⅶ-2区SK8セクション(南より)



Ⅶ-2区SK9セクション(南より)



Ⅶ-2区SK10セクション(南より)



Ⅶ-2区SK11セクション(南より)



Ⅶ-2区SK12セクション(南より)



Ⅶ-2区SK13セクション(南より)



Ⅶ-2区SK15セクション(東より)



Ⅶ-2区SK16セクション(東より)



Ⅶ-2区SK17セクション(西より)



Ⅶ-2区SK18セクション(東より)



Ⅶ-2区SK19セクション(東より)



Ⅶ-2区SK19石出土状態



Ⅶ-2区SK20セクション(東より)



Ⅶ-2区SK21セクション(南より)



Ⅶ-2区SK23セクション(北より)



Ⅶ-2区SK23柱穴完掘状態(東より)



Ⅶ-2区SX1セクション(西より)



Ⅶ-2区SX2セクション(南より)



Ⅶ-2区SX1・2完掘状態(北より)



Ⅶ-2区P16土師器杯(706)出土状態



Ⅶ-2区P27セクション(南より)



Ⅶ-2区P29セクション(南より)



Ⅶ-2区P38須恵器蓋(707)出土状態



遺構掘削作業風景(Ⅶ-1区SD1. 北東より)

图版60



土師器(杯), 須恵器(皿・杯・蓋)



土師器(杯・高杯・皿または杯), 須恵器(蓋)

図版62



土師器(皿), 須恵器(蓋・高杯・円面硯), 緑釉陶器(皿・皿または椀), 土師質土器(焙烙)

高田遺跡 Ⅷ区





調査前風景(北西より)



遺構検出状態(西より)



遺構検出状態(南より)



遺構完掘状態(南より)



調査区南壁セクション(北東より)



調査区南東隅壁セクション(北西より)



SD4・SA3完掘状態(南より)



調査区南東端下層確認トレンチ(北より)

高田遺跡 Ⅸ-1区





Ⅸ-1a区1回目遺構検出状態(南より)



Ⅸ-1a区1回目遺構完掘及び下面遺構検出状態(東より)



Ⅸ-1a区遺構完掘状態(上空より)



SK23 遺物出土状態



SK24周辺完掘状態(西より)



SK30～32埋土除去状態(南東より)



SK30・31埋土除去状態(東より)



SK30・31半截状態(東より)



SK30セクション(東より)



SK31セクション(東より)



SK32埋土除去状態(南より)



Ⅸ-1区(奥)・Ⅸ-2区(手前)調査前風景(南より)



SD10 釜道具トチン(735)出土状態



SD11 セクション(北より)



SK23 染付碗(732)出土状態



SK23 染付碗(734)出土状態



SK25 完掘状態(南より)



P14・15 セクション(北より)



P16 セクション(西より)

図版72



Ⅸ-1b区遺構検出状態(西より)



Ⅸ-1b区遺構完掘状態(南より)



Ⅸ-1b区遺構完掘状態(上空より)



Ⅸ-1b区調査区西壁セクション(南東より)



SK2 遺物出土状態



SK11 遺物出土状態



SK11 遺物出土状態近接



SK11 遺物出土状態近接



SK12 遺物出土状態



SK14 遺物出土状態



SK16 セクション (南より)



SK16 完掘状態 (北より)

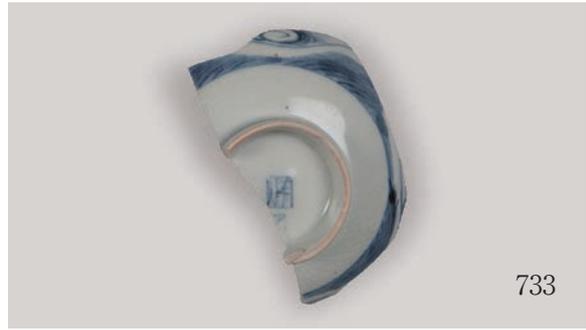


Ⅸ-1c区遺構完掘状態(南より)



Ⅸ-1d区東壁及び下層確認トレンチ(西より)

图版 76



土師質土器(焜炉), 陶器(瓶·秉燭), 磁器(碗), 窯道具, 瓦, 土製品(泥面子)

高田遺跡 Ⅸ-2区西





遺構完掘状態(上空より)



遺構完掘状態(西より)



調査前風景(西より)



SX4 遺物出土状態



SX6 セクション(南より)



SX9 完掘状態(南より)



II層 遺物出土状態



II層 須恵器壺(757) 出土状態



包含層 須恵器出土状態



遺構検出作業風景(西より)

高田遺跡

Ⅸ区東（Ⅸ-1e区・Ⅸ-2区東）





Ⅸ-1e区遺構検出状態(西より)



Ⅸ-1e区南壁セクション(北より)



Ⅸ-1e区南東隅壁及びSD7セクション(北より)



Ⅸ-1e区SD7セクション(北より)



IX-1e区・IX-2区東 遺構検出状態(東より. 物部川, 田村遺跡方向)



IX区東・X区遺構完掘状態(西より)



Ⅸ区東・Ⅹ区遺構完掘状態(上空より)



Ⅸ-1e区・Ⅸ-2区東 遺構完掘状態(上空より)



Ⅸ-2区東 道路跡完掘状態(西より)



Ⅸ-2区東 道路跡完掘状態(東より)

図版84



Ⅸ-2区東 南壁中央部セクション(北より)



Ⅸ-2区東 南壁東部セクション(北西より)



Ⅸ-2区東 南壁西部セクション(北東より)



Ⅸ-2区東 東壁及びSD7セクション(南西より)



Ⅸ-2区東 SD1 須恵器出土状態



Ⅸ-2区東 東縁SD2・7検出状態(南より)



Ⅸ-2区東 SD7周辺完掘状態(南より)



Ⅸ-2区東 SD7関連遺構検出状態(東より)



Ⅸ-2区東 SD7関連遺構完掘状態(東より)



Ⅸ-2区東 SD7関連遺構完掘状態(南より)



IX-2区東 SD1 検出状態(東より)



IX-2区東 SD2 検出状態(西より)



IX-2区東 SD7 完掘状態(南より)



IX-2区東 SD7 底面掘削痕検出状態(北より)



Ⅸ-2区東 南壁下層確認トレンチ(北より)



現地説明会風景

高田遺跡 X区





X-2区道路側溝跡完掘状態(東より)



X-2区遺構完掘状態(南より)



X-2区南壁セクション(北西より)



X区調査前風景(東より)



SD8完掘状態(西より)



SD8遺物(744他)出土状態



SD8遺物(744他)出土状態近接

高田遺跡 Ⅺ区





X・XI区調査前風景(西より)



遺構検出状態(北より)



遺構埋土除去状態(北より)



SK36・37埋土除去及び断ち割り状態(南西より)



ハンダ土坑群ハンダ除去状態(西より)



調査区全景(東より. 遺構検出作業)



SK36底面遺物出土状態



SK36ハンダ除去状態(南より)



SK37底面遺物出土状態



SK38・46埋土除去及び断ち割り状態(南より)



SK39・52セクション(東より)



SK39・41・52埋土除去及び断ち割り状態(西より)



SK39～41・52埋土除去及び断ち割り状態(北東より)



SK39・41・52ハンダ除去状態(西より)



SK40・41ハンダ除去状態(南より)



ハンダ土坑群掘削作業風景(西より)



ハンダ土坑群埋土除去状態(南より)



ハンダ土坑群埋土除去状態(東より)



ハンダ土坑群ハンダ除去状態(南より)



ハンダ土坑群ハンダ除去状態(東より)



ハンダ土坑群完掘状態(南より)



ハンダ土坑群完掘状態(東より)



[IX-2・X・XI区出土遺物] 須恵器, 土師質土器(椀・釜), かわらけ, 陶器(水瓶・鉢), 鉄製品(鎌・和鋏)

高田遺跡

道路遺構検出区（Ⅶ～Ⅹ区）





Ⅶ-1区遺構完掘状態(西より)



Ⅷ区東壁及びSD1・3セクション(西より)



Ⅸ区東・Ⅹ区遺構完掘状態(東より)



Ⅸ-2区東 道路跡検出状態(東より)



IX-2区東 SD2バンクセクション及び精査作業風景(東より)



IX-2区東 道路跡完掘状態及び清掃作業(東より)



IX-2区東 SD2バンク1・2セクション(東より)



IX-2区東 SD2バンク1～3セクション(西より)



IX-2区東 SD2バンク3南部セクション(東より)



Ⅶ-1区SD1中央バンクセクション(東より)



Ⅶ-1区SD2中央バンクセクション(東より)



Ⅷ区SD1東側バンクセクション(東より)



Ⅷ区SD1西側バンクセクション(東より)



Ⅷ区SD2東側バンクセクション(東より)



Ⅸ-2区東SD1バンクセクション(西より)



Ⅸ-2区東SD2(上層赤ホヤ)検出状態(西より)



Ⅸ-2区東SD2・7きり合い部検出状態(西より)



IX-2区東 SD2検出及びセクション(東より)



IX-2区東 SD2(上層赤ホヤ)セクション(東より)



IX-2区東 SD2・7きり合い部完掘状態(西より)



IX-2区東 調査区東壁及びSD2セクション(西より)



X-2区調査区西壁及びSD1セクション(東より)



X-2区調査区東壁及びSD1セクション(西より)



X-2区調査区西壁及びSD2セクション(東より)



X-2区調査区東壁及びSD2セクション(西より)



土師器(高杯·甕), 須恵器(高杯·壺·甕), 烧塩土器



土師器(高杯·甕), 須恵器(高杯·壺·甕), 烧塩土器

東野遠山遺跡



I区調査前風景(南より)



I区調査前風景(北西より)



I区東側調査区遺構検出状態(南より)



I区西側調査区遺構検出状態(南より)



I区東側調査区遺構完掘状態(南西より)



I区東側調査区遺構完掘状態(南東より)



I区西側調査区遺構完掘状態(南より)



I区西側調査区遺構完掘状態(北西より)



I区調査区セクション(南より)



I区調査区セクション(北西より)

図版110



I区SK1 セクション (南より)



I区SK1 完掘状態 (南より)



I区SK2 セクション (南より)



I区SK2 完掘状態 (南より)



I区SK5 セクション (南より)



I区SK5 完掘状態 (南より)



I区SK7 セクション (南より)



I区SK7 完掘状態 (南より)



I区SD1セクション(東より)



I区SD1セクション(南より)



I区SD2セクション(東より)



I区SD3セクション(南より)



I区SD5セクション(北より)



I区SD6セクション(南より)



I区SD3・5・6完掘状態(北より)



I区SD3・6完掘状態(東より)

図版112



Ⅱ区調査前風景(南西より)



Ⅱ区調査前風景(東より)



II - S区遺構検出状態(東より)



II - S区遺構検出状態(西より)



Ⅱ-N-3区遺構検出状態(西より)



Ⅱ-N-3区遺構検出状態(南西より)



Ⅱ-N-3区遺構検出状態(南東より)



Ⅱ-N-3区遺構検出状態(南より)



Ⅱ-N-2区遺構検出状態(西より)



Ⅱ-N-1区遺構検出状態(西より)



II - S区遺構完掘状態(東より)



II - S区遺構完掘状態(北西より)



II - N - 3区遺構完掘状態(東より)



II - N - 3区西側遺構完掘状態(東より)



Ⅱ-N-1区遺構完掘状態(西より)



Ⅱ-N-2区遺構完掘状態(東より)



II-S区調査区南壁セクション(北より)



II-N-3区調査区西壁セクション(東より)



II-N-2区調査区北壁セクション(南より)



II-N-1区調査区北壁セクション(南より)



II - S区SB1完掘状態(西より)



II - S区SB2完掘状態(西より)



II-S区SK1 セクション (南より)



II-S区SK2 上面石出土状態 (南より)



II-S区SK1・2 完掘状態 (南より)



II-S区SK1 底面遺物出土状態 (南より)



II-S区SK4 セクション (南より)



II-S区SK5 セクション (南より)



II-S区SK10 セクション (南より)



II-S区SK9 土師質土器杯(42) 出土状態



II-N-2区SK28セクション(南より)



II-N-2区SK28銭貨(51)出土状態



II-N-2区SK29セクション(北より)



II-N-3区SK34完掘状態(東より)



II-N-3区SK34陶磁器出土状態



II-N-3区SK53セクション(南より)



II-N-3区SK48・49・53・54完掘状態(南より)



II-N-3区SK57完掘状態(東より)



II - S区SD1石出土状態(南より)



II - S区SD1完掘状態(南より)



II - S区SD2遺物出土状態



II - S区SD2完掘土状態(東より)



II - S区SD3石出土状態(東より)



II - S区SD3セクション(東より)



II - S区SD3須恵器出土状態



II - S区SD3石製品石斧(89)出土状態



II-N-3区SD8土師質土器杯または皿(99)出土状態



II-N-3区SD8土師質土器杯出土状態



II-N-3区SD8土師質土器杯(95・96)出土状態



II-N-3区SD8完掘状態(東より)



II-N-3区SD9・10セクション(南より)



II-N-3区SD9遺物出土状態



II-N-3区SD17陶器播鉢(107)出土状態



II-N-3区SD17完掘状態(西より)



II-N-3区SD14セクション(南より)



II-N-3区SD14完掘状態(南より)



II-S区SB2P1土師質土器杯または鉢(30)出土状態



II-S区SB2P7土師質土器鉢(32)出土状態



II-S区P24土師質土器杯(111)出土状態



II-S区包含層遺物出土状態



II-S区包含層遺物出土状態



II-S区包含層土師質土器杯(140)出土状態



弥生土器(甕), 瓦質土器(火入れ), 陶器(播鉢), 石製品(石斧)



土師質土器(皿・杯・杯または皿・鉢), 磁器(碗), 銭貨

图版130



土師質土器(皿·杯), 白磁(碗), 陶器(播鉢·碗)

報告書抄録

ふりがな	たかだいせきに・ひがしのおやまいせき							
書名	高田遺跡Ⅱ・東野遠山遺跡							
副書名	南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅻ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第153集							
編著者名	池澤俊幸, 筒井三菜							
編集機関	公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2021年3月5日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃〃	東経 〃〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかだいせき 高田遺跡	〒781-5235 高知県 香南市	39211	200025	33° 33′ 21″	133° 41′ 12″	2016 .7.28 ～ 2017 .2 .21	10,669㎡	記録保存調査
ひがしのおやまいせき 東野遠山遺跡	のいちちようしらい ひがしの 野市町下井・東野					200053		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高田遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世 近世	堅穴建物跡 掘立柱建物跡 柵列 土坑 溝跡 性格不明遺構 道路状遺構	4軒 17棟 3列 325基 88条 82基	弥生土器 土師恵色土器 黒釉陶器 緑釉陶器 土師質土器 近世陶磁器	古代の道路状遺構を検出		
東野遠山遺跡	集落跡	古代 中世 近世	掘立柱建物跡 土坑 溝跡 性格不明遺構	2棟 68基 32条 15基	石弥生土器 土師質土器 国内産陶器 近世陶磁器 瓦			
要約	<p>高田遺跡</p> <p>一連の調査で弥生時代後期後半から古墳時代初頭, 古代, 近世等の遺構・遺物を多数検出した。本書では古代とみられる直線道路跡や墨書土器等を報告する。古代前期の土器群が遺構から出土した事例もあり, 土器編年の基準資料となる。これまでの周辺遺跡の成果と併せて, 物部川下流河岸における濃密な遺跡群の展開が判明した。</p> <p>東野遠山遺跡</p> <p>古くは弥生時代の遺物を確認した。また土師質土器, 瓦器などの遺物が出土しており, 古代末から中世前期を中心とした遺跡であったと考えられる。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第153集

高田遺跡Ⅱ・東野遠山遺跡

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅺ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ)

2021年3月5日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社

